さよならをもう一度

藤吉郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよならをもう一度

【Ｎコード】
Ｎ７３４４Ｇ

【作者名】
藤吉郎

【あらすじ】
２１世紀になり、木嶋は、新たな恋を探していた。ある日、仲間と横浜での飲み会がきっかけで、一人の女性と知り合うことで、その後の運命を変えて行く物語です。

～Don't brake my heart～

１９９９年7月のノストラダムスの大予言が外れ、人々が、２１世紀になり、夢や希望を持ち始めたのである。

２００１年、木嶋は、ふと考えていた。《そろそろ彼女を見つけて結婚したいな…》と、思い更けていた。

春になり、木嶋の陸上の仲間である、小坂さんから木嶋の携帯が「ブー、ブー、ブー」と鳴り携帯に出る。

「もしもし、木嶋さん、郷田さんが結婚したよ。」

「えっ、本当なの！」

と電話口で驚く！

電話を切り、木嶋は、〈参ったな、先に郷田さんに越されてしまった。〉と呟く。

次の日、木嶋は、

「小坂さんから電話が在って、郷田さんが結婚と報告を受けたよ！」と大田さんと三谷さんに伝えた。

２人とも、

「えっ…」と最初は驚きを隠せなかったが、

「郷田さんのお祝いを兼ねて、飲み会をやろう思うけど…」と声をかけたら2人からＯＫ返事をもらう。

木嶋から郷田さんの携帯に連絡を入れる。

「プルッ、プルー、プルー」と携帯が呼び出している。

「飲み会をやろうと思いますが、いつが良いですか？」

「今は、色々と立て込んでいて、直ぐには、予定が組めないから今年の秋にしようよ！」

「それなら、夏になったら郷田さんに電話をしますからその時に、日にちを決めませんか？」

「じゃあ、それで行こうよ！」と郷田さんが言うと木嶋は電話を切った。

夏になり、木嶋から再び、郷田さんに電話する。『プルッ、プルー、プルー』と呼び出している。郷田さんが電話に出た。

「郷田さん、日にち何時にしますか?」と木嶋が聞く。

【そうだなあ…11月10日がいいな。】と郷田さんが答えた。『了解しました。』と木嶋が言った。さらに、木嶋は、《待ち合わせ場所と時間は、決めたら連絡をしますから…》と郷田さんに言い、電話を切ったのだ。

翌日、会社に行き、日にちが郷田さんと決まったと大田さん、三谷さんに連絡をした。『待ち合わせ場所と時間は、いつも通りね。』と木嶋が言う。

「いつも通り」とは、横浜モアーズ前が定番の待ち合わせだった。時間は、午後6時15分である。

待ち合わせ場所と時間を郷田さんに電話した。

「プルッ、プルー、プルー」と呼び出している。郷田さんが電話に出た。

もしもし、木嶋ですけど

「郷田さん、待ち合わせは、横浜モアーズ前。時間は、午後6時15分でお願いします。」と伝えた。郷田さんが言う。

「了解!」と電話を切る。

11月10日、待ち合わせ場所に、

「ポツリ、ポツリ」と大田さん、郷田さん、三谷さん、木嶋と集まって来た。時間になったので移動を開始した。この日が、一人の男性の運命を変える衝撃的な出来事があるとは、思ってもいなかったのである。

大田さん、郷田さん、三谷さん、木嶋な4人は、毎年のように、飲み会やスキーなどに遊びに行っていた。郷田さんが、結婚したので、いつも集まる4人が集まり、横浜駅周辺で、飲み会を行っていた。

いつもなら、一次会は

「居酒屋」で、二次会が

「カラオケ」
が定番なのに、何故かいつもと違う雰囲気が漂っていた。
何故だろう?大田さん、三谷さんの2人が、スナックやクラブに行こうよと言うので、
横浜駅近辺で、【何処の店に行けばいいのだろう…】と、判らずに居たら、橋の上で立っている女性に大田さんが声を掛けたのだ。
何処の
「お店なの?」と大田さんが声を掛けたのだ。すぐそこのお店ですよ。じゃあそのお店に行こうよ。場所を案内して…と大田さんが言う。
「カッカッカッ」と靴の音がアスファルトに響く。
鉄の階段を
「カツーン、カツーン、カツーン」上がる。
ここは、何処だろう…。とあるビルの2階に到着したみたいだ。
店の名前は、クラブ
「H」
「いらっしゃいませ」と男性と女性の入り交じりながら、声が聞こえた。随分とキラキラ光り、大勢の人達が座っていた。木嶋が呟いた。
「俺達が来る場所じゃあないんじゃないの…?」
自分達が、一度も入った事もないような高級感が店内に漂っていた。
客席に座り、待つこと数分。大田さんが、この店を案内してくれた女性を指名した。
「失礼します!」と女性の人達が数人、自分達の客席に来た。
「仲間も、緊張の赴きで、初めてまして!」と挨拶をする。
「皆さん、おいくつ何ですか?」と女性に尋ねる。20代前半~30代前半までの人達が囲むように座っていたのだ。　木嶋の所に、30代前半の女性が座った。名前を聞くと
「麻美」と言います。

カクテルライトの加減か、華やかさも増して、雰囲気が良く、女性達も綺麗だった。

時が流れ、

女性達が入れ替わり始めた。どうやら、３０代前半の「麻美」にも、指名が入ったみたいだ。

木嶋の隣に、若い女性が座る。貴女の名前と年齢を教えて下さいと聞くと、

「はるかと言います。まだ、１０代後半」

と言う。

「そうなの！」と驚きを隠せずにいた。この、はるかとの出会いが、木嶋の運命を変えるとは思わなかったのである。

「彼氏はいるの？」と

木嶋が

「はるか」に聞く…。

「彼氏と最近、別れたばかりで、今はいないんだ…」

話しをしていて、素直で明るく、心に澱みがなく透き通った感じだった。なんで…はるかに

「彼氏がいない…」のが不思議だった。

郷田さんが、途中退席をしてしまい、残った、大田さん、三谷さん、木嶋と３人で飲んだのだった。

女性達は、入れ代わるたびに、名刺をくれた。営業と思うのは当然だ。

木嶋は、若い、はるかに、一目惚れしたのである。

その時、木嶋の心境…

「彼女になってくれるなら若い女性が良い。今、交際をしている女性はいないからいいかな！性格も良さそう。」と思った。

木嶋は、はるかの連絡先を交換をしたのだ。

「ヤッター」と心の中で叫ぶ。当時は不況で、郷田さん以外は、同じ会社で、

不況で、当時は、新人を何年も採用をしていなかった。

木嶋は、用事がないのに、
はるかに一週間、携帯に連絡をした。
　この時、
はるかは試験勉強中だったにも関わらずに電話に出た。
「自分と交際してくれない？」
と話してみる。
「まだ、貴方のことが判らないから何とも言えません！」
「また、お店に行くからその時は、指名しても良い？」と聞くと、
「いいよ！」
とＯＫサインだった。
　最初に、
「Ｈ」の店に行ってから１０日ぐらい経過したある日、電車の中で
『ブー、ブー、ブー』と携帯が鳴る。
　『誰だろう…？』と名前を見た。先日、携帯番号を交換した１
０代後半の
はるかだった。

第2話

木嶋は電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「私、はるかですが、先日は、ありがとうございました。今、どちらですか?」と聞いてきたので、木嶋は、答えた。
「今、電車の中で横浜～川崎方面に移動中です。」と木嶋は答えた。
「これから、お店にお越し頂け来ませんか!」とはるかが言う。
木嶋は、
「ちょうど、給料前だからチョット厳しいんだよね。給料を貰った週末なら良いけど、平日に飲みに行くのは無理だね。時間を気にしてしまうので…。」と電話で話す。
はるかは、
「え～、来てくれないのですか?折角、仲良くなれるチャンスなんですけど…。」
「そう言われてもね～、行きたいのは山々だが、給料日前でご理解願いたい。月末の金曜日なら会社の同僚と行ってもいいが、聞いてみないと分からないけど…。」と話す。
「判りました。会社の同僚に聞いて頂けませんか?」とはるかが話す。
木嶋は、
「了解しました。会社の同僚に確認してから再度、ご連絡します。」と話して電話を切った。
翌日、会社に出勤した木嶋は、昼休みに富高さんに話しに出かけた。
「富高さん、たまには、飲みに行きませんか?」と木嶋が話すと…
富高さんは、『いいよ。何処に飲みに行くの?』と聞いてきた。
木嶋は、答えた。
「この間、横浜で可愛いお姉さんが居るお店があるんだがそこに一

緒に行こうよ。チョット高いけど…いいかな！」と言う。
富高さんは、
「うん、いいよ。自分もあまり行く機会がないからね。」と話した。
木嶋は、
「じゃあ、決定でいいね。日にちは、月末の金曜日でお願いします。」と言う。
さらに木嶋は、
「近くになったら、また来るからね。」と言ってその場を去った。
その日の夜に、木嶋は、はるかの携帯に連絡をする。
「プルッ、プルー、プルー」と呼び出している。
はるかが電話に出た。
「もしもし、はるかですが…」
「木嶋ですが…先日、お話したと思いますが、会社の同僚に話したところ、月末の金曜日にお店に行かせて戴きます。人数は2人です。」と木嶋が言った。
はるかは、
「ありがとうございます。」と…
木嶋は、
「近くになりましたら、お店に行く時間を言いますので、それで宜しいでしょうか?」と話した。
はるかは、
「月末の金曜日にお待ち申し上げています。」と言い、電話を切ったのだ。　月末の木曜日になり、はるかに、木嶋が電話をする。
「プルッ、プルー、プルー」と呼び出している。
はるかが電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「はるかです。木嶋さん、明日の予定は分かったのですか?」と聞いた。
木嶋は、
「分かりましたよ。横浜駅の周辺で、会社の同僚と軽く飲みながら

お店に行こうと考えているのですが…！」
はるかは、
「何時ぐらいに、お店に来れますか？」と…。
木嶋は、
「大体、２０時～２１時の間に行けると思っています。」と答えた。
はるかは、
「分かりました。明日、楽しみにお待ちしています。」と言い、電話を切るのだった。
翌日、金曜日になり、昼休みに木嶋は、富高さんのところに行く。
「富高さん、今日のことですが大丈夫ですか？」と木嶋は聞いた。
富高さんは、
「今日は、大丈夫だよ。」と教えてくれた。
「それなら、会社の送迎バスの帰社便の最初に乗って行こうよ！」と木嶋は言った。富高さんは、
「了解！帰社便の最初ね！」と言って、木嶋は、その場を立ち去った。
木嶋は、この日、何故か妙に嬉しかったのだ！
「何故だろう…」
「そうか…！はるかに会えるからだ。」と思ったのだ。
「いつ以来になるんだろう…？」と思案した。
「あっ…そうだ、３週間も前になるんだ。早いな…」と呟く。
仕事の終りのチャイムが鳴り響く。
「キーン、コーン、カーン、コーン」
木嶋は、ロッカーに行き着替えながら、富高さんを待っていた。
富高さんが、ロッカーに入って来た。
「木嶋君、チョット待っててね…と」木嶋は、ＯＫサインを出したのだった。
帰社便のバスに乗り、会社の最寄り駅にバスが着き、２人で駅の階段を
「ズッ、ズッ、ズッ」と降りて行った。

最寄り駅から電車に乗り、富高さんが、木嶋に声を掛けた。
『木嶋君、今日、行く店はどんな感じの店なのかな?』と聞く。
木嶋は、『クラブみたいだよ。自分もこの間、初めて入った店だったからね。どんな雰囲気かと言われると行って見ないと分からないよ。』と答えたのだ。
電車が、横浜駅に着き、2人で駅の近くにある居酒屋に入った。
少し、ほろ酔い気味になりながら、クラブ
「H」に向かった。
店の前にある鉄の階段を
「カツーン、カツーン、カツーン」と靴の音を鳴り響きかせながら
「H」に入ったのであった。
「いらっしゃいませ」と威勢の良い声が店内から聞こえて来た。
店員さんが
「何名様でしょうか?」と聞いてきたので『2人です。』
「御指名は、誰かおりますか?」と聞いたので、木嶋は、
「はるかさんと麻美さんをお願いします。」と要望したのだった。

第3話

「はるかさんと麻美さんですね。かしこまりました。少々、お待ち下さい」と店員が立ち去った。

少ししてから、はるかと麻美が席に来た。

「お久しぶりです。」とはるかと麻美があいさつした。木嶋は「お久しぶりです。」あいさつを返した。

木嶋は、【こちらは、会社の同僚で富高さんと言います。】とはるかと麻美に紹介したのだった。

はるかは、木嶋の隣に座り、麻美は、富高さんの隣に座った。

木嶋は、はるかの誕生日を聞いた。

『はるかさんの誕生日はいつですか?差し障りがないなら教えて頂けませんか?』っ聞くと、

はるかは、『12月15日が誕生日なんですよ。』と答えた。

木嶋が、

「そうなの…?」

「彼氏っていたっけ…?」と聞くと、

はるかは、

「彼氏はいませんと言いませんでしたか!」と言い、

それなら、

「誕生日にプレゼントしようか!」と話しをしたら、

『本当ですか!』と笑顔になった。

木嶋の左隣に、座っていた麻美が、

こちらの話しを聞いていて

《木嶋さん、はるかさんは、色んな人からプレゼントを貰っているよ。》と横ヤリが入る。

木嶋は、『自分がやることだから横ヤリを入れないで…』と話した。はるかも同調したのだ。

麻美と富高さん、はるかと木嶋の4人で話しをするようになり、

麻美が今日で、クラブ
「H」を辞めることを3人が初めて聞いたのだ。
はるかは、
「麻美さん、今日で、お辞めになられるのですか?明日から、どちらに行かれるのですか?」と問いかけた。
麻美は、
「横浜、関内に移動するんですよ。」
はるかは、
「そうなんですか!」と言った。
すると、富高さんは、
「関内って横浜スタジアムがある場所ですよね?」と問いかけた。
すると、麻美は、
「そうですよ!横浜スタジアムのある方ですが、スタジアムと反対ですね。関内駅の北口を降りて頂ければ判りますよ。今度、移動するお店は…」
富高さんは、そうなんですかと頷いていた。
連絡先を交換しましょうと、麻美が、富高さんに言うが、
「自分は、携帯電話を持っていないんだよね。」
「木嶋君、携帯電話を持っていたよね。もし、良かったら連絡先の交換した方がいいんじゃないかな?」と富高さんは、木嶋に話しかける。
木嶋は、
「この場で、知り合えたのだから連絡先の交換しよう。」と携帯を取り出し、麻美と交換したのだ。
はるかは、木嶋に言った。
「連絡先の交換も良いのですが、私に、振り向いて下さいね。私の方が若いんですから…。」
木嶋は、
「そりゃあ、誰が見ても、若い方がいいでしょう。」と、言葉をはるかに返したのだ。

麻美は、『富高さんは、どちらに住んでいるのですか?』と聞くと…

「自分は、千葉に住んでいるんですよ。」と富高さんは投げかけた。

麻美は、

「千葉のどの辺りに住んでいるのですか?」

「千葉の船橋に住んでいるんですよ。ららぽーとがある所ですよ。」と富高さんは、麻美に話したのだった。

はるかは、富高さんに言ったのだ。

「随分、遠くから通勤されているのですね。通勤で疲れませんか?」と

富高さんは、

「長く通勤していると、それが当たり前になって疲れもないね。」

はるかは、

「でも、通勤時間は、掛かりますよね?」

「そうだね。通勤は、2時間は掛かるね。」と…

木嶋は、

「通勤で、遠距離の人もいるから、通勤時間の2時間は範囲内だよ。今は…」と,はるかに言ったら、

「そうなんですか!」と納得したのだ。

木嶋は、富高さんに聞いた。

「ディズニーランドに行ったことはあるの?」

すると意外な答えが返って来た。

「自分は、一度も行ったことがないんだよね!近過ぎて行きずらいよ。」

一同が

「え〜、本当に行ったことがないの?」と再度、聞くと。

「本当にないんだよね。ましてや男友達と行っても仕方ないし、行く機会もないね。」

麻美は、

「富高さん、今度、このメンバーでディズニーランドに行きましょうよ」と富高さんに言う。
「機会があったら、行きましょう。」と答えた。
店に入ってから、木嶋は時間が気になり腕時計を見た。時間は、午後１０時３０分を過ぎた辺りだ。
『富高さん、そろそろ帰りませんか?千葉に帰るのに電車もなくなりますよ。』と言う。
「そうだね。２３時に店を出ようよ!」と言うので、木嶋は、ＯＫサインを出した。
木嶋は、はるかに
「２３時で切って下さいと頼んだのだ。」
はるかは、
「分かりました」と答え、木嶋は、はるかに
「誕生日のプレゼントはいつ買いに行きましょうか?」と聞く。
はるかは、
「１２月１５日に買いに行きましょう!」と言うので、
木嶋は、
「了解しました。」と受け答えた。
はるかは、
「待ち合わせ場所などについては、近くになりましたら、こちらから連絡をしますのでいいでしょうか?」
木嶋は、
「それでいいですよ!」と話すのだった。
時間になり、木嶋と富高さんの2人は、会計を済ませ、クラブ「H」の鉄の階段を
「カツーン、カツーン、カツーン」と靴の音を響かせながら横浜駅に向かう。
「木嶋君、少し高かったけど楽しかったよ」と富高さんが言うので、木嶋は
「良かった」と安堵の表情を浮かべる。

木嶋は、富高さんに聞いた。
「また、あのクラブに一緒に行こうよ。」と同意を求めた。
「いいよ。また行こうよ。」と言いながら、発車ベルが
「プルー」と
鳴り響く横浜駅で電車に乗り、２人共、帰路につくのだった。

第４話

月が変わり、人々が師走になり、忙しく動き始めた。
木嶋の携帯のバイブレーターが
「ブー、ブー、ブー」と鳴る。
木嶋は、携帯を覗いた。メールの着信だった。メールの送信者は、はるかだった。
「先日は、ごちそうさまでした。楽しい時間を過ごさせて頂きありがとうございます。誕生日、当日のスケジュールに関しては、もう少し、時間を下さい。また、こちらからメールします。」という内容だった。
木嶋は、
「なんて礼儀正しい女性なんだろう。今どきの女性してはしっかりしている」と思ったのだ…。
少ししてから、麻美からメールの着信が
「ブー、ブー、ブー」鳴った。
「木嶋さん、麻美です、先日は、どうもありがとうございました。私のラストインに相応しい日が過ごすことが出来ました。今日から、関内の新しい、お店で、働いていますので、近くに来た時には寄って下さい」
週明けの月曜日に、木嶋は、富高さんに会った。
「先日は、お疲れ様でした。２人からメールがきたよ。内容を読んでみる?」と問い掛けた。
富高さんは、
「見せてくれる?」と言葉を返したので、木嶋は、メールを見せたのだ。
「２人とも、義理堅いね!」と富高さんが言う。
木嶋は、『営業メールだと思うよ。こうでもしないと中々、お客さんが来ないのかも知れないよ!』と富高さんに話した。

富高さんは、
「そうかもね！」と答えた。
木嶋は、
「また、一緒に行きましょう！」と声を掛けたのだ。
富高さんは、
「うん、行こうよ！」と話したのだ。
はるかの誕生日が近くづくにつれ、木嶋の携帯が
「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴り響く。
この時から、はるか専用の着信音を変えた。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「私です。はるかです。誕生日の日の待ち合わせ時間なんですが、午後3時に、カフェレストラン『F』で待ち合わせしたいのですがいかがでしょうか？」とはるかから提案してきた。
木嶋は、
「はるかさんが、その待ち合わせ時間にしたいのならいいですよ。待ち合わせ場所も分かりますから…。」と答えた。
はるかは、
「その待ち合わせで決定しますね。当日、楽しみにしています。」と言い、木嶋は、電話を切ったのだ。
はるかの誕生日当日は、冬晴れで少し寒かったが懐は、温かった。なぜなら、冬のボーナスが出た直後と言うこともあり、気持ちが高ぶっていたのだ。
待ち合わせ時間より、木嶋は、少し前から来ていた。女性を待たせるのは、失礼だと考えていたのだった。
待ち合わせ時間を少し過ぎた辺りに、はるかからの電話だ。
「ピローン、ピローン、ピローン」とはるか専用の着信音が鳴ったのだ。
「私、はるかです。今、どちらにいますか！」と木嶋に聞いた。
木嶋は、
「今ですね。先日、はるかさんが指定した待ち合わせ場所でありま

すカフェレストラン『F』にいますが…」と電話で伝えた。
はるかは、
「今、横浜駅に着いたので、これからカフェレストラン『F』に向かいますので、お待ち頂けませんか！」と言ってきた。
木嶋は、
「了解しました。待ってます」と答えて電話を切ったのだ。
はるかが、カフェレストラン『F』に入ってきた。
《こんにちは、遅れて申し訳ありません。かなり待ちましたか？》と丁寧な言葉で話してきた。
木嶋は、《いいえ、そんなに待っていなかったよ。》と言葉を返したのだ。
『F』で、話しをしていて３０分ぐらいたった時に、はるかが、木嶋に問いかけてきた。。
「木嶋さん、彼女はいるのですか？」と聞くので、木嶋は、はるかに、
「彼女はいません！」と言ったのだ。
はるかは、
「彼女は、いないんですか？誕生日をお聞きしていいですか？」
木嶋は、
「何で…？」とはるかは、
「私で良ければ、誕生日のお祝いをさせて頂いて良いですか？」
「はるかさんが、良ければ、どうぞ、誕生日は、１月１３日です。」とはるかに言った。
はるかは、
「分かりました。１月１３日ですね。良かったらお店に来て下さい。」と誘われ、木嶋は、ＯＫしたのだ。
木嶋とはるかは、『F』を出て、はるかの誕生日のプレゼントを買いに行くのだった。

第5話

木嶋は、はるかに聞いた。
「誕生日のプレゼントは何がいいかな?」
はるかは、
「何にしようかな?」と呟きながら…言う。
「お店で、着るドレスが欲しいのですが、それでもいいですか!」
木嶋は、
「ドレスだけでいいのかな?ドレスの他に、欲しいのがあれば一緒に買いましょう。」と答えた。
「本当ですか…?」と、はるかが言った。
「ドレス以外で、好きな物を買ってもいいよ。例えば、ブランド物とか…。」
「そうですね~、ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮとかＣａｒｔｉｅｒとかでもいいのですか?」と、はるかは尋ねた。
「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮでもいいし、Ｃａｒｔｉｅｒでもいいよ。」と木嶋は、はるかに話したのだった。
はるかは、先に、ドレスを買いたいと言うので、ドレスショップに向かったのだ。
木嶋は、はるかの後ろを歩いていく。
２人は、横浜駅の地下にあるドレスショップの中に入ったのだ。
ドレスショップでの、はるかは、目を輝かせながら、ドレスを選んでいる。
木嶋は、
「女性とデートするのは、久しぶりだな…。」と思い更けながらドレスショップの前に待っていたのだ。
ドレスショップに入ってから時間が経過して行く。
はるかが、気に入ったドレスを見つけたらしい。
木嶋の携帯が　「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴った。

はるかが
「ドレスショップの中に入って来て下さい。」と携帯で話してきた。
木嶋は、ドレスショップに入り、ドレスを試着した。
はるかの姿を見て
「凄く、綺麗に見えるよ。」と言ったのだ。
はるかは、嬉しそうに、
「ありがとうございます。」と謙虚な気持ちで言葉を返すのだった。
木嶋は、
「そのドレスにしようか?」と、はるかに尋ねた。
はるかは、
「うん、このドレスを気に入ったので、これを買って戴いていいですか!」と言葉を返し、
「じゃあ、そのドレスで決まりだね。私服に着替えたら会計するからね。」と、はるかに言ったのだった。
はるかは、私服に着替え終わり、ドレスを木嶋に渡した。純白のロングドレスで胸元にファーが付いていた。
木嶋は、会計が終わり、はるかと共に、ドレスショップを後にした。
「次は、何処の店に行こうか?」と、木嶋が聞くと、はるかは、「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮに行きたいです。」と言うので、横浜高島屋の１Ｆにある『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』に向かった。
冬のボーナスあとなので、店内には、老若男女の《カップル達》が、店内に沢山いたのだ。
木嶋は、人の多さに驚きながら【世の中、不景気なのに、ここは無縁なのか】と思うのだった。
はるかは、店内の商品を見渡しながら、時間が経過していく。中々、気に入った商品が見つからずに、少々、不満な様子で、店を出てきた。
外で待つ、木嶋に声を掛けた。

「木嶋さん、近くにあるセレクトショップに行きたいのですがいいですか?」と木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮに気に入った商品はなかったのかな?」とはるかに聞いた。
はるかは、
「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮの中には、気に入った商品はあったのですが、セレクトショップに立ち寄ってみたいと思います。」と言ってきた。
「いいよ～。セレクトショップに行きましょう。その中で、はるかさんが欲しい商品を買いましょう。誕生日プレゼントの他に、Ｘ'ｍａｓも近いし、少し早いですが、Ｘ'ｍａｓプレゼントも渡したい。」と木嶋は、はるかに言った。
不満な顔をしていた、はるかの表情がみるみるうちに笑顔になっていく。
「ありがとうございます。チョー、嬉しいですけど。」
と言いながら、２人で、セレクトショップに向かったのだ。
はるかが、セレクトショップの階段を
「カツーン、カツーン、カツーン」と靴の音を響かせながら上がっていった。木嶋も、階段を
「カポッ、カポッ、カポッ」と上る。
２Ｆは、ブランドコーナーだった。
はるかが、気に入った商品を探している。木嶋は、少し疲れ気味みたいである。
木嶋は、はるかに
「店の外にいるから決まったら電話して…」と言い残して、店の外で待つのだった…。

第6話

セレクトショップに、はるかが入ってから時が流れて行く。
店の外にいた木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴り、電話に出た。
「何か欲しい商品は、見つかったのかな?」と聞いたのだ。
はるかは、
「セレクトショップの中で見たのですが、欲しい商品がないので、再び、ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮに、行きたいのですがいいですか?」と、木嶋に、話している。
木嶋は、
「分かりました。横浜高島屋の１ＦのＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮだよね。先に、店の前にいるからね。」と、はるかに伝えてセレクトショップを後にしたのだ。
はるかも、木嶋のあとを追うように、『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』に来たのだった。
はるかが、再び、《ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ》に、入り時間が経過していた。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴ったので、
「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ」の中に入って行ったのだ。
はるかは、商品を手に取り、
「この商品が、欲しいので買って戴けませんか?」と、木嶋に言い、店の外に出て行ったのだ。
木嶋は、はるかが、手にしていた商品を受け取り、会計をしたのだった。
会計が終わり、
「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ」から出て来た木嶋は、商品を右手に持ちながら、店の外で待っていた、はるかと合流して、近くのに

ある
「ドトールコーヒーショップ」に入って行った。
空いている席を、見つけてお互い荷物を置き、メニューを見ながら、木嶋は、コーヒーを、はるかは、ロイヤルミルクティーをオーダーして、先に、席に戻り、木嶋が、コーヒーとロイヤルミルクティーを持ちながら、はるかの待つ席に着いたのだ。
はるかは、
「今日は、誕生日プレゼントだけでも、嬉しいのに、X'masプレゼントまで戴いて、ありがとうございました。」と、御礼を言った。
木嶋は、照れながらも、
「いえいえ、どういたしまして。自分も、久しぶりに女性にプレゼントをしました。」と、言ったのだが、木嶋は、今まで女性にプレゼントなんかしたことがなく、今回が初めてだった。
何故なら、今までの木嶋は、女性に奥手であったのだ。
会社や学校、陸上や研修で知り合った仲間との交流、サークルを立ち上げたこともあった。その中には、好意を抱いた女性は、何人かいたが、自分の気持ちを、打ち明けられずにいたのだ。
それが、木嶋自身のメンタル面の弱さであったのだ。
そんな時に、はるかに出会ったのだ。
木嶋は、コーヒーショップに入ってから、はるかと話しをしていた。
はるかの好きな男性のタイプや木嶋が何故?クラブ「F」に入ったのか!木嶋の好きな女性のタイプなど、色んな話しをしていた。
木嶋の脳裏には、
「この世界の人たちは、プレゼントを貰ったら終わりだろう。はるかとも食事やデートすることもないかな!」と、思うのは不思議ではなく、ごく当たり前と感じていた。
はるかが、

「そういえば、木嶋さん、Ｘ－ｍａｓは、何か予定がありますか？」と、はるかが、聞いてきたのだ。。　木嶋は、
「Ｘ－ｍａｓは、何も予定はないけど…何でかな…？」と聞き返した。
　はるかは、
「お店で、Ｘ－ｍａｓイベントがあるのですが来て頂きたいのですが…」と話してきた。
木嶋は、
「はるかさんはいるのかな？」と聞くと、
「２３日とＸ－ｍａｓの日にお店に出ています。来て下さい。」と、はるかが言う。
木嶋は、
「確約は、出来ないが行けたら行きますと…」言うしかなかったのだ。
「Ｘ－ｍａｓのイベントに、来る来ないの連絡を、携帯にして戴けませんか？また、来月の１３日って誕生日でしたよね。」と、はるかが話してきた。
　「そうだよ。」と、木嶋は答えた。
　はるかが、
「来月の予定を確認して木嶋さんの誕生日のお祝いをしてもいいでしょうか？」と話してきた。
　木嶋は、
「覚えていたらでいいですからね！」と伝えたのだった。
「はるかとは、もう、連絡も来ないで音信不通になってしまうのだろう。」と、一抹の不安が、脳裏をよぎったのだ。
　はるかが、
「どうなされたのですか？」と、不安な顔をしていた、木嶋に聞いてきたので、
「何でもないよ…」と、強がりを言うしかなかった。
ふと、木嶋が左手にしている腕時計で時間を確認したのだ。

コーヒーショップに入ってから、1時間ぐらい経過していたのだ。
「そろそろ、帰りましょうか?」と、はるかが、言うので、
木嶋は、
「帰ろうか!」と、はるかに、声を掛けて、席を立つと同時に、木嶋の席に置いてあった《ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ》を渡したのだった。
はるかは、相鉄線の改札口を通り、見送っていた、木嶋に、会釈をしながら靴の音を響かせ、
「カポッ、カポッ、カポッ」と階段を響かせ、上って行った。
木嶋は、
発車ベルが、
「プルー」と鳴り響く横浜駅をあとに、家路に着くのだった。

第7話

はるかに、誕生日プレゼントをしてから数日後に、木嶋の携帯が、「ピローン、ピローン、ピローン」と、はるか専用の着信音が鳴り響くのだった。

木嶋が、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが…。」

「木嶋さん、私です、はるかです。先日は、誕生日プレゼントを戴き、ありがとうございました。今日は、お店のX'masイベントに参加して戴きたくて、連絡を致しました。考えて頂けたのでしょうか?」と、木嶋に尋ねた。

木嶋は、少し時間が経過してから

「今回の、X'masイベントに参加は見送らせて頂きます。」と、はるかに伝えたのだ。

はるかは、残念そうに、

「え〜、来て戴けないのですか?」と言ったのだ。

木嶋は、

「今回は、はるかさんと知り合って時間が経ってないので、ご理解して下さい。次回は、考えますので…」

はるかに、伝えたのだ。

はるかは、

「分かりました。次回、お店のイベントがあれば、誘いますね。来月13日の木嶋さんの誕生日は、お祝いしますので、時間を空けて下さいますか?お願いします。」

はるかからの要望だった。

木嶋は、

「手帳を見るからチョット待って下さい…。13日は、日曜日なので、11日の金曜日にして戴きたいのですが…。」と、はるかに答えたのだ。

はるかは、
「11日の金曜日ですね。分かりました。時間を空けておきます。その時に、誕生日のお祝いをさせて戴きますね。年が明けてから、待ち合わせなどを、決めていいでしょうか?」と答えたのだった。
木嶋は、
「分かりました。」と答え、電話を切った。ふと、息を「フー」と吐いた。木嶋は、心の中で確信を持ったのだ。
「もう、はるかと、会うことはないと、思っていたのに、時間を作ってくれるなんて…それが、誕生日を祝ってくれる…なんでだろう?」と呟いていた。
「もしかしたら、はるかは、自分に対して好意を持っているのかな!」木嶋は、そう考えるのだった。
木嶋は、嬉しくなって、麻美の携帯に電話をした。
「プルッ、プルー、プルー」
呼び出している。
麻美とは、メールをしていても、携帯で話す機会がなく時間だけが過ぎて行った。
麻美が電話に出た。
「もしもし、麻美です。」
「もしもし、お久しぶりです。木嶋ですが…麻美さん、お元気ですか!」木嶋は、話したのだ。
麻美が、
「木嶋さん、随分、久しぶりですね。お元気そうでなりよりです。今日は、どうなされましたか?」と答えてきた。
「久しぶりに、麻美さんの声が聞きたくなってね。電話をしたんですよ。新しいお店の居心地はいかがですか?」木嶋は、麻美に尋ねた。
麻美は、
「随分、嬉しいことを話してくれますね。ありがとうございます。はるかさんとは、どうですか?上手くいっていますか?」と、言葉

を返してきた。
木嶋は、
「この間の土曜日に、はるかさんと、デートしました。誕生日プレゼントとX'masプレゼントを渡したんだ。」と、麻美に答えたのだ。
麻美は、
「木嶋さん、はるかさんに、プレゼントしちゃダメですよ。はるかさんは、木嶋さん以外の人にも、おねだりして色んな物を買って戴いているんですよ。今回は、仕方ないですが、次は、気をつけて下さい。」麻美が、木嶋に指摘したのだ。
木嶋は、
「そうなの…?」と、言い返した。
麻美は、
「木嶋さん、誕生日は、いつなのですか?」と木嶋に聞く。
「誕生日は、1月13日ですが、日曜日なので、11日の金曜日に、はるかさんが祝ってくれるみたいだよ。」木嶋は、麻美に言ったのだ。
「そうですか!私の店にも、1月中に来て下さい。誕生日のお祝いをさせて戴きたい…。いいですか?」麻美が、木嶋に問いかけたのだ。
木嶋は、『そうだね~。1月25日ならいいですよ。先日、麻美さんの隣に座っていた…富高さんを覚えていますか?』
麻美が、
「千葉から来ている富高さんですよね。覚えていますよ!」と言うのだ。
「富高さんに、1月25日のことは話しますので、分かりましたらメールか電話のどちらかにします。」麻美に伝え、
「連絡を待ってます。」と麻美は言い、木嶋は、電話を切ったのだった。
木嶋は、麻美から、はるかの意外な一面を聞いて驚いた。

「そんなとこがあるとは…。」心の中でボヤいたのだった。
人には、長所と短所がある。短所ばかりを見るよりは、長所を見た方がいいのだと、木嶋は、感じたのだ。
翌日、会社に行き、木嶋は富高さんに話したのだ。
「富高さん、1月の25日は、予定が空いていますか?」と聞いた。
富高さんは、
「空いているよ。何で…?」
「麻美さんの店に行こうよ!向こうも会いたがっているから…。」
木嶋は、富高さんに話したのだ。
「じゃあ、行こうか!1月25日だね。また、近くになったら言ってよ!」富高さんは、木嶋に伝えて、別れたのだった。
木嶋が、麻美に電話した。
「プルッ、プルー、プルー」と呼び出し音が鳴っている。
木嶋は、
「富高さんに、話しをしました。1月25日、OKになりましたので店に行きます。」と、麻美に言った。
麻美は、
「お待ちしています。」と、答えて電話を切った。
木嶋は、振り返った。
「今年の終わり、二ヶ月は、忙しいな!」
そんな思いをしながら、除夜の鐘が
「ゴーン、ゴーン、ゴーン」と、
鳴り響くのだった。

第8話

年が明け、木嶋の携帯が光っている。
「誰だろう」とメールを見たら、はるかからメールだった。
「明けましておめでとうございます。もうすぐ誕生日ですね。ドタキャンがないようにお願いしますね！」これには、木嶋も渋い顔をしながらメールを読んでいた。
少ししてから、麻美からもメールがきたのだ。
「Ａ　ＨＡＰＰＹ　ＮＥＷ　ＹＥＡＲ　1月25日、お店でお待ちしています。富高さんと一緒に来て下さいね！」と、挨拶メールだった。
木嶋は、はるかと麻美に
「明けましておめでとうございます。今年も、富高さんと一緒に、よろしくお願いします。」と新年の挨拶メールを返信したのだった。
ノンビリした、正月休みが終わった。
木嶋は、富高さんの元に新年の挨拶がてら、2人からメールがきたことを伝え、富高さんの目の前に、携帯を差し出して受信メールを見せた。
富高さんは、
「木嶋君、2人は、礼儀正しいよね。わざわざメールしなくてもいいように感じるんだが、どうなんだろう?」
木嶋は、
「まあ、別にいいんじゃないかな！自分も、新年の挨拶メールを返信しないといけないから送ったよ！もちろん、富高さんも一緒によろしくって！」富高さんに言った。
富高さんは、
「木嶋君、気を使ってもらって何か悪いね！」木嶋に話した。
木嶋は、
「そんなことないよ！飲みに行く時に、知り合いがいる店に行った

方がいいと思うからね！」富高さんに話して、その場所から離れたのだった。

木嶋との約束の日が近くなり、はるかから連絡が入る。

「木嶋さん、お久しぶりです。１１日金曜日の待ち合わせですが、何時に待ち合わせしますか？」と木嶋に聞いてきた。

木嶋は、

「そうだね～。何時にしようかな？会社から真っ直ぐ行くから横浜駅に、午後６時ぐらいに着くと思います。」　はるかは、

「分かりました。それでは、午後６時１５分に、カフェレストラン『Ｆ』の中で待っていて下さい。合流してからお店【Ｈ】に一緒に行きませんか？」と話してきた。

木嶋は、

「それでいいよ。」と、はるかに言った。

「それでは木嶋さん、１１日の金曜日、楽しみにしています。」と伝えて、はるかは、電話を切った。

木嶋は、

「１１日の金曜日、午後６時１５分にカフェレストラン『Ｆ』か…時間通りにくるのかな？」と思いつつ、手帳に待ち合わせ場所と時間を書いた。

木嶋は、会社で三谷さんに声を掛けられた。

「お～い木嶋、最近、《あの店》に行っているのか…？」

《あの店》とは、クラブ『Ｈ』のことだ。三谷さんは、あの日以来、横浜駅周辺で飲む機会がなかった。

木嶋は、

「たまに、行っているよ。今度、誕生日を祝ってくれるみたいだよ。本当か、どうか分からないが１１日の金曜日待ち合わせしているんだ。横浜駅でね…。」と、三谷さんに話したのだ。

三谷さんは、

「あんまり、嵌まるなよ。お前は、嵌まりやすいから気をつけろよ。」と注意してくれたのだ。

木嶋は、
「ありがとうございます。嵌まり過ぎないようにするよ。」と言葉を返した。
木嶋と三谷さんとの付き合いは、木嶋が会社に入社して以来、１５年来になる。三谷さんとは、郷田さんたちと良く遊びに行っていたので、木嶋の性格を熟知していたのだった。
木嶋は、この時は、はるかに嵌まって行くなど思っていなかった。女性と交際していても、木嶋の性格が災いしてか、短期間しか持たず、長期間の交際に慣れていなかったのだ。
そして、１１日の金曜日当日。木嶋は、家を出てから電車に乗り、会社に着いて仕事場に向かうときに、緊張感が張り詰めていた。それを見た、三谷さんが木嶋に、声を掛けたのだ。
「お～い、木嶋どうしたんだ。緊張しているのか…！」と聞いた。
木嶋は、
「うん。緊張しているね。今まで女性に誕生日を祝ってもらったことがないから今日、どう対応すればいいのか分からないんだよ。」と三谷さんに言ったのだ。
三谷さんは、
「いつものお前らしくないぞ。俺達と一緒に遊んでいる時と同じように接していればいいんだよ。」木嶋にアドバイスをしたのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。普通に接してみるよ。」と答えたのだ。
仕事の終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴り響くのだった。
木嶋は、作業服から私服に着替え、会社のバスに乗り、最寄り駅をあとにしたのだった。
横浜駅を降りて、待ち合わせ場所のカフェレストラン『F』に着いた。
木嶋は、はるかに電話した。
「プルッ、プルー、プルー」と呼び出している。

はるかが電話に出た。
「もしも～し、はるかですが…」
木嶋は、
「今。。カフェレストラン『F』の中にいます。」と伝えた。
はるかは、
「もうすぐ、横浜駅に着きますので、待っていて下さい。」と言ってきたので、木嶋は、
「分かりました。待ってます。」と言い、電話を切り、はるかが、来るのを待つのだった。

第9話

はるかが、カフェレストラン『F』の中に入ってきた。
「お待たせしました。時間待ちましたか?」と木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「10分ぐらいじゃないかな?待っていた時間は…」と、はるかに答えたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、前回、来て以来になるのですが、お変わりありませんでしたか?」と尋ねた。
木嶋は、
「そうだね~。麻美さんから新年の挨拶メールがきたぐらいだね。」と言ったのだった。
「差し障りがないようでしたら見せて戴けませんか!」はるかは、木嶋に聞いた。
木嶋は、携帯を取り出し、麻美からの新年の挨拶メールを見せた。
はるかは、
「麻美さんって、いくつぐらい…なんですかね?」と聞くが…
木嶋は、
「少なからずとも、見た目から20代ではないはず…です。案外、自分と同じぐらいかもね。」と、はるかに言ったのだ。
カフェレストラン『F』
に入ってから1時間ぐらい経過した。
すると、はるかから切り出してきた。
「木嶋さん、そろそろお店に向かいませんか?」
木嶋は、
「そうだね~、ここを出ようか!クラブ『H』には、連絡してあるのかな?」はるかに、尋ねたのだ。
はるかは、

「お店には、ここに入る前に連絡をしてあります。」
木嶋は、
「連絡してあるなら、大丈夫だね。会計をするから行きましょうか！」と会計カードを持ち、支払いに行ったのだ。
支払いが終わり、店の外にいた、はるかと一緒にクラブ『H』に向かう。
はるかの靴の音が
「カッ、カッ、カッ」とアスファルトに響きながら、その一歩うしろを、木嶋が歩いて行く。
店の前にある鉄の階段を
「カツーン、カツーン、カツーン」と響きながら上って行く。
木嶋が、再び、クラブ『H』に足を踏み入れた。
「いらっしゃいませ。」と威勢の良い挨拶がきた。
席に案内された木嶋は、店員さんから、
「はるかさんが来るまで　少し、お待ち下さいませ。」と促されたのだ。
時間にして、１０分ぐらい経ったのだろうか！
はるかが、ドレスアップして木嶋のいる席に就く。
「先程は、ごちそうさまでした。」はるかが、挨拶がわりに言った。
木嶋は、
「どういたしまして。」言葉を返した。
はるかが、店員さんと耳打ちしている。すると、店員さんがケーキを木嶋のテーブルに持って来たのだ。
木嶋の目の前には、大きい蝋燭（ろうそく）が、３本立ててあったのだ。
はるかが、蝋燭（ろうそく）に、火を燈（とも）す。
「木嶋さん、少し、早いですが、誕生日おめでとうございます。」
はるかが木嶋に言葉をかけた。
木嶋は、
「ありがとう。」と、はるかに言いながら、蝋燭（ろうそく）の火を、

「フー」と息をはいて消したのだ。
木嶋は、はるかから、誕生日プレゼントを渡された。
はるかは、木嶋に
「家に帰ったら開けて下さい。」と言うのだ。
木嶋は、
「そうだね。今、ここでプレゼントを開けるのは、失礼に当たるから家に帰ったら開けさせて戴きます。」と、
はるかに、言葉を投げ掛けたのだ。
木嶋は、心の中では、嬉しかったのだ。なぜなら、誕生日を、祝ってもらったことがなかった。
それ以前に、彼女を作りたいと思っていても、心と身体と決断力がなかったのだ。
どうしても、消極的な性格が出てしまっていた。
はるかに、誕生日を祝って戴いたことが木嶋の、その後に、大きな自信と行動力を与えていくのだ。
はるかは、
「前に、聞いたかと思いますが、彼女はいるのですか?」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「彼女はいませんよ!いたらクラブ『H』に来ないと思うし、はるかさんに、誕生日&X'masプレゼントを渡しませんよ!」はるかに、言ったのだ。
「そうですよね!彼女がいたら、その人にプレゼントを渡すのが当然ですよね!」
はるかは、納得した表情になったのだ。
木嶋は、
「はるかさんみたいに、裏表がない人なら最高なんだよね。」と、はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「そうですね~。私も木嶋さんみたいな人とならいいですが、私

自身、男性とお付き合いをしたことがあまりないのです。」
木嶋は、
「本当なの！」と、はるかに尋ね、続けざまに、
「はるかさんは、どんなタイプの人が好きなんですか？」と聞いた。
はるかは、
「私自身、太ってる人がタイプなのです。前の彼氏は、太っていました。私に会いに来るために、食費を削って、何日かお店に、通ってまで来てくれました。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「自分の彼女がこういう店に働いていて、その人を、好きでも食費を削ってまでは出来ない。前の彼氏は、それが、はるかさんに対しての愛情だったんじゃないかな！自分は、そう思いますが…。」はるかに、聞いたのだ。
「確かにそれは言えますね。」と、はるかは、答えたのだ。
クラブ『H』に、入ってから時間が経過して行く。木嶋が、左手にしている腕時計を覗いた。時間は、午後１１時近くになろうとしていた。
木嶋は、
「そろそろ、帰ろうと思いますので会計をお願いします。」と、はるかに伝えた。
はるかは、
「お願いします。」店員さんに声をかけた。
店員さんが、会計カードを、はるかに渡して、はるかから木嶋に、手渡されたのだ。
提示された金額を、木嶋は確認して、はるかに渡し、はるかが、店員さんに渡したのだった。
木嶋は、席を立ち、はるかと共に店の外に出た。
「今日は、ありがとうございました。」はるかは、木嶋にお礼を言った。

木嶋は、
「こちらこそ、ありがとうございました。誕生日プレゼントを戴き、また、ケーキでお祝いしてもらい嬉しかったです。いい誕生日になりました。」はるかに、伝えたのだった。
はるかは、
「夜遅いので、気をつけてお帰り下さい。」言葉をかけた。
木嶋は、
「ありがとう。」と、言葉を返し、鉄の階段を
「カン、カン、カン」
靴の音を響かせて、降りて行く。
発車ベルが
「プルー」と、鳴り響く横浜駅から出て行ったのだ。

第１０話

横浜駅から電車に乗った木嶋は、はるかから渡されたプレゼントを見た。

「何だろう…？」

包装を解きながら、チョットした期待感が脳裏によぎったのだ。

木嶋は、中身を見て驚いた。

それは、《香水》だった。意外な物だ。

木嶋自身、《香水》を使う機会がないので、通勤で使っているリュックの中に

『そっと』しまうのだった。

木嶋には、プレゼントを貰えたことが嬉しかったのだ。

家までの帰り道、思案しながら木嶋は、

「はるかに、どういったメールを送ろうか？」心の中で呟いていた。

家に着き、布団の中に入りながら、メールを送る内容を考えていたが、決まらずに寝てしまったのだ。

次の朝、冬晴れで酔いも覚めた。

木嶋は、

「昨日は、誕生日のお祝いとプレゼントをありがとうございました。《香水》は、大切に使わせて戴きます。」はるかに、メールを送ったのだ。

はるかからメールが来た。

「昨日は、ありがとうございました。来月は、バレンタインのイベントがありますのでお店に来て頂けると嬉しいです。」

木嶋は、メールを読みながら

「了解しました。検討します。」はるかに、メールを返信したのだ。

【バレンタインデーか…自分には、関係がない…】そう感じていた。

木嶋には、バレンタインデーに、本命や義理チョコさえも会社内外で貰ったことなどない。

「バレンタインデーに、チョコレートを貰ったこともないなぁ～。はるかさんに、バレンタインチョコレートを手作りで貰えないだろうか…それまでは、何とか頑張ってみよう。」木嶋は、心の片隅で、そう決めたのだった。

はるかのいるクラブ『H』に、木嶋が行ってから数日が経過した。

会社から通勤バスを降り、最寄りの駅の改札口を通り、電車に乗った。

会社の先輩方と車内で会話していた。

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」と、はるか専用の着信音が鳴り響くのだった。

はるかは、木嶋に

「クラブ『H』の出勤前に会って話しをしたいのですが宜しいでしょうか？」と言うのだ。

木嶋は、この日は、たまたま仕事が定時間で終わっていたのだ。

「うん、いいよ。待ち合わせ場所は…何処にするのかな？」はるかにOKサインを出しながら聞いたのだ。

はるかは、

「待ち合わせ場所…前に木嶋さんと入ったカフェレストラン『F』ではなくて、相鉄線の改札口近くに交番があるかと思いますが、交番を左手に歩きますと、ファーストフード店に当たります。そこを左に少し歩きますと、カフェショップ『Y』がありますので、そこを待ち合わせ場所にしたいのですが、分かりますか？」木嶋に伝えたのだった。

木嶋は、

「そこまで、場所を詳細に伝えられたら、分かると思います。判らないようならはるかさんに電話します。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「分かりました。なるべく、早くに行きますね。」と言いながら電話を切ったのだ。
木嶋は、指定された場所のお店に行き、ホットコーヒーを飲みながら待っていた。
店に入って１０分ぐらい経ったのだろうか！
はるかが店に入ってきた。
「すみません。遅れました。」と、木嶋に言った。
「今、店に来たばかりだよ。」
はるかに、強がりを言うのだった。
はるかは、木嶋の前の座り
「木嶋さん、私と友達になって頂けませんか！」木嶋に言ってきたのだ。
すると、木嶋は、驚きを隠せずにいた。
「えっ、友達にですか…？いいですけど…最近は、陸上仲間との交流もないし、会社の女性しか知らない部分もあるからね。若い女性のことを知るにはいい機会だから…」はるかに、友達としての交際をＯＫするのであった。
はるかは、嬉しそうな顔をして
「本当ですか！」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「本当ですよ！」言葉を返したのだ。
店に出勤時間が迫り、はるかが、
「そろそろ、店に出勤しないといけないので、先に出て行きます。」言葉をいい残して、木嶋の元から立ち去って行った。
木嶋にしてみれば、短い時間の中で、有意義な会話が出来たと確信したのだ。だが、
「友達として交際していこうにも、どんな形がいいのか?」戸惑いがあったのだ。
なぜなら、木嶋は、交際経験が豊富ではなかった。
木嶋の勤務している会社では、年配の男性が多く、若い男女の世

代が少なかったことも影響していたのだ。若い女性が入ってきても、年令が掛け離れているため、何を話していいか理解不能であった。

木嶋には、不安もあったのだ。

【若い人＝ブランド品】のイメージが付きまとっている。

麻美との約束の日が近づいていたのだった。

第１１話

木嶋は、富高さんの元に会社の休み時間を使い、歩いてきた。
木嶋は、富高さんに
「今日は、予定通りの時間で行動しますよ。」と話したのだ。
富高さんは、
「うん、いいよ。」ＯＫサインを出したのだった。
仕事の終わりのチャイムが
「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴り響いている。
木嶋は、着替えていつものように、会社のバスに乗り、富高さんがバスに乗って来るのを待っていた。
木嶋が遅れること数分後に、富高さんが乗ってきた。バスの中では、お互い、席を離れて座っていたのだ。
バスが会社の最寄りの駅に着いた。先にバスから降りていた木嶋は、富高さんが下車して来るのを待っていた。
富高さんが、木嶋と合流して、最寄り駅を出たのだった。
電車内で、木嶋は、
「いきなり行っても、関内は解らないからこの間の日曜日に、事前リサーチしてきたよ。」富高さんに話したのだ。
「えっ、木嶋君、前もって場所を見に行ってきたの?」木嶋は、富高さんに聞かれた。
木嶋は、
「うん、そうです。場所を見ておかないと、当日、場所が判らなくて、麻美さんに心配かけるよりはいいでしょ!」富高さんに、言葉を投げかけた。
「木嶋君、几帳面だよね。」富高さんが言うのだった。
相鉄線で横浜駅に着いた。２人は、ＪＲに乗り換え階段を降り、京浜東北線に乗った。
木嶋は、よく野球観戦に横浜スタジアムに来るのに、関内駅の南

口には降りたことはあるが、北口は、1年に1回、伊勢佐木モールに来るぐらいで、海側には、歩いたことは皆無である。
富高さんは、関内駅には全くと言っていいほど利用はしたことなどなかった。
木嶋は、麻美の携帯に電話した。
「プルッ、プルー、プルー」
呼び出し音が鳴っている。
麻美が、携帯に出た。
「もしもし、麻美ですが…。」
「木嶋です。今、富高さんと一緒に関内駅に着きました。これから2人で、駅の近くにあります居酒屋『T』で軽く飲んでから麻美さんの店に行きます。」木嶋は、麻美に携帯で伝えた。
麻美は、
「分かりました。遅くならないようにして下さいね。待ってます。」木嶋に話して電話を切った。
木嶋は、横にいた富高さんに、麻美の言葉を伝えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君、そう話して戴けたなら、居酒屋で飲もうよ。」木嶋と2人で関内の駅近くにある『T』に飲みに行った。
2人が飲み始めて、木嶋が、左手にしていた腕時計を見ると2時間近くに経とうとしていた。
木嶋は、
「麻美さんも、待っているいますから店を出ますか?」富高さんに声をかけた。
「じゃあ、行こうよ!」2人は、会計を済ませ、麻美が待つ店に歩き始めた。
「ズッ、ズッ、ズッ」靴の音。
「ブルー」と排気ガスを出しながら走る車。少し歩き始めたら大きな交差点で立ち止まる。
「木嶋君、ここからまだ距離があるのかな…?」富高さんが木嶋

に尋ねた。
木嶋は、
「あと、5分ぐらいじゃないかな！」と言葉を返す。
「駅から結構歩くね。」と富高さんは、木嶋に言いながら麻美の店の近くに着いた。
木嶋は、麻美の携帯に電話した。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
麻美が電話に出た。
「木嶋君、今、どこなのかな?」と聞いていた。
「今、店の前にいますよ。何階ですか?」麻美に、木嶋は聞いたのだ。
麻美は、
「5階です。店の名前はクラブ『O』です。」木嶋に話したのだった。
木嶋は、この店で高校の同級生に会うとは、思いもかけないことが起きるとは思わなかったのだ。

第１２話

木嶋と富高さんは、とあるビルの前に立ち止まった。木嶋が麻美に電話した。

「プルッ、プルー、プルー」

呼び出し音が鳴り響いている。

電話に麻美が出た。

「もしもし、麻美ですが…。」

「木嶋です。今、麻美さんがいるビルの前に立っています。何階ですか？」

木嶋が、麻美に聞いたのだ。

麻美は、

「ビルの５Ｆですよ。店の名前はクラブ『Ｏ』です。」

木嶋は、

「分かりました。５Ｆのクラブ『Ｏ』ですね。今から行きます…。」

麻美に伝えて電話を切った。

木嶋は、富高さんと一緒にビルの中に入り、エレベーターに乗り、５Ｆのボタンを押した。

エレベーターが、目的階の５Ｆに着き、ドアが開いた。

フロアーを少し歩いた。

クラブ『Ｏ』のドアを開けた。

「いらっしゃいませ！」威勢のよい声が店内に響き渡る。

一人の女性が木嶋の元に歩いてきた。それは麻美であった。

「木嶋君、いらっしゃい。富高さんも一緒でしたか…。こちらにどうぞ。」

木嶋と富高さんは、麻美のあとを歩いていく。

富高さんは、

「この間、木嶋君と一緒に行った店は、雰囲気が良かったが、この店も、雰囲気がいいよね。」木嶋に話している。

木嶋も、
「そうだね。品があると言うか高級感があるよね。」富高さんに話した。
麻美が、
「カラオケが出来る部屋があります。良かったら歌いながら話しませんか！」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「どうしますか？麻美さんとは、久しぶりに会ったので、滅多にない機会なのでカラオケの出来る部屋に行きますか…？」富高さんに聞いたのだ。
「そうだね。カラオケもいいね～。歌いながら話そうよ！」富高さんが木嶋に言葉を返した。
木嶋は、
「じゃあ、カラオケが出来る部屋でお願いします。」麻美に伝えて、カラオケの部屋に案内していった。
少し、遅れて一人の女性が入って来た。
木嶋の右横に座り、
「玲です。」自己紹介をした。
木嶋は、
「どうも、初めまして、木嶋と言います。左隣にいる人は、富高さんと言います。同じ会社の同僚です。宜しく！」玲に挨拶をした。
富高さんの左横に麻美が座った。
玲は、木嶋と富高さんのことを事前に麻美から聞いていたのだ。
「木嶋さんと富高さんは、麻美さんが、この店に移動してくる前の横浜駅近くにある、クラブ『H』で知り合ったんですよね！」木嶋に聞いてきた。
木嶋は、
「そうです。クラブ『H』で知り合いました。自分は、麻美さんと会うのが今回を含めて3回目で、最初に富高さんが会ったのが麻美さんが最後の日です。今回が会うのは2回目だよね？富高さん…。

」富高さんに尋ねている。
「そうなんだよ。前回、麻美さんと会ったのがその店で最後だったみたいで…自分は、携帯を持っていないから木嶋君が、麻美さんと連絡を取っているんだ。」富高さんが木嶋に話している。
木嶋は、
「それは、実際、本当の話しですよ。」玲に、話している。
玲は、
「麻美さん、富高さんが携帯を持っていないのは本当なの？」麻美に聞いている。
麻美は、
「富高さんが、携帯を持っていないのは本当よ。いつも連絡をくれるのは木嶋君。たまに木嶋君の携帯で声を聞くことはあるよね！」
木嶋と富高さんに同意を求めた。
二人は、
「うんうん」頷いていた。
玲は、納得した表情になったのだ。
玲は、
「そう言えば木嶋さん、麻美さんがいた横浜のクラブ『H』にお気に入りの女性がいるって聞いたんだけど…本当なの？」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、カラオケで長渕剛の《とんぼ》を歌いながら答えた。
「お気に入りの女性はいますよ。まだ、１０代後半で名前は、《はるか》って言うんだよね！可愛いんだ！」ノロけていた。
続けざまに、
「麻美さんがラストの日も富高さんと一緒に、はるかさんを含めて４人で飲んでいたよ。」玲に自慢げに言っていた。
麻美も、
「玲さん、木嶋君がお気に入りの、はるかさんは可愛いよ。ねっ、富高さん…！」富高さんに尋ねた。
富高さんは、

「自分も、この間って言うより去年だが、結構、自分も可愛いと思いますよ。マジで…。」玲に、話している。
玲は、
「私も、はるかって女性に会ってみたいな。木嶋さん、今度、お店に連れて来て下さい。」木嶋に聞いている。
木嶋は、
「はるかさんは、クラブ『H』で、働いていますが、昼間も何かしているみたいです。今度、連れて来れる機会があれば一緒に来ますよ。先日、会った時、意外なことが起こったんだよね！」玲に、意味深な発言をしている。
玲は、
「何かあったの…？」木嶋に問いかけている。
木嶋は、
「いや～」右手を、頭に載せながら、照れ隠ししている。
「友達として付き合って下さいと言われてね…。」玲に、話している。
玲は、
「友達として付き合ってと言われてどうしたの？」木嶋に聞いた。
木嶋は、
「一瞬、戸惑いがあったんだが、付き合いを始めたんだ！」玲に答えた。
富高さんがカラオケで、サザンオールスターズの《いとしのエリー》を歌っている。富高さんの、左横にいた麻美が木嶋の発言を聞いて、驚いた表情を見せながら木嶋の左横に移動して来たのだ。
「木嶋君、冗談でしょう。はるかさんと友達として付き合いを始めたなんて…冗談も程々にして下さい。」麻美が、木嶋に尋ねている。
木嶋は、
「冗談ではなくて、本当の話しですよ。」カラオケを歌い終わった富高さんも、麻美の左横にいる。

麻美が、

「木嶋君、はるかさんと例え、友達として付き合っても苦労するわよ。結構、わがままみたいだから…それに、まだ若いし…」木嶋に忠告をしている。

木嶋は、

「そうかな?自分は、若い女性と接する機会がないからと思うんだがね…。」麻美の忠告が、当たるとは木嶋は、思わなかったのだった。

第１３話

麻美は、
「はるかさんについているお客さんは、ほとんど年配の方々。若い人はいないんだから…木嶋君が友達にならなくてもいいような気がするよ。」木嶋に、話していた。
木嶋は、
「そう批判的にならずに、短所より、長所を見てみるのもいいんじゃないですか?」麻美に、話したのだ。
麻美は、
「付き合ってみて下さい。何かあればアドバイスはしますね。」
木嶋に、優しく話すのだった。
玲も、
「私も、麻美さんの意見に賛成です。同じ学校の同級生なので、困ったときは助けます。」木嶋と麻美に言ったのだ。
富高さんも、
「木嶋君、はるかさん、若いから気をつけた方がいいよ。」木嶋に、アドバイスをした。
木嶋は、左腕にしていた腕時計で時間を見た。クラブ『Ｏ』に入ってからどれくらいのたったのだろうか?木嶋は、左腕にしていた腕時計を見た。２３時を回っていた。クラブ『Ｏ』に入ってから３時間ぐらいたったのだろうか!
木嶋は、
「富高さん、そろそろでましょうか!関内駅を２３時３０分までに出ないと終電に乗り遅れますよ。」富高さんに声をかけた。
富高さんは、
「もう、そんな時間になるの?もうチョットいたいがそろそろ帰ろうか!」木嶋に伝えた。
木嶋は、

「玲さん、会計をして頂けませんか！」玲に伝えた。玲は麻美にシグナル（×）を出した。

玲は、

「木嶋さん、お帰りになるのですか？」木嶋に、尋ねた。

木嶋は、

「富高さんは、千葉の船橋に住んでいるので、この時間に帰らないと東京駅で乗り換えないとね。また、酒を飲んでいるので、時間には、ゆとりを持たないと…。」玲に、話したのだ。

玲は、

「富高さん、家から会社までの通勤時間は、どれくらい掛かるのでしょうか？」富高さんに、聞いていた。

富高さんは、

「通勤時間、2時間ぐらいですかね。今、自分が通勤している時間帯は、行きも帰りも通勤ラッシュとは反対ですから引っ掛からないんですよ。自分の元上司は、東京の有楽町辺りから来ています。長く通勤をしていると2時間はアッと言う間ですよ。」玲に話したのだ。

玲は、

「そんな遠くから通勤しているのですか！気をつけて帰って下さいね。」玲は、富高さんに話した。

麻美が、木嶋と富高さんに声をかけた。

「クラブ『O』に来て頂きありがとうございました。今月いっぱいで、クラブ『O』を辞めます。来月から同じ関内のクラブ『P』に移動します。玲さんは、ここに残りますので、機会がありましたら、クラブ『O』もそうですが、クラブ『P』も宜しくお願いします。また、木嶋君に連絡しますね。」

「え～、麻美さん、この店から移動してしまうのですか？」

木嶋と富高さんは驚きを隠せなかった。

麻美は、

「玲さんには、話しています。」

玲は、
「うん、麻美さんから今月、移動の話しは聞いていたよ。」木嶋と富高さんに伝えたのだった。
木嶋は、
「麻美さん、移動するみたいだがどうしようか！」富高さんに聞いた。
富高さんは、
「麻美さんの新しい店、クラブ『P』だよね。機会があれば行ってみたいね。」木嶋に話した。
木嶋は、
「麻美さん、詳しいことが分かったら自分の携帯にメール下さい。玲さん、また、こちらにも顔を出しに来ますよ。」玲と麻美に話して席を立ったのだ。
会計を済ませ、麻美と木嶋と富高さんがエレベーターに乗り、１Ｆに降りていく。
エレベーターが１Ｆに着いてドアが開く。
ビルの前で、麻美が、
「木嶋さん、富高さん、先ほども話しましたが、来月から移動するので、また、関内に遊びに来て下さい。」
木嶋は、
「了解しました。いつ、来るか分かりませんが、店を転々と変えないで下さい。富高さんも大変だから…。」麻美に話して、木嶋と富高さんが立ち去って行く。
麻美は、木嶋と富高さんに手を振っていた。
木嶋と富高さんは、麻美に手を振りながら関内駅に向かいながら歩き始めた。
富高さんは、
「木嶋君、麻美はよく移動するよね。この世界はそうなのかな？」
木嶋に、問いかけた。
木嶋は、

「富高さん、人それぞれだからね。動く人もいれば動かない人もいるから…あとは、本人次第。」富高さんに話しながら、関内駅に着いた。

木嶋と富高さんは、切符を買い、発車間際の電車に乗り、関内駅をあとにした。

第１４話

２月に入り、木嶋は、そわそわしていた。なぜ？かと言うと、バレンタインデーが近づいていたのだ。

木嶋の携帯が、

「プルー、プルー、プルー」　鳴り響いている。

携帯の画面を覗くと、麻美からのメールの着信音だったのだ。

木嶋は、携帯を見た。

「木嶋君、先日は、来て戴き、ありがとうございました。もうすぐ、バレンタインデーですが、新しいお店に来て頂くことは出来ますか？」麻美が、メールで木嶋に聞いている。

木嶋は、

「チョット、無理かな！何でですか？」麻美に、メールを返信した。

麻美は、

「木嶋君に、バレンタインのチョコレートを渡したいのですが…出来れば富高さんも一緒にお願いします。」木嶋にメールをした。

木嶋は、

「麻美さんからバレンタインのチョコレートですか？ジョークでしょう？」麻美にメールで尋ねた。

麻美は、

「ジョークではないですよ。いつも、お世話になっているので、そのお礼代わりですよ。」木嶋に、メールを送ってきたのだ。

木嶋は、

「分かりました。会社に行かないと分からないので、富高さんに、話してから回答します。」麻美にメールをした。

麻美は、

「ＯＫです。」

顔文字入りで返ってきた。

木嶋は、
「麻美さんからね。意外な感じがする。」心の中で呟いた。
少しして、木嶋の携帯に
「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が鳴る。今回はメールが届いた。「木嶋さん、お久しぶりです。お店で、バレンタインデーにイベントがあるのですが、来て戴くことは出来ませんか？」木嶋は、内容を確認していた。
「バレンタインデーにイベントね～行きたいけどね…。ここ最近、飲みに行く回数も多くなっているので…どうしようかな…今回は見送らせて下さい。」木嶋は、はるかにメールを返した。
はるかは、
「分かりました。木嶋さんにも都合がありますよね。何かリクエストはありますか？」木嶋に、メールで聞いている。
木嶋は、
「わがままなリクエストかも知れないが、バレンタインデーのチョコレートは、手作りでお願いします。」はるかにメールで返信した。
はるかは、
「手作りのチョコレートですね。分かりました。渡す日にちが決まりましたらメールか電話がどちらかに連絡をします。」木嶋にメールを返信してきた。
木嶋は、
「分かりました。日にちが決まりましたら連絡を下さい。」はるかに、返信したのだった。
メールを送ったあとに、木嶋は、ふと考えていた。
「はるかさんに、手作りのチョコレートを作ってとは言って見たものの、図々しいと思われても仕方ない。貰えなくて当然かな！」
一人でボヤいていた。
会社に行き、富高さんの元に木嶋は歩いて行く。
「富高さん、麻美からこういうメールが来たよ。」木嶋は、富高

さんにメールの内容を見せた。
富高さんは、
「何か、気を使わせて悪いよね。木嶋君はどうするのかな?」木嶋に、聞いている。
木嶋は、
「会社の帰り道に寄ってって言っているので、寄ろうと考えているよ。富高さんはどうします?」富高さんに、尋ねた。
「自分も、一緒に行くよ。時間は、木嶋君が決めてよ。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「分かりました。麻美さんの最寄り駅に着く時間を、おおよそで話しておきます。」富高さんの元から歩き始めていく。
木嶋は、
「麻美さん、富高さんと一緒に行きます。日にちは、バレンタインデーの週末の金曜日でお願いします。麻美さんの家の最寄り駅で待ち合わせしましょう。時間は、大体、午後１時３０分ぐらいになるかと思います。」麻美に、メールした。
麻美から、メールの着信音が
「プルッ、プルー、プルー」
鳴り響いている。
「分かりました。」と笑顔の顔文字入りで返信されて来たのだった。

第15話

バレンタインデー当日。
会社の昼休みに、木嶋の携帯が
「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が鳴り響いている。
木嶋は電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「お久しぶりです。はるかです。今、お昼休み中ですよね。お話ししても大丈夫ですか?」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「今、大丈夫ですよ。」はるかに伝えた。
はるかは、
「バレンタインデーのチョコレートを今日、渡したいのですが…。木嶋さん、大丈夫ですか?」木嶋に聞いた。
木嶋は、
「バレンタインデーは、はるかさん、お店で、仕事ですよね?」
はるかに話した。
はるかは、
「今日は、お店でバレンタインデーイベントがありますが、出勤する前にお会いして渡したいのです。」木嶋に話している。
木嶋は、
「はるかさんは、出勤時間大丈夫なんですか?」はるかに問いかけた。
はるかは、
「時間的に、大丈夫です。あとどれくらいで横浜に着きますか?」
木嶋に、時間を尋ねていた。
木嶋は、
「あとどれくらいと言われても…。まだ、昼休み中で、あと半日、

仕事がありますので、１７時に終わるので、横浜に着くのは、おおよそ、１８時過ぎになるかと思います。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「分かりました。１８時過ぎですね。仕事が終わった頃に電話をしますね。」木嶋に話し、電話を切った。

木嶋は、

「バレンタインデー当日に…貰えるなんて嬉しいな。そう言えば、麻美さんからも、今週末に受け取りに行かないといけないな。」木嶋は、呟いた。

木嶋のそばにいた会社の同僚、大森さんは、木嶋にイタズラぽく話してきた。

大森さんは、

「木嶋君、バレンタインデー当日にチョコレートを貰えるだけいいじゃない。うちは、そんなバレンタインデーだの、Ｘ'ｍａｓだのイベントはいらないよ。世界中には、食料不足で貰えない人もいるからね。どこで知り合ったの?飲み屋のお姉さんかな?」木嶋に、質問していた。

木嶋は、

「そうだよね～。世界中には、食料が行き届かなくて倒れている人たちもいるんだよね。どこで、知り合ったのかって?さぁ～どこでしょう?ヒ・ミ・ツ」大森さんに、おどけてみせていた。

木嶋は、大森さんに

「大森さんの彼女はどこで知り合ったのかな?」逆質問をした。

大森さんは、

「どこでもいいじゃないですか!」照れ隠ししている…

「ハハハハハ」

木嶋は、笑いながら…

「大森さんの彼女は、確か会社の最寄り駅近くの『クラブ』のお姉さんじゃなかった?」大森さんに、話していた。

大森さんは、赤い顔をしながら

「違いますよ。」強く否定をしていたが、木嶋は、大森さんと、２０代後半の頃、会社の先輩方と会社の最寄り駅で飲みに出かけていた。

大森さんの彼女は、

「会社の最寄り駅近くで、働いていた『クラブ』のお姉さん…」と言うのを、知っていたのだ。

大森さんは、会社の最寄り駅近くの『クラブ』に、一人で行っていたみたいであったのだ。木嶋も一緒に行く機会はあった。

中々、本音を話さない大森さんであったのだ。

木嶋と大森さんは、同年代であった。趣味は、お互い、共通するものはないが、仕事での付き合いがあり、昼休みは、木嶋が、大森さんのところに出向いて過ごしていた。

昼休みが終わるチャイムが

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響く。

木嶋は、大森さんのところから自分の職場に戻って行った。

職場に戻り、仕事をして時間が過ぎて行く。

そんな中で、木嶋の上司である溝越さんが木嶋のところに歩いて来た。

「木嶋、今日、残業を出来ないか？」木嶋に尋ねてきた。

木嶋は、

「今日は、予定がありまして出来ません。」溝越さんに伝えた。

溝越さんは、

「何かいいことがあったのか？」木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「何もないですよ。私用で出来ないのです。」溝越さんに伝えた。

溝越さんは、

「分かった。」と、理解を示しながら、木嶋の元から立ち去っていく。仕事が終わるチャイムが

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響く。

職場からロッカーまで歩きながら、心が浮つき気味であった。

着替えを済ませ、会社のバスで最寄り駅まで行き、バスが最寄り駅に着いた。木嶋は、バスを降りて行く。

軽快なステップを利かせながら最寄り駅から電車に乗り、はるかの待つ横浜駅に向かうのであった。

横浜駅に向かっている途中で、はるかから木嶋の携帯が「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いている。今度は、メールでの着信音だった。

木嶋は、メールを読んだ。

「木嶋さん、お疲れ様です。待ち合わせ場所ですが、カフェレストラン『F』でお願いします。木嶋さん、横浜駅に着いたら連絡を下さい。」

「了解しました。」木嶋は、はるかに返信したのだった。

木嶋は、横浜駅に着いた。はるかとの待ち合わせ場所であるカフェレストラン『F』に入る前に、はるかにメールをした。

「今、カフェレストラン『F』に着きました。」木嶋は、メールを送信したのだ。

カフェレストラン『F』のドアを開けた。

「いらっしゃいませ。」　店員さんが、木嶋の元に来たので、木嶋は、

「あとから1名来るので、2人で、禁煙席でお願いします。」店員さんに伝えて、木嶋は、案内された席に座り、　はるかが来るのを「今か…、今か…」と、腕時計で時間を見ながら、麒麟のように首を長くして待っているのだった。

第16話

はるかが、カフェレストラン『F』のドアを開けて入ってきた。
「木嶋さん、お待たせしました。遅れて申し訳ありません。」はるかは、木嶋に笑顔で話したのだ。
木嶋は、
「いいえ、どういたしまして。自分も、着いてから時間が経っていないよ。クラブ『H』に出勤前に寄って戴きありがとうございます。」はるかに伝えた。
はるかは、
「バレンタインデーなので、木嶋さんと会ってからクラブ『H』に行った方がテンションが上がりますからね。」木嶋に話している。
木嶋は、
「はるかさんに、気を使わせてごめんなさい。」はるかに伝えた。
はるかは、
「そんなことないですよ。華やかなクラブ『H』にいると、現実とのギャップに戸惑いを感じるのです。木嶋さんといることで、そんな世界から解放される空間があると思うと嬉しいのです。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そんなことがあるのかなぁ～。」はるかに呟いた。
はるかは、
「クラブ『H』に入った瞬間からみんながライバルですから…私は、限られた時間の中で頑張らないといけないのです。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「はるかさんは、夜遅くまで、働いていると思っていたよ。なぜ？限られた時間なのかな？」はるかに問いかけた。
はるかは、

「事情がありまして、夜遅くまで働くことが不可能なのです。」木嶋に伝えた。

木嶋は、

「そうなんだ～。」

うんうんと首を縦に振りながらも、今いち、納得が行かないような表情をしたのだった。

はるかは、木嶋の浮かぬ表情を見て、

「何か疑問でも…？」聞いたのだった。

木嶋は、

「いや、疑問なことは…ないよ。華やかな世界にいる人たちは、夜遅くまでいるのが当然と思っていたから…。何て言えばいいのか分からないが、安心したと表現した方がいいかな！ハマると抜けられそうにない世界だよね。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「クラブ『H』は、バイト感覚です。長くいることはないと思います。」木嶋に、言葉を返すのだった。

その言葉を聞いた木嶋は安心したのだ。

木嶋が、左手にしていた腕時計を覗くと、クラブ『H』が開く時間が迫っていることを、はるかに伝えた。

はるかも、左手にしている腕時計で時間を確認した。

木嶋に、

「チョット、待っていて下さい」席を立ち、カフェレストラン『F』のドアを開けて、外に出て携帯を片手に会話をしている。木嶋には、会話している相手が判らなかった。

少ししてから、はるかが、カフェレストラン『F』のドアを開けて入って来た。

先ほどまでいた席に、再び、座った。

はるかは、

「クラブ『H』に、電車に乗り遅れたので、３０分遅れますと連絡をして来ました。」木嶋に、話したのだ。

木嶋は、
「そんなことしていいの?出勤時間は、守らないといけないよ。」
はるかに言ったのだ。
はるかは、
「バレンタインデーなので特別ですよ。」話しながら右手に大きな包みを、木嶋に手渡した。
木嶋は、
「何でしょう?この大きな包みは…」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「家に帰ったら開けて下さい。」
木嶋は、
「分かりました。」はるかに言ったのだ。
はるかは、再び、左手にしている腕時計で時間を確認した。
「木嶋さん、私は、これからクラブ『H』に行きますね!」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「もう、そんなるの?」左手にしていた腕時計を覗くと、はるかが、クラブ『H』に行く時間が、刻一刻と迫っていた。
木嶋は、
「はるかさん、一緒に行かれなくて申し訳ない。また、プレゼントをありがとうございます。」席を立つ、はるかに声をかけ、木嶋も、会計カードを持ち席を立った。
はるかは、
「いいえ。では、クラブ『H』に行ってきます。」木嶋に、声をかけカフェレストラン『F』のドアを開け、雑踏の中、
「カッ、カッ、カッ」
ヒールの音を響かせて
クラブ『H』に向かい、歩いていった。
木嶋は、
「プルー」と発車ベルが鳴り響く横浜駅の改札口を通り、電車に

乗った。
対面シートに一人で座り、はるかに、貰った大きな包みを解いた。すると、手作りチョコレート。中には、マーブルチョコも入っていた。
木嶋には、チョコレートを貰えて、それがリクエストしていた手作りだったのが嬉しかったのだ。
「本当に、手作りチョコレートを作ってくれたんだ。」木嶋は、心の中ではるかに、感謝するのだった。
木嶋は、チョコレートを一欠けら食べて見た。
「美味しい～。」
木嶋は、
「手作りチョコレートをありがとうございます。美味しく戴いています。」はるかに、お礼のメールを送信したのだ。
はるかから、木嶋の元にメールが来たのはクラブ『H』の仕事が終わったあとからだった。
はるかは、
「ありがとうございます。」木嶋に、メールを返した。
木嶋は、
「来月、ホワイトデーがあるので、手作りチョコレートを戴いたお礼に何かプレゼントをしたい。」はるかに、メールを送信した。
はるかは、
「ありがとうございます。ホワイトデーまでに何か欲しい物を探して見ます。」木嶋に、メールが返ってきた。
木嶋は、
「また、はるかさんが、クラブ『H』にいく日で時間があれば、横浜駅でデートしましょう！」はるかに再び、送信した。
はるかは、
「分かりました。時間を見つけて、木嶋さんとデート出来る日を楽しみにお待ちしています。」木嶋の携帯に送信するのだった。
木嶋は、

「連絡をお待ちしています。」はるかに、メールを送信したのだった。

第17話

木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」鳴った。
携帯画面を覗くと、麻美からのメールの着信音だった。
「木嶋君、明日のことですが、何時ぐらいに私の家の最寄り駅に着きますか？教えて下さい。」木嶋に、メールを送信した。
木嶋は、
「明日は、富高さんと一緒に行きます。最寄り駅はどこかな？」
麻美に、メールを返信したのだ。
麻美は、
「東横線沿いの白楽駅です。」木嶋に、メールをしたのだ。
木嶋は、
「分かりました。東横線の白楽駅ですね。時間は、午後１８時３０分頃になると思います。」麻美に、返信したのだ。
麻美は、
「了解しました。」笑顔の顔文字入りでメールを送信したのだ。
木嶋は、メールを見て
「麻美さんも、なかなかやるな！」心の中では、苦笑いをしたのだった。
木嶋は、会社の昼休みに富高さんの元に歩いて行く。
木嶋は、
「富高さん、今日のことで麻美さんからメールが来たので確認して下さい。」富高さんに、麻美から来たメールの内容を富高さんに見せたのだ。
富高さんは、
「何か自分が貰っていいのが悪い気がするんだよね。」木嶋に、尋ねている。
木嶋は、

「気にすることでもないと思うよ。麻美さんは、友達と話していたからそれでいいんじゃないかな?」富高さんに伝えた。

富高さんは、

「そんなものかな?」疑問を木嶋に投げ掛けていた。

木嶋は、

「営業でも、構わないと思うよ。いつもの時間の送迎バスに乗って下さい。」富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「分かった。いつもの時間の送迎バスね。」木嶋に言ったのだった。

木嶋は、富高さんの元から職場に戻って行く。

職場に戻った木嶋は、はるかの時とは、また、違う期待感があったのだ。

「果たしてどんな物を戴くのだろう…?」

会社の終わりの時間になり、木嶋は、先に、待ち合わせをしていた送迎バスに乗った。

木嶋から、少し遅れて、富高さんが乗って来た。

座席は、木嶋の隣が空いていたので、座ったのだった。

富高さんは、

「木嶋君、どっちで行くの?」木嶋に、尋ねている。

どっちで行くと言うのは、木嶋と富高さんは、通勤ルートが違うために、飲みに出かけるにしても、お互いの通勤ルートを交互に利用していたのだ。

今回は、横浜駅で東横線に乗り換えないと白楽駅まで辿り着かない。

木嶋は、

「今回は、自分と同じルートで行きましょう。」富高さんに同意を求めた。

富高さんも、

「うん、了解しました。」木嶋に、返答したのであった。

会社の送迎バスが、最寄り駅に着いた。
木嶋は、
「チョット、待っていて下さい。」富高さんに、声をかけコンビニに入っていった。
コンビニから出てきた木嶋の右手にレジ袋を持っていた。
富高さんが、
「木嶋君、何を買ってきたの?」木嶋に、聞いたのだ。
木嶋は、
「何を買ってきたのかな?ビールとつまみですよ。富高さん、毎日、飲みながら帰っているんですよね!自分のワガママで付き合って戴くのに悪いじゃないですか!」富高さんに、話したのだ。
富高さんは、
「木嶋君、悪いね!」木嶋に、伝えた。
木嶋と富高さんは、キップ売り場に着いた。
木嶋は、
「横浜駅乗り換えで白楽駅…そこまで買えばいいのですよ。ここの運賃表には載っていないので、横浜駅までのキップを買って下さい。」富高さんと一緒に、電車の運賃表を見て、富高さんは、キップを買った。木嶋は、駅員さんに定期券を、富高さんは、キップにハサミを入れて改札口を通り、ホームに向かったのだ。
木嶋と富高さんは、階段を
「ズッ、ズッ、ズッ」靴の音が地下のホームまで響いて行く。
電車が、入線してきた。
「プスン」エアーの音が聞こえる。アナウンスが、最寄り駅の地下ホームに『こだま』した。
「プシュー」ドアが開いて、乗車していた人たちが、階段やエスカレーターに散らばり、改札口に上って行く。
木嶋と富高さんは、先ほど、入線した電車と反対にいる電車に乗ったのだ。電車の表示板は、『快速横浜』行きだった。
対面シートに座り、発車ベルが、

「プルー」鳴っている。ドアが閉まり電車がゆっくりと動き出す。
木嶋は、コンビニで買ってきたビールを富高さんに手渡した。
富高さんは、
「木嶋君、悪いね。戴きます。」ビールのプルタブを「プシュ」
右手の人差し指で開けた。
木嶋も、
缶コーヒーのプルタブを
「カチッ」右手の親指で開けた。
「木嶋君、麻美さん、夜、仕事じゃないの?車で来たら飲酒運転だよね!どうやって来るのかな?」富高さんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「麻美さん、夜、仕事だよ。車ではなくて、原チャリで来るみたいだよ。飲んだらクラブ『P』置いていくって言っていたよ。」富高さんに、話したのだ。
富高さんは、
「原チャリを置いていくなら問題ないよね。」木嶋に、相槌を打っていた。
木嶋は、
「ウン、ウン」頷いていた。
電車に乗ってから、20分ぐらい経過した。乗換駅に着いた。
「横浜にお急ぎのお客様は、急行にお乗り換え下さい。」車掌さんのアナウンスが電車内に響き渡っている。
木嶋と富高さんは、『急行横浜』行きに乗り換え、横浜駅に向かった。
木嶋と富高さんを乗せた電車がまもなく横浜駅に着こうとしていた。

第１８話

木嶋と富高さんを乗せた電車が横浜駅に着いた。
「プシュッ」エアーの止まる音が聞こえた。
ドアが
「プシュー」と音を立て開く。
木嶋と富高さんは、階段を降り、相鉄線の地下改札口を出た。
横浜駅構内を真っ直ぐ歩いて行く。
歩き始めて5分ぐらいしてから東横線のキップ売り場に着いたのだ。
富高さんは、
「木嶋君、いくらなのかな?」木嶋に、白楽駅までの金額を聞いた。
木嶋は、運賃表を見た。
「白楽駅までは、１２０円だよ。」富高さんに、料金を教えた。
木嶋も、財布からお金を取り出しキップを購入した。
木嶋と富高さんは、キップを片手に改札口を通り過ぎて行く。
ホームに上がり、渋谷方面に歩いて行く。
ホームに出た木嶋は、
「白楽駅には、一度も降りたことはないんだよね。」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「木嶋君、白楽駅には、降りたことは、一回もないの?意外なように思えるよ。麻美さんの家から木嶋君の家の最寄り駅まで近い感じがしたよ。」木嶋に話している。
木嶋は、
「自分の最寄り駅から近いように思えるが、遠いんだよね。東神奈川駅で待ち合わせをするなら自分の通り道だから近いけどね。」
富高さんに話したのだ。

富高さんは、
「木嶋君から見たら、遠回りになるんだね。」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「そうなるね。」富高さんに伝えたのだ。
電車が、白楽駅に近くなり始めた頃、木嶋の携帯に、
「プルッ、プルー、プルー」着信音が鳴り響く。麻美からの着信だった。
「木嶋君、今、どの辺りですか?」メールがきたのだ。
木嶋は、
「もうすぐ、白楽駅に着きますよ。改札口を出たところで待っています!」顔文字入りのメールを麻美に返信したのだ。
麻美は、
「了解しました。これからそちらに向かいます。」顔文字入りのメールを木嶋に返してきた。
木嶋は、横にいた富高さんにメールの内容を見せた。
富高さんは、
「何で来るのかな?」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「あっ、いけない。何で来るのか聞くのを忘れていたよ。」富高さんに、話したのだ。
富高さんは、
「木嶋君、キチンと聞かないとダメだよ。」木嶋に、軽く怒っていた。
木嶋は、
「ごめんね!」苦笑いを富高さんと一緒にするのだった。
白楽駅に着き、改札口を出た、木嶋と富高さんは、麻美が来るのを待っていた。
待つこと10分ぐらいたったのだろうか!
1台の原チャリが
「ピッピッピー」クラクションを鳴らしながら走ってきた。

「誰だろう。」木嶋と富高さんは思っていた。
原チャリが止まり、ヘルメットを取ったのは、麻美であった。
「木嶋君、富高さん、待ったかな！」麻美が、木嶋と富高さんに聞いていた。
木嶋は、
「富高さん、そんなに待ち時間はないよね。」富高さんに、尋ねた。
富高さんも、相槌を打つように
「そんなに、待っていないですよ。」麻美に照れながら話している。
麻美は、
「寒空の中で、長時間待たせていたら悪いかなと思いまして。あっ、木嶋君と富高さんに、バレンタインデーのチョコレートです。両方、同じ物ですよ。」木嶋と富高さんに、手渡したのだった。
木嶋と富高さんは、
「ありがとうございます。気をつかわせて申し訳ありません。」
麻美に、お礼の言葉を同時に会釈をしたのだった。
麻美は、
「木嶋君と富高さんは、友達ですからね。これからも宜しく。私は、これから仕事なので行きますからね。」木嶋と富高さんに話して、原チャリのエンジンをかけて走り去って行ったのだ。
麻美を、見送った木嶋と富高さんは、白楽駅で、キップを買い、改札口を通り、横浜方面のホームに歩いて行ったのだ。
富高さんが、
「木嶋君、麻美さんに、何かした方がいいかな?」木嶋に、問いかけている。
木嶋は、
「来月のホワイトデーに、何か返した方がいいと思うね！」富高さんに話したのだ。
富高さんは、

「じゃあ、ホワイトデー近くに麻美さんがいるクラブ『P』に、飲みに行こうよ！」木嶋に、同意を求めた。

木嶋も、

「いいね…。行こうよ！自分もクラブ『P』に一度も行ったことがない。麻美さんに、メールでホワイトデー近くに行きますと連絡をしておきます。」富高さんに、話したのだった。

普段なら木嶋が、富高さんを飲みに誘うが、今回は、富高さんから積極的に《飲みに行こう》と話しが出たのは、意外であったのだ。

木嶋と富高さんは、東横線の横浜駅に戻ってきた。改札口を抜け、横浜駅構内を歩き、ＪＲの改札口を入り、富高さんは、千葉の船橋方面へ、木嶋は、東京方面へと別れて、発車ベルが、

「プルー」と鳴り響く横浜駅をあとにした。

第１９話

木嶋は、家の最寄り駅から歩きながら、麻美にメールを打っていた。

「麻美さんと別れたあと、富高さんと話しをしまして、来月、ホワイトデー前後に、クラブ『P』に行きたいと思います。」麻美に、送信した。

麻美から、

「連絡をして戴きありがとうございます。来る日にちが判りましたら連絡下さいね！」木嶋の携帯に、返信メールが来たのだった。

木嶋は、

「日にちが決まり次第、連絡します。」麻美に、メールを返信したのだった。

木嶋は、翌週、富高さんの元に歩いて行く。

木嶋は、

「富高さん、麻美さんにメールを送りました。日にちが決まったら連絡を下さい…メールで返事が来ました。」富高さんに、話しながら麻美から来たメールの内容を見せたのだ。

富高さんは、

「自分も、いつにするか決めたら木嶋君の所に歩いて行くか、会った時に話しますよ。」木嶋に、話したのだ。

木嶋は、

「了解しました。はるかさんとも約束があるので早目に連絡を下さい。」富高さんに、話してその場所から歩き始めた。

木嶋は、仕事が終わり、着替えを済ませて会社の送迎バスに乗ったのだ。

携帯を取り出し、

「はるかさん、ホワイトデーのプレゼントを何にするか決めて下さいね。！」はるかに、メールをしたのだ。

はるかは、
「私も、木嶋さんに連絡をしようと考えていたのです。日にちを決めようと思いますが…いつがいいですか?」木嶋に、メールが返信してきたのだ。
木嶋は、
「そうですね~。富高さんと麻美さんの店に、飲みに行く予定があるので…」はるかに、メールで伝えたのだ。
はるかは、
「今度、私も、麻美さんのお店に連れて行って下さい。日にちに関してですが、ホワイトデーの週の土曜日でいいですか?」木嶋に、メールで尋ねている。
木嶋は、
「ホワイトデーの週の土曜日ですね。分かりました。予定を空けておきます。」はるかに、メールを返したのだった。
はるかは、
「楽しみにしていますね!ホワイトデーのプレゼントはもう少し、時間を戴いていいですか?」木嶋に、メールを返したのだった。
木嶋は、
「分かりました。決まったら連絡を下さい。また、その時に、待ち合わせ時間などを決めましょう」はるかに、メールをしたのだった。
はるかは、
「分かりました。近くになりましたら連絡をしますね!」木嶋に、メールをしたのだった。
時間(とき)が流れて行く。
富高さんが、昼休みに木嶋の元に尋ねて来た。
「木嶋君、この間の話しなんだけど…いいかな?」
木嶋は、
「どうぞ。」富高さんに、言葉を返したのだ。
富高さんは、

「麻美さんのクラブ『P』の日にちは、ホワイトデーを過ぎてしまうのですが、月末週の金曜日でいいかな?」木嶋に、聞いていたのだった。

木嶋は、

「月末週の金曜日ならOKです。ホワイトデーの週は、はるかさんとの約束があるから断ろうと考えていたんだよね。」富高さんに、話したのだった。

富高さんは、

「それなら、その日にちで決まりだね。」木嶋が、同意をしたので、安心した表情で木嶋の元から自分の職場に戻って行く。

3月に入り、ホワイトデーの日が近づき始めていた。

木嶋にとっては、初めてのホワイトデーであったのだ。心の中では、はるかが、何をプレゼントに選ぶのか、期待と不安が交錯していた。

木嶋自身が、プレゼントを買えば問題はないのかも知れないが、何がいいか判らないので、はるかに、一任したのだった。

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音が鳴り響いている。

はるかからだった。

「木嶋さん、お元気にしていましたか!お久しぶりです。はるかです。ホワイトデーに欲しい商品を見つけました。」木嶋に、尋ねている。

木嶋は、

「欲しい商品を見つかったなら良かった。去年の誕生日のプレゼントの時は、はるかさんが迷っていた部分があったからね。待ち合わせ時間をまだ、決めていないので、そろそろ決めませんか?」はるかに、伝えたのだ。

はるかは、

「そうですね。
先日、連絡を戴いた時は、メールで話していたので、待ち合わせ時間までは、決めてませんでしたよね。待ち合わせ時間ですが…午後3時に、カフェレストラン『F』で待ち合わせでいいでしょうか？日にちは、ホワイトデーの週の土曜日ですが…木嶋さん、仕事は、休日出勤とか大丈夫ですか？」木嶋に、尋ねている。
木嶋は、
「仕事は、休みですので安心して下さい。待ち合わせ時間は、OKです。」はるかに、伝えたのだ。
はるかは、安心したのかハイテンションな声で、
「嬉しいです。土曜日を心待ちしています。」木嶋に伝え、電話を切ったのであった。

第２０話

土曜日になり、布団から起きた木嶋は、外の天気が気になり空を見上げた。雲一つない快晴あった。

「はるかとデートするときは、雨や雪に遭ったことはないし…晴れる確率は高いなぁ～。」木嶋は、心の奥底で話していた。

家の壁時計の時間を見た。時計の針は、午後１２時を過ぎたばかりである。

「待ち合わせ時間を決めていなかったかな?メールで聞いてみよう。」木嶋は、側にあった携帯を片手に持ち、

はるかに、メールをしたのだ。

「おはようございます。はるかさん、待ち合わせ時間は、何時にしますか?」

はるかから

「木嶋さん、おはようございます。待ち合わせを決めていませんでしたよね。時間は、夕方になりますが、午後４時で、お願いします。場所は、カフェレストラン『F』でお待ち下さい。」メールが返って来たのだった。

木嶋は、

「了解しました。」はるかに、メールを返信したのだ。

木嶋が、家を出て最寄り駅に向かった。

「ズッ、ズッ、ズッ」スニーカーで歩く音が、アスファルトに響いている。

初めて迎えるホワイトデー。最寄り駅に着いた木嶋は、ふと、息を「フー」と吐いたのだ。

「はるかは、何を見つけたんだろう。」ジギルとハイドが入り混じっている。

「短絡的に、考えるとブランド物になるのかなぁ～誕生日のプレゼントは、『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』だった。」木嶋は、さ

らに自問自答していながら、何故か、納得していた。
待ち合わせ時間前に、横浜駅に着き、カフェレストラン『F』に入って待っていた。
カフェレストラン『F』は、最近良く待ち合わせ場所に使っていた。
木嶋は、席に座り、アイスコーヒーとフライドポテトをオーダーして、はるかが来るのを待っていた。
アイスコーヒーを飲みながら、携帯の待ち受け画面で、ｉモードを操作しながら、待つこと１０分ぐらいしてはるかが、店内に入って来た。
はるかは、木嶋の、反対側の席に座り、ホットロイヤルミルクティーをオーダーした。
木嶋は、はるかと会うのは、１週間ぶりであった。　ホットロイヤルミルクティーが、はるかの元に運ばれてきた。
木嶋は、
「お久しぶり。はるかさん、元気でしたか！」はるかに、尋ねた。
はるかは、
「少し、体調を崩していました。今は、体調万全ですから安心して下さい。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「正直、今日、はるかさんが来てくれるか不安でしたよ。来なかったらどうしようかなと思っていました。」はるかに、伝えたのだ。
はるかは、
「私も、木嶋さんが来てくれるか不安でした。バレンタインデーでチョコレートを渡したまではいいのですが、ホワイトデーでお返しを戴いたことは、一度もなかったのです。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「はるかさん、クラブ『H』では、人気あるし、X-ｍａｓや誕生日などは、プレゼントを抱えて帰っていそうだと思うんだ。」はるかに、伝えたのだ。

はるかは、
「私は、人気なんかありませんよ。働いている時間が短いから他の人から比べたらまだまだですよ。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「そんなものですかね。」はるかに、話していた。
はるかは、
「そんなものですよ。」木嶋に、言葉を返したのだった。
木嶋が、
「ここを出て、ホワイトデーのプレゼントを見に行きましょう。」
はるかに、声をかけた。
はるかは、
「そうですね。行きましょう。」木嶋が席を立ち、はるかが、あとから立ち上がりカフェレストラン『F』のドアを開けた。
木嶋は、
「どこに行くの？」はるかに、尋ねた。
はるかは、
「相鉄ジョイナスの方に、ブランド品が置いてショップがあるので、そこに行きたいです。」木嶋に、歩きながら話していた。
木嶋は、
「そこに行きましょう。」はるかのあとを、歩いて行ったのだ。
はるかが、先に、ブランド物が置いてあるショップに着いていた。
木嶋は、姉がいる。ブランド品の名前を聞いていたが、木嶋自身も多少なりとも見たり聞いたりはしていたが、
「カルチェ、レノマ、ＧＵＣＣＩ、ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ、ＣＯＡＣＨ」
色んなブランドの名前を、はるかは、木嶋に、教えてくれたが、段々と、思考回路が混乱してきたのだった。
木嶋は、
「こんなに、色んなブランドの名前があるなんて知らなかった。」
はるかに、話したのだ。

はるかは、
「木嶋さん、私が、教えますからね。」木嶋に、話していた。
木嶋は、
「これを機会に、はるかさん、教えて下さい。」はるかに、頭を下げたのだった。
はるかは、いやな顔をせずに
「いいですよ！」気さくにＯＫしてくれたのだった。

第２１話

はるかは、ブランド品が置いてあるショップの中に入って行く。
そう言えば、この近くのショップでは、Ｘ'ｍａｓプレゼントを買いに来た記憶が鮮明に残っていた。
木嶋は、
「はるかさん、この近くで、誕生日プレゼントを買ったよね！」
はるかに、聞いたのだ。
はるかは、
「そうですよ。この近くのショップでプレゼントを買いましたよ。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「見慣れたショップだと思いましたよ。前回は、角の店でしたよね。この通りの裏に、まだ、ショップがあったなんて知りませんでした。」物知りなはるかに、驚いたのだ。
はるかは、
「私は、時間があるときは、横浜に出て来てウインドーショッピングを謳歌しています。だから、色んな店を見て回っているのです。」木嶋に、伝えた。
木嶋は、そんなはるかに好意を持つのであった。
木嶋は、はるかに、商品を見ている間、店の外で口笛を吹きながら想いに更けていたのだった。
そんな時、携帯の着信音が、
「プルッ、プルー、プルー」鳴り響いている。麻美からのメールだった。
「木嶋さん、富高さんと待ち合わせの時間を決めたのでしょうか？」
木嶋は、
「まだ、決めていないんですよね！来週ぐらいに決めて連絡をし

ようかと思っていたのです。今、はるかさんとデート中です。」麻美に、メールを返したのだ。

麻美は、

「分かりました。来週までに、決めて下さいね。はるかさんとデートするのはいいですが、物を買ってはダメですよ。色んな人から貰っているので、木嶋さんでなくてもいいんですよ。」木嶋に、メールが送信されて来たのだった。

木嶋は、

「了解しました。はるかさんに物を買わないようにします。」麻美に、メールを返したのだった。

麻美は、

「クラブ『P』に来た時に、はるかさんの話しを聞かせて下さいね！」顔文字入りで、木嶋にメールを送信してきたのだ。

木嶋は、

「麻美さんの店に、行った時、話しをしますね。」麻美に、メールに返信した。

麻美とのメールの話しが終わり、１０分ぐらいたった時、はるか専用の着信音が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いている。

どうやら、買う商品が決まったみたいである。

木嶋は、近くの店に歩いて行く。

「はるかさん、商品は見つかったのかな？」はるかに、尋ねた。

はるかは、

「これにしようかと思いますが、いかがでしょうか？」木嶋に、聞いている。

木嶋は、

「そのＧＵＣＣＩのポーチいいね。それにしようか！」はるかに、話したのだ。

はるかは、嬉しそうな表情で

「ありがとうございます。」木嶋に、お礼を伝えた。

木嶋は、
「喜んで戴ければいいですよ。自分にとっては、初めてのホワイトデーのプレゼントが、はるかさんで良かったですよ。」はるかに、照れくさく話していた。
はるかは、
「私も、ホワイトデーのプレゼントを木嶋さんから戴けたことが嬉しいです。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「その辺りの、カフェでコーヒータイムにしますか?」はるかに、聞いたのだった。
はるかは、
「そうですね。カフェに入りましょう!場所を探して来ますので待っていて下さい。」木嶋に、声をかけて
「カッ、カッ、カッ」ヒールの音を響きかせながら、カフェを探しに行ったのだった。
木嶋は、はるかが、カフェを探しに行っている間、待ち時間が長いと退屈してしまうので、東急ハンズに行って、商品を見るのも良いかな…?と思ったのだった。
そろそろ動こうと思い始めたら、はるかからの着信音が、
「ピローン、ピローン、ピローン」携帯が鳴り響いている。
木嶋は、はるかからの電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「はるかです。木嶋さん、今、どこにいますか?」はるかが、聞いている。
木嶋は、
「先ほどの、場所から動いていないよ。東急ハンズに行こうと考えていたよ。」はるかに、伝えた。
はるかは、
「お待たせしてすいません。以前、木嶋さんと入ったカフェショップ『Y』にしようと思いますがいかがでしょうか?」木嶋に。聞

いたのだ。
木嶋は、
「分かりました。そちらに向かいます。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「そちらで、お待ちしています。」木嶋に伝えて電話を切ったのだった。
木嶋も先ほどまでいた場所から
「ズッ、ズッ、ズッ」スニーカーの音が、地下から階段を上がって行く。ファーストフード近くのカフェショップ『Y』に歩いて行くのだった。

第２２話

木嶋は、はるかに指定されたカフェショップ『Ｙ』に入った。１Ｆのフロアを見渡したが、はるかの姿が見えなかった。階段を上がり、２Ｆのフロアを見渡した。はるかが、奥の窓際の席に座っていた。

木嶋は、はるかに声を掛けながら席に座ったのだ。

「はるかさん、お待たせしました。」

はるかは、

「待ちくたびれましたよ。」笑いながら、木嶋に話していた。

木嶋も、思わず苦笑いをしていた。

はるかは、

「木嶋さん、先ほど、誰とメールをしていたのですか?」木嶋に、聞いた。

木嶋は、

「はるかさん、良くメールしていたなんて分かりましたね。麻美さんとメールをしていました。

はるかは、

「判りますよ。木嶋さんに声をかけたのですが、聞こえなかったみたいで、誰とメールをしているのかな?と、私は、うしろからコッソリ見ていましたよ。」木嶋に、話したのだ。

木嶋は、

「コッソリ見ていなんて気付かないよ。そういう時は、声をかけて下さい。焦るじゃないの?」はるかに、話した。

はるかは、

「木嶋さんを、麻美さんに捕られたくないですよ。」木嶋に、伝えたのだ。

木嶋は、

「自分も、はるかさんにそんなことを言われると嬉しいね!麻美

さんは、バツイチで子供がいるからね。」はるかに、伝えたのだ。
はるかは、
「そうなんですか？麻美さん、子供がいるんですか？私は、かなりのわがままです。同年代と話しているより、年上の人と話していた方がいいのです。」木嶋に、伝えたのだ。
木嶋は、
「正論かも知れないね。クラブ『H』の客層は、自分が富高さんと飲みに行くと、たまたまかも知れないが、年配の方は見るが、若い人たちは見ないからね。」はるかに、話したのだ。
はるかは、
「木嶋さんも、そう思いますか？クラブ『H』にいると、その人たちと接している機会が多くなってしまうのです。」木嶋に、話していた。
木嶋は、
「いずれ、社会に出るのですから若いお客さんが来た時は、話しをして見るのもいい機会だと思いますが…。なかなか、そう言う機会に合わないかも知れないね。」はるかに、話したのだ。
はるかは、
「そうですね。若い人についたら話しをしてみます。」木嶋に、話したのだった。
木嶋は、腕時計を見た。時間は、午後６時３０分頃になろうとしていた。
「はるかさん、今日は、クラブ『H』に出勤ですか？」木嶋は、はるかに、聞いていた。
はるかは、
「今日は、クラブ『H』に出勤です…。木嶋さんとのデートを楽しみたいのが本音ですよ。」木嶋に、伝えた。
はるかは、
「電話をして来ますね。」木嶋に、声をかけて、席を立ち外に出て行った。

木嶋は、思案していた。
「何を電話しに行ったんだろう。」
少しして、はるかが木嶋の席に戻って来た。
「はるかさん、どこに電話して来たのですか…？」木嶋は、はるかに聞いていた。
はるかは、
「今、クラブ『H』に今日、体調不良で休みますと電話して来たのです。」木嶋に、伝えたのだ。
木嶋は、
「はるかさん、欠勤になりますよ。、給料から引かれるでしょう。いいんですか？そんなことをして…。」はるかに、話したのだ。
はるかは、
「今日は、行く気分になれないんですよ！木嶋さんとの一緒にいた方が楽しいですから…。限られた時間を有効に使いたいです。」
木嶋は、
「今日は、気をつかわせて申し訳ないね。ゆっくりして行きましょう。自分も、時間は空けてあります。このあとは、どちらに行きますか？」はるかに、聞いていた。
はるかは、
「高島屋で買い物をしたいのですが…木嶋さんは、どうなされますか？」木嶋に、聞いた。
木嶋は、
「東急ハンズに寄りたいな！見ているだけでも楽しいからね。その中で、自分で欲しい物があれば買いますよ。」
はるかは、
「私も、東急ハンズで欲しい物があるので、一緒に買ってきて頂けませんか？」
木嶋は、
「いいですよ。東急ハンズに着いたら、連絡をしますからね！」
はるかに、話したのだ。

はるかは、

「分かりました。連絡を下さいね。そろそろ、こちらを出ましょう！」木嶋に、声をかけて席を立った。

木嶋は、会計カードを持ち、１Ｆまで降りて行ったのだった。

はるかと木嶋は、コーヒーショップ『Ｙ』から高島屋と東急ハンズに分かれて歩き出したのだった。

第２３話

はるかと別れた木嶋は、東急ハンズに歩いていた。
木嶋は、東急ハンズに行く機会はあまりなく、地元にはない。
店内を見渡し、仕事で使う道工具を見ていた。
携帯の画面を見ると、アンテナ部分が圏外になっていたのだ。
木嶋は、
「ここは、携帯が通じないのか?参ったな!（ＤＯＣＯＭＯ）なら通じるのかな?」呟いていた。
木嶋の携帯は、（Ｊ－ＰＨＯＮＥ）だったので通じなかったのだ。
木嶋は、自分自身に言い聞かせながら時間(とき)が過ぎて行く。
どれくらい経ったのだろうか?左腕にしていた腕時計で時間を見た。すると、１時間が経過していたのだ。
店の外に出た木嶋は、はるかに電話をしたのだった。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している音が聞こえる。
はるかが、電話に出た。「木嶋さん、どこにいるのですか?何回も電話をしたのですが、通じませんでした。」
木嶋は、
「自分の携帯は、東急ハンズの中では電波が届かずに圏外になっていました。今は、外に出て話しています。」
はるかは、
「木嶋さんは、何か欲しい物はあったのですか?」木嶋に、聞いていた。
木嶋は、
「会社で使う道工具を、買いたいなと考えています。」はるかに、話していた。
はるかは、
「私も、欲しい物があるのですが、今回は、遠慮して次回にします。木嶋さん、これから夕食を食べませんか?」

木嶋は、
「そうだね。食べましょう。何にするかは、はるかさんに任せます。決まったら携帯を鳴らして下さい。」はるかに、伝えた。
はるかは、
「判りました。」電話を切ったのだった。
木嶋は、
「はるかさんとは、友達として付き合っているのはいいが、スタイルもいい、性格もいい、彼女にしたいな。」心の奥底では、いつか告白をしようと考え始めていた。
木嶋は、何年もの間、彼女を作っていない。また、陸上を通じて他の会社の人たちとの付き合いもあったが疎遠になっていた。
気がつくと、木嶋も、３０代前半である。結婚願望は若いときからあったのだ。
中学を卒業して、今の会社に、居ながら夜間高校に通った。学校の後輩と付き合っていた時期はあったが、長続きはしなかった。木嶋自身も、いつかは、彼女が見つかるはずと、楽観的に考えていたのだった。
会社の研修などで、出会いもあったが、消極的な性格が災いをしてしまって、押さなければいけないのに、引いてしまったのだった。
人には、【チャンス＝好機到来】と捕らえることが出来るか出来ないかの違いで、運命が決まってくると思っていたのだった。
悲しいことに、木嶋には、【チャンス】があったにも関わらず、それをモノにすることが出来ない自分に、苛立っていた。
木嶋は、クラブ『H』に仲間と行った日、《麻美》が木嶋の席に、最初は座ったが何故か？【インパクト】が薄く、あとから、座った《はるか》に強烈な【インパクト】が残っていたのだった。
木嶋は、会社の最寄り駅近くで飲みに行っても、はるかほどの残像が残る人は、今まで居なかったのだ。
はるかへの思いが強くなり始めても、不思議はなかった。
木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴っている。はるかからだった。
「木嶋さん、お待たせしてすいません。どこで食べましょうか？」
木嶋は、
「どこでもいいよ。」はるかに、言葉を返した。
はるかは、
「魚が食べたいので、いつも入るカフェレストラン近くにあります魚料理の『U』にしませんか！」木嶋に、問い掛けた。
木嶋は、
「いいよ。そこにしましょう。」魚料理の『U』に向かった。
木嶋が、先に暖簾（のれん）をくぐり、２Ｆに上がり、テーブル席に座り、店員さんに、
「２人ね。」と声を掛け、はるかに電話をした。
「２Ｆにいるよ。」木嶋が電話で、はるかに伝え、はるかが、来るのを待っていた。
木嶋から少し遅れて、はるかが上って来た。
「凄い人だね。」はるかが、木嶋に言ったのだ。
木嶋は、
「自分も、店に入って、人の多さに驚いたよ。メニューを見て、好きな品物をオーダーしていいよ。」
はるかは、
「ありがとうございます。お寿司と焼き魚が食べたいのでオーダーしてもいいですか？」木嶋に、尋ねた。
木嶋は、
「了解しました。焼き魚は、ホッケでいいかな？自分は、刺身をオーダーします。」店員さんを呼び、はるかと木嶋のリクエストをオーダーしたのだった。
料理が、運ばれて来た。程よい味付けと寿司が美味しかった。
２人は、満面の笑みを浮かべながら食事をするのであった。
木嶋は、はるかと一緒にいることが最高の時間（とき）だと思っていたの

であった。

食事が終わり、はるかが、

「木嶋さん、そろそろ帰りませんか?」木嶋に、話した。

木嶋も、

「はるかさん、帰りましょうか!」はるかに、伝えた。

帰り支度をして、木嶋は、会計カードを持ち、はるかは、ホワイトデーのプレゼントを大切に右手で持って、魚料理『U』の暖簾(のれん)から出て、雑踏の中に2人は、横浜駅に歩き出したのであった。

第２４話

はるかとのデートを堪能した木嶋は、翌週になり、会社の昼休みに富高さんの元に、向かった。

「富高さん、何時をメドに、麻美さんの店、クラブ『P』に行きますか？」木嶋は、富高さんに、聞いていた。

富高さんは、

「そうだね～、何時頃にしようか？いつもぐらいの時間に行くって、麻美さんに、言っておいてよ。」木嶋に、伝えた。

木嶋は、

「じゃあ、麻美さんに伝えたおくからね。」富高さんに、話して自分の職場に向かった。

木嶋は、珍しくその日に、連絡を麻美に入れたのだ。

「麻美さん、月末週の金曜日は、午後８時ぐらいにクラブ『P』に行きます。」麻美に、電話した。

麻美は、

「分かりました。金曜日にクラブ『P』に来る時、連絡下さい。」木嶋に、電話口で話していた。

木嶋は、

「了解しました。」麻美に言いながら、右手を敬礼ポーズで電話を切ったのだ。

麻美に会う金曜日になった。

木嶋は、

「麻美さんには、はるかさんとデートしたと言う話しはメールで答えたが、プレゼントを買ったって言わない方がいいよね？」富高さんに、話し、メールの内容を見せたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、麻美さんのメールでも書いてある通りだよ。プレゼントを買ったって言ったら、マズイと思うよ。」木嶋に、話していた。

「やっぱり、そう思うかな?麻美さんには、今回だけと強調しようと思います。」木嶋は、富高さんに伝えた。

富高さんは、

「木嶋君が、今回だけと言うならいいけどね。あんまり、優しくしない方がいいよ!」木嶋に、アドバイスをした。

木嶋は、

「そうかな?自分は、普通に接しているんだよね。優し過ぎるかもね。」富高さんに、話しながら自己分析していた。

木嶋は、誰にでも優しい。好意を抱いて女性に対しては、見境もなく、猛突進するも砕けてしまう。

麻美に対しては、同じ年代で話しも合うので、半分は友達感覚で接しているのがいいみたいである。

また、富高さん自身も、クラブとかに一人で行くタイプではない。木嶋との出会いは、お互いに共通の知っている上司がいて、その上司を通じて、仲が良くなり飲みに行くようになったのだった。

富高さんとの付き合いも、かれこれ5年を経過したのだった。

富高さんは、麻美と話す機会が多くなるが、何故?だろうか?

麻美のいる店に、木嶋と富高さん、二人で行くと　麻美が、その店を辞めてしまう《ジンクス》が出来つつあった。

現実的に、横浜のクラブ

「H」、関内のクラブ

「O」も、その月限りで辞めていた。

木嶋が、一抹の不安が過ぎるのも当然かも知れない。今回は、ないだろう、嫌、ないはずだと考えていた。

木嶋は、富高さんと一緒に会社のバスに乗り込み、会社の最寄り駅から、横浜市営地下鉄に乗車した。前回は、木嶋の通勤ルートだったので、今度は、富高さんの通勤ルートで関内に向かった。

「プルー」と電子汽笛が鳴り、電車が出発した。

いつものように、木嶋はら富高さんにビールを手渡した。

木嶋は、いつもなら電車内で、ビールを飲むことはない。この日

は、ビールを買ってきていて、富高さんと一緒に、ツマミを片手に飲みながら、話しをしていた。

富高さんは、

「木嶋君、珍しいね！電車内で飲むなんて…」木嶋の行動に、驚いていた。

木嶋は、

「家では、飲まないが外に出た時は、飲みますよ。飲まないイメージが定着しているのは仕方ない。」富高さんに、話していた。

電車が、関内駅に着いた。木嶋を周りを見渡し、何か？を探していた。　麻美の店に行く目印だった。

麻美が、店を移動するたびに木嶋は、事前に場所の確認をしていたのだが、今回は、それをしていなかったのだ。麻美からは、メールで話していたが、さすがに、分からずに連絡をしたのだった。

木嶋は、携帯を取り出し、麻美に電話した。

「プルッ、プルー、プルー」と呼び出している。

麻美が電話に出た。

「もしもし、麻美です。」木嶋に、答えた。

木嶋は、

「もしもし、麻美さん、今、関内駅の北口に降りました。今いち、場所の見当がつかず、判らないので教えて下さい。」麻美に、話した。

麻美は、

「分かりました。案内します。その通りを、歩いて、一本目の信号を左に曲がって下さい。曲がったら真っすぐ歩いて、５００ｍぐらいです。店の前まで来たら連絡を下さい。」木嶋に、話したのだった。

木嶋は、

「了解しました。」言いながら電話を切り、富高さんと、麻美のいるクラブ『Ｐ』に向かって歩き始めたのである。

第２５話

木嶋は、麻美に教えられた道を歩いていた。富高さんが、木嶋に、声をかけた。

「木嶋君、クラブ『P』までは近いのかな？」

木嶋は、

「距離的に、すぐ近くに来ていると思うよ。歩かせてゴメンね！」

富高さんに、話していた。

木嶋は、どうやらクラブ『P』の前まで来れたみたいである。

クラブ『P』は、このビルの2階だった。携帯を取り出し、麻美に、電話をしていた。

「プルッ、プルー、プルー」と呼び出しをしていた。

麻美が、なかなか電話に出なくて木嶋も困っていた。

木嶋は、

「困ったね！」少しばかりボヤいていた。

少し時間を置き、再び、麻美に電話をしたのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いている。麻美が電話に出た。

「木嶋君、先ほどは、電話に出れなくてゴメンね！今、どこにいるのかな？」木嶋に、聞いていた。

木嶋は、

「クラブ『P』の前にいますよ。迎えに来れますか？」麻美に、降りて来るように話しかけていた。

麻美は、

「了解しました。」と言いながら、木嶋が待っている場所に降りて来たのだった。

麻美は、

「木嶋君、富高さん、お久しぶりです。こちらにどうぞ。」木嶋と富高さんは、階段を上り、麻美の案内で、クラブ『P』に入って

いった。
店の中は、華やかなクラブ『H』や、麻美が、この前までいたクラブ『O』から比べると、少し見劣りするような感じがした。
木嶋と富高さんは、席に座り、麻美が来るのを待っていた。
麻美と一緒に、一人の女性を連れて来たのだった。
麻美よりは、若いみたいだ。
若い女性を木嶋の隣に座るように話していた。木嶋も、
「えッ」と驚きながら名前を聞いていた。
いつもの木嶋なら、若い女性が来ても喜ぶが、さすがに続くと疲れて来るのだ。来たからには、麻美と話しがしたかったのだ。麻美は、富高さんの左隣りで話していた。
木嶋は、気を取り直して右隣りに座った女性に名前を聞いた。
「名前は、何て言うのですか？」
『りん』と言います。
木嶋は、
「りんさんですね。初めまして。木嶋と言います。左隣りは、富高さんです。同じ会社の同僚です。よろしくお願いします。」りんに、話しをした。
りんは、
「木嶋さんのことは、麻美さんから聞いています。何でも同じ年代とお聞きしましたが…。」木嶋に、尋ねた。
木嶋は、
「同じ年代ですよ。ただね、『ジンクス』があるんですよ。」りんに、話したのだ。
りんは、興味本位で
「どんな『ジンクス』ですか？」聞いてきた。
木嶋は、
「富高さんと一緒に麻美さんの店に来ると、何故？か…麻美さんが、その月で辞めてしまうのです。」りんに、話した。
「麻美さん、そうなんですか？」りんは、富高さんの左隣りにい

た麻美に尋ねていた。
麻美は、
「そうなんですよ。富高さんが一緒に来ると、不思議とその店を辞めてしまうのです。」りんに、話していた。
木嶋は、
「自分が思うのは、麻美さんに『堪え性』がないと思います。移動するたびに付いていくのは大変だよ。」りんに、話していた。
りんは、
「そうですよね！麻美さんが移動するたびに、付いていく大変さは理解します。移動し過ぎですよ。麻美さんは…。」麻美に、話していた。
木嶋は、
「もっと、言っていいよ。」りんの左隣り横に座っている木嶋が、囁し立てている。
木嶋の左隣りにいた、富高さんは、
「それは、言えているよ！」りんの話していた言葉に同意をしたのだった。
麻美は、
「私も、いけない部分もあるね。自分が働いていて店の雰囲気が合わないから辞めてしまうのです。いずれ自分のお店を持つ予定で頑張ります。」りんと木嶋、富高さんに話していた。
３人とも、首を縦に振りながら期待と不安が、５０／５０だと思っていた。
富高さんが、
「また、このクラブ『Ｐ』も辞めてしまうんじゃないの？近いうちにね。そんな気がするんだよね！木嶋君は、どう思うかな？」問い掛けていた。
木嶋は、
「富高さんの言う通りのような気がするけどね！」麻美に、冗談半分で問い掛けていたのだった。

麻美は、
「今のところは、ここにいる予定ですよ！また、移動したら私のお客さんがいなくなってしまいますからね。」木嶋と富高さん、りんに話していた。
3人は、
「ハハハ」と笑っていたのだった。

第２６話

木嶋とりん、富高さんは、麻美が長く続くことを祈っていた。
木嶋は、
「本当に、クラブ『P』に長くいるのだろうか？」半信半疑であった。
りんは、少し表情が冴えない木嶋に声を掛けた。
「木嶋さん、どうなされたのですか？」
木嶋は、
「麻美さんのことを考えていたんだ。ここに、長くいることが出来るのかってね！」りんに、話したのだ。
りんは、
「麻美さんのことは、麻美さん自身が考えるのであって木嶋さんが悩んでいても仕方ないので、今日は、パァーと飲みましょう。」
木嶋に、問い掛けていた。
木嶋も、明るいりんに促されて、
「それもそうだね。悩んでいても仕方ないか！パァーと飲みましょう。」りんに、話し飲み始めたのだった。
木嶋の左隣りにいる富高さんは、麻美と話していて盛り上がっていたのだった。
りんは、木嶋に問い掛けた。
「木嶋さん、彼女はいるのですか？」
「彼女と言うより、仲の良い女友達ならいますよ。前に、麻美さんがいた店の女性ですけどね。」りんに、話していた。
りんは、
「麻美さんは、横浜西口のクラブ『H』にいたんですよね。そのクラブ『H』の女性ですか？」木嶋に、聞いていた。
木嶋は、
「そうです。クラブ『H』の女性ですよ。」

りんは、
「可愛いですか?」
木嶋は、
「はるかさんは、可愛いかね?」左隣りに座っていた富高さんと麻美に聞いていた。
富高さんは、
「自分は、1回しか会ったことがないですけど可愛いと思いますよ。麻美さんも、そうですよね。」麻美に、問い掛けていた。
麻美は、
「木嶋君が付き合っている、はるかさんは、可愛いですよ。若いからわがままじゃないかな?と思うよ。実際のところは、木嶋君が一番、分かるはずですよ。」木嶋に、話していた。
木嶋は、
「麻美さんが話している通りです。若いからブランド品に目がないのは、事実ですね。自分的に言えば少し年齢が離れた妹だと思っていますよ。プライベートで一緒にいる時間は、余りないけどね。」りんに、話していた。
りんは、
「はるかさんと言う女性は、いくつぐらいですか?」木嶋に、尋ねた。
木嶋は、
「はるかさんは、確か…まだ、10代後半。」りんに、話した。
りんは、
「え〜、そんなに若いの…20代前半ぐらいと思っていたよ。」驚きを隠せずにいた。
木嶋は、
「そうかな?そんなに驚くことでもないと思うよ。」りんに、話した。
りんは、
「若いからブランド品に目がないのは分かります。気をつけない

と高額な物を要求されますよ。」木嶋に伝えたのだ。
「自分には、姉が若いときにブランド品を良く買っていたからね。一時のブームだと思うよ。」木嶋は、りんに話していた。
「木嶋君が、そこまで理解をしているならいいけどね。付き合っている期間はどれくらいなのかな?」りんは、木嶋に聞いた。
木嶋は、
「付き合っていると言うより友達付き合いですから期間は、まだ半年もいかないでしょう。出会ったのは、去年の１１月ですよ。」
りんに、話したのだった。
りんは、
「まだ、半年も経たないんだね。私も頑張れば友達になれるのかな?」
木嶋は、
「頑張ればなれると思うよ。」りんに、話したのだ。
「じゃあ、私も頑張ろう。」りんは、高らかに宣言した。
木嶋は、りんの左隣りで苦笑いをしたのだった。　りんが、席を立ち、トイレに行ったのだ。木嶋は、その時間を利用して思いに更けていた。
りんは、ハキハキした性格であった。今の木嶋は、色んなタイプの女性と出会う機会が多くなっているが、頭の中は、『はるか』の存在が大きくなっているのも事実である。
木嶋は、『麻美』とは、友達の付き合い。『玲』は、高校時代の同級生、『りん』とどのようにして接していけば良いか。
「いくらなんでも、３店舗を梯子(はしご)するのは難しい。何処を拠点したらいいんだろう?やっぱり横浜かなぁ～。」頭を捻りながら、悩んでしまったのだ。
「今、結論を出すよりもみんなの店に行った時に有意義に過ごそう。」木嶋は、そう思ったのだ。
りんが、トイレから戻って来て、木嶋に、
「何か良いことでもあったの?彼女から連絡が入ったのかな?」

木嶋に、突っ込みを入れた。
木嶋は、
「連絡はないよ。今日は、麻美さんの店に、行く話しはしてあります。」りんに、言葉を返したのだった。
りんは、
「はるかさんは、理解をしているんだね。木嶋君が、麻美さんの店に行くことを…。」木嶋に、聞いたのだ。
木嶋は、
「いきなり電話が来て、『今日、店に来れない?』って言われるよりはいいですよ。麻美さんとの約束もありますからね。」りんに、話したのだった。

第27話

りんは、

「そうだよね。いきなり『お店に来て』と言われるよりは、予定を教えた方がいいよね。」木嶋に、話したのだ。

木嶋は、

「そうですよ。そうだ。りんさん、差し障りないなら連絡先を教えて頂きたいと思いますがいいですか？」りんに、問い掛けた。

りんは、

「木嶋さんには、はるかさんがいるんでしょう！私の連絡先を交換しても意味がないんではないですか？」

木嶋は、

「はるかさんとは、友達としての付き合いですから、りんさんの連絡先を入れていても大丈夫ですよ。聞かれたら『キチン』と答えますよ。」りんに、話した。

りんは、

「麻美さんに、確認してもいいですか？木嶋さんは、麻美さんのお客さんでもあるので…。」

木嶋は、

「麻美さんに、確認してもいいですよ。麻美さんがＯＫ出したら連絡先を交換してくれますか？」りんに、尋ねた。

りんは、

「麻美さんが、ＯＫ出したら連絡先を交換しますね。チョット待っていてくれますか？」

木嶋の元を離れて、富高さんの左隣りにいた麻美の側に座り、２人で耳打ちしながら、りんは、再び、木嶋の右隣りに座ったのだった。

りんは、

「木嶋さん、麻美さんと話したのですが、交換してもいいと言う

ことなので、連絡先を教えて下さい。」木嶋に、伝えたのだ。
木嶋は、
「麻美さんが、ＯＫ出してくれたことに感謝しなければなりませんね。りんさんに、番号を教えますね。」
木嶋は、携帯に登録している情報を、りんの左手に預けたのだった。
りんは、自分の携帯を右手で操作しながら、左手に、木嶋から預かった携帯画面を見ながら、登録をしていた。
りんの携帯に登録を終えた木嶋の携帯を、返したのだった。
りんから、戻ってきた携帯を右手に持ちながら、
木嶋は、
「りんさん、自分の携帯に電話をして下さい。」りんに、お願いをしたのだった。
りんは、
「今、電話を掛けますね。」
「プルッ、プルー、プルー」
木嶋の、携帯が鳴っていた。
木嶋は、
「ＯＫ。番号が来ました。名前は、りんさんで、いいですよね。」
りんに、同意を求めたのだった。
りんは、
「りんで、いいですよ。」木嶋に、言葉を返した。
木嶋は、携帯を右手に持ち、先ほどの、着信履歴から登録をしたのだ。
登録を終えた木嶋は、何故か清々しい気持ちになっていた。
「りんさんと仲良くなれたのは良かった。」そう感じたのだ。
木嶋は、りんに、左隣りにいる会社の同僚、富高さんのことを話し始めた。
「りんさん、富高さんは、千葉から通勤していますよ。」
りんは、

「えっ、そうなんですか?富高さんは、千葉から来ているんですか?」

木嶋は、

「確か千葉の船橋市ですよ。」りんに、伝えたのだ。

「船橋市と言うと結構、遠くないですか?」りんが、木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「船橋は、遠く感じるのは仕方ないね。東京ディズニーリゾートに、一度も行ったことがないみたいだよ。」

「それは、本当ですか?」りんが、木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「本当ですよ。冗談と思うなら富高さんに聞いてみて下さい。」

りんは、富高さんに、住んでいる所を確認して下さいと促したのだった。

りんは、木嶋の左隣り横に居る富高さんに、尋ねた。

「富高さん、東京ディズニーリゾートに一度も行ったことがないのは、本当ですか?」

富高さんは、

「本当ですよ。近すぎて行かれないと言った方がいいかな!」

富高さんの左横にいた、麻美は…りんに、

「りんさん、今どき、珍しいよ。東京ディズニーリゾートに行ったことはないのはね…。行こうと話していますが、実現しないのです。」りんに、話したのだ。

りんは、

「じゃあ、麻美さんも含め、4人で一緒に行きましょうよ!」富高さんに、問い掛けていた。

富高さんは、

「じゃあ、機会があれば一緒に行きましょう。もちろん、木嶋君も行くよね!」りんと、麻美、木嶋に話したのだった。

3人共、声を揃えて

「行くよ！」ＯＫを出したのだった。

第２８話

木嶋は、麻美とりんに、「東京ディズニーリゾートに行く日は、いつにしましょうか？」問い掛けをしたのだ。
麻美は、
「りんさん、いつにしますか？」
りんは、
「そうですね～。いつにしましょう？少し、時間を頂きたいと思います。麻美さんの予定もあると思うので、それを考慮して決めませんか？」麻美に、話したのだ。
麻美も、
「そうだね～。私自身の予定を見てから、りんさんに連絡をしますね。その後で、木嶋さんにメールをしますね。」木嶋に、話した。
木嶋も、
「２人の予定が決まったら、富高さんと相談します。皆さん、よろしいでしょうか？」麻美とりん、富高さんに同意を求めた。
３人は、
「ＯＫです～。」声を揃えて言った。
木嶋は、クラブ『Ｐ』にある壁時計を見ると、時計の針が午後１１時を過ぎようとしていた。
木嶋は、富高さんに《シグナル》を出したのだ。
《シグナル》とは、富高さん自身、携帯を持っていないので、ある程度の時間計算を木嶋が携帯で確認をしていたのだ。
これが、木嶋と富高さんの飲みに行く行動スタイルであった。
木嶋は、
「富高さん、そろそろ帰りましょうか？」富高さんに、伝えたのだ。
富高さんは、
「あっ、そんな時間なの？もう少し、飲んでいたい気分だよ。自

分も、明日は、朝、早くから【釣り】に出かけるから帰ろうか！」
木嶋の意見に、同意をしたのだった。　麻美を呼び、両手でバツ印のサインを出したのだ。
隣にいた、りんが、
「木嶋さん、もう帰ってしまうのですか？」木嶋に、声をかけた。
「自分としては、まだ、クラブ『P』にいたいですが、富高さんが、帰れなくなってしまうので…。」木嶋は、りんに話したのだ。
りんは、
「そうですね～。富高さんの住んでいる場所は、千葉県の船橋なんですよね！今から帰る電車はあるのですか？」
木嶋は、
「先ほど、携帯で調べましたら関内駅から京浜東北線で秋葉原乗り換えでいいみたいだよ。」りんに、話しながら左隣りの富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君は、いつも調べてくれるんですよ。自分が帰れるように配慮して頂いているよ。結構、助かっています。」木嶋に、話したのだった。
木嶋は、
「自分のワガママで飲みに行くのを付き合って頂いているので、これくらいしないと悪いですよ。」りんと、富高さんに話したのだ。
麻美は、
「木嶋君、これが明細ね。」会計明細を、木嶋に手渡した。
木嶋は、渡された明細を見て、冷静さを装いながら富高さんに、右手で指を2本のサインを出した。
富高さんは、
「木嶋君、それで大丈夫なの？」木嶋に、尋ねた。
木嶋は、
「大丈夫。」富高さんに、声をかけたのだ。
財布からお金を取り出し、富高さんから預かったのと一緒に、麻

美に渡したのだ。
麻美は、
「領収書は要るかな？」
木嶋は、
「要らないよ。ボトルの名札は、２人の名前を入れておいてね！」
麻美に、お願いしたのだった。
麻美は、
「２人の名前を書いたからね。」木嶋と富高さんに伝えたのだ。
木嶋と富高さんは、声を揃えて
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！」と言ったのだ。
会計を終えて、お釣りを麻美から貰う。金額を確認した木嶋は、
側にあったお互いの荷物を持ち、席を立ったのだ。
木嶋と富高さんが、部屋を出て通路を歩きながら、店の外に出た。
麻美は、
「今日は、ありがとうございました。関内駅の方は木嶋君、分かるかな？」木嶋に、問い掛けた。
木嶋は、
「分かります。店に来る時に、歩いて来た道を戻ればいいと思っているので…。」麻美に、話したのだった。
麻美は、
「判っていれば問題ないからね！気をつけて帰って下さい。りんさんと、予定を擦り合わせて、木嶋君に連絡をしますからね。」木嶋と富高さんに、話したのだ。
木嶋と富高さんは、関内駅方面に歩き始めた。振り返りながら麻美とりんが手を振っていたので、手を上げたのだった。
木嶋と富高さんは、関内駅に着いた。改札を通り、東京方面のホームに立ったのだ。
「木嶋君、今日は楽しかったね！」富高さんが、木嶋に話しかけた。
木嶋は、

「富高さんが、楽しんで頂ければＯＫですよ！また、行きましょう。麻美さんが居ればですけどね…。」富高さんに、話したのだ。

富高さんは、

「そうだね。居るか、居ないかは、麻美さん次第だよね。」木嶋に、話していた。

電車が入り、ドアが開き、木嶋と富高さんは、

「プルー」と発車ベルが鳴り響く関内駅をあとにした。

第２９話

麻美とりんに、出会ってから時間が過ぎていく。そんな中で、木嶋は、はるかが、クラブ『H』に出勤する前にあったり、麻美と玲に、メールで連絡をしていた。

木嶋は、関内に2カ所、横浜に1カ所、飲む場所の《トライアングル》が完成したのだった。

木嶋は、どこに、ホームにしようかと考えあぐねていた。

木嶋が出した結論は、はるかがいるクラブ『H』だった。

何故？木嶋は、クラブ『H』を取ったのだろうか？会社からの最寄り駅からは一本で行かれる利点と交通手段というか普段の通勤で使っている路線であったのだ。

また、はるかとの出会った時の【インパクト】が強烈だったことも一理あるのであった。

木嶋には、麻美は、同年代の良き相談者みたいな感じで、玲は、同じ学校の同級生。バブルが弾けた時代を過ごし、縁があって再び、再会を果たしたのは、運命の悪戯（いたずら）なのだ。

どんなに友達との付き合いでも、同じように接して行くことが大事である。そう感じでいたのだった。

はるかと会う機会が、徐々に増えてきた。また、はるかも、木嶋に対しての警戒心が無くなってきたのも事実だった。

そんな中で、木嶋は、富高さんの元に、出掛けた。

木嶋は、

「富高さん、一気に飲みに行く場所が増えてしまって申し訳ありません。」富高さんに、謝罪をした。

富高さんは、

「木嶋君、気にしなくてもいいよ。」木嶋に、伝えた。

木嶋は、

「自分一人で、お店に飲みに行きにくいからね！」富高さんに、

話したのだ。
富高さんも、
「自分も、一人で行かないからね。木嶋君が行く時があるなら誘ってよ！予定が、空いてれば行くから…。」木嶋に、話したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。分かり次第、連絡をします。行くならボトルが切れる頃でいいよね！ボトル切れの期間は、２カ月なので、ギリギリで行けば問題ないと思います。」富高さんに、そう話したのだ。
富高さんは、
「あっそうなんだ。ボトル切れる期間は、２カ月なんだ。木嶋君が言うように、その頃にしようよ。」木嶋に、同意を求めた。
木嶋も、
「了解しました。」そう言葉を残して、富高さんの元から立ち去って行った。
木嶋には、はるかと一日、『どこかに出掛けたい。告白をしたいな！』と言う気持ちがあったのだ。
しかしながら、その一言がなかなか言えないジギルとハイドと葛藤をしていた。
木嶋は、はるかが、話しやすく気を使わないで気楽な気持ちで接していた。そんな日々が、続いていた。
はるかが、翌年、成人式を迎え、学校を卒業すると同時に就職をすると話していた。面接は、一発勝負で合格。木嶋は、はるかには、『運がツイている。』と思ったのだ。
木嶋が勤務する会社の業績も、水面下から顔を出し、一時期の低空飛行から飛び立とうとしていた。
木嶋は、
「就職するならクラブ『H』は辞めた方がいいよ。ここで頂いているお金は、一時的にいいだけであって社会人になれば、そうはいかないからね。金銭感覚を直して頂かないと…」会うたびに、はる

かに、話していた。
はるかは、
「分かった」と言いながらも木嶋に、ブランド品を買っていた。
木嶋も、それに答えていたのだった。

第３０話

木嶋は、
はるかのクラブ『H』を　ホームグランドにしていた。
麻美のクラブ『P』、玲がいるクラブ『O』の3カ所、定期的に顔を出していたのだ。
「麻美さんが、クラブ『P』を辞めるような気がする！」そんな胸騒ぎがしたのだ。
木嶋の予感は的中する。
木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」と鳴り響いた。
麻美からのメールだった。
木嶋は、携帯の画面を見た。
「今月いっぱいで、クラブ『P』を辞めます。」と携帯にメールが来た。
その内容のメールを確認した木嶋は、麻美にメールしたのだ。
「麻美さん、今月いっぱいで、クラブ『P』を辞めるの？」とメールを返したのだ。
麻美は、
「お店の雰囲気に馴染めないの！木嶋君、今月中に、クラブ『P』来ることは出来ませんか？」木嶋に、返してきた。
木嶋は、
「今月中ね～。行くとも行かないとも言えません。クラブ『P』を辞めるのはいいけど、年齢的に厳しいんじゃないのかな？富高さんに言われるよ。≪自分が、麻美さんの店に行くたびに辞めてしまう。≫ってね」麻美に、メールをした。
麻美は、
「富高さんが悪いのではないのですよ。関内にいる知り合いが、他のお店を紹介してくれると言うので、そちらに行こうと考えてい

ます。」木嶋に、メールで話していたのだ。
木嶋は、
「富高さんには、麻美さんのことを話しておきますよ。新しいお店の名前と場所をを教えて下さい。」麻美に、メール返信したのだ。
麻美は、
「分かりました。」と木嶋に、メールしたのだ。
木嶋は、麻美とのメールをしたあとに、玲に電話した。
「お久しぶりです。」
木嶋が、玲に挨拶した。
玲は、
「お久しぶり。木嶋君、元気にしていた?」
木嶋は、
「元気だよ。今日は、麻美さんのことで電話したんだ。」
玲は、
「麻美さんのこと?もしかして、クラブ『P』を辞めることかな?」木嶋に、尋ねた。
木嶋は、
「そうだよ。何で?クラブ『P』を辞めるんだろうと思ってね。玲さん、何か理由を聞いているかな?」玲に、聞いていた。
玲は、
「私には、理由は話していなかったよ。麻美さんには考えがあるんじゃないの?」
木嶋は、
「辞めるのは、いいんだが麻美さんが新しい所に行くたびに、動くのは大変だよ。」玲に、ボヤいた。
玲は、
「そうだよね。木嶋君は、麻美さんのお客さんだからね。また、近いうちにクラブ『O』来て下さい。私は、当分の間、動く予定がないから富高さんと遊びに来てね!」木嶋に、話したのだった。
木嶋は、

「会社に行ったら、富高さんに、玲さんのことは話しますね。」玲に、伝えて電話を切ったのだ。

木嶋は、翌日、富高さんの元に歩いて行ったのだ。

麻美がクラブ『P』を、今月いっぱいで辞める話しをしたのだ。

富高さんは、驚いていた。

「木嶋君、自分が麻美さんの店に行くたびに辞めているよね。自分が、行かない方がいいんじゃないの？《ジンクス》みたいで嫌だよ。」木嶋に、話したのだ。

木嶋は、

「確かに、それは否定も肯定も出来ないよね。麻美さんも、そのことに関しては気にしていたよ。あまり移動しないでほしいとお願いもしたよ！無理だろうと思うよ。玲さんが、クラブ『O』に遊びに来てと話していたんだよね。麻美さんのクラブ『P』は、どうでもいいよ。玲さんのクラブ『O』に行こうよ。」富高さんに、話したのだ。

富高さんは、

「それは、いい考え方だよね。じゃあ、行こうか！玲さんのクラブ『O』へ。」木嶋に、伝えたのだ。

木嶋は、

「今日、明日ぐらいに連絡を取ります。日にちに関しては、後日、相談すると言うことでいいですか？」富高さんに、問い掛けた。

富高さんは、

「それでいいよ。」ＯＫサインを木嶋に出したのだった。

木嶋は、

「富高さんに話して良かった！」と、安堵の表情を浮かべ、富高さんの元を離れて行ったのだった。

ホッとしたのも、束(つか)の間の休息に過ぎなかったのだ。

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴り響く。はるか専用の着信音が鳴り響いていた。

木嶋が、携帯に出た。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。お久しぶりです。元気にしていましたか?」木嶋に、尋ねていた。
木嶋は、
「元気ですよ。はるかさんの声を聞いたら、もっと元気になりましたよ。」はるかに、話したのだ。
はるかは、
「随分、嬉しいことを言ってくれますね!木嶋さん、今月、クラブ『H』に来て戴くことは出来ませんか?」木嶋に、問い掛けた。
木嶋は、
「先ほど、富高さんに、クラブ『O』に行こうと話したばかりなんだよね。」はるかに、言葉を返したのだった。
はるかは、
「クラブ『O』ではなくて、クラブ『H』にして下さい。お願いします。」木嶋に、嘆願したのだ。
木嶋も、はるかから、言われたら心が【グラグラ】と揺れ動いていた。
玲には、クラブ『O』に行く日にちを話していないのが良かったのだ。
木嶋は、クラブ『H』に行くことを決断したのだった。

第３１話

木嶋は、透かさずはるかに伝えた。
「はるかさんのいるクラブ『H』に行きますよ。富高さんには、うまく話しておきますよ。」はるかに、伝えた。
はるかは、嬉しそうに
「本当ですか?」問い掛けた。
木嶋は、
「本当ですよ。」はるかに、話した。
はるかは、
「日にちは、決まったら連絡を下さい。」木嶋に話し、
木嶋は、
「分かりました。日にちが決まりましたら、はるかさんに連絡します。」
そう言いながら、はるかとの電話での通話を切ったのだ。
木嶋は、
【やっぱり、はるかさんから電話がくると、他の店に行こうと勇気が無くなる。もっとも、クラブ『H』をホームグランドにしているのは当然かな!】心の中で呟いた。
木嶋から見れば、はるかは年齢的に若すぎると思う半面、普段から横浜で会っている時間の長短はあるが、麻美や玲よりも魅力を感じていたのだった。
木嶋は、徐々に、はるか中心で生活を送り始めていた。
そんな生活をしていたある日、木嶋が、
「はるかさん、富高さんとクラブ『H』に行く日にちを決めたのでお知らせします。日にちは、４月の会社が長期休暇に入る前日の金曜日に行きたいと考えています。」はるかに、メールをしたのだ。
木嶋が、メールをしてから時間が経過していた。
木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いている。はるかからの着信音だった。

「木嶋さんからのメールを読ませて頂きました。４月の連休前と言いますと世間ではＧＷに掛かるところでよろしいでしょうか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「そうです。世間で言うＧＷに掛かるところですよ。」はるかに、言葉を切り替えした。

はるかは、

「分かりました。」木嶋に対して理解を示して、電話を切ったのだ。

木嶋は、富高さんの元に、再び歩いていく。

「富高さん、先日の話しですが、玲さんのクラブ『Ｏ』ではなくて、はるかさんのクラブ『Ｈ』で良いですか？日にちは、４月のＧＷ前の金曜日でいかがでしょうか？」木嶋が、富高さんに問い掛けた。

富高さんは、

「日にちはいいよ。クラブ『Ｈ』は、横浜駅から近いよね。飲んで帰るのに駅から遠いと歩くのが大変だからね。木嶋君から、はるかさんに連絡をしておいてよ。」木嶋に、話したのだ。

木嶋は、

「ありがとうございます。はるかさんには、連絡を入れます。はるかさんを食事に誘ってもいいかな？クラブ『Ｈ』に３人で一緒に行くのはどうかな？」富高さんに、話していた。

富高さんも、

「いいね。食事をしようよ。待ち合わせ場所は、決めてくれれば、木嶋君と一緒に行けばいいよね。」木嶋に、問い掛けた。

木嶋は、

「そうだね。富高さん携帯を持っていないんだよね。時間と待ち合わせ場所は、はるかさんに任せればいいよ。」富高さんに伝え、

その場所から歩き始めた。
木嶋は、
「富高さんと話しました。クラブ『H』でOKです。3人で食事をしましょう。待ち合わせ場所と時間ははるかさんに任せます。」はるかにメールをしたのだった。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」はるかからのメールの着信音が鳴ったのだった。
「連絡ありがとうございます。また、食事に誘って頂きありがとうございます。」
木嶋は、
「3人で食事をする機会があまりないですからね。クラブ『H』に行くにしても少し、時間のゆとりがあるのではないですか!」はるかに、メールを返したのだった。
はるかは、
「そうですね。木嶋さんとは会う機会はあるのですが、富高さんとないですよね。時間と待ち合わせ場所は、もう少し待って下さい。」木嶋に、返信してきたのだった。

第３２話

木嶋は、

「はるかさんは、富高さんが携帯を持っていないから連絡を出来ないからね。富高さんも、一人では、クラブ『H』に行かないから…！」はるかに、メールしたのだ。

はるかは、

「木嶋さんの言われた通りですよ。金曜日の待ち合わせ時間は、午後６時３０分。場所は、後日、連絡をしますね。当日は、横浜駅に着いたら電話します。それでは、金曜日、楽しみにしていますね。」木嶋に、返信したのだった。

木嶋は、

「はるかさんと知り合って、もうすぐ半年経つのか…我ながら良く頑張っているかな？」

自分自身に言い聞かせていた。

木嶋は、

《今まで女性と半年以上、交際したことがないのだった。はるかと、長期間、交際する。》と、この時は、感じていなかったのだ。

所謂裏社会に、

はるか自身は、バイト感覚だろうが、木嶋には、印象が良くはないと思っていた。

はるかは、変わった女性である。普通は、周りに知り合いがいたら、挨拶などをすれば問題はない。

突然、席を立ち、勝手に移動してしまったり、会話などをしていても、まともに話しを聞いていない時があるため、可愛い顔をしていても不信感が芽生えてくるのも不思議ではなかった。

人は、【信頼関係で成り立つ】と木嶋は考えていた。

その信頼関係が崩れた時、どんなに仲の良い友達でも別れがやってくるものと思っていた。

そんな気持ちの中で、木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴り響いていた。
はるかからだった。
「木嶋さん、今、どちらにいますか?」
木嶋は、
「今ですか?今は、横浜駅に向かう途中ですけど…」はるかに伝えた。
はるかは、
「今、私は、友達と一緒にいるのですが、来て頂くことは出来ますか!」木嶋に、話してきたのだ。
木嶋は、
「はるかさん、友達といるのですか?行きたいのですが、楽しんでいるところを邪魔してはいけないでしょう。」はるかに、話したのだ。
はるかは、
「そんなに気を使って頂かなくていいですよ。いい機会なので来て頂けませんか?」再度、木嶋に誘いをかけていた。
木嶋は、
「自分が行けば、はるかさんが、気を使ってしまいます。友達同士で楽しんできて下さい。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「分かりました。木嶋さんの配慮に感謝致します。金曜日のことは、もう少しお待ち頂けますか?下さい。」木嶋に話した。
木嶋は、
「了解しました。」電話を切ったのだった。
木嶋は、はるかとの会話を終えた時に、
「断って良かったのだろうか?はるかの友達と会っておけば良かったかも知れない!」
後になって冷静に考えて見ると、はるかの友達と会っていればその後は変わっていたと思っていたのは、月日が経過をしていたのだ。

今の木嶋には、女性の友達で遊んでいるのは、はるかだけであった。

「はるかを失うのが怖い。」

木嶋の気持ちが変化をしていく。

「はるかが好きなんだ。」

声を大きくして、叫びたい気持ちを抑えていた。

麻美に、相談しようか?玲に、相談しようか?思案しながら結論が出ない。木嶋が、結論が出ない時は、思考回路が混乱をしている時だった。

「どうしよう!」木嶋が悩みながら出した結論は、

「何も、今、麻美さんや玲さんに話しても間接的にしかならない。クラブ『P』やクラブ『O』に行けばいい。行き詰まりを感じたら会いに行こう。」

木嶋にしては、案外?名案だったのだ。

会社の女性社員には、話しがしずらいと同時に、躊躇いもある。

麻美や玲は、木嶋とは、同年代で話しも共有出来、理解してくれると言う自負があったのだった。

第３３話

木嶋から見たら、はるかは理想に近い女性かも知れない。
【自分に無いものを持っている。】
はるかが、羨ましいと思うときがあるのだ。
どちらかと言えば、麻美は、はるかに対して批判的な意見を、木嶋には、ぶつけてくる。
麻美から見たら木嶋が、
【利用されている】と感じているからこそアドバイスをするのだった。
木嶋は、
「麻美さんの意見も大切だよな…！」思うときはあるのだ。
木嶋も、
「周りが何と言おうが、自分の信念を貫かないといけないな！」
人間である。
意志を通すことも大事だと感じていた。
はるかと一緒にいると、木嶋は、慣れもあるが、話しやすいと感じていた。
仕事で、どんなに疲れていても、はるかの顔を見ると癒されるのと安らぎを感じていた。
プライベートで、はるかと会う機会があるが、話している時間は、クラブ『H』に行くまでの間しかないのだ。
今の木嶋には、はるかの店に行く日を楽しみにしていた。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いている。
木嶋も、仕事時間中なので出れない。
イラだっていた。
「今日は、残業しているから電話には、出れないな！」携帯の側面にあるブルーライトが光っていた。

３０分ぐらい時間が経過したのだろうか！再び、木嶋の携帯の着信音が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いている。

木嶋は、

「仕事場には、携帯を持っていくが、仕事時間中は出れないからね！」はるかに、会った時に、話したことがあったのだ。

木嶋は、はるかが、理解していると思っていた。

残業時間が終わり、木嶋は、携帯を片手に取り、はるかに電話したのだ。

「プルッ、プルー、プルー」と呼び出し音が鳴っている。

はるかが、電話に出た。

「もしもし、はるかですが…。」

「木嶋です。」

「木嶋さん、何回も電話をしたのですが、何故？出て頂けないのですか…？」はるかが、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「はるかさんに、話したと思いますよ。《仕事時間中は電話に出れない》と言いませんでしたか？」はるかに、言葉を返した。

はるかは、

「あっ…ゴメンナサイ。もしかして…残業だったのですか？」

木嶋は、

「残業でしたよ。今、仕事場からロッカールームに移動中です。」

「お疲れ様でした。今日は、今度の金曜日のことで電話をしたのですよ。」

木嶋は、悪戯（いたずら）ぽく

「今度の金曜日って何かあったの？」はるかに、言ったのだ。

はるかは、

「も～、木嶋さんの意地悪。知らないからね…。」

「分かりましたよ。待ち合わせのことだよね？」はるかに、問いただした。

はるかは、
「金曜日の待ち合わせなのですが…いつも、木嶋さんと利用しているカフェレストラン『F』でいいですか?時間は、午後6時30分頃でいいですか?」木嶋に、尋ねていた。
木嶋は、
「いいですよ。富高さんには、明日、会社の昼休みに話しておきますね。カフェレストラン『F』に、男同士、中に入って待つよりも、東急ハンズに行っていますので、はるかさんが横浜駅に着いたら連絡を下さい。」はるかに話した。
はるかは、
「分かりました。そのようにして頂けますか?横浜駅に着いたら…連絡をしますね。そうすれば、スレ違いがなく会えますね。木嶋さんにも…富高さんにも…」木嶋に、伝えたのだ。
木嶋は、
「そうですよ。待ち合わせで、一番イヤなのはスレ違いですよ。」はるかに伝えた。
はるかも、理解したようで、
「分かりました。それでは、金曜日お待ちしています。」木嶋との電話を切ったのだった。
木嶋は、思ったのだ。
「はるかさん、素直で可愛いな!」
はるかの魔法に、掛かっていたのだ。
人は、好きな人が出来ると周りのことが見えなくなっていくと、
木嶋は、会社の先輩方から聞いていたのだ。

第３４話

木嶋は、照れ屋である。好きな『はるか』が、目の前に居るのに、「はるかが好きだ！」と言えばいいのに、変に、緊張してしまうのだ。

「意識しすぎじゃないのか？」人に言われたことがある。果たしてそうだろうか？

会社内では、色んな派閥があって、仲間意識が強く、木嶋が、腹を割って話す相手は、自分より年配の方々が多いのも影響している。

そんな状況の中で、出会った…はるかや麻美、玲たちと知り合えたことが、木嶋には、大きな出来事で財産なのだ。

木嶋は、いつも恐怖心に駆られていた。

なぜなら、

「いつかは、３人とも、別れるかも知れないな！はるかが先か？はたまた麻美や玲が先か？」

心の奥底では、思っていた。

それは、夜の仕事をしていれば色んな人と会うと思うと、特に、はるかは、若いのでいい人に靡いていく可能性を秘めているのだ。

木嶋は、

「はるかと、幸せになれる確率は、何％だろう？」

一人で、会社の最寄り駅から電車に乗り、

「ガタン、ゴトン」

揺られながら感じていた。

金曜日になった。

昼休みのチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響く。

木嶋の元に、富高さんが歩いてきた。

「木嶋君、今日のことなんだけど、時間は…何時ぐらいなのかな？」

木嶋は、

「待ち合わせ時間は、午後6時30分って聞いているよ。はるかさんのことだから遅れてくると思うよ。待ち時間があるから東急ハンズの中に入って店内を見ようよ。はるかさんが、横浜駅に着いたら連絡して頂くことになっているよ。」富高さんに、話したのだ。

富高さんは、

「分かりました。送迎バスは、いつもの時間だよね?」

木嶋は、

「いつもの時間です。」

富高さんは、

「了解です。はるかさんと、自分が会うのは、久しぶりだね。どれくらい会っていなかったのだろう?」木嶋に、尋ねていた。

木嶋は、

「半年ぶりぐらいじゃないかな?」富高さんに、話していた。

「そんなになるの?月日が流れるのは早いよね…。」富高さんは、驚いた表情をしていた。

木嶋は、

「たま~に…会っているから自分は、普通に思えるよ。富高さんは、携帯を持っていないからね。はるかさんから連絡が来ないのです。携帯があると便利な半面、何処にいても掛かってくるから大変だよ。仕事時間中でも鳴るからね。富高さんは、何故?携帯を持たないのかな?」富高さんに、聞いたのだ。

富高さんは、

「木嶋君が話している通りで、プライベートでも連絡がくるでしょ。何か干渉されているようでイヤだよ。」木嶋に、話していた。

木嶋の横には、大森さんは、首を縦に降っていた。富高さんの話しに理解を示していた。

大森さんが、会話に入ってきた。

「富高さんの言う通りですよ。自分なんかいつも夕食を食べている時に、木嶋さんからメールが送られてくるよ。」富高さんに、話

した。
富高さんは、
「やっぱり、そういう話しを聞くと携帯がない方がいいと感じるよ。」
木嶋は、
「携帯を持つ、持たないは個人の自由だから強制することは出来ないからね。」大森さんと富高さんに、同意を求めた。
大森さんも、
「木嶋君、良いことを言うよね。」
木嶋は、
「大森さん、当たり前のことではないですか?」木嶋の右隣りにいた、大森さんに伝えていた。
木嶋の前にいた、富高さんも納得の表情であった。
「木嶋君、じゃあ後(のち)ほど送迎バスで待っているからね。」
「富高さん、了解しました。」木嶋は、富高さんにOKサインを出した。
そのOKサインを見た瞬間、富高さんは、木嶋の元から去って行った。
大森さんは、
「今度、自分も連れていってよ。木嶋君のお気に入りの女性を見たいから…。」木嶋に、話していた。
木嶋は、
「大森さんを連れていくのはいいが、横浜だよ。富高さんと自分は、帰り道だからいいけどね。」大森さんに、話したのだった。
大森さんは、
「横浜か…帰ることを考えるとキツイかも…」木嶋に、伝えた。
木嶋も、
「今すぐ、結論を話さなくてもいいよ。時間を掛けて出して下さい。」大森さんに、話していた。

第３５話

木嶋は、大森さんとは、飲みに行くことは、以前からあったのだ。
最近は、行く機会がなかったのだ。
大森さんの家は、茅ヶ崎市であった。
茅ヶ崎市の自宅から会社への通勤手段は、原チャリである。
木嶋は、原チャリを乗ったことがないので、大森さんの原チャリを、会社内で少し乗ったりしていた。
木嶋と飲みに出かける時は、原チャリを家に置いて、路線バスやＪＲ、小田急線を乗り継いで、会社の最寄り駅まで来て、会社の送迎バスに乗り、出勤して来るのだ。
大森さんは、普段から電車を乗らないので、キップの買い方なども分からないのだ。
木嶋は、会社の最寄り駅～横浜で乗り換えるためので、横浜駅周辺ではるかと会うことは出来るのだった。
少しして、大森さんが
「木嶋君、行きたいのは山々だが、自分からみたら行くにも、帰るにも大変なので、クラブ『Ｈ』に行くことは出来ない。会社の最寄り駅近くならいいよ！」木嶋に、伝えてきたのだ。
木嶋は、
「大森さんの家が、茅ヶ崎だから横浜に行くのは大変だよね。会社の最寄り駅近くなら何回でも行く機会があるよね。会社の先輩方も誘えばいいから…。」大森さんに、話していた。
大森さんも、頷いていた。
木嶋は、大森さんの元を離れて自分の職場に戻って行った。
仕事の終了チャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っている。
仕事を終え、ロッカーで着替え終わった木嶋は、富高さんを待っていた。

富高さんが、
「木嶋君、待っていてくれたの？」
木嶋は、
「待っていましたよ。」富高さんに、話していた。
会社の送迎バスに乗り込んだ。
木嶋の後ろにいた、会社の先輩、小室さんは、
「木嶋、飲みに行くのか？」尋ねてきた。
木嶋は、
「富高さんと、横浜に飲みに出かけるんですよ。」
小室さんは、
「今度、木嶋の飲みに行っている所に連れていってくれるか？」
木嶋に、話していた。
木嶋は、富高さんと相談していた。
「今度で、いいなら行きましょう。富高さんも、ＯＫ出してますので…。」小室さんに伝えた。
小室さんは、嬉しそうに、
「ありがとう。」感謝の言葉を、木嶋に伝えていた。
木嶋は、
「来週中に、一度、小室さんの所に伺います。」小室さんに伝えた。
会社の送迎バスが、最寄り駅に着いた。
バスのドアが、エアーを立てながら、
「プシュー」と開いた。
木嶋と、富高さん、小室さんもバスから降りた。
木嶋と富高さんは、最寄り駅の改札口に向かった。
小室さんは、いつもの行きつけの店があるらしく、木嶋たちとは、逆方向に歩いて行った。
木嶋は、富高さんと一緒に富高さんが利用している通勤経路で横浜に向かった。
駅のコンコースを歩きながら、富高さんが、コンビニ前で立ち止

まる。
木嶋が、
「富高さん、泡の出るのを買いに行くのかな?」富高さんに、問い掛けた。
富高さんは、
「うん。そうだよ。」木嶋に言い、コンビニの中に入って行った。
富高さんは、いつも電車の中で飲みながら帰宅していた。
木嶋は、電車の中では飲み慣れていないので、ビールを頼まなかった。
ビールは、居酒屋とかで、《ゆっくり飲む》決めていた。何回か電車の中でビールを飲んで見たが、揺れ動いているので最後まで飲みきれないでいた。
電車に乗り、富高さんは、木嶋に缶コーヒーを手渡した。
木嶋は、
「今日は、自分のワガママで付き合って頂くのに気を使わなくてもいいのに…。」富高さんに、話したのだ。
富高さんは、
「今日は、自分にも嬉しいんだよ。」木嶋に、話していた。
木嶋は、
「富高さん、何か良いことでもあったのですか?」富高さんに、聞いてみた。
すると、富高さんは、
「はるかさんに、会えるのが嬉しいんだよね!」
木嶋は、富高さんからそのような言葉が出るとは、思わなかったのだった。
木嶋は、
「富高さんも、はるかさんが好きなのですか?」と尋ねていた。
富高さんは、
「好きではなくて、若い女性と一緒に飲めるのが嬉しいんだよ!」
木嶋に、話したのだ。

木嶋は、

「そうだよね。会社では若い女性社員たちと交流などないからね！」富高さんに、話したのだった。

第３６話

木嶋は、
「はるかさんは、若いよ。富高さんから見たら子供がいてもいい年齢かも知れません！」富高さんに、話していた。
富高さんも、
「実際には、そうなんだよね。自分に子供が居てもおかしくない年齢だよね！」木嶋に、問い掛けていた。
木嶋も、
「自分も、富高さんのことを言える立場じゃないよ。」と言い、富高さんと一緒に、苦笑いをしていた。
車内アナウンスが、
「次は～、横浜～、横浜～」アナウンスされていた。
木嶋と富高さんは、座っていた席を立ち、進行方向に対して右側のドアに立っていた。
「ピンポン、ピンポン」鳴りながら、電車のドアが開いた。
「横浜～、横浜～」
駅構内でアナウンスされていた。
階段を上り、改札口を出た。木嶋と富高さんは、地下通路を通りながら、階段を上がったのだ。
そこは、相鉄交番前の出口だった。
出口に出て、木嶋が左手にしていた腕時計で時間を見たのだ。
「午後６時過ぎか…。まだ、時間的に余裕があるかな…？」木嶋は、考えあぐねていた。
木嶋の、右隣りにいた富高さんに、
「富高さん、待ち合わせ時間にはまだ、余裕がありますが…どうしますか…？」問い掛けていた。
富高さんも、
「どうしようか…？」悩んでいた。

木嶋は、
「東急ハンズに行きたいので、一緒に行きませんか?」富高さんに、話しかけた。
富高さんも、見たい物があったらしく
「木嶋君、東急ハンズに行こうか!」軽いノリで来たので、
木嶋も、ノッて
「決定。東急ハンズに向かいましょう。」
相鉄交番前から証券会社の横を通り、橋を渡って行く。
八百屋さんの威勢の良い掛け声が聞こえていた。
「ヘイ、いらっしゃい。今日は、イチゴが安いよ!いらっしゃい!」
木嶋は、
「目の前には、大きなスーパーがあるのに、八百屋さんも頑張っているんだ。」驚きながら、感心していた。
木嶋は、自分の家の近くで、八百屋さんの手伝いをしていた時期があったので、懐かしくなっていた。
その通りを歩いていると、ファーストフード店があったのだ。
「ここのファーストフード店は、客席数やカウンターも多くて大きいなぁ〜。地元には、こんなに大きな店舗はないよ。」富高さんが、驚愕しながら木嶋に、話していたのだった。
木嶋と富高さんは、東急ハンズに着いた。
フロアガイドを確認しながら、木嶋は、道工具のフロアに、富高さんは、地下のフロアに向かって行った。
木嶋は、富高さんが携帯を持っていないので、地下のフロアから動かないように話し、お互いの目的階に足を向けた。
富高さんが、地下のフロアに行ったのには、理由があったのだ。
趣味は、釣りとテニスをやるので、これからの時期は、釣りに出かける回数が多くなるため、バーベキューで使う炭などを探していた。
釣った魚を、その場所で捌(さば)きながら、バーベキューするのは、格

別な味であった。
木嶋は、会社で使用する道工具を探していた。
道工具のフロアには、理化学用品も置いてあるため、一石二鳥であった。
なかなか自分で使う、道工具が見つからずに、木嶋はイライラしていた。
腕時計を見ると、もうすぐ、はるかとの待ち合わせ時間が、刻一刻と近づいていた。
木嶋は、道工具のフロアから富高さんがいる地下のフロアに、階段を使いながら降りていく。
木嶋が、地下のフロアにいた富高さんに、声を掛けたのだった。
「富高さん、お待たせしました。そろそろ、待ち合わせ時間になるので、場所を移動しませんか?」
富高さんは、
「えッ、そんな時間なの?もうチョット見ていたかったな!」木嶋に、不満を漏らしていた。
木嶋は、
「はるかさんを待ち合わせるのは、マズイですよ。」富高さんに、話していた。
富高さんは、
「木嶋君、また東急ハンズに来る機会があるよね!」木嶋に、問い掛けた。
木嶋は、
「まだ機会がありますよ。」富高さんに、言いながら東急ハンズをあとにしたのだった。

第３７話

木嶋と富高さんは、はるかとの待ち合わせ場所に着いた。
カフェレストラン『Ｆ』の中に入って、はるかが、来るのを待っていた。
「ガッチャン、カラーン」ドアが開いた。
はるかが、来たと思った木嶋は、振り向いた。
はるかではなかった！
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。
はるかからである。
「もしも～し、木嶋さん。今、どちらにいますか？」
木嶋は、
「今は、待ち合わせ場所のカフェレストラン『Ｆ』にいますよ。
富高さんと一緒ですよ！」はるかに話したのだ。
はるかは、
「今、横浜駅に着きました。一カ所、寄る所があるので、あと１０分ぐらいかかりますがいいでしょうか？」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「本音を言えば早く来て頂きたいが、１０分ぐらいならいいですよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「分かりました。なるべく早く行きますね。富高さんにも話して下さい。」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「了解しました。」と言いながら電話を切ったのだ。
木嶋は、
「はるかさん、一カ所、寄りたい場所があるらしくて、１０分ぐらい遅れるらしいよ！」隣にいた、富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、
「木嶋君、待ち合わせに遅れるのはどうかと思うよ。はるかさん、いつもなのかな?」木嶋に、問い掛けていた。
木嶋は、
「はるかさん、たまに、遅れて来るのはありますよ。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「たまにならいいだ。木嶋君との待ち合わせで、毎回、遅れるのはどうかと思っていたから…。自分は、はるかさんと会うのは、今回入れても数えるくらいだよね?」木嶋に、聞いていたのだった。
木嶋は、
「富高さんは、はるかさんと会うのは、今回入れても、3回ぐらいだね。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「3回しか会っていないんだね。随分、会っているように思えるよ。」木嶋に、話しかけたのだ。
木嶋は、
「富高さんが、会っている回数が多く感じていても不思議ではないよね。もっとも、はるかさんがいるクラブ『H』にいる時間が長いから当然かもね!」富高さんに、話したのだ。
富高さんは、
「木嶋君が言う通りだね。麻美さんや玲さんの店にいる時間を比べたら、駅からも近いので、クラブ『H』にいる時間が長いよね。」
木嶋は、
「駅から近いのが、一番の利点ですよ。」富高さんに、話しをいていたら、
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。用事は終わりました。今、どの辺りに座られてい

ますか！」
木嶋は、
「禁煙席に座っていますよ。店を入ったら真っ直ぐです。多分、分かるかと思いますよ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「分かりました。今からカフェレストラン『F』に向かいます。」
木嶋に、伝えて電話を切ったのだった。
木嶋が、電話を切ってから10分ぐらい経過した。
はるかが、カフェレストラン『F』に入ってきた。
はるかは、
「こんにちは。はるかです。お待たせしました。遅れて申し訳ございません。」木嶋と富高さんに謝罪をしたのだった。
いつものはるかなら、遅れて当たり前と感覚で悪びれる様子もないのだ。
今日は、富高さんが一緒なので遅れて悪いと思ったのかも知れない！
木嶋は、
「富高さんと一緒なのですから遅れたら謝らないといけないよ！」事前にはるかに話していたのだった。
木嶋は、
「富高さん、はるかさんのことが気に入ったみたいだよ。会社に、若い女性社員が身近にいないから、話しが出来るのが嬉しいみたい。」はるかに話していた。
はるかは、
「ありがとうございます。富高さんたちの会社は、若い女性社員が少ないのですか？」富高さんに、尋ねていた。
富高さんは、
「そうなんだよね。若い女性社員はいないんだ。現場にいる人は、パートの人たちだよ。」はるかに、答えていたのだ。
はるかは、

「そうですか…。」
納得した表情を示していたのだ。

第３８話

はるかは、
「良い言い方をすれば、人生経験が豊富な人たちから意見などを聞けるチャンスでは。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「はるかさんが、今、話された言葉に納得したよ。」はるかに言葉を返したのだ。
木嶋も、はるかが話したことに理解を示していた。
はるかが、時間を気にしている。
「木嶋さん、今、何時になりますか?」木嶋に、問い掛けた。
木嶋は、左手にしていた腕時計を見た。
「今、時刻は、午後7時３０分を廻ったぐらいですよ。」はるかに、伝えたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、午後7時５０分までに、クラブ『H』に出勤しなければならないので、そろそろ動きませんか?」木嶋に提案した。
木嶋は、
「富高さん、はるかさん、午後7時５０分までに、お店に入らないとダメみたいなので、動きますがいいですか?」目の前にいた富高さんに尋ねていた。
「あっ、動くんだよね。いいよ!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「それでは、動きましょう。」はるかに伝えたのだ。
会計伝票は、木嶋が持ちながら、店員さんに伝票を渡し、会計をしていた。
その間、はるかと富高さんは、カフェレストラン『F』のドアを、「ガッチャン、ガチャン」と開けて外で待っていた。
木嶋が、会計を終えてカフェレストラン『F』から出てきた。

はるかは、
「ごちそうさまでした。カフェレストラン『F』に来る途中で、クラブ『H』には、連絡を入れてありますのでご安心下さい。」木嶋と富高さんに話したのだ。
その話しを聞いた木嶋と富高さんは、
「ズルッ…と」ズッコケていた。
木嶋と富高さん、はるかと3人でクラブ『H』に行く途中にある橋を、
「カッ、カッ、カッ」と靴の音を立てながら、店に向かって行った。
木嶋は、歩きながら、
「今回は、随分と手回しが早いね！」はるかに話していた。
はるかは、
「クラブ『H』には、木嶋さんと予定を入れた時に、話しをしましたよ！遅刻をしたら罰金ですからね！」
富高さんは、
「罰金なんてあるの？」驚いた表情で聞いていたのだ。
はるかは、
「ありますよ。無断欠勤や遅刻とかあるので罰金制度があるみたいです。」富高さんに答えていた。
クラブ『H』の前にある鉄の階段を、
「カツーン、カツーン、カツーン」響きかせて上って行く。
クラブ『H』の中に入ると、
「いらっしゃいませ。」威勢のいい掛け声と共に、木嶋と富高さんは席に案内されたと同時に、はるかは、ドレスを着るために、一時的に木嶋と富高さんから離れて行った。
店員さんが、
「はるかさん、少々お待ち下さい。」木嶋に、声を掛けたのだった。
はるかが来る待ち時間の間、

「いつ来ても、華やかな店だよね。」木嶋と富高さんは話していたのだった。

富高さんは、

「いつも感じるけど、自分が、ここにいてもいいのかなと感じるんだよね。」木嶋に、話していた。

木嶋は、

「富高さんが、感じていることは自分も同感です。いくら明朗会計でも、一人で来ると不安に駆られます。正直、怖いね。」富高さんに、言葉を返していた。

富高さんは、

「木嶋君が、不安に駆られる気持ちは分かるよ。」木嶋と話していた頃に、はるかが、ドレスアップして来た。

はるかは、

「先ほどは、ごちそうさまでした。木嶋さんたちは、何の話しをされていたのですか?」木嶋と富高さんに聞いてきたのだった。

富高さんは、

「クラブ『H』に来るたびに、場違いなところにいるのではないか…と、木嶋君と話していたんだよね。」はるかに答えていた。

はるかは、

「場違いなんてことは、全然ありませんよ。木嶋さんと富高さんと一緒にいるだけで楽しいですよ。気を使わなくていいですからね。」富高さんに、言葉を返したのだ。

富高さんは、

「木嶋君、今、はるかさんが話していたことは本当の話しなの…?」木嶋に聞いてみた。

木嶋は、

「はるかさんと横浜で会う機会があるのですが、一緒にいると気を使わなくていいと、常日頃から話していますよ。変に気を使われると、こちらも意識的に固くなってしまうので…。」富高さんに答えた。

富高さんも、

「そうだよね。固くなるよりはいいよね。気を使わないと楽だよね。」木嶋に言いながら、その表情は、笑顔が浮かんでいたのだった。

木嶋とはるかは、富高さんの笑顔を見た時に喜びを感じていたであった。

第３９話

木嶋は、

「はるかさんは、先ほどの言われたように、自分たちと、一緒にいたいと言う気持ちは大切にしないといけないよね！」富高さんに、話したのだった。

はるかは、

「今、木嶋さんが話していたことが全てですよ。」富高さんに、問い掛けていた。

富高さんは、

「はるかさんも、この世界に長くいるから人を乗せることが上手いですね！」はるかに言葉を返したのだ。

「私なんか人を乗せるなんて出来ないですよ！クラブ『Ｈ』にいる時は、接客をしているので、その場の雰囲気を察知して、人なりを観てから話しているのですよ。私は、いつも、正直な気持ちを述べたのですよ。」木嶋と富高さんに話したのであった。

木嶋は、はるかの話していたことに納得したのだろうか?首を縦に振っていたのだ。

木嶋は、

「はるかさんには、クラブ『Ｈ』は横浜駅から近いから人も沢山来るし、指名も結構、多いんじゃないのかな?」はるかに聞いていた。

はるかは、

「クラブ『Ｈ』には、人気Ｎｏ．１やＮｏ．２の女性たちがいますが、彼女たちから見たら、私は、人気なんてないですよ。時給も安いですよ！」木嶋に話していた。

木嶋は、

「この世界にいたら、自分が、クラブ『Ｈ』で、Ｎｏ．１とかを取りたいと言うか…取りたいんではないでしょうか…！」はるかに

聞いたのだ。
はるかは、
「自分が、クラブ『H』にいる以上は、Ｎｏ．１を取りたいのは正直な気持ちです。前にも話しましたが、働ける時間が限られています。また、夜を専門でやっている訳ではないので、人気がなくても、ある意味では仕方ないかなと思っています。」木嶋も頷いていた。
富高さんは、
「そうだよね。はるかさんが、クラブ『H』で、働ける時間が限られているだよね。Ｎｏ．１になれなくても、木嶋君や自分がいるから何かの時は、木嶋君に話してみて欲しいな！」はるかに話していた。
はるかは、
「木嶋さん、今日は、余り発言がないですけど…今、富高さんが話していたのは、本当の話しですか？」木嶋に問い掛けたのだ。
木嶋は、
「発言してますよ。富高さんと横浜まで来る途中で話しながら来たのですよ。はるかさんの、何かの時に力になれればいいかな…と。自分たちがどこまで出来るかは未知数だよ…。無理難題を言われたら出来ないことは出来ないと言いますよ！出来ないことを出来るなんて話しをしたら大変ですからね。」はるかに話していた。
はるかは、
「私も、社会常識は、理解しているとは思いますが、まだまだ、勉強不足で、至らないかも知れませんがその時は、お願いします。」木嶋と富高さんに頭を下げていた。
富高さんは、
「頭を下げる程でもないと思いますよ。自分は、木嶋君に連れて来て頂かないと来れないからね！」木嶋に問い掛けた。
木嶋は、
「富高さんが、話した通りだよ。自分も、若い女性の気持ちが判

らないから、はるかさんが、自分たちといることで勉強になるよ。知らないことが多々あるの思いますので、その時は、教えて下さい。」富高さんと、一緒に頭を下げたのだ。

はるかは、

「何か！木嶋さんと富高さんに悪いことをしたみたい…謝罪会見みたいですね。」

木嶋と富高さん、はるかは、

「ハハハ」と爆笑していた。

木嶋は、

「いつも、バカを言っているけどね。たまには固い話しも良かったかもね！」はるかに話したら、

「ウフフ！」笑っていた。

クラブ『H』にどれくらい居るのだろう！木嶋が、左手にしている腕時計を見た。

時刻は、午後１０時を過ぎていた。

木嶋は、はるかに時間の確認をした。

「はるかさん、時間は…大丈夫なのですか？」　はるかは、

「今日は、木嶋さんたちが居ますので、午後１１時までは、大丈夫ですよ！富高さんの電車は、まだ、あるのでしょうか？」富高さんのことが心配で、木嶋に、確認していた。

木嶋は、

「富高さん、どうしますか？」富高さんに聞いていた。

富高さんは、

「木嶋君、まだ居ようよ。はるかさんも、午後１１時までＯＫみたいだからね。」木嶋に、尋ねたのだった。

木嶋は、

「チョット、調べてみます。富高さんが、無事に帰れないといけないのでね。」Ｇパンの左後ろにある携帯を取り出したのだった。

木嶋は、携帯に登録をしてある

「お気に入り」のメニューを出した。

乗換案内を出して、横浜駅～船橋駅までの終電時刻を検索をするのであった。

木嶋は、

「え～と。終電は…大丈夫だね。横浜駅を午後１１時３０分までに出れば間に合うよ。」はるかと富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、午後１１時までででいいよね！」木嶋に、尋ねていた。

木嶋は、

「午後１１時でＯＫです。はるかさんと一緒に帰りましょう！」

富高さんに伝え、はるかに、午後１１時までと話したのであった。

はるかは、

「ありがとうございます。午後１１時までに、会計を出来るようにしますね！」木嶋に話して、はるかの近くにいた、店員さんに時間などを話したのであった。

第４０話

木嶋が、再び、左腕にしていた腕時計を見た。時刻は、もうすぐ午後１１時に近くになろうとしていた。

木嶋は、

「はるかさん、そろそろチェックをお願いします。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「チェックですね。判りました。少し、お待ち下さい。」店員に、バツ印のシグナルを出したのだ。

店員さんが、はるかに、会計伝票を渡したのだ。

木嶋は、はるかから会計伝票を渡されたのだ。

会計伝票を見た木嶋は、富高さんと一緒に合計金額を確認したのだ。

木嶋は、即断で…

「折半で…いいかな！」富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「折半でいいよ。」木嶋に回答した。

木嶋は、

「金額は、指3本で…。」富高さんに、確認したのだ。

木嶋と富高さんは、お互いに財布を出し、富高さんが、お金を木嶋に預け、木嶋も自分の分と併せて、はるかに渡したのだった。

はるかは、近くにいた店員さんを呼び、木嶋と富高さんから預かったお金を手渡したのだった。

すると、店員さんから、はるかに、小さい封筒にお釣りを入れてきたのだった。

はるかから、木嶋に小さい封筒を手渡された。

木嶋は、

「今日は、自分が、クラブ『H』に誘ったのですから、このお釣

りは、全部富高さんが受けとって下さい。」富高さんに渡したのだった。
富高さんは、
「木嶋君、自分が全部、もらう訳にいかないよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「気にしなくていいよ。」富高さんに話したのだった。
はるかも、
「そうですよ。富高さんが全部、もらえばいいのですよ。遠くから来ているのですから…。」富高さんを励ました。
はるかは、富高さんが千葉の船橋から会社まで通勤していることを知っていたのだ。
富高さんは、
「木嶋君とはるかさんが言うのなら…。」木嶋から、再び、小さい封筒を手渡されたのだった。
店員さんが、はるかの元に来て、耳元で囁いていた。
どうやら、はるかの帰宅時間と木嶋たちが、店を出なければいけない時が迫っていた。
木嶋は、
「富高さん、席を立ちましょう。はるかさんが、帰る時間も迫っているし、自分たちが、動かないといけないので…。」富高さんに話したのだ。
富高さんも、
「そうだね。はるかさんも、帰らないといけないんだよね。木嶋君、帰ろうよ。」木嶋の言葉に同意をしたのだった。
木嶋と富高さんが、席を立ち上がった。
店員さんが、
「ありがとうございました。」お辞儀をしていた。
木嶋と富高さんは、
クラブ『H』の前にある鉄の階段を

「カタン、カタン、カタン」音を立て、夜の闇に響いていく。
木嶋が、階段を降りきった時に、後ろを振り返った。
はるかが、右手を振っていた。
木嶋は、富高さんと一緒に横浜駅に向かって歩いて行く。
富高さんは、
「木嶋君、気をつかわせて申し訳ないね！」木嶋に話しかけたのだ。
木嶋は、
「そんなことはないよ。前にも、話したと思いますが、富高さんが、楽しめればいいですよ。なかなか、飲みに行く機会がないですから…。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「そうだね。あまり一緒に飲みに行く機会もないよね！」木嶋と、話しながら横浜駅のキップ売り場まで来たのだ。
木嶋は、
「ここからの船橋までな交通費は…８９０円か…。」小さな声で呟いた。
木嶋は、ポケットから財布からお金を取り出し、キップ券売機に入れた。
８９０円のボタンを押し、キップを富高さんに手渡し、お釣りは、木嶋が財布に入れたのだった。
富高さんは、
「木嶋君、キップまで買ってもらって悪いね！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「どう致しまして。富高さん、どうしますか？東京駅まで、東海道線で行って乗り換えるか？ここから、総武線で帰った方がいいか？判断は、委ねますよ。」富高さんに、問い掛けたのだ。
富高さんは、
「木嶋君には、悪いがここから、総武線で帰りますよ。乗り換え

がない方が、時間的にゆとりがあるからね。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「分かりました。気をつけてお帰り下さい。」富高さんに伝え、
木嶋は、東海道線のホームに…富高さんは、総武線のホームに上がって行った。
富高さんが、乗る総武線が先に来たのだ。
「プルー」発車ベルが鳴っている。
ドアが、
「プシュー」と音を立てて閉まったのだ。
電車が、ゆっくり走り出した。
少ししてから、木嶋の乗る東海道線が来た。
「プルー」発車ベルが鳴り響いている。
ドアが閉まり、木嶋の乗った電車が、横浜駅をあとにしたのだった。

第４１話

木嶋は、富高さんとクラブ『H』に飲みに出かけてから数日が経過していた。

いつもなら、はるかから次の日にお礼のメールが来るのだが、木嶋は、連絡がないのに不安を感じていた。

「何か…あったのだろうか…？」木嶋の胸に、動悸が始まっていた。

「ドキッ、ドキッ、ドキッ」心臓の鼓動が高まって行く。

「こんなことは、あまりないのに…どうしたのだろう？」

木嶋は、そう感じていた。

中学、高校と陸上の中、長距離走をやっていた木嶋は、スタートラインに立つと、緊張感から心臓が、

「ドキッ、ドキッ、ドキッ」することはあったのだった。

その緊張感とは違う…！

木嶋は、その日、何回か…はるかの携帯に電話をしたのだ…。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音だけは鳴り響いていた。

１０回ほど呼び出しては見たが、電話に出なかった。

木嶋の不安は、募るばかりである。

会社の休み時間に、再度、電話をしたが呼び出し音が鳴るだけで出なかったのだ！

電話は諦め、メールをして返信を待っていた。

仕事をしていても、はるかのことが、気になっていた。

はるかは、何処かに旅行や出かける時は、木嶋に話していた。

今回は、そんなことは話していなかったのだ。

午後の休み時間や、残業開始前の時間にメールや着信履歴を見ても、履歴がなかったのだ。

木嶋は、その日は、家に帰って自分の部屋にいても、不安感が増して行く。布団の中で寝ていても、夜中に起きてしまったのだ。

翌日、会社に出勤したとき、木嶋の様子が、いつもと違う雰囲気が漂っていたので、上司の溝越さんが声を掛けてきた。

「木嶋、いつもの元気がないがどうしたんだ。」

木嶋は、

「最近、飲み屋の若い女友達と良く遊んでいるのですが、先日、そのお店に、富高さんと飲みに行ったのですが、いつもなら営業でもメールか電話があるのですが、それがないから不安なんですよ。」

溝越さんに話していた。

溝越さんは、

「何処かに、遊びに行っているんじゃないのか?便りがないのが元気な証拠だ。心配する気持ちは分かるが、仕事に身が入らないぞ。ケガだけはするなよ!何かあったら言って…自分で良かったら相談に乗るから…。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「言う通りですね。便りがないのが元気な証拠ですね。何かあったら相談をさせて頂きます。その時は、宜しくお願いします。」溝越さんに頭を下げた。

溝越さんは、

「分かった。」理解を示し、木嶋の元から離れて行ったのだ。

木嶋は、

「溝越さんに迷惑をかけてしまったかな?携帯を置いて遊びに行くのかな…?」複雑な気持ちになっていた。

夕方になり、木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が鳴り響いている。

木嶋は電話に出た。

「私です。はるかです。何回も電話やメールを頂いて申し訳ございません。ご心配をおかけしました。」はるかの元気な声だった。

木嶋は、

「はるかさん、どうしたのですか?いつもならメールとか電話が

くるのに来ないから心配しましたよ。」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「クラブ『H』から家に帰る時に、携帯をタクシーの座席に置いてきてしまったのです。そのために連絡が出来なかったのです。」
木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「タクシーの中に忘れてきて携帯の中にある個人情報は大丈夫だったのですか?」はるかに、問い掛けた。
はるかは、
「着信は鳴りますが、他人が、操作出来ないように、キーロックをしてあり、暗証番号を入れないと作動しないのです。」
木嶋は、
「それならいいですよ。携帯には、個人情報が入っているので次から気をつけてね。それにしても良くタクシー会社や携帯が有ったね。」木嶋は、はるかに聞いていた。
はるかは、
「乗車したタクシー会社とナンバーを記憶していたので、直ぐに電話をしたのです。もちろん、携帯会社に連絡をしようにも出来なかったのです。」木嶋に説明したのだった。
木嶋は、
「あまり、心配を掛けさせないでね。不眠症になりそうだったよ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「申し訳ない。次から携帯の管理は気をつけますね。木嶋さん、今週か来週中に空いている日にちはありますか?」
木嶋は、
「今週か来週中でしたら、どちらも週末の金曜日ならいいですよ。金曜日なら残業はないですから…。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「分かりました。今週か来週中に、空いている時間を調べて連絡

をします。」
木嶋は、
「了解しました。」はるかとの会話を終え、電話を切ったのだった。
何はともあれ、無事だと分かったことに安堵の表情をするのであった。

第４２話

木嶋は、会社の最寄り駅近くであった、会社の同期会に飲みに参加をしていた。

普段は、喜怒哀楽が激しい木嶋であったが、いつになく、にこやかな表情をしていたので、木嶋の右隣りにいた、同期の岩坂さんが話しかけてきた。

「木嶋、最近、表情が明るいけど何かあったのか？」木嶋に問い掛けていた。

木嶋は、

「元々、自分は明るいよ。随分、岩坂さん失礼なことを言いますね。」岩坂さんに言葉を返した。

岩坂さんは、

「嘘をつけ…顔がニヤニヤしているぞ。女が出来たんじゃないのか？」木嶋のグラスに、ビールを注ぎながら話していた。

木嶋は、観念したのか…岩坂さんに話し始めた。

「実は…今、横浜に行きつけのお店があって、そのお店の女性と遊んでいるんだ。まだ、彼女ではないですよ。今は…友達です。」

木嶋は、ビールを右手に持ち、岩坂さんのグラスに注いだ。

岩坂さんは、赤い顔をしながら、

「木嶋、本当か…？その女性は可愛いか…？今度、そのお店に、飲みに行こうよ！」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「その店は、料金が高いんだよね。」岩坂さんに話したのだ。

岩坂さんは、

「料金が高いのか？…自分は家族がいるからね…ボーナスが、出たら行ってもいいかな？」木嶋に話していた。

木嶋は、

「岩坂さんが、そこまで言うのでしたら、今度、一緒に行きまし

ょう！」岩坂さんに話したのだ。
岩坂さんは、
「木嶋が、飲みに行っている店で、会社内で、誰か一緒に行ったことがあるのか？」岩坂さんが、木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「会社内で、横浜の店に行ったことがあるのは、富高さんだけですよ。」
岩坂さんは、
「富高さんって、以前は、事務所にいた人だよね。今は、現場にいるんだよね？」木嶋に話したのだ
木嶋は、
「そうですよ。富高さん以外の人とは飲みに行かないですよ！帰る方向が同じでないとキツイからね！」岩坂さんに話したのだ。
岩坂さんは、
「そうだよな。帰る方向が一緒じゃないと、大変だよね。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「そうですよ。岩坂さんは、自分と同じ路線で、横浜駅で乗り換えですが、乗る路線が違うだけですからね…。」
岩坂さんは、
「富高さんは、家は確か千葉だよね？」
「富高さんは、千葉の船橋ですよ。」木嶋は話したのだった。
岩坂さんは、
「富高さんは、船橋か…木嶋と飲みに行ったときは、帰るのが遅くなるんじゃないの？」
木嶋は、
「富高さんと、飲みに行くと遅くなるね。いつも、富高さんと打ち合わせしてから飲みに行くようにしているよ。富高さんが帰れないと悪いですから…。」岩坂さんに伝えたのだ。
岩坂さんは、

「それならいいんだ。」納得顔で、ホルモンを頬張りながらビールを飲んでいた。
木嶋と岩坂さんの話しを聞いていた、木嶋の左隣りにいた秋山さんに話してきた。
「木嶋、今の話しは本当か?」木嶋に問い掛けた。
木嶋は、
「秋山さん、行くならいつでもいいよ。」秋山さんに話していた。
秋山さんは、
「行くなら今日にしようよ。」
木嶋は、
「勘弁してよ。今日は、あくまで同期会でしょう。仲間打ちの飲み会なら考えるよ。同期会開催も久しぶりなのですから楽しもうよ!」秋山さんと岩坂さんに話したのだ。
秋山さんと岩坂さんは、声を揃えて、
「了解しました。」
木嶋の目の前にいた、小本さんは、ビールを飲みながら
「木嶋、今度の同期会までにキチンと報告するように…。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「今度の同期会までに、良い話しが出来れば皆さんに報告します。」周りを納得させたのだった。
同期会が終わりになるころ木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いている。
携帯の画面を覗くと、はるかからであった。
木嶋は、携帯を左手に持ちながら、店の外に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。今、どちらにいますか?」はるかが木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「会社の最寄り駅近くのお店で飲んでいます。」はるかに伝えた

のだのだった。

第４３話

はるかは、
「同期で、飲み会なんて羨ましいですよ。」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「何故？羨ましいの…？」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「私は、クラブ『H』でバイトをしていますが、仕事柄、どうしても年上の人と話す機会が多く、同年代たちと話していても話しが噛み合わないのです。」木嶋に話していた。
木嶋は、
「それは仕方ないよね。クラブ『H』で働いている以上は、いつまでも、そういう感覚と言うかギャップが付き纏うよ。いずれは、社会人になるのだから、今はいい社会勉強をしていると思えばいいのではないですか！」はるかに話したのだ。
はるかは、電話の中で納得していた。
「木嶋さん、同期会、あとどれくらいで終わるのですか…？」
木嶋は、
「あとどれくらいと言われても解りません。終わる時間を決めていないので…。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「今日は、木嶋さんに会いたい気分です。何とか…時間の都合がつきませんか？」木嶋に相談したのだ。
木嶋は、
「そうですね～。少しでも早く出れるように考えますが…！」左腕にしていた腕時計で時間を確認した。
時刻は、午後９時になろうとしていた。
時間を見た木嶋は、
「あと３０分ぐらいしたら同期会の会場から出ますよ。」はるか

に伝えた。
はるかは、
「分かりました。飲み会の会場を出る時に私の携帯に連絡を戴けませんか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「分かりました。飲み会の会場を出る時、はるかさんに連絡をします。また、はるかさんが、自分が、来るまで待ちきれないと判断したら電話かメールで一報下さい。」はるかにお願いをしたのだった。
はるかは、
「分かりました。」木嶋に伝えて、電話を切ったのだ。
電話を終えた木嶋は、飲んでいたお店のドアを開けたのだった。
木嶋は、最初に座っていた席に戻った。
「木嶋、今、誰に電話していたの?」木嶋の右隣りにいた岩坂さんが声を掛けてきた。
木嶋は、
「先ほど、岩坂さんに、話していた女性ですよ。」岩坂さんに話したのだ。
岩坂さんは、
「木嶋が、よく遊んでいる女性か…?いいな~。自分にも、そんな時があったかな?今日、これから会うのか?」
木嶋は、
「正直に言えば、横浜で待っているから来てほしいと…。同期会も大切だし…。悩んでいるよ。」岩坂さんに話したのだ。
岩坂さんは、
「女性が、会いたいと言う時は、会いに行くべきだ。」木嶋に問い掛けたのだ。
「会いに行きたいが…どうしたらいいのだろう!ここは、岩坂さんが、言われている通りかも知れません!」岩坂さんに、木嶋の、はるかに対する想いを伝えたのだ。

岩坂さんは、
「木嶋の気持ちは分かった。あと３０分…ここで飲もうよ！自分も一緒に出るから…」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「岩坂さんが、それでいいならそうしますよ。」岩坂さんと一緒に帰ることを決めたのだった。
木嶋は、心の中で岩坂さんに、
「ありがとう。」小さくお礼を言ったのだった。
時間が、過ぎていく中で、岩坂さんが、木嶋に声を掛けた。
「木嶋、帰るぞ。」
木嶋も、座っていた席から立ち上がったのだ。
秋山さんが、
「木嶋、帰るのが早くないか？」木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「先ほど、女性から電話が掛かって来まして、横浜で、待っているみたいです。申し訳ないですが、一足早く帰ります。」秋山さんや小本さんたちに挨拶をしていた。
店を出た岩坂さんと木嶋は、最寄り駅に向かい歩いていた。
最寄り駅の階段を降り、地下にあるコンビニに岩坂さんと木嶋は入って行く。
岩坂さんは、ビールを…。木嶋は、缶コーヒーとツマミを持ち会計レジに並んでいた。　木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いていたのだった。
はるかからだった。
木嶋が携帯を取り、会計をしながら電話に出た。
「もしもし…木嶋ですが…。」
「私、はるかです。今、どちらにいますか？」木嶋に尋ねていた。
「今は…。会社近くの最寄り駅。コンビニに入っています。」はるかに答えたのだった。
はるかは、

「あとどれくらいで、横浜に着きますか?」木嶋に時間の確認をしていた。
木嶋は、
「ここからだと…30分ぐらいかな?午後10時は過ぎると思いますが、待っていることは可能ですか?」はるかに尋ねた。
はるかは、
「木嶋さんに、会えるなら待ちますよ。」木嶋を待つことにしたのだった。
木嶋は、
「待っていて下さい。横浜に着いたら連絡をします。」はるかに伝えた。
はるかは、
「待っていますね。」少しハイテンションな声で、電話を切ったのだった。
木嶋の右横にいた岩坂さんは、
「木嶋、今のはこれから会う女性の電話か?」赤い顔をしながら尋ねていた。
木嶋は、
「そうですよ。」岩坂さんに答えたのだ。
最寄り駅の改札口を通り、階段を降りた。電車に乗った。
「プー」と電子ベルが鳴り響く。。
電車が、
「ガタン、ゴトン」と加速度を増して、木嶋と岩坂さんが最寄り駅をあとにしたのだった。

第４４話

木嶋と岩坂さんは、対面シートに座りながら話していた。
岩坂さんは、
「木嶋、これから会いに行くんだよね?何時頃までその女性と会うつもりなんだ?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「何時頃までと言われても…会ってから考えようかと考えていますよ。」岩坂さんに話していた。
岩坂さんは、
「木嶋は、明日、仕事は出るのか?」
木嶋は、
「ここ最近、土曜日臨出や毎日、残業をしていたので正直、身体が疲れているので、本来なら臨出しなければならないのですが、明日は、休みですよ。岩坂さんは…。」岩坂さんに答えていたのだ。
岩坂さんは、
「自分は、明日、仕事だよ。それなら、終電まで会っていれば良いんじゃないのか?」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「岩坂さんが、話している通りだと思いますが、女性の名前は、はるかと言いますが、門限があるらしく、それまでには帰らないといけないのですよ。」苦しい胸の内を、岩坂さんに話していたのだ。
「門限があるとキツイね。何時がタイムリミットなの…?」木嶋に確認をしていた。
木嶋は、
「タイムリミットは、午後１１時３０分みたいですよ。両親も厳しいらしいよ。」岩坂さんに相談したのであった。
「本当に、その時間がタイムリミットか…?怪しいぞ!疑ったらキリがない。何処で、妥協するかは木嶋次第だよ。」岩坂さんは、

木嶋を心配していた。
木嶋は、
「疑いだしたら信用が出来なくなってしまうよ。いくら、友達として遊んでいるとはいえ、相手を信用しないと、交際が成り立たないよ。」岩坂さんに答えたのだった。
岩坂さんは、
「まあな！付き合うのは簡単だよ。別れるのは、かなりのエネルギーが必要だよ。」岩坂さんは、木嶋のことが心配になって来たのだった。
木嶋は、
「そうだね。みんなに、心配されているうちが『華』だよね。困ったことがあれば相談に行きますよ。」岩坂さんに言葉を投げかけた。
岩坂さんは、
「その『はるか』って言う女性に騙されないようにしないといけないぞ！木嶋は、騙されやすいからな」木嶋に対して真剣な眼差しで話していたのだ。
木嶋は、岩坂さんの真剣な眼差しを見て、
「分かりました。」答えるしか無かったのだった。
電車が、乗り換え駅に近づいていた。木嶋と岩坂さんが、座っていた対面シートから立ち上がった。
木嶋と岩坂さんは、乗り換え駅で、各駅停車の電車から急行に乗り換えたのだった。
乗り換えた木嶋と岩坂さんは、電車の中を歩いて、長いシートに、座れるスペースを探していた。
それでも、中々見つからないのではと考えていたが、空いている座席があったので木嶋と岩坂さんは座ったのだ。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れたメロディー鳴り響いていたのだ。

木嶋は、携帯の画面を確認して電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。木嶋さん、今、どちらにいますか?」はるかの元気な声が聞こえてきた。
木嶋は、
「今、途中の駅で乗り換えて急行に乗ったところです。」はるかに答えたのだった。
はるかは、
「あと、どれくらいで着きますか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「あと、そうですね~。10分ぐらいで着くのではないですか?もう少し待っていることは出来ますか?」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「いつも、木嶋さんを待たせているので…。待つことは大丈夫ですよ。待ってま~す。」木嶋に伝えて電話を切ったのだ。
電話で話し終えたときに、岩坂さんが話してきた。
「木嶋、今の電話は、はるかちゃんか?」木嶋に確認していた。
木嶋は、
「そうですよ。」顔がニヤニヤしていた。
岩坂さんは、
「木嶋、はるかちゃんに会えるのが嬉しいのか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「そりゃ、嬉しいですよ。」岩坂さんに話していた。
「そうだよな!」
岩坂さんは、嬉しそうに、ビールを飲みながらツマミを食べていた。
木嶋と岩坂さんを乗せた電車が、間もなく横浜駅に着こうとしていた。

第４５話

車内アナウンスが、
「次は～、横浜、横浜です。お忘れ物がないようにお願いします。」
聞こえていた。
横浜駅の構内に入り停車した。
「プシュー」とエアー音を立てて電車のドアが、
「ピンポン」と開いたのだ。
木嶋と岩坂さんは、駅構内の通路を歩きながら話しをしていた。
「岩坂さん、自分は、これから、はるかさんに会いに行ってきます。申し訳ないですが…ここで…」岩坂さんに声をかけたのだ。
岩坂さんは、
「おぅ。木嶋、頑張ってこいよ。はるかちゃんに宜しくな！」木嶋を激励したのだった。
木嶋は、
「岩坂さんに、激励されたら酔いも醒めてきたようです。頑張って来ます。」岩坂さんに答えたのだった。
岩坂さんは、
「じゃあ、来週の月曜日に、はるかちゃんの話しを会社で聞かせてね。」木嶋に問い掛けた。
木嶋は、
「了解しました。」右手を挙げて、岩坂さんに答えたのだ。
木嶋と岩坂さんは、改札口を出て行くた。
岩坂さんは、右側の階段を降りてＪＲの改札口に向かって行く。
岩坂さんと別れた木嶋は、左手にしていた腕時計を見ながら、目の前にあった駅構内の柱にもたれながら、はるかに電話をしたのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いている。
呼び出しをしてから、３０秒くらい経過したのだろうか！電話口に、はるかが出たのだ。

「もしも～し、はるかですが…。木嶋さん、今、どちらにいますか？」はるかが、木嶋に聞いたのだ。
「木嶋です。今、横浜駅に着きました。どちらに行けばいいのですか？」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「そうですね～。時間的に空いているお店は限られていますよね。どこにしようかな…？そうしましたら、いつも行くコーヒーショップ『Ｙ』でどうですか？」木嶋に話していた。
木嶋は、
「コーヒーショップ『Ｙ』…ファーストフード近くにある所ですね！そこにしましょう。自分が、今いる場所から近いですね。」
はるかは、
「これから行きますので、そこでお待ち下さい。座席は、２Ｆフロアでお願いしますね。」
木嶋は、
「了解しました。」携帯を切り、待ち合わせ場所に向かったのだった。
「カポッ、カポッ、カポッ」靴の音が雑踏の中に掻き消されて行く。
コーヒーショップ『Ｙ』に着いた木嶋は、いつものように階段を上がり、２Ｆのフロアの座席に座ったのだ。
木嶋が、コーヒーショップ『Ｙ』に着いてから１０分ぐらい経過した。
「カツン、カツン、カツン」靴の音を鳴らしながら、はるかが階段を上がり、木嶋のいるテーブルに来たのだった。
木嶋は、
「今晩は。お疲れさま。」はるかに声をかけたのだ。
はるかは、
「今晩は。お疲れさまです。今日は、飲み会の最中に電話をかけてしまい、申し訳ありません。」木嶋に頭を下げたのだった。

木嶋は、
「いいよ。気にしなくても…。自分も、はるかさんに今日のことは、話していなかったので…何処で、帰ろうかとタイミングを見計らっていたので、電話が鳴った時は、正直、嬉しかったよ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「本当ですか！」木嶋の言葉に笑顔になったのだった。
木嶋は、
「本当ですよ。」はるかを持ち上げたのだった。
はるかは、
「木嶋さんに、電話をした時、今日は、クラブ『H』は、休みにしてありますと言いましたが、体調不良と言うことで当日、休みにしちゃいました。」木嶋に話しながら舌を出したのだった。
木嶋は、
「何で…当日、休みにしたの…？」はるかに聞いたのだ。
はるかは、
「今日は、気分が優れないのです。いつも、酔っている人たちの、愚痴（グチ）を聞くのにも、神経を遣（つか）います。ストレス発散をしないと気が滅入ってしまうのです。そんな気分でしたから、木嶋さんと会いたい…と思ったのです。誰かと一緒に、こちらまで来たのですか？」
木嶋に褒め言葉を言ったのだった。
木嶋は、
「会社の同期の人と一緒に横浜まで来ました。同期の人は帰りましたよ。安心して下さい。はるかさんが、気が滅入るのも、ストレスが溜まるのも分かります。機械ではないですからね。精神的に、疲れているのではないでしょうか？」はるかに話したのだった。
はるかは、
「そうですね。
同期の人に気を遣（つっ）わせて申し訳ありません。よろしくお伝えください。以前、木嶋さんは、週末の金曜日は、夕方5時に、仕事が終わ

ると聞いていたので、仕事が終わった時間を見計らって、電話をしてみようかな…？と考えていました。本音を言えば、もっと早くに電話をすれば良かったと思いましたよ。」木嶋に問い掛けた。

木嶋は、

「今日の場合は、早く電話をもらっても、この時間になっていたと思います。はるかさん、横浜で何をしていたのですか？」はるかに尋ねたのだった。

はるかは、

「高島屋やＶＩＶＲＥに行って、ショッピングを楽しんでいましたよ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「そうだろうと思いましたよ。」はるかに話し、二人で、

「ハハハ」と笑っていたのだった。

コーヒーショップ『Ｙ』で、宇多田ヒカルの曲が流れていた。

木嶋は、車を運転するときに良く曲をかけていた。

はるかも、宇多田ヒカルの曲がお気に入りだったのだ。

第４６話

木嶋は、耳を澄ませて呟いていた。
「宇多田ヒカルさんの曲は、素敵な曲が多いよね。カラオケで歌うにはキツイかも知れないよね！」はるかに話していた。
はるかは、
「そうですよね。カラオケで歌うにはハードな曲が多いですね！今、流れているこの曲は大好きですよ。」木嶋に話したのだ。
流れている曲は、【光】だった。
この曲は、木嶋も気に入っているのだった。
何故だろう…この曲が流れていると、木嶋は、ふと、感じることがあるのだった。
はるかが、
「木嶋さん、何かあったのですか？」木嶋に声を掛けた。
木嶋は、
「いや～、この曲を聴いていると、はるかさんとオーバーラップしていますよ！」はるかに言っていたのだった。
はるかは、
「そんなに、私とオーバーラップしますか…？」
木嶋は、
「オーバーラップしますね。
はるかさんと宇多田ヒカルは同じ年代ではないですか？年齢が近い分、歌を聴いていると感じるのかも知れません！はるかさん、今度、一日、時間を作って頂いてデートをしませんか？いつも、カフェばかりでデートらしいことをしていないので…お互いが、スレ違いが多く、時間が取れないな…と感じていると思います。クラブ『H』に行けば、はるかさんと話しは出来ます。周りが喧騒の中では、まともに話しが出来るとは思いません。ゆっくりと出来る時間がほしいなと思いますがいかがでしょうか？」はるかに尋ねていた。

はるかは、

「クラブ『H』の中では話しをするにも周囲の環境もあるので、木嶋さんの話していることは間違いではありません。今は、自分の女友達と遊びに行きたい時間も欲しいです。今だから出来ることもあると思います。もう少し待って戴けますか？一日、時間を空けることが出来れば木嶋さんに連絡をしますので、ご理解をして頂きたい。私は、木嶋さんと、短時間でも会えるのが嬉しいのです。クラブ『H』にバイトしていますが、アフターで、お客さんと会うのだって禁止されています。私は、木嶋さんをお客さんと思っていません。今日だって、木嶋さんに会いたくて、電話したのですよ。」木嶋に話したのだった。

木嶋は、

「分かりました。はるかさんがそこまで言うのなら理解をします。一日、時間が空く日を、麒麟のように、首を長〜くして気長に待ちますよ。アフターで人と会うのは、店にも依ると思いますが、そういうのは、厳しい規律と言うか暗黙の了解と言えばいいのかな？あるとは正直、思わなかったよ。もし、見つかったらどうなるのかな？」はるかに聞いてみたのだ。

はるかは、

「勿論、首ですよ。」左手で、自分の首を真横にシグナルしていた。

木嶋は、

「マジで…。そんな話しを聞いたら、はるかさんと会うのにリスクが伴うと言うことだよね？もう、会わない方がいいのではないでしょうか？」木嶋は別れるつもりはないのに、悪戯（いたずら）ぽく話してみた。

はるかは、真顔で、

「何で、木嶋さんと別れないといけないのですか？何も悪いことはしていないでしょう！見つかった時に、考えればいいと思っているのに、そんなことを言わないで下さい！」木嶋に怒りをぶつけていた。

木嶋は、
「分かりました。
そんなに怒らないで下さい。最初から別れるつもりで話した訳ではないですよ。誤解をしないで下さい…今、はるかさんと出会えて、こうして話しが出来ることが今の自分には、とても大切なことです。はるかさんにとって、自分がいることで、マイナスに作用する時は、《別れる》と思います。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「分かりました。」木嶋に言葉を返したのだ。
木嶋は、コーヒーショップ『Y』に入ってからどれくらい経ったのだろうと腕時計を見たのだった。時刻は、午後11時を回っていた。
「はるかさん、そろそろここを出ないと家の門限に引っ掛かるのではないですか?」はるかに聞いていた。
はるかも、左手にしていた腕時計を見たのだ。
「そうですね。木嶋さんも、電車の時間があるので帰りましょうか?」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「帰りましょう。」会計カードを左手に持ちながら、1Fのレジまで階段を降りていく。
はるかは、会計をしている木嶋に、
「先に帰ります。」声を掛けて、コーヒーショップ『Y』を出て行く。
木嶋も、会計が終わり、はるかのあとを追うように、コーヒーショップ『Y』を出て、
「プルー」発車ベルが鳴り響く横浜駅をあとにしたのだった。

第47話

木嶋は、翌週、会社に出勤した。
朝、岩坂さんは、木嶋の姿をロッカールームで声をかけた。
「木嶋、この間の金曜日…どうだったんだ?」
木嶋は、
「どうだったんだ…と、言われても…普通に話しただけですよ。それ以上のことはありません。」岩坂さんに話したのだ。
岩坂さんは、
「本当に、何もなかったのか?」再度、木嶋に確認をしたのだ。
木嶋も、
「何もありません。」岩坂さんに強く主張したのである。
岩坂さんは、残念そうに、
「何だよ。もっと、いい報告を聞きたかった。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「いい報告と言われてもね…まだ、お互いを知らない部分が多々あるのでね。慎重になりますよ。」岩坂さんに伝えたのだ。
岩坂さんは、
「分かった。」理解をして、作業服に着替え、ロッカールームから自分の現場に歩いていったのだ。
木嶋は、
「岩坂さんが、心配するのも仕方ないな!」呟きながら、現場に向かったのだ。
時が流れて行く。木嶋は、はるかと麻美、玲の店に、相変わらず富高さんと一緒に飲みに行くのである。
はるかのクラブ『H』は、3カ月に1回、玲のクラブ『O』は、半年に1回、顔を出していた。
木嶋は、玲から麻美が、

【転々と店の移動を繰り返している。】と話しを聞いたので、富高さんと相談して、落ち着くまで顔を出さないと決めたのだった。ないと決めたのだった。

そんな毎日が続く中で、木嶋は、はるかと会うのが日課になっていた。

はるかにとって、木嶋がいることが、どんなに心強かったのだろうか！

木嶋は、半年ぶりに玲のいるクラブ『O』を、富高さんと一緒に尋ねていた。

木嶋は、

「お久しぶりです。」玲に挨拶をした。

玲は、

「木嶋君、お久しぶり。元気にしていた！」木嶋に話していた。

「最近、忙しくて、玲さんのところに中々、来れず申し訳ありません！」玲に謝罪をした。

玲は、

「本当だよ。クラブ『O』に来てくれないんだから…。最近、どうなの？前に、麻美さんが横浜にいたときの女性とは上手くいっているの？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「麻美さんが横浜にいたときの女性？あぁ、はるかさんですね。年齢が若いだけあって、ブランド品に目が行くのは、いつの時でも変わらないなと思うね。」玲に話したのだ。

玲は、

「木嶋君の言う通りだよ。女性は、どんなときもブランド品が欲しいよ。はるかさんが、ブランド品を欲しがるのは理解するよ。私だって、若い時はそうだったよ。今、木嶋君が買ってくれるなら欲しいよ。」木嶋に論するように話していた。

木嶋は、

「はるかさんとは、友達としての付き合いだからね。自分の年齢

を考えたとき、早く、結婚したいな…と願望はある。万が一、はるかさんを、お嫁さんしたら、みんなが驚くだろうね。」玲に冗談半分に話していた。

玲は、

「木嶋君、はるかさんのことをそこまで意識しない方がいいよ。相手は若いんだから…それに、友達段階なら考えるのは早いよ！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「それは言えるよね。焦りもあるのも事実だよ。」

玲は、

「焦っちゃダメだよ。木嶋君、富高さんは、はるかさんを見たことはあるの？」木嶋の左隣りにいた富高さんに尋ねていた。

富高さんは、

「はるかさんですか？見たことはありますよ。木嶋君と一緒に、横浜のクラブ『H』に飲みに出かけたときに、いつも、木嶋君の隣りにいますよ。可愛いんですよ。本当に…話していても頭が良さそうな感じですよ。」玲に答えていたのだ。

玲は、

「そんなに可愛いなら、一度、会わせて…と、前からお願いをしているのに会わせてくれないんだよね。木嶋君は…。」木嶋を羨ましそうに見つめて話していた。

木嶋は、

「はるかさんも、まだ、遊びたい年齢だし、自由にしていいと話しているよ。プライベートで会えなくても、クラブ『H』に行けば、いつでも会えるからね！」玲に伝えたのだった。

第４８話

玲は、

「そうだよね。好きなはるかさんがいるクラブ『H』に飲みに行った方がいいよね！関内に来るよりは、横浜駅から歩いても近いよね。」木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「玲さんが、話している通りです。関内は、一度、電車で、戻る形になるからね。駅から近い方が行きやすいね。」玲と富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「実は、自分も、木嶋君が言っていることに賛成なんですよ。」玲に話したのだ。

玲は、

「それでも、関内に来てくれることは、私の存在が忘れられていないと思うから嬉しいよ。麻美さんも、移動しなければいいのにね…。」木嶋に尋ねてみた。

木嶋は、

「はるかさんと麻美さん、玲さんの３人が、同じ店にいてくれれば、【最高】で《ベストな選択》だと思います。ただ、障害があるのも事実だよね。《はるかさんに関しては、夜の仕事に関しては、人に頼らない。》と言って話しているからね。麻美さんと玲さんが、同じ店で働いていれば来やすくなると思いますが…。」玲さんに話したのだ。

玲は、

「私も麻美さんと同じ店で働きたいとは思っているよ。気になるのは、麻美さんの移動グセを直させないと…。」木嶋と富高さんに伝えたのだ。

「それなら、麻美さんの店に行っていいし、プライベートで会っ

て話してもいいと思うよ。麻美さんの店に行くときは、富高さんも一緒に行きますよ！」木嶋の左隣りにいた、富高さんに尋ねていた。

富高さんは、

「木嶋君が、麻美さんの店に行くときは声をかけて下さい。自分も、たまには、麻美さんにガツンと言うよ！」木嶋と玲に高らかに宣言をした。

「富高さんにしては、随分強気だよね。今日は、飲み過ぎているんじゃないの？大丈夫？」木嶋は、富高さんの身体を心配していた。いつもの富高さんなら、強気な言葉は言わない。

木嶋は、何回も一緒に、富高さんと飲みに出かけているが、こんなことを言うのは記憶になく、初めてだったのだ。

富高さんは、

「木嶋君、こんなに楽しい時間を過ごしたのは久しぶりだよ。」ホロ酔い気味に木嶋に話してきた。

木嶋も、

「いつも話していますが、富高さんが、楽しんでくれればいいですよ。お互い、たまにしか来ないのですからね。」富高さんに伝えたのだ。

玲は、

「木嶋君、富高さんは、いつも、こんなにハイテンションになるの？」木嶋に聞いてみた。

木嶋は、

「はるかさんの店でも、麻美さんの店でも、こんなにハイテンションが上がることはないよ。今日は、クラブ『O』に来るのを楽しみにしていたからね。」玲に話したのだった。

「ありがとう。今日は、楽しく飲みましょう。」玲は、木嶋と富高さんに声をかけて、新しい焼酎のボトルを持ってくるように、近くにいた店員さん話していた。

焼酎を、《アセロラ》で割った。とても飲みやすくて、木嶋と富高さんのグラスが空になっていく。

富高さんのグラスが、空になっていくペースが早くなっていく。
木嶋は、いつものペースを崩さずに飲んでいた。
そんな中で、木嶋は、時間が気になり腕時計を見たのだ。
午後１１時を過ぎていた。木嶋は、帰ろうと思ったのだ。
「富高さん、そろそろ帰ろうと思いますがどうしますか？」富高さんに声をかけた。
富高さんは、
「今日は、楽しいから、まだ、飲んでいたいんだ。木嶋君に悪いけども朝まで関内にいるよ。」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「富高さん、本当に朝までいるの？」確認をしたのだ。
富高さんは、ＯＫサインを出したので玲さんに、会計するように伝えたのだ。
玲は、会計伝票を木嶋に渡した。それを受け取り富高さんと金額を確認した。
金額は、折半で出すことに決め、財布からお金を取り出し、玲に渡した。
玲は、
「木嶋君、領収書は要るの？」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「領収書は要りません。富高さんを朝までよろしく」玲にお願いして、座っていた席を立ちあがったのだった。
富高さんは、
「木嶋君、悪いね。自分だけ残ってしまうなんて…。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「いいよ。気にしていないから…。」富高さんに伝えたのだ。
玲は、
「今日は、ありがとうございました。」木嶋に会釈をして、クラブ『Ｏ』のドアの近くまで一緒にきたのだ。

木嶋は、
「富高さんを頼みます。」玲に頭を下げて、関内駅をあとにしたのだった。

第４９話

木嶋は、電車に乗り、一人で考えていた。
「果たして、今のままでいいのだろうか？」
そんなある趣の疑問を感じ始めていたのだ。
木嶋の心の中には、葛藤があるのだ。
木嶋は、はるかと出会う前に、結婚情報センターみたいな所に登録をしていて、一人の女性を紹介されていた。
本来であれば、その女性と会わなければいけないのに、木嶋の優柔不断さが出てきてしまったのだった。
木嶋は、悩みながらも、どちらかに決めなければならず、若いはるかを選択したのであったが、一種の罪悪感を感じていたのである。
また、木嶋は、会社の中で思いを寄せている富士松さんがいるのだ。
いつも身近にいる富士松さんを見つめているのだ。年齢は、木嶋と同世代であり、素敵な人なのだ。
現実は、木嶋は、目の前にいると、内向的になってしまうのだ。
なかなか思いを打ち明けられずに、自分に憤りを感じていた。
はるかと会うたびに、富士松さんのことを考えてしまい、胸が張り裂けそうである。
会社では、同期会の仲間や同僚たちに、
【木嶋は、誰が理想なんだ？】
聞かれることは、良くあるのだった。今は、《はるか》と遊んではいるが、木嶋の本命は、《富士松さん》であった。
同期の仲間や同僚、麻美さんや玲さんから聞くたびに《はるか》との交際を止めるように進言をされ始めていたのだ。
【何故だろう？】
はるかのことを悪く言うのだろうと思案していた。
そんな中で、木嶋は、富士松さんと会社で話しをする機会を探して

いた。
はるかと出会ってからそんな状況が、かれこれ1年近くが経過していた。
木嶋を乗せた電車が、まもなく最寄り駅に着こうとしていた。
最寄り駅から家までの帰宅ルートは、徒歩なので考えるには最適ではあるが、夜中は、車がスピードを上げて走行しているので、常に危険と背中合わせである。ましてや、アルコールが入っているから特にである。
家に着いた木嶋は、布団の中で、富士松さんのことやはるかのことを考えていたら、いつの間にか寝てしまったのだ。
次の日の朝、木嶋は、目が覚めたときに携帯が光っていた。
【誰だろう。】
緊張した赴きで携帯を覗いた。すると…玲からメールが着信していた。
玲は、
「木嶋君、昨日は、ありがとうございました。クラブ『O』が終わってから富高さんと一緒に朝までカラオケ行ったよ。富高さんは、始発の電車に乗って帰りましたので安心して下さい。」顔文字入りで送ってきたのだった。
木嶋は、
「玲さん、昨日は、先に帰って申し訳ありません。富高さんを最後までお付き合いしと戴いてありがとうございます。富高さんには、来週、会社に出勤したときに話しますね。玲さんのクラブ『O』なら富高さんは、弾けるのですが、麻美さんやはるかさんの店に行っても、大人しく飲んでいますよ。クラブ『O』が飲みやすいのかも知れません。また、ボトルが切れないうちに行きますよ。」玲にメールを送信したのだった。
玲は、
「ありがとうございます。
富高さんは、前に来たときもハイテンションだったよね！麻美さん

が聞いたら怒られてしまいそうです。私も、木嶋君は高校の同級生なので、今の若い人たちより安心して飲むことも出来るよね。富高さんも、年代的に近いから話しも合うので、気軽にクラブ『O』に来て下さい。次回を楽しみに待ってますね。」木嶋に返したのだった。

木嶋は、

「日にちが判れば、連絡をしますが、横浜のクラブ『H』や麻美さんが、優先になってしまうのはご理解下さい。」玲にメールをしたのだ。

玲は、

「分かりました。木嶋君は、麻美さんからの繋がりだから仕方ないと思うよ。いつかは、私を一番になれるようになりたいな！」にこやかな顔文字入りのメールできたのだった。

木嶋は、

「いつかは、一番になれるよ！」玲にメールをしたのだった。

第５０話

玲は、
「頑張るね！」木嶋にメールを送ったのだった。
木嶋は、
「頑張ってね！」メールを返したのだった。
玲が数年後に現実になるなんて、木嶋は、思わなかったのだ。
木嶋の心の中は、揺れ動き始めていたのだ！
『はるか』と『富士松さん』どちらも魅力的である。比較も何も…。マイッタな…！結論が出ない。
【何故だろう？】
今は、このままで行くしかないかな？
木嶋は、フラット精神状態で考えて、お互いの長所と短所を公平な目で見極めることに決めたのだった。
木嶋は、会社で仕事をしているときは、上司の溝越さんから見たら、考え方を変えない『頑固な人』と言うイメージが付き纏っていたのだ。
はるかと、出会ってから1年が経ち、再び、誕生日とX'ｍａｓプレゼントに悩む日々が近づいていた。
木嶋は、はるかと友達としての交際を始めた当初から手帳に記録をしていたのだった。
手帳を持ちはじめた《キッカケ》は、木嶋自身が、残業や休日出勤とかの記録やその日に起きた出来事を日記代わりに付けていたのだった。
その手帳を、今年に入り、５冊目になっていた。
昨年の手帳を、一人で会社からの帰宅途中の電車の中座席に座り、
「ガタン、ゴトン」揺られながら覗くと、
『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』のバックを購入した記録が残っていたので、誕生日とX'ｍａｓプレゼントを一緒にして金額を提

示するのを決めたのだった。
木嶋は、プレゼントを選ぶ基準が自分では解らず、会社の同期である秋山さんや岩坂さんに聞けず、女性社員との交流もなかったので、麻美や玲に聞いても、はるかから見たら年齢が離れすぎているため参考にならないのであった。
結果として、はるかの欲しい物が提示した金額内て収まれば結果オーライなのかな?考えていたのだった。
木嶋は、はるかに電話したのだった。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。
はるかが電話に出た。
「もしも~し、はるかですが…。」
「木嶋です。はるかさん、お久しぶりです。元気でしたか?」はるかに尋ねた。
はるかは、
「私は、先日、クラブ『H』で、牡蛎(カキ)フライを食べてお腹を下しましたが、それ以外は、元気にしていましたよ。」木嶋に話したのだった。
木嶋は、
「はるかさん、今は、大丈夫なのですか?」さすがに心配そうな声で話したのだった。
はるかは、
「今は、大丈夫です。木嶋さん、私の誕生日は覚えていますか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「はるかさんの誕生日って、いつだったかなあ~。」悪戯ぽく話していた。
はるかは、
「木嶋さんの意地悪。知っているクセに…。」はるかは、少し笑った声で話していた。
木嶋は、

「１２月１５日だったよね？」はるかに確認していた。
はるかは、
「そうですよ。１２月１５日ですよ。木嶋さんが忘れていたら、どうしようかと考えていましたよ。」木嶋に話していた。
木嶋は、
「他の人の誕生日は忘れていても、はるかさんの誕生日は忘れませんよ。１２月は、Ｘ‘ｍａｓとかあるので、そういう特別な月は覚えていますよ。」はるかに伝えた。
はるかは、嬉しそうな声で、
「本当ですか？ありがとうございます。」木嶋にお礼の言葉を返したのだった。
木嶋は、間髪を入れずに、
「はるかさん、今年の誕生日は、Ｘ‘ｍａｓプレゼントと一緒にしたいと思います。金額に関しては、去年と同額にします。」はるかに話していた。
はるかは、
「え～。誕生日とＸ‘ｍａｓプレゼントが一緒なんてイヤですよ。別々にして戴くことは出来ませんか？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「今年は、不景気で昨年よりも年収が下がっているので、ご理解をして頂きたい。景気が良くなれば再考させて戴きますので、申し訳ないですが、同意をして下さい。イヤなら今年はナシにしますよ。」はるかに伝えた。
はるかは、
「判りました。誕生日プレゼントがないのも淋しいので理解をします。景気が良くなったら、別々にして下さいね。約束ですよ。」木嶋に話したのだった。
木嶋は、
「分かりました。日にちと時間は、はるかさんが決めて下さい。連絡を待ってます。」はるかに話したのだった。

はるかは、

「判りました。日にちと時間を決めたら連絡をしますね。」そう言いながら、電話を切ったのであったのだ。

第５１話

木嶋は、はるかとの電話を切ったあとで考えていた。
「今年は、はるかのプレゼント何にすればいいのだろうか？」
去年は、ブランドの『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』だったように今年も、同じだろうか？
ふと、頭の中を過ぎったのだ。
はるかは、木嶋より断然若い。はるかの年代の好みが解らず困惑しても不思議ではない！
木嶋は、そう考えながら時間が流れて行く。
一週間後、会社から最寄り駅に着いたとき、木嶋の携帯が鳴り響くのだった。
「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音。携帯の画面を覗くと、はるかからの着信だった。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「木嶋さん、元気ですか？はるかです。」木嶋に話してきたのだった。
木嶋は、
「元気でしたよ。日にちは決まったのですか？」はるかに話しかけたのだ。
はるかは、
「日にちは、決まりましたよ。１２月２１日の土曜日にしたいのですが、木嶋さん自身、何か予定がありますか？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、左肩と左耳に携帯を押し付けて、
「チョット待って下さい。今、手帳を出しますから…。」
いつも会社への通勤で、持ち歩いているリュックから手帳を出したのだった。パラパラとスケジュールを確認していた。
「１２月２１日は…今のところは…、予定が空いているよ。」は

るかに伝えたのだ。
はるかは、嬉しそうな声で
「本当ですか？その日に待ち合わせしませんか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「ＯＫです。仕事になった場合でも、他の人に変わって戴くから安心して下さい。はるかさんが、欲しい商品を探して下さい。はるかさんのことだから事前にリサーチをしているのではないでしょうか？」はるかに聞いていた。
はるかは、
「木嶋さんの話している通りですよ。私は、欲しい物は、沢山ありますよ。今しか買えない物もありますよね。ブランドに、どうしても目が行ってしまうのです。理解をしてくれますか？」木嶋に理解を求めていた。
木嶋は、
「理解をしますが、自分にも財政事情があるので、前にも話したと思いますが、提示した金額が精一杯の誠意です。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「木嶋さんの誠意は伝わっていますよ。１２月２１日までに欲しい物は、リストアップして一緒に見に行きましょう。」木嶋に話したのだった。
木嶋は、
「勿論ですよ。はるかさんとデートする時間を長く作りますよ。会っているときは、時間に追われているからね。」はるかに伝えたのだった。
はるかも、
「私も、楽しみですよ。木嶋さんとデートするのが…。」木嶋に語ったのだ。
木嶋は、

「ありがとうございます。」はるかに言い、
「それでは、12月21日ね。待ち合わせ時間を知らせてね！」
はるかに言いながら電話を切ったのだ。
木嶋は、胸を躍らせながら家に帰っていた。
家に帰る途中で、携帯の着信音が鳴り響いていた。聞いたことのあるメロディーだった。
「誰だろう。」
携帯の画面を覗いた。すると麻美からの着信だった。
木嶋は、麻美とは、メールでのやり取りはしていたが、クラブ『O』を辞めてからは、富高さんとの話し合いで、しばらくは、電話での話しをしていなかったのだ。
木嶋は、電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「もしもし、麻美です。しばらくご無沙汰してしまい申し訳ありません。元気でしたか？」木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「元気にしていましたよ。麻美さんは…。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「元気にしていましたよ。クラブ『O』から放浪者のように、色んな店を、点々としながら今のお店に落ち着きました。木嶋君に一度、来て頂きたいので連絡をしました。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「行ってもいいが、また、店を辞めるようになるんじゃないの？」
麻美に問い掛けたのだった。
麻美は、
「今度は、辞めないので富高さんと一緒に来て下さい。」木嶋に話したのだった。

第５２話

木嶋は、

「麻美さん、本当に、今いる店を辞めないなら、都合をつけて行きますよ。参考までに、名前を教えて下さい。」麻美に伝えた。

麻美は、

「木嶋君、出来れば年内に来て戴けると嬉しいな！お店の名前は、クラブ『Ｕ』ですよ。」木嶋に話していた。

木嶋は、

「クラブ『Ｕ』ですね。来週、富高さんに話しをさせて戴きます。はるかさんにも、意見を聞きますけどいいですか？」麻美に尋ねた。

麻美は、

「木嶋君、はるかさんと会っているのですか？私も、【会いたいな！】って思うので、話しをしてみて下さい。富高さんにも、久しぶりに会いたいですね。」木嶋に伝えたのだった。

木嶋は、

「えぇ。定期的に、クラブ『Ｈ』の出勤前に会っていますよ。」麻美に伝えた。

麻美は、

「木嶋君、はるかさんオンリーなんだから…。私の存在を忘れないでね。来週、富高さんとの話し合った結果を教えて下さい。」木嶋に話し、電話を切ったのだ。

木嶋は、苦笑いを浮かべて悩んでいた…。

≪麻美さんは、この業界に、長くいるからその意見を聞く機会を持つのも大切だが、はるかさんとの交際には、否定的だし…どうしたらいいのだろう。はるかさんに話しをしないとマズイかな！【多分、行かないで…。】と言うかも知れない。≫そう思っていた。

木嶋は、意を決して、はるかに電話をしようと、腕時計を見た。

時刻は、午後８時を回っていた。

「あらら…もう、こんな時間？はるかさんは、今、クラブ『H』で仕事をしている時間だから明日にしよう。」携帯を左後ろのポケットに締まったのである。

翌日、朝、布団から起き、朝食を食べ終わった木嶋は、

「はるかさん、おはようございます。電話で話しがしたいので都合が良い時間を教えて下さい。」はるかにメールをしたのだ。

木嶋が、メールを送信してから3時間が経過していく。

家の近くにあるコンビニまで【雑誌】を買いに出かけた。携帯を家に置いたまま出てきてしまったのだ。

コンビニから帰宅した木嶋は、携帯を確認した。メールの着信履歴を見ていると、はるかからのメールがあったのだ。

木嶋は、はるかのメールを見た。

「木嶋さん、おはようございます。夕方なら電話に出れますよ。」

木嶋は、すかさず、

「夕方、時間を見計らいながら連絡をしますよ。」はるかにメールを返信したのだった。

夕方になり、木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音が鳴り響いていた。

木嶋は、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが…。」

「こんにちは。はるかです。話しは何でしょうか？」はるかが、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「先週、はるかさんと話したあとで麻美さんから電話があったんですよ。」はるかに報告した。

はるかは、

「麻美さんから電話があったのですか？元気でしたか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「元気でしたよ。実は…麻美さん、色んな店を渡り歩いていたが、今いる店に遊びに来ないか?そう打診があったのです。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「麻美さんのことは、木嶋さんが良く話されているので…遊びに行きたいなら行って来てもいいですよ。」木嶋にＯＫサインを出したのだ。

木嶋は、

「麻美さんは、出来ることなら富高さんとはるかさん、３人で来て欲しいと言っていたよ。」はるかに伝えた。

はるかは、

「麻美さんの勤めている場所は関内ですよね。」木嶋に問い掛けたのだった。

木嶋は、

「そうですよ。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「行きたいのですが…私には、関内は寂れた町としかイメージがないんですよ。」木嶋に伝えた。

木嶋は、電話をしながらズッコケてしまった。

「関内が寂れた町ね…。」自分自身に言い聞かせながら、はるかに話したのだ。

「はるかさんは、どうしますか?」

はるかは、

「私は、今回、遠慮してもいいですか?」

木嶋は、

「はるかさんの意見を尊重します。」木嶋は、はるかにそう答えて苦笑いをしたのだった。

はるかは、

「ありがとうございます。またの機会に誘って下さい。富高さんを誘ってみては如何ですか?」木嶋に話していた。

木嶋は、
「そうだね。富高さんに話してみます。今日は、ありがとうございます。」はるかと携帯での話しが終わったのだった。

第５３話

翌週、会社に出社した木嶋は、昼休みに富高さんがいる職場に足を向けた。

「富高さん、お久しぶりです。先週の土曜日に麻美さんから、電話がありました。」

富高さんは、

「麻美さん、元気にしているかな?」

木嶋は、

「元気な声でしたよ。《今度、富高さんと一緒に新しいお店に来て欲しい》そう話していたよ!」富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、麻美さんがいる新しいお店は関内だよね。」木嶋に問い掛けた。

木嶋は、

「そうです。関内ですよ。」

富高さんは、

「いつも、木嶋君と飲みに行って家に帰る時、関内って、微妙に遠く感じるんだよね!」木嶋に不満めいたことを漏らしていた。

普段は、紳士的な富高さんだが、あまり不満を言うことはない。

木嶋と富高さんが行く度(たび)に、麻美が、勤務しているお店を辞めることが多いのに、怒りを感じていても不思議ではなかったのだ。

そんな富高さんの気持ちを理解をしているから、木嶋は、《行こうよ。》と、強調はしないのだ。

木嶋は、

「富高さんの判断に委ねますよ。」富高さんに一任をしたのだった。

富高さんは、

「正直に言うと、行くのを辞めようかと考えてはいるが、麻美さ

んに会いたい気持ちもあるので、木嶋君、一緒に行こうか！」木嶋に同意を求めていた。

木嶋は、

「富高さんも、麻美さんに会いたい気持ちはあるのかな？」富高さんに尋ねたのだ。

「会いたい気持ちがあるから麻美さんに、会いたいよ。また、お店を辞めないように木嶋君から話してくれるかな？」木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、

「麻美さんに、また、辞めると富高さんが、気にするからと辞めないように話しはしますよ。」富高さんに話したのだった。

富高さんは、表情を明るくしながら、

「本当に、話してね。」木嶋に伝えたのだ。

続けざまに、

「飲みに行くのは、２人だけなのかな？」

木嶋は、

「麻美さんは、《はるかさん》も連れて来てほしいと話しているけどね！」富高さんに話したのだった。

富高さんは、

「はるかさんは、一緒に麻美さんの新しいお店に行くのかな？」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「麻美さんから、電話があった次の日に、はるかさんに話したよ。」

「木嶋君、はるかさんは、何て話していたの？」木嶋に、富高さんが聞いていたのだ。

木嶋は、

「はるかさんは、今回は、遠慮しますと言われたよ。元々、麻美さんは、はるかさんのことを良く思っていないし、自分が、はるかさんとの友達同士としての付き合いも否定的だよ。」富高さんに話

したのだった。
富高さんは、
「麻美さん、はるかさんのことを良くは思っていないんだね。結構、意外だね。クラブ『H』でしか2人が、話した姿を見たことないから何とも言えないけどね。はるかさん自身もが変わってるかも知れないが、麻美さんも変わってるね。仲良くすればいいのにね。」
木嶋に話したのだった。
木嶋は、
「人それぞれだからね。性格が合う、合わないのは仕方ないよ。」
富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「そうだよね。木嶋君、行く日にちはいつにするのかな?」
木嶋は、
「行く日にちは…いつにしようか…考え中。はるかさんとのデートの日が…12月21日だから…12月26日の金曜日でどうかな?」富高さんに問い掛けた。
富高さんは、
「12月26日の金曜日は…職場の忘年会が12日の金曜日だから大丈夫だよ。木嶋君が、今、話した日にちでOKです。」
木嶋は、
「分かりました。麻美さんには、日にちを伝えておきますね。詳細は、また後日、連絡でいいね。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんも、
「それで、OKです。」と、サインを出したのだった。　木嶋は、OKサインを見て安心したので、富高さんの元から立ち去って行ったのだった。

第５４話

木嶋は、携帯を取り出し、
「麻美さん、富高さんからＯＫサインが出たので、クラブ『Ｐ』に行きます。日にちは、１２月２６日です。」麻美にメールをしたのだった。
昼休みの終りのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」会社内に、鳴り響いていた。
職場に戻り、仕事をしながら夕方５時のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いている。
木嶋は、携帯の着信とメール履歴のチェックをしたのだ。
すると、麻美からのメールが返信されていた。
「麻美です。連絡ありがとうございます。また、富高さんと一緒にクラブ『Ｐ』お越し頂けるとのことで嬉しく思います。１２月２６日を楽しみにお待ちしております。」麻美が嬉しいみたいで、笑顔の顔文字入りで送信されてきたのだ。
木嶋は、
「どういたしまして。自分や富高さんも、麻美さんに会えるのを、今から、ワクワクしていますよ。」麻美に顔文字入りのメールを返信した。
木嶋は、その日は、夕方５時で上がる日だった。
それは、はるかに会うためであった。
会社の送迎バスに乗り、空いている座席を見つけて座った。
バスが、発車する間際に、木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。着信の名前を見ると、はるかからだった。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「私、はるかです。今、どちらですか？」木嶋に尋ねた。
木嶋は、

「今は、会社の送迎バスの中ですよ。これから会社を出るところです。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「今日は、クラブ『H』に出勤しないので、木嶋さんと会って話しがしたいので、横浜駅で待ち合わせをしたいのですが…いかがでしょうか?」木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、

「今日は、何も、予定がないのでいいですよ。」木嶋は、OKしたのだ。

『はるかに、会いたいために時間を作ったなんて言えないな!』心の中では、自問自答しながら自分を納得させていた。

木嶋は、はるかに、

「横浜駅に着いたら、連絡をしますよ!」はるかに伝えた。

はるかは、

「連絡を待ってますね!」いつもより、声のトーンが上がっていた。

木嶋は、送迎バスが最寄り駅に着いた。

最寄り駅の階段を、ステップを利かせながら、一段ずつ軽快に下りて行く。

階段を下りきる直前に、

「スルッ」と前のめりになりながらも、体勢を立て直したのだった。

駅のコンコース内にある、コンビニに寄り、夕刊紙と缶コーヒーを買い、改札口に向かった。

改札を入り、階段を下りて行く。

階段を下りたら、電車の発車ベルが、

「プルー」鳴っていた。

ドアが閉まる直前に、木嶋は、電車に飛び乗った。

木嶋を乗せた電車は、

「ガタン、ゴトン」音を立てながら、最寄り駅を出発したのだ。

電車が、乗り換え駅に、まもなく到着するときに、木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」再び、鳴っていた。
「もしもし、はるかですが…。」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「今、電車の中ですよ！」はるかに、小さい声で話していた。
はるかも、木嶋が、電車の中と言うのを察知して、
「横浜にいますから着いたら連絡を下さい。」手短に、木嶋に伝えたのだった！
木嶋は、
「了解しました。」はるかに伝えて電話を切ったのだった。
乗り換え駅から急行に乗り、横浜駅に到着する時間を計算して、
「あと15分ぐらいで、横浜駅に着きます。待ち合わせ場所を教えて下さい。」はるかにメールを送信した。
はるかから、メールが来た。
「待ち合わせ場所は、いつも行くコーヒーショップ『Y』にします。座席は、2Fで待っていて下さい。」
木嶋は、速やかに、
「了解しました。」メールを返信したのだった。
木嶋を乗せた電車は、まもなく、はるかが待つ横浜駅に到着するのであった。
横浜駅のホームに着いた木嶋は、階段を下り、改札口を出て、はるかとの待ち合わせ場所である，コーヒーショップ『Y』に、
「カポッ、カポッ、カポッ」と靴の音を立てながら歩いて行くのであった。

第５５話

待ち合わせ場所に着いた木嶋は、椅子に座り、通勤で背負っているリュックの中から手帳を取り出した。
手帳を取り出したのは、はるかと会った日にちや予定を書き込んであったのだ。
手帳を広げて見ていたときに、
「ピローン、ピローン、ピローン」携帯が鳴り響いていた。
はるかからであった。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。木嶋さん、今、待ち合わせ場所のコーヒーショップ『Y』にいますか？」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「待ち合わせ場所のコーヒーショップ『Y』ですが…。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「普段、横浜駅で降りても、スグにクラブ『H』に行かないといけないので、中々、時間に余裕がなくて、洋服など見る時間がないので、少しショッピングをしてもいいですか？」木嶋に話したのだ。
木嶋は、はるかと待ち合わせすると、待つ時間が多いので、正直、悩んでいたのだった。
「どうしようかな…？頭ごなしにダメとは言えないし…！」
木嶋は、決断をした。
「判りました。はるかさん、今から1時間、ショッピングタイムで行ってらっしゃい。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「本当ですか？」疑問を抱(いだ)きながら、木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「本当ですよ。先ほども言いましたが…1時間後にショッピング

を終りにして下さい。終りましたら携帯に電話下さい。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、今いる場所から動かないで下さいね。」木嶋に念を押した。

木嶋は、

「了解しました。」はるかに伝え、電話を切ったのだ。

【1時間か…！いつも待っている時間が長いから今すぐに来るように言えば良かったかも知れない！自分もバカ正直かも…。】木嶋は、自問自答を繰り返していた。

《さて、何をしようかな…。ふと…考えていた！》

隣の椅子に置いてあるリュックからマンガ雑誌を取り出した。

このマンガ雑誌は、毎週、金曜日に発売されていて、木嶋は、毎号、購入していたのだ。

マンガ雑誌を読み始めてから、20分ぐらいが経過していた。

「まだ、これくらいしか時間が経っていないのか？退屈だな！」

木嶋は、自嘲気味に、ボヤいていた。

マンガ雑誌を、リュックの中に再び入れ、手帳を取り出した。木嶋の手帳の色は、『黄色』のカバーである。

木嶋は、風水に凝っている訳ではない。『黄色』は、縁起が良い色と言われているので、手帳は、その色を購入していた。

最初に、手帳を持ち始めたときは、『黒』を購入していた。『青』を一時的に使っていた時期もあった。

手帳を見開き、12月の月間スケジュールを書き込んでいた。

木嶋は、あることに気がついた。毎週金曜日に、飲み会の予定が入っていたのだ。

「12月は多いな！」と自分に問い掛けていた。

木嶋は、家で、晩酌はしないのだ。会社の同僚や同期会とかの付き合いでしか飲まないだった。

木嶋の父親は、良く外で飲んで歩いて近所の人達に迷惑をかけた

りしていて、そのたびに、母親に迷惑をかけていた。
手帳に、はるかに購入した履歴を見ていた。
「色んな物を買っているな！」木嶋自身が驚きながら良く、「頑張っているな」と褒めていた。
それから時間が、３０分以上経過した。木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いていた。
はるかからの電話だった。
「もしも～し、はるかですが…。」
「はいは～い、木嶋で～す。」木嶋が、はるかに言葉を返したのだ。
はるかは、
「今も、同じ場所にいますよね？」木嶋に問い掛けた。
木嶋は、
「同じ場所にいますよ！」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「これから向かいますね！」木嶋に話していた。
「待っていますから早く来て下さいね！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「は～い。行きま～す。」木嶋に話して、電話を切ったのだった。

第５６話

木嶋は、はるかから電話があってから１０分ぐらい経過していた。
木嶋もイラつき始めていた。
「それにしても遅いな！何をしているのだろう…。」携帯を左手に持ち、右手を頬に当てながら、
「電話をしようかな？」と考えていた。
コーヒーショップ『Ｙ』の階段を
「カッ、カッ、カッ」靴の音が聞こえてきた。
木嶋が振り返ると、はるかが、右手に紙バックを抱えていた。
はるかは、周りを見渡し、木嶋の後ろ姿を見つけたのだ。
「お待たせしました。遅れて申し訳ないです。」木嶋に頭を下げ、座席に座ったのだった。
木嶋は、
「本当に、待ちくたびれましたよ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「本当に申し訳ないです。木嶋さんが、私に、ショッピングタイムを作って頂いたので、久しぶりに、色んなショップに行って来たり出来ました。今の私には、貴重な時間でしたよ！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「はるかさんに、そう言って頂けると嬉しいね。色んなショップに出入りすると、欲しい物が、いっぱい出てくるのではないですか？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「そうですね。ショップに出入りすると、欲しい商品が、たくさん有りすぎて整理するのに大変ですよ～。」にこやかな表情で話していた。
木嶋は、

「はるかさんは、若いので一番、最初に見に行くとしたら、やはりブランドショップに行くのかな?」はるかに問い掛けていた。
はるかは、
「ブランドショップを先に見てしまいます。私が、欲しいブランドは、一つだけではないですよ!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、驚いたように…「一つだけではないのですか?」はるかに聞いていた。
はるかは、
「女性は、一つのブランドより、二つ、三つとあるのですよ。」
木嶋を牽制(けんせい)していた。
木嶋は、去年の『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』のバックを、はるかの誕生日プレゼントに渡したのだ。
今年の誕生日プレゼントのブランド予測をしていたが、『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』だと考えていたので、
【何のブランドだろう。】予測が出来ずに混乱をしていたのだった。
木嶋は、
「今年の、誕生日プレゼントは何がいいのかな?」はるかに、恐る恐る聞いたのだ。
すると…はるかから意外なブランドの名前が挙がったのだ。
そのブランドは…
『ＨＥＲＭＥＳで欲しい商品があるのです。』
木嶋は、
「ＨＥＲＭＥＳ?」はるかに尋ねた。
「そうです…。ＨＥＲＭＥＳです。」はるかは、木嶋に話したのだった。
木嶋は、
「ＨＥＲＭＥＳって…自分の感覚だと、金額が高いイメージしかないんだよね。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、

「ＨＥＲＭＥＳは、高級ブランドですから、木嶋さんから見ると高いと感じると思います。全部が、高い商品ばかりではないのです。」

「そうなの？安い商品あるの？」木嶋は、はるかに聞いたのだ。

はるかは、

「安いのはあります。先日、木嶋さんが金額を提示して戴いたので、それに、見合った商品を探してしますよ。」

木嶋は、

「ゴメンね。はるかさんに迷惑をかけているみたいで…申し訳ない。」はるかに頭を下げた。

はるかは、

「木嶋さんから、誕生日プレゼントを頂けるのが私は、嬉しいのですよ。人によって考え方が違いますが、自分が、長く使える商品でないと…。男性の目線で買って、それをプレゼントをされても、その人の価値観を押し付けられるのがイヤなのです。また、欲しくない物を貰うよりは良いですよ！」木嶋に伝えたのだった。

木嶋は、

「前に、はるかさんに話したと思いますが…自分は、何をプレゼントしたらいいか解らないので、はるかさんに、金額提示して探した方が良いかなと思います！自分の考え方は、間違っているのかな？」はるかに聞いたのだった。

はるかは、

「私は、木嶋さんの考え方が最適だと思いますよ～」木嶋に笑顔で話したのだった。

木嶋は、嬉しそうに、

「ありがとう。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さんと一緒に話しをしていると楽しいですよ！」

「照れるじゃないですか！」木嶋は、はるかに話しながら二人で「ハハハ」笑っていたのだった。

木嶋は、

《このまま、はるかさんと、長続きすればいいな！》心の中で話していたのだった！

第57話

はるかは、
「ＨＥＲＭＥＳでも、欲しい商品が、いっぱいありすぎて、正直、悩んでいます。」
木嶋は、
「何故だろう?…恐怖心を感じて、心臓が《バクバク》鼓動が感じるのは、気のせいかな?」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「気のせいですよ。」木嶋に話したのだった。
木嶋は、
頬をついていた右手を、
【ズルッ】とテーブルから落としたのだ。
それを見たはるかが、
「フフフ」と笑っていた。
木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」鳴り響く。
はるかが、
「誰からですか…?」少しばかり機嫌が悪そうに、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、テーブルの上に置いてあった携帯に手を伸ばしたのだ。
「誰だろう…。」携帯の画面を覗いた。
麻美からの着信であった。
「麻美さんからだよ。」はるかに…話したのだ。
木嶋は、電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「麻美です。今、大丈夫かな?」木嶋に問い掛けていた。
「今、大丈夫ですが…はるかさんとデート中ですよ。」麻美に伝えたのだ。

麻美は、
「えっ…はるかさんとデート中だったの？邪魔したみたいでごめんなさい。」木嶋に謝罪をしていた。
木嶋は、
「麻美さん、気にしないで下さい。はるかさんと話してみますか？」麻美に話したのだ。
麻美は、
「はるかさんと、久しぶりに話したいな！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「はるかさん、麻美さんと話しますか？」はるかに尋ねた。
はるかは、
「チョット…私も、話しがしたいので、電話を貸して下さい。」
木嶋から携帯を受け取り話し始めたのだ。
はるかは、
「もしもし、はるかです。麻美さん、お久しぶりです。元気でしょうか？」
「うん、うん、【あっ】そうですか！」
はるかと麻美の電話での会話が、１０分ぐらい経過して、
はるかが、
「今、木嶋さんに代わりますね！」木嶋に携帯を渡したのだった。
木嶋は、
「代わらないで、そのまま電話を切ってくれて良かったのに…。」
はるかから言いながら、携帯を受け取り、再び、話していた。
「どうでしたか…。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「はるかさんの、元気な声を聞けて良かったです。今度、一緒に連れて来て下さいね。」木嶋に声をかけたのだ。
木嶋は、
「はるかさんと、相談してから麻美さんに連絡をしますね！」麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「判りました。良い返事をお待ちしております。木嶋君、はるかさんに、物を買ったりしちゃダメですよ。はるかさんは、クラブ『H』のお客さんに、物を《買って買って》とオネダリしてプレゼントを、いっぱい頂いています。その中の一人にならないように、気をつけて下さいね！」木嶋に伝えた。

木嶋は、

「警告をして頂きありがとうございます。」麻美に、話して電話を切ったのだ。

はるかは、

「木嶋さん、麻美さんは、私のことを、何か言っていました?」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「はるかさんと、デート中に麻美さんからの電話が入り、申し訳ない。はるかさんは、クラブ『H』のお客さんに、物をいっぱい買って頂いているから、木嶋君は、物を買わないように…。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「デート中に、麻美さんからの電話は、気にしていないですよ。私も、麻美さんと話しが出来て良かったと思いますよ。私も、麻美さんと話しが出来て良かったと思いますよ。はるかに話したのだ。

はるかは、

「デート中に、麻美さんからの電話は、気にしていないですよ。私も、麻美さんと話しが出来て良かったと思いますよ。《物を買わないように》って、木嶋さんに、話すなんて酷くないですか?」木嶋に話したのだった。

木嶋は、

「確かに、麻美さんが話していることは、酷いですね。自分は、気にしていませんよ。はるかさんの誕生日をお祝いしたいからプレゼントをするのです。はるかさん、もしかして怒っていますか?」

はるかの顔を見た。
はるかは、少し怒っていたのだ。
「前から話していますが、木嶋さんからプレゼントが戴けるのが最高の誕生日プレゼントになるのです。２人きりで長い時間を共有すること機会がないのですから気をつけて下さい。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「本当に、申し訳ない。」再度、はるかに頭を下げたのだ。
はるかは、
「木嶋さんに、理解をして頂きたいのですが…私は、バイト感覚でクラブ『H』で働いています。麻美さんは、夜の仕事を専門で働いています。向こうは、営業も兼ねて、木嶋さんと話していると思います。麻美さんの意見は聞かないで下さい。」木嶋に話したのだった。
木嶋は、はるかの【言葉】に衝撃を感じていたのだ。
「そう言われて見れば…麻美さんが、店を移動するたびに、富高さんと飲みに行っているからね。営業と思っていても不思議ではないね。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「木嶋さんには、私しかいない…麻美さんなんかより、ずっとずっと魅力がありますよ。」木嶋の顔を見て、真っ正面から訴えていた。
はるかの言葉に、木嶋は、
「はるかさん一筋（ひとすじ）にします。」そう答えるしか、言葉を返せなかったのだった。

第５８話

はるかは、そんな木嶋の姿を見ながら、愛しく思ったのだ。
はるかは、木嶋が、左手にしていた腕時計を見たのだ。
「木嶋さんが、今、左腕にされている時計は、ＣＡＳＩＯのＧ－ＳＨＯＣＫですか？」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「そうですよ。ＣＡＳＩＯのＧ－ＳＨＯＣＫですよ。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「腕時計は、いくつあるのですか？」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「腕時計は、２つだけですよ。自分は、仕事で出張があるわけではないので…。工場内作業ですから『カルチェ』などのブランドメーカーの時計を持つこともないかな？腕時計は、２つないと壊れた時に困るから…。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「私は、『カルチェ』の腕時計を、自分で買いましたよ。」
木嶋は、
「はるかさん、自分で買ったの？『カルチェ』の腕時計を…何か信じ難いな…！」
「木嶋さん、私を疑っているのですか？」はるかは、木嶋に問い掛けたのだ。
木嶋は、
「はるかさんを、疑っているのではないですよ。ただ、クラブ『Ｈ』にいて、誰からもプレゼントをされたことがないなんて、あり得ないと思っているのですが…。」はるかに問い掛けていた。
はるかは、
「今まで、プレゼントを戴いたことなどないですよ。」木嶋に強

調していた。
木嶋は、
「先ほど、麻美さんから電話があったでしょう?」
はるかは、
「うん、うん。」木嶋の質問に頷(うなず)いていた。
木嶋は、話しを続けていた。
「はるかさん、クラブ『H』では、色んな人に、私の欲しい物を《買って買って》とオネダリして、ブランド商品を貰っていると…麻美さんが、話していたことは事実なのかな?」はるかに聞いていた。
「クラブ『H』に来るお客さんの中には、私の気を引こうと誕生日やX-mas、ホワイトデーにプレゼントを買って持ってくる人はいます。さすがに、要らないから持って帰って下さいとは言えずに貰ってしまうのです。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「はるかさんの言葉を信じることしか、今の自分には出来ないよ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「麻美さんは、プロですから木嶋さんを振り向かせようと、私を悪者にしているのですよ。」
木嶋は、
「そうかな~!そう思いたくないよ。」はるかに話したのだ。
「木嶋さん、誰にでも優しいですから…しっかりして下さい。」はるかに叱咤(しった)されたのだった。
木嶋は、
「これから気をつけます。はるかさん、まだ、時間は大丈夫なのですか?」はるかに聞いたのだ。
はるかと木嶋は、コーヒーショップにある柱時計で時間を見たのだ。時計の針が、午後10時を回っていた!
木嶋は、

「はるかさん、時間は、まだ、平気なの…？」はるかに聞いていた。

はるかは、

「そろそろ帰ろうかな？」ホットティーを飲みながら木嶋に話していた。

木嶋は、

「そうだね。帰ろうか！」テーブルの上に置いてあったホットコーヒーを飲み干したのだった！

はるかは、荷物を持ちながら座席をたった。

木嶋は、リュックを背中に背負って席を立ち、会計伝票を右手に持ちながら階段を下りて行った。

２人の階段を下りて行く。

「カツーン、カツーン、カツーン」靴の音が、コーヒーショップ『Ｙ』に【こだま】していく。」

はるかは、一足先に、コーヒーショップ『Ｙ』の外で木嶋を待っていた。

会計を終えた木嶋は、

「今日は、長い時間ありがとうございました。」はるかに声を掛けたのだ。

はるかは、木嶋と別れる直前に、

「木嶋さん、今日は、こちらこそ楽しい時間を過ごしました。ありがとうございます。今度は、私の誕生日前日の１２月２１日土曜日ですね。近くなりましたら、また連絡します。」

木嶋に、そう言い残して、雑踏の中に消えて行った。

木嶋も、はるかの後ろ姿が見えなくなった時に、横浜駅に向かい歩き始めたのだった。

第５９話

木嶋は、電車の座席に、一人で座って考えていた。

「ＨＥＲＭＥＳか…」

心の中では、どんな商品を買うことになるのか不安を募らせていた。

自宅近くの最寄り駅に着いた木嶋は、携帯を片手に持ち歩きながら、

『ＨＥＲＭＥＳ』のサイトにアクセスをした。

携帯の画面で見ているので、さすがに商品を見ることは出来なかった。

家に帰宅して、パソコンのスイッチを入れた。『ＨＥＲＭＥＳ』のサイトに、もう一度アクセスした。

ホームページを開いた木嶋は、

「こんなに高いの…！」商品の種類と金額を見て驚いていた。

木嶋は、はるかに、会社が不況により収入減なので

「誕生日とＸ'ｍａｓプレゼントは一緒だよ。」と話してはいたが、金額にして、今、木嶋が出せる金額は、両手が精一杯だった。

両手とは、１０万円である。

木嶋の勤務している会社は、車関係の仕事をしているが、好不況の波が顕著に現れるのである。

はるかと出会った時に、木嶋の応援している野球チームは、ジャイアンツであり、その年は、日本一になったのだ。

仕事に関して言えば、会社は、どん底から、はい上がろうと、必死になっていたのだった。

木嶋は、今、乗っている車を買い替えてから2年ぐらい経過していた。

金銭的にも、あと2年支払いが残っているので、精神面でも、１０万円と言う金額は、今の木嶋にとってプレッシャーでもあったの

だ。

「果たして、はるかに、こんな金額を出していいものなのか？麻美さんが言う通り、他のお客さんからもっと高価な商品を貰っているのではないか？」そう感じていた。

「ＨＥＲＭＥＳ」のホームページからＹａｈｏｏ！のトップページに戻り、他のブランドメーカーのホームページをクリックした。

「ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ」、「ＧＵＣＣＩ」などのホームページを見ていた。どこのブランドも商品の種類が多く、金額が出ていないのもあったのだ。

木嶋は、パソコンの電源を切り、布団の中に入った。

次ぎの日、朝、早く起きた木嶋は、一人で横浜駅に向かったのだ。横浜駅を下りて、向かった先は、高島屋のブランドショップがある１Ｆと２Ｆに歩いて行ったのだ。

目的は、ブランドショップに置いてあるカタログを取りに行き、参考資料として家で見るためであった。

色んなブランドカタログを手に持ちながら、木嶋は、横浜駅をあとにしたのだった。

再び、家に帰り、ブランドカタログをパラパラ見ていた。

「どこも金額の桁が違い過ぎる。」それが、木嶋が抱いた印象だった。

前日、はるかに会ったとき、「ＨＥＲＭＥＳ」でも安いのがあると木嶋に話していたことを思い出したのだ。

「今から、また横浜に行くのも、身体的にも辛い。仕事帰りに、セレクトショップに寄って見よう…。そこにヒントがあるかも知れない。」木嶋は、仕事帰りにセレクトショップを寄ることに決めたのだ。

会社に出勤して、帰る時間になり、ロッカーで着替えていた木嶋は、

「木嶋君、元気かな？」右肩を、

「ポン」と叩いたのは、富高さんだったのだ。

「どうしたの?浮かない顔をして…」木嶋に声に掛けた。
木嶋は、
「いや～、はるかさんのことで悩んでいるんだ。」富高さんに伝えたのだ。
「悩みって何かな…自分で良かったら話して見てよ。」木嶋に話していた。
「はるかさんのプレゼントで悩んでいるんだ。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「はるかさんって…クラブ『H』のはるかさんだよね。」木嶋に尋ねたのだ。
「クラブ『H』のはるかさんですが…誕生日とX-masプレゼントを一緒に渡すことで悩んでいるよ。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君が、プレゼントで悩むのは、分かるよ。はるかさんは、若いから『ブランド物』が欲しい年代だよね!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そうですよ。はるかさん、プレゼントしてくれるなら、ブランドの『HERMES』の商品がいい…と、はるかさんが言うんだよね。」富高さんに伝えたのだ。
「自分には、『HERMES』って高いイメージしかないんだよね。」富高さんも同じ意見だったのだ。

第６０話

木嶋は、

「やっぱり、そう感じるよね！自分が、『ＨＥＲＭＥＳ』というブランドメーカーの名前を聞いた瞬間、あぁ～聞いたことはあるが、実際、プレゼントを贈る立場になった時に、怖いなと思ったんだ。」富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「自分は、女性に対してプレゼントを贈った経験がないから何と言っていいか判らないよ！はるかさんも、木嶋君の財政事情って理解をしているのかな？」木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、

「理解はしていると思います。」富高さんに話しをしながら会社のバスが最寄り駅に着いたのだ。

会社のバスを下りた木嶋と富高さんは、最寄り駅から程近い、焼き鳥屋「鳥太郎」に歩いて行った。

焼き鳥屋「鳥太郎」の暖簾（のれん）を潜（くぐ）り、会社の先輩である小室さんと同僚の大森さんに合流したのだ。

小室さんと大森さん、富高さん、木嶋の４人が久しぶりに揃って飲むのは１年ぶり位であった。

木嶋は、小室さんの目の前に座り、富高さんも木嶋の右隣りに座った。

小室さんは、

「木嶋、まだ、横浜の若いお姉ちゃんのお店に行っているのかな？」木嶋に問い掛けていた。

木嶋は、

「横浜と言っても、３カ所ありますよ。どこを指（さ）していますか？」

小室さんに聞いていた。

小室さんは、

「どこを指しているかは、木嶋が、お気に入りの女性がいるところだよ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「横浜駅から近い店ですよ。」小室さんに悪戯(いたずら)ぽく話していた。

小室さんは苦笑いをしながら、左横に座っていた大森さんが、木嶋に話しかけてきた。

「確か…はるかちゃんとか、何とか言っていたよね！」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「大森さん、良く名前を覚えていたよね！」大森さんに感心していた。

大森さんは、

「当たり前ではないですか？いつも、自分がいる場所で、富高さんと話しているから覚えたくなくても耳に入りますよ。」木嶋に、少し怒った口調で話していた。

木嶋は、

「大森さんだって、同じではないですか？」大森さんに聞いていた。

大森さんは、

「何が同じなのですか？」木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、

「何が同じかって…大森さんも、夜のお店のお姉さんと付き合っているじゃないのかね！」大森さんに話したのだ。

小室さんは、少し酔っ払い気味に…

「大森、お前も夜の店のお姉ちゃんと付き合っているのですか？」大森さんに尋ねたのだ。

大森さんは、

「木嶋君が、《でっちあげ》で話しているのですよ。小室さんも、変な誤解をされては困りますよ。」小室さんに話したのだ。

小室さんは、

「木嶋、大森が、《でっちあげ》だと話しているぞ…。」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「大森さん、《でっちあげ》なんて…随分なことを言いますね！」大森さんに伝えたのだ。

大森さんは、

「自分は、真実を話したのです。根も葉も無い噂を流して話しをされては、困るんですよ！」木嶋に話しかけたのだ。

木嶋の右横に、座っていた富高さんは、

「木嶋君の話していることは、信憑性（しんぴょうせい）があると思いますよ。大森君も、本当のことを話した方がいいよ。」大森さんに伝えたのだ。

大森さんは、

「本当のことは、今、話した通りですよ。」ビールジョッキに手をやり、ビールを飲み干していた。

木嶋は、呆（あき）れた表情を出し、

「まっ、いいかな？大森さんが、そう主張しているのだから…いずれは、本当のことが判ると思いますよ！」小室さん、富高さんに同意を求めたのだった！

焼き鳥屋「鳥太郎」での宴会は、最高潮に達していたのだ。

第６１話

焼き鳥屋「鳥太郎」から出た木嶋、富高さん、小室さん、大森さんは、最寄り駅に向かって歩いていた。

木嶋は、

「大森さん、どうするのかな？」大森さんに聞いていた。

「二次会あるの？」少し困惑した顔を出していた。どうやら、翌日に予定があるらしく、駅前にあるバスロータリーに向かい、バスで帰ろうとしていた。

木嶋は、

「どこに帰るのかな？」大森さんに尋ねていた。

大森さんは、

「どこに帰ろうがいいじゃないか？」赤い顔をしながら、木嶋に言葉を返していた。

小室さんは、酔っ払い気味に

「大森、もちろん茅ヶ崎に帰るんだよな！」大森さんに問い掛けていた。

大森さんは、

「当たり前じゃないですか！」小室さんに話したのだ。

木嶋は、

「小室さん、違いますよ。茅ヶ崎に帰りません！今、湘南市に住んでいると言っていますよ。」小室さんに伝えたのだ。

「湘南市？木嶋、そんな新しいとこ出来たのか？」小室さんは、木嶋に聞いていた。

「大森さんと昼休みに話しますが、いつも、そう言われていますよ。湘南市に住んでいるってね！」木嶋は、小室さんと富高さんに話したのだ。

富高さんも、

「自分も、初めて知ったよ！そんな新しい町が出来たなんてね！

驚きだよね。」
木嶋と2人で、
「ハハハ」と笑っていたのだ。
大森さんは、
「木嶋君、酷いことを言うよね。」木嶋に反論をしたのだ。
木嶋は、
「何が酷いのですか？いつも大森さんは話しているではないですか？湘南市だって…」
小室さんも、
「ハハハ」と笑っていたのだ。
街は、忘年会シーズンと言うこともあり、ホロ酔い気味の年配方
「俺は、一旗挙げるぞ。やってやるぞ。」絶叫している若者
手を繋ぎ、肩を寄せ合って、街をカップルたちが歩いていた。
木嶋は、
「大森さん、また来週。湘南市に気をつけてお帰り下さい。」頭を下げて大森さんと別れたのだった。
小室さん、富高さん、木嶋の3人は、地下のコンコースまでエスカレーターで降りて行ったのだ。
地下のコンコースに降りた3人は、
「これからどうしますか？」木嶋は、富高さんと小室さんに問い掛けていた。
富高さんは、
「小室さん、どうされますか？」小室さんに聞いていた。
小室さんは、
「富高は、どうすんだ。」富高さんに尋ねていた。
「木嶋君は、どうするの？」富高さんは、木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「どうするかと言うと…。そうだね～。はるかさんのいる横浜のクラブ『H』に行こうかなと考えているのですが…。」富高さんに話したのだ。

富高さんは、
「木嶋君も、はるかさんのことが好きなんだね！」木嶋に伝えながら苦笑いを浮かべていた。
富高さんの右横にいた小室さんは、
「よし、決まった。横浜に行くぞ！」木嶋と富高さんに話しながら、夜空に向かい、右手の拳（こぶし）を振り上げていた。
木嶋は、
「本当に行くのですか？」半信半疑の気持ちを抱きながら小室さんに聞いていた。
小室さんは、
「俺が行くと言ったら行くんだよ！」
富高さんは、
「木嶋君、こう小室さんが話しているのだから一緒に連れていこうよ！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「ＯＫです。」富高さんに言いながらコンコースを歩き始めた。
歩き始めてから、どのルートで行こうかと考えあぐねていた。悩んでいた。振り返ると富高さんと小室さんは、市営地下鉄のホームに向かっていた。
２人のあとを、追い掛けるように木嶋は、走っていた。
「お～い。待って下さい。」息を切らしながら、市営地下鉄の改札前に来たのだった。
普段、木嶋は、相鉄線で通勤しているが、富高さんと飲みに行く時は、市営地下鉄にしたり、相鉄線にしたり、飲みに行く場所によって臨機応変に対応していた。
今回は、市営地下鉄を選択したみたいである。
小室さんも、通勤は、市営地下鉄を利用をしていたのであった。
木嶋は、財布を取り出し、横浜駅までの運賃表（プライスボード）を見上げ、キップ券売機でキップを購入したのだ。
小室さんの右手には、小さなビニール袋を持っていた。

木嶋は、
「小室さん、その中に何が入っているの?」小室さんに尋ねた。
小室さんは、
「うん。これか?ビールだよ。富高の分と木嶋のも入っているよ!」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「これから、横浜駅で降りるのに、まだ電車の中で飲むのですか?」小室さんに聞いたのだ。
小室さんは、
「着くまで時間があるだろ?富高に聞いたら飲むと言っていたから買ったよ!」木嶋に伝えたのだ。
木嶋の脳裏には、富士松さんとはるかのことが、過(よ)ぎっていたのだ。

第６２話

「何故？２人のことが気になるのだろう？」
はるかとは、一緒にいる時間が少ないが、会ってはいるのだから気にはならないはずである。
富士松さんのことになると、心臓が妙に緊張感が出てくるのだ。
木嶋自身が、想いを伝えれば問題ない。
「ジギルとハイドに例えれば、ジギルの方が優位に立っているのか…それともハイドか…。」そう考えると悪戯に時間だけが過ぎ去って行くのだった。
小室さん、富高さん、木嶋の３人は、市営地下鉄の最後尾にある、対面型のシートに座った。
木嶋は、考えていた。
「現状を打破するには、どうすればいいのだろう？」普段なら明るく、立ち振る舞いをするのだが、この時ばかりは、その表情が消えていた。
そんな表情を悟ったのか小室さんは、
「木嶋、どうしたんだ？」木嶋に声をかけた。
木嶋は、
「いや～何でもないよ！大森さんが無事に帰れたのだろうか…心配していたんだよね。」小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「木嶋、大森のことじゃないだろう。本当のことを話しなさい。」
木嶋に問い詰めた。
木嶋は、
「何でもないよ。」小室さんに再度、話したのだ。
小室さんの左隣りにいた富高さんは、
「木嶋君、悩み事があるなら言って下さい。解決出来る問題なら話しが出来るから…」

木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「富高さんに言われたら話した方がいいかな?」富高さんと小室さんの前で話し始めたのだ。
「好きな人が会社と表にいます。どちらも、一長一短あるので、選択が難しい。どうすれば想いを伝えればいいのか判らないんだよね。自分自身が…。」
富高さんは、
「木嶋君、好きな人って誰かな?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「一人は、当然…はるかさん。もう一人は…会社内にいますが…あえて名前は言いません。秘密です。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「木嶋君、はるかさんは当然だとしても…もう一人…教えて欲しいけど…言いたくないなら言わなくてもいいよ。」木嶋に話したのだ。
小室さんは、
「木嶋が、お気に入りのはるかちゃんは、クラブ『H』に今日はいるのか?」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「今、確認します。」小室さんに伝えて、木嶋は、後ろのポケットにある携帯を取り出し、クラブ『H』に電話をした。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いている。
「クラブ『H』でございます。」若い男性の声が、携帯から聞こえてきたのだ。
木嶋は、
「自分は、木嶋と言いますが…今日は、はるかさん、お店に出ていますか?」若い男性に尋ねた。
若い男性は、
「はるかさんですか?今日は…店に来ていますよ。」木嶋に言葉

を返したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。」そう言いながら、電話を切ったのだ。
「小室さん、富高さん、今日、はるかさんは、店に出ています。時間に制限がある女性なので横浜駅に着く時間を確認しますので、少し猶予を下さい。」木嶋は、話しながら携帯のお気に入りに入っている、【乗換案内】のサイトに接続した。
いつの間にか、電車が発車していたのだ。酔っ払っているからなのか、
「え～、次の停車駅は…戸塚～。戸塚～。」車内アナウンスが聞こえてきたのだ。
富高さんは、
「え～。戸塚なの？木嶋君、戸塚で乗換でいいのかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「戸塚で乗り換えましょう。」富高さんに伝えた。
小室さんは、まだ、ハイテンションな状態であった。
「小室さん、次で降りますよ！」木嶋は伝えた。
「戸塚。戸塚です。」車内アナウンスが聞こえたと同時に、
「ピンポン、ピンポン」ドアが開いた。
エスカレーターを上り、改札口を出た木嶋、富高さん、小室さんの3人は、ＪＲの改札口に向かったのだ。
改札口を入り、電車が入ってきた。
「プルー」発車ベルが鳴り響く戸塚をあとに、横浜駅に向かったのだ！

第６３話

木嶋と富高さん、小室さんを乗せた東海道線が、「ガタン、ゴトン」音を出し、吊り革が揺らしながら走行している。

木嶋は、気にしていた。「はるかは、自分たちが行くまでにクラブ『H』いるのだろうか?」一抹の不安を抱えながら座席に座っていたのだ。

木嶋は、左腕にしている腕時計を見た。

「時刻は…午後９時３０分過ぎか…はるかさん、まだ、勤務している時間だから大丈夫かな?そうだ!横浜ではなくて、関内に行ってもいいかな?麻美さんや玲さんもいるから安心。」そう考えていた。

木嶋は、

「横浜に着いた時間で、関内に、変える場合もありますがよろしいですか?」富高さんと小室さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「そうだね。横浜に着いた状況で、関内に変えてもいいよ。前に、はるかさんと話した時に聞いたけど、家に門限があるんだよね。今どき珍しいよね。」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「はるかさんの家に、門限があるなんて信じていないが、信じるしか出来ないよ。」富高さんに同意を求めたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、そうだよ。はるかさんを信じないと信頼関係は成り立たないよ。」木嶋は、富高さんの言葉に理解をしたのか、首を縦に頷(うなず)いていた。

木嶋は、うたた寝をしていた小室さんが声を大きくして起きてきた。

「木嶋、今、どの辺りだ！」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「もうすぐ、横浜ですかね！」小室さんに答えたのだ。
車内アナウンスが、
「間もなく、横浜～。横浜に到着です。」
電車が、横浜駅の構内に入り、
「プシュー」音を立てて、ドアが開いた。
ホームに降り立ち、階段を降りて行く。
木嶋、富高さん、小室さんは、横浜駅の改札口を出て、右手を歩いて行く。
木嶋は、もう一度、腕時計で時間を確認したのだ。
時刻は、午後１０時３０分近くになろうとしていたのだ。
時間的に、はるかがいるか、いないか、微妙なタイミングだった。
木嶋から見れば、クラブ『H』で、はるか以外の女性を指名したのは、麻美だけである。
はるか以外にも、クラブ『H』の中には、魅力的な女性は、数多く在籍している。
木嶋にとっては、はるかといた方が気を使わないでいいのだ。お互いがリラックス出来るのであった。
はるかが、他のお客さんから指名を受けていても、自分のところに来る間（あいだ）、別の女性たちと話していても、はるか以外、指名することは考えなかったのだ。
それだけ、木嶋は、はるかが好きなのだ。
「小室さん、富高さん、クラブ『H』に行きましょう。」
木嶋を先頭に、小室さん、富高さんは、後ろを歩いていた。
橋を渡り、鉄の階段を再び、
「カツン、カツン、カツン」靴の音を響かせながら、クラブ『H』前にある階段を上っていく。
クラブ『H』のドアを開けて、店内に入ったのだ。
「いらっしゃいませ！」若い男性店員さんの威勢のいい掛け声が

聞こえてきた。
店員さんは、木嶋に、
「誰を指名しますか?」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「はるかさんをお願いします。」店員さんに伝えた。
店員さんが、
「はるかさん、ご指名入りました。」店内に声が響いていた。
少しして、
「コッ、コッ、コッ」ヒール音を響かせて、はるかが木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋さん、こんにちは。富高さん、お久しぶりです。」木嶋と富高さんに声をかけたのだ。
「はるかさん、お久しぶりです。」木嶋は、はるかに声をかけた。
はるかは、
「見かけない方がおられますが、どちらの方ですか?」富高さんに尋ねた。
富高さんは、
「こちらの方は、小室さんと言います。同じ会社の先輩です。職場は、木嶋君と一緒です。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「初めてまして、はるかと言います。よろしくお願いします。」
小室さんに挨拶(あいさつ)をしたのだった。

第６４話

小室さんは、
「どうも、初めまして。小室と言います。」はるかに挨拶をしたのだ。
はるかは、
「小室さん、今日、こちらに来る時に、木嶋さんから私のことを聞いてきたのですか？」小室さんに尋ねたのだ。
小室さんは、
「えぇ～、はるかさんのことを、木嶋から電車の中で聞きながら来ましたよ。」はるかに伝えた。
はるかは、
「木嶋さんは、何て話していたのですか？」
小室さんは、煙草に、火を点けようとライターを手にした時、はるかが、小室さんの煙草に火を点けた。
小室さんは、
「ありがとう。木嶋は、メチャクチャ可愛いと話していましたよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「木嶋さん、そんなことを言われたのですか！」はるかの左横にいた木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「自分が感じた第一印象を話したのです！何か問題でもありますか？」はるかに聞いていた。
はるかは、
「問題なんかありませんよ！そんなことを、言われたら照れるじゃないですか？」木嶋の右腕を軽く叩いたのだ。
小室さんの右横に、若い女性が座った。名前は、「さやか」と言うらしい。富高さんの右横には、「くるみ」と言う女性が座った。

はるかは、
「初めて会いますが、結構、長く働かれているのですか？」同じテーブルに座った女性たちに声をかけていた。
さやかも、くるみも、最近、クラブ『H』に入ったばかりみたいである。
そんな、はるかの接客スタイルを間近に見ていると、長く、クラブ『H』にいる雰囲気を醸し出していた。
木嶋は、
「はるかさん、来年春、卒業だよね。まだ、続けるつもりなの？」はるかに聞いていた。
木嶋自身は、はるかが、学校を卒業してからクラブ『H』を継続する、しないの意思を一度、確認したかったのだ。
常日頃から
「いつまでも、この世界に居て欲しくない。就職するのなら、その道で歩いて行くのがベストな選択。」そう願いつつ、会うたびに、はるかに話していた。
はるかは、木嶋の話しを流す悪い癖（クセ）が、時々出るのだ。
はるかは、
「私は、来年の春でクラブ『H』を辞めますよ。」木嶋は、その言葉を、はるか自身の口から聞いたとき、
「ホッ…と」安堵の表情を浮かべていた。
その時、木嶋の脳裏を掠（かす）めたのは、はるかと別れる日が近いのかなと思ったのだ。
木嶋と、はるかが、友達としての付き合いがあるとは言え、クラブ『H』で会話するときに注意をしなければならないのである。
何故なら、クラブ『H』に勤務している女性が、プライベートで会うのは禁止みたいである。見つかったら【クビ】らしい。
木嶋は、はるかと会う時は、いつも冷や汗をかいているのだった。
クラブ『H』に来る時は、はるかが、居る日でないと、木嶋も来ないのだ。

はるかが、居ない日に来ても、何処か抜け殻のようになってしまう。

富高さんが来れなくて、木嶋一人で、クラブ『H』に飲みに来ていても、いつも、はるかが、木嶋の横に座っているのだ。それが日常の光景であった。

木嶋が、他の女性に、目を奪われていると、はるかは、スネたり、我が儘を言ったりして木嶋を困らせるのであった。

はるかが知っている、麻美さんなら、寛大な気持ちになってくれるのだ。

木嶋は、麻美さんの店に富高さんと飲みに出かけた時は、必ず、はるかに、報告しているのだ。

はるかは、

「私より可愛い女性はいたの？」口癖（くちぐせ）のように聞くのだった。

木嶋は、

「はるかさんより可愛い人はいません！」はるかに正直、答えていたのだ。

はるかと、一緒にいる時間が長いので、他の人を見ても友達になりたいと思わなかったのだ。

第６５話

木嶋は、はるかのことが好きで、「ぞっこん」なのだ！
木嶋の左横にいた富高さんは、
「木嶋君、今度、はるかさんと何処かに遊びに行ってくればいいのに…。」木嶋に話したのだ！
木嶋は、
「何処かに遊びに行きたいね！と…いつも、はるかさんと話してはいるよ！実現するのは、いつの日になるのか分からないよ。はるかさんも忙しいみたい。」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「はるかさん、木嶋君とは、一日、デートする時間はないのかな？」木嶋の右横にいた、はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「一日、予定を空けたいのですが…中々、都合がつかないのですよ。」富高さんに話したのだ。
木嶋は、
「はるかさん、仕方ないよね。まだ、若いし同級生たちと遊びたい年代。富高さんに、理解してほしいのは、あくまで、はるかさんと、今、現在、友達関係ですよ。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「アッ、そうだったんだよね。木嶋君、何か変なことを言ったみたいで悪いね！はるかさんと交際していると思っていたんだ！木嶋とはるかに話していたのだ。
木嶋の左横にいた、くるみさんが、
「はるかさん、木嶋さんと交際しているのですか？」はるかに尋ねた。
はるかは、
「先ほども、富高さんが話した通りで、友達として付き合ってい

ますよ。」くるみに言葉を返したのだ。
くるみは、
「クラブ『H』の女性が、お客さんとプライベートで会っていても大丈夫なのですか?」はるかに聞いていた。
はるかは、
「プライベートで会うのは禁止です。お客さんと会っているのが、クラブ『H』の関係者に見つかったら、クビになりますよ。」くるみに話したのだ。
くるみは、
「以前からお付き合いがあり、自分の男性友達でもダメなんですかね?」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「その辺りは、難しい判断基準ですよね。万が一、クラブ『H』の関係者見つかったら、自分が、正直、話せばいいのではないでしょうか?」くるみに伝えたのだ。
はるかの左隣りにいた、木嶋が頷いていた。
木嶋は、
「くるみさん、今、はるかさんが答えを話していたよね。」くるみに話したのだった。
くるみは、
「分かりました。大変、勉強になりました。」木嶋とはるかに話したのだ。
くるみは、再び、富高さんと話し始めていたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、富高さんにあとで話して下さいね。」木嶋に注意をしたのだ。
木嶋は、
「何を、富高さんに話せばいいの?」戸惑った表情を見せたのである。
はるかは、

「何を話せばいい？私たちがプライベートで会っていることを話すのはいいですが、クラブ『H』で話さないで下さいと伝えて下さい。私が、クビになったら木嶋さんに迷惑がかかりますからね。」

木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「分かりました。帰り道で、キツク話しますよ。」はるかに話したのだ。

小室さんが、木嶋の方に向かって、何かシグナルを出していた。

木嶋は、はるかの元から席を立ち、小室さんの席に歩いていく。

「小室さん、今のシグナルは何ですか…？」木嶋が、小室さんに尋ねたのだ。

小室さんは、

「木嶋、そろそろ帰るぞとシグナルを出したよ。」木嶋に伝えた。

木嶋は、

「もう、そんな時間ですか？」小室さんに話し、左腕にしていた腕時計で時間を確認した。

時刻は、午後１１時になろうとしていたのだ。

木嶋は、富高さんの席に歩いていた。

「富高さん、終電もなくなりますので帰りましょうか？」富高さんに伝えたのだった。

富高さんは、

「そんな時間なの？もう少し楽しみたいが帰ろうか！」木嶋の意見に同意をしたのだった。

木嶋は、はるかに向かい×印を出した。

はるかは、木嶋からのシグナルに気がついた。

近くにいた男性店員を呼び、会計伝票を受けとった木嶋は、小室さんと富高さんに、金額の話しをした。

金額は、３等分にして、集めたお金を、はるかに預けたのだ。

はるかは、木嶋から預かったお金を店員さんに渡したのだった。

木嶋は、席を立ち、はるかから上着に袖を通し、リュックを背負

った。

小室さん、富高さんも席を立った。

はるかたちは、店の外に出た。

「ありがとうございました。」鉄の階段を下りて行く木嶋たちに声をかけたのだ。

木嶋たちは、手を振りながら、はるかたちと別れ、横浜駅をあとにするのであった。

第６６話

ＪＲ横浜駅を出た木嶋、小室さん、富高さんは、東海道線の対面シートに座っていた。

小室さんは、

「木嶋、今日のクラブ『Ｈ』に行って良かったよ。お気に入りの、はるかちゃんに会ってみて、少し話したがいい女性じゃないのか？木嶋は、騙されやすいから気をつけて、接した方がいいぞ。」木嶋に話していた。

木嶋は、以前、三谷さんにも同じことを言われたことを思い出し気がついたのだ。先輩方は熟知していたのだった。

富高さんは、

「木嶋君に誘われない限り、クラブ『Ｈ』とかには飲みには行かないからね。たまには、こう言う店に来ないとダメだよね！」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「自分も、一人じゃ行きずらいね。麻美さんの店に行くのも、玲さんの店に行くのも、横浜駅から戻る感じになる。自分は、横浜駅で乗り換えるから、どうしてもクラブ『Ｈ』が行きやすい！いつも、小室さんや富高さんを無理矢理連れていって申し訳ありません。」小室さんと富高さんに謝罪をしたのだ。

小室さんは、

「その瞬間を、楽しめればいい。自分も、若いときに木嶋みたいに恋をしたり、今では、クラブは多いが前は、こんなになかったよ。」

木嶋は、

「小室さんにも、そんな時代があったの？以外と言えば以外。」

小室さんに聞いたのだ。

「両手に華と言う諺（ことわざ）があるが、モテたぞ…昔は…」木嶋に話した

のだ。

「昔って、何年前ですか?」小室さんに尋ねたのだ。

小室さんは、

「何年前かな…今から25年前ぐらいかな?」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「25年も前なら随分、古い話しですよ。10年を一昔前と言いますが、二昔前ぐらいですよ!」

小室さんは、

「そんなに昔になるのか?」木嶋の言葉に納得したのだ。

小室さんは、酔っ払いながらも、毎日の習慣で、電車の中でビールを飲むのが日課になっていた。

この日は、会社の最寄り駅や横浜のクラブ『H』で飲んでいたので、ビールを買わないでいた。

富高さんは、飲み足りないらしく横浜駅の売店でビールを片手に話しをしていたのだった。

電車が間もなく、小室さんと木嶋の降りる駅に着こうとしていたのだ。

富高さんは、千葉の船橋まで帰るので、東京駅から乗り換えて行くか秋葉原駅で乗り換えるか、木嶋が、携帯で時間検索をしていた。

「富高さん、東京駅で乗り換えで行くなら乗り換え回数は、一回で済みます。秋葉原駅で乗り換えとなると、二回乗り換えになりますが、どうしますか?」木嶋は、富高さんに尋ねたのだ。

富高さんは、

「乗り換えの回数は、少ない方がいいね。着く時間は、どちらが早いのかな?」木嶋に問い掛けていた。

「着く時間は…どちらが早いかと言うと…東京駅で乗り換えた方が早いね。」富高さんに伝えたのだった。

富高さんは、

「東京駅で乗り換えて行きます。少しでも、早く家に帰りたい。待ち時間が長いと冬の寒さで、風邪やインフルエンザになったりす

ると大変。体調管理はしっかりしないとね。」木嶋に話したのだ。
木嶋と小室さんは、富高さんの答えに納得をしたのだった。
電車が、
「プシュー」とドアが開いた。
木嶋と小室さんは、電車から降りたのだ。
ドアが閉まり、富高さんと別れたのだ。
二人は、改札口に向かい、最寄り駅から出たのだ。木嶋は、歩きで家に帰って行く。小室さんは、タクシーで家路に向かって行ったのだ。
木嶋は、家に帰る途中で、一通のメールを受信した。送信者を見ると、はるかからであった。

第67話

木嶋は、メールを見たのだ。
はるかからだった。
「今日は、クラブ『H』に来て戴きありがとうございました。木嶋さんが、来るなんて思いもしませんでした。また、会社の人たちを連れてきてくれたことに感謝をしています。」木嶋に嬉しいメールを送った。
木嶋は、
「ありがとうございます。機会がありましたら、会社の先輩や同僚を連れていきます。」はるかにメールしたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、また、連絡をします。」木嶋にメールを送信したのだ。
木嶋は、その日、興奮していて、寝付くのに時間がかかった。
いつもなら、風呂に入って、寝床にある本などを見ながら寝るのだ。
この日も、風呂に入って本を読んでいたが寝れず、深夜になって寝たのだ。
木嶋は、次の日、麻美さんに電話したのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いている。
麻美が電話に出た。
「もしも～し、麻美ですが…木嶋君、お元気でしたか?」
木嶋は、
「元気ですよ。」麻美に答えた。
麻美は、
「まだ、はるかさんと遊んでいるの?」木嶋に問いかけた。
「まだ、遊んでいますよ。昨日、はるかさんのクラブ『H』に富高さんと会社の先輩と3人で飲みに行きました。」木嶋は、麻美に

話したのだ。
麻美は、
「はるかさん、まだクラブ『H』に働いているのですか？辞めたなら私の店に来てもらいたいと考えていたのですが…」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「麻美さん自身、はるかさんのことを良く思っていないじゃないですか！」麻美に反論したのだ。
麻美は、
「個人的には、好きになれないですが、お店的に言わせてくれれば可愛いから引っ張りたいのよね。」木嶋に伝えたのだった。
木嶋は、
「麻美さんが、話している通り、はるかさんは可愛いですよ。」麻美に誇らしげに話したのだ。
麻美は、
「木嶋君が、はるかさんの携帯番号やアドレスを教えてくれれば、直接、話しをしたいと思いますが…教えてくれるかな？」
木嶋は、
「本人の許可なく、携帯番号やアドレスを教えることは出来ません！教えたら自分が怒られてしまいます。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「分かりました。いつか【私が、自分の店を持つときにはるかさんと一緒に働きたい。】と伝えて下さい。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました。はるかさんに伝えておきます。麻美さんの店には、自分たちの仕事の最終日に、富高さんと行くので、それまで日にちがありますが待っていて下さい。」麻美に話し、電話を切ったのだ。
木嶋は、翌週、会社に出勤した日に、昼休み時間に、小室さんと富高さんの元に歩いて行った。

木嶋は、
「先日は、ありがとうございました。また、機会があれば一緒に行きましょう。」小室さんに伝えたのだ。
小室さんは、
「この間は、ありがとう。また行こうな！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「また、行きましょう！」小室さんに伝え、その場を離れたのだ。
木嶋は、富高さんのいる場所に歩いて行った。
木嶋は、
「富高さん、先日は、ありがとうございました。はるかさん、喜んでいたよ。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「本当？喜んでくれたなら行って良かったね！また、行こうよ！」
木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「そうだね。また、行こうね！」富高さんに伝えたのだった。

第６８話

富高さんの元を離れた木嶋は、大森さんのいる場所まで歩いて行った。

木嶋は、

「大森さん、先週の金曜日に小室さんと富高さんを、クラブ『H』に連れて行ったんだ。」大森さんに伝えた。

大森さんは、

「皆さん、クラブとかスナックに飲みに行くの好きだよね…。」半ば諦めに近い話し方を、木嶋にしていた。

木嶋は、困惑した表情を出していた。

「たまには、そう行った店で弾けないと、日頃からの仕事のストレスを解放するのは出来ないよ。」大森さんに尋ねていた。

大森さんは、

「仕事のストレスを溜めるのは、良くないことだよ!自分みたいに、神経性胃炎になったら、シャレにならないよ!」木嶋に問いかけたのだ。

木嶋も、胃腸が良くないので、考え過ぎたりすると、急性胃腸炎になり、心身のバランスが崩れてしまうのだ。

小室さんや溝越さんたちは、木嶋自身、胃腸が弱い話しをしていなかったのだ。

何故なら…そんな話しをしても、軽く聞き流されてしまうと考えていたのだった。

木嶋は、大森さんと、付き合い始めてから１２年になる。最初から繊細な人と思ったのではなかった。

性格的に、繊細な人と感じ始めたのは、１０年ぐらい前であった。

大森さんは、会社には、中途採用で入社してきて、木嶋より学年が、一学年違いだけなのだった。

お互いの趣味は違うが、大森さんの仕事は、木嶋たちが生産して

いるラインのサポート作業なので、いつも身近にいるのだった。
木嶋から見れば、同じ年代だからこそ、話しが合うと感じていたのだ。
小室さんが大森さんのことを知るようになったのも、木嶋が、絡んでいたのだった。
お互い、警戒心が非常に強く、ビール愛好家で、大森さんは、投げ釣りが趣味なので、小室さんや木嶋に良く話していたのだった。
大森さんは、酔いが廻ると冗舌になって行く。
木嶋は、小室さんと大森さんのスケジュール調整をするが、中々、噛み合わないのが現実であった。
そうした中で、先週の金曜日に大森さんと小室さん、富高さんと飲みに行けたのは、木嶋には、大きな収穫であった。
大森さんと富高さんも、共通するのが、釣りである。
富高さん自身も、時間があれば、地元、千葉県船橋市近郊で、一人で出掛け釣り糸を垂らしているのである。
木嶋は、両親の故郷（ふるさと）で、釣りにチャレンジしたが飽きが来てしまい、釣りは向いていないのである。
性格的に、同じ場所に留まるのが嫌いである。待つにしても、動いているなら問題はないが、渋滞しているとイライラしてくるのである。
木嶋と富高さん、大森さんも、共通の趣味がないように感じられるが、一つあるのである。
同じ刑事ドラマを良く見ていた世代である。
その刑事ドラマとは、テレビ朝日系列で放映されていた《西部警察》シリーズである。
小室さんも、この刑事ドラマの中で、出演もしているが、エンディングを歌っている俳優、石原裕次郎のファンであったのだ。
最初は、みんなが牽制（けんせい）していたが、木嶋が、事前にリサーチをしていたので、《西部警察》シリーズから話しをしたら、全員が打ち溶けていったのであった。

これが、木嶋、小室さん、富高さん、大森さんの接点であったのだ。

第６９話

みんな一つの共通点を、突破口にしながら飲んでいると話しが盛り上がっていく。
木嶋は、気がついたのだ。
共通点と言うのは、自分から探し出しさえすれば見つかると思っていたのだ。
木嶋とはるかの趣味に、共通点はない。
しかし、出会ってから一年を過ぎても、今だに新鮮な気持ちを持て続けている自分に褒めていたいのだった。
木嶋には、はるかの存在が確かに大きい。麻美や玲も、同じ同世代と言う安心感と価値観が共有が出来ているので、木嶋のプライベート環境が整って行く。
木嶋は、腕時計で時間を確認した。時刻は、午後４時過ぎであった。
「この時間なら、玲さん、起きているはず…」心を弾ませながら、思い立ったように、携帯を取り出し、玲に電話をかけたのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
木嶋は、
「おはようございます。」玲に聞こえるように声を出したのだ。
玲は、
「おはよう。お久しぶり…。」寝ぼけた声で電話に出たのだ。
木嶋は、携帯を片手に持ち、ズルッとズッコケたのだ。
「玲さん、まだ寝ていたのですか?」玲に問い掛けていた。
「うん、まだ寝ていたんだ!木嶋君の電話で起きてしまいました。」玲は不機嫌そうに木嶋に怒っていた。
木嶋は、
「玲さんの声が聞きたくてね。電話したんだ。」
玲は、

「当たったみたいで…ゴメンね！」木嶋に謝罪をしていた。
「玲さん、映画は観るのかな？」木嶋は玲に聞いていた。
玲は、
「映画？映画は観に行きますよ！何か良い話しでもあるの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「実は…映画のチケットを、地元のチケットショップで見つけて、衝動買いをしてしまいました。」玲に話したのだ。
玲は、
「何枚ぐらいあるのかな？」木嶋に問いかけていた。
「少し待って下さい。」玲に話しながら、財布の中に入れてあった映画のチケットを数え始めたのだ。
「1…2…3…4…5」全部で１０枚あったのだ。
木嶋は、
「全部で、１０枚ありますよ。」玲に話したのだ。
玲は、
「えっ、全部で１０枚もあるの？全部、私に戴けるのかな？」驚きながら木嶋に話していたのだ。
「全部は渡すことは出来ませんが…何枚か欲しいと言って戴けるなら譲りますよ。」木嶋は、玲に話したのだ。
玲は、
「木嶋君、３枚ぐらい譲って欲しいな…。」
木嶋は、
「３枚ですね。了解しました。いつ渡せばいいかな？」玲に問いかけた。
「木嶋君が、私のいる店に来た時でいいですよ！」
「分かりました。玲さんの店に行く時に渡すか…麻美さんに預かってもらうか考えますよ！」
玲は、
「麻美さんに、預けてくれるなら私自身も貰いに行きやすいから

ね。麻美さんには、何枚渡すの？」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「麻美さんには、同じ枚数を渡します。玲さんが多くて、麻美さんが少ないのはマズイと思いますが…」木嶋は、玲に伝えたのだ。
玲は、
「そうだよね。二人が枚数違うのは良くないからね！残りはどうするの？可愛い…はるかさんに、全部渡してしまうの？」木嶋の話しに理解を示しながらも気になるようで聞いていたのだ。
木嶋は、
「全部は渡しません！自分も観たい映画もあるので…期間も半年間とスパンがあるからね！」玲に話したのだ。
玲は、
「半年間も期間があるなら大丈夫だよね！その間には、長期連休もあるよね。もし、期間が終わり近くでチケットが余るなら私に下さい。」木嶋にお願いをしたのだ。
木嶋は、
「いいですよ！」玲に話しながら電話を切ったのだ！
「みんな映画が好きなんだな！」
木嶋は、ボヤきながら家に向かい歩いていた。

第７０話

玲との会話を終えた木嶋は、麻美のことが脳裏を掠めていた。
「玲さんに、話したように、麻美さんにも、映画のチケットのことを話さないとイケないな！」
この時、時刻は、夕方６時であった。
「麻美さんの出勤時間は夜７時。まだ、家を出る前。電話すれば出るかな！」木嶋は、コートのポケットに入れていた携帯を取り出した。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いてる。
麻美が電話に出た。
「もしも～し。麻美ですが…。」
「木嶋です。お久しぶりです。元気でしょうか？」木嶋は、麻美に尋ねたのだ。
麻美は、
「私は、元気にしていました。木嶋君の声を聞けて嬉しいです。」
木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「随分、嬉しいことを言いますね！照れるじゃないですか？話したいことがありまして電話をしました。」麻美に話していた。
麻美は、
「木嶋君に話したいことがあるのです。」木嶋に問いかけるように話し始めたのだ。
木嶋は、
「凄～い嫌な予感が漂っていますが…。」麻美に尋ねたのだ。
麻美は、
「最近、木嶋君、勘が鋭くなりましたね。」
木嶋は、
「やっぱり、そうなんですかの？富高さんに何て話せば良いのか

な?」麻美に怒った口調で話していた。
「富高さんが、今月末に来てくれるのは個人的には、嬉しく思います。しかし自分が店の雰囲気に慣れないのです。」木嶋に話したのだ。
「富高さん、確実にトラウマになるよ!店に行くのだって、拒絶反応を起こすよ!」麻美に話していた。
富高さんが、麻美がいる店に行く度に、麻美が辞めてしまう。偶然にしては出来過ぎている。
木嶋は、玲に聞いても、【理由が分からない】と話すのだ。
木嶋は、
「いい加減にしてほしいよ!移動先まで、ついていく自分たちが大変なんですよ!」麻美に何度も言っている台詞(せりふ)を今回も、木嶋は言ってしまったのだ!
麻美は、これくらいで凹み程、神経質ではない。図太くないと夜の仕事は出来ないと木嶋は、心の奥底で感じ取っていた。
玲も麻美も、子供がいるのだった。考えて見ると、木嶋は、今だに独身生活をしている。子供や奥さんがいてもおかしくない年齢でもある。
はるかと友達としての付き合いはあるが、告白をするタイミングを見つけられずにいるのであった。
麻美は、はるかには、批判的である。木嶋も、忠告は何度もされてはいるが、心が揺れ動くのは良くないのだ。
揺れ動くと言うことは、はるかに対する裏切り行為しかならないのだった。
「木嶋君、はるかさんと仲良くやっているの?」麻美は、木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「はるかさんとは、仲良くやっていますよ!麻美さんに、チョット聞きたいことがありますが大丈夫かな?」麻美に聞いていた。
「何だろう。聞きたいことって…凄く、ドキドキしてしまうので

すが…。」

「そんなに緊張しなくてもいいですよ！大袈裟にしないでよ！」

木嶋は、麻美に笑いながら話し…

「麻美さん、映画は観に行きますか？」

「映画は、子供と一緒に良く観に行きますよ！何か…お得な情報があるのかな？」木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「先日、地元のチケットショップで映画のチケットを、値段も安かったので、衝動買いをしました。期間も半年間あります。どうでしょうか？」麻美に尋ねていた。

麻美は、弾んだ声で…

「これから年末年始で観たい映画もあるので、譲って下さい。木嶋君の手元に何枚あるのかな？」木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「手元に…10枚あります。全部、麻美さんに譲ることは出来ません！自分も観たい映画があるので…この映画のチケットは、玲さんにも3枚譲ります。あと残り枚数は…7枚です。」麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「玲さんに、3枚譲ったなら…私も、同じ3枚下さい。」木嶋にお願いしたのだ。

木嶋は、快く、

「分かりました…3枚ですね。いつ渡しに行けばいいのかな？」麻美に尋ねたのだ。

麻美は、

「木嶋君が、富高さんと一緒に来る日で良いですよ。」

「分かりました。富高さんと店に行くまで、若干、日にちがありますが、待っていて下さい！その時に、玲さんの分も預けますので、渡して戴きたいと思います。」木嶋は、電話口で頭を下げたのだった。

麻美は、

「分かりました。玲さんには、私から連絡をしてチケットを渡しますね。来店までの間、楽しみに待ってます！」木嶋に伝えて、電話を切ったのだ！

麻美との会話を終えた木嶋は、肩の荷が降りたように、力（ちから）がフッと抜けたのだった。

木嶋の携帯が、鳴り出したのだった…。

第７１話

「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音だった。
木嶋は、携帯を取り出し画面を覗いた。
はるかからの着信だった。
木嶋は、電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…」
「私、はるかです。木嶋さん、お久しぶりです。元気でしたか？」
「お久しぶりです。元気にしていましたよ！」木嶋は、はるかに問いかけた。
はるかは、
「最近、木嶋さんからのメールもないので、どうしてしまったのだろうとチョット…不安になりながらも、声を聞きたいなと思い、電話をしました。」木嶋に伝えたのだ。
「ありがとうございます。」木嶋は、はるかに伝えたのであった。
はるかは、
「今日、何度か…電話をしたのですが…電話を掛ける度に、ずっと話し中でしたよ。誰かと話しをされていたのですか？」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「一人は、はるかさんが良く知っている人ですよ！」はるかに、意地悪チェックをしていた。
はるかは、
「誰ですか…？」
「さて、誰なんだろうね！」はるかに、答えを教えずにいた。
はるかは、
「意地悪しないで、教えている下さい。」木嶋に伝えたのだった！
木嶋は、
「キブアップするなら教えましょう！一人は、麻美さん、もう一

人は、自分の高校時代の同級生ですよ。」はるかに話していた。
はるかは、
「麻美さん、私のことで、木嶋さん自身が何か言われましたか？」
木嶋に話していた。
木嶋は、
「麻美さんは、はるかさんのことは、何も話していませんでしたよ！」はるかに伝えていた。
はるかは、
「それなら良いですが…。」ホッとしたみたいであった。
木嶋は、
「はるかさんは、映画は良く観に行くと話していたことがありましたよね？」はるかに問いかけたのだ。
はるかは、
「映画は、良く観に行きますよ！観てみたい映画も沢山ありますよ。何か良い情報でもあるのですか…？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「先日、地元のチケットショップで、映画のチケットを安く売っていたので、大量に購入したのです。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「どんなチケットでしょうか？」
木嶋は、
「半年間有効のチケットですよ。あとは、見てからのお楽しみと言うことでご理解を願いたい。」はるかに伝えたのだった。
「分かりました。木嶋さんの手元に何枚、あるのでしょうか？」
木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「自分の手元に、１０枚あります。このうち、３枚ずつ麻美さんと高校の同級生に譲ります。残り枚数は…あと４枚です。」はるかに話したのだ。
はるかは、

「麻美さんや高校の同級生に渡す枚数を少なくすることは、出来ないのですか…?」木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「減らすことは、出来ません。麻美さんや同級生に話しをしてあるので…はるかさんに、渡す枚数は、3枚では少ないですか?」はるかに尋ねていた。

はるかは、

「正直に言えば、3枚では少ないと感じます。私は、映画を観るのが好きです!木嶋さんが、私のために、多少なりとも残してくれていたので、譲って下さい。お願いします。」木嶋に頼んだのだ。

木嶋は、

「了解しました。今度、会う時に渡しますね!」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「分かりました。今から楽しみに待ってます。また、連絡をしますね!」はるかは、木嶋に伝えて電話を切ったのだ。

木嶋は、3人の意外な共通点を発見したのだった。

「まさかね!3人とも映画を好きだとはね…!」驚きを隠せずにいたのだった!

第７２話

確かに、映画を観るには観戦チケットが当たり前だと思うのは当然である。

今、映画を観るには、シネマコンプレックスが多いのが特徴である。

木嶋が、高校生になった時に、地元では、単独で映画興行を行っていた所が、一つの建物の中に入り、共通窓口にて、観たい映画タイトルを言って、料金を支払う方針に変わり戸惑いを感じていたのだ。

木嶋にとっては、映画館は、近くて遠い場所に思えた。

一人で、映画鑑賞をするには淋しく感じるのだ。

「何故、一人で映画を観るのだろう！好きな人と一緒に観れば、そんな不安を感じなくてもいいはずだ。」心の奥底での叫び声が聞こえている。

「富士松さんでも、誘って映画を観に行きたいな！当たって砕けろの精神があれば大丈夫だ。」木嶋は、富士松さんに伝えようとしていた。

富士松さんと話しをするには、どのような形を取ればいいのか判らずに、悪戯（いたずら）に時間だけが過ぎ去って行くのだ。

はるかの、誕生日プレゼントを買いに行く日は、１２月２１日の土曜日であった。

木嶋は、はるかとデートを心待ちにしていたのだ。

仕事が終わり携帯の画面を覗いた。

木嶋は、

「誰だろう！」不安感が頭を過ぎっていた。

はるかからのメール着信だった。

「はるかです。お久しぶりです。来週、２１日土曜日のことで連絡をします。待ち合わせ時間ですが…夕方５時に、横浜駅で待ち合わせでも良いでしょうか？」木嶋に問いかけメールが送信されてい

た。
木嶋は、
「夕方5時ですね。分かりました。本音を言えばもう少し早い時間が希望ですが…何とか調整は出来ませんか?」はるかにメールを送ったのだ。
はるかは、
「時間の調整はしては見ます。友達との予定が早く終れば、木嶋さんとゆっくり話しが出来たりするのですが…中々、思うようにはならないのです。」木嶋にメールしたのだ。
木嶋は、
「了解しました。21日の当日の待ち合わせ場所に着いては、自分も、会社が臨時出勤にならなければ、横浜に早く来る予定でいますので、一度、電話を下さい。」はるかにメールをしたのだ。
はるかは、
「分かりました。」木嶋にメールを終えたのだ。
「夕方5時か…。臨時出勤さえなければ、時間的には余裕があるはず。最近、有ったり無かったりだし…確率的に、50／50かな!こう言う時に限って、臨時出勤があるような気がする。」木嶋は、そう感じながらも、翌週になるのを待っていた。
翌週になり、木嶋の予感が的中する。
木嶋の元に、溝越さんが歩いて来たのだ。
「木嶋、今度の土曜日、臨時出勤して生産活動をしたいのだが、出て戴きたい。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「今度の土曜日は、出ることが出来ません!」溝越さんに話したのだ。
溝越さんは、
「何か予定でもあるのか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「友達と約束があるのです。」溝越さんに話したのだ。

溝越さんは、
「約束があるなら仕方がないかな！どうしても人がいない時には再考してもらうかも知れないがいいかな？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「その時は、相談させて戴きます。」溝越さんに話し、その場を立ち去って行ったのだ。
木嶋は、
「溝越さんのことだから、また、来るかな？」そう思いながら仕事に励んでいたのだった。

第７３話

木嶋の予感が的中する。　溝越さんが、木嶋の元に再び、歩いてきた。

「木嶋、申し訳ないのだが、土曜日、臨時出勤して戴けないか？」

木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「一日は、無理ですよ。友達との待ち合わせの時間があるので、午後3時までで良いでしょうか？」溝越さんに話したのだ。

溝越さんは、

「友達との待ち合わせと言うと…若い女性？」

「そうですよ。」木嶋が答えた。

溝越さんは、

「分かった。その時間までいいよ。あとは、残りのメンバーで何とかなるとは思うよ！」

木嶋は、

「分かりました。」溝越さんに伝えた。

溝越さんは、

「悪いな！」そう言いながら木嶋の元から歩いて行ったのだ。

木嶋は、休憩時間になった時、仕事場に置いてある携帯を手に取り、はるかにメールをしたのだ。

「はるかさん、今週の土曜日、臨時出勤になってしまいました。待ち合わせ時間には、間に合うと思いますが、時間を長く作ることが出来ずに申し訳ありません！」はるかのメールを入れ、返信メールを待つことにしたのだ。

木嶋は、人と待ち合わせなどで変更が出た時や、遅れそうな時は、連絡をするのが木嶋流なのだ。

連絡をするのが当然と言えば、当然と思うが、中には、時間にルーズな人もいる。

木嶋も、人間なので、好不調の差が激しく、体調が思わしくない時には、予定があっても、体調を優先する。

木嶋の仕事は、身体が資本。身体を壊してまでは、好きな人との付き合いでも、遠慮をするのが礼儀なのだと考えているのだった。

仕事が終わり、携帯を覗いた。

メールの着信を知らせるサインが表示されていた。

「誰からだろう!はるかからのメールなら嬉しいな!」期待と不安を胸に秘め、携帯の受信ボックスを開いたのだった。

送信者は、はるかからだった。

木嶋は、少し小躍りをしながらメールを読み出したのだ。

「木嶋さん、お疲れ様です。今度の土曜日は、仕事みたいですが、臨時出勤があるなら仕事をした方が良いですよ!待ち合わせの時間に、間に合うように来て下さい!」

木嶋は、メールの内容に、ホッとしたのだった。

当初は、臨時出勤になるとは考えていなかったのだ。

はるかが、融通(ゆうずう)を利(き)かせてくれれば、いつもよりは、長く、一緒に居ることも、話しも出来ると思っていた。

今の木嶋と、はるかに必要なのは、

「時間」なのだ。

一人で会社から家に帰り道、ふと想いにフケていた。

「はるかも、自分よりお金を持っている人と付き合っていても不思議ではない!それは、富士松さんにも同じことが言えるではないだろうか?富士松さんは素敵な人。」木嶋の思考回路が、《プスプス》と煙りを出していた!

木嶋は、考え込みやすい性格で、考えれば、考える程に、《ドツボ》に、【ハマリそう】であった。

木嶋は、

「こんな状況の時は、どうすればいいの判らなくなってきた!麻美さんに相談したくても、麻美さんは、はるかに批判的だし…玲さんに話すのも…この際、開き直ればいいかな!!」頭の中で閃(ひらめ)いた

のだった。
はるかと富士松さんに一目惚れしていて、胸が、張り裂けそうになるのだ。
これが、木嶋のウィークポイントになって行く。
この時、はるかとの友達として交際を続けて行く中で、予想をしない出来事が起こるとは、麻美や玲、会社の先輩方も気が付かなかったのだ。

第７４話

人は、何処かにウィークポイントがあるのだ。
木嶋の場合は、富士松さんとはるかであった。
はるかとの友達としての付き合いは、長くなっているが、自分にとっては、学ぶことが沢山あるのだ。
ただ、富士松さんへの想いは、木嶋の一方通行なのだ。
木嶋は、去年のＸ'ｍａｓは、はるかと出会った直後で、何も期待はしなかった。
心の中では、はるかや富士松さんから、《Ｘ'ｍａｓや誕生日プレゼント》を《貰えるかも知れない》と言う期待感を持っていたのだ。
木嶋は、はるかから、今年の誕生日プレゼントに、香水をプレゼントされたのだ。
誕生日プレゼントを、女性から貰ったのは初めてだった。それまでは、女性と交際をしたことはあるが、短期間で終り、長続きはしなかったのだ。
木嶋は、普段から香水を使えば問題はない。
職業柄、香水を使う職場ではないので困惑をしたのだ。使う場面がなく、ロッカーの中で眠っていた。
木嶋は、麻美や玲から、『Ｘ'ｍａｓパーティー』の誘いをメールや電話で、話しを聞いていたのだ。
いつものハイテンションの木嶋なら、『Ｘ'ｍａｓパーティー』に【参加する】と返事をするが、
【不参加】の返事をした場合は、木嶋の興味が薄れているのだ。
また、何処かに、一抹の【淋しさと不安】を感じているのだ。
木嶋は、携帯を取りだし
「はるかさんに、Ｘ'ｍａｓの予定を聞いて見よう。」メールを打ちはじめた。

「はるかさん、X-masの予定はあるのですか?」はるかに、メールを送信したのだ。

X-masまで、あと一週間。

「はるかさんとX-masを過ごして見たいな!」木嶋のささやかな希望だった。

「富士松さんにも、打診はしたいが、時間が、足りないかな?あからさまに、当てつけに思われてしまう…。」木嶋の思いやりであった。

木嶋は考えていた。

「X-masに、告白するのも、一つの手段かな!しかし、X-masに予定があった場合に、気持ちが揺れ動いた状態で、出かけるのは、相手の気持ちを踏みにじむような気がしてならない。」心の中では、再び、ジギルとハイドの戦いが始まったのだ。

木嶋は、自分自身に決断を求めていた。

「富士松さんとは何処かで、一日、会う時間が欲しいな!そうなれば最高なんだよね!」どうすれば良いかと心の中の自分に問いかけたのだった。

【こんな時に、流れ星が出てこないかな?】

木嶋は、家に帰る道を歩きながら、夜空を見上げた。

すると、「キラン」と流星(りゅうせい)が流れていた。

流星が流れ消えるまでに、3回、同じ願いを言うと、願いが叶うと伝えられているが、一瞬の出来事で、願いを言う前に消えてしまったのだ。

「願いを叶えるチャンスを失ってしまった自分が悔しい。」木嶋は、自分を責めていたのだ。

再び、夜空を見た。

もう一度、流星が流れた

「チャンスだ!」木嶋は、願いを言う前に流れ消えてしまったのだ。

木嶋は、

「残念、無念」努力はしたが、願いを言えなかったのだ。
家に帰り、風呂から上がり、携帯を覗くと、一通のメール着信があったのだ。
それは、はるかからのメールだった。

第７５話

「はるかです。木嶋さん、お久しぶりです。Ｘ'ｍａｓの予定ですが、毎年、Ｘ'ｍａｓイブは、家族で、過ごしていますので、申し訳ありませんが、またの機会にしましょう。クラブ『Ｈ』のＸ'ｍａｓパーティーが２３．２４．２５日にあります。私は、２３日と２５日に出勤しますので、宜しければ富高さんとお誘い合わせの上で、一緒に来て戴きたいと思います。」木嶋は、はるかからのメールの内容を見て、少なからずショックを受けていた。

「はるかとＸ'ｍａｓを過ごそうと考えていたのに…仕方ないかな…今は、友達しかない。はるかは、彼女じゃないから…。」木嶋は、自分に言い聞かせていた。

木嶋は、気を取り直した。

「今週の土曜日は、はるかさんの誕生日プレゼントを買いに行く予定ですが、何か良い物を探したのでしょうか？」木嶋は、はるかにメールを送信した。

はるかは、

「私の誕生日プレゼントは、前にも話しましたが、【ＨＥＲＭＥＳ】のバックが欲しいと言いましたよ。」木嶋に、メールを返したのだ。

木嶋は、

「アッ、そうだったね！前に、はるかさんが、話したのを忘れてました！」はるかに、メールを送ったのだ。

続けざまに、

「予算枠は、昨年と一緒ですが、誕生日とＸ'ｍａｓプレゼントは、一緒ですからね！お間違えなく…。」もう一通、メールを送信したのだった。

はるかは、

「分かりました！」顔文字入りのメールを、木嶋に送信したのだ

った。
木嶋は、はるかに、プレゼントを贈るときは、事前に、予算を提示して、はるかが、商品を探すのが、いつものお決まりのパターンであった。
はるかも、この木嶋スタイルが気に入っていたのだ。
木嶋は、昼休みのチャイムが、
『キーン、コーン、カーン、コーン』鳴ったと同時に、富高さんの元に歩いて行く。
木嶋は、
「富高さん、はるかさんのいる、クラブ『H』のX-ｍａｓパーティーに参加しますか?」富高さんに尋ねたのだ。
富高さんは、
「木嶋君は、X-ｍａｓパーティーに行くのかな?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「どうしようかと正直、悩んでいます。」富高さんに、言葉を返したのだ。
富高さんは、
「木嶋君が、乗り気でないなら行かない方がいいよ。麻美さんの店にも、顔を出さないとね。」木嶋に、話したのだった。
木嶋は、
「そうだね。麻美さんの店にも、会社が仕事納めの日に行くんだよね。立て続けに飲みに行くのも、お金が出るからね。今回は、止めましょう。はるかさんには、自分から話しをします!」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君、宜しく!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました。」富高さんに声を掛け、現場から立ち去って行ったのだった。

日にちが過ぎ、木嶋が、朝からワクワクしていた。
何故かと言うと…。
今日は、はるかとのデートの日であった。
冬晴れで、少し肌寒かったが、懐(ふところ)は、温(あたた)かった。
木嶋は、冬のボーナスが、2週間前に出たばかりだが、そんなに、大きな金額ではないが、普段から、大きな金額を持ち歩かないので、緊張のあまり、心臓が、『ドキドキ』していた。
木嶋が、会社を経営していれば、この金額を持ち歩かなくて緊張などないと思ったのだった。
仕事をしていても、落ち着かない様子でいた。
そんな木嶋の姿を見ていた三谷さんは、木嶋に、声を掛けた。
「木嶋、しっかりしないとダメだぞ。」木嶋に、注意喚起を促していたのだった。
木嶋は、
「ありがとうございます。」三谷さんに、言葉を返したのだった。
三谷さんは、木嶋との付き合いは長く、
会社に入社した当時から、木嶋を見ていたのだった。
木嶋が、キーポイントの時は、三谷さんか小室さんに、いつも相談をしていたのだった。

第７６話

木嶋は、
「そうだね！浮ついた気持ちで仕事をしていたら《ケガ》をする。溝越さんに言われるのは自分だしね。」三谷さんに、会社の中で話していたのだ。　三谷さんも、
「そうだぞ。もし、木嶋が、本当に、はるかさんのことが好きなら、どこかで、自分の想いを伝えた方がいいよ！」木嶋に話したのだ。
木嶋も、頷（うなず）くしかなかったのだ。
三谷さんは、木嶋の性格を熟知をしていた。仕事も同じ職場だった。
木嶋から見たら、少し年齢が離れた…『お兄さん』だった。
２０世紀は、三谷さんたちとは、良く遊びに行ったが、最近は、飲みに行く回数も減ってきていた。

会社の午後３時を告げるチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた！
木嶋は、後のことを、三谷さんにお願いをして、ロッカーに行き、着替えを済ませて、会社の正門を出たのだった。
普段は、会社の送迎バスが出ているが、臨時出勤の時は、夕方５時のバスしかなかったのだ。
会社の前にも、会社の最寄り駅まで行く路線バスのバス停があるが、
木嶋は、
「会社の前の路線バスの時刻表は、時刻表ではない。予定表だ！」そう言う自負があるのだ。
現実に、木嶋が、会社の前の路線バスのバス停で待っていても、【待ちぼうけ】が多く、木嶋が、《イラつく》のは、当然であっ

たのだ。
木嶋は、隣の会社の横からも、最寄り駅まで行く路線バスの本数が多く出ているのを、三谷さんから情報を得ていた。その場所まで歩き出したのだ。
歩き出してから5分ぐらい経過したのだろうか？
いつもなら、会社の前の時刻表通りに来ないはずの路線バスが、木嶋の横を通り過ぎて行く！
【こんな時に限って、時刻表通りに来るなんて、ツイていないな！】木嶋は、自嘲気味（じちょうぎみ）に、ボヤいていたのだった。
隣の会社の路線バスのバス停に、木嶋は到着したのだ。
「そんなに待たなくても、バスは来そうだ。本数も多いし…。約束の時間前までには着くかな？」木嶋は、腕時計を見ながら、路線バスが来るのを待っていた。
バスに乗り、最寄り駅まで向かっていた車内で、
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が鳴っていた。
木嶋は、鳴り響く携帯を無視することが出来ずに、電話に出たのだった。
「もしもし、木嶋ですが…。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「はるかです。今、どちらですか？」いつもより、ハイテンションな声で、木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「今は、会社の最寄り駅までの行く途中で、路線バスに乗っています。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「バスの中とは知らずに、電話をしてゴメンナサイ！最寄り駅に着いたら連絡を下さい。待ってま～す。」と木嶋に謝罪をしていた。
木嶋は、小さい声で

【判りました。】はるかに伝え、電話を切ったのだ。
はるかが、いつも以上に上機嫌だった。
木嶋は、思っていた。
「今日、誕生日プレゼントを買いに行くのだから、機嫌が良いはずだよね。後は、時間通りに来るのかな?」心配なことは、はるかが、時間にルーズなのが気に掛かっていたのだ。
路線バスが、最寄り駅に着いた。木嶋は、距離別運賃表を見ながら、
「えっと、運賃は…１８０円。」整理券と一緒に、料金を支払ったのだ。
木嶋は、両親の故郷(ふるさと)に、東京、新宿駅から電車に乗り、故郷に着いてから、実家に行くまでに、小学生ぐらいまでバスに乗っていた記憶があり、距離別の運賃表を採用していたので、その時の記憶を辿(たど)りながら、運賃表を見たのだった。
木嶋は、最寄り駅に着いたので、はるかに電話をしたのだった。
「ピローン、ピローン、ピローン」呼び出し音が鳴っている。
はるかが、電話に出たのだ。
「もしも～し、はるかですが…。」
「木嶋です。これから会社の最寄り駅を出ますから待っていて下さ～い。横浜には、４０分ぐらいで到着しますので…。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「横浜に着いたら連絡を下さい。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「分かりました。」と、はるかに伝え、
はるかは、
「待ってます。」電話を切ったのだ。
木嶋は、最寄り駅から電車に乗り、
発車ベルが、
「プルー」と鳴り、ドアが閉まり、木嶋を乗せた電車が発車した

のだった。

第７７話

電車の対面シートに座り、揺られながら、木嶋は、考えていた。
「はるかと出会って、２度目の誕生日プレゼントか…。我ながら良く頑張っているかな！」
木嶋は、麻美や玲にも同じことが言えるのだった！
「３人とも、自分には、良くしてくれている。、夜の関係で知り合ったが、今までの自分なら【その場限り】で長続きはしない。一時期、大森さんと会社の最寄り駅で、《あるビルの地下》に飲みに出掛けた時も、期間は短く、いつの間にか、大森さんに女がいたのは知らなかった。自分のお気に入りを紹介しない方がいいかな？」
木嶋は、何かを感じ取っていたのだろうか！
「近い将来、みんなが、バラバラになるかは…神のみぞ知る…かな！」珍しく予言みたいな空想をしていたのだった。
木嶋は、手元にあった夕刊紙を手に取ったのだ。
いつも仕事帰りに、最寄り駅近くにあるコンビニに寄るのが日課になっていた。
普段は、一緒に帰る仲間がいるので、話しをしながら電車に乗っているが、一人でいると、時間を持て余すので、夕刊紙を買い、コーヒーを片手に飲みながら、読みのが当たり前になっていた。
電車に乗ってから、１０分ぐらいしてから木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れている着信音が鳴り響いている。
はるかからである。
「木嶋さん、今、どちらですか？」
木嶋は、
「今ですね…もうすぐ乗換駅に着きますかね？」はるかに伝えたのだ。
はるかは、

「横浜には、何時ぐらいになりますか？」
木嶋は、腕時計で時間を確認した。
「おおよそ、午後４時３０分ぐらいになるかと思いますが…」木嶋は、はるかに答えたのだ。
はるかは、
「分かりました。木嶋さん、どこで待ち合わせしますか？」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「いつものコーヒーショップ『Ｙ』で待っていますよ。時間も早いので、ウィンドーショッピングをしてきていいですよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「いいのですか？」木嶋に確認したのだ。
木嶋は、
「いいですよ！」はるかに伝えたのだった。
「ヤッター」一段と大きな声で喜んでいた。
「木嶋さんは、どうなさるのですか？」はるかが、木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「自分は、新聞でも読んでいますよ！それと手帳に書くこともあるからね！」はるかに話していた。
はるかは、
「分かりました」木嶋に伝え、電話を切ったのだった。
電車が間もなく、乗換駅に着いたのだ。
木嶋は、各駅停車の電車から急行に乗り、横浜駅に向かったのだ。
急行は、人が多く乗車していた。
木嶋は、家から会社までの通勤は、最寄り駅から横浜駅経由で、相鉄線で通勤していて、途中で乗り換え、会社の最寄り駅までは、座って行くのだった。
乗換駅で、乗り換えても、座席は、比較的に空いているはずなの

に、この日は、時間帯が、夕方に近くなり、人が、徐々に出始めていたのだ。
座席に座れないのが、珍しいくらいであったのだ。
「横浜駅まで立っていくのは、少し辛いかな！」
連結機部分近くまで歩いていくのだった。
立ち止まり、背を車両の壁に持たれていたのだ。
女性の声で、
「間もなく、横浜に到着です。」車内アナウンスが聞こえていた。
木嶋は、
「横浜か…」
そう思いつつも、横浜駅構内に、電車が入っていくのだった！
プラットホームに入り、電車のドアが、
「プシュー」とエアーを立てて開く。
木嶋は、階段を降りて行く。
改札口を出て、いつものコーヒーショップ『Y』の店内に入り、
はるかが、来るまでの時間、ホットコーヒーをオーダーして、夕刊紙を再び、テーブルの上に置いたのだ。
オーダーしたホットコーヒーが、木嶋のテーブルに運ばれてきた。
砂糖、ミルクを入れ、右手でコーヒーのカップを持ちながら、新聞を読んでいた。
時間にして、３０分ぐらい経過していた。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」着信音が鳴っていた。
はるかからであったのだ。
「木嶋さん、これから行きます。」木嶋に伝えていた。
木嶋は、
「待ってま～す。」はるかに伝えて、電話を切ったのだった。

第７８話

店の階段を
「カッ、カッ、カッ」靴の音が聞こえたきた。
木嶋は、振り向いた。
はるかが来たのだった。
木嶋のいるテーブルに着いた。
「お待たせして申し訳ないです。」そう話しながら、頭を下げ、椅子（いす）に座った。
木嶋は、店員さんを呼び、
「ホットロイヤルミルクティーを１つお願いします。」とオーダーをしたのだ。
木嶋は、
「楽しめたのかな？」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「ショッピングは楽しいですよ。今回は、私の誕生日とＸ'ｍａｓプレゼントを兼ねているので探すのに時間が掛かりましたよ。」
木嶋は、
「前に聞いた時は、『ＨＥＲＭＥＳ』のバックが欲しいような話しをしていたので、そのブランドだと思っていたのですが…違うのですか？」はるかに聞いていた。
はるかは、
「ＨＥＲＭＥＳのバックをプレゼントとして欲しいのですが、横浜の高島屋２Ｆにある『ＨＥＲＭＥＳ』ショップを見ていたのですが…木嶋さんから提示された金額で探しました。私が買いたいと思う商品と金額に開きがあったのです。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「高島屋の『ＨＥＲＭＥＳ』ショップでは、金額に開きがあったの？」少し困惑気味に、はるかの話しを聞いていた。

続けて、
「はるかさん、どこで『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを見つけたのですか？」はるかに聞いていた。
はるかは、
「木嶋さん、以前、セレクトショップに行ったのを覚えていますか？」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「知っていますよ。橋の袂にあるセレクトショップですよね？はるかさんから依頼を受けて商品を受け取りに行く時もありますけど…。」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「そうです。そこのセレクトショップの２Ｆには、ブランドコーナーがあるのです。」
「ブランドコーナーね…チョット待ってね。記憶を辿ると去年の誕生日プレゼントを買う時も、はるかさんと一緒に、そこのセレクトショップのブランドコーナーに行ったことがあるよね！」はるかに聞いたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、思い出してくれて嬉しいです。ブランドコーナーには、『ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ』や『ＨＥＲＭＥＳ』などを扱っていて、そこに私が欲しい商品があるのです。『ＨＥＲＭＥＳ』の３色のバックです。お値段は、木嶋さんが提示した金額よりも、多少出てしまいます。」木嶋にお伺いを立てていた。
木嶋は、
「金額は、いくらぐらいなの？」はるかに聞いたのだ。
はるかは、両手で答えていた。
木嶋も人間である。一瞬、《ムッ》とした表情を見せたのだ。
【どうしようかな？】心の中で揺れていた。
はるかは、木嶋の表情が変わったことに気がついた。
「木嶋さん、予算枠から出たことに怒っていますか？」木嶋に尋

ねていた。
木嶋は、
「普通は、怒りますよ。自分は、はるかさんのバックを持ったイメージと、収支バランスを考えています。」はるかに答えたのだ。
木嶋が言う収支バランスとは、車のローン残債があるので、頭の中のコンピューターが忙しくなっていた。
木嶋は、リュックの中から黄色の手帳を取り出した。
はるかは、
「木嶋さん、手帳を取り出してどうなされたのですか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「はるかさんが、ショッピングしている間、来年の収支予測を計算していたのです。それから車の維持費などを勘案して…本来なら《ダメ》と言いたいところですが…今回に限り…《ＯＫ》します。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、本当に良いのですか?」木嶋に確認をしたのだ。
木嶋は、
「いいですよ。あとは何とかなると思います。」
「ヤッター」はるかの表情が笑顔に変わったのだ。
はるかは、テーブルに運ばれてきたホットロイヤルミルクティーを一口飲んだのだ。
木嶋は、
「はるかさん、『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを見に行きましょう」はるかに声を掛けたのだ。
はるかは、
「行きましょうか!」席を立ち、コーヒーショップ『Ｙ』を木嶋と一緒に出て行くのであったのだ。

第７９話

はるかの後を追い掛けるように、木嶋が歩いていた。
はるかのブーツの足音が、
「カッ、カッ、カッ」冬の乾いた夜空に響いている。
はるかが、橋の袂にある、セレクトショップの中に消えて行った。
木嶋は、はるかと買い物に出かけると、ショップの近くで待っているのが定番になっていた。
木嶋は、携帯を取り出しはるかに電話をしたのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
はるかが、電話に出たのだ。
「もしも～し、はるかですが…」
「木嶋です。自分が、セレクトショップの２Ｆに行くより、表通りのシューズショップで靴を見ていていいかな?その方が、はるかさんは良いのではないでしょうか?」
はるかは、
「木嶋さんが、セレクトショップのブランドコーナーに来ずらいかも知れませんね！一度、２Ｆに上がって来てはいかがですか?」
木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「分かりました。セレクトショップの２Ｆに行きますよ。」はるかの待つブランドコーナーに上がって行ったのだ。
はるかが、木嶋を手招きしている。
「木嶋さん、この商品です。」
ブランドコーナーの店員さんが手袋をして、『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを木嶋に見せたのだ。
木嶋は、
「はるかさんが、『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを持ったときの、≪イメージ≫が湧かないので、外に出て、頭を冷やしてきます。」は

るかに伝えたのだ。
はるかは、
「分かりました。まだ、見たい商品があるので、木嶋さんに電話しますね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました。」はるかに伝え、セレクトショップの近くにあるシューズショップに入って行った。
「最近、靴を買っていないなぁ～。ＮＩＫＥやａｄｉｄａｓ、ｐｕｍａか…靴も何気(ないげ)に高いな！そうだ…確か…もう一軒、シューズショップがあるはず…そっちに行って見よう。」
ボヤきながらも、相鉄ジョイナスの２Ｆ辺りにあるスポーツショップに歩いて行ったのだ。
はるかが、買い物をするときは、時間が掛かるのは、木嶋は、分かっていた。今日は、イラついても仕方がない。
はるかが、クラブ『Ｈ』に出勤するまで、時間はまだある。
それを逆手に取れば、待つだけに没頭するよりは、自分の趣味で、時間を有効活用すれば良いのだ。
木嶋は、相鉄ジョイナスの２Ｆにあるスポーツショップに着いたのだ。
このスポーツショップは、以前から知っていて何度か来たことがあったのだ。
１９９０年代の木嶋は、陸上をやっていた。
元々、小さいときから走っていたので、走ることには違和感などなかったのだ。
木嶋が、靴を見る時は、ランニングシューズに目が行ってしまう。
会社の代表で、一年に一回、毎年、５月に、長野県の富士見高原の大会に出場をしていたのだ。
「郷田さんたちは、どうしているのかな？会っていないな！」木嶋は、思い更けていた。
２００１年１１月１０日以来、会っていなかったのだ。

木嶋は、振り返ると、はるかと一緒に時間を優先するために、今まで、木嶋を支えてくれていた、陸上の仲間たちに、

【裏切り行為】と思える行動をしていたと思わずにいられなかったのだ。

会社内でも、良く飲みや遊びに行っていた仲間たちが、昇格や結婚するたびに、焦(あせ)りの色が段々と濃(こ)くなって行くのだ。

「果して今のままで良いのだろうか？いずれ、はるかも自分の元から消えて行く日は近い。出会いのチャンスもそんなに多くはない。身近に、同年代は麻美さんや玲さんか…富士松さんもそうだし…同年代は大切にしないとマズイかな！」木嶋は、この日が一つの転機になるのかと感じ始めていても不思議ではなかったのだ。

第８０話

木嶋は、スポーツショップで商品を見つめながら、思い悩んでいた。

「今のままでいいのだろうか？この先が読めない！」

この不安は、今に始まったことではない。

はるかと、友達としての付き合いが始まってからの懸案事項だった。

会社の送迎バスの中で、木嶋と同じ時間で、富士松さんが乗っているときがあるが、タイミングが悪く、はるかから電話が掛かってくるのだ。

そんな状況が、かれこれ１年が経過していたのだ。

富高さんと一緒に飲みに麻美や玲の店に行くたびに、いつも、はるかの話題になるのも、嫌気が差していた。

木嶋が、セレクトショップを出てから３０分ぐらい経過していた。

歩き疲れていたので、スポーツショップ近くの椅子（いす）に座っていた。

木嶋は、携帯を取り出した。

着信履歴を見ると、はるかからの着信の多さに驚いていた。

「エッ…こんなにあったの？」

木嶋が、気がつかないはずであった。

はるかは、良く…ワンギリがあり、木嶋が、運よく電話に出ても、

「プチッ…」切れることが多く、そのやり方は、常日頃から腹の中では煮え繰り返っていたのだ。

木嶋は、怒りを堪えながら、はるかに電話をしたのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。呼び出し回数が、１０コールを過ぎたので、木嶋は、電話を切ったのだ。

はるかには、珍しく電話に出ないのだ。

木嶋は、気を取り直し…再び、はるかに電話をしたのだった。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。

はるかが、電話に出たのだ。
「もしも～し、はるかですが…。ゴメンね。電話に出れなくて…。」
「木嶋です。先ほどは、セレクトショップを飛び出してしまいゴメンナサイ。着信にも、気が付かず申し訳ありません。」はるかにお詫びをしたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、何回も掛けたんですよ！」木嶋に怒った様子で話していた。
木嶋も、はるかの様子を察知したのか…
「本当に申し訳ない！平謝(ひらあやま)りを繰り返していた。
はるかは、
「木嶋さん、今は…どこに居るのですか？」木嶋に尋ねていたのだ。
木嶋は、
「相鉄ジョイナスの2Fのスポーツショップを見ていたのですが…歩き疲れたので、椅子に座っているよ。」はるかに答えていたのだ。
はるかは、
「私は、どうしても『ＨＥＲＭＥＳ』のバックが欲しいのです。」
木嶋に訴えていたのだ。
木嶋は、
「どうしても、あの『ＨＥＲＭＥＳ』のバックがいいのかな？」
はるかに確認をしたのだ。
はるかは、
「私は、横浜に来るたびに、『ＨＥＲＭＥＳ』のバックが欲しくてプライスを見ているのです。プライスも、クリスマスなので、今、提示している金額が最安値です。」木嶋に、再度、《アピール》をしていた。
木嶋も、ようやく決断をしたのか…はるかの熱意に押されたのか…

「分かりました。今からセレクトショップに行きます。『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを買いましょう。」はるかに伝えたのだ。
「ありがとうございます。」はるかは、喜んでいた。
木嶋は、椅子から立ち上がり、はるかの待つ、セレクトショップ２Ｆに歩いて行ったのだ。
「カッ、カッ、カッ」木嶋は、靴の音をしながら階段を上がっていた。
はるかが、
「木嶋さん、来るのが遅いですよ！」悪戯ぽく…木嶋に問いかけていた。
木嶋も、
「ゴメン。」苦笑いをするしかなかったのだ。
はるかが、三色の『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを持ち、鏡（かがみ）の前で、飾っていた。
木嶋も、店員さんに話したのだ。
「この『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを購入します。」
財布を取り出し、提示された金額を支払った。
はるかは、
「ありがとうございます。」木嶋にお礼を述べたのだ。
木嶋は、
「ギフトラップにして下さい。」店員さんに話したのだ。
店員さんは、
『ＨＥＲＭＥＳ』のボックスに、バックを入れたのだ。
木嶋は、腕時計を見た。
「はるかさん、もうすぐ、クラブ『Ｈ』に行く時間ですよ！」はるかに告げたのだ。
はるかは、
「アッ、本当ですね！」
バックのギフトラップが終った。
はるかは、

「木嶋さん、今日は、ありがとうございました。また後で、連絡をします！」木嶋に話し、『ＨＥＲＭＥＳ』のバックを持ち、セレクトショップを後にしたのだ。

木嶋は、そこから横浜駅に向かい、

「プルー」発信音が鳴る、東海道線に乗り、家路に着くのだった。

第８１話

木嶋は、最寄り駅に電車が着いた。
ホームに降りたった。
「フー」息をついた。「自分が、はるかに、惑(まど)わされているかな？」ふとした疑問に駈られていた。
それは、麻美や玲が、木嶋に良く言われているのだ。
【はるかは可愛い。】
木嶋好みの女性である。
それは、【富士松さん】にも言えることだ。
はるかの誕生日に、メールをしたのだ。
「はるかさん、誕生日、おめでとうございます。成人したのだからお酒は、解禁になったね！」
直ぐに、はるかからの返信メールがあったのだ。
「木嶋さん、ありがとうございます。これで、クラブ『Ｈ』でも飲めるようになりました。嬉しいんです。何よりも、木嶋さんと飲みに行くことも出来ますね！」ニッコリの顔文字入りのメールだった。
木嶋は、歩きながら、
「そうだね。今まで、はるかさんと飲みに行けなかったので、これを機会に行きましょう。成人式が終わってからだよ。」はるかにメールを送信した。木嶋は、夜空を見上げたいた。
雪が降ってきたのだ。
気温が高いのか、雪は、重たく湿っていた。
「何も、今日じゃなくてＸ'ｍａｓイブに降ればいいのに…。はるかの誕生日祝いには良いかな！」木嶋の心は、晴れずにいたのだ。
『何故だろう。いつもならこんなことがないのに…』口笛を吹きながら、空(むな)しさが込み上げてきた。
木嶋にとっては、二年越しのはるかの誕生日当日にお祝いをした

かったのだ。去年は、はるかと出会ったばかりで、気にはしていなかった。

今年、木嶋は、はるかの誕生日を一緒に過ごせると期待を持っていたのも事実であった。

はるかは、約束を守る女性だ。

木嶋との会う日にちを決めるのも、はるかである。信頼をしているたのだ。

木嶋の地元は、一時期、光のイルミネーションを華やかに彩っていたが、世間は、折しもの不況によって、年々、衰退(すいたい)の一途(いっと)を辿(たど)りはじめていたのだ。

「一度くらい、はるかさんと富士松さんにイルミネーションを見せたいな!」両手をポケットに入れ、雪の中を一歩、踏み出していたのだ。

木嶋は、はるかに《恋》をしてしまったのだ。

「本気になってしまいそうだ。富士松さんとは会社の中では話しすら出来るキッカケない。いつまでもズルズル行くのも…。難しい選択になるかな?」木嶋は、思い悩んでいるのだ。

「麻美さんの店に、富高さんと一緒に行くとき聞いてみよう。多分、《はるか》に否定的な意見が多いから《富士松さん》にした方が良さそうだ。」木嶋は、予想をしていたのだ。

会社の仕事納めの日。木嶋は、富高さんのいる場所に昼休みに歩いていた。

「富高さん、いつもの時間の送迎バスでお願いします。」富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、いつものバスね。了解しました。仕事が遅く終わりそうなら、現場に行くから…夕方5時に終わると思うよ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「了解しました。何もなければ予定通りのバスに乗ります。」富

高さんに話し、その場を立ち去っていた。
仕事終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いている。
木嶋にとって、慌(あわ)ただしい一年が終わろうとしていた。

第８２話

木嶋は、会社の送迎バスに乗り、空いていた座席に座り、富高さんが来るのを待っていた。
腕時計で時間を確認した。
「午後５時１２分か…。もうそろそろ来る頃かな？」木嶋は、落ち着いていた。
富高さんが、バスに乗ってきた。
周りを見渡し、木嶋が座っている座席を見つけ、隣りに座った。
富高さんが、
「木嶋君、危(あや)うく残業になりそうだったよ！間一髪の所で仕事が終わったよ。何か…今日は、寒いよね。」木嶋に声をかけたのだ。
木嶋は、
「富高さんが来るのか？本当に心配でしたよ。」富高さんに話していた。
富高さんは、
「自分も、麻美さんに会いたいから必死だったよ。」
「麻美さんに、会うのは随分、久しぶりに感じるよね。」木嶋が、富高さんに尋ねていた。
富高さんも、
「木嶋君が言う通りだよね！麻美さんと会うのはどれくらいの期間が空いていたのだろう！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、いつも背負っているリュックから黄色の手帳を取り出し、パラパラとページをめくっていた。
「麻美さんと会うのは…夏前ぐらい…かな？いや、春先かな？随分、長い期間、会っていないね！」富高さんに話していた。
富高さんは、
「えっ、そんなに期間が空いていたの？」木嶋に驚いた表情を見せたのだ。

木嶋は、
「このところ、はるかさんのいるクラブ『H』に行く機会が多かったのは事実だね。もっとも横浜駅から近いからどうしても、そっちに行っても仕方ないと思うよ。」富高さんに話していたのだ。
会社の送迎バスが、最寄り駅に着いたのだ。
富高さんは、先に、座席を立ち、バスのステップから降り、木嶋が来るのを待っていた。
木嶋は、バスの運転手さんに、
「ありがとうございました。」声を掛けて、バスから降りて、待っていた富高さんと一緒に、最寄り駅の階段を降りて、コンコースに立ち止まった。
木嶋は、
「どっちのルートで行こうか?」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「木嶋君、今日は、市営地下鉄で行こうよ!」木嶋に同意を求めていた。
木嶋は、安心したように、
「市営地下鉄で行きましょう。」
動きが止まっていた時計の針を回し始めたように、再び、歩き出したのだ。
コンコース内を歩いていた木嶋と富高さんは、売店があるのを見つけた。
「木嶋君、飲みながら行こうよ!」富高さんが、木嶋に声を掛けたのだ。
「ＯＫです。飲みながら行きましょう。関内まで地下鉄に乗っている時間は長いですからね。ビールは、買って来ますよ。」富高さんに話し、木嶋が、売店に歩いて行ったのだ
「アサヒスーパードライ…2本下さい。」若い女性スタッフに声を掛けたのだ。
若い女性スタッフは、

「スーパードライですね。」木嶋に確認していた。
木嶋は、
「そうです。」Ｇパンのポケットから財布を取り出したのだ。
若い女性スタッフは、手慣れた手つきで、ビールをビニール袋に入れ、木嶋が、５００円玉を渡し、お釣りを受け取り、
売店前で待っていた富高さんと合流したのだ。
木嶋は、市営地下鉄の料金表を見上げた。
「関内までは、料金は…３５０円か…意外に高いな！」再び、ポケットから財布を取り出したのだ。
財布の中を覗くと、小銭になく、
「先程、ビールを買ったときに遣ったんだ。」自分自身に言い聞かせるように、１０００円札を取り出し、キップ券売機に投入して、お釣りを受け取ったのだ。
自動改札機を通り、改札内にいた富高さんと一緒にプラットホームに降りて行くのだった。

第８３話

木嶋と富高さんは、エレベーターに乗り、地下２Ｆのホームに降りて行く。
発車ベルが、
「プルー」鳴り響いている。
「ピンポン」と鳴りながら、ドアが閉まったのだ。
木嶋と富高さんは、最後尾の車両に乗り、対面式のシートに座ったのだ。
木嶋は、先ほど、売店で買ったビールを富高さんに手渡した。
「木嶋君、ありがとう。」富高さんは、ビールのプルタブを、
「プシュ」開けたのだ。
木嶋も、ビールのプルタブを開けたのだ。
「お疲れ様。」そう言いながら、ビールを合わせて、富高さんは、飲み始めたのだった。
木嶋は、
「普段から電車の中で、ビールを飲む習慣がないから戸惑いを感じているよ。」富高さんに話していたのだ。
富高さんは、
「木嶋君は、家では飲まないの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「うん。家では飲まないよ！父親に悪いからね。」
富高さんは、
「木嶋君のお父さん、酒は飲むのかな？」木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「父親は、酒が好きで、肝臓が悪く、医者に止められているんだ。」富高さんに話していた。
富高さんは、
「医者に止められているなら、なおさら、飲まない方がいいよね

！」

木嶋は、

「そうだね。飲まない方がいいが、嫌いじゃないから止められていても飲んでしまう。親戚は…酒が好きな人たちばかりだから、一人で長野に行ったりしたら大変だよ。いつも、自分が付いて行くんだ。《お目付け役でね。》長生きしてほしいからね。」富高さんに話したのだった。

富高さんは、

「自分は、小室さんと一緒に帰り道、電車の中でビールを飲むのが日課になっているよ。小室さんは、新川崎駅で降りてしまうが、船橋まで、一人で乗っていると時間は長い。戸塚駅で乗り換えの時に、売店で、小室さんと一緒にビールを買っているんだ。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「戸塚駅で、乗り換えた時にも買っているなんて【ビックリ】したよ。一時期、藤沢駅経由で東海道線で帰った時に、大船駅で、電車待ちの間の時間、売店で買った記憶があるよ。そのことを思い出したよ。富高さん、そんなに飲んだことがあったかな?」

富高さんは、

「小室さんと一緒に帰るようになってから強くなったかな!」

木嶋も、

「二人とも、飲むのが好きだからね。富高さんが通勤時間が長いのは、自分も分かっているからね。」富高さんに話したのだ。

木嶋は、富高さんと話している途中で、今、どの辺りか…駅を見たのだ。

「上大岡駅か…。」

木嶋は、

【今、上大岡駅だよ。】富高さんに伝えたのだ。

「木嶋君、あとどれくらいで着くのかな?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「チョット待って下さい。」富高さんに伝え、携帯を取り出した。
《上大岡駅～関内駅までの時間は、あと１２分ぐらいか…》
木嶋は、
【あと１２分ぐらいで関内駅に着きますが、麻美さんとの待ち合わせ場所まで時間を考えると、おおよそ２０分ぐらいだね！】富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君、麻美さんとの待ち合わせ場所は、分かりやすいのかな？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「大通りの交差点にコンビニがあるから、そこに待ち合わせにしたよ。一番、目立つし分かりやすいよ。」
「交差点のコンビニなら分かるよね。早く、麻美さんに会いたいね！」富高さんは、木嶋に話し、頷いていたのだ。
車内アナウンスが、
「次は、関内、関内です。」木嶋と富高さんの耳に聞こえた。
少しばかりホロ酔い気味だが、足取りは、しっかりしていたのだ。
電車が、関内駅に着いた。
ドアが、
「ピンポン」音を立てて開いたのだ。
ホームを歩いて、出口に向かった。
市営地下鉄は、出口は、たくさんあるのだ。
案内板を見ながら、地上出口に向かったのだ。
木嶋と富高さんは、待ち合わせ場所である、大通りのコンビニで、麻美が来るのを待っていたのだった。

第８４話

木嶋は、携帯を取り出し、麻美の携帯に電話した。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出していた。
麻美が、電話に出たのだ。
「もしもし、麻美ですが…」
「木嶋です。今、待ち合わせに着きました。富高さんと一緒にいますよ！」
「分かりました。もう少しで到着しますので、お待ち下さい。」
麻美は、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました！」麻美に伝え、電話を切ったのだ。
木嶋は、
「麻美さん、もう少し、待っていれば来るみたいです…。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「寒いから、早く、何処かの店で飲みたいよね！」木嶋に話したのだ。
木嶋も、
「その意見に、賛成です。」富高さんと話していた。
交差点の信号が、青から赤に変わり、歩行者信号が、赤から青に変わった。
冬の空に、
「カッ、カッ、カッ」靴の音が聞こえている。
その足音が、木嶋の元に、次第に大きくなっていた。
足音が、止まった。
麻美が、木嶋の目の前に着いたのだ。
「木嶋君、富高さん、お待たせしました。」木嶋と富高さんに声を掛けたのだ。

木嶋は、
「麻美さん、待ちくたびれましたよ！」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「遅くなりゴメンなさい！」木嶋に話したのだ。
木嶋と麻美のやり取りを聞いていた、富高さんは、
「ハハハ」笑い声を出していたのだ。
まるで、漫才の掛け合いみたいどあったのだ。
木嶋は、
「麻美さん、居酒屋か何処かに入りませんか?まだ、時間が早過ぎる。多少なりとも食べたり、飲んだりして行かないと、クラブ『U』に行った時に、キツクなるから…。」麻美に伝え、
麻美も、
「分かりました。食べる場所は、私に一任して下さい。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ＯＫです。富高さんも良いですよね。」木嶋の右隣にいる富高さんに、尋ねていた。
富高さんも、
「いいよ。」木嶋と麻美に伝えたのだ。
待ち合わせ場所から歩き始めた、木嶋たちは、ＪＲ関内駅に近いところに、居酒屋があったのだ。
居酒屋の名前は、「Ｍ」である。
麻美が、店のドアを開けた。
「いらっしゃいませ！」威勢の良い声が聞こえてきた。
若い女性スタッフが、
「３名でよろしいでしょうか?」麻美に聞いたのだ。
麻美は、
「お願いします。」そう答えたのだ。
案内されたテーブルは、木目調のテーブルであったのだ。
木嶋と富高さんが、同じ列に座り、麻美が反対側の列に、一人で

座ったのだ。
メニューを見ながら、女性スタッフを呼んだ！
「ビールを先に頼みましょうか！」木嶋が、富高さんと麻美に同意を求めていた。
二人とも、
「そうしましょう。」木嶋に返事をしたのだ。
「生ビールを、３つ下さい。」木嶋が、オーダーをしたのだ。
すかさず、富高さんが、
「秋刀魚（さんま）の塩焼き」
麻美が、
「海鮮サラダ」オーダーしたのだった。
麻美が、木嶋と富高さんに向かって話し始めたのだ。
「随分、長い期間、会っていませんでしたが、元気にしていましたか？」
木嶋は、
「自分は、元気でしたよ。富高さんも、そうですよね。」富高さんに同意を求めていたのだ。
富高さんは、
「元気でいましたが、年が明けたら、海外へ出張に行きますよ。」
麻美に話していた。
麻美は、驚いていた。
「海外出張なんてあるの？」富高さんに尋ねたのだった。

第85話

富高さんは、
「あるんだよね。年が明けてから海外へ。期間は、長くて半年ぐらいになるかも知れないんだ。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「木嶋君は、富高さんの海外出張の話しは聞いていたのかな?」
木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「海外出張の話しは、聞いていましたよ。流動的な部分があったから話せずにいたんだ。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「流動的でも良かったので、私に情報を流して下さい。」木嶋に少し、拗ねた表情を見せたのだ。
女性スタッフが、ビールを運んできた。
麻美、富高さん、木嶋の順にジョッキを渡したのだ。
「富高さんの海外出張、無事に帰ってくることを願いまして…乾杯。」木嶋が音頭を取り、ジョッキを鳴らしたのだ。
「富高さん、海外に行くことに不安はないの?」麻美が心配そうに尋ねていた。
「不安は、もちろんありますよ。一人で行くのではないので…。」
富高さんは、麻美に話していた。
木嶋は、
「自分も、麻美さんと同じですよ。不安がない訳でもないよ。日本人が、海外で被害に遭うニュースを聞くたびに、暗い話題になるから…。」麻美と富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「そんなことを気にしていたら、胃が痛くなってしまうので、今は、そんなことを考えないでいましょう。」木嶋と麻美に話したの

だった。
木嶋は、
「今日は、仕事納めだったんだよね。嫌なことを忘れて、《パッ》と行きましょう。」麻美と富高さんに伝えたのだ。
女性スタッフが、
【お待ちどうさまでした。】声を出して、木嶋たちのテーブルに、「秋刀魚の塩焼き」と「海鮮サラダ」を木嶋たちのテーブルに運んできたのだ。
富高さんが、
「秋刀魚の塩焼き」の臭いは、香ばしいね。木嶋君と麻美さん、檸檬(レモン)をかけてもいいかな?
木嶋と麻美は、
「いいよ!」二人同時に声を出したのだった。
麻美が、
「海鮮サラダ」を小分け皿に載せて、木嶋と富高さんに渡したのだ。
木嶋が、ふと気がついた。
「そう言えば…海鮮サラダのドレッシング種類、女性スタッフに話したかな?」麻美と富高さんに尋ねたのだ。
麻美は、
「木嶋君、ドレッシングの種類言わなかったの?」木嶋に聞き返していた。
「言ったような…言わないような…ウラ覚えですよ!ドレッシングがかかっているみたいだよ。」木嶋は、麻美に言い返していた。
富高さんは、
「そこが木嶋君らしいよね…。言い過ぎかな?」
「富高さん、酷(ひど)いことを言いますねよ!」木嶋は、富高さんに話しながら苦笑いを浮かべていた。
麻美は、
「ハハハ」笑いを堪(こ)えていたのだ。

人は、どんなに辛くても、前向きに物事を捉(とら)えて行動するのが、最適である。

中には、辛くなると、自(みずか)ら命を断ってしまう人もいる。

木嶋や富高さん、麻美は、繋がりがあるとすれば、木嶋が、クラブ『H』に、仲間たちと行かなければ、麻美やはるかとの出会いも無かったのだ。

出会いを大切にして行くことが、重要なことだと木嶋は感じていたのだった。

第８６話

木嶋は、麻美がいると安心出来るのだ。
はるかには、本音で話すこともあるが、言えない悩みを麻美には話していたのだ。富高さんも、話しやすい雰囲気を醸し出していた。
麻美が、腕時計で時間を確認していた。
「木嶋君、そろそろ、ここを出る準備をしないとクラブ『Ｕ』に居る時間が短くなりますよ。」木嶋に声を掛けたのだ。
木嶋は、
「もうそんな時間になるのかな？」木嶋は、麻美と富高さんに伝えたのだ。
席を立った木嶋は、腕時計で時間を見たのだ。
「午後８時になるのか…。居酒屋『Ｍ』をでましょうか？」木嶋は、富高さんと麻美に声を掛けたのだ。
木嶋は、テーブルの上にあった会計伝票を持ちながら店の出口に向かった。
会計をしている時に、富高さんが木嶋の元に来たのだ。
「木嶋君、ここの会計はいくらなのかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「そんなに金額が、かかっていませんよ。クラブ『Ｕ』に行った時に、精算しましょう。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「そうしようか！」木嶋に伝え、外で待っている麻美の元に向かって行ったのだ。
木嶋が、会計を終えて居酒屋『Ｍ』から出て来たのだ。
麻美は、
「ごちそうさまでした。」木嶋にお礼を述べていた。
木嶋は、
「富高さんに言って下さい。」麻美に伝えたのだ。

麻美は、
「富高さん、ありがとうございました。」富高さんに、お礼を言っていたのだった。
大通りの信号が、青から赤に変わるのを木嶋、富高さん、麻美は待っていたのだ。
信号が赤に変わり、歩行者信号が赤から青になり、横断歩道を歩き始めた。
「麻美さん、寒くないのですか?」富高さんは、麻美に尋ねたのだ。
麻美の服装は、薄い黒いシャツに、Gパン、白いコートを着ていたのだった。
麻美は、
「いつもなら寒く感じるのですが、木嶋君と富高さんの熱気で寒くなんかありません!」富高さんに話していたのだ。
富高さんは、
「麻美さん、上手いことを言いますね!」麻美に向かって笑いながら話していたのだ。
そんな麻美と富高さんの会話を見ていると、木嶋は、夜空を見上げていた。
「今年も、もうすぐ終わろうとしているのか…」ため息混じりに、自嘲気味に呟きながら歩いていた。
歩き出してから、10分ぐらいたったのだろうか?
多少、アルコールが入っているので、もう少し時間が経過しているのだろうか?歩いている時間が長く感じていたのだった。
冬の寒さに震えるはすが、歩いたことも影響しているのだろうか?
【うっすら】と汗をかいていた。
「駅から距離がありそうだね。」木嶋が、麻美に聞いていたのだ。
「市営地下鉄の駅なら近いのですが、JR関内駅までは歩きますね。健康には一番ですよ。」木嶋と富高さんに話したのだった。
木嶋と富高さんは、ようやく麻美がいる店のクラブ『U』がある

ビルに着いたのだ。
木嶋、富高さん、麻美の3人は、エレベーターに乗り、麻美が、5Fのボタンを押した。
エレベーターが動き出した。
「暖房が効き過ぎだよ。」富高さんが、ボヤいていた。
ここまで歩いてきて、汗をかいているので、密閉された空間では余計に暑く感じるのだった。
エレベーターが、5Fに着いた。
「いらっしいませ。」若い女性のお姉さんたちの声が、木嶋と富高さんに聞こえてきた。
「ここも高そうなお店だな!」木嶋は、そう感じていたのだった。
「ピローン、ピローン、ピローン」木嶋の携帯が鳴っていた。

第87話

木嶋は、携帯の画面を覗いた。はるかからの電話であった。
木嶋が電話に出た。
「もしも～し、木嶋ですが…」
「はるかです。今、どちらですか？」はるかが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「今日は、富高さんと一緒に、関内にあります麻美さんの店に来ていますよ。」はるかに伝えたのだ。
木嶋は、電話をしながら富高さんと一緒に、麻美の案内でクラブ『U』の中に入って行ったのだった。
麻美は、
「そこの座席で待っていて下さい。」木嶋と富高さんを予約席の札が置いてあった席にエスコートしたのだ。
予約席には、既(すで)に氷と水が用意されていたのだ。
木嶋は、席に座りながら、はるかと電話で会話を続けていた。
はるかは、
「私に、麻美さんの店に行くことを話していましたか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「麻美さんの店に行く話しは、はるかさんと会った時に話しましたよ。」はるかに伝えたのだった。
「それならいいですが…私がいるのに、黙って他の店に行ったり、連絡先の交換はしないで下さいね！」木嶋に念を押していたのだ。
木嶋は、
「分かりました。」と答えて電話を切ったのだ。
はるかの会話を聞いていた麻美は、
「ラブラブじゃないの？」木嶋を冷やかしながら、着替えてきた

のだった。
「ラブラブじゃないよ！ヤキモチ焼きじゃないの？」木嶋は、麻美に話したのだった。
富高さんは、
「木嶋君と一緒に、横浜のクラブ『H』に良く行きますが、はるかさんと話している姿を見ると【いい雰囲気】だよ。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「私が、《はるかさんとの交際を止めた方がいい》と忠告しても、聞く耳持たないよね。木嶋君は…。」木嶋に視線を向けたのだ。
木嶋は、頭を撫でながら苦笑いを浮かべていたのだった。
麻美は、一呼吸おいて、女性を連れて来ていたのだ。
「私が、いつも仲良くして戴いている、左側が木嶋君で右側が富高さんです。」
木嶋と富高さんは、
「初めまして」軽く言葉を交わし、会釈をした。
麻美は、
「こちらは、【あずささん】と言います。」
あずささんは、
「初めまして、今日は、宜しくお願いします。」木嶋と富高さんの間に座ったのだ。
麻美は、木嶋の左横に座り、あずささんは、富高さんの右横に座ったのだ。
「木嶋君とあずささんを話しをさせたいのですが、はるかさんがいるから、私が座った方がいいからね。」麻美は、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「色んな人と接したい気持ちはあるよ。飲みに行く店が、何カ所もあると来るのが大変。現実的は話しをすれば、前にも言ったように全員が同じ店にいるのが一番いいよ。」麻美に話したのだ。

麻美は、
「いずれは、自分の店をオープンしますよ。その時は、来て下さいね。」
木嶋は、黙って頷くのであった。
木嶋は、リュックに手を差し延べ、ゴソゴソと探し物をしていた。
「麻美さん、先日、話していた物ですよ！」麻美に、茶色の封筒を手渡した。
麻美は、ワクワクしながら
「何だろう！」封筒の先を少し切ったのだ。
「わ～い。映画のチケットだ。ありがとうございます。嬉しいな。これから冬休みに入るから子供と観に行かれる。大切に使わせて戴きます。」木嶋に感謝の言葉を述べたのだった。
木嶋は、女性に感謝されることは余りなく、照れていた。
麻美は、
「木嶋君の会社には、若い女性はいないのかな?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「ここ2年、新入社員が入らなかったよ。来年度は、新入社員が入るみたいだよ。女性と知り合えるチャンスかも知れないが、かなりの年齢差がありますよ。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「はるかさんと話しが出来るじゃないの?」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「はるかさんと比べたら可哀相ですよ。」麻美に答えたのだった。

第８８話

麻美は、
「どうして会社の女性たちと話しが出来ないの？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「自分の年齢前後の女性たちとは、相性が悪いんだ。」麻美に話していた。
麻美は、
「何故なのかな？」木嶋に聞いたのだ。
「自分の性格が災いしているかも知れません。一人だけ自分が、頭が上がらない女性はいますよ。」木嶋は、麻美に話したのだ。
麻美は、
「木嶋君でも、頭が上がらない女性がいるなんて驚いています。」
木嶋の話しに理解を示したのだった。
木嶋の右横には、さくらさんと富高さんが仲良く話している。
仕事の疲れが出てきたのか、《あくび》が出たのだ。
麻美は、
「木嶋君、大丈夫なの？」木嶋に尋ねていた。
「今になって仕事の疲れが出てきました。でも大丈夫ですよ。」
木嶋は、気を取り直して、麻美と会話を始めたのだ。
「麻美さんの店に、自分と富高さんと何度か一緒に行ったことはあるが、酔いつぶれたことは、一度もないよね？」木嶋が、麻美に聞いていたのだ。
「そうですよ。私は、富高さんが酔いつぶれたら介抱しようと思っています。」麻美は、木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「何故か？解らないが…麻美さんと一緒にいると富高さんは、【シャキット】する。玲さんの店だと、雰囲気がいいのか？隣りにい

る女性が、飲ませ上手なのかは判りません！その辺りが、自分でも【クエスチョン】なんだよね！行くたびに、酔いつぶれていますね。」麻美に伝えたのだ。

「私の、接客が悪いみたいになっていませんか？」麻美が怒った口調で、木嶋に話していた。

木嶋は、

「そんなことは、言っていないよ！」木嶋が、作り笑顔する表情は、強張っていた。

麻美は、

「今日は、富高さんを酔いつぶしますよ！」木嶋と富高さんに、高らかに宣言した。

麻美の決意表明を聞いていた富高さんは、

「イエーイ！」

軽いノリで右拳を、天に突き上げていた。

そんな富高さんを見ていた木嶋も一緒になって、右拳を突き上げ、

「イエーイ」と叫んだ。

木嶋は、

「富高さん、大丈夫なの？」心配顔で富高さんに尋ねたのだ。

富高さんは、

「何とかなるよ。酔いつぶれたら仕方ないよ。」にこやかな表情を、木嶋に返したのだ。

木嶋の顔には、安堵感が漂っていた。

「麻美さん、自分が酔いつぶれたらどうするの？」木嶋が、麻美に問い掛けたのだ。

麻美は、

「木嶋君には、はるかさんがいるでしょう！」木嶋に冷たい言葉で話したのだ。

木嶋は、

「はるかさんとは、友達であって彼女じゃないよ！」麻美に言葉を投げ返したのだ。

麻美は、
「私が、はるかさんのことでアドバイスをしても聞かないじゃないの？」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「麻美さんが、自分にアドバイスをしてくれていることには、嬉しく思います。最後に、決断するのは自分だと思っているよ。」麻美に話していた。
麻美は、
「そこが、木嶋君らしいよね。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、右手に持ちそうになっていたグラスを
《ズルッ》と取り損ねたのだ。
木嶋の右隣りにいた、さくらさんが、
「木嶋さんは、面白い方ですね。」笑いながら話しをしていた。
木嶋も、
「いつも、こんな感じですよ。麻美さんの店で飲んでいる時は…ね。」さくらさんに伝えたのだ。
木嶋の左隣りにいた麻美が、席を立ち、富高さんの方に移動していた。
麻美とさくらさんは、打ち合わせをしたような、絶妙なタイミングであった。
お互いの視線（まなざし）で、『アイコンタクト』をしていたのだった。木嶋は、そこまで、は読み切れていなかったのだ。

第89話

木嶋は、

「どうも、さくらさん、初めまして木嶋と言います。宜しくお願いします。」さくらさんに挨拶をしたのだ。

さくらさんは、

「木嶋さん、一番最初に挨拶をしましたよ。忘れましたか？麻美さんから話しを聞いていますよ。」木嶋に伝えながら、名刺を渡したのだ。

木嶋は、ポケットに手を入れながら、名刺を探していた。

「すいませんそうでしたね。自分も、名刺を渡したいところですが、生産現場にはないのですよ！」さくらさんに謝罪をしたのだ。

「木嶋さん、そんなに堅苦しくなることないですよ！」さくらさんは、木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「そう言ってもらえると助かりますよ！」さくらさんに苦笑いをしていたのだ。

「どんな仕事をされているのですか？」さくらさんは、木嶋に問い掛けていた。

木嶋は、

「車の部品メーカーに勤務していますよ！」さくらさんに話したのだ。

さくらさんは、

「車の部品メーカーに勤務されているなら、車のことは詳しいですか？」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「車を、マニアみたいにいじらないと判らないことがたくさんありますね。仲間に聞いたりしますよ！」さくらさんに伝えたのだ。

さくらさんは、

「そうですか…。」少し俯き加減になっていた。
そんな表情を見せていたさくらさんだったのだが、麻美の方に振り向いたのだ。
麻美とさくらさんと二人しか分からない《シグナル》を出していたのだ。木嶋が、その《シグナル》に気が付かなかったのだ。
さくらさんは、
「木嶋さんには、可愛い彼女がいると麻美さんから聞いたのですが…本当ですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「彼女じゃありません。あくまで友達ですよ。仲のいい友達。勘違いされていますよ。」さくらさんに、少しばかり怒り気味に話したのだ。
さくらさんは、
「彼女だと思っていましたよ。麻美さんが、そのような表現で話していたので…。」木嶋に伝えたのだ。
「全く…麻美さんは…。」木嶋は、呆れていたのだった。
気を取り直してさくらさんに、木嶋は、話し始めたのだった。
「さくらさん、以前、麻美さんが横浜駅近くのクラブ『H』に、勤務していたことは聞いたことがありますか？」さくらさんに尋ねたのだ。
さくらさんは、
「えぇ。クラブ『H』に勤務していたと聞いたことがありますよ。木嶋さんの可愛い彼女と、そこで知り合ったのですか？」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「紛れも無くクラブ『H』で知り合いました。麻美さんと最初に会ったのもそこですよ。」さくらさんに話していた。
木嶋の額と背中から汗が出てきた。冷や汗かも知れない。
さくらさんは、
「木嶋さんと麻美さんの接点もそこなのですね…。」木嶋の話し

に、関心を示していた。
木嶋は、畳み掛けるように、
「麻美さんは、色んなお店に移動するので、先ほどまで、さくらさんが、話しをしていた富高さんと一緒に飲みに行きますが、どのお店も長続きしなくて嫌になりますよ！麻美さんは、ワンダラーですよ。」さくらさんに伝えたのだ。
さくらさんは、
「麻美さんが、移動するたびについて行くのは大変ですね。ワンダラーか…。この言葉の意味は、放浪ですよね。そう言われても、麻美さんは反論出来ませんね！」木嶋に話していた。
木嶋は、
「麻美さんが、お店を出すなら、名前は、ワンダラーで良いんではないでしょうか？」さくらさんに聞いてたのだ。
さくらさんは、
「お店を出すなら命名候補ですかね。」木嶋に話しをするのが精一杯だったのだ。

第９０話

木嶋は、腕時計を見た。時刻は、午後１０時を過ぎたばかりである。
木嶋は、
「富高さん、まだ時間は大丈夫ですか？」麻美の隣りにいた富高さんに声を掛けたのだ。
富高さんは、
「あっ、木嶋君。そうだね～時間は、いつもぐらいでいいよね？」木嶋に話しをしたのだ。
木嶋は、
「分かりました。いつもぐらいの時間になったら、再び、声を掛けます。」富高さんに伝えたのだ。
木嶋の話しを横で聞いていた麻美は、
「木嶋君、いつもの時間で会計を切りますからね。」木嶋に伝えたのだ。
「麻美さん、気を遣って戴き、申し訳ありません。」木嶋は、麻美に頭を下げたのだ。
麻美は、
「何を言っているの！私と木嶋君の仲じゃない！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「エヘッ」照れ笑いを浮かべていた。
そんな木嶋の表情を見ていたさくらさんは、
「木嶋さん、笑顔が素敵です。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そうですか！」笑いながら、髪の毛を撫でていた。
さくらさんは、
「木嶋さん、結構、お酒が強いですね！」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、
「人付き合いで飲みますが、家で飲みません。」さくらさんに言葉を返したのだ。
「何故、家では飲まないのですか?」さくらさんは、木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「若いときに、苦(にが)い思い出があり、毎日、晩酌はしないので…。」さくらさんに話したのだ。
さらに、さくらさんは、「こういう場所に来て、日頃のストレス解消をするのが一番いいですよ。」さくらさんは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「生産現場で働いているが、仕事柄、ストレスは溜(た)まりますよ。さくらさんみたく、気が利(き)く女性が彼女なら最高にいいのにね!」
木嶋は、さくらさんに伝えたのだ。
「ありがとうございます。私なんか、気が利くなんて私を、過大題評価し過ぎていますよ!」さくらさんは、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そんなことはないと思いますよ。」木嶋の隣りにいた麻美へ視線(まなざし)を振り向けた。
麻美は、木嶋の視線を感じていたみたいで、さくらさんのことを話したのだ。
「木嶋君、さくらさんは、はるかさんと違い、マジメで良く気が利きますよ!」木嶋に、麻美が説得していた。
そんなにしてまで、《はるかのことが嫌いなのか?》木嶋は、麻美の話し方で理解をしたのだった。
さくらさんは、
「麻美さん、何で、はるかさんを嫌うのですか?」麻美に聞いていた。
麻美は、

「木嶋君から良く相談を受けるが、はるかさんは、不特定多数の男性と交際しているのです。」木嶋とさくらさんに話していた。

木嶋と、さくらさんは、

「そうなの?」軽く受け流していた。

木嶋は、再度、腕時計で時間を確認した。時刻は、午後１１時を回っていた。

「富高さん、もうすぐ時間になりますよ。」木嶋が、富高さんに声をかけた。

富高さんは、

「木嶋君、そろそろ帰ろうか。」木嶋に伝え、麻美に、×印のシグナルを出した。

麻美は、木嶋からの×印を出されて、若い男性スタッフを呼んだ。会計伝票を麻美から木嶋に手渡し、木嶋と富高さんで金額を確認したのだ。

木嶋は、

「お互い、折半でいいかな?」富高さんに聞いたのだ。

富高さんは、

「それでいいよ。」財布を取り出し、木嶋と富高さんは料金を麻美に渡したのだ。

麻美は、会計伝票と共にお金を男性スタッフに渡したのだった。

「ごちそうさまでした。」木嶋と富高さんに、さくらさんと麻美がお礼を言いながら頭を下げたのだ。

木嶋と富高さんは、座席を立ち、リュックとカバンを持ち、店の前にあったエレベーターに乗った。

麻美は、

「また、来て下さい。」木嶋と富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「また、麻美さんが辞めないことを祈っています。」そう言いながら、エレベーターを下りたのだった。

関内駅まで、歩いてきた木嶋と富高さんは、電車の時間を確認し

てから改札口に入り、ホームに上がり、京浜東北線に乗り、「プルー」と発車ベルが鳴る関内駅をあとにしたのだった。

第９１話

「ガタン、ゴトン」電車に揺られながら、
木嶋と富高さんは、近くに空いていた座席に座ったのだ。
富高さんは、電車の中で、クラブ『U』で感じたことを話し始めた。
「今回、クラブ『U』って場所で初めて飲んだよね！≪高級な店≫の雰囲気があったよ。自分たちが入っていけないみたいだったよ。木嶋君は、どう感じたのかな？」富高さんは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「麻美さんが移動する店は、富高さんが、今、話していた通りだと思います。自分たちの給料では、中々、来れない場所ではないかなと思います。はるかさんを、擁護（ようご）する訳ではないですが、クラブ『H』で飲んだ方がいいように思いますが…。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「自分から見れば、クラブ『H』も、『U』も変わらないと思うよ。木嶋君は、良く続いていると感心しているよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、リュックからクラブ『U』へ行く時に、購入した缶ビールを取り出し、
「富高さん、これどうぞ！」ビールを手渡したのだ。
「木嶋君、まだビールを買ってあったの？」富高さんが不思議そうに話していた。
木嶋は、
「魔法（まほう）ですよ。魔法！」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「魔法ね！木嶋君が魔法を使えるなら、はるかさんに掛けた方がいいよ！」富高さんは、木嶋に説得するような話し方をしていたの

だ。

「富高さん、自分が魔法なんか使えないですよ！さっきのは、冗談ですよ。冗談！」木嶋は、富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「本当に、信じたじゃない？木嶋君も、冗談キツイよ」木嶋に話し、

木嶋は、

「たまには、冗談も言わないとね！」富高さんに伝えたのだった。

「それも、そうだね！」木嶋に伝え、

「ハハハ」と、木嶋と一緒に笑っていた。

電車は、桜木町駅に着いた。

「富高さん、横浜駅で横須賀線か東海道線に乗り換えますか？それとも、このまま京浜東北線でいいですか？」木嶋は、富高さんに尋ねたのだ。

「木嶋君、チョット調べてくれるかな？」木嶋に依頼をしたのだ。

「ＯＫ！チョット待って下さい。」

木嶋は、ポケットから携帯を取り出したのだ。

「今、桜木町駅から船橋までは…横浜駅で横須賀線に乗り換え、東京駅で直通で船橋まで行くルートと、このまま秋葉原駅で乗り換えて、総武線で行くルートの【2通りルート】ありますが、どちらにしますか？」木嶋は、富高さんに尋ねた。

富高さんは、

「横浜駅で、乗り換えるのがベストな選択だと思います。今日は、かなり飲んでいて、階段の昇降（しょうこう）が大変なので、このまま秋葉原駅で乗り換えて行きますよ。」木嶋に話したのだ。

「自分に、気を使わなくてもいいのに…」木嶋は、富高さんに申し訳ない気持ちだった。

富高さんは、

「自分も、ゆっくり帰りたい時もあるんだ。」木嶋に伝えたのだ。

その言葉を聞いたとき、木嶋に張り詰めていた緊張感が、

「フッ」と解き放たれたように、身体から力が抜けて行ったのだ。
電車は、横浜駅に着いたのだ。
時刻は、午後１１時２０分ぐらいを過ぎたばかりであった。
「横浜駅は、人混みが凄いね！」富高さんが、驚いた表情を見せたのだ。
木嶋は、
「この時間帯は、クラブ『H』に行ったり、同期会の帰り道、横浜駅で乗り換えたりるのですが、いつもこんな感じだよ。」富高さんに話したのだった。
「そうなんだ。自分は、会社の最寄り駅で、飲む回数が多いから関内駅や横浜駅で途中下車はしないからね。木嶋君と飲みに行く機会がない限り通過だね。」富高さんは感心しながら、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「自分も、横浜駅は単なる乗り換え駅。関内だって野球シーズンに行くのみだよ！飲みに行く場所が増えて良いんじゃないのかな！」
「そう考えた方がいいかな？」富高さんは、木嶋に伝えた。
電車が、横浜駅を発車して、陸橋を越えて、木嶋が降りる最寄り駅に着いたのだ。
リュックを背負い、電車から降りて、木嶋は、手を振った。
富高さんが乗っている電車が、最寄り駅から発車したのを、木嶋は、見送ったのだった。

第９２話

木嶋は、富高さんと別れ、駅の改札口を出た。
「今年も、はるかや麻美さん、玲さんたちと仲良くすることが出来たと言うよりも、現状維持をしただけなのかも知れない！」いつものように、年末恒例で、一年を振り返ったのだ！
「来年は、どうなるのだろう？ドラえもんじゃないが、《タイムマシーン》か《タイムテレビ》が欲しいな！」そう思いに更けていたのだ。
木嶋は、常日頃から、
「昨日起きたことを、変えるのは無理だが、明日を夢見ること、未来に繋げて行くのが大切なことなのだ！」確信をしていた。
自問自答をしているうちに、木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が鳴っていたのだ。
木嶋は、電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…」
「お疲れ様です。私、はるかで～す。木嶋さん、今どちらにいますか？」はるかが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「今は、駅を降りて家に帰る途中です。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「今日は、富高さんと一緒に、麻美さんのお店に飲みに行かれたのですよね？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「そうですよ。麻美さんのお店に行きましたよ！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「麻美さん、私のことで何か聞いてていませんでしたか？」木嶋

に尋ねていた。
木嶋は、
「色んなことを聞かれたよ！」
「どんなことを聞いていましたか？」はるかは、木嶋に聞いてきたのだ。
木嶋は、
「はるかさんは、色んな人からプレゼントをもらったりしていて、木嶋君が、一生懸命尽くすだけ【ムダ】だよ。そう言っていたよ。」はるかに、正直に答えていたのだ。
はるかは、
「随分、酷(ひど)いことを、言っていませんか？木嶋さんは、私のこと、どう思われていますか？」木嶋に、怒った口調で話していたのだ。
木嶋は、
「確かに、麻美さんは、はるかさんのことを、酷く抽象的に言われていますね。はるかさんと仲良くしているのが、気に入らないのではないですか？一種(いっしゅ)の嫉妬(ジェラシー)では…！」はるかに話したのだ。
はるかは、
「麻美さんは、その業界で生きている人ですから…私と立場は違います。自分に、振り向いてもらいたいからそう話しているのではないですか？」木嶋に聞いたのだった。
「そうかも知れないね！人それぞれ色んな考え方があるのは仕方ないと思いますよ。自分は、はるかさんと一緒にいると楽しいですよ。」木嶋は、はるかに話したのだ。
「ありがとうございます。木嶋さんに、そう話して戴けると嬉しいし、楽しい時間(とき)を過ごしていた方がいいですよ。」はるかは、木嶋に思いを伝えたのだった。
木嶋は、
「ありがとう。はるかさんと今年のうちに、もう一度、会いたいな！と言うより会いたい。空いている日にちはありますか？」はるかに尋ねたのだ。

はるかは、
「チョット、お待ち戴けますか?手帳を取り出しますので…。」
電話口から離れて、はるかは、手帳を取り出した。
木嶋は、《期待感を持ちながら》はるかと【会えるのかな】と気持ちが高揚(こうよう)していた。
はるかは、
「今の予定だと…29日なら、クラブ『H』の出勤前なら時間が空いていますね。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、心の中で、
「ヤッター」と叫びながら、
「その日で良いですよ。」はるかに話したのだった。
はるかは、
「29日、いつもの時間で…待ち合わせ場所は、あとから連絡します。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。」はるかとの会話を終えて、電話を切り、家に着いたのだった。

第９３話

木嶋は、はるかと会う日が近づくにつれ、心が《ウキウキ》して、晴れやかな気持ちになっていたのだ。

約束の日の朝。いつもの休日と同じくらいの時間に目が覚めた。

久しぶりに、家の中で【ＰｌａｙＳｔａｔｉｏｎ】を取り出し、好きなスポーツである《野球のゲーム》をしていた。　置き時計を見た。時刻は、午後１時になろうとしていた。

「もう、そんな時間になるのか？」木嶋は、ため息混じりに、

「フー」と息を吐いたのだ！

この日は、家族は、近くの親戚の家に出かけていて、木嶋が一人で家にいたのだ。

「ピローン、ピローン、ピローン」　聞き慣れた着信音が、木嶋の携帯に鳴り響いている。

画面を覗くと、はるかからだった。

「木嶋さん、お久しぶりです。今、どちらにいますか？」はるかの明るい声が聞こえてきた。

木嶋は、

「今は、家で、《野球のゲーム》をしています。」はるかに答えていた。

はるかは、

「今日は、休日出勤ではなかったのですか？」木嶋に聞いていたのだ。

「仕事は、昨日で終わりで～す。年末年始休暇に入っていますよ。」木嶋は、はるかに話したのだった。

はるかは、

「私は、学生生活最後の冬休みに入っています。今日の待ち合わせですが、夕方５時に、いつものコーヒーショップ『Ｙ』でいいですか？」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、
「コーヒーショップ『Y』で待ち合わせでいいですよ。」はるかに答えたのだ。
はるかは、嬉しそうな声で、
「ヤッター」叫んだのだ。
「それでは、後(のち)ほど会いましょう!」木嶋に伝えて、電話を切ったのだ。
木嶋は、
「夕方5時か…せっかくはるかさんに会うのだから、少し早く家を出て、高島屋や東急ハンズを見るのもいいかな?」そう思いながら、野球のゲームを続けていた。
ゲームを始めてから、2時間が経過していた。さすがに、野球が好きだと言っても、長くやっていると、目が《チカチカ》してくるので、目にも良くないので、電源を《オフ》にしたのだ。
木嶋が、野球との出会いは、幼少の頃から、ジャイアンツ戦のテレビ中継を良く見ていた影響や遊ぶ時は、近所の仲間数人と草野球をやっていたのだ。身近なスポーツと言えば【野球】しかなかったのだ。
炬燵(こたつ)の中で、新聞を読みながら、時間を潰していた。
足が温まり、少しウトウトしていたのだ。
腕時計を覗くと、午後4時。
「そろそろ支度をしないといけない。」木嶋は、電気カミソリで顔の髭(ひげ)を剃(そ)っていた。
「良し支度が出来たので、家を出よう!」軽快なステップで靴を履いて外に出た。
時間が経つにつれて、気温が下がって行くのが身体で体感していた。
「それにしても、今日は、寒く感じる!」木嶋は、最寄り駅まで、早足(はやあし)で歩いていた。
駅に着いた木嶋は、タイムスケジュール板の見上げた。

横浜駅に行くには、ゆっくり行くか?早く行くか?思案していた。時間的には、まだ余裕ある。今、焦ることはないのだ。ゆっくり行くことにしたのだった。

プラットホームに電車が入ってきた。

「プルー」発車ベルが鳴り、電車が走り出した。

「ガタン、ゴトン」揺られながら、空いていた座席に座り、夕刊紙を読んでいた。

木嶋は、待ち合わせするとき、時間に余裕を持ち行動していた。会社から、直接、はるかと待ち合わせするときは、はるかが待つのが多い。

「今日は、自分が待とうかな!」木嶋は、心の中で思いながら、電車が横浜駅のホームに入ったのだ。

ホームに降りた木嶋は、横浜駅の改札を出て、腕時計を見た。午後4時30分になっていた。

「東急ハンズに行くよりも、高島屋の中に入り、温まって行こう!」木嶋は、高島屋の方向に歩き始めていた。

木嶋の携帯が、鳴っている。

はるかからであった。

「木嶋さん、今、どちらにいますか?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「横浜駅から高島屋に向かう途中です。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「私も、あと少しで着きますので待っていて下さい。」木嶋に伝えて、電話を切ったのだった。

第９４話

木嶋は、待ち合わせ場所に着いた。
階段を上がり、２Ｆの空いている座席を探していたのだ。
空いていたのは、コーナーサイドだった。
木嶋は、そこに座り、夕刊紙を広げ、
「後から１名来るので、２名で…。ケーキセットで…ケーキは、ショートケーキ。飲み物は、ホットアメリカンコーヒーでお願いします。」店員さんにオーダーをしたのだった。
木嶋は、
「いつものように、時間通りに来ないはず。ゆっくり寛ごう。」
夕刊紙に読み更けていた。
はるかが、まともに時間通りに来たことなど皆無であった。
酷い時は、１時間以上も待たされることも【何度も】あるのだ。
木嶋も、人間である。怒りたいこともある。
「本人の自覚を、促すより方法がない。」木嶋は、左手に腕時計を見た。
待ち合わせ時間に、まだ猶予がある。
先ほど、オーダーしたショートケーキとホットアメリカンコーヒーが、木嶋のテーブルに運ばれてきた。
木嶋は、早速、コーヒーにミルクと砂糖を一杯入れ、スプーンで掻き混ぜて、一口、コーヒーを飲んだ。
夕刊紙を、パラパラめくっていると、クロスワードパズルがあった。
「最近、頭の体操をしていないから、短時間でやるにはいいかな！」
チャレンジをしよう。
木嶋は、コートの中にあったボールペンを取り出し、クロスワードパズルを解き始めていた。
コーヒーショップ『Ｙ』にある掛け時計が、午後５時の時報と共

にメロディーが、
「ピリーン」鳴っている。
はるかからの連絡は、まだない。
ふと、腕時計を覗くと午後5時15分を過ぎていた。
「いつものことながら遅刻か…！」
木嶋は、携帯を取り出し、はるかに電話をした。
「プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
はるかが、電話に出た。
「もしも～し、はるかですが…」木嶋に答えたのだ。
「木嶋です。まだ時間が掛かりそうですか？」はるかに聞いたのだ。
はるかは、
「連絡をしなくて申し訳ありません。今、高島屋にいるので、もう少し見たいのですが良いでしょうか？」木嶋に聞いていた。
木嶋も、はるかにそう言われてしまうと弱いのだ。
「いいよ。せめて午後5時30分ぐらいまでには、コーヒーショップ『Y』の2Fコーナーサイドの席に来て下さい！」期待感を込めて、はるかに伝えたのだ。
はるかも、
「分かりました。そのくらいの時間までに行きます。もう少し、お待ち下さい！」木嶋に話して、電話を切ったのだ。
木嶋は、
「いつもながら、こっちから連絡をしないといけないから、嫌になる。」ボヤいているのであった。
「カッ、カッ、カッ」階段を上がってくる靴の音が聞こえてきた。
木嶋が、振り向いた。
はるかでは、なかった。
別人の女性であった。
どうやら、一人で来たみたいであった。
木嶋は、好きな女性のタイプではなかった。

スタイルは、背が高く、濃い栗色で、髪型がロング。化粧も濃かったのだ。今風の女性である。

灰皿を取り、煙草(たばこ)に、火を点(つ)けて、おいしそうに煙りを出していた。

木嶋の好きなタイプの女性は、知的な女性が好きなのである。

木嶋自身、煙草は吸わず、女性でも、吸う人は苦手であった。

はるかは、煙草を吸わない。魅力な部分は、どこにあるのかと、以前、麻美に聞かれたこともあったが、

【素直な心と瞳に惚れた】いつも、そう答えていたのだ。

再び、階段を、

「カッ、カッ、カッ」靴の音が聞こえてきた。

振り向くと、はるかが来たのであった。

「遅くなりました。」はるかが、木嶋に頭を下げ、席に座ったのだ。

木嶋は、

「麒麟(きりん)のように、首を長くして待ちくたびれました。」はるかに話したのだ。

「それなら、トンカチで頭を叩かないといけませんね!」はるかが、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「コブが出来るじゃないの?」はるかに話し、

はるかは、

「プッ…と」笑っていた。

木嶋も、つられて、

「ハハハ」笑ったのだ。

第９５話

はるかは、
「木嶋さん、何を頼んだのですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「ケーキセットを頼みましたよ。」
「私も、それにしようかな？」はるかは、悩みながら、木嶋に答えていた。
はるかは、店員さんを呼び、
「ケーキセットで、ホットロイヤルミルクティーとモンブランをお願いします。」オーダーをしたのだった。
「今年は、私にとって有意義な一年だったような気がします。」
木嶋に問い掛けたのだ。
木嶋は、
「はるかさん、有意義な一年と言うと…どんなことがあったのかな？」はるかに尋ねたのだ。
「木嶋さんとお付き合いを始めてから、学生生活やクラブ『H』で、バイトをしていても、【メリハリ】ありますよ！」はるかは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「公私が充実するのは良いことです。自分も、はるかさんと遊ぶようになって、若い人の考え方が少しずつ理解をし始めたよ！」はるかに言葉を返したのだ。
はるかは、
「ありがとうございます。そう言って戴けると、私も嬉しいです。私は、木嶋さんで良かったと思います！」
「随分、自分を持ち上げますね！照れちゃいますよ！」木嶋は、はるかに話しながら、頭をかいていた。
木嶋は、話しを続け、

「はるかさん、卒業旅行って…いつ行くのかな?」はるかに聞いていた。
はるかは、
「卒業旅行は、女友達と一緒に行きますよ!」
「どこに行くの?」木嶋は、はるかに問い掛けたのだ。
はるかは、
「ハワイです!行く時期は、2月ですよ!」木嶋に話したのだ。
「いいな!海外に卒業旅行に行けるなんて…羨ましい!自分が高校時代、行かれなかったんだ!」木嶋は、はるかに話したのだった。
「木嶋さん、卒業旅行は無かったのですか?」はるかは、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「無かったと言うより、正確的には、人数が集まらなかったと言った方がいいかもね!」はるかに話したのだ。
はるかは、
「木嶋さん、高校って…全日制の高校ではないのですか?」
木嶋は、
「全日制の高校ではないのです。高校は夜間部に通っていましたよ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「以前、そんな話しを私にされましたか?」木嶋に尋ねたのだ。
「はるかさんには、全て、話したと思いますよ。」木嶋は、はるかの問い掛けに答えたのだ。
はるかは、
「うら覚えかも知れませんが、聞いた記憶があります。」木嶋に謝罪をしたのだ。
「記憶があるなら、はるかさんに話したと言うことですよ。」木嶋は、はるかを宥めた。
先ほど、オーダーしたホットロイヤルミルクティーとモンブランが、はるかの元に、運ばれてきた。

はるかは、ホットロイヤルミルクティーに、砂糖を入れ、
「いい香り…！」一口、飲んだ。
木嶋は、
「はるかさん、モンブランが好きなんだよね！」はるかに問い掛けたのだ。
はるかは、
「大好きですよ！木嶋さんも、一口食べますか？」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「はるかさんが来る前に、ショートケーキを食べたので、さすがに食べることは出来ません！」はるかに伝えた。
はるかは、
「そうですよね！」笑顔を出していた。
木嶋は、会社では、生産現場で仕事をしているので、いつも《ギスギス》した人間環境なのであった。
そんな…はるかの笑顔を見ながら話しをしていると、疲れが、遥（はる）か彼方（かなた）に飛んでいくのだ。
はるかは、【癒し系】なのだ。
木嶋は、
「はるかさん、自分が勤務している会社の最寄り駅近くに、おいしくて、人気があるケーキ屋さんがあるんだ。もし、良ければ一度、食べて見ませんか？」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「本当ですか？」
「本当ですよ！チョーおいしいよ。」木嶋は、はるかに答えたのだ。
はるかは、
「一度、食べてみたいです！何が【イチ押し】ですか？」
木嶋は、
「チョコレートケーキが、有名ですね！」

「来年になったら、食べさせて下さい。お願いします！」はるかは、木嶋に嘆願したのだ。

木嶋は、

「ホワイトデーに渡そうか？なんてね…」少し意地悪気味に、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「もう、知らないからね！」怒った仕草をしたのだ。

その表情は、普段と変わらない。

木嶋は、はるかのことが、愛しく思えていた。

第９６話

コーヒーショップ『Ｙ』のＢＧＭから懐かしいメロディーが聞こえてきた。

～♪～大きなノッポの古時計、おじいさんの時計百年、いつも動いてた、ご自慢の時計さ～♪～

平井堅さんが歌っている～大きな古時計～だった。

木嶋は、小さいときに歌った記憶があった。

その曲を、口ずさみ始めていると、はるかも一緒に歌い始めたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、《大きな古時計》は知っていたのですか？」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「えぇ～、知っていましたよ。小学生ぐらいに、学校で習いましたよ。」はるかに話したのだ。

「随分、物知りなのですね。木嶋さんに、ベタ惚れしそうです。」はるかが、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「ベタ惚れしそうなのは、自分だったりして…。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「木嶋さん、ジョークが上手いですよ！今度、カラオケで歌って下さい。《大きな古時計》…」木嶋にお願いをしたのだ。

木嶋は、

「いいよ！はるかさんが、時間的に余裕があるとき、カラオケに行きましょう！」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「本当ですか？」

「本当ですよ！アカペラでも歌えますよ。」木嶋は、はるかに話しを続けてた。

「はるかさん、宇多田ヒカルと同じ世代でしたよね！」

「宇多田ヒカルと同じ世代ですけど…何かあるのですか？」はるかは、木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、

「以前、はるかさんに聞いたと思いますが、宇多田ヒカルの曲は聴くのですか？」はるかに聞いていた。

はるかは、

「宇多田ヒカルの曲は、聴きますよ。同世代としては最高ですよ！一度、聴いてみて下さい。」

「今、流行りの曲は、何がヒットしているか判らないのです。」木嶋は、はるかに尋ねるのであった。

「洋楽も、聴きますよ。聴いたことはありますか？」

「洋楽…ね。洋楽は、自分は、一度だけ聴きました。曲名は《ＧＩＶＥ　ＭＥ　ＵＰ》！それ以来、洋楽には、接していないですね！」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

「《ＧＩＶＥ　ＭＥ　ＵＰ》ですか！私も聴いたことがありますよ。洋楽は、ジャンルがたくさんあるので、色々と教えますよ。ブランド品も一緒にね。」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、その言葉を聞いた時に、

右肘をテーブルから「ズルッ」落としたのだ。

「はるかさん、装飾品でも、好きなブランドがありましたよね？」はるかに、木嶋は尋ねたのだ。

はるかは、

【ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ】が好きですよ。

【ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ…か】木嶋は、呟いた。

「以前、誕生日プレゼントで買いましたよね。【ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ】は…。」はるかに聞き返したのだ。

「そうですよ。木嶋さん、高価な商品を買ってもいいですか？」

少し自嘲気味に、木嶋に伝えていた。
木嶋は、苦笑いを浮かべるしかなかったのだ。
「少し考えさせて…」それしか返す言葉が見当たらなかった。
木嶋は、コーヒーショップ『Y』の掛時計で、時間を確認していた。
時刻は、既(すで)に午後6時30分になろうとしていた。
「はるかさん、クラブ『H』に行く時間ではないのですか?」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「実は、今日は、店に出勤する女性が多くて、急遽(きゅうきょ)休みになったのです。」木嶋に答えていた。
「そんなことがあるのですか?」木嶋は、驚いた表情を見せたのだ。
はるかは、
「私は、今日みたく、急遽休みになった日は、ずっと木嶋さんと居たいのですが…ダメですか?」木嶋の心に問いただしていた。
木嶋は、激しく心が揺れ動いていた。
「ジキルは、『一日、居たほうがいいぞ。』と言う言葉と、ハイドは、『まだ機会があるぞ。』と一瞬の迷いがあった。」
木嶋の結論は、
「はるかさんが、時間の許す限り一緒きいますよ。」ジキルの結論を出したのだった。
再び、大きな古時計のメロディーを聴きながら、コーヒーショップ『Y』の中で、時間(とき)が過ぎて行く。
「いつまでも、一緒にいようね!」木嶋は、はるかに約束したのだ。
お互いの小指で、指切りをしたのだった。
木嶋とはるかは、座っていた座席を立ち、木嶋が、会計伝票を持ちながら、1Fで会計をしたのだった。
はるかは、店の外で木嶋が来るのを待っていた。

木嶋が、コーヒーショップ『Y』から出てきたのを確認してから家路に着くのであった。

第９７話

木嶋は、家に入り、はるかとの甘い時間を、過ごしたことが忘れられずにいた。

「はるかは、素直で良いよな！夜の仕事をしているから、愛想がいいのは、当たり前なのかも知れない！今の自分には、居てもらわないといけない人。本当に好きな人！」

心の叫びが、今にも口から出てしまいそうだった。

そんな心境の中で、大晦日になり、

木嶋は、紅白歌合戦が始まり、歌を聴きながら想いに更けていた。

「今年も、終わりだし、はるかにメールでも入れよう。」近くに置いてあった携帯を手に取った。

「はるかさん、今年一年ありがとうございました。仲良く過ごせたことが一番良かったと思います！来年も、宜しくお願いします！」笑顔の顔文字入りでメールを送信した。

炬燵の中に入り、家族全員、揃いながら、年越蕎麦を食べていた。

木嶋は、

「家族全員が無事に過ごせたことが良かった。」そう感じながら、除夜の鐘が、

「ゴーン、ゴーン、ゴーン」ＮＨＫチャンネルから聞こえてきたのだった。

家の中にある掛時計を見ると、時刻は、あと１０分弱で、新年を迎えようとしていた。

姉が、

「これから家の近くにある神社に、二年参りに行こう！」家族全員に声を掛け、

「行こう、行こう！」軽いノリで、身支度を素早くすませて、家を出たのだった。

家から、歩いて１０分ぐらいの所に、小さいながらも神社がある

のだ。
ガソリンスタンドを右手にして、左に曲がった。
近所の人たちが、集まっていた。
「氏子(うじこ)の人たちかな！」
最後尾に並びながら、お参りする順番を待っていた。
待ち時間の間、甘酒が配られていた。
木嶋も、寒さに震えながらも、手に取り、甘酒を飲んだのだ。
少し遅れて、両親が歩いて、列に並んだ。
神社に祭祀(さいし)されている神様に、おさい銭を入れ、拍手(かしわで)を打ち、一礼、願掛けをしたのだ。
「はるかさんと、いつまでも仲良く、結婚出来ますように…。」
木嶋の本心であった。
「誰にだって、明日を夢見ることぐらいはいいさ！」呟きながら、神社をあとにした。
両親が参拝を終えて、姉と合流、家族全員、家に帰ったのだ。
家に着き、携帯を覗くと、着信のサインが出ていた。
「誰からだろう！」受信メールを見た。
はるか。麻美、玲の3人から《あけおめメール》だった。
最初に読んだのは、はるかからのメールだった。
「木嶋さん、明けましておめでとうございます！今年は、成人式を迎えます。私も、晴れて大人の仲間入りです。今年も宜しくお願いします！」
木嶋は、はるかからのメールが嬉しくて、仕方なかった。
「はるかさん、明けましておめでとうございます。自分も、はるかさんが成人式を迎えるのを心からお祝いを致します。至らないかも知れませんが、今年も宜しくお願いします！」木嶋は、はるかにメールを送信したのだった。
木嶋は、なかなか寝付けずにいた。
「何故だろう！」
興奮をしていたのだ。

いつもは、メールは読んで返信するが、麻美と玲のメールは、チェックして、寝床に入ったのだ。
木嶋は、疲れが出てしまったのだ。
疲れを取るには、温泉に行って癒した方がいいと、木嶋は考えていた。
新しい年になり、木嶋は、寝床から起きたのだ。
家族に、新年の挨拶を終えて、木嶋は、温泉に行くことを提案した。
「温泉に行こう！」
駅伝を観戦しながら行くよりも、早くに温泉地に行った方が得策と考え、支度をしたのだ。
駐車場まで歩きながら、先ほどチェックした麻美と玲の読んでいた。
「木嶋君、明けましておめでとう。今年も、仲良くして、お店に遊びに行く来て下さい！」麻美も玲も、同じ内容のメールであった。
木嶋は、
「明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。」新年の挨拶メールを麻美と玲宛てに、送信したのだった。
木嶋には、はるかも、麻美も、玲の3人とも失いたくない【掛け替えない存在】に変わろうとしていたのだ。

第９８話

はるかと一緒にいることで、仕事で溜まっている鬱憤が消えて行くのだ。

【正直、不安もある！クラブ『Ｈ』を辞めたら、もう会えなくなるかも…】木嶋の心の中の悩みを、麻美にメールしたのだ。

「木嶋君、お久しぶりです。メール読みました。不安になる気持ちは理解出来ます。今、分かってほしいのは、はるかさんから見たら、《店とお客さんの関係》何もないのが現実です！その先を、追い求めても無理だと思うよ。」木嶋にメールを返したのだった。

木嶋は、

「はるかさんは、友達としてと付き合って下さいと言われて、今まで、頑張って来たんだ。その努力は報われることはないのかな？」麻美にメールを送信したのだ。

麻美は、

「何度も言いますが、あくまでも、《ホステスとお客さんの関係》であって、はるかさんが、夜の仕事を辞めたらそれで終わりですよ。メールだけだと、埒が明かないからあとで電話をします！何時ぐらいがいいのかな？」木嶋に返信したのだ。

木嶋は、

「そうだね。何時にしようかな？夕方ぐらいがベストかな？」麻美にメールしたのだった。

麻美は、

「了解しました！」木嶋に顔文字入りのメールで返したのだった。

木嶋は、一人で考えていると、極まれに、

《物事をマイナス思考》に捕らえてしまう。

それが、時として《アダ》になり、判断を誤って下すことがあり、多くの同志が離れていってしまった原因でもあるのだ。

木嶋は、

「そうだ、玲さんにも聞いてみよう。」
炬燵の上にあった携帯を取り、麻美に送ったメールの内容を玲に転送したのだ。
冬だと言うのに、暖冬のせいだろうか?気温が上がってきたので、木嶋は、最寄り駅近くにあるインターネットカフェ『M』に歩いて行ったのだ。
一人で家に居るよりは、外に出て、活動的に動いた方がいいと考えたのだ。
はるかと付き合うようになってから、家と会社の往復だけではなくなり、色んな店で食事をしたり、買い物にも行ったりして、自分は、良い方向に向かっていると思うのだった。
情報誌でも、横浜駅近辺にある新しい店を見つける楽しみもあるのだ。
インターネットカフェ『M』では、情報誌だけでは判らないことも検索していたのだ。
普段から、仕事でパソコンを使用せず、慣れていないのか?目が《ショボショボ》と疲れていた。
ここは、マンガや雑誌など多数、ストックされていて、利用している人を飽きさせないようになっている。
店の雰囲気は、明るく、木嶋は、いつも2時間ぐらいは過ごしているのだった。
インターネットカフェ『M』を出て、家に向かって歩き始めたのだ。
木嶋の表情は、少し暗い。新しい年は、スタートしたばかりなのに、テンションは低くなるばかりだ。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。
この着信音は、はるかからであった。
「木嶋さん、お久しぶりで~す。これから横浜に出て来ませんか?」木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、
「これからですか?」はるかに尋ねたのだ。
「そうです。私は、今、横浜に出てきているのですが、いかがでしょうか?」はるかは、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「今から急いで行っても、３０分ぐらい掛かりますが、はるかさん、待つことが出来ますか?」はるかに問い掛けていた。
はるかは、
「待ちますよ。私は、木嶋さんに会いたいのです!」
木嶋は、
「そこまで、はるかさんが言われたら行かないといけませんね。これから横浜に向かいます!」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「待ってま～す。」電話を切ったのだ。
最寄り駅から電車に乗り、はるかの待つ横浜に向かったのだ。
電車内で、空いていた座席があったので、座ったのだ。
携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」着信音が鳴っている。
麻美からであった。
「木嶋君、麻美ですが…。」
木嶋は、電話に出た。
「今、電車で移動中なので、あとから掛け直します。」麻美に伝えたのだった。
麻美は、
「分かりました。」タイミングが悪い時は、こんな状況が、木嶋には多い。
電車が、横浜駅に到着直前、玲からのメールがあったのだ。
座席に座っていたため、気づかなかったのだった。

第９９話

木嶋は、横浜駅に着いて歩きながら、玲のメールを読んでいたのだ。

「木嶋さんが、不安になるのは仕方ないと思うよ！彼女は、夜の仕事をしている関係で、木嶋さんと交際しているはず。深入りしないようにね。」

「やっぱりそうなのかな！麻美さんと玲さんが、図らずも同じ答えと言うのも珍しくないのかな！」疑心暗鬼になっていた。

ホームの階段を降り、改札を出た木嶋は、ダイヤモンド地下街の方向に向かいながら、はるかに電話をしたのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。

「もしも～し、はるかで～す。木嶋さん、今、どちらいますか？」はるかが電話に出たのだ。

「木嶋ですが…今、横浜駅の改札口を出たところです。どちらに行けばいいのかな？」木嶋は、はるかに尋ねたのだ。

「そうですね～。どこで待ち合わせしましょうか？今、考えますので、少し待ってくれますか？」木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、

「いいですよ。有隣堂で本の立ち読みをしていますから、電話を下さい。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「分かりました。」木嶋との会話を終え、電話を切ったのだった。

「アッ、電話をしないと…。」はるかとのデート気分に浮かれていた木嶋は、麻美へ電話をしなければならないことに気が付いた。

携帯を手に、麻美に電話をしたのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。

「もしもし、麻美です。」木嶋に答えたのだ。

「先ほどは、電話に出れなくて申し訳ないです。」木嶋は、麻美

に詫びていた。
「何度か掛けたのですが、話し中でしたよ。それより木嶋君、今は電話で会話が出来る状況かな?」麻美が、木嶋に確認したのだ。
木嶋は、
「うん、大丈夫です。今は、横浜駅のダイヤモンド地下街の有隣堂にいますよ!」麻美に答えたのだ。
麻美は、
「誰かと待ち合わせしているの?」
「はるかさんと待ち合わせをしていますよ。」木嶋は、麻美に話したのだ。
「木嶋君、もうラブラブじゃないの!私が、アドバイスを送らない方がいいのかな?」麻美は、木嶋を突き放すような言い方をしていた。
木嶋は、
「そんな言い方をしないで下さい。自分には、今の若い女性がどんな考え方しているのか、判らないので、メールしたのです。」麻美に伝えたのだ。
「私は、木嶋君にアドバイスをするのは、友達だからですよ。」
木嶋は、
「それは、いつも麻美さんが、自分に話していますよ!」麻美に話したのだ。
麻美は、
「私から見たら、木嶋君は、いいように利用されているんじゃないのかな?そう見ているよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「どうなんだろうね!自分は、利用されているなんて考えたことはないね。そう言えば、はるかさんは、もうすぐ成人式を迎えるよ!」麻美に話したのだ。
麻美は、
「利用されているって…。いい加減、はるかさんから目を覚まし

た方がいいよ。《はるか中毒症に掛かっている木嶋君に言っても無理かもね。治す薬はないよ。》成人式か…私たちにも、そんな時代があったんだよね！」木嶋に同意を求めていた。

木嶋は、

「確かに、治す薬はないかな？自分たちの成人式は、バブルの時代。今と昔では、比較すること自体、古いと言われそうだよ。」

「そうだよね。その間の１０年は、【失われた１０年】と言われているよね！」麻美は、木嶋に聞いていた。

「今がそうかも知れません。【失われた１０年】より長く感じているよ。」木嶋は、麻美に話していた。

「木嶋君、はるかさんの誕生日に何かプレゼントをしたの？」麻美は、木嶋に問い掛けていた。

木嶋は、昨年、はるかの誕生日に、ＨＥＲＭＥＳのバックをプレゼントをしたのを、思い出したのだ。

【今、麻美との会話で、はるかに誕生日プレゼントを買ったなんて話したら、自分が責められてしまう。ここは、何とか逃げないといけないな！】

木嶋は、

「誕生日プレゼントなんか買いませんよ！何か買ってとオネダリしていたが、全部無理と…」麻美に答えたのだ。

麻美は、

「それでいいですよ！木嶋君よりもっと稼ぎがいい人からプレゼントを貰っているのですから、はるかさんの物欲は凄いですからね。関わらないように…私がいるのですから、いつでも相談に乗りますからね！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「別れるように努力します。」麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「努力して下さい。」木嶋との会話を終えて、電話を切ったのだ。

木嶋の頭の中に、はるかと別れるつもりは、毛頭ないになかった

のだった。

第１００話

木嶋は、どんなに仕事が忙しくても、はるかと一緒に時間を共有したいのだ。

それが日常なのだ。

万が一、はるかが、木嶋の元から離れてしまった時、横浜駅で乗り換えている楽しみが無くなってしまう。

麻美が、木嶋に話しているように、《単なるお客さんとホステスの関係。過度の期待は禁物。》と言われても無理もない。

はるか以上の女性を探すとなると、少なくとも、一年以上の歳月（さいげつ）が掛かると感じていた。

はるかから、富士松さんに、方向転換するのも次なる一手だ。

富士松さんに、告白をして、フラれた時のリスクを考えると反動が大きすぎる。

はるかの存在は、木嶋には大きい過ぎるのだ。蟻地獄（ありじごく）に、落ちたまま、ハマって抜け出せずにいたのだった。

携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。　木嶋は、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが。」

「はるかです。木嶋さん、今、どこにいるのですか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「今ですか？どこに行こうかと迷いましたけどね！東急ハンズにいますよ。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「東急ハンズですか！私も、買いたい物があるので、行ってもいいですか？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「いいですけど、クラブ『H』の出勤時間は大丈夫なのですか？」心配になり、はるかに尋ねたのだった。

はるかは、

「私は、今日、クラブ『H』はお休みにしてあります。時間的にゆとりがあります。木嶋さんは、大丈夫ですか？」

木嶋は、

「いつも会う時間が短いので、今日は、遅くまでいいですよ。」はるかに話したのだった。

はるかは、

「分かりました。東急ハンズで待っているので、着いたら連絡を下さい。なるべく早く来てね！」はるかに話したのだ。

木嶋は、

「分かりました。東急ハンズで待っているので、着いたら連絡を下さい。なるべく早く来てね！」はるかに話したのだ。

はるかは、

「は～い。」元気な声で木嶋に話し、電話を切ったのだった。

はるかが、クラブ『H』に出勤の日は、会う時間が限られている。コーヒーショップ『Y』やカフェレストラン『F』に入っていても、短時間の間に、料理を出せるメニューが中心で、オーダーしているので、落ち着いて話しをする時間が少ない。

唯一（ゆいいつ）あるとするなら、はるかと一緒に、クラブ『H』に行く時だけかも知れない。

もちろん、木嶋が一人（ひとり）で行く場合は、極まれである。

富高さんと一緒に行けば、木嶋も安心なのだ。

気掛かりなことは、富高さんが、携帯電話を持っていないのが難点なのだ。

携帯があると、便利なことに目を奪われがちになる。その反面、プライベートに干渉しすぎてしまう。

それが良いのか？悪いのか？人それぞれだと、木嶋は思うことも多々あるのだ。

木嶋は、東急ハンズの道工具フロアで、道具を見ていた。
はるかから、電話がきてから15分ぐらいが経過していた。
木嶋も、痺れを切らしていた。
段々とイラついている。
「いつものことながら、時間にルーズだな！」木嶋もボヤくよりも溜め息を出すしかなかったのだ。
木嶋の行動を察知していたのか？
着信履歴を覗くと、はるかからの着信が5件あったことに気がつかなかった。
慌てて、はるかに電話をしたのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。
「もしもし、はるかです。」はるかが電話に出たのだ。
木嶋は、バツが悪そうに、
「着信に気がつきませんでした！申し訳ありません！」はるかに謝罪をしたのだ。
「木嶋さん、何回も掛けたのに、気がつかないなんて…気をつけて下さい。」はるかが、電話口で木嶋に怒っていた。
「電波の状態も悪くて…。」はるかに答えたのだ。
「仕方ないですね。」はるかは理解をしたみたいであった。
続けて、
「今、何階のフロアですか？」はるかは、木嶋に聞いたのだった。
「道工具売場です。」
「そのフロアから動かないで下さい。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「気長に待ちますよ。」木嶋は、はるかに答えるしかなかったのだった。

第１０１話

木嶋のいるフロアに、はるかが来たのだ。
「お待たせしてゴメンなさい！」
はるかに、そう話されると、先ほどまで、イラついていた木嶋の表情が緩んでいた。
「結構、待ったんじゃないの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「うん、そうだね！待ったと言えば、待ったかも知れない！東急ハンズの中を見ていたから、時間は、気にはしなかった。さっき腕時計を見たら、３０分ぐらい経過していたので、ビックリしたよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「木嶋さんが、道工具のフロアにいるなんて意外と言えば、意外のような気がしますよ！」木嶋に質問したのだ。
木嶋は、
「そうかな？仕事で、使う物もあるから見ていて楽しいよ。自分が、見る場所は限られているよ！」はるかに答えていた。「私は、システム手帳が売っている売場に行きたいのですが、一緒に上のフロアに上がって行きませんか？」木嶋に聞いていたのだ。
「いいよ。一緒に行こうか！」
「カッ、カッ、カッ」靴の音が鳴らしながら、階段を一段、また一段、
はるかが、一歩先に出て、木嶋が後(あと)から、追うように一緒に上がって行ったのだ！
システム手帳が売っている売場に着いたのだ。
木嶋は、システム手帳は使ったことなど一度もない。普通の手帳しか購入しないのだ。
手帳は、人によって使う種類も違う。長期的に考えると、システ

ム手帳が便利なのだ。
中のシートを入れ替えれば、最低でも3年～5年は使えるのだ。
そう考えると、普通の手帳を使っていると、一年交換で変えるのは、コストが高くなるのだ。
はるかは、システム手帳に、こだわっていたのだ。
「何にしようかな？」種類が多く、目移(めうつ)りをしていた。
木嶋は、今、使っている手帳があるので、《サラッ》と、流すように見ていた。
木嶋の仕事は、生産現場なので、システム手帳を使う機会がないが、手帳には、残業や臨時出勤した時間を書き込んでいた。
営業や購買とかなら、もう一つあれば、いいとは思う。
「これにします。」システム手帳を取り、木嶋に渡したのだ。
木嶋は、
「これでいいの？」はるかに聞いたのだ。
はるかは、
「これでいいですよ。」ベージュ色の取り外しが出来る手帳だったのだ。
さすがに、ピンクやブラックを選ばなかったのが、はるからしい。
商品を選ぶセンスは、抜群だった。それは、洋服選びにも通じていた。
「木嶋さん、コーヒーショップ『Y』に先に行っているので、会計をお願いしていいですか？」はるかは、木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「いいですよ。」と、はるかに伝えたのだ。
その言葉を聞くのを待っていたかのようだった。
はるかは、安堵(あんど)な表情を浮かべ、東急ハンズの階段で降りて行ったのだ。
木嶋は、会計をしながら呟いた。
「はるかが、もうすぐ成人式か…何だかんだと言っても一年間、交際出来たのか！我ながら拍手かな！」そう思っていた。

会計が終わり、はるかの待つ、コーヒーショップ『Y』に足を向けた。

「カッ、カッ、カッ」靴の音を出しながら、歩いていく。

いつものコーヒーショップ『Y』のコーナー席に、はるかが座っていた。

木嶋は、はるかと交際を始めてから一歩ずつ、歩きながらも若い女性との会話の仕方を学んでいた。

最初の頃は、どこのクラブやスナックなどで、女性が横に座っていても、仏頂面(ぶっちょうづら)をしていて、満足に、女性と話しすら出来なかったことを思えば、進歩したのだ。

依然として、富士松さんには、話すキッカケすら探せないでいた。

木嶋は、はるかのいるコーナー席に行き、座ったのだ。

「はるかさん、さっきの買い物。」そっと、はるかに差し出した。

はるかは、

「ありがとうございます。木嶋さん、私、もうすぐ、成人式を迎えますが、その日が来るのを待ち焦(こ)がれていました。今は、凄く嬉しいのです!」はるかは、木嶋に話していた。

木嶋も、

「そうだろうね。自分が成人式を迎える日が近づくにつれ、テンションが高ぶってくるよ。学生時代の仲間と一緒に行った記憶が鮮明に残っているよ!もちろん、はるかさんも、誰かと待ち合わせしているよね?」はるかに聞いていたのだ。

はるかは、

「仲の良い友達と待ち合わせいます。会場も同じ場所なので、安心して行くことが出来るのです!」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「差し障りないなら、場所は、どこなのかな?」

「アリーナですよ!」はるかが木嶋に言ったのだ。

木嶋は、目を丸くしながら、

「アリーナって…横浜アリーナ?」驚いた表情だったのだ。

「そうですよ。滅多に、アリーナの中には、入ることはないですよね？アリーナのセンター席に座れるなんて機会がないですよ。」

はるかは、興奮気味に木嶋に話していた。

「センター席に、座れるなんて羨ましいな！」はるかが輝いて見えたのだった。

第１０２話

はるかは、

「木嶋さん、私が、卒業旅行で、ハワイに出掛けているときに、浮気をしようなんて考えていないでしょうね？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「何故？浮気をしないといけないのですか？心当たりがないよ！」

はるかに話したのだ。

「富高さんと一緒に、麻美さんのいるお店に、行くのではないかと正直、心配なんですよ！」はるかが、木嶋に問いかけたのだ。

木嶋は、

「麻美さんの店に行くのなら浮気じゃあないでしょう！浮気と言うのは、クラブ『H』に行って、他の女性を指名をするなら分かるよ！はるかさんが、いないのに、クラブ『H』行っても意味がないよ。今まで、はるかさんに内緒で、行ったことがありますか？はるかさん以外の女性に興味は…ありません。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、富高さんとクラブ『H』に来た時に、イベントコンパニオンをやっている《美優さん》がお店にいた頃、良くメールをしていたと、美優さん、私に話していましたよ！それは、浮気ではないでしょうか？」はるかは、木嶋に迫って聞いていた。

木嶋は、

「美優さんね。メールをしていたのは、紛(まぎ)れも無い事実です。イベントコンパニオンの仕事に興味があり、その会場に行ってみたいと思ったのです。美優さんと２人きりで、プライベートで会ったことはありません。実際に、こうしてプライベートで会っているのは、はるかさん、あなた一人です。それは、断言しますよ。」木嶋の思いを、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さんの言葉を、信用していいですよね？何事も信頼関係を築かないと長続きはしませんよね。」はるかは、自分自身を説得するように、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「そうですよ。何事も信頼関係が大切。今まで、何のために、努力してきたか判らないよね！」はるかに答えたのだった。

はるかは、

「私が、木嶋さんに対して疑心暗鬼になっていた部分があったので、心の中の《モヤモヤ》したのが無くなり、スッキリしました！安心して寝れますよ！」木嶋に話したのだった。

木嶋は、

「はるかさん、不安を抱くようなことをしてゴメンなさい。これから注意をします！何かあれば、はるかさんに報告するね。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「そうして戴けますか？木嶋さんの配慮が嬉しいです。そう言えば、富高さんって…元気にしていますか？携帯を持ったのでしょうか？」木嶋に、富高さんの近況を尋ねていた。

木嶋は、

「富高さん、元気にしていますよ。携帯は、今も持っていないよ！」木嶋は、はるかに答えていた。

「本当ですか？富高さんは、何故？携帯を持たないのでしょうか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「先週、富高さんと一緒に帰り道に問いかけたんだ！《何故？携帯を持たないの？あると便利なのに…》とね。」

はるかは、

「何て答えたの？」

「プライベートを干渉されたくないから持たないと…。」富高さん、自分に話していたよ。

はるかは、

「携帯があると、どこでも色んな場所で、携帯が鳴りますからね！富高さんが、プライベートを干渉されたくない気持ちは分かります。不便と感じないのかな？」はるかは、富高さんの姿勢に、理解を示すも疑念心は抱いていたのだ。

「富高さんの性格を考えると、これからも、携帯を持つことはないと思うよ！」木嶋は、はるかの疑問に答えたのだ。

はるかは、

「富高さんが、携帯を持つなら誘惑をしようと考えていたのに残念です。」

「何？誘惑って…。」木嶋は、はるかに尋ねたのだ。

「木嶋さんに内緒で、デートしてみたいなと思ったりして…。」

はるかは、悪戯（いたずら）っぽく、木嶋に話していた。

「はるかさん、酷（ひど）いな！自分には、浮気するなと言いながら、そんなことをするの？」木嶋は、はるかの真意が理解出来ずに、思考回路が【オーバーヒート】になりそう。

木嶋は、頭を抱（かか）え、悩んでしまった。

はるかは、

「冗談ですよ！」

「ハハハ」笑いながら、木嶋に話したのだった。

「その言葉を聞いて、安心したよ。」木嶋は、ホッとして、胸を撫で下ろしたのだった。

第１０３話

はるかは、明るい女性である。
木嶋には、無いものを持っているのだ。
かわいい顔に、惹(ひ)かれて行くのは当然だ。
はるかが、左手にしていた腕時計を覗くと、時刻は、午後８時になろうとしていた。
「木嶋さん、お腹(なか)空きませんか？ご飯でも食べて行きませんか？」
木嶋に尋ねていた。
木嶋も、
「いいね～！食べて行こうか？どこにしようか？」はるかに聞いたのだ。
はるかは、
「そうですね～。いつも、カフェレストラン『Ｆ』で、食べている機会が多いので、今回は、ポルタ地下街のお店で食べてみたいなと思うのですが…どうでしょうか？」はるかが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「ポルタ地下街ですか？賛成です。同じ店に行って、顔なじみになるのも一つの選択肢(せんたくし)ですが、ポルタ地下街は、【そごう】に行く時ぐらいしか通らないので、ぜひ、行ってみたいなと思います。はるかさんが、先に行って、お気に入りの店があれば、そこでいいよ。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「判りました。私も行きたいお店がありますが、店のメニューや混雑状況で変えますが、それでいいですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「それでいいですよ。自分は、動くより、ここで新聞を読みながら、寛(くつろ)いでいるので、決まったら電話を下さい。」はるかに話した

のだ。
はるかは、
「分かりました。」左手にコートを、右手にバックを持ちながら、木嶋のいる席を立ったのだ。
「あとで、連絡するので、待っていて下さいね。」はるかは、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「なるべく早くに、連絡下さい。」木嶋は、はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「は～い。」木嶋に返事を返して、歩き出したのだ。
木嶋は、手にしていた夕刊紙を再び、取り出し、読み更けていた。
「どんな店を、探してくるのだろう?」木嶋の胸に、期待と不安が去来(きょらい)していたのだ。
「すぐには、電話は来ないかな?」そう感じていても不思議ではない。
木嶋は、はるかと待ち合わせするときは、待つ時間が長いのだ。
もっとも、はるかが、クラブ『H』に行く日は、待ち時間は少ないが、ルーズなのは、最初にデートのときからである。
木嶋も、仕事の都合で、待ち合わせに遅れるのはあるが、約束の時間には、横浜駅に着いていて、待ち合わせ場所にいるのだ。
遅れそうな時は、はるかに、連絡をしているから怒られることは、まずはないのである。
女性は、時間にルーズな人が多い。随分、昔に、高校の後輩と交際をしていた時も、多少、待っていたこともあったので、当たり前に思っていたのだ。
社会人になり、陸上を通じて、知り合った仲間は、《飲み会》や《スキーツアー》などで遊びに出かけていても、待ち合わせ時間に来ていたので、約束を守るのが、木嶋自身も当然に思えていたのだ。
はるかと交際を始めた頃は、些細(ささい)なことで、喧嘩(けんか)をしていたが、最近になり、諦(あきら)めも肝心(かんじん)だと感じていたのだ。

木嶋が、腕時計を覗くと、２０分ぐらいが経過していた。
木嶋は、
「はるかのお気に入りの店が混んでいるのかな？」少し、呟いていた。
夕刊紙も、何度も目を通していると、読む記事がない。
携帯を取り出し、Ｙａｈｏｏ！のホームページを、クリックしようとしていた。
その時、はるかからの着信音が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っていた。
木嶋は、
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。お待たせして申し訳ありません！場所は、ポルタ地下街に『自然（じねん）や』と言うお店があるので、私が先に入っていますので、お店の前に来たら電話をして下さい。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「分かりました。店の前に着いたら連絡をします。」はるかとの会話を終え、電話を切ったのだ。
会計伝票を持ち、１Ｆフロアにあるレジで支払いをしたのだ。
外は暗くなり、時間帯も週末の土曜日だ。人通りも多く、赤ら顔のおじさんたち、カップルが、腕を組み肩を寄せて歩いていた。
その人たちの横を、はるかの待つ『自然や』に向かって歩いていたのだった。

第１０４話

久しぶりに、はるかと長い時間、一緒にいれる安心感からなのか？コーヒーショップ『Y』を出てから、足取りが軽やかになっていた。

木嶋の気持ちに、微妙な変化がありそうな雰囲気が漂(ただよ)っていた。

【はるかを独り占めしたい。】独占欲が湧き上がって来たのだ。

《この心境で、はるかに話すべきなのだろうか？》

不安が脳裏を掠(かす)めて行く。

木嶋は、悩みながらも横浜駅構内を歩いていた。

相変わらず行き交う人たちの表情を観ていると、喜怒哀楽があり、人生模様に感じながら…

「横浜は凄いな！」木嶋は呟いていた。

ポルタ地下街の階段を下りて、インフォメーションボードを覗いていた。

「自然や…」ボードを探していた。

「ここね。」宝物を探し当てたみたいに喜びを噛み締めていた。

距離は、そんなに遠くない。

木嶋は、

「カポッ、カポッ、カポッ」靴を擦りながら、店の前に着いて、はるかに電話したのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音がなっていた。

はるかが、電話に出たのだ。

「もしもし、はるかですが…。」

「木嶋です。今、店の前に着きました！はるかさん、中にいるのかな？」はるかは、

はるかに聞いていたのだ。

「店の中にいますよ。奥の座席です。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「了解しました！」はるかとの電話での会話を終え、店の中に入って行ったのだ。
「いらっしゃいませ。」威勢の店員さんの声が《こだま》する。
はるかのいる座席を目指した。
木嶋は、
「お待たせしました。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「お腹空いた。」木嶋にボヤいていた。
木嶋は、
「待たせたね。何をオーダーしようか？」はるかと一緒にメニューを《パラパラ》とめくっていた。
はるかが、近くにいた店員さんに声をかけた。
「こちらのお勧めは何でしょうか？」
店員さんは、
「そうですね～。『牛カルビの葱塩焼き』がオススメです。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、今、店員さんが、言われたオススメメニューを頼みたいのですがいいですか？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「それでいいよ。あとは、鶏と玉子とじご飯。はるかさんは…。」
「私は…生ハムグリーンサラダ。木嶋さん、飲み物はどうしますか？」はるかが、木嶋に尋ねていた。
「そうだね。烏龍茶で！」木嶋が、店員さんにオーダーしたのだ。
はるかは、
「私も、同じで。」店員にオーダーしていた。
店員さんは、
「繰り返します。鶏と玉子とじご飯、生ハムグリーンサラダ、牛カルビの葱塩焼き、烏龍茶2つ。以上で宜しいでしょうか？」木嶋と、はるかに確認した。

木嶋と、はるかと2人一緒に声を揃えて、
「OKです。」店員さんに答えたのだ。
木嶋は、
「初めてこの店に来たよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「木嶋さんと、このお店に入るのは初めてですが、私は、友達とたまに入りますよ!」木嶋に言葉を返したのだ。
「友達って誰なんだろう?」
木嶋の胸が、【ドキドキ】しながら、はるかに聞いていた。
はるかは、
「学生時代の女友達ですよ。」
木嶋は、はるかの言葉に安心したと同時に、気持ちを落ち着けていた。
はるかは、
「木嶋さん、どうしたのですか?」木嶋に尋ねていた。
「はるかさん、モテるから男友達と良く来るのかなと…」木嶋は、はるかに答えていた。
はるかは、
「クラブ『H』のお客さんとは、お店に近い場所しか行きませんよ。私の知っている人は、年配の方が多いので…。」
「若い人はいないの?」木嶋は、素朴な疑問を感じていた。
何故なら、はるかほど、可愛い女性に、アタックをしない男性がいないのが不思議に思っていた。
店員さんが、
「烏龍茶と牛カルビの葱塩焼きです。」木嶋とはるかの前のテーブルに置いた。
木嶋と、はるかは、烏龍茶の入っているグラスを持ち、
「今日は、お疲れさま。」はるかに伝えて、グラスを、
「お疲れさま。」と音を鳴らしながら、乾杯したのだった。

第１０５話

はるかは、
「牛カルビの葱塩焼き」を小皿に盛り、木嶋に渡し、一口、食べたのだ。
「塩味が利いて、美味しい。」はるかが、木嶋に問いかけていた。
木嶋も、一口、入れて見た。
「なかなか塩味が利いていて、自分好みの味だよ。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「店員さんが、オススメする料理ですね！」食べながら感心していた。
店員さんが、
「鶏と玉子とじご飯」と「生ハムグリーンサラダ」を運んできたのだ。
木嶋は、ご飯党なので、お腹がいっぱいになる、このメニューが良かったのだ。
はるかが、先ほど運ばれてきた2品を、小皿に取っていた。
クラブ『H』では、自然な光景である。
木嶋は、最初にデートした時に、
「えっ、こんなことをされていいのだろうか？」驚きを感じながらも、一抹の不安を抱いていたことがあったのだ。
人は、慣れてくると驕りになってくるのである。
木嶋と、はるかは、出会った瞬間が、眩し過ぎて、まばゆい光りを解き放たれていた。
運命的な出会いは、どこで訪れるかは判らない。
木嶋の中では、一番、強烈な【インパクトフラッシュ】であった。
現実に戻れば、木嶋が、クラブ『H』に通うのは、はるかがいるからなのだ。仕事のストレス発散もあるのだ。

それは、麻美のクラブ『U』や玲のクラブ『O』に行くのも同じなのだ。

木嶋は、

「はるかさん以外の女性には興味がない。」はるかに話してはいる。

心の奥には、常に、富士松さんと交際が出来ないかと野望があるのだ。

誰でも野望はある。

それが、良い方向か?悪い方向?選択は、自分自身が思考しなければならない。

木嶋は、悩んでいた。

いつかは、決断しなければいけないことを…

《プツン》と心身のバランスを崩すと、人は、犯罪を起こしてしまう。

木嶋は、恵まれている。

はるか、麻美、玲の3人がいることにより、心身のバランスが保たれていると言っても過言ではない。

一挙両得と言う言葉はあるが、独占欲の木嶋は、はるかを抱きしめたいと、いつも思いを馳せていた。

はるかを立てれば、富士松さんとの距離が遠くなり、富士松さんを立てれば、はるかとの距離が遠くなってしまう。

小皿に盛られた、「生ハムグリーンサラダ」と「鶏と玉子とじご飯」を一口ずつ、木嶋と、はるかは、頬張ったのだ。

はるかの顔が、見る見るうちに笑顔に変わって行く。

木嶋は、地元や会社の最寄り駅近くで、美味しい物を売っていると、はるかに、買ってくることがあるのだ。

最近あまりない。《サプライズ》する《タイミング》を伺っていた。

はるかは、

「自然や…最高。生ハムのサラダも、ドレッシングが効いていま

すし、玉子とじご飯も美味しい。木嶋さんはどうでしたか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「玉子とじご飯は、鶏肉でヘルシー。はるかさんが気にしている【コレステロール】も大丈夫なはず。サラダも、和風ドレッシングでいいよ。こういう店に来るのもいいよね！」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、何回か一回は、ここに来ませんか？」木嶋に問いかけたのだ。

木嶋は、

「うん。そうしようよ。」

はるかが嬉しそうに、

「ヤッター」両手を挙げて喜びを表現していた。

オーダーした料理を食べ終わり、

はるかが、

「今、何時になりますか？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「今は、夜の１０時になりますね。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、そろそろ帰りましょうか？」

「そうだね。時間も遅いからね。」木嶋は、はるかの意見に同意をしたのであった。

はるかが、先に座席を立ち、木嶋が、会計伝票を持ち、出入り口近くのレジに持って行ったのだ。

会計が終わり、はるかと一緒に、ポルタ地下街を歩きながら、横浜駅に向かった。

はるかは、木嶋が改札口に入ったのを見送りながら、手を振っていたのだった。

木嶋は、手を振りながら、東海道線のホームに上がり、電車に乗って、横浜駅をあとにしたのだった。

第１０６話

木嶋は、はるかと友達としての付き合いも長くなっていた。
朝、会社の通勤時間に熟慮していた。
「はるかは、いつの日かは、いなくなってしまう。その日が来る前に、自力で探さないといけないかな？」いつも感じながらも、時間だけが流れていく。
会社に着き、浮かない顔をしていた。
木嶋は、
「誰か良い人いないかな？」三谷さんに話しかけていた。
三谷さんとの付き合いは、木嶋が、会社に入社して以来、１５年の月日が経過していた。
三谷さんとは、良く仕事面で喧嘩をすることはあるが、身近に相談出来る仲間の一人なのだ。
また、木嶋のいる会社は、年配の方々が多いため、話しずらいと感じる時もあるのだ。
上司である溝越さんには、仕事以外での付き合いは、ないのだった。これが普通だと考えていた。
三谷さんは、
「八方美人過ぎるよ。」木嶋に話し始めたのだ。
「八方美人ではないと思っているんだ。」木嶋は、三谷さんに答えたのだ。
「周りから見たら、手当たり次第、声を掛けていると思われているぞ。」三谷さんは、論すように話していたのだ。
木嶋は、
「そうかな？周りは、そんなような目で見ているの？」三谷さんに尋ねていた。
三谷さんは、
「俺から言わせてもらうと、もっと女性に対して、積極性を出さ

ないとダメだよ。」

「積極性ね…どうすればいいのかな?」木嶋は、三谷さんに聞いていた。

三谷さんは、

「自分から女性のいる場所に出向いて、話しをしないといけないよ。」

「女性のいる場所か…そういう所って、《クラブやスナック、バー》だよね?」木嶋は、三谷さんに答えたのだ。

三谷さんは、

「そうだよ。そういう店に行くでしょう。男なら誰でも…。いつも通っている《クラブやスナック》あるよね?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「横浜と関内に、合計3軒ありますよ。」

「その中には、お気に入りの店があるはず!」三谷さんは、木嶋に聞いたのだ。

「お気に入りの店は、横浜ですよ。」木嶋は、三谷さんの質問に答えたのだ。

「木嶋が、横浜の店に行った時、いつも同じ女性しか指名しないのか?」三谷さんが、木嶋に話していた。

木嶋は、

「いつも、同じ女性しか指名しないよ。お目当ての女性がいるのに、他の女性と一緒に時間の共有をする勇気は自分にはありません。富高さんと一緒に行く日は、富高さんは、フリーの女性だよ。」三谷さんに話したのだ。

「同じ女性を指名するのはいいが、たまには他の女性と会話をしないと…」

「そのようにした方がいいの?」木嶋が三谷さんに問いかけたのだ。

「そうした方がいいよ!その女性に失礼な言い方かも知れないが、試すのも一手だよ。」

「自分的には、人を騙すみたいで嫌だな？」

「騙すんじゃないよ！試すの？いつもいる女性がどんな思いで、【木嶋を見ているのか？】見てみたくない？嫉妬すると思うよ。」

三谷さんは、木嶋に問いかけたのだ。

木嶋は、

「一度、やって見る価値あるのかな？」三谷さんに尋ねていた。

「やってみたらいいよ。」木嶋に伝えたのだ。

「了解しました。」木嶋は、そう答えるしかなかったのだ。

木嶋は、三谷さんとの会話を終えて、自分の作業エリアに戻った。

昼休みの終了の予鈴が、

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いていた。

木嶋は、気を取り直して、午後からの仕事を終え、帰る準備をしていた。

携帯電話の履歴に、着信があるサインが出ていた。

「誰だろう？」

木嶋が、画面を覗くと、麻美と玲、はるかからのメールであった。

一度に、３人からメールが来るのは、新年の元旦ぐらいだった。

普段は、はるかとメールをしている。木嶋が、はるかのことが好きだから連絡をするのが多い。自然な流れであった。

第１０７話

木嶋は、携帯の《メール受信ボックス》を開いた。
メールの着信順は、はるか、麻美、玲の順で来ていたのだ。
最初に読んだのは、着信順で最後にきた、玲のメールであった。
「木嶋君、もうすぐ誕生日なんだよね。随分、会っていないから、新年の挨拶(あいさつ)を兼ねてクラブ『Ｏ』に来て…？」木嶋に誘いのメールだった。
木嶋は、
「どうするべきか…。３店、全部に行くべきか？行かないべきか？」思案していた。
悩める子羊みたいである。考えあぐねた結果は、
「今は、まだ回答が出来ないので、もう少し時間を下さい。」木嶋は、玲にメールを送信したのだった。
玲からメールがすぐ来たのだ。
「いつ頃、判るかな？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「一週間後に、返事が出来ると思います。」玲に送信したのだった。
玲は、
「木嶋君、前向きに考えて下さい。」笑顔の顔文字入りで、木嶋にメールをしたのだ。
木嶋は、
「了解しました。」敬礼(けいれい)している顔文字入りのメールを玲に送信したのだった。
次は、麻美のメールをチェックして読み出していた。
「木嶋君、今月、誕生日を迎えるだね。クラブ『Ｕ』に、富高さんと一緒に顔を出しに来て下さい。はるかさんのいるクラブ『Ｈ』より若い女性が大勢(おおぜい)いますよ。」木嶋の心を揺さぶっていた。

木嶋も、一瞬閃いたのだ。

「そうだな。麻美さんに、会わないといけないかな！はるかのことで大分迷惑をかけてから…。富高さんに、話してみよう。」そう思ったのだ。

木嶋は、

来週、会社に行った時に、「富高さんに麻美さんからのメールの内容を見せてから、相談してみよう」と決めたのだった。

「麻美さん、ありがとうございます。来週、会社に行ったとき、富高さんに相談してから連絡をします。」木嶋は、麻美にメールをしたのだ。

麻美からの回答を待っていた。

最後に、はるかのメールを木嶋は、読んでいた。

「木嶋さん、先日は、ありがとうございました。もう少しで、誕生日を迎えますね。普段から木嶋さんには、お世話になってばかりなので、私に、誕生日をお祝いさせて戴けませんか？返信を期待して待ってます…。」はるかが、木嶋に問いかけていた。

木嶋も、はるかのメールを読んで、胸を打たれたみたいである。

「どうしようかな？はるかとは、いつも、クラブ『H』の出勤前に、カフェレストランなどで、一緒に過ごしている時間が多いからね…。今回は…悩むね。麻美さんも、玲さんも、誕生日のお祝いをしてくれるなんて話しがあるとは思わなかった。自分の身体が3等分あるならそうしたい気分。一年に一回の誕生日だし、好きなはるかと過ごすことが最善の選択かも知れない…！ただ、自分の誕生日に、富高さんを巻き込むのも良くない。、はるかのクラブ『H』に連れていくよりも、麻美さんや玲さんのいる店に行った方が得策かな？」木嶋は、ふと考えたのだった。

富高さんと、はるかでは年齢も離れすぎていて、話しが合わない。会話が続かなくなる確率が高いのだ。

それに、麻美さんや玲さんの方が、気心知れていて、話しをするにも話題も豊富だ。

はるかが、木嶋と富高さんに対して、気を使わないと言っても、気を使わせてしまう。

富高さんが、木嶋に遠慮がちになり、話しをしずらい雰囲気を味合わせてしまうのが、木嶋には、苦痛に思っていた。

木嶋は、

「ありがとうございます。はるかさんの提案を受けさせて頂きます。誕生日は、一年に一回しかないので、お祝いをして戴けるだけでいいですよ。」はるかにメールを送信したのだった。

木嶋が、3人のメールを読む前の険しい表情から一点して、緩やかな表情に変わっていたのだった。

あとは、麻美と、はるかからの回答待ちの状態だったのだ。

どちらが先にメールの受信が来るのだろうと、予想をしながら携帯の着信音が鳴るのを待っているのだった。

第１０８話

木嶋は、家の中で携帯を片手に居眠りをしていた。
どれくらいの時間を経過していたのだろう。
1時間ぐらい寝ていたのだ。
携帯を覗くと、メールの受信が2件あったのだ。
「誰かな…？」
木嶋は、メールをチェックしたのだ。
受信ボックスを開くと、はるかと、麻美からの着信であった。
最初に、メールを読んだのは、麻美のメールであった。
「木嶋君、メールを返信して頂き、ありがとうございます。富高さんといい返事を期待しています。富高さんが来れなくても、木嶋君、一人でも、来て下さい。」麻美の顔文字入りのメールだった。
木嶋は、麻美とメールをするようになったのは、今から1年ぐらい前であった。
最初は、何回か営業メールだけだったので、気にはしなかったが、いつの間にか《友達感覚》になっていたのだ。
木嶋と麻美は、年代が一緒。一学年、木嶋が上であるのだ。
それは、最初に出会った時に、麻美と話しをした日からお互いが理解をしていた。
違いがあるとすれば、木嶋は独身で、麻美は、子供がいるのだった。
木嶋は、昨年に一度、《バレンタインのチョコレート》を貰うために、東神奈川にファミリーレストラン『S』で、麻美の子供の顔を見たことがあったのだ。人見知りをしない娘さんであったのだ。
当然、木嶋には子供はいない。年齢から言っても結婚適齢期を過ぎてしまったと思い始めていた。
会社の中には、富士松さんを筆頭に良いなと思う人はいても、後ろ向きになってしまう【ジキルな木嶋】が存在していた。

そんな木嶋を間近で見ていると、麻美は、怒りと苛立ちを感じていたのだ。

麻美は、はるかのことを良く思っていないのは事実である。

また、木嶋と、はるかの交際に、《猛烈な反対》の立場を取っている。

それは、木嶋も、重々（じゅうじゅう）分かっていたのだ。

はるかと友達として交際している報告を受け、

木嶋は、麻美に相談するが、《アドバイス》をすればするほどに意固地になってしまう木嶋が、存在するのだ。

木嶋が、別れるつもりはないのは、麻美も分かっていたのだ。

富高さんといることで、自分に勇気が持てるのであったのだ。

木嶋は、

「分かりました。一週間、時間を下さい。一人で行くかは判りませんよ。」麻美に、顔文字入りのメールを送信したのだった。

麻美は、

「分かりました。」木嶋に返信したのだった。

次にメールを読んだのは、はるかのメールだった。

はるかは、

「ヤッター、チョー嬉しいです。木嶋さんに、誕生日プレゼントを渡したいのですが…何か！欲しい商品などありますか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「何もないね。敢えて言うなら…はるかさんがいればいいですよ。」はるかに答えたのだ。

はるかが、

「本当に、誕生日プレゼントは要らないのですか？」木嶋にメールを送信したのだった。

木嶋は、

「本当に、プレゼントは要りません！」はるかに、メールで答えたのだ。

はるかは、時間にゆとりがあるのか?メールを、直ぐに返して来たのだ。

「分かりました。日にちは、いつにしますか?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「いつにしようかな?年明けの土曜日がいいかな?」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「年明けの土曜日ですね!予定を空けておきます。クラブ『H』に来たときに何かしますよ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「何があるのかな?」はるかに聞いたのだ。

はるかは、

「さて、何でしょう?」　木嶋は、《サプライズ》を期待していなかったのだ。

第１０９話

《サプライズ》を期待しない方がいいと感じていた。
木嶋は、
「メールでは、話しがしずらいので、今から電話で話しませんか？」はるかにメールをしたのだった。
はるかは、
「今は、電車に乗って横浜駅に移動中なので、チョット無理ですね。後(あと)２０分ぐらいしたら電話に出られますよ。」木嶋にメールを返信したのだった。
木嶋は、
「分かりました。後(のち)ほど、時間を見計らって電話をします。」はるかに、再度、メールを送信したのだった。
はるかは、
「電話を待ってま～す。」笑顔の顔文字入りのメールを、木嶋に送信したのだった。
木嶋は、
「笑顔の顔文字入りとは…。」はるかのメールを読み、苦笑いを浮かべていた。
左腕にしていた腕時計を覗くと、メールを終えてから、３０分が経過していた。
携帯を取り、はるかに電話をしようとしたら、着信があったのだ。
「誰からだろう？」木嶋が、携帯の着信履歴を見ると、はるかからだった。
木嶋は、
「何で気がつかなかったのだろう。」疑問心を抱いていた。
冷静に考えた。
「ワン切りなら気がつかない！」木嶋は、そう考えたのだ。
着信履歴から、はるかに電話をしたのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っていた。
はるかが、電話に出たのだ。
「もしも～し、はるかですが…。」
「木嶋です。先ほどは、電話に気がつかずに申し訳ない。クラブ『H』の出勤前に電話をしてゴメンね！」
はるかは、
「木嶋さんと話しが出来るのが、私は、嬉しいですよ。」はるかは、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「今、手元に手帳があるので、日にちを決めたいのですが…いいですか？」はるかに、日にちの相談をしたのだ。
はるかは、
「メールでは、年明けの土曜日と話していましたよね？」木嶋に聞いていたのだ。
木嶋は、
「メールでは、そのように話しましたが、日にちを決めないと、はるかさんに迷惑が掛かるので、設定したいと思います。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「そうですね。日にちを決めましょう！何時(いつ)が、都合がいいですか？」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「年明けの土曜日は、１／１１（土）がいいですね。会社は、普通出勤になっていますので、自分のいる現場は、基本的に週末は、定時間で終わるので大丈夫ですよ！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「私は、クラブ『H』の出勤日ですから問題ないですね。木嶋さん、年末年始で、たくさんお金が支出したのではないですか？」木嶋の財政事情を気にしていた。
木嶋は、

「年末年始で、支出はありましたが、自分が想定していたほど、支出していません！大丈夫ですよ。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「分かりました。安心しました！木嶋さんとクラブ『H』に一緒に行くのも、久しぶりですね。」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「そうだね。最近は、はるかさんが、先にクラブ『H』にいて、後から合流みたいな感じが多かったよね！富高さんと行ったときもそうだったよ。」はるかに伝えたのだ。

「そうですよ。木嶋さんと一緒に、クラブ『H』へ行かれないことが、どんなに寂しいことだと思いますか？」はるかは、強い口調で木嶋に問い詰めたのだ。

木嶋は、

「申し訳ないね！迷惑ばかりかけて…。でもね。自分は、はるかさんのことを片時も忘れたことはないよ。」はるかに伝えたのだ。

今でも、木嶋の脳裏には、１年３カ月前に、クラブ『H』で、≪麻美と、はるか≫の出会った時の残像が鮮明に残っていた。

木嶋の、記憶に残るのは、それだけ≪強いインパクト≫があるのだった。

はるかは、

「木嶋さんと待ち合わせする時間は、金曜日までにメールで連絡をします。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「了解しました。金曜日までに決めて下さいね！」はるかに確認したのだ。

はるかは、

「は～い。分かりました。１／１１（土）を楽しみにしています。またね。」木嶋に話したのだった。

木嶋の誕生日を、はるかが祝ってくれる日を、心待ちにしていた。

木嶋は、あることに気がついた。

それは、麻美からの誘いがあるのを思い出していた。
「麻美さんの誘いを断らないといけないかな?」少し後ろめいた気持ちになっていた。
木嶋は、意を決して、
「麻美さん、大変、申し訳ない。誕生日は、はるかさんのいるクラブ『H』でお祝いをして貰います。まずは、連絡まで。」麻美にメールを送信したのだった。
麻美からのメールが来るのが、正直、怖く感じ始めていた。
「麻美さんなら理解をしてくれる。」木嶋は、そう思い込んでいたのだった。

第１１０話

ポケットから携帯を取りだした。

「麻美さん、先日は、誕生日のお祝いの誘い、ありがとうございます。１／１１（土）、クラブ『Ｈ』で、はるかさん同席で、誕生日を祝って頂く予定です。麻美さんのクラブ『Ｕ』は、１月末ぐらいになる予定です。ご理解のほど、宜しくお願いします。」木嶋は、麻美にメールを送信したのだった。

木嶋は、玲にも、話しをしないといけないと思っていた。

先ほど、麻美に送信したメールの内容を、読み込み再編集したのだ。

「玲さん、誕生日のお誘い、ありがとうございます。１／１１（土）に、はるかさんの店で、お祝いをして頂く予定です。玲さんのクラブ『Ｏ』には、２月の玲さんの誕生日前後か、３月になってしまうかも知れませんが、それまでには、行く予定です。先の長い話しで申し訳ありませんが、ご理解のほど、宜しくお願いします。」頭を下げた、顔文字入りのメールを送信したのだった。

あとは、麻美と玲からの回答を待つしかなかった。

時間にして、２時間ぐらいが経過したのだろうか？

木嶋の携帯に、着信のランプが点滅していた。

「何の着信かな？」携帯を取りだし、画面を確認した。

メールの着信であったのだ。

木嶋は、受信ボックスを開いた。

麻美と玲からの返信メールだった。

最初に、メールを読んだのは、麻美のメールだった。「木嶋君、お久しぶりです。誕生日のお祝いをしてくれるなんて、はるかさん、優しいじゃないですか？木嶋君には、一番良かったのではないですか？１月末に、来て頂けると書いてありましたが、富高さんと話した結論なのでしょうか？決定ならいいですが…。連絡をお待ちして

います。」
木嶋は、直ぐに、メールを打っていた。
「麻美さん、返信して頂き、ありがとうございます。明日、昼休みに、富高さんに話す予定です。結論が出れば、その場で回答します。」麻美に、返信メールを送ったのだった。
麻美からの返信メールを受信したのだ。
「明日、昼休みに回答をワクワクしながら待ってます。」敬礼入りの顔文字で、メールが来たのだった。
木嶋は、
「了解しました。」メールを送信したのだった。
もう一件、玲のメールを、木嶋は、開いたのだった。
「お久しぶりです。そっか…。はるかさんに誕生日を祝って貰うんだ。木嶋君が好きな女性だよね。私は、いつ来てくれてもいいよ！送信してくれたメールに書いてあったように、私の誕生日が2月なのは、覚えてくていたのが嬉しい！2月中に来て欲しいな！そうすれば、木嶋君と私の誕生日とW（ダブル）で、お祝い出来るよね。誕生日プレゼントも用意してあるからね。富高さんにも、《宜しく》と言って下さい。」
木嶋は、
「ありがとうございます。富高さんには、話しておきます。なるべく2月中に、クラブ『O』に行けるように調整をします。」玲にメールを送信したのだった。
10分ぐらいしてから、再び、玲からのメールを受信したのだ。
「木嶋君、宜しくね！」木嶋は、その一行のメールで、内容を理解したのだった。
「2人とも、理解があって良かった。」
木嶋の表情に、安堵感が漂っていた。
翌日になり、会社に出勤した木嶋は、昼休みに富高さんの現場まで歩いて行ったのだ。
「富高さん、こんにちは。」木嶋が、富高さんに挨拶をしたのだ。

「木嶋君、こんにちは。何かあったのかな?」富高さんが、木嶋に問い掛けたのだ。

木嶋は、

「麻美さんと玲さんの店にいつ行こうか?と日時を決めに来たんだ。」富高さんに尋ねたのだ。

富高さんは、

「そうだね。いつでもいいよ!木嶋君が決めて…。」木嶋に一任したのだった。

木嶋は、少し困惑していた。

「富高さん、麻美さんとのメールの会話を読む?その方が、話しもスムーズだよ。」富高さんに、麻美とのメールの受信履歴を見せたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、今月、誕生日だったんだ。早く麻美さんにお祝いをして頂いた方が良かったんじゃないの?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「はるかさんとの約束もあるので、麻美さんのクラブ『U』は、1月末でいいかな?玲さんの店は、また後日(ごじつ)決めましょう。」木嶋は、富高さんに同意を求めたのだった。

第１１１話

「あっ、それでもいいよ。今、決めても予定が変わる場合があるからね。」富高さんは、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「申し訳ないね！」富高さんに話したのだった。

「気にすることないよ。」富高さんは、木嶋に話し、元気付けていた。

「富高さん、この場で麻美さんに、コールするので話しをしようか？」木嶋は、富高さんに聞いたのだ。

富高さんは、

「麻美さんと話しをするなんて…《ドキドキ》しちゃうよ。自分は、携帯を持っていないから何を話せばいいのだろう？判らないよ。」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「富高さん、クラブ『Ｕ』で話しているように、普段通りでいいよ！緊張しないでね！」

「案外（あんがい）、年甲斐（としがい）もなく、緊張してしまうかもよ！」富高さんは、照れ笑いをしながら、

木嶋も、

「ハハハ」と笑っていた。

人は、日常生活の中で、笑いがない生活を考えたことがあるのだろうか？

世の中、お笑いブームではあるが、本当に、【トークが上手いか？下手か？話題が豊富か？】で分かれてしまう。

一世（いっせい）を風靡（ふうび）しても、人気を維持するのが大変であると同時に、夜空に浮かぶ星たちのように、一瞬だけで通り過ぎて行く人もいるのである。

新聞、テレビ、ラジオ、インターネット、いつ、どんな場面でも、

情報が簡単に入手出来てしまうのが一番怖い。
一つ間違いを起こしてしまうと、周りが見えずに、奈落の底へ突き落とされる。
何%の確率で、這い上がっていくのだろうと、色んなツールを駆使しながらも、今は、《インターネット》が主流なのか?と、便利な半面、痛感していたのだ。
木嶋は、手に持っていた携帯を、リダイヤル画面を出し、麻美にコールしていた。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。
麻美が電話に出た。
「もしもし、麻美です。」
「おはようございます。木嶋です。今、富高さんの現場に来ていますよ。」木嶋は、麻美に伝えたのだ。
「富高さんのところにいるのですか?クラブ『U』に来る日は、決まりましたか?」麻美が、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「正式に決まりました。当初、メールで話した通り、1/31(金)に行きますよ。もちろん、富高さんと一緒です。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「本当ですか?嬉しいな!久しぶりに、富高さんと飲めるのかな!」
木嶋は、
「飲めますよ。今、富高さんと電話を替わります。」
携帯を、左隣りにいた富高さんに渡したのだ。
「もしもし、富高ですけど…。麻美さん、元気でしたか?」富高さんが、麻美に問いかけていた。
「富高さん、麻美です。私は、元気でしたよ。クラブ『U』に、遊びに来てくれませんね?」麻美が、富高さんに尋ねていた。
富高さんは、

「自分も、飲むのは好きですが、一人では行きにくい。携帯も持っていないからね！」麻美に答えたのだ。

麻美は、

「富高さん、一人で来れないなら、木嶋君と一緒に来ればいいのに…。」富高さんに伝えたのだ。

「自分も、木嶋君も仕事が忙しいんですよ。また、木嶋君は、はるかさんとの約束を優先するように話してあるし、自分も、若い、はるかさんと会話をしないと現場の若い人たちと会話が続かないですよ。」富高さんは、麻美に、木嶋の今の現状を話していた。

富高さんの右隣りで、木嶋は、首を縦に振っていた。

麻美は、

「それもそうだね。木嶋君は、はるかさんが大事なんだから…。」電話口で、ボヤいていた。

富高さんは、

「麻美さん、仕方ないよ。木嶋君が好きな女性だからね。」麻美に伝えていた。

「私は、富高さんと待ち合わせが出来るのを、指折り数えて待っていますよ。日にちが近くなったら木嶋君を通して、待ち合わせ時間と場所を決めますね！」麻美が、富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「そうしましょう。木嶋君にも伝えます。」

麻美との会話を終えて、木嶋に、携帯を渡したのだった。

第１１２話

木嶋は、
「富高さん、麻美さん、何て話していました?」富高さんに尋ねたのだ。
「日にちが、近くなったら木嶋君に連絡するって言っていたよ!」富高さんは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「日にちも、まだ、余裕があるから焦(あせ)ることもないね!」富高さんに聞いたのだ。
富高さんは、
「そうだね。今年は、始まったばかりだよ。それに、木嶋君もはるかさんと約束もあるんだよね?」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「そうです。はるかさんと約束があり、《ドタキャン》すると怖いからね。クラブ『U』に行く週に、待ち合わせ場所とかを決めればいいか…。」半(なか)ば投げやり気味になっていた。
「木嶋君、あと宜しく…。」富高さんは、木嶋に問い掛けたのだ。
「了解しました。」と、木嶋は、富高さんに話して、現場をあとにしたのだ。
木嶋は、
「ズッ、ズッ、ズッ」靴の音を聞かせながら、自分の現場に歩いていた。
すると、携帯が…
「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音が鳴っている。
携帯のディスプレーを覗くと、はるかからであった。
木嶋が、電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…。」

「はるかです。お久しぶり。何回も電話をしたのですが…ずっと話し中でした。誰と話していたのですか?」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「麻美さんと話しをしていました。自分が、コールして…。富高さんが、主(おも)に携帯で話していたのです。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「本当ですか?木嶋さんが、麻美さんと私のことで、話しをしたいから富高さんの名前を出せば納得すると思ったのではないですか?それが、電話した理由ではないですか?」木嶋に尋ねていた。

木嶋と麻美が、2人で共同戦線を張っているのではないか。はるか自身が　警戒心を抱いていた。

麻美が、はるかのことを良く思っていないのは、木嶋も、はるかも認識をしていた。

木嶋は、はるかを大切にしたい気持ちは、人一倍(ひといちばい)強い。

「いや~参ったね。はるかさんに、そのように見られていたなんて…【プチ…ショック】です。」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「だって…木嶋さん、麻美さんと話したり、クラブ『U』に富高さんと一緒に行くと、私に冷たい態度になるから不思議だなと感じてしまうのです。」

木嶋は、

「はるかさんが、今、言われてたことに、否定も肯定もしません。理解をして戴きたいのは、自分が決めた信念を曲げることはしません。それが、クラブ『U』や『O』で飲んでしまうと、その場の雰囲気に流されてしまう自分が悪いのです。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「そうですね。その場に、私がいれば反論することは出来ますよ。今度、麻美さんのクラブ『U』に連れて行って下さい。お願いします。」木嶋に、電話口で、冷静に話していた。

「分かりました。麻美さんと相談してから、はるかさんに連絡し

ます。」木嶋は、はるかに答えたのだ。
はるかは、
「楽しみに待っていますね。麻美さんのクラブ『U』に、いつ…行くのですか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「日にちは、1／31（金）です。富高さんも行きますよ。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「1／31（金）ですか?予定を確認してから木嶋さんにメールを送信しますね。」
「はるかさんの回答を待ってます。」木嶋は、はるかに話したのだ。
はるかは、
「は〜い。今日、仕事は早く終わるのですか?」
「まだ、判りません!夕方5時に、電話をしてみて下さい。」木嶋は、はるかに話したのだ。
「夕方に電話しますね!」そう言って電話を切ったのだった。
昼休みが終わるチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴り響いていた。

第１１３話

現場に戻り、午後の仕事が始まる前に、木嶋は、残業があるのか解らず、

「今日って…残業…あるのですか？」溝越さんのデスクに訪ねて行った。

溝越さんは、

「今日は、定時でいいよ。今年は、まだ、始まったばかりで、先は長いぞ。何か予定があったのか？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「横浜の若い女友達が、仕事が早く終わったら横浜で、会いたいと話しがあるのですが…どうしたら良いですかね？」溝越さんに問いかけていた。

溝越さんは、

「女友達だろうが、女性は女性なのだから…会って話しをすればいいよ。その女性は、横浜で、木嶋が良く行っているクラブの人ではないのか？」

木嶋は、

「そうです。自分が良く行くクラブの人です。もうすぐ成人式だと話していましたよ。」溝越さんに答えていた。

「成人式？２０歳か？若いな…夜の仕事をしている若い女性たちは、まともな人は、極僅かだ。木嶋は、優しいから騙されるなよ。」溝越さんは、木嶋に諭していた。

木嶋は、溝越さんの話しに、首を縦に振りながら納得していた。

年齢を重ねている人の話しは、重みがあり良いものばかりである。

自分が必要か…不必要か…その時々（ときどき）で取捨選択すればいいのだ。

溝越さんや三谷さん、小室さんの話しを聞く時は、頭の中を空にして聞くことが大切であると感じたのだ。

それは、麻美や玲が、忠告（ちゅうこく）しているのも、理解が出来て来たのだ。
その先輩たちや周りの人たちの言うことを聞けば、間違いないはすである。
木嶋の心の奥底にいる、《ジギル》と《ハイド》の戦いがいつも続いている。
優勢なのは、《ジギル》である。
《ジギル》を《ハイド》が倒さない限り無理である。
この世界で、木嶋が好きで交際、結婚をしたいと女性が、富士松さんと、はるかのどちらか選択しろと言われても、永遠に答えが出ないのだ。
木嶋には辛（つら）い。
「溝越さん、いい話しを聞かせて戴いてありがとうございました。」溝越さんにお礼を述べたのだ。
溝越さんは、
「女性は、そのクラブの人だけではないのだから、ダメなら他に切り替えることも大切たぞ。頑張れよ。」木嶋を激励していた。
木嶋は、
「ありがとうございます。」溝越さんに話して、その場を離れて行ったのだ。
仕事が終わるチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴り響く。
自分の作業したエリアの清掃を終わらせて、ロッカールームに歩いていた途中…。
「ピローン、ピローン、ピローン」携帯の着信音が鳴っている。
ディスプレイを覗いた。
はるかからであった。
木嶋は、電話に出た。
「もしもし…木嶋ですが…。」
「私、はるかです。木嶋さん、今日は、残業ですか?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、
「残業はないです。今、ロッカールームに向かって歩いているところです。」はるかに答えたのだ。
はるかは、明るい声で…
「じゃあ…横浜に出てくることは可能ですか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「どちらにしても、横浜駅で乗り換えなので、待ち合わせするなら良いですよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「ヤッター。そうと決まれば…待ち合わせしませんか?待ち合わせ場所は、メールで連絡します。それでいいでしょうか?」
木嶋は、
「いいですよ。その代わり…自分が判る場所で…。後(あと)は、はるかさんが遅れずに来ることですね。いつも、待ち時間が長いので、【ロスタイム】が発生してしまうので注意してもらいたい!」はるかに話したのだった。
「なるべく、早く行くようにします。横浜には、どれくらいで着きますか?」はるかは、木嶋に聞いていた。
「会社を出てから、４０分ぐらいではないですか?」木嶋は答えたのだ。
はるかは、
「夕方6時過ぎぐらいですね。」
木嶋は、
「そのくらいで着くはずですよ。」
「時間を見計らって…メールします。」はるかは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。」はるかに話し、電話を切ったのだ。
ロッカールームに入り、富高さんが着替えていた。

「木嶋君、今日は、はるかさんと会うの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「これから会うよ。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「チョット、はるかさんに、《サプライズ》しようよ。」木嶋に伝えたのだ。

第１１４話

木嶋は、

「いいよ。着替えが終わったらロッカールームの外で待っているよ。」富高さんに話したのだ。

先に着替えを終えた木嶋は、富高さんが、ロッカールームから出て来るのを待っていた。

数分後、富高さんが、ロッカールームから出て、木嶋と合流したのだ。

会社の送迎バス乗り場まで歩いて行った。

バスに乗り込み、空いている座席に座り、

「富高さん、どんな《サプライズ》をしますか?」木嶋は、富高さんに問いかけていた。

富高さんは、

「簡単なことですよ。木嶋君の代わりに、自分が待ち合わせ場所にいれば面白いと思うよ。」木嶋に提案していた。

木嶋は、予想に反した答えに驚きながら…

「入れ代わり作戦だったの?」富高さんに、答えていたのだ。

「そうだよ。入れ代わり作戦です。木嶋君は、どんな考えでいたの?」富高さんは、尋ねていた。

「待ち合わせ場所に、一緒に行って驚かす作戦だと思っていました。」木嶋は、富高さんに話していた。

ふと会社のバス車内を木嶋が見渡すと…タイミングが悪いことに、富士松さんが乗っていたのだ。

「マズイ。今の会話を聞かれたかも知れない。」

木嶋の表情が、引き攣っていたのだ。

富士松さんに、

「あなたが好きです。付き合って下さい。」

木嶋が、素直な気持ちで想いを打ち明ければ悩むことなど要らな

いのだ。　富士松さんに、良い印象を与えたくてその機会を伺っていた。もどかしさを感じながらも、打開策を見出だせずに、一日、また一日、時間が過ぎ去って行く。

富高さんは、

「木嶋君、表情に余裕がないけど何かあったの?」冬だと言うのに、冷や汗を掻いていた、木嶋に聞いていたのだ。

「いや?何でもないよ。」木嶋は、富高さんに答えていた。

富高さんは、

「もし、具合が悪いなら…はるかさんと会えないと電話した方がいいよ!」木嶋に話していた。

送迎バスが最寄り駅に着いた。

「プシュー。」エアー音が聞こえ、ドアが開いたのだ。

「ありがとうございました。」乗車していた人たちが、一様に、運転手さんに声を掛けていく。

「お疲れさま。」

運転手さんが、一人、一人、丁寧に　言葉を返していく。

木嶋も、

「ありがとうございました。」

運転手さんに、会釈をして、バスのステップから降りて行く。

木嶋のあとに、富高さんも降りたのだ。

いつものように、最寄り駅のコンコースを歩き、一度、立ち止まったのだ。

「どのルートで行こうか…?」木嶋は、富高さんに尋ねたのだ。

富高さんは、

「木嶋君の考え方で…どっちでもいいよ。」

富高さんと飲みや野球観戦などを一緒に出かける時は、お互いの通勤ルートを利用していた。

以前、富高さんと、麻美さんのいるクラブ『U』に行った日は、相鉄線ルートであった。

今回は、市営地下鉄で行くの可能性が高かった。

木嶋は、迷いながらも
「今回は、市営地下鉄で行きましょう。その方が早く横浜駅に着くので…。」
「木嶋君、それでいいの?」富高さんは、木嶋の回答に疑問を持ったのだ。
「いいよ。」木嶋は、気さくに富高さんに答えたのであった。
市営地下鉄の乗り場に歩き出したのだ。
富高さんは、通り道に、【コンビニ】を見つけた。
「木嶋君、飲み物を買ってくるよ!何か飲むかな?」木嶋に話しかけたのだ。
「ありがとうございます。ホットのペットボトルのお茶でいいよ。出来れば短いサイズでお願いします。」富高さんの問いかけに、答えたのだ。
「了解しました。チョット…買ってくるから待っていてね。」木嶋に言い残し、富高さんは、コンビニの中に入って行ったのだ。
木嶋が、携帯のディスプレイを覗くと、メールの着信があったのだ。
受信メールボックスを覗くと、それは、はるかからであった。
「木嶋さん、今、どちらでしょうか?」
「今、会社の最寄り駅です。」木嶋は、はるかにメールを送信したのだ。
直ぐ、木嶋に、メールが返ってきたのだ。
「私は、今、横浜駅近辺にいますよ。着いたら連絡を下さい。」
木嶋は、受信したメールを読んだのだった。
木嶋は、
「了解しました。横浜駅に着いたら連絡します。」敬礼をしている顔文字を文章の最後に入れて、はるかにメールを送信したのだった。

第１１５話

木嶋は、はるかとのメールを終えて、富高さんが、コンビニから出てくるのを待っていた。
富高さんが、ホットコーヒーとビール、つまみが入れたビニール袋を右手に下げ、
「木嶋君、お待たせ。」
声を掛けていた。
木嶋は、
「いいえ。キップを買って来るね。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「了解です。先に、改札口の中を通って待っているよ。」木嶋に告げて、市営地下鉄の乗り場に足を向け、歩いて行った。
木嶋は、キップ売り場に向かって行った。
「え～と。戸塚駅までは…２６０円か…。」
木嶋は、ポケットの中から財布を取り出し、小銭を出したのだ。
キップを購入して、市営地下鉄の自動改札を通った。
一足早くに、自動改札を通り、待っていた富高さんと合流して、地下の市営地下鉄のホームまで《エレベーター》で降りていく。
《エレベーター》が、ホームに着いた。
木嶋と富高さんが、ホームに待機している電車に乗ったのだ。
乗って直ぐに、発車ベルが、
「プルー」と鳴っている。
続いて、
「ドアが閉まります。ご注意下さい。」構内アナウンスが流れたと同時に、
電子音が、
「ピンポン」言いながら、ドアを閉めたのだ。
「プー」と、電車の動力が伝わり始め、ゆっくりと走り出したの

だ。

市営地下鉄は、【ワンマン運転】で、転落防止柵が各駅に設置されているのだ。

ドアと同時に転落防止柵も一緒に閉まるので、【駆け込み乗車】が出来ないのだ。

車内は蛍光灯が一日中、点いていた。

市営地下鉄に限らず、相鉄線や私鉄各線、ＪＲ全線も同じである。

今、世界の人たちが、共通の認識と話題は、地球温暖化が１番、重要である。

私たちが、生活をしている中で、何より深刻な問題である。

「今、自分たちが出来ることって…何があるのだろうか？ふとした疑問を持つのも大切な心がけである。人は、最低でも、一人以上の人とすれ違っている。二人でも生活をしていることには変わりはない。手探りではあるが、どこかに改善出来る《パーツ》が見つかると思うのだ。」

どう探せば、良いのだろうか？

それは、一人一人が、

「昨日を変えられないが、今日より明日を夢見ることが大切である。」木嶋は、心の中で考えていた。

富高さんや木嶋のいる会社は、エコロジーにチャレンジしている。

周りの小さな積み重ねで合っても、一人、また一人と協力することで、小さな力が大きな力となって行くのだ。しかし、木嶋は、思案しながらも効果的なものが考えつかずに頭を悩ましていた。

車内の長いシートに座り、富高さんが、木嶋に、コンビニで買ってきた飲み物を渡していた。

木嶋が手にしていたのは、ホットコーヒーだった。

「富高さん、ありがとうございます。」

中には、挨拶、お礼を述べることが出来ない人が多くいる。

はるかと交際していく中で、木嶋は、自然とお礼が言えるようになり、少しずつ謙虚な気持ちを持ち始めていた。

富高さんは、帰り道の電車内で、ビールを飲むのが日課になっていた。

木嶋も、たまには、車内でビールを飲みたい気分もあるが、これから、はるかと会うのに、赤ら顔で行くことはしたくないのだ。

今の時期は、ビールを飲むと、トイレに行く回数が多くなってしまう懸念もある。

富高さんが、

「木嶋君、どこまでのキップを買ったのかな?」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「戸塚駅で乗り換える想定で、キップを買いましたよ!何で…。」

富高さんに尋ねたのだ。

「横浜駅まで、市営地下鉄で行くのかなと思ったんだ。」富高さんは、木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「戸塚駅で乗り換えた方が、お互い、定期を使用出来るよね!」

富高さんに話したのだ。

富高さんも、

「それもそうだね!」納得した表情だったのだ。

電車が、戸塚駅に着いたのだった。

「戸塚、戸塚です。東海道線、横須賀線は乗り換えです。」

構内アナウンスが流れていた。

木嶋も、富高さんも、市営地下鉄の自動改札を出て、ＪＲの戸塚駅の改札口に向かって行った。

第１１６話

戸塚駅の改札を通り、東海道線のホームに着いた木嶋と富高さんは、冬の寒空の中で電車を待っていた。
平日よりも、電車を待っている人が少なく感じていた。
木嶋が、気が着いた。
「そうだ。まだ会社が始まったばかりだよ。」所謂(いわゆる)正月ボケであった。
時刻表を見ると、電車が到着するまで、あと5分ぐらいあった。
木嶋は、
「富高さん、どうしますか?」右隣りにいた富高さんに相談したのだ。
富高さんは、
「待ち時間があるのなら、売店でビールでも買って来ようかな?」
木嶋に問いかけていた。
「富高さん、今、ビールを買っても、横浜まで着く時間は、およそ１０分ぐらいですよ。飲み切ることが出来ますか?」木嶋は、富高さんに話していたのだ。
「横浜まで…１０分か…。チョット微妙だね。はるかさんと会ったあとに、どこかで2人で飲もうよ。」富高さんは、木嶋に提案をしていた。
木嶋は、一瞬、躊躇(ためら)いもあった。
「どうするべきか?」
思案している時に、東海道線がホームに入ってきたのだ。
「ガタン、ゴトン、」
「キー」車輪が止まって、ドアが、
「プシュー」開いたのだ。
乗り降りする人が、平日より少ない。
電車に乗り、空いている座席に、木嶋と富高さんは座ったのだ。

発車ベルが、
「プルー」鳴り響いていた。
ドアが、
「プシュー」閉まり、電車が発車した。
木嶋は、
「富高さん、先ほどの話しですが、はるかさんと別れたあとで、飲みに行きましょう！」富高さんの提案に合意をしたのだった。
富高さんは、
「木嶋君、はるかさんに、話しをしなくてもいいの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「はるかさんに、言えば確実に、【クラブ『H』に一緒に行って飲みましょう。】と話すと思うよ。それなら言わない方が得策と考えますよ！」富高さんに伝えたのだった。
いつもの木嶋なら、はるかに、正直に話しをするのだ。
今回、はるかに話さないのは、今年は、まだ始まったばかりであると同時に、年末年始で、お金を支出していたのだ。
木嶋は、はるかには、背伸びをして、余りお金を使っていないと強がりを見せていたのだ。
男性は、好きな女性がいると、自分が欲しい物を買うよりも、女性にプレゼントをしたくなる。
それが、木嶋の場合は、はるかなのだ。
良く会社の同僚などに言われることは、木嶋に、頑固（がんこ）な面（めん）があると言われるが、自分自身は、そう感じてはいなかったのだ。
車内アナウンスが、
「間もなく…横浜、横浜です。相鉄線、市営地下鉄線、京浜急行線、京浜東北線は、乗り換えです。」
「もう、横浜駅に到着か…早いな。」木嶋と富高さんは、話しに夢中で時間が経つのを忘れていた。
電車が、横浜駅のホームに入って行く。　乗り換える人も多い。

さすが神奈川県で、乗降客数…《Ｎｏ．１》で、全国屈指のターミナル駅だ。
木嶋の地元も、乗降客はいるが、横浜駅には適わない。
ホームに降りた木嶋と富高さんは、階段を降り、改札口に向かったのだ。
改札を出てから、木嶋は、
「富高さん、はるかさんに電話するので、チョット立ち止まって下さい。」富高さんに声を掛けたのだ。
富高さんは、
「分かった。」木嶋に答えたのだ。
木嶋が、携帯を取り出し、はるかに電話をした。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いていた。
はるかが、電話に出たのだ。
「もしもし、はるかで～す。」
「木嶋です。今、横浜駅に着きました。どこで待ち合わせしますか？」木嶋は、はるかに問いかけていた。
はるかは、
「どこにしようかな？いつものコーヒーショップ『Ｙ』で待っていて下さい。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。」はるかに伝え、電話を切ったのだ。
この時、はるかには、富高さんと一緒にいることを、伝えていなかった。
木嶋が、富高さんの元に歩いていく。
「富高さん、待ち合わせ場所に歩いて行きますよ！」木嶋は、富高さんに声を掛け、
富高さんも、
「行こうよ！」歩き出したのだった。

第117話

木嶋は、待ち合わせ場所のコーヒーショップ『Y』に着いた。
富高さんと一緒に、階段で2F上がって行く。
「カパッ、カパッ、カパッ」靴の音。
2Fフロアに着いた木嶋は、空いている座席を見渡していた。
いつも、座るコーナー席は、先客がいた。
少し離れて、角の席が空いていた。
木嶋と富高さんは、そこに、はるかの席を確保して、座ったのだ。
店員さんが、メニューを持ちながら、木嶋のテーブルに来て、
「いらっしゃいませ。」声をかけた。
木嶋は、店員さんからメニューを預かり、富高さんに手渡したのだ。
「ご注文が決まりましたら声をかけて下さい。」木嶋に話し、その場を離れたのだ。
富高さんは、メニューをパラパラめくりながら、
「木嶋君、何にする?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「何にしようかな?」悩んでいた。
コーヒーショップ『Y』に来る度に、オーダーするメニューが固定化されていた。
「ケーキセットにしようかな?飲み物は、ホットコーヒーでいいかな?」木嶋は、富高さんに答えていた。
富高さんは、
「自分は、ホットコーヒーでいいや!」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、近くにいた店員を呼んだのだ。
「ご注文をお伺いします。」
「ミルフィーユのケーキセットで、飲み物は、ホットコーヒー。
こちらが、単品のホットコーヒーでお願いします。」木嶋が、店員

さんに、オーダーを伝えたのだ。
店員さんは、ハンドヘルトを持ちながら、
「ご注文を繰り返します。ミルフィーユのケーキセットで、飲み物がホットコーヒー。それと単品のホットコーヒーが1つ。以上で宜しいでしょうか？」木嶋と富高さんに確認をしたのだ。
木嶋と、富高さんは、声を揃えて、
「ＯＫです。」そう答えたのだ。
「畏(かしこ)まりました。少々、お待ち下さい。」店員さんは、木嶋と富高さんに告げて、メニューを下げて、テーブルから離れて行ったのだ。
「木嶋君、いつも、このお店に来るの？」富高さんが、木嶋に聞いていた。
「自分一人では来ないね。はるかさんとの待ち合わせ以外には…。何もなければ、そのまま真っすぐ帰宅しますよ。目的があるなら別ですよ。」木嶋は、富高さんに話したのだった。
富高さんは、
「そうだよね。一人で時間を潰すのは、結構、《キツイ》かもね。自分も、東急ハンズやはるかさんのクラブ『H』しか横浜に来ないからね。」木嶋に答えたのだった。
店員さんが、木嶋の元に、先ほどオーダーした物が運ばれてきた。
「ミルフィーユのケーキセットです。」
木嶋のところに、ケーキを置いたのだ。
「続いて、ホットコーヒーです。」
富高さんと、木嶋に置いたのだった。
「ご注文は以上です。」店員さんが、テーブルを離れて行ったのだ。
木嶋が、ミルフィーユのケーキを一口(ひとくち)食べようとしていた。
その時…
「ピローン、ピローン、ピローン」
木嶋の携帯が鳴り響く。

木嶋が、電話に出たのだ。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。木嶋さん、今、どちらにいますか?」はるかは、木嶋がいる場所を確認していた。
「今は、コーヒーショップ『Y』2Fフロアにいますよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「今、向かいます。」木嶋に伝えて、電話を切ったのだ。
「富高さん、今から、はるかさん来るみたいですよ。」「了解です。」木嶋に伝え、表情には笑みが零(こぼ)れていた。
階段を、
「カッ、カッ、カッ」ブーツの音を響かせながら、はるかが上がって来た。
はるかは、
「富高さん、一緒にいたのですか?」驚いた表情を見せたのだ。
木嶋と富高さんは、
「ニヤッ…と」笑(え)みを浮かべていたのだ。

第118話

はるかは、富高さんの右横に座り、正面には、木嶋が座っていた。
「木嶋さん、富高さんと一緒にいるなら、何故、話してくれないのですか?」はるかが、木嶋に問い詰めていた。
木嶋は、
「富高さんが、一緒来るか?来ないか?は、曖昧に（あいまい）だったので、はるかさんに話すことが出来ませんでした。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、今日は、何日か…覚えていますか?」木嶋に尋ねていた。
「えっと…今日は…1／11（土）。アッ…思い出した。はるかさんと約束した日ですよ。」木嶋は、はるかに答えていた。
はるかは、
「木嶋さんの誕生日をお祝いするって、私は、言いましたよ。」
「そうだよね…。」
木嶋は、冷や汗を流していた。
「どうしよう?」
目を閉じ、両手の人差し指を、頭の側頭部に円を描（えが）くように、
「ポク、ポク、ポク、チーン」
閃（ひらめ）いたみたいである。
この《スタイル》は、アニメの【一休さん】の困ったときに、トンチで解決する方法であった。
木嶋が、子供のときにテレビ放送を観ていて、悩むと、解くやり方である。
富高さんは、
「木嶋君も、人間だからこういう時もありますよ!はるかさんの顔を見たいから、木嶋君に聞いたら、今日、会う約束をしていると

聞いたので、お願いをして一緒に来たのです。責めないで下さい。」
木嶋のフォローを、はるかにしていた。
「富高さん、ありがとうございます。約束を忘れるなんて木嶋さん、酷いですよ。」はるかは、少し機嫌が悪くなっていた。
木嶋は、何も言えず、いつも背負っているリュックの中から黄色の手帳を取り出した。
パラパラとページをめくり、今週の予定を確認していた。
紛れもなく、はるかとデートの約束をしていたのだ。
木嶋は、
「はるかさん、すいませんでした。富高さん、いい機会ですので、一緒にクラブ『H』に行きませんか?」富高さんに話していた。
はるかも、
「富高さん、一緒に行きましょう!」富高さんを誘惑していた。
富高さんは、
「チョット…待って…。」慌てていた。
無理もない。
当初は、はるかと別れたあと、木嶋と二人で、横浜駅周辺で飲む予定であった。
富高さんから見れば、木嶋とはるかに、嵌められたような感じがしてならない。
木嶋が演技をするはずもない。
ただ、忘れていたのだ。
「どうしようか?」
富高さんは、苦悩していた。
今週は、今日が普通出勤日なため、日曜日、一日だけであった。
「体力的に持つかな?スポーツをやるにしても、まだ寒い。ヘタに運動でもして、肉離れはしたくはない。釣りをするにしても、一日だけの休みでは、行ってもムダかな?木嶋君の顔を立てるかな!」
心の中で葛藤があったのだ。
富高さんは、

「木嶋君、はるかさんのクラブ『H』に一緒に行こうよ！」木嶋に話したのだった。

木嶋は、

「富高さん、ありがとうございます。」机に両手を当て、頭を下げたのだ。

はるかも、

「ありがとうございます。」富高さんに、お礼を述べていた。

「はるかさん、クラブ『H』に連絡をしないのですか？」木嶋が、はるかに尋ねていた。

はるかは、左腕にしている腕時計で時間を確認した。

「クラブ『H』に電話しますので一度、席を外しますね。」はるかが、席を立ち、

「カッ、カッ、カッ」階段を下りていく。

店員さんが、木嶋の席に来てメニューを渡したのだ。

木嶋は、

「単品で、ホットロイヤルミルクティーをお願いします。」店員さんに伝えたのだ。

店員さんは、

「ホットロイヤルミルクティーですね。少々、お待ち下さい。」メニューを下げて行った。

富高さんは、

「木嶋君、勝手にオーダーしていいの？」木嶋の行動に、疑問を投げかけていた。

「ホットロイヤルミルクティーをオーダーしていれば大丈夫。はるかさん、クラブ『H』へ連絡入れるのに、時間は掛からないと思うよ。」富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「それならいいよ。」木嶋に話していた。

階段を、

「カッ、カッ、カッ」上がって来る靴の音。

はるかが、電話を終えて戻ってきた。
「お待たせしました。」木嶋と富高さんに伝えた。
木嶋と富高さんは、
「お帰りなさい。」はるかを、笑顔で迎えたのだ。

第１１９話

「ただいま戻りました。」はるかは、木嶋と富高さんに笑顔で応え、富高さんの右隣りに座ったのだ。

はるかは、テーブルの上に置いてあった《ホットロイヤルミルクティー》を見つけ、

「木嶋さん、オーダーしてくれてありがとうございます。」

木嶋は、

「は～い。クラブ『Ｈ』には、何時頃まで行けばいいの？」はるかに聞いていた。

はるかは、

「午後７時５０分頃までに、クラブ『Ｈ』に入ればＯＫです。」

木嶋は、コーヒーショップ『Ｙ』の柱時計を見つめていた。

時刻は、午後６時３０分になろうとしていた。

時間には、余裕がある。

富高さんが、

「はるかさん、この近くに居酒屋はないのかな？」はるかに問いかけていた。

はるかは、

「居酒屋は、直ぐ近くにありますよ。」富高さんに答えたのだ。

「木嶋君、居酒屋があるみたいだから飲んでからクラブ『Ｈ』に行こうよ！」木嶋に話し掛けたのだ。

木嶋は、

「居酒屋もいいが、時間を考えると、混んでいる可能性も否定できない。それなら、いつも、はるかさんと行くカフェレストラン『Ｆ』にしようかと頭の中で描いているのですが…富高さんから見れば居酒屋ではないが…。確実性を求めるならその方が安全策だと…。はるかさんと、富高さんの意見は、いかがでしょうか？」

はるかは、

「私も、木嶋さんの意見に賛成です。カフェレストラン『F』ならクラブ『H』に行くのにも、近すぎず、遠すぎずでいいと思います。富高さんは、どうですか？」富高さんに問いかけたのだ。

富高さんは、

「二人の意見が、同じなら自分はそれでいいよ。カフェレストラン『F』に行きましょうか！」はるかと、木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「そうと決まれば、移動をしましょう。はるかさんは、場所が判っているので、先発隊（せんぱつたい）として、富高さんと先に行って、店に入っていますね。」はるかに話したのだった。

はるかは、テーブルの上に置いてあった《ホットロイヤルミルクティー》を、一口飲み、ティーカップを、そっとテーブルに置いたのだ。

「木嶋さん、それでお願いしますね。座席が確保出来たら電話をして下さい。それまでの間、私は、ここで待機していてもいいですか？」木嶋に判断を委ねていた。

木嶋は、はるかに、優し過ぎるのかは、分からないが好きな女性から甘い言葉で囁（ささや）かれたら、返す言葉はない。

「いいよ。ここで待っていてね。」木嶋は、はるかに伝えて、富高さんを携え、コーヒーショップ『Y』の階段を下りていく。

はるかは、木嶋と富高さんの後ろ姿を確認しながら、携帯を取り出していた。

コーヒーショップ『Y』の窓から覗いていた。

木嶋は、そんなことを知らずに、星空を見上げていた。

昼間の天気は、快晴だったので、星が、

《ポツン、ポツン》輝きを始めていた。

何万光年の彼方（かなた）から、地球に届いたのだろうか？

新しく誕生した星もあれば、一つの終わりを迎えていく星もある。

木嶋は、ふと考えていた。

【いつかは、終わりがあると…】

人は、多くの人達と出会い、別れて行くのだ。
交際期間が長くなればなるほど、愛情が深くなっていく。
短期間で、交際を繰り返して行く人もいる。
「自分は、モテると」勝ち誇る人だ。
いわゆる自意識過剰な人…。
木嶋は、
「自分は、スタイルは良くない。はるかに、甘え過ぎているのか？」自問自答していた。
カフェレストラン『F』の店内に入り、空いている座席を探していた。
女性店員さんが、
「何名様でしょうか？」木嶋に声をかけていた。
木嶋は、
「あとから一人来ますので、三名でお願いします。」女性店員さんに話したのだ。
「畏まりました。禁煙席と喫煙席、どちらがご希望でしょうか？」
「禁煙席でお願いします。」
「ご案内します。」
女性店員さんのあとを、木嶋と富高さんは、歩いていく。
禁煙席に案内された木嶋は、はるかに、メールをしたのだった。

第１２０話

「はるかさん、今、カフェレストラン『F』の禁煙席に、富高さんと一緒に座りました。席も確保してありまので、こちらに来て下さい。」

富高さんは、

「木嶋君、今、メールをしていたのは、はるかさんだよね?」木嶋に、確認をしていた。

木嶋は、

「そうですよ。はるかさんにメールを送信しましたよ!」富高さんに答えたのだ。

「すぐに来るのかな?」富高さんが、チョット不安気味に尋ねていた。

「すぐに来るんじゃないかな!すぐと行っても…１０分ぐらい掛かると思うよ!来るまでに時間がかかる人だからね!はるかさんは…。」木嶋が、富高さんに話したのだ。

木嶋の携帯に、メールが届いていた。

「着信音が何故?鳴らなかったのだろう?」

携帯のメイン画面を見た。

《マナーモード》になっていた。

「何で…《マナーモード》にしていたのだろう?」

木嶋は、疑問に感じ、思考していた。

《マナーモード》にした…記憶がない。

木嶋の目の前に座っていた、富高さんに、

「自分がいつマナーモードにしたか覚えていますか?」聞いていた。

「木嶋君、ここに来る前に、星空を眺めていた時あったと思うけど…携帯を、双眼鏡代わりに覗いていたよ。考えられるとしたら、その時だと思うよ。」富高さんから答えが返ってきた。

「そうかな?…確かに、携帯を双眼鏡代わりにして覗いていたのは事実だよ。まっいいか?」木嶋の表情が、明るくなっていく。
受信メールボックスを開いた。
はるかからである。
「連絡をして頂き、ありがとうございます。これから向かいます!」
メールを受信してから、10分ぐらいが経過している。
「木嶋君、はるかさん…自分たちを待たせ過ぎじゃないの?」富高さんが、木嶋に向かって、少しイラつき気味に話していた。
無理もない。
コーヒーショップ『Y』で、待ち合わせしていた時も、時間通りに来なかったのだ。
元々(もともと)、はるかは、時間にルーズなのは、木嶋も富高さんも理解はしていたが、それが、積み重なって行くと、不満が蓄積(ちくせき)され、爆発していく。
何度、時間を守るようにと、木嶋が話しをしても、
「馬の耳に念仏」と言う諺(ことわざ)があるように、
全くと言ってほど…効果がないのが現状だった。
店員さんが、メニューを持ち、
「まだ、お連れ様は来られないのですか?」木嶋に話していた。
木嶋は、
「もうすぐ…来ると思います。」店員さんに、そう答えるしかなかったのだ。
「来られました声をかけて下さい。」木嶋に伝えて、テーブルから離れて行った。
ドアが…開いた。
木嶋が、後ろを振り向いた。
はるかであった。
「カッ、カッ、カッ」店内に響く靴の音。
木嶋たちがいる座席を見つけ、

「遅れて申し訳ない。」はるかは、木嶋と富高さんに頭を下げ、富高さんの左隣りに座ったのだ。
「はるかさん、遅いですよ！富高さん、イラついていましたよ。」木嶋が、はるかに話していた。
はるかは、
「富高さん、お待たせしてゴメンなさい。」富高さんに、謝罪をしたのだ。
「気にしなくていいよ！」富高さんは、はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「木嶋さんたちは、何かオーダーしたのですか？」木嶋と富高さんに問いかけていた。
「これからオーダーしようと思っていたんだ。」富高さんは、はるかに話していた。
「良かった！先にオーダーして、食べてしまったなんて言われたら…淋しいですからね！」はるかは、富高さんの気配りに感謝をしつつ、メニューをパラパラとめくりながら見ていた。
そんな光景を、木嶋は、間近に見ていた。
木嶋は、
「自分に、気配りが出来ないのに…。」心の中で、嫉妬（ジェラシー）していた。
木嶋が、右手を挙げ、近くにいた店員さんを呼んだのだ。
「オーダーをお願いします。」
「ご注文をどうぞ…。」木嶋たちに話していた。
木嶋は、
「自分は、ＢＬＴセット。飲み物は、ホットコーヒー。富高さんは…？」富高さんに声をかけたのだ。
富高さんは、
「パスタのミートソースでサラダセット。同じく飲み物は、ホットコーヒー。はるかさんは…？」はるかに問いかけていた。
はるかは、メニューをまだ見ていた。
どうやら決まったみたいである。

「私は、カルボナーラでお願いします。」店員さんに、オーダーをしたのだ。　店員さんは、

「ご注文を繰り返します。ＢＬＴセット。パスタのミートソースセット。どちらも飲み物は、ホットコーヒー。カルボナーラの以上３点で宜しいでしょうか？」木嶋たちに確認していた。

木嶋たちは、頷（うなず）いた。

店員さんは、メニューを下げて、木嶋たちのところから離れていった。

第１２１話

時間にして、どれくらい経ったのだろう！
木嶋たちが、オーダーした料理が運ばれてきた。
店員さんは、
「カルボナーラのお客様。」　木嶋は、右手で、そっとはるかの方に差し延べた。
店員さんは、丁寧に、はるかの目の前に置いた。　はるかは、
「木嶋さん、先に食べま～す。」
タバスコと粉チーズを踏んだんにかけていた。
「はるかさん、タバスコ掛けすぎではないですか？」木嶋が心配そうに、はるかに問いかけていた。
はるかは、
「私は、大丈夫ですよ！でも、チョット…掛けすぎかも…。」愛嬌のある笑顔で笑っていた。
「ミートソースのセットです。」富高さんの方に、置いたのだ。
富高さんも、タバスコと粉チーズを、ミートソースに掛けていた。
「富高さん、はるかさんと比べると、掛けている量が少なく感じるよ！」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「自分は、いつも、これくらいの量だよ。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「それならいいんだ！」やや不満そうな表情を出しながらも納得をするしかなかったのだ。
最後に、木嶋がオーダーした、
「ＢＬＴセットです。」
木嶋が受けとった。
「コーヒーは、後ほどお持ち致します。」
店員さんが、一度、木嶋たちのテーブルから退いたのだ。

木嶋は、ＢＬＴサンドウィッチに差してある、楊枝を一つずつ、丁寧に抜いていた。
先に食べ終わっていた、はるかが、木嶋のＢＬＴサンドウィッチに見つめていた。
壁にある時計を、木嶋が見た。
もうすでに、７時になろうとしていた。
木嶋は、はるかの視線が気になり、
「はるかさん、一つ食べますか？」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「木嶋さん、良いのですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「いいですよ。」
「ありがとうございます。」はるかは、木嶋に伝え、ＢＬＴサンドウィッチを一つ取り、美味しそうに、口に頬張っていた。
時間が経つのは、早いもので、食べ始めてから、すでに２０分が経過していた。
刻一刻と、はるかが、店に出勤する時間が差し迫っていた。
木嶋は、焦る気持ちがない訳でない。
針の寧ろの状態である。
胃腸の状態も良くない。
木嶋は、負担がかかると内蔵が弱いので、どうしても、《シワ》寄せが来てしまうのだ。
少し、遠くの方で《チクチク》と痛みが出ていた。
「この状態なら、まだ平気だな！」木嶋は、はるかと富高さんに言えずにいた。
はるかも、クラブ『Ｈ』に、木嶋と一緒に行くのを楽しみにしている。
今日は、クラブ『Ｈ』で、富高さんも同席で、木嶋の誕生日をお祝いしてくれると、はるかも了解しているので、ここで、《ドタキャン》をしてしまうと、迷惑がかかってしまうのを苦慮していた。

《お腹が痛いな！》
そう感じた木嶋は、
「チョット、トイレに行きます。」富高さんと、はるかに伝えた。
はるかは、
「木嶋さん、どこか悪いのですか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「いや、トイレに行きたいだけですよ！」はるかに強がりを言っていた。
座席を立ち、トイレの中に入った。
木嶋が、トイレから出てきた。
はるかは、
「大丈夫ですか？」木嶋に声を掛けた。
木嶋は、
「大丈夫です。」はるかに答えたのだ。
先ほどまでの、《チクチク》した痛みは消えていた。
【これなら大丈夫だ。】
木嶋の硬かった表情が、緩くなっていた。
店員さんが、
「ホットコーヒー」を木嶋と富高さんに手渡した。
砂糖とミルクを入れて、一口飲んだ。
富高さんが、
「木嶋君、そろそろ行かなくていいの？」木嶋に聞いていた。
木嶋も、
「はるかさん、ここを出て、クラブ『H』に行きますか？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「そろそろ出ましょう！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「出ますよ。」富高さんに話し、リュックを持たずに、会計伝票だけ持ち、一階の会計まで、下りて行った。

富高さんは、木嶋のリュックを持ち、はるかと共に、席を立った。
会計が終わり、木嶋と合流して、コーヒーショップ『Y』をあとにして、クラブ『H』に向かっていた。

第１２２話

木嶋、富高さん、はるかの3人が、横一列に並びながら、左手に、ファーストフード『M』を横に見ながら、相鉄ムービル映画館の２Ｆに繋がる橋を渡ろうとしていた。

この橋は、木嶋や富高さんが、クラブ『H』から飲んだあとに、横浜駅まで歩いて行く近道に良く利用していた。

普段は、相鉄線の１Ｆ改札出口から左手にある、証券会社を曲がり、そのまま歩いて行くと、橋の袂にある《セレクトショップ》を、右手に見ながら橋を渡り、呼び込みのお姉さんや若い男性たちが立っているのだ。

その両サイドを横切り、歩いて行くのだ。

いつもより、寒い日である。

ビルが林立しているので、風がなくても、ビル風が吹いている。

はるかの髪が、風に靡いている。

爽やかな香水の匂いである。

何度、鉄の階段を上がったのだろう？

クラブ『H』に、どれくらい来たのであろうか？

少なくとも、片手以上は来たはずである！

「カツン、カツン、カツン」

店の前の階段を上がって行く。

店内は、変わらぬ光景である。

「いらっしゃいませ！」男性店員、女性スタッフの声が、《こだま》している。

はるかは、

「少し待っててね！」

ドレスアップをする為、木嶋と富高さんに、声を掛けて、一旦、離れて行った。

木嶋と富高さんは、男性店員さんに、案内されたテーブルに座っ

た。
「木嶋さんですね？はるかさんは、少しお待ち下さい。《メンバーズカード》を提示して頂けますか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「クラブ『H』の《メンバーズカード》ですね？」男性店員さんに、聞き返しながら、ポケットから財布を取り出し、探し始めていた。
【パラパラと財布の中を探している。】
「あれっ…？《メンバーズカード》持ってきたはず…。」木嶋の表情が、少し焦り気味になっていた。
「在りました！」安堵の表情になり、木嶋は、男性店員さんに、手渡したのだ！
「カードを預からせて戴きます！」男性店員さんは、木嶋に話し、テーブルを離れていく。
女性スタッフが、木嶋のボトルを持ってきた。
クラブ『H』は、横浜駅から近いため、客層が幅広く大勢のお客さんが来ている！
富高さんは、
「木嶋君、相変わらず…クラブ『H』は凄い人だよね！」木嶋に話していた。
木嶋は、
「いつも来る度に、人の多さに驚かされるよ！」富高さんに答えたのだ。
「不況なんて…ここには、関係ないのかな？」木嶋や、富高さんも思うことは同じであった。
男性店員さんが、
「はるかさんです！」
はるかが、ドレスアップを終えて、木嶋たちの席に戻って来たのだ。
「木嶋さん、富高さん、お待たせしました。」はるかが声を掛け

たのだ。
「待ちくたびれましたよ！」少し自虐的に、ジョークを言っていた！
そのジョークは、意外にも本音に近かった！
富高さんは、
「はるかさん、今日のドレスは、随分、素敵なドレスではないですか？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「このドレスは、木嶋さんが、私の誕生日プレゼントして戴いた物ですよ！」富高さんに答えたのだ。
「木嶋君、本当なの？」富高さんは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「本当ですよ。はるかさんと最初のデートをした時に、誕生日プレゼントとして渡しました。」富高さんに話したのであった。
「いい値段だったでしょう？」「そんなに高い物でないから…はるかさんに、聞いてくれてもいいよ！」木嶋は、富高さんに答えていた。
富高さんは、
「はるかさん、今、着ているドレスって…高いイメージがあるんだ。値段も高かったのかな？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「全然、高くないですよ。金額は…3万円ぐらいではないですか？」富高さんに話したのだった。
富高さんの表情は、少し、驚きを感じていたのであった。
木嶋は、
「今まで、女性に誕生日プレゼントをしたことがないから、いくらが相場なのか判らなくてね…会社の女性社員にも聞くわけにも行かないよ！」富高さんと、はるかに話したのだった。

第１２３話

「木嶋君はいいな！はるかさんがいて…。」富高さんは、羨(うらや)ましそうに、木嶋に話しかけていた。

「何で…そう思うの？」木嶋は、富高さんに尋ねたのだ。

「例え、友達でも…誕生日をお祝いしてくれる人がいるなんて最高だよ！自分に、そんな人がいない…。」富高さんは、木嶋に話したのだ。

「実際、どうなんだろうね？誕生日をお祝いすると言っても、ここでは…クラブ『H』の女性と、お客さんの関係。それは、麻美さんも話していたよ。富高さんの意見に対して…はるかさんは、どう思っているのかな？」木嶋が、はるかに問いかけていた。

はるかは、

「前にも話しましたが、木嶋さんや富高さんと一緒にいると…何故か…安心していられるのです。」木嶋と富高さんに答えたのだ。

富高さんは、

「安心って…どう言うこと…なんだろう？」

はるかは、

「上手(うま)くは、言えないのですが、気を使わなくていいと…。」富高さんに話したのだ。

木嶋は、

「富高さん、はるかさんに、話したことがあるのですが、自分たちと一緒にいる時は、《リラックス》していいよ！そう言いましたよ！」富高さんに話していた。

富高さんは、

「そうだよね！夜の仕事をしていると、《ギスギス》しているし、息が詰まりそうなのも判るね。木嶋君の言っていることが正論なのかも知れない！」木嶋と、はるかに話していた。

はるかは、

「富高さんが、今、話している通りですよ！」富高さんの回答に賛同していた。

木嶋は、

「正直に言えば、はるかさんで良かったか？悪かったか？答えが出ないと思います！自分が、知らない部分もあるので、色んなことを吸収出き、教えて戴いているからね！」はるかと富高さんに伝えたのだった。

女性スタッフが、木嶋のいるテーブルに、小さいデコレーションケーキを持って来たのだ。

デコレーションケーキには、

【ハッピーバースデー】と白地のプレートにチョコレート文字で書かれていた。

大きな蝋燭が、３本立ててあり、はるかが、ライターで火を点した。

木嶋は、はるかの粋な演出に、嬉しい気持ちでいた。

「バースデーケーキが出てくるなんて…」

≪聞いてないよ～。≫

似ても似つかない…

【ダチョウ倶楽部】のモノマネをした。

これには、はるかも、富高さんも、笑うしかなかった。

一呼吸置いて、

蝋燭に、点されていた火を

【フーッ】…と、息を吐き、消したのだ。

その瞬間、周りにいた人たちから、

【パチパチ】と拍手が沸き起こっていた。

これには、シャイな木嶋は、恥ずかしそうに恐縮していた。

はるかから、

「木嶋さん、私からの誕生日プレゼントです！」木嶋に手渡した。

包装紙を見ると、高島屋であった。

木嶋は、

「はるかさん、今日、少し遅れて来たのは、高島屋でプレゼントを買っていたからなの?」はるかに聞いていた。

はるかは、

「そうです。何日も前から、何をプレゼントしようかと悩んでいたのです。なるべくなら実用的な物がいいと結論になりました。」

木嶋と富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「木嶋君、はるかさんは、気を使っているよ!」木嶋に言葉をかけたのだ。

木嶋は、

「はるかさんに、悪いことをしたかな?」はるかに問いかけたのだ。

はるかは、

「そんなことないですよ。木嶋さんには、日頃からお世話になっていますからね。」木嶋の話しに言葉を投げ返したのだった。

「自分も誕生日を、誰かお祝いしてくれないかな?」富高さんが呟いていた。

木嶋の右横にいた、はるかが、

「私で良ければ、お祝いしますよ!」はるかが、富高さんに尋ねていた。

富高さんは、

「木嶋君に悪いよ!」木嶋に謙遜(けんそん)していた。

木嶋は、

「次は、富高さんの誕生日を、クラブ『H』でやろうか?」はるかと、富高さんに問い掛けたのだった…。

第１２４話

はるかは、
「うん、富高さんの誕生日にお祝いをしたい。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「そこまで、気を使わないでいいよ。」はるかに話したのだ。
木嶋も、
「富高さん、はるかさんもお祝いしたいと話していますので、一度、やりませんか？いい機会なので…。」富高さんに尋ねていた。
「木嶋君が、そこまで言うならお願いしようかな？」富高さんは、木嶋とはるかに、頭を下げたのだ。
「富高さん、頭を下げなくてもいいよ。気が引けてしまいますよ！」富高さんに話していた。
はるかは、
「富高さんの誕生日は、いつですか？」富高さんに聞いていた。
「自分の誕生日ですか？来月の１１日、建国記念日ですよ。」富高さんが、はるかに答えていた。
はるかは、驚きを隠せずにいた。
「祝日が誕生日なんていいですね！」富高さんに話していた。
木嶋は、
「はるかさん、水を差すようで申し訳ないのですが、自分たちの会社は、基本的に完全週休２日制なので、どうしても祝日が出勤になってしまいます。誕生日に休むなら、有給休暇を取得するようになります。」はるかに話したのだ。
「そうなんですか？…誕生日にお祝い出来なくてもいいので、その前後の週末に出来ればといいなと考えていますが…いかがですか？」はるかは、木嶋と富高さんに尋ねていた。
木嶋は、

「富高さん、いつにしますか?」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「木嶋君、麻美さんのクラブ『U』にも、今月末に行かないと行けないよね?他の日にちで予定がない時に設定したいので、家に帰宅したら予定表を見てみます。来週、昼休みに、木嶋君の現場に行きますよ!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました。はるかさん、来週以降に回答すると言うことでいいですか?」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「分かりました。木嶋さん、分かったら連絡を下さい!」木嶋に話したのだった。
先ほど、木嶋が蝋燭の火を消した、デコレーションケーキを、はるかが見つめていた。
木嶋は、
「ケーキを食べるのには、お腹も空いたし、丁度(ちょうど)いいね。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「みんなで、食べましょう。」木嶋と富高さんに、同意を求めたのだ。
木嶋は、
「いいよ。みんなで食べよう!」はるかの依頼に即答したのだ。
はるかが、女性スタッフを呼び、デコレーションケーキを人数分に切るように、耳元で囁(ささや)いていた。
木嶋は、高島屋の包装紙を両手で持ち、縦横と振っていた。
音もせず、重量も軽い。
一層(いっそう)のことなら、今、この場で開けてみたい。
このクラブ『H』で封を開けたい。
はるかや富高さんがいるのに、非常識なことは出来ない。
木嶋は、

「帰りの電車の中か…家に帰宅してからにしよう。」はるかと富高さんは、話しに夢中であった。

はるかの元に、デコレーションケーキを3等分に分けて、持って来たのだった。

はるかが、気がつき、デコレーションケーキを、上手く受け取り、3等分に分けていた。

木嶋と富高さんに、デコレーションケーキを手渡したのだ。

「ありがとうございます。」木嶋と富高さんは、そう話していた。

デコレーションケーキを、木嶋は一口、食べてみた。

「美味しいよ。また、食べたいな」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「デコレーションケーキを頼んで良かったです。富高さんの誕生日にも、頼んでいいですか?」富高さんに聞いていた。

富高さんは、

「恥ずかしいからいいよ!」はるかに話したのだ。

はるかは、

「そんなことないですよ!」

「はるかさん、デコレーションケーキを頼んで下さい。」富高さんは、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「分かりました。」

木嶋は、

「これで決まったね!来月、富高さんの誕生日、建国記念日前後までに来るようにするよ。」はるかに話したのだった。

第125話

「木嶋君、宜しくね！」富高さんは、木嶋にお願いをしていた。
木嶋は、
「了解しました。」富高さんに、右手で敬礼のサインを出し、
「フフフッ」はるかの笑いを誘っていた。
富高さんは、
「チョット…トイレに…。」
今、座っていた座席を立ち、木嶋と、はるかに伝えてながら、歩いて行った。
はるかは、
「私は、何だか…期待と不安が交錯（こうさく）していますよ。」木嶋に話していたのだ。
木嶋は、
「何が不安なの！」はるかに問いかけてみた。
「富高さんの誕生日は…建国記念日ですよね！バレンタインデーが、その3日後です。クラブ『H』でも、イベントがありますが、誘って見てもいいですか？もし、イベントに来れないなら一緒に、《プレゼント》を渡した方がいいですかね？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「クラブ『H』のイベントに誘って見たらどうですか！富高さんのことだから、イベントに来ないと思います。一緒に渡す確率が高いでしょう！」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「分かりました。イベントのことは、話しをして見ます。あとに、ホワイトデーもあるので…何か…《プレゼント》してくれるのかな…と。期待もしているのです。」木嶋に聞いていた。
「ホワイトデーね…。はるかさんは、その日まで、クラブ『H』でバイトしているのかな？本当は、彼氏がいて、《プレゼント》を

貰うでしょ！」木嶋は、はるかに尋ねていた。
はるかは、
「それを聞かれると…確実に、クラブ『H』にいると…断言出来ません。彼氏は、いませんよ！また、誕生日やホワイトデーに《プレゼント》してくれる人は、木嶋さん一人ですよ。」木嶋に答えたのだ。
「本当かな？《誕生日プレゼント》をたくさん、貰っているイメージがあるよ。4月になれば就職するのだから、いつまでも、クラブ『H』でバイトをしている場合じゃあないよね！」
はるかは、
「本音を言えば、クラブ『H』に、名前を残して置きたい。時間があるときに、バイトに来れるので…。」木嶋に話すのであった。
木嶋は、いつも、真っ向から反対をしているのだ。
【就職するなら、辞めた方がいいよ。】
はるかに、言い聞かせていた。
ただ、一抹の不安が、頭を掠めていく。
【はるかが、就職すればバイトとは違う。果たして、会社の給料だけで、やっていけるのだろうか？それに、年齢も若いし、ブランド品に目が慣れている。単価の安い商品には、振り向きそうもない。】
木嶋の心では、そう感じていた。
富高さんが、トイレから戻ってきた。
「木嶋君、お待たせ…。」木嶋と、はるかに話したのだ。
はるかは、タオルを富高さんに渡したのだ。
富高さんは、タオルを手に取り、顔を拭いていた。
「木嶋君、何か深刻そうな顔をして、どうしたの？」富高さんは、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「はるかさんが、就職したら、どうなるのかな？…と。不安が過ぎるんだ。」富高さんと、はるかに話したのだ。

はるかは、

「私は、木嶋さんと、いつまでも一緒にいたいと思っていますよ！」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「それが不安なんだ。麻美さんにも、言われたことだが、≪木嶋君とはるかさんは、クラブ『H』のお客さんと女性スタッフの関係。辞めたら、それで終わりだよ。≫とね。」はるかに話したのだ。

「麻美さんは、麻美であって…私は、私ですから一緒にしないで下さい。」はるかは、木嶋に答えたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、はるかさんの言う通りだよ。麻美さんの考え方と、はるかさんの考え方は違うよ。一緒にいたいと話しているから大丈夫だよ。」

木嶋も、富高さんの言葉に安心したのか、

「それもそうだね。」木嶋の表情に、笑顔が戻ったのだ。

はるかの心の中には、一つの結論が隠されていた。これが、波乱の幕開けになるとは、木嶋と富高さんも、気が付かずにいたのである。

第１２６話

富高さんは、
「木嶋君、そろそろ帰ろうか…！」木嶋に言葉をかけたのだ。
木嶋は、
「もう、そんな時間に…なるの？」ふと、携帯を取りだし、時刻を確認していた。
午後１１時になろうとしている。
富高さんは、千葉県船橋から通勤しているので、帰える時間が、遅くなればなるほど、電車の運行本数が少なくなる。
横浜駅から帰るのにも、１時間３０分はかかるのだ。
いつもは、麻美のクラブ『Ｕ』や玲のクラブ『Ｏ』は、関内なので、午後１１時前に帰るのが、当たり前になっている。
今日は、はるかのバイトしているクラブ『Ｈ』にいる安心感からか、時間を気にしていなかったのだ。
それは、木嶋にも言えることである。
木嶋は、横浜駅から家まで帰宅するのに、３０分あれば余裕がある。
「富高さん、そろそろ帰りましょうか！はるかさんも、遅くまでは、クラブ『Ｈ』にいることが出来ない人なので…。」木嶋は、富高さんと、はるかに問いかけていた。
はるかは、
「木嶋さん、私以外の女性スタッフと話しでもした方がいいですよ！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「何人も、女性スタッフと話しをするのは、いいですが…振り出しに戻るみたいで…嫌ですね。」はるかに話したのだ。
その話しを聞いて、富高さんも理解をしていた。
「木嶋君は、はるかさん一筋（ひとすじ）ですよ。同じ年代の麻美さんや玲さ

んでもいいのでしょうが…話しにくいみたいだよ。」富高さんは、はるかに話しをしたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、嬉しいです。私も、もうすぐ帰りますので、会計をしますか?」木嶋と富高さんに尋ねたのだ。

木嶋は、

「会計をお願いします。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「分かりました。」木嶋に話し、近くにいた女性スタッフを呼び、両手でバツ印を出したのだ。

女性スタッフが、会計伝票をはるかに渡し、木嶋に手渡したのだ。

富高さんは、

「木嶋君、どれくらいなの?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、少しばかり渋い顔をしながら、富高さんに見せたのだ。

「木嶋君、いい金額だね。」

「まぁ〜今日は仕方ないかな!」木嶋が、富高さんに話していた。

はるかは、木嶋の横から金額を見て、驚いていた。

「今日は、高くなってゴメンね!」はるかは、木嶋と富高さんに頭を下げていた。

「自分の誕生日をお祝いして頂いたことに、感謝しておりますよ。サプライズもあった。心の中に残りますよ。」木嶋は、はるかに感謝の言葉を述べたのだった。

富高さんは、

「自分も、押しかけたみたいで申し訳ないと感じたが、来て楽しかった。次回も来ますよ。」木嶋とはるかに伝えたのだ。

はるかは、

「そうですよ。次回と言うか…来月の建国記念日に来て頂かないと…」しっかりと営業をするのを忘れていなかったのだ。

「金額は、お互いが折半ね!」

木嶋は、富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、
「いいよ。」木嶋の申し出に、快諾をした。
木嶋と富高さんは、財布を取り出し、お金を、はるかに渡したのだ。
はるかは、近くにいた女性スタッフに手渡した。
女性スタッフが、小さい封筒にお釣りを入れて、はるかに渡し、木嶋に手渡した。
木嶋は、
「富高さん、お釣りは、いくらもないので、はるかさんに渡してもいいかな?」富高さんに同意を求めたのだ。
富高さんは、
「そうだね。はるかさん、お釣りは、チップでいいよ。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「木嶋さん、富高さん、ありがとうございます。」
はるかの表情が、この時ばかりは、少し緩んでいた。
木嶋は、はるかの表情を見つめながら、
「富高さん、行きましょうか?」
「行こうよ。」
木嶋と共に、席を立ったのだ。
クラブ『H』のドアを開け、鉄の階段を降りていく。
はるかは、
「ありがとうございました。」
手を振り、木嶋も、手を振って応えていた。
横浜駅に着き、改札を通り、木嶋と富高さんは、お互いの帰宅する横須賀線と東海道線のホームに向かい、
発車ベルが、
「プルー」と鳴り響く、横浜駅をあとにしたのであった。

第127話

富高さんと別れた木嶋は、一人で思いに更けていた。
「自分が、本当に好きな人は、誰なんだろうか…？麻美さん？玲さん？はるか？富士松さん？」
頭の中には、いつもクエスチョンが成り立っている。
「いつかは、答えを出さないと行けない！その答えを出す前に、みんながいなくなってしまう確率は高い！そんな自分が情けなく、胸を締め付けられそう！」
そんな境遇になっていた。
～不安な夢を見ても…眠れない夜が来る…快楽の全てを与えたい…届けたい…惜しくない。～
この歌の詩は、木嶋が良く好んで聞く曲の《ワンフレーズ》である。
この曲を聞く度に、
「なるほど…」と納得するのであった。
自分の誕生日を理想的な形で終わり、
また、明日から一年間、頑張ろうと言う気持ちになっていく。
「はるかが本命なのだから、素直な気持ちで自分の思いを打ち明けたら、消えてしまうのかな？」
心の中に、不安感が襲う。
「いなくなったら、富士松さんに告白しようかな？」
これも、また、安直な考え方なのである。
「明日、麻美さんに、今日のことを報告しよう！」
木嶋は、歩きながら、呟いていた。
腕時計を見ると、富高さんが、もうすぐ最寄り駅に着く頃であった。
家の中に入り、風呂の中でも、興奮が冷めることがなかった。
布団の中に入っても、なかなか寝付けずにいた。

それだけ、誕生日のお祝いをしてくれたことに感激をしていた。
いつの間にか寝てしまったのだ。
翌日、朝早くに目が覚めたのだ。
手元にあった置き時計を見た。
時刻は、午前8時であった。
「もうそんな時間になるのか…。」木嶋は、眠い目を擦りながら起きたのだ。
ふと、携帯を見ると、チカチカと光っている。
「なんだろう?」
携帯の画面を覗いた。
はるかからのメールであった。
「木嶋さん、昨日は、ありがとうございました。とても楽しい一日を過ごさせて頂きました。富高さんにも、宜しくとお伝え願います。」
木嶋は、
「はるかさん、昨日は、有意義な一日を過ごさせて頂き、ありがとうございました。家に帰宅しても寝付けなかったのです。今、起きたばかりで、頭の中は、【ボーッ】としていますよ!」はるかに、メールを返したのだった。
「あっ、そうだ。麻美さんにも話しをしないと…。」
木嶋が、冷静なら、今の時間に、麻美に電話をしても出ないことは判っているのに、何を、慌てているのだろう。
携帯の『メモリダイヤル』から麻美の番号を検索(けんさく)して、発信したのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出しているが、電話に出る様子もない。
考えれば、麻美は、深夜に帰宅したばかりである。
今は、熟睡中である。　それに気がついた木嶋は、すぐに電話を切ったのだ。
「自分は、何を焦(あせ)っているのだろう!」自問自答していた。

「謝罪のメールを入れよう！」
瞬時に考えたのだ。
「麻美さんの迷惑を、顧みずに電話をしてしまい申し訳ありませんでした！起きたら連絡を下さい。」木嶋は、メールを送信した。
「今日は、退屈だな！これから…どうしようかな！マンガ喫茶でも行こう！」
着替えて、家をあとにした。
木嶋の家から歩いて、１５分ぐらいの所に、行きつけのマンガ喫茶がある。
そこにたどり着いた時に、携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」
鳴っていた。
着信画面を見ると、麻美からであった。
木嶋は、電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「麻美です。朝、電話を戴いたみたいで…。」麻美は、木嶋に話していた。
木嶋は、
「寝ている時間に申し訳ないです。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「娘が、どこかに行きたいと話していたので、木嶋君から電話を戴いた時は、起きてきたいましたよ。電話に出ようとしたら切れてしまい、そのあとからメールを受信したので、読んでから今、電話をしたのです。」木嶋に、答えたのだった。
「そうだったの？昨日、はるかさんのクラブ『H』に、富高さんと一緒に行ってきました。」木嶋は、麻美に話したのだ。
麻美は、
「はるかさん、元気にしていたのかな？」木嶋に尋ねていた。
「元気にしていましたよ。」木嶋は、麻美に答えたのだった。

第１２８話

「木嶋君は、相変わらず…はるかさんなんだから嫌になっちゃう！少しは、私に振り向いて欲しいな！麻美は、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「こればかりは、仕方ないね！麻美さんよりも、はるかさんと一緒に過ごしている時間が長いから…！」麻美の問いかけに、反論したのだ。

麻美は、

「はるかさんにフラレた時のことを考えるとね。いきなりは気付かれてしまいますが、少しずつ、離れて行った方がいいよ。」

「麻美さんが、言っていることは、理解出来ます！理解しているのに、自分に出来ない。《人から言わせれば、優し過ぎる》とね。《もう少し非情にならないと…》そう言う意見を会社の先輩や同僚たちからもあるよ。」木嶋は、麻美に話したのだ。

麻美は、

「会社の先輩や同僚の人は、いい意見を言ってくれていますね。木嶋君自身が、素直に聞けばいいのにね。」電話口で、ため息混じりに、苦笑いをしていた。

木嶋は、

「そうだ。麻美さんに言わないといけないことがあるんだ！」麻美に話したのだ。

麻美は、

「どんな話しなんだろう？」木嶋に尋ねていた。

「どうしようかな？教えるべきかな？」木嶋は、麻美に焦らし戦法を取っていた。

麻美も、

「焦らさないで、教えて…」木嶋に、甘い声で誘っていた。

木嶋は、
「じゃあ、教えようか？」
「うん。教えて下さい。」明るい声で、木嶋に聞いたのだ。
「実はね。来月、富高さんの誕生日をお祝いすることにしたんだ。」木嶋が、麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「どこで、お祝いするの？」
木嶋は、
「はるかさんのクラブ『H』ですよ！」麻美に話したのだ。
麻美は、
「え～、そうなの？初耳ですよ。」驚いた表情を見せたのだ。
木嶋は、
「今まで、富高さんは、誕生日をお祝いしてもらったことがないと、昨日、クラブ『H』で飲んだ時に話していて、はるかさんが、お祝いをしたいと言ってきたので、富高さんは、一度は、断ったんだ。猛烈なプッシュに負けたみたい。」麻美に話していた。
麻美は、
「富高さんの誕生日は、来月のいつなの？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「富高さんの誕生日は、建国記念日ですよ。」麻美に答えていた。
「建国記念日ね…木嶋君たちは、会社は、祝日は休みなのかな？」
麻美は、木嶋に話していた。
木嶋は、
「完全週休2日制を採用しているので、祝日は、休みではありません。」麻美に伝えた。
「そうなんだ…。」
麻美にしてみれば、富高さんの誕生日のお祝いを、はるかに追い抜かれたことが悔しいと感じているはずである。
木嶋は、一つの提案を考えついたのだ。
「今月末に、麻美さんのクラブ『U』に行くのですから、その時

に、お祝いをしたらどうですか？」木嶋は、麻美に打診をしていた。
麻美は、
「そうだね。何も誕生日当日にお祝いしなくてもいいよね。」木嶋に言い返していた。
木嶋は、
「一番、効果的なのは、誕生日当日がいいですね。仕事上、どうしても無理です。自分も、富高さんもね。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「私は、クラブ『U』に、富高さん一人で、来て戴いても…」木嶋に相談していた。
木嶋は、
「富高さんの性格を考慮すると、一人で行くのは、避けたいみたい。携帯も持っていないから待ち合わせも出来ないよ。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「今も、富高さんは、携帯を持っていないの？」木嶋に質問していた。
「持っていません。【携帯は、便利だが、拘束されるのが耐えられない】と、以前から、そう話しているよ。」木嶋は、麻美の質問に答えていた。
「そうなんだね。木嶋君がいないと、連絡が取れないね。」麻美は、富高さんと一緒に、クラブ『U』に来るように、促していた。
「分かりました。予定通りの今月末でいいね。富高さんも、ノリ気だよ。」木嶋は、麻美に同意を求めたのだ。
麻美は、木嶋の意見に、「その時に、富高さんの誕生日のお祝いをしましょう。何か…サプライズしますよ。」そう答えていた。
「自分は、黙っているよ。それでいいよね。」木嶋は、麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「了解です。近くなりましたら、待ち合わせ場所の連絡をします。

」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。
木嶋も、どんなことになるのだろうかと、期待と不安が胸に、交錯していた。

第１２９話

木嶋は、富高さんの誕生日のお祝いを、麻美さんのクラブ『U』で、はるかより開催することが決まり、【ホッ…と】一安心していた。

心の中では、

「はるかに、話すべきなのだろうか？」葛藤が続いていた。

「今、はるかに話したら、全ての計画が、ぶっ飛んでしまう！麻美さんにも、迷惑が掛かる。今回は、黙っていた方が良さそう！」

木嶋は、迷いながらも、結論を出したのだ。

しかしながら、

「そう言えば、最近、はるかさんと話しもしていない！たまには、電話でもしてみよう。」

木嶋は、珍しく、はるかに電話をしたのだ。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っていた。

「何か…やっているのだろうか？一度、電話を切って、また、かけ直せばいい。」木嶋は、電話を切りながらも不安を募っていた。

「家に帰って、久しぶりにゲームでもやろう。」

マンガ喫茶の前に立っていた木嶋は、家に帰宅して行く。

家の中に入り、ゲームの端子を、テレビに繋ぎ、野球のゲームに没頭していた。

一年前は、日本と韓国の共催で、《サッカーWカップ》があり、世間は、サッカー熱が再燃していた。

木嶋は、サッカーには興味がない。小さい時から、地元に、プロ野球チームがあったので、時間が空けば、近所の仲間と草野球に明け暮れていた。

そのプロ野球チームは、１０年以上も前に、本拠地を移転してしまったのだ。

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っていた。
この着信音は、はるかであった。
木嶋は、電話に出た。
「もしもし、木嶋です。」
「私、はるかです。お久しぶりです。先ほどは、電話に出れずに申し訳ありませんでした。今、何をしているのですか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「はるかさんも、忙しいのですから仕方ないですよ。今は、家で野球のゲームをしています。」はるかに答えていた。
「野球のゲームですか?木嶋さん、野球が好きですよね!」
木嶋は、
「えぇ~好きですよ。野球と言うより、良く草野球をやっていたこともありますよ。」はるかに伝えたのだ。
「そうなんですか!初めて聞いた気がします。今日は、どうしたのですか?」はるかは、木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「はるかさんの成人式のことで電話をしたのですよ。」
「成人式は、友達と行きますよ!前にも、木嶋さんに話していますよ。」はるかは、木嶋に答えたのだ。
「そうだったね。ゴメンね。実は、富高さんの誕生日のお祝いを、今月末に麻美さんのクラブ『U』でやることになったんだ。」木嶋は、はるかに話したのだ。
「本当ですか?木嶋さん、教えて戴きありがとうございます。」
はるかは、木嶋にお礼を述べていた。
はるかは、
「木嶋さん、麻美さんのクラブ『U』に行かれたら、どのようなことをしたのか教えて下さい。」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「やっぱり興味があるの?」はるかに問い掛けていた。

「麻美さんと、私ではお祝いの仕方は違いますが、興味はありますよ。」木嶋の問い掛けに対して答えていた。
「判りました。クラブ『U』のことは、メールを送りますので、それを参照して下さい。」はるかに伝えた。
はるかは、
「判りました。メールを待ってますね。」木嶋との会話を終えて電話を切ったのだ。
「はるかに話さないと決めていたのに、話してしまった。」あとで、木嶋は後悔していた。
月日は流れ行き、麻美さんのクラブ『U』に行く日が近くなってきた。
「そろそろ、麻美さんと金曜日の待ち合わせ場所を決めないと行けないな!」
木嶋は、思い立って、携帯を右手に取り、
「麻美さん、何時に待ち合わせしますか?」メールを麻美に送信したのだ。
「待ち合わせ場所などが決まれば、富高さんに話せばいいかな!」そう感じていたのだ。

第１３０話

時間が、どれくらい経過したのだろう。
気がつけば、もう午後３時を過ぎていた。
木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
携帯の画面を覗くと、麻美からであった。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「麻美です。午前中に電話を戴いたのに、出れなくて申し訳ありませんでした。」麻美は、木嶋に話していた。
木嶋は、
「自分も、麻美さんが、寝ている時間に、電話をしてしまい、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。」麻美に謝罪をしていた。
麻美は、
「木嶋君から電話を戴いた時は、子供のことで起きていたのですが、着信があったことに気がつくのが遅く、仕事だと思っていたので、今の時間に電話をしたのです。」木嶋に伝えていた。
木嶋は、
「余計な気を遣わせてしまいゴメンね！」麻美に答えていた。
「メールを読みました。今週末の待ち合わせについてですが…時間は、何時が、木嶋君たちに、ベストな時間かな？」麻美は、木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「何時がベストかと言うと、仕事が終わるのが、午後５時。どんなに早いルートを選択しても、午後６時３０分前後だと思うよ。」
麻美に話したのだ。
麻美は、
「それなら、午後７時に関内駅南口のコージーコーナー前でもいいかな？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、
「コージーコーナーって…改札口を出て、すぐ左側にあるところだよね？」麻美に聞いていた。
「そうですよ。改札口を出たところです。富高さんも一緒に来て戴けるのかな？」麻美は、木嶋に確認をしていた。
木嶋は、
「もちろんです。富高さんも楽しみにしていますよ。」麻美に力強い口調で答えていた。
「分かりました。木嶋君のその言葉を聞いて安心しました。何をプレゼントしようか？今、迷っていますよ。」
木嶋から見ると、富高さんのことで、麻美に気を遣わせているのが手に取るように分かっていた。
「麻美さん、そんなに気を使わないで…富高さんが聞いたら引いてしまいます。」木嶋は、麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「木嶋君や富高さんに、気を遣っていませんよ！仕事柄、そんな性分なのです。」木嶋に話していた。
「分かりました。富高さんには、待ち合わせ時間と場所を伝えておきます。サプライズは、麻美さんに一任してもいいですか？」木嶋は、麻美に聞いたのだ。
麻美は、
「任せて下さい。」木嶋に伝え、
木嶋は、
「あとは、宜しくお願いします！」麻美に話し、電話を切ったのだ。
待ち合わせ時間と場所が決まったことに安心したのだ。
「あとは、食事する場所を探せばいいかな！今日は、時間もあるし、今から関内に行こう！」
木嶋は、携帯を持ち、家を出たのだ。
家から最寄り駅まで、歩いて１０分ぐらいの距離である。

駅の改札口を通り、京浜東北線のホームに降りて行く。
ホームに着いた途端に、タイミング良く、電車が入って来た。
「ピコン、ピコン」
ドアが開き、空いていた、３人掛けのシートに座り、関内に向かった。
いつもは、はるかと横浜駅周辺で過ごしていることが多く、関内駅で降りることは少ない。
食事をする店が何処にあるか？検討がつかないのだ。
麻美に、食事する場所を決めてもらうのも、一つの案でもあるが、甘えてしまうのも良くない。
木嶋にも、【プライド】がある。
最寄り駅を出て、京浜東北線の車内で、《Ｙａｈｏｏ！ホームページ》を開き、関内駅周辺をクリックしていた。
木嶋の探し方が悪いのだろうか？中々、ヒットせずに、少しばかりイラついていた。
食事をする場所が見つかった途端に、
『次は、関内、関内です！』車内アナウンスが聞こえてきた。
木嶋は、
『ズルッ』と、手摺りからコケてしまった。
関内に着いた木嶋は、電車から降りた。
階段を駆け降り、改札を出た。
この日は、週末の土曜日だと言うのに、閑散としていた。
木嶋の脳裏には、はるかの言葉が、浮かび上がってきた。
「私にとっては、関内は寂れた街。その印象しかないのです。」
「その言葉通りかも知れない」思わず納得してしまったのだ。

第１３１話

木嶋は、関内駅周辺を見渡した。
神奈川県庁があるため、駅周辺は、証券会社や銀行が多いのに気がついた。
「食事をする場所は、どこにあるのだろう？」
大通りの角には、寿司の『泉平』（いずへい）があったのだ。
一本（いっぽん）、通りを奥に入り、店がたくさん出てきた。
「ここに、あったのか！解りにくい場所だ！これでは、見つけづらい。」木嶋は、ボヤいていた。
そこから更（さら）に、歩いていると、『勝烈庵』（かつれつあん）やファミリーレストラン『Ｒ』、などがあったのだ。
『泉平』は、大通りの角にあるため、営業終了時間は、午後８時であった。　木嶋は、歩きながら、『泉平』の寿司を帰りに買って行こうと決めていた。
『勝烈庵』は、大きな提灯（ちょうちん）が目印で見つけやすかった。
桜木町駅の方面に歩いて行くと、ポツン、ポツンとラーメン店が点在している。
木嶋は、その通りから逆方面に戻っていく。
最初は、大通りを歩いていても気がつかなったが、居酒屋のチェーン店と、カラオケの『ＢＩＧ　Ｅｃｈｏ』があったのだ。
その瞬間、
「寂（さび）れた街ではない。意外に、店がたくさんあるではないか？はるかに、話しをしないといけないな！」木嶋は、そう感じていたのだ。
まだ、どこで、食事をしようかと迷っていた。
「参ったね！今日は、決まらないから引き上げよう！」木嶋は、関内駅に足を向けた。
木嶋は、関内駅のキップ売り場前に、一旦（いったん）立ち止まり、ふと、考

えた。
「いや、待てよ。ここに来る機会はないから、甘栗を買って帰ろう。」
「ここから近い店は、どこだろう?」
木嶋は、携帯を取り出し店を検索していた。
柱に背中を預けた。
伊勢佐木町の商店街が近いと結論が出た。
目の前には、地下に入る階段があった。
「ズッ、ズッ、ズッ」と、靴の音が、地下の中で反響している。
「地下街があるんだ。」木嶋は、驚いた表情を見せていた。
「自分の地元や、横浜のダイヤモンド地下街から比べると、こぢんまりとしているが、コンパクトに店が纏まっている。誰がどの店にいるのか判りやすい。」木嶋は、納得していた。
地下街を抜けて、地上に出る階段を上がる。
目の前には、伊勢佐木町の商店街が、視界に入ってきた。
関内には、一年に、両手で数えるくらいしか来ることがない。
その内の1割ぐらいは、伊勢佐木町にある甘栗専門店で買っていくのだ。
木嶋の家族は、甘栗が好きで、駅の構内にある【ＫＩＯＳＫ】や、中華街に食べた帰りに、『萬珍楼』（まんちんろう）や『聘珍樓』（へいちんろう）で購入していた。
木嶋は、甘栗専門店前に着いた。
「お兄さん、いらっしゃい。」５０代前半の年配の男性が、声を掛けてきた。
木嶋は、
「いくらのにしようかな?」
ショーケースの中にある、甘栗の種類を覗いていた。
「お兄さん、今なら炒り立ての栗があるよ!いくらぐらいがいいのかな?」男性が、木嶋に話してきた。
木嶋は、

「２０００円ぐらいで、お願いします。炒り立てがあるなら、それを下さい。」男性に言葉を返したのだ。
男性は、
「ありがとうございます。」
炒り立ての栗を、袋に詰めていた。
「少し、多く入れておくね。」
木嶋は、
「ありがとうございます。」男性に話し、会計をしていた。
甘栗を、包装紙に包んでいた。
木嶋は、財布を取り出し、
「いくらですか？」男性に尋ねていた。
「２０００円です。小さな手提げに入れておくね！」
手提げ袋に、甘栗を入れて木嶋に手渡し、財布からお金を、２００円を男性に支払いをしていた。
支払いを終えて、商品を受け取り、木嶋は、再び、地下街の階段を降り、関内駅に向かったのだった。
木嶋は、関内駅に着き、キップ売り場の料金表を見上げ、最寄り駅までの料金を見つめていた。
「２１０円か…。」
財布を取り出し、キップを購入したのだ。
ホームに行く階段を、上がっていく。
木嶋は、京浜東北線がホームに入ってきた。
「ガタン、ゴトン」
電車に揺られながら、関内駅をあとにしたのだった。

第１３２話

木嶋は、

「食事するところは、自分が決めないで、当日の流れに沿うようにしよう。」電車の中で、揺られながら、一つの結論に達したのだ。

木嶋は、昼休み開始のチャイムが鳴ったと同時に、富高さんの現場に向かったのだ。

富高さんのいる現場に着き、声を掛けたのだ。

「富高さん、今度の金曜日のことすが、午後7時に関内駅に待ち合わせと麻美さんから話しがきたので、ＯＫしました。大丈夫かな？」木嶋は、富高さんに確認をしていた。

富高さんは、

「うん、大丈夫だよ！他からも飲む話しがあったが、最初から木嶋君の予定があったので、丁寧に断ったよ。」木嶋に話していた。

木嶋は、

「ありがとうございます。麻美さんも楽しみにしているので、裏切らないようにしないと…体調管理は、怠らないようにね！」富高さんに伝えたのだ。

富高さんも、理解を示していた。

今まで、木嶋と富高さんは、はるかや麻美、玲の店に飲みに行く日にちを決めて、その約束を破ったことは一度もなかったのだ。

富高さんが、行かれなくなることは、想定もしていない。

木嶋は、はるかのいるクラブ『Ｈ』でも、一人で行くのを躊躇うのだ。

一人で行くよりも、気心知れた仲間がいた方が、精神的にも、気楽である。

富高さんも、一人で行くタイプではない。木嶋や小室さんと一緒に飲む機会が多い。

木嶋も、麻美のいるクラブ『Ｕ』に、

【小室さんを連れて行こうか?】思案をしていた。
木嶋は、一度、小室さんを、クラブ『H』に連れて行こうと思ったことはある。
木嶋の頭の中で、シュミレーションして見たが、若い女性たちが多くいる場所に、小室さんが馴染(なじ)むのが難しい。
はるかが、恐怖心を感じてしまうだろうと、二の足を踏んでしまう。
木嶋から見れば、年配の小室さんは、木嶋が会社に入社した時から見ているので、富高さんよりも理解度は高いはずである…。
また、女性がいる人数が少ないクラブ『U』で、麻美さんと話すのが一番良い方法かも知れないのだ。
そう閃(ひらめ)いた木嶋は、
「富高さん、小室さんも一緒に誘いませんか…?」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「小室さんも誘うの…?」不思議そうに、木嶋に問い掛けていた。
「うん、以前、はるかさんがいるクラブ『H』に、自分と一緒に行こうとしたことがあるが、若い女性たちと会話をするより、麻美さんのいるクラブ『H』の方がスムーズに溶け込むことが出来ると思う。」木嶋は、富高さんに提案をしたのだ。
富高さんは、
「いいよ。小室さんとも飲む機会が少ないからね。」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「それなら話しが早いね。これから一緒に小室さんが休憩しているところに一緒に歩いて行こうよ!」富高さんを、誘ったのだ。
富高さんも、
「いいよ!」快(こころよ)く賛成してくれたのだ。
富高さんは、休憩している場所から立ち上がり、木嶋と共に、歩き始めたのだ。

富高さんは、
「木嶋君、小室さんの居るところは判っているのかな?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「小室さんの居るところは、事前に聞いていますよ!」富高さんに答えていた。
木嶋と富高さんは、小室さんの元に辿り着いた。
木嶋は、
「小室さん、今週の金曜日、予定が空いていますか?」小室さんに問いただした。
小室さんは、
「今週の金曜日?何もなかったような気がするが…何かあるのか?」木嶋と富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「金曜日に、木嶋君と飲みに行くんですよ!」小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「どこに飲みに行くんだ。」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「横浜の関内ですよ!」小室さんに答えたのだ。
「関内?随分なところで飲むな!」木嶋に話したのだ。
「関内は、知り合いがいるので、そこで飲んでいるんですよ。」木嶋は、小室さんに伝えたのだ。
「木嶋の行きつけのところか?」小室さんは、木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「そうですよ。自分と同じ世代の女性ですから、話しをするのにはいいのではないですか?」小室さんに話したのだ。
富高さんも、
「自分も、何回か会ったことがありますよ。小室さんも話しがしやすいと思いますよ。」木嶋を援護射撃をしたのだった。

第１３３話

小室さんは、
「富高君が、一度、会っているなら大丈夫だな！じゃあ、木嶋の、行きつけの関内に行ってみようかな？」木嶋と富高さんに話したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。ちなみに、自分と富高さんは、金曜日、定時間で上がりますので、宜しくお願いします。」小室さんに頭を下げたのだ。
小室さんは、
「分かりました。」木嶋の言葉に理解を示すのであった。
富高さんは、
「それでは、金曜日ね。」木嶋に話し、自分の現場に戻って行ったのだ。
木嶋も、自分の現場に戻った行く。
昼休み終了のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いていた。
その日の仕事を、残業して終わらせていた。
現場からロッカールームに向かいながら、
「最近、疲れが溜まっているのだろうか？」木嶋は、披露困憊（ひろうこんぱい）な身体をいたわりながら、そう思わずにいられなかった。
着替えを終え、ロッカールームから出た木嶋は、いつものように、会社の送迎バスに乗り込んだ。
周りを見渡すと、富高さんが、一番奥の座席で、新聞を広げて、読んでいる姿を見つけたのだ。
木嶋は、富高さんが、座っている一番奥の座席に向かって行く。
木嶋が、
「富高さん、お疲れ様。」富高さんに声をかけたのだ。

「あっ、木嶋君。お疲れ。」富高さんは、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「昼休みは、小室さんの元に一緒に行って、理解させて戴き、ありがとうございます。」富高さんにお礼を述べていた。
「大したことは、言っていないよ。率直に、感じたことを小室さんへ伝えたかったんだ。」富高さんは、木嶋に話していた。
木嶋は、
「それが、結果的に良かったかも知れないね。」続けざまに、
「良く、話しをするときに、誇大して、話しをする人がいるよね。」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「自分は、スタイルも良くないし、はるかさんや麻美さん、玲さんたちと話しが出来るだけ幸せだと思っているよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「富高さんが、今、話していることは、自分も同意見です。はるかさん、麻美さん、玲さん、全員が営業での付き合いかもね。現実は、今でも、店などで話しや遊んでいられるのを喜ぶべきなのだろう…と。」富高さんに話したのだ。
富高さんも、
「自分も、色んな店で飲んだりしたことはあるが、みんな、一夜限りだよ。」
木嶋の脳裏に過ぎるのは、今から5年前のことであった。
それは、２０世紀末の出来事である。
同年代の大森さんと、会社の最寄り駅近くのクラブ『N』で良く飲んでいた。
そこで、木嶋は、お気に入りの女性がいたが、いつの間にか大森さんの彼女になってしまっていた。
もう悔しい思いはしない。それが、大森さんに対峙するため、木嶋の闘争心にもなっている。

それが、富高さんや小室さんでも、はるかや麻美、玲の3人だけは、絶対防衛ラインとして死守する気持ちでいた。

現状は、いつまで、続けて行くことが出来るのだろうか？それすら見通せない。

アニメのドラえもんが、現代の世界に実在して、木嶋の側にいたら…。

【タイムマシン】や【タイムテレビ】で、これから起きることが分かるし、対応も出来るのに…。

今は、21世紀である。技術革新が目覚ましい。

明日にでも、完成披露記者会見があっても不思議ではない。いつ出来るのか楽しみにしている。

車にしても、ガソリンで走ってはいるが、地球上の限られた資源であるから、いつ枯渇するのかは判らない。

ふと、我に返った木嶋は、

「自分も、一夜限りがたくさんあった。居心地のいい場所を見つけるのは大変な労力が伴う。今は、はるかや麻美、玲の店が居心地がいいよ。」富高さんも、頷いていた。

富高さんに伝えたのだ。

送迎バスが、最寄り駅に着いた。

バスから降りた木嶋と富高さんは、階段を降りていく。

木嶋の目の前には、富士松さんが歩いていた。

「今の話しを聞かれたかも…タイミングが悪いな！」ボヤくしかなかった。

あとは、金曜日が来るのを待つしかなかったのだ。

第１３４話

麻美と約束の金曜日になった。
木嶋は、朝、起きてから外の天気が気になり、窓を開け、空を見上げていた。
まだ、夜が明けきず、辺りが暗い。
冬至を境に、段々（だんだん）と、明るくなって行くのだ。
『太陽が、顔を出すまで、あと１時間ぐらい…か。』
木嶋は、ボヤき気味に
「麻美さんのクラブ『Ｕ』に出掛けるのに、天気はいいのだろうか？」更なる不安が助長していた。
帰る時に、雨が、
《ザァー、ザァー》降るのは、気が滅入ってしまう。
リュックの中に、折り畳み傘があるが、長い傘を持って行くのも、面倒なのだ。
木嶋が、掛時計を見ると、時間は、午前５時３０分になっていた。
毎朝、日本テレビの『ズームインＳＵＰＥＲ』を見るのが、日課になっている。
手元にあったリモコンで、テレビの電源を入れた。
【皆さん、おはようございます。今日は、１月、最後です。私、福澤も、今日がラストです。それでは、行きましょう！日本全国、金曜日の朝に、ズームイン！】
司会の福澤　朗アナウンサーの掛け声と同時に、大桃　美代子キャスターの右手が、ズームインシグナルを出していた。
木嶋は、朝、寝ぼけ眼で、ご飯を食べていた。
ご飯を食べ終わり、日刊スポーツを見開き、プロ野球のキャンプイン直前情報を読んでいた。
木嶋の応援しているプロ野球チームは、ジャイアンツである。
去年は、日本一を達成したので、ファンとしては、連続優勝を願

うのは、当然であった。
木嶋は、《日本シリーズ》を、一度も観戦したことがない。
【プラチナチケット】みたいな物である。
どうすれば手に入るのだろうか？
いつも、思案していた。
富高さんも、プロ野球が好きである。応援しているチームは、あるはずである。
木嶋の記憶の中で、
『聞いたような？聞かないような？』素朴な疑問を投げかけていた。
《富高さんに、今日、聞いてみよう。》そう思いたったのだ。
置時計を見た。
時刻は、午前６時になろうとしていた。
《そろそろ、着替えるか！》
日刊スポーツを畳み、いつもと同じスタイルで、着替えていた。
厚手のシャツに、ダウンコートを羽織り、Ｇパンを履いたのだ。
リュックの中には、作業服とＴシャツ、靴下を入れ、家を出たのだ。
木嶋の家から、最寄り駅までは、１５分も有れば着く距離である。
冷たい北風が、ビルの真下から吹きおろしている。
「今日は、寒いな！」ダウンコートのボタンを、首元まで閉めていた。
最寄り駅まで着いた木嶋は、【ＫＩＯＳＫ】で、スポニチを購入した。
日本経済新聞は、一面の見出しで、たまに購入していた。
駅の改札口を通り、東海道線のホームに、並んでいた。
電車が入り、発車ベルが、
「ピロン、ピロン、ピロン、ピロン」と鳴っている。
「プシュー」
エアー音を立てて、ドアが閉まって行く。

電車が、ゆっくりと走り出していく。
木嶋は、横浜駅までの距離を、通勤で東海道線を利用していた。
東海道線を利用するのには、違和感はない。
小さい頃から、どこに行くにしても、東海道線が一番早いと思っていた。
車内アナウンスが、
「まもなく、横浜、横浜です。相鉄線、横浜市営地下鉄、東横線は、お乗り換えです。」
電車が、横浜駅のホームに着いた。
ドアが、
「プシュー」と開いたのだ。
木嶋が、ホームに降り立つ。
東京方面は、朝、早い時間なのに、通勤ラッシュが始まっていた。
今から、5年ぐらい前だが、半年間、生産応援で、平塚の会社に、東海道線で通勤していた。
木嶋は、そこで初めて、夜勤勤務を経験したのだ。
夜勤明けの朝、平塚の会社から東海道線に乗り、帰宅するが、大船駅から通勤ラッシュが始まり、横浜駅で、更に混みだして行く。
毎日、通勤ラッシュの中で、通っている人の苦労は、並大抵(なみたいてい)ではないと感じたのだ。
普段から、シートに座れて、通勤出来る有り難(がた)みを、身に染みたのであった。
改札口に向かう階段を、一段、また、一段と降りて行く。
相鉄線の改札口を通り、いつもと変わらない時間の電車に乗って、会社に向かったのだった。

第135話

木嶋は、リュックからスポニチを取り出し、広げて読み出していた。

東海道線の車内で、読みたい記事を読んでいたので、あまり読みたい記事がないため、短時間でスポニチを閉じたのだ。

一旦、リュックを広げ、毎週、金曜日に発売されている《マンガ》を取り出した。

一番、気になっている《マンガ》を、最初に読んで、最終ページの作品欄から何本か、ピックアップして、マンガを読み終えた。

電車が、乗り換え駅に着いた。

スポニチと《マンガ》を、リュックの中に入れ、木嶋の会社に行く、各駅停車の電車に乗り換えたのだ。

乗り換え駅から、会社の最寄り駅まで、時間は、およそ20分ぐらいである。

毎日、朝の通勤時間は、一人で行っているので、各駅停車の電車の中で、ふと、考える時間が出来るのだ。

「麻美さんのクラブ『U』で、どんなサプライズがあるのだろうか？」

そんなことばかり、考えていたのだ。

木嶋の脳裏には、富士松さんの存在が、気になっていた。

「富士松さんは、昔からスタイルは変わらない。自分の中では、永遠のアイドル。」心の中で悲痛な思いでいた。

「このことを、麻美さんに話して、打開策でも練ろうかな？」木嶋は、思案していた。

考えごとをしている内に、【ウトウト】と、眠気に襲われたのだ。

眠気から目を覚ますと、会社の最寄り駅の一つ手前の駅だったことに気がついた。

「アッ、危ないところだった！」肝を冷やしたのだ。

冬だと言うのに、冷や汗を掻いていた。
木嶋は、何度か電車の中で寝てしまい、降り過ごしたことがあったのだ。
最寄り駅に着いた木嶋は、駅の階段を、二段ずつ上がって行く。
《エスカレーター》や《エレベーター》両方あるが、体力を落とさないように、日々（ひび）努力をしていた。
階段は、全部で、５ブロックある。
通勤ルートを変更した当初は、慣（な）れずに苦労したが、慣れと言うのは怖（こわ）いものである。
毎日が、当たり前のようになって、階段を上がって行く。
最寄り駅の改札を出て、地上に出るのも、階段を利用している。
全部で、３ブロック。
「良い、ウォーミングアップ動しているかな！」　そう思うしかないのだ。
会社の送迎バスに乗り、空いている座席に座った。
この時間の送迎バスには、富士松さんも、富高さんも乗っていない。
木嶋は、何故か?、
『ホッ…と』したのであった。
会社に着き、ロッカールームで着替え終わった木嶋は、自分の現場に向かった。
毎朝の点火作業は、木嶋の仕事であった。
作業を終えて、休憩所で寛（くつろ）ぎ、スポニチを読み更けていた。
木嶋は、予鈴のチャイムが鳴るまで、ゆとりがあったので、携帯を取り出した。
「メールをしてみようかな?」麻美のメールアドレスを確認しながら、
「麻美さん、おはようございます。今日を楽しみにしていました。」絵文字や言葉を入れてメールを送信したのだ。
簡単に、返信メールがくるとは思っていなかった。

仕事が始まる予鈴のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いていた。
あと少ししたら、今日の仕事が始まりを迎えるのだ。
何事も、トラブルがないように祈るのであった。
昼休みの始まりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響く。
食事を終えた木嶋は、富高さんの現場に向かって行った。
「富高さん、今日は、大丈夫かな?」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「大丈夫だよ!」木嶋に伝えたのだ。
「了解しました。これから小室さんのところに出向き、大丈夫か?確認しに行きます。富高さん、送迎バスは、いつもの時間でお願いします。」木嶋は、富高さんに話していた。
富高さんも、
「OKです。小室さんのことはお願いします。」木嶋に話したのだった。
木嶋も、安心したみたいで、富高さんの現場から離れ、小室さんの元に、歩いて行く。
木嶋は、小室さんの姿を見かけたので、声を掛けたのだ。
「小室さん、今日は、大丈夫ですか?」
小室さんは、
「今日…か?何か約束をしたか?」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「約束をしたよ。関内に飲みに行くってね!」小室さんに問い掛けたのだ。
「そんな約束したか?」苦笑いを浮かべていた。
木嶋も、苦笑いを浮かべていたのだった。

第136話

小室さんは、
「仕事が、無事に終わればいいけどな！」木嶋に、不安を煽(あお)っていた。
木嶋も、
「自分を、不安にさせないで…。」小室さんに伝えた。
「もしも…の場合は、どうすればいいんだ？」小室さんは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「夕方、5時に上がりますので、自分が、小室さんの元に、確認に行きますよ。」小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「判りました。」木嶋に敬礼をしていた。
木嶋も、敬礼で返したのであった。
小室さんの現場から、木嶋の現場までは、歩いていても、5分と掛からない距離である。
昼休みが終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っている。
木嶋も、気を取り直し、
「あと、半日、頑張ろう！」自問自答(じもんじとう)していた。
三谷さんが、悩んだ顔をしながら、木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋、今日、5時で帰るのか？」木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「はい。予定があるので帰ります。溝越さんにも、前から話してありますよ。何か…あったのですか？」三谷さんに問いかけていた。
三谷さんは、
「いや～、自分も、予定が出来て、残業が出来なくなってしまったんだ。」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、困惑な表情を見せながら、
「自分に、言われても、どうすることも、出来ません。溝越さんに話して下さい。」三谷さんに伝えたのだ。
「判った。」木嶋に話し、
三谷さんは、溝越さんの元に、歩いて行く。
木嶋と三谷さんは、《同じエリア》で、仕事をしているため、2人が、同じ日に、予定を入れることは、ライン構成上【タブー】である。
木嶋は、
「何か?嫌な予感がするのは、気のせいか!」妙な、胸騒ぎがしていた。
三谷さんが、溝越さんと一緒に、木嶋の作業エリアに、歩いてきたのだ。
溝越さんは、
「木嶋、三谷が、どうしても、予定があるから帰りたいと言うが…予定を変えることは出来ないのか?」木嶋に問い掛けていた。
木嶋が、予定がある時に限って、三谷さんも、予定を入れるのである。
そのたびに、譲歩を余儀なくされている。
今回は、木嶋も、強気に出た。
「自分一人なら、いいですが…富高さんも、絡んでいるので難しいと思います。」溝越さんに伝えたのだ。
溝越さんも、驚いた表情を見せ、
「富高も、一緒なら予定を変えるのは、マズイよ。」木嶋に話したのだ。
三谷さんは、
「何だ…そうだったの?最初から言ってよ!」木嶋に八つ当たりしていた。
木嶋も、
「三谷さんこそ、自分に失礼ですよ!最初から予定があるのを知

っていたのではないですか？」
溝越さんも、
「三谷も、今日になって残業が出来ませんと言う方が悪い。木嶋は、いつも、予定の変更しているから、ここは、先輩なんだから木嶋の顔を立てて上げて！」三谷さんに対して、強い口調で話していた。
三谷さんも、観念したのか？
「判りました。今日は、残業をやって行きます。お騒がせして申し訳ない。」溝越さんと木嶋に、謝罪をしたのであった。
木嶋は、
「自分の、嫌な予感が的中したよ！」心の中で頷いていた。
仕事終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響く。
木嶋は、自分の作業エリアの後片付けをしながら、
「三谷さん、あとを宜しくお願いします。」三谷さんに頭を下げていくのであった。
《心なし…か？》
三谷さんの表情が、少し暗くなっていた。
「三谷さんも、帰りたいのは判るが、たまには、譲ってくれないと…！」悪戯ぽっく、話していた。
木嶋は、三谷さんの虚ろな目を見た。
「月曜日、会社に来るといいのだが…！」そう思いながら、小室さんの元に、再び出向いたのだ。
「小室さん、行くことが出来ますか？」小室さんに尋ねた。
「木嶋、悪いな！トラブルがあって行けそうにない！申し訳ない。また、今度、誘って下さい！」小室さんは、木嶋に頭を下げたのだ。
木嶋も、富高さんとの約束もあるので、
「分かりました。」納得が行かない顔をしながら、小室さんの現場から離れて行ったのだ。

第１３７話

木嶋は、ロッカールームで、
「小室さん、今日、無理みたいだよ。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「麻美さんと話しが出来る、いいチャンスなのに、もったいないよね！」木嶋に話したのだ。
「仕方ないね！ラインが優先だからね！」富高さんを諭すように答えていた。
ロッカールームを出た木嶋と富高さんは、会社の送迎バスに乗り込んだ。
バス車内で、空いている座席を探し、最後列が空いていたので、木嶋と富高さんは、一緒に座ったのだ。
木嶋は、
「今から会社を出ます。関内に到着時間は、午後６時３０分頃、到着予定です！」麻美さんにメールをしたのだ。
富高さんは、
「麻美さん、遅れて来るんじゃないのかな？そんな予感がするよ！」木嶋に問い掛けていた。
「自分も、そう思うよ。」富高さんに答えたのだ。
いつもより、送迎バスが、少し早く最寄り駅に着いたのだ。
階段を下り、駅のコンコースに立った。
【今日は、関内だから乗り換えるのも面倒だし、市営地下鉄で行きましょう！】富高さんに伝えたのだ。
富高さんも、
《ゆっくり電車の中で、ビールが飲めるね！》にこやかな表情でいたのだ。
コンコース内を歩き、富高さんは、コンビニに入り、ビールを買いに行ったのだ！

木嶋も、あとを追うように、コンビニの中に入って行く。「木嶋君も、ビールでいいかな?」富高さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋も、
「ビールでいいよ!すきっ腹で、飲むと酔いが回るので、何か≪ツマミ≫を買って行きましょう!」富高さんに話したのだ。
「そうだね。何がいいかな?」富高さんは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
【柿の種でもいいんじゃない?】
「それにしようか!」
富高さんは、【柿の種】を、1袋、商品棚の横にあるサイドコーナーから取り、ビールと一緒に、会計に出したのだ。
木嶋は、財布を取り出し、お金を出そうとしていた。
富高さんは、
「木嶋君、今日は、自分が出すよ!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます!」丁寧な言葉で、富高さんに誠意を示していた。
コンビニを出て、市営地下鉄の改札前の料金表を、木嶋は見ていた。
「ここから関内までは…350円か!」
財布からお札を出した。
どうやら、小銭は、会社の自動販売機で使い切ってしまったみたいであった。
木嶋は、予め、一万円札を両替してあったのだ。
飲みに出かける時、一万円札を出すのもいいが、自分が、いくら持っているか解らなくなるのだ。
飲みに出かけて、最初から、財布を持たずに、人に奢って貰おうと考えを持っている人が、世の中に、いるはずである。
木嶋の会社の同僚たちの中には、そのような人はいない。
どんな小さいことでも、

《ありがとうございます。》この言葉を言えるのが、社会人として常識である。

市営地下鉄の改札を通り、ホームまで、エレベーターで下りて行く。

ホームに着いた時、1通のメールが届いていた。

麻美からのメールだった。

木嶋は、メールを読み出した。

「木嶋君、連絡ありがとうございます。私も、これから支度をします。もしかしたら遅れるかも知れません！」

富高さんに、携帯を渡し、麻美さんのメールを見せたのだ。

「やっぱりね！」

木嶋と富高さんは、思っていることは同じであった。

「プルー」電子音の発車ベルが鳴り響いていた。

「ドアが閉まります。ご注意下さい！」

ホームにアナウンスが流れたのだ。

「プシュー」エアー音が入り、ドアが閉まったのだ。

転倒防止策が先に閉まり、後からドアが閉まるのは、現在の主流であった。

私鉄が、導入した背景は、飲み過ぎたり、自殺をする人たちが多い。そのため、転倒防止策を設置したのであった。

電車が、ゆっくりと走り出した。

関内駅までは、４０分ぐらいである。

各駅に停車していくので、座っていても、一人では退屈である。

今日は、富高さんと一緒で、飲みながら会話が出来るので関内に行くには、《ナイスタイミング》であった。　木嶋と富高さんは、最後尾のボックス席に座った。

コンビニで買ってきたビールを手に取り、

「プシュ」と《プルタブ》を立てたのだ。

富高さんは、

「今日は、どんな店で食事をするのかな?」木嶋に問い掛けたの

だ。

木嶋も、

「何も聞いていないよ！」富高さんに答えたのだった。

第１３８話

富高さんは、
「麻美さんと一緒に食事をするところは、どんな場所なんだろう？案外高級な店だったりして…。」木嶋に、少しおどけて話していた。
木嶋は、
「自分の希望は、《居酒屋で…》と、麻美さんには伝えたよ！」
富高さんに答えたのだ。
「そうだよね！やっぱり…居酒屋が、我々（われわれ）庶民には、合っていると思うよ！」富高さんは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋も、首を縦に振りながら頷いていた。
車内アナウンスが…
「まもなく、関内、関内です。」木嶋たちにも、聞こえてきた。
「富高さん、次の駅で降りますよ！」木嶋は、富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「了解しました。」木嶋に話したのだ。
市営地下鉄のドアが、
「ピンポン」音を立てながら、開いたのだ。
関内駅のホームに降り立ったのだ。
木嶋と富高さんは、出口の通路番号を見上げていた。
「出口は、５番だからこちらに歩いて行けば大丈夫です。」木嶋は、富高さんに通路番号を話したのだ。
「木嶋君、良く出口番号が判るよね！」富高さんは、木嶋に感心していた。
木嶋は、
「何回か…来れば判りますが、目印は、以前、待ち合わせしたことがある場所なので、そこの出口番号を、たまたま覚えていたので

すよ。」富高さんに話したのだ。
階段を上がり、改札口を出た。
木嶋と富高さんは、出口番号の5番に向かって歩き出したのだ。
階段を、
「コッ、コッ、コッ」靴の音が反響していた。
地上に出たら、大きな交差点の角にあるコンビニ前に出たのだ。
「木嶋君、麻美さんとの待ち合わせ場所は、ここで良いの？」富高さんが、木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「うん、ここでＯＫです！まだ、時間に余裕があるので、コンビニの中で、本を立ち読みして来ます！富高さん、この場所から動かないでね！」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「いいよ！」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、コンビニの中に入って行く。
マンガ本を読みはじめようとした時、
「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音が鳴っている。
この着信音は、はるかからであった。
木嶋は、電話を取りながら、コンビニから慌てて出て来たのだ！
「もしもし、木嶋ですが…。」
「私です。今、どちらですか？」はるかは、木嶋に問いただしていた。
木嶋は、
「今、富高さんと一緒に、関内にいますよ！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「何故…関内にいるのですか？」木嶋に尋ねていた。
「何故？関内にいるかと言われても…はるかさんに何度も話したと思いますよ。1月の最後の金曜日は、麻美さんのクラブ『Ｕ』で、

富高さんの誕生日のお祝いをする…ってね！」木嶋は、はるかを宥めるように話していた。

はるかは、

「今、思い出しました！富高さんの誕生日は、来月の建国記念日でしたよね！麻美さんが、どんなお祝いをするかと教えて…と、確かに言いました。今日は、クラブ『H』は、出勤する人が多くて、私は、カットになってしまったので、木嶋さんと食事をしたかったのです！」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「もし、良ければ、関内に、これから来ませんか？」はるかを誘っていた。

はるかは、

「私は、今回、遠慮しておきます。麻美さんのクラブ『U』は、今回、最後ではないですよね？」

「今回で、最後ではありません！」木嶋は、はるかに答えたのだ。

はるかは、

「次回のチャンスに、麻美さんのクラブ『U』へ、伺わせて頂きます！」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「分かりました！」はるかに話していた。

はるかは、

「楽しんで来てね！」木嶋に伝え、電話を切ったのだ！

木嶋は、富高さんの元に歩いて行く！

「木嶋君、今、誰だったの？」富高さんは、木嶋に尋ねていた。

「今の電話は、はるかさんですよ！」木嶋は、富高さんに答えたのだ。

富高さんは、

「はるかさん、何か…言っていたの？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「今日は、クラブ『H』が休みになったから、自分が横浜駅周辺

にいると思ったらしい！」富高さんに話したのだ。
「それなら、関内に来ればいいのにね！」富高さんは、木嶋に問いただしていた。
木嶋は、
「はるかさんに、《関内に来れば…》と誘ったが、断られました。」富高さんに伝えていた。
「断られたら仕方ないね！」富高さんは、苦笑いをしていた。
木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」と鳴っていた。
画面を覗くと、麻美からであったのだ。

第139話

木嶋が、電話に出た。
「もしもし～、木嶋ですが…。」
「麻美です。もうすぐ、待ち合わせ場所に着きます。何度か…木嶋君の携帯に電話をしたのですが、話し中だったみたいで、繋(つな)がりませんでした。誰かと話していたの？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「はるかさんと、会話をしていました。」麻美に答えたのだ。
「そうでしたか？その話しは、あとで聞かせて下さい。今、大通りの近くです。もう少し待っていて下さい。」麻美は、木嶋に伝えて電話を切ったのだ！
木嶋は、
「麻美さん、もうすぐ来るみたいだよ！」左隣りにいた、富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「何か…待ちくたびれちゃったよ。」木嶋に話したのだ。
「もう少しだから…」木嶋は、苦笑いを浮かべながら、富高さんを宥(なだ)めていた。
時間が経つにつれ、気温が下がって行く。
【携帯カイロが欲しい】くらいの寒さである！
「木嶋君、暖房の効いた店の中で、ビールを飲もうよ！」富高さんが、珍しく木嶋に催促(さいそく)をしていた。
大通りの歩行者信号が、青に変わり、麻美が、木嶋と富高さんの元に歩いてきた。
「遅れてゴメンね！」
木嶋は、
「富高さんも、苛立(いら)っていたよ！いつまで…待たせるのってね！」
麻美に伝えたのだ。

麻美は、
「子供が、体調を崩してしまい、病院に連れて行ったりしていて、家を出るのが遅くなってしまったのです。」木嶋に、話したのだ。
木嶋の左横にいた富高さんは、
「それなら仕方ないよ。立ち話しをするより、早く店の中に入りましょう。」麻美と木嶋を、急(せ)かしていた。
木嶋も、
「麻美さん、動きましょう！」麻美に伝え、再び、大通りの歩行者信号が青に変わるのを待っていた。
信号が青に変わった。
コンビニの反対側にある居酒屋『W』に向かったのだ。
『W』は、木嶋の地元や会社の最寄り駅にもあるので、違和感なく入ることが出来るのだ。
今の時期は、鍋料理が最高に美味しい季節である。
ドアを開け、暖簾(のれん)を潜(くぐ)った。
「いらっしゃいませ！」
若い女性スタッフが、木嶋の元に歩いて来た。
「3名様でよろしいでしょうか？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「はい。3名でお願いします。」女性スタッフに伝えたのだ。
女性スタッフは、
「ご案内します！」
木嶋と富高さん、麻美は、案内されるままに歩いていく。
少し店の奥に入り、4人掛けのテーブルに座った。
「飲み物が決まりましたら、そちらにありますボタンでお知らせ下さい！」女性スタッフは、木嶋に伝えて、その場を離れていく。
木嶋は、手元にあったメニューを、麻美に手渡した。
麻美は、
「私は、烏龍茶(うーろんちゃ)で…木嶋君と富高さんは、何にするのかな？」木嶋と、富高さんに尋ねていた。

木嶋は、
「富高さん、ビールでいいよね?」富高さんに問いただしていた。
木嶋の意見に、
「うん、ビールでいいよ!」富高さんも、賛同したのであった。
木嶋が、ボタンを押し、
「ピンポン」
音が鳴っていた。
先ほど、案内してくれた女性スタッフが、木嶋の元に歩いてきた。
「ご注文を伺います。」
木嶋は、
「生ビールの中ジョッキを2つ、烏龍茶を1つ、チャンコ鍋を3人前。ホッケの塩焼きを1つ。それでお願いします!」女性スタッフに、オーダーした。
女性スタッフは、
「ご注文を繰り返します。生ビールの中ジョッキを2つ、烏龍茶を1つ、チャンコ鍋を3人前。ホッケの塩焼きを1つ。以上で宜しいでしょうか?」木嶋に確認した。
木嶋は、
「OKです。」女性スタッフに右手を挙げた。
女性スタッフは、確認したあとテーブルを離れていく。
麻美が、木嶋に…。
「木嶋君、はるかさんとまだ、ラブラブなの?」冷(ひ)やかしていた。
木嶋は、
「どうなんだろうね?」麻美の質問に、クエスチョンで答えていた。
麻美の右横にいた、富高さんは、
「いい雰囲気ですよ。《キチン》と交際すればいいのに…木嶋君やはるかさんにも言っているんだ!」麻美に話していた。
麻美は、
「木嶋君が、はるかさんと付き合うとなったら…間違いなく、は

るかさんは、離れていくと思うよ。」木嶋に、辛辣な言葉を浴びせていた。

木嶋は、

「何で…そんなことを言えるの…？」麻美に尋ねていた。

麻美は、

「はるかさんから見たら、木嶋君は、お客さん。それ以上でも、以下でもないよ！」木嶋と、富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「そんなものなのかな？」麻美の言葉に、納得していたのだった。

第１４０話

はるかの本心が分からず、木嶋は苦労していた。
「一体、いつになれば本物の恋愛が出来るのだろう?」心の叫びが聞こえてきそうである。
そんな木嶋の心を見透(みす)かしたように、麻美が話しはじめた。
「はるかさんを、いつまでも追い求めず、他の女性にした方がいい。私だっているよ。」
富高さんは、
「自分も、そう思うよ!」木嶋は、徐々（じょじょ）に追い詰められていた。
はるかと、一緒にいるのが、当たり前で、その生活に慣れてしまい、崩壊した時が恐怖を感じていた。
「それが、一夜(いちや)だけの女性なら良いのに…。」
行きずりな女性よりも、はるかが良いと思っていた。
「富士松さんの存在も…大きい。」悩むのであった。
女性スタッフが、《飲み物》と《お通し》、《おてふき》を持ち、テーブルに来たのだ。
「こちらは、《お通し》と《おてふき》です。生ビールのお客様。」木嶋に尋ねていた。
すかさず、木嶋と富高さんが、右手を挙げたのである。
女性スタッフが、生ビールの入った中ジョッキをテーブルに置いた。
「烏龍茶のお客様。」
麻美の元に、置いたのだ。
女性スタッフが、木嶋のテーブルから離れていく。
今度は、男性スタッフが、手押(てお)し台車(だいしゃ)で、木嶋のテーブルに来たのだ。
簡易卓上(かんいたくじょう)コンロを置き、

「チャンコ鍋です。」
コンロの上にセットした。
火を点した。
チャンコ鍋には、ボリュームたっぷりの野菜と魚介類が載っていた。
「ボリュームがあっても、野菜は、すぐに小さくなるよ！」富高さんは、木嶋と麻美に話していた。
麻美は、
「そうだね！…と」木嶋の話すことに理解を示していた。
木嶋は、
「飲み物が、全員に行き渡りましたので、乾杯をしましょう！」
麻美と富高さんに同意を求めたのだ。
「そうしよう！」富高さんと木嶋が、ビールの入った中ジョッキを右手に持ち、麻美も、烏龍茶を右手に、
「今日は、麻美との再会を祝して、乾杯～！」
木嶋と富高さん、麻美は、グラスを、
「カチン」合わせて、音を鳴らし、生ビールを、一口、飲んだのだ。
「いや～、仕事が終わったあとのビールは最高に旨いね。」富高さんは、嬉しそうに話していた。
木嶋は、
「電車の中でも、富高さんと一緒に、缶ビールを飲んだが、店の中で、生ビールを飲むと味が違うよね！」富高さんと麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「木嶋君、電車の中でも飲んできたの？少し、飲み過ぎじゃないの？」木嶋に問いかけていた。
木嶋も、悪戯好きである。
「麻美さん、自分が家では飲まないのは知っているでしょ…。人付き合いでしか飲まないよ！ここに来る前に、富高さんと話してい

たんだ。そう話したら…麻美さん、どんな表情するかなって…！」麻美に伝えたのだ。

「木嶋君、本当に信じちゃったじゃない？悪戯が好きなんだから…。」麻美は、木嶋の方に顔を向けて苦笑いを浮かべていたのだ。

麻美の左横には、富高さんが座っていた。

すかさず、富高さんの表情には、満足感が漂っていた。

「まぁ、そんなに堅苦(かたくる)しく考えなくても…。」富高さんが、麻美を宥(なだ)めていた。

女性スタッフが、

「お待たせしました。ホッケの塩焼きです。」

木嶋は、すかさず右手を差し延べ、

《ホッケの塩焼き》を受け取ったのだ。

「ご注文の品は、以上です。ごゆっくりとお寛(くつろ)ぎ下さい。」そう言葉を言い残して、テーブルを離れて行った。

富高さんが、

「何か？魚ばかりだよね。」麻美と木嶋に話していた。

麻美は、

「そうだよね。魚ばかり注文したんだね。ヘルシーでいいんじゃない？」富高さんに答えていた。

富高さんは、釣りをやるので、魚に関しては、たくさんの知識を持っているのだ。

最近は、夜釣りに行く機会がないみたいである。

今の時期に、釣り糸を垂らしていても、寒さで風邪を引いてしまうのだ。

木嶋とっては、今の時期、《マラソン、駅伝シーズン》なので、横浜国際駅伝を一人で観戦に行くこともあった。

麻美は、富高さんが、いつも出無精(でぶしょう)な性格だと思っていたみたいであった。

木嶋は、富高さんが釣りをやることは、前に聞いたことがあった。

チャンコ鍋の香ばしい醤油味が、グツグツと煮立(にた)っていた。

第１４１話

白菜、しめじ、豆腐などに醤油ダシがいい色に染みていた。
麻美は、
「富高君から採ろうか？」
採り皿に野菜などを盛りつけ、富高さんに渡していた。
木嶋は、
「さすがに、手慣れているな！」感心していて、麻美から手渡された採り皿を受け取ったのだ。
富高さんと、同じぐらいの量であった。
最後に、麻美が、自分自身に採ったのだ。
外の気温が寒かったせいか、チャンコ鍋を食べたら、身体が暖まって来た。
木嶋と富高さんは、ビールを飲んでいた。
「富高さん、熱い料理を食べていると、ビールがちょうどいいね！」木嶋は、富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「そうだね！いい感じだよ！麻美さんも、店で飲むなんて言わずに、ここで一杯、飲めばいいのに…！」麻美に伝えた。
麻美は、
「今、ここで飲んでしまったら、クラブ『U』で、木嶋君、富高君と一緒に飲めなくなってしまいます。私は、富高さんが、潰れたところを見たことがないので…今日は、たくさん飲みたいのです。」
木嶋と富高さんに話したのだ。
木嶋も、麻美の話していることに、頷いていた。
富高さんは、偶然かも知れないが、過去に2回、玲のいるクラブ『O』で潰れてしまったことがあるのだ。
その話しを、麻美は、玲から聞いていたのだ。
麻美から見たら、自分と付き合いが長いのに、そこまでにはなら

ないのは、

【何故？】と疑問心を抱くのも不思議ではない。

玲の店で、富高さんの隣りにいた女性が、その場の雰囲気を作るのが、一枚、上手（うわて）だったのだ。

富高さんは、はるかのいるクラブ『H』でも、周りの女性たちが若く、会話が続かない。飲み過ぎるまでには程遠いのだ。

逆に、木嶋は、どこの店にいても、警戒心が強く、女性の連絡先を貰っても、はるか以外は、興味がないのだ。

ただ、麻美と玲は、同年代なので、どんな会話でも続くのだ。

木嶋の横に来た女性は、最初は、手探りの状態で入るから帰る頃には、やっと打ち解けられるのだ。

富高さんは、

「今日は、飲み過ぎないようにしますよ！」笑いながら、麻美に話したのだ。

麻美は、

「一度くらい見てみたい～。」甘い声で、囁（ささや）いていた。

その話しを聞いていた木嶋は、

「どうだろうね！」

そう答えるしかないのだ。

「そう言えば木嶋君。はるかさんに物を買ったりしていないよね？」麻美は、木嶋に聞いていた。

木嶋は、一瞬（いっしゅん）《ドキッ》とした。

続けて、麻美は、

「若い世代は、ブランド品が欲しくて仕方ないからね。木嶋君は、優しいから騙（だま）されているのでは…と。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、心臓に、

《グサッ》と突き刺されたような気分であった。

冬なのに、冷や汗を掻（か）きながら、

「はるかさんに、ブランド品を買ったりしていないよ！何で…そうなるの？」麻美に尋ねていた。

麻美の言っていることには、正論である。
この時、木嶋は、
麻美に対して…嘘をついてしまったことに、罪悪感を感じずにいられなかった。
麻美に、
「ブランド品を買っているよ…。」
正直に、伝えればいいのに、背伸びをしたようになってしまった。
麻美のことだから、
「木嶋君は、はるかさんにブランド品を買っている…。」
そう感じているはずである。
麻美は、そこまで、【ツッコム】ことはなかったのだ。
木嶋の言葉を信用していたのだ。
麻美の左隣りに富高さんも、
「木嶋君、はるかさんにブランド品を買わない方がいいよ!」木嶋に問いかけるように話していたのだ。
木嶋は、
「そうだね。麻美さんと富高さんの意見を真摯に受け止めます。」
麻美と富高さんに伝えたのだ。
チャンコ鍋を食べ終わり、ホッケの塩焼きを食べはじめた。
焼き色、塩加減、程よい出来具合であった。
ビールや烏龍茶も、飲むスピードが早くなっていく。
富高さんが、
「木嶋君、ビールをもう一杯飲もうよ。」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「麻美さん、クラブ『U』に行く時間は、大丈夫なの?」麻美に尋ねていた。
麻美は、
「富高さんが、もう一杯のビールを飲み終えたら、ここを出ましょう。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、手元にあったボタンを押したのだった。

第142話

「ピンポン」呼び鈴を鳴らした。
先ほどと、同じ女性スタッフが、木嶋たちのテーブルに来た。
「ご注文をお願いします！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「生ビールの中ジョッキを1つお願いします。」女性スタッフにオーダーしたのだ。
「ご注文を繰り返します。生ビールの中ジョッキを1つ…以上でよろしいでしょうか？」木嶋に確認した。
木嶋は、
「はい。」女性スタッフに答えたのであった。
女性スタッフは、木嶋のいるテーブルから離れて行ったのだ。
「麻美さんと会いたくて…今日を心待ちにしていたんですよ！」
富高さんは、麻美に話したのだ。
麻美は、
「富高さん、本心で話していますか？」富高さんに、言いながらも表情が緩んでいた。
木嶋は、透かさず察知したのだ。
「麻美さん、顔に出ていますよ！」木嶋は、麻美に突っ込んでいた。
麻美は、
「木嶋君まで、そんなことを言うの？」年甲斐もなく、照れていた。
先ほどオーダーした生ビールのジョッキを、女性スタッフが持ってきた。
「お待たせしました。生ビールの中ジョッキです。」
木嶋は、ジョッキを受け取り、
空ジョッキを手渡したのだ。

「富高さん、飲み過ぎじゃないの？」木嶋も、心配になり、富高さんに声をかけたのだ。
「大丈夫だよ！」富高さんは、木嶋に答えていた。
ビールのジョッキを片手に、ホッケの塩焼きを食べはじめた。
木嶋も、ホッケの塩焼きを食べていた。
「食べるのが、これだけでは物足りなく感じます。サラダや漬け物などをオーダーしますか？」木嶋は、麻美と富高さんに尋ねていた。
麻美は、
「そうだね。チャンコ鍋で野菜は食べることが出来ますが、私も、野菜不足なので、ヘルシーなサラダもいいですね？富高さんは、どう思いますか？」富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「ヘルシーなサラダを、オーダーするならいいと思います。それと…漬け物も欲しいね！」麻美に話していた。
麻美は、
「何のサラダをオーダーするかは、木嶋君に一任しましょう。富高君は、漬け物をオーダーしてもらいたいと…。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。」麻美と富高さんに、ＯＫサインを出したのだ。
テーブルの横に置いてあるメニューを、手元に取り、パラパラめくった。
サラダの種類が、５つあったのだ。
木嶋は、富高さんと麻美に、
「どれにしますか？…と」尋ねたのだ。
麻美は、
「最近、カロリーの高い食事をしているので、ヘルシーなサラダがいいな！」木嶋に意見をしたのだ。
木嶋は、

「富高さんは…。」と、聞いていた。
富高さんは、
「自分は、ゴーヤサラダがいいな！」木嶋に答えたのだ。
さすがに、木嶋も困惑していた。
「両方、オーダーしたいが…どちらか1つにしようよ！」木嶋は、麻美と富高さんに話したのだ。
麻美は、
「それなら、富高さんのゴーヤサラダをオーダーしましょう。私のは、いいですよ！みんなで食べましょう！」木嶋と富高さんに提案したのだ。
富高さんは、
「自分のより麻美さんのヘルシーなサラダをオーダーすればいいのに…。」遠慮がちに話していたのだ。
麻美は、
「遠慮しないで…。ここの居酒屋『W』に来たのは、私の意見もあるのです。富高さんのオーダーをしましょう！木嶋君は、意見ありますか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「ありません。」即答したのであった。
麻美の目の奥が、【キラッ】と鋭く光っていた。
その瞬間、木嶋は、何も言えなかったのだ。
再び、ボタンを押した。
今度は、男性スタッフが、木嶋のテーブルに来たのだ。
「ご注文を伺います。」
「漬け物の盛り合わせとゴーヤサラダでお願いします。」木嶋は、男性スタッフに話したのだ。
男性スタッフは、
「ご注文を繰り返します。漬け物の盛り合わせに、ゴーヤサラダで宜しいでしょうか？」木嶋に問いかけたのだ。
木嶋は、

「はい。」男性スタッフに答えたのだ。
男性スタッフは、オーダーの確認が終わったので、木嶋のテーブルを離れて行くのであった。

第１４３話

木嶋は、
「クラブ『U』に行く前に、食べ過ぎじゃないのかな?」少し不安になっていた。
女性スタッフが、木嶋のテーブルに、
先ほどオーダーした『ゴーヤサラダ』と『漬け物の盛り合わせ』、『生ビール』を持ってきた。
「お待たせしました。《ゴーヤサラダ》と《漬け物の盛り合わせ》です。《生ビール》のお客様は…。」木嶋に聞いていた。
木嶋は、そっと…右手を差し出し、ジョッキを預かり、富高さんに手渡したのだ。
富高さんが、
「木嶋君、気を遣わせて悪いね。」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「気にしなくていいよ!」富高さんに答えていた。
ゴーヤサラダを、３等分に麻美が分けていた。
すると…ある事に気がついたのだ。
「あっ…ドレッシングを頼むのを忘れてた…」木嶋が、麻美と富高さんに伝えたのだ。
麻美と富高さんは、
「木嶋君らしいね!」２人で声を揃えて話していた。
木嶋も、苦笑いをしていた。
「ピンポン」呼び鈴を押した。
一番最初に、席を案内をしてくれた女性スタッフが、木嶋たちのテーブルに来たのだ。
「ご注文を伺います!」　木嶋は、
「先ほど、『ゴーヤサラダ』を頼んだのですが…ドレッシングを頼み忘れてしまったので、もらいたいのですが…。」女性スタッフ

に伝えたのだ。
女性スタッフは、
「かしこまりました。ドレッシングは、何が宜しいでしょうか？」
木嶋に問いかけたのだ。
木嶋は、
「何がありますか？」女性スタッフに尋ねたのだ。
「和風とフレンチ、ゆずの3種類ありますが…どれに致しますか？」
「そうですね…和風でお願いします。」木嶋は、女性スタッフに伝えたのだ。
女性スタッフは、
「かしこまりました。《和風ドレッシング》ですね。お持ちします。以上で宜しいでしょうか？」木嶋に確認していた。
木嶋は、
「はい…。」と、女性スタッフに返事をしたのだった。
女性スタッフが、木嶋のテーブルから離れて行く。
「麻美さんと富高さんに意見を聞かず、独断で頼みましたが…？」
木嶋は、麻美と富高さんに話していた。
麻美は、
「私は、何でもＯＫです。富高君は…？」富高さんに問いかけたのだ。
富高さんは、
「自分も、大丈夫だよ！」木嶋に答えたのであった。
木嶋も、《ホッ…と》したのである。
麻美は、木嶋や富高さんを呼ぶとき、必ずと言って良いほど、【君】（くん）付けで呼ぶのである。
麻美から見たら、どちらも、年齢が上である。
いつしか…その呼び名が定着していた。
木嶋も、本来なら…
「富高さん…」と、言わなければならないが、

「富高君…」と呼んでいるので、麻美が違和感なくなるのも、不思議ではないのだ。
富高さんも、木嶋や麻美が、
「富高君」で、言っていることを理解をしているので、
今さら、
「富高さん」と、言えない。
女性スタッフが、
「和風のドレッシングをお持ちしました。」木嶋に声をかけたのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。」女性スタッフに、丁寧な言葉で伝えたのだ。
女性スタッフは、テーブルを離れて行ったのだ。
麻美は、木嶋の手元にある『和風ドレッシング』を取り、小分けした『ゴーヤサラダ』にかけ、富高さんと木嶋に渡したのだ。
富高さんは、
『ゴーヤサラダ』を一口、食べてみた。
「チーズが効いていて、ゴーヤも美味しいよ。」自画自賛していた。
それを聞いた木嶋も、恐る恐る一口、食べてみた。
「ゴーヤを食べるのは、初めてだが…中々（なかなか）いける味だね。」感想を述べたのだ。
麻美は、
「美味しいね。」富高さんと、木嶋に伝えたのだ。
漬け物の盛り合わせも、良い塩加減で、ビールを飲みながら食べているので、
「あっ…と」木嶋が見た時は、皿が空になっていた。
富高さんも、満足をした様子であった。
木嶋が、
「麻美さん、時間は、大丈夫なの?」麻美に問いかけた。

麻美は、携帯の時計を覗いた。
「今、午後８時１０分過ぎたところ…午後８時３０分までに、クラブ『Ｕ』入ります。ここを出ましょう！」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「富高さん、ここを出ますよ！」富高さんに聞いていた。
富高さんも、
「もう？そんな時間、分かりました。」手荷物を持ち、
木嶋は、
会計伝票とリュックを右手に持って、会計に行ったのだ。
麻美は、居酒屋『Ｗ』のドアを開け、外に出たのだ。
会計が終わり、
富高さんが、
「木嶋君、今、いくらだったの？」木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「麻美さんのクラブ『Ｕ』で精算しましょう。」富高さんに提案したのだ。
富高さんも、
「了解しました！」木嶋に答えたのだ。
木嶋と富高さんは、居酒屋『Ｗ』のドアを開け、外で待っていた麻美と合流して、クラブ『Ｕ』に向かった。

第１４４話

大通りの信号を、山下公園方面に向かって歩いていく。
麻美を先頭に、木嶋と富高さんが、後ろで、話しをしながら並行して歩いている。
大通りから3本目の細い道を右折した。
関内は、オフィス街と…木嶋は、認識していた。
ビルが、たくさん林立していても驚きはない。
麻美は、関内を《ホームグラウンド》である。
色んな店を点々と渡り歩き、この辺りは、詳しいのだ。
木嶋にも、雰囲気が合う店、合わない店が存在する。
会社の中で、《バブル世代》に入社した女性社員たちを多く見てきた。
その中で、一瞬だけ輝いて辞めた人、幸せを掴み、寿退社した人もいた。
自分たちの現場で、飲み会を開催した時に、来てくれた女性社員の人いたのだ。
出会いが眩し過ぎて、その人に《好き》と言えずに、ズルズルとここまで来てしまったのだ。
その中で、富士松さんが残ったのだ。
【何とかチャンスがあれば…】と、考えていても、出来ないのが現実なのだ。
麻美に案内されて、エレベーターで５Ｆに向かった。
エレベーターのドアが開き、少しフロアを歩いていく。
クラブ『Ｕ』に着いたのだ。
ドアを開けると、お姉さんたちが、
【いらっしゃいませ！】威勢の良い声が聞こえていた。
麻美は、
「木嶋君、富高君、着替えに行ってきますので、こちらの若いお

姉さんのあとについて行って下さい。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました！」麻美に答えたのだ。
若いお姉さんが、
「こちらです。」木嶋と富高さんをエスコートしたのだ。
テーブルには、
【予約席】の看板が置いてあった。
それを見た木嶋は、
《ズルッ…》と、コケてしまったのだ。
案内された席は、クラブ『U』の一番奥に近かったのだ。
木嶋と富高さんは、座席に座ったのだ。
若い女性店員さんは、木嶋たちのテーブルから離れていく。
富高さんは、
「木嶋君、雰囲気が良さそうな店だね！前に一度、来たことがあるよね？」木嶋に話していた。
木嶋は、
「麻美さんが、移動した当初に、一度、来たことはあるね！雰囲気も良さそうだね！」富高さんに答えたのだ。
着替えが終わり、麻美が、木嶋たちのテーブルに来たのだ。
「木嶋君、富高君、お待たせしました。」赤いドレスを着た麻美が、木嶋の左横に座った。
少し遅れて青いドレスを来た、お姉さんが来たのだ。
『こちらは、《らんさん》と言います。』麻美が、木嶋と富高さんに紹介したのだ。
【らんです。】改めて木嶋と富高さんに自己紹介していた。
麻美は、
「らんさんから見て、左手に木嶋君。右手に富高君です。」らんに紹介していた。
麻美が、らんに、富高さんの左横に座るように促(うなが)したのだ。
らんが、

「富高さん、今日は、よろしくお願いします。」富高さんに頭を下げていた。
富高さんは、緊張した表情で、
「こちらこそ、よろしくお願いします！」らんに話したのだ。
らんが、
「麻美さんと木嶋さんたちの接点って何ですか？」麻美と、木嶋に尋ねていた。
木嶋が、話し始めた。
「麻美さんとの出会いは、２１世紀の最初の年。１１月に、横浜のクラブ『H』で知り合いました。」らんに答えていた。
続けて麻美が、
「私は、そのクラブ『H』では、２カ月間在籍していて、そこで、フリーで来たお客さんが木嶋君でした。」らんに話したのだった。
らんは、
「富高さんも、一緒に来たのですか？」富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「いや、自分は、麻美さんが、クラブ『H』を辞める日に、木嶋君に飲みに誘われて初めて会いました。」らんに伝えたのだ。
らんは、
「麻美さんが、クラブ『H』を辞める日に会ったんだ！人の縁（えん）って判らないものですね！」少し驚きを隠せずにいたのだ。
富高さんは、
「自分が、麻美さんの店に行くたびに、辞めてしまうんだ。」らんに、自嘲気味に伝えたのだ。
「何故ですか？」富高さんに、らんは尋ねたのだ。
富高さんも、
「自分には解りません！」らんに、答えを話すのに困惑していたのだった。
麻美は、
「富高君が、私のいるクラブに来ると、巡り合わせが悪いみたい

で、その月で辞めてしまって…罪悪感を感じているのも事実です。」
らんに話したのであった。
「巡り合わせ…ね。」
らんの頭の中には、クエスチョンマークがついていた。
らんは、
「同じ店に、長く勤務出来ないのは、麻美さんに周りと協調性(きょうちょうせい)がないのでは…？」麻美に話したのだ。
麻美は、
「そうかも…」らんに答えたのだ。
木嶋と、富高さんも、首を縦に頷(うなず)いたのであった。

第１４５話

男性店員さんが、木嶋のテーブルに、ボトルと氷（こおり）、ミネラルウォーターを持ってきたのだ。

木嶋は、

「麻美さん、割りものは、烏龍茶でお願いします。」麻美に話したのだ。

麻美は、

「烏龍茶ね…少し待っていて下さい！」木嶋に伝えたのだ。

近くにいた男性店員さんを、麻美が、手を挙げて呼んでいた。

「烏龍茶を持ってきて下さい！」男性店員さんに、オーダーしたのだ。

木嶋は、

「前に、クラブ『U』に富高さんと来た時、もう移動しないと…麻美さんは、話していましたが本当に信じていいの？」麻美に疑問をぶつけていた。

麻美は、

「クラブ『U』が最後です！」らんと富高さんは、少し不満な表情をしながら話しを聞いていた。

らんは、

「麻美さん、ここにずっといるのですね？」麻美に確認していた。

「このお店を辞めたら、私は、行く場所がありません。」麻美は、らんに話していた。

富高さんは、

「自分は、まだ、辞める可能性があると思いますよ！」麻美に伝えたのだ。

「何故？そんなことが言えるの？」麻美は、富高さんに問いかけた！

らんの左隣りにいた木嶋は、

「何故…？それは、麻美さんに移動癖があるからです！」木嶋は、麻美に話したのだ。

木嶋の右隣りにいた、らんが、

「その言葉が、当て嵌まるね！」木嶋と富高さん、麻美に伝えたのだ。

らんが、話しを続けた。

「何度か…ここで、麻美さんのお客さんと、一緒に飲みましたが、皆さん、同じことを話していましたよ！」木嶋と富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、

「麻美さんが連れてきたお客さんは、そのように話していたのですか？」らんに聞いていた！

男性店員さんが、先ほど、オーダーした烏龍茶を、木嶋のテーブルに置いた。

麻美が、烏龍茶を右手に持ちながら、

「木嶋君、富高君、割りものは、、烏龍茶か？ミネラルウォーターか？どちらがいいかな？」木嶋と、富高さんに聞いたのだ。

木嶋と富高さんは、声を揃えて、

「烏龍茶でいいです。」麻美に答えたのだ。

麻美は、

「らんさんは、どちらにしますか？」らんに尋ねたのだ。

らんは、

「私は、ミネラルウォーターでお願いします。」麻美に伝えたのだ。

木嶋と富高さん、麻美、らんのグラスを並べ、ボトルを開けたのだ。

麻美は、ミネラルウォーターを選択していた。

木嶋は、クラブ『U』や、クラブ『H』でもボトルキープするのは焼酎であったのだ。

普段、家で飲まない…が、仲間や会社の同僚たちと飲みに出くと、

最初は、ビールで乾杯。そのあとは、焼酎である。
このスタイルが定番になっていた。
もちろん、富高さんも同じだ。
富高さんが、
「木嶋君、何か…ツマミを頼もうよ！」木嶋に問いかけていた。
木嶋も、同じ考えであった。
「富高さん、自分もそう考えていました。メニューをもらいましょう！」富高さんに話し、
「麻美さん、メニューを下さい。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、男性店員さんに声を掛けたのだ。
男性店員さんは、すぐにメニューを、麻美に手渡したのだ。
麻美は、
「木嶋君、何がいい？」木嶋にメニューを手渡したのだ。
木嶋は、
「らんさん、メニューを一緒に見ましょう！」右隣りにいた、らんに振ったのだ。
らんは、
「私が、頼んでもいいですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「富高さん、いいよね？」富高さんに尋ねたのだ。
富高さんは、
「あっ…どうぞ。らんさんが、食べたいのを選(えら)んで下さい。」らんに伝えたのだ。
らんは、メニューを見開き、
「何にしようかな？」メニューを見ながら、悩んでいた。
なかなか決めることが出来ずに困惑していた。
らんが、
「麻美さん、どれにしますか？」麻美に問いかけるのであった。
麻美は、
「みんなで、食べられるのを選びましょう！」らんに提案したの

だ。

「みんなで、食べられるもの…焼きそばとツマミ盛り合わせでいいかな?」木嶋と富高さんに聞いていた。

富高さんは、

「いいと思います。」らんに伝え、

木嶋は、

「ＯＫです。」らんに答えたのだ。

らんは、男性店員さんを呼び、

「焼きそばとツマミ盛り合わせをお願いします。」オーダーをした。

木嶋の携帯が…

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響くのであった…。

第１４６話

聞き慣れた着信音であった。
「もしかして…」携帯の画面を見ると…
予感(よかん)通り…はるかからであった。
木嶋が、電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「私、はるかです。今、麻美さんのクラブ『U』にいるのですか？」
「麻美さんのクラブ『U』にいますよ。まだ、入ったばかり…≪メインイベント≫までは時間が掛かりそうです。何か辛いことでもあったの？」木嶋が、はるかに話していた。
はるかは、
「今日は、淋(さび)しいのです！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「淋しい…どうしたのですか…？」はるかに問いかけていた！
「クラブ『H』の中から電話をしているのですが、今日は、暇なんですよ！」はるかが、木嶋に答えたのだ。
「暇なんて…珍しいよね？」
「そうですね！もしかしたら、時間がカットになるかと思います。」はるかが、木嶋に伝えていた。
木嶋は、
「はるかさん、時間がカットになったら、麻美さんの店に来たらどうですか？」はるかに尋ねていた。
はるかも、
「そうですね！クラブ『H』を辞めてから、麻美さんに会っていないので、会いたいですね。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました！判ったら電話を下さい！」はるかに話したのだ。

はるかは、
「判りました。」
木嶋との会話を終えて、電話を切ったのだ。
麻美は、
「木嶋君、今の電話の相手は、はるかさんだよね?」木嶋に聞いていた。
「何で…解ったの?」木嶋が、麻美に尋ねていた。
麻美は、
「木嶋君の表情が緩んでいたので、もしかしたらと思いました!」
木嶋の心を見透かしていた。
木嶋の右隣りにいた、らんが、
「今の電話は、木嶋さんの彼女ですか?」木嶋にツッコミを入れていた。
木嶋は、すかさず…
「彼女ではないです。遊び友達です!」らんに反論していた。
「遊び友達と言うわりには、随分、長く親しげに会話していましたよ!」らんは、木嶋へ追及をしていた。
木嶋も、観念したのか…
「実は、クラブ『H』います。好きな人が…」らんに伝えたのだ。
らんは、
「やっぱり…そうなんだ。どこまで、進展しているの…」木嶋に聞いていた。
らんの右隣りにいた、富高さんは、
「進展と言うより、現状維持だと思いますよ。」らんに、木嶋に変わり、言葉を返していた。
「そうなの?」らんが、木嶋に疑問を抱いていた。
木嶋は、
「そうだね!富高さんか言われた通りです!」らんに伝えたのだ。
「好きなら、告白をすればいいじゃん!」らんは、木嶋に猛烈にプッシュした。

「本音は、告白したい。…告白したら…自分の前から消えてしまいそうで…不安なんです！」木嶋は、らんに答えたのだ。

麻美が、

「木嶋君に、何回か…《はるかさんと別れなさい。》…警告しているのですが…本人が理解してくれない！」らんに嘆いていた。

麻美が、嘆くのも無理はない。

木嶋も、頑なに、警告を無視している。

「今の自分に、はるかさんは必要です。」麻美の反論に、いつも、そう答えているのだ。

富高さんは、

「木嶋君と、はるかさんは、お似合いのカップルだと感じています。」らんに話すのであった。

らんは、

「はるかさん、私より、かわいいの？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「かわいいと思います。」らんに即答した。

「そんなに、かわいいなら、一度、クラブ『U』に連れてくればいいのに…」らんは、木嶋、富高さん、麻美に伝えたのだ。

富高さんは、

「木嶋君、はるかさん、今日は、来ないよね？」木嶋に問いかけたのだ。

木嶋は、

「クラブ『H』は、暇みたいなので、時間がカットになれば来る可能性があります。確率は、５０／５０ですが…」富高さんに話したのだ。

らんは、

「何だか…会いたくなって来ちゃった！クラブ『U』に寄るように伝えて下さい！」木嶋にお願いしていた。

木嶋は、Gパンのポケット携帯を取り出した。

受信メールボックスから、はるかの受信メールを選択した。

「はるかさん、時間がカットになったら、クラブ『U』にお越し下さい！」木嶋は、メールを送信した。

「あとは、返信メール待ちです。」らんに話したのだ！

らんは、

「凄く、楽しみだね！」

木嶋の心の中に、期待と不安が交錯していた。

第１４７話

木嶋が、はるかにメールを送信してから３０分が経過していた。
メールの着信音が鳴らず、不安な気持ちになっていた。
「やっぱり…ダメなのか？」精神的に、不安定になり始めていた。
らんは、
「木嶋さん、彼女から連絡ないの？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「今のところ、返信メールや着信がありません！」らんに答えていた。
富高さんは、
「はるかさんが来れば、木嶋君の表情が緩むからね。」木嶋に伝えたのだ。
麻美は、
「はるかさん、結構、警戒心が強いからね！来づらいのかも…木嶋君、私が忠告していること…全て、話していませんか？」木嶋を追及したのだ。
木嶋も、一瞬、躊躇いながらも、
「麻美さんが、自分に警告していることは、はるかさんに伝えていません。」木嶋は、軽く否定をしていた。
麻美は、
「木嶋君のことだから話しているはずだよね？」木嶋を睨みつけていた。
すると、木嶋の携帯にメールの着信音が鳴った。
「ピローン、ピローン、ピローン」電話と同じ着信音であった。
受信メールボックスから、はるかのメールを選択した。
「木嶋さん、連絡ありがとうございます。クラブ『H』は、時間がカットになるので、関内に着いたら電話します。」
木嶋は、はるかのメールの内容を読んで、笑みを浮かべたのだ。

その表情を読み取った麻美は、
「木嶋君、良かったね！」木嶋に話したのだ。
らんが、木嶋の嬉しそうな表情をしていたのを見たのだ。
「木嶋君、彼女来るんだって？」木嶋に問いかけていた。
「うん！来るようなことをメールに書いてあったが、本当に来るか？来ないか？半信半疑だよ！」木嶋は、らんに話したのだった。
らんは、
「どんな人だろう？」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「はるかさん本人が来るから判るよ。」らんに話したのだ。
麻美は、男性店員さんを呼んだ。
何やら耳打ちしている。
木嶋は、
「何を耳打ちしているのだろう？」疑問に感じていた。
男性店員さんが、バースデーケーキと花束を持ってきたのだ。
麻美が、バースデーケーキに差してある蝋燭（ろうそく）3本に火を点（とも）した。
富高さんは、
「バースデーケーキは初めてだよ。」
《フー》と息をかけて、蝋燭の火を消したのだ。
木嶋、麻美、らんの3人が、
「誕生日おめでとう。」富高さんに声をかけたのだ。
富高さんは、
「ありがとうございます。」お礼を述べていた。
らんが、
「富高さん、おめでとうございます。」花束を渡した。
富高さんは、照れくさそうに、受けとった。
「ありがとうございます。」らんにお礼を述べていた。
麻美も、
「誕生日おめでとう。」富高さんにプレゼントを手渡したのだ。
「何だろう。麻美さん、プレゼントを開（あ）けていいかな？」富高さ

んは、麻美に問いかけていた。
麻美は、
「開けていいよ！」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、嬉しそうにプレゼントのラッピングを解いた。
《青の手編みのマフラー》である。
「ありがとうございます。」富高さんは、麻美にお礼を言ったのだ。
麻美は、
「手編みのマフラーなんて何年ぶりに編んだのか分からないよ。らんさんに教わりながらも、昨日、完成しました。ヘタクソで申し訳ない。」富高さんに思いを伝えたのだ。
富高さんは、
「自分の誕生日に、今まで、プレゼントを貰ったことがないから嬉しいよ。」麻美に感謝の言葉をかけたのだ。
木嶋は、
「富高さん、良かったね！」富高さんに話したのであった。
富高さんは、
「木嶋君、《サプライズ》あるのを知っていたんじゃないの？」
木嶋に尋ねたのだ。
木嶋は、
「まさか…富高さんを、驚かせたいと話していたのは、麻美さんです。どんな形でするかは、知らなかったよ！」驚いた表情で、富高さんに話したのだ。
木嶋の左隣りにいた麻美が、
「その通りです。木嶋君の話していることが全てですよ。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「本当ですか？」麻美に聞いたのだ。
「本当ですよ！」麻美が答えていた。
らんは、

「麻美さんが、プレゼントを人に渡すなんて、私は、見たことがありません。バースデーケーキは、X'ｍａｓ以来ですね。富高さんは、幸せ者ですよ。」富高さんに話していたのだった。

第１４８話

木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。
携帯画面を覗くと、はるかであった。
「もしもし、木嶋ですが…！」
「はるかです。今、仕事が終わりました。これから横浜駅に向かい、関内に行きます。関内では、どちらの出口に出ればいいのですか？」はるかは、木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「横浜寄りの階段を降りて頂き、改札口を出たら電話を下さい。お願いします。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「判りました。関内に着いたら電話をしますね！」木嶋に話し、電話を切ったのだ。
木嶋は、
「麻美さん、これから関内に来ると話していたよ。すんなり来るとは思えないのですが…。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「はるかさん、今でも、木嶋君と待ち合わせしても、時間に《ルーズ》なんでしょ…？」木嶋に問いかけていた。
「今でも、《ルーズ》ですよ！直して下さい…と言っても、【馬の耳に念仏】だね。」木嶋は、麻美に答えたのだ。
「やっぱりね。期待しないで…飲んでましょう。」麻美は、木嶋に話したのだ。
木嶋も、半ば諦めに近い…！
「そうだね！」と…。
麻美に、相打ちをしたのであった。
富高さんは、４等分された《バースデーケーキ》の１つを、小皿

に取った。
フォークで、生クリームを取り、三角形の頂点から少しずつ食べはじめた。
一口、おいしそうに、頬張っていた。
「このケーキ、おいしいよ！どこのケーキかな？」富高さんは、らんに聞いていた。
らんは、
「私は、分からないから麻美さんに聞いて…」麻美に助け舟を求めていた。
麻美は、
「このケーキは、関内駅の近くにある《コージーコーナー》ですよ！」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「へぇ～、《コージーコーナー》で、売っているんだ。」感心を示していた。
続けて、
「自分で、ケーキを買う機会ないから、どこが美味しいかなんて判らないよ。」富高さんは、麻美、らんに話し、
「ハハハ」と、笑いを誘っていた。
らんは、
「木嶋君に、はるかさんがいるのに、富高さんは、好きな女性はいないの？」不思議そうに、富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「自分は、木嶋君に飲みに連れて来てもらうだけで幸せですよ！」らんに話したのだ。
らんは、
「木嶋君が、いなかったら来ることも、出来ないの？」富高さんに問いかけたのだ。
富高さんは、
「そうだね。自分は、携帯電話を持っていないので…」らんに答

えた。
らんは、
「えっ…携帯電話を持っていないのですか?」驚いた様子であった。
「携帯電話があると、拘束されているみたいで嫌なんだ。プライベートでも関係ないからね。」富高さんは、らんに伝えたのだ。
らんは、
「そうだね。いつ、どこで、電話があるか分からないからね。でもね、富高さんに連絡したいときは、どうすればいいの?」富高さんを、諭すように聞いていた。
富高さんは、
「木嶋君が、携帯を持っているので、そちらに連絡をして下さい。」らんに答えたのだ。
らんは、
「富高さんが、携帯を持っていないことは、麻美さんは、理解をしているのですか?」富高さんに尋ねた。
富高さんは、
「うん。麻美さんは、理解をしているよ!」らんに伝えたのだ。
らんは、
「富高さんは、変わっているよ!」苦笑いを浮かべていた。
富高さんは、
「木嶋君、はるかさんから連絡あったの?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「もうすぐ、来るんじゃないのかな?それにしても遅いかな!」はるかの到着を待ち侘びている様子。
らんは、
「木嶋君、心配じゃないの?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「いつものことですよ!」と、言いつつも、不安になっていた!
心配になって携帯を覗いた瞬間、

「ピローン、ピローン、ピローン」電話が鳴った。
はるかからである。
「もしもし、木嶋です。」
「はるかです。今、関内駅に着きました！どちらに行けばいいのですか？」はるかが、木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「自分より、麻美さんの方が詳しいので、電話を替わります。」
はるかに伝え、麻美に代わったのだ。

第１４９話

麻美は、
「もしもし、麻美です。はるかさん、お久しぶり…。今、どちらにいますか？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「今、関内駅の横浜寄りの改札口を出たところす。どちらに向かえばいいのですか？」麻美に問いただしていた。
「横浜寄りの改札口を出たところにいるのですね！はるかさんの左に、コージーコーナーが見えますか？」麻美は、はるかに聞いていた。
はるかは、
「コージーコーナーが見えます。」
「そうしたら、左に歩いて行くと、少し右横になりますが、山下公園側に、みずほ銀行があります。目の前にある信号を渡らずに、右に曲がって下さい。大きな交差点の角に、コンビニがあるので、そこに着いたら、再度、電話を下さい。お願いします。」麻美は、はるかに伝えた。
はるかは、
「コッ、コッ、コッ」
ブーツの音を響かせ、麻美に言われた目印を頼(たよ)りに歩いて行く。
大きな交差点の角のコンビニ前に到着した。
はるかは、木嶋に電話をかけたのだ。
「ピローン、ピローン、ピローン」呼び出し音が鳴っている。
木嶋が、電話に出た。
「もしもし、はるかです。」はるかが、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「はい。木嶋です。麻美さんに代わります。」携帯を、再び、麻美に手渡したのだ。

麻美が、電話に出たのだ。
「もしもし、麻美です…。」
「はるかです。今、大きな交差点の角にあります、コンビニ前から電話をしています。」はるかが、麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「そのまま、大通りの交差点を、山下公園方面に向かい、歩いて下さい。3本目の小さい道の角に、私が、立っていますので、およそ、5分ぐらいで来れると思います。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「判りました。」麻美に伝え、電話を切ったのだ。
麻美は、携帯を、木嶋に返して、エレベーターで、1Fフロアに降りていく。
1Fフロアに降りた麻美は、はるかとの待ち合わせの場所に、急ぎ足で向かって行く。
はるかと麻美が会うのは、クラブ『H』以来、1年2カ月振りである。
時間が、経つのは早いのだ。
冬の寒さが、一段と身に染みていく。
麻美の、
「カッ、カッ、カッ」
靴の音が人気のない夜空に、《こだま》している。
はるかが、麻美との待ち合わせ場所に、先に着いて待っていた。
麻美は、
「はるかさん、お久しぶり。私のいるクラブは、こちらです。木嶋君と富高君が、首を長くして待っていますよ!」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「迎えに来て頂き、ありがとうございます。」麻美に、頭を下げながら、お礼を述べていた。
「頭を下げなくてもいいのに…。」麻美は、はるかに答えたのだ。

麻美と、はるかが、一緒に歩くなど、初めてである。
麻美が、クラブ『H』に勤務していた頃は、お互いが、ライバル心を剥き出しにしていた。
今は、麻美が、クラブ『U』に移動したので、ライバル心はないはず…である。
クラブ『U』のビル、1Fフロアに着いたのだ。
エレベーターに乗り、5Fのボタンを押した。
麻美は、エレベーターの中で、
「木嶋君と、うまくいっているの?」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「ボチボチ…って、感じですね。」麻美に答えたのだ。
エレベーターが、5Fに着いた。
クラブ『U』のドアを開けた瞬間、
「こんな雰囲気の良いお店は、初めて来ました。」はるかは、驚きを隠せずにいた。
無理もない。
はるかと麻美の店は、同じクラブと言えども、客層が違いが、《ハッキリ》と違うのである。
はるかのいるクラブ『H』は、横浜駅から近いので、若い世代と年配の世代と、5割ずつ入り混じっている。
麻美のクラブ『U』は、官公庁が近く、年配の世代が比率に直すと、8割方なのである。
はるかは、どちらかと言うと、若い世代と話しが噛み合わないので、年配の世代が多くいる、クラブ『U』が最適だと…移動しようと考えても、おかしくはないのである。
ふと、気がつくと、はるかは、クラブ『U』店の雰囲気に飲み込まれていた。

第１５０話

麻美は、はるかの左手を握り、
木嶋のいる席に、《エスコート》した。
「木嶋君、はるかさんがお見えになりましたよ。」木嶋に声を掛けたのだ。
ふと左前を見上げた。
はるかが、木嶋の前に立っていた。
「木嶋さん、お待たせしました。」はるかが、木嶋に話したのだ。
木嶋は、にこやかな表情を見せながら、
「待っていました！」はるかに伝えたのだ。
麻美が、気を遣い、はるかを、木嶋の左横に、座るように促した。
はるかは、木嶋の隣りに座ったのだ。
「初めまして…らんと言います。今日は、宜しくお願いします。」
らんが、はるかに挨拶をしたのだ。
はるかは、
「初めまして…。木嶋さんと仲良くしています…はるかと言います。」らんに頭を下げたのだ。
らんの右横にいた、富高さんが、
「あれっ…。はるかさん、いつ来たのですか?」笑い飛ばし、はるかに聞いていた。
はるかは、
「今、来たばかりです。」富高さんに答えたのだ。
麻美は、円形の椅子を、隣りのテーブルから持ってきた。
木嶋とらんの前に座ったのだ。
これで、玲がいれば、【究極のオールスター】であるが、いないので、【プチオールスター】である。
らんが、
「麻美さん、木嶋さんの隣りにいる、はるかさんとは、クラブ『

H』で、一緒だったと話されていましたよね？」麻美に聞いていた。
麻美は、
「そうです。クラブ『H』で、一緒でした。はるかさん、かわいいでしょ！木嶋君が、好きになるのも無理もないよね！」らんに話したのだ。
らんは、
「それは言えますね。はるかさん、私たちより断然…若いですよね？」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「私は、今月…成人式を迎えたばかりです！」らんに答えたのだ。
らんが、
「ズルッ」とコケながら、
「本当ですか？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「本当です。」らんに伝えたのだ。
富高さんは、
「自分たちは、はるかさんが、成人式を迎える前から、クラブ『H』で知り合ったのです！」らんに話したのだ。
らんは、
「木嶋君、犯罪じゃないの？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「犯罪じゃないでしょ。光源氏（ひかるげんじ）計画…なんてね。」らんに【おどけて】話していた。
麻美は、
「木嶋君は、はるかさんがいれば…ＯＫだよね！」木嶋に話したのであった。
木嶋は、麻美の言葉に、首を縦に振り頷いていた。
はるかが、
「木嶋さん、私以外の女性と交際していないでしょうね！」いきなり、木嶋に聞いていた。

木嶋は、驚いていた。
「何故?はるかさん以外の女性と交際しないといけないの?麻美さんは、同年代だから…ほとんど…友達感覚だよ。らんは、今日、紹介されたばかりですよ!」はるかに伝えたのだ。
らんは、
「そうですよ。木嶋君とは、今日、麻美さんに紹介されたのです。富高さんも同様です。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「以前、私以外の人とメールをしていたので、少しばかり疑っていたのです。らんさんの言葉を、信用します。麻美さん、テーブルの上にケーキがあるのですが…誰かのお祝いでも、したのですか?」麻美に聞いていた。
麻美は、
「はるかさん、木嶋君から、何も話しを聞いていないの?」はるかに問いかけたのだ。
はるかは、
「何も聞いていませんよ!ねっ…木嶋さん!」木嶋に答えを求めていた。
木嶋は、相槌(あいづち)を打ち、
「はるかさんに、何も話していませんよ!」麻美とはるかに答えたのである。
麻美は、
「本当かな?」木嶋に迫るように、問い詰めていた。
木嶋は、
「本当ですって。」麻美に話したのだ。
麻美は、じゃあ話しましょう!
「富高さんの誕生日が、2月11日の建国記念日なので、少し早いのですが…お祝いをさせて頂きました。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「そうなんですか?」少しトボケていた。

富高さんの誕生日は、はるかのいるクラブ『H』で、木嶋から聞いていたのだ。
はるかも、【したたか】である。
今、ここで、富高さんの誕生日を知っていると話すより、麻美の顔を立てる方が得策だと考えたのだ。
「何か…プレゼントを渡されたのですか?」はるかは、麻美に聞いたのだ。
麻美は、
「私は、手編みのマフラーを、富高さんにプレゼントしました。」
はるかに答えたのだ。
はるかは、
「らんは、何を渡されたのですか?」らんに尋ねていた。
らんは、
「花束を渡しました。」はるかに伝えた。
「花束や手編みのマフラーなんて…照れ臭いからいいよって話したんだ!」富高さんが、はるかに話したのだ。
はるかは、
「でも…受けとったのですか?」富高さんに、突っ込みを忘れず…
富高さんは、
「プレゼントを頂いて、お祝いまでしてもらい、2人に感謝しないとね!」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「私からの誕生日プレゼントです。」
【HERMES】のバックの中から、横浜高島屋の包装紙を手渡した。
「2人から見たら、高価な物ではないですよ!」富高さんに、謙遜な言葉で話したのだ。
富高さんは、
「今、開けてもいいかな?」はるかに聞いていた。
はるかは、

「どうぞ…。」富高さんに答えたのであった。

第151話

富高さんは、そっと…横浜高島屋の包装紙を、丁寧(ていねい)に、セロハンテープを剥(は)がして行く。

「青のハンドタオル。ありがとうございます。」はるかにお礼を述べたのだ。

はるかは、

「男性の人に贈り物をする機会があまりないので、何にしたら良いか分からず、ハンドタオルにしました。」富高さんに伝えたのだ。

「自分も、ハンドタオルが欲しかったんだ！」はるかに話したのだ。

麻美は、

「はるかさん、青のハンドタオルとは奇遇(きぐう)ですね！」はるかに尋ねたのだ。

はるかは、

「麻美さん、何色の手編みのマフラーを差し上げたのですか？」麻美に聞いたのだ。

麻美は、

「はるかさんと同じ青色です。」

「2人が、同じ色なんて…初めてですね！」はるかは、麻美に話し、

「ハハハ」と笑っていた。

らんは、

「木嶋君、どうしたの？はるかさんが、隣りにいるのに…浮かない顔をして…」木嶋に問いかけたいた。

木嶋は、

「そうかな？浮かない顔をしているなんて…思っていないよ！」らんに伝えたのだ。

木嶋の左横にいる、はるかが、

「何か…後ろめいたことでもあるの？」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「何も…後ろめいたことはありません！」はるかに答えた。
富高さんは、
「木嶋君、会社に好きな人がいるみたいだよ？」はるかに話したのだ。
麻美、らん、はるかは、「え～。そうなの？」一様に、驚きを隠せずにいた。
麻美は、
「木嶋君、はるかさんがいるのに、どうしてなの？」木嶋に問い詰めていた。
木嶋は、
「はるかさんに、不満はないです。自分に、良くしてくれています。」麻美に答えたのだ。
はるかは、
「どうしてなの…？」木嶋を突いていた。
「好きと言うより、憧れです。麻美さんには、一度だけ、その話しをしたことがあります！」木嶋は、麻美とはるかに話したのだ。
麻美は、
「その話しを聞いたような…聞かないような…遥か彼方で、かすかに覚えています。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「情けないことに、その人が、自分の目の前にいるだけで、何も言えないのが現実です。」麻美に話したのだ。
「木嶋君でも、そんな人がいるんだね！」麻美と、はるかは感心をしていた。
木嶋は、話しを続け、
「自分は、女性社員との接点が普段からありません。どうしていいか…判らなくなります。麻美さんに、相談する機会が多いのは、仕方ないと思うよ。」木嶋は、麻美に話したのだ。

麻美は、
「木嶋君には、はるかさんが、【最大の理解者】ではないの？」
木嶋に尋ねたのだ。
「はるかさんに、相談すると怒られそうで話せないんだ。」木嶋は、麻美とはるかに伝えた。
はるかは、
「私は、木嶋さんの【理解者】だと思っていますから話しを持ち掛けて下さいよ！」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。今は、その人のことを考えるよりも、はるかさんと、一緒にいる時間を作りたい。」心の中の思いを、はるかに伝えたのだ。
木嶋の右横にいた、らんは、
「木嶋さんと、はるかさんが上手く行くように、らんが応援するよ！」木嶋とはるかに話したのだ。
富高さんも、
「自分も、微力（びりょく）ながら応援するよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「陰ながら、みなさんが応援して戴けると言うなら、はるかと一緒に頑張ります。」らんと、富高さんに答えたのだ。
はるかの手元に、飲み物がないことに気がついた。
木嶋は、麻美に、
《シグナル》を出したのだ。
「はるかさん、飲み物は、何がいいかな？」麻美が、はるかに聞いていた。
はるかは、テーブルの目の前にあった烏龍茶を取り、
「烏龍茶でいいです。」麻美に伝えた。
麻美は、空いていたグラスに氷を入れ、烏龍茶を注ぎ、はるかに手渡した。
はるかは、

「ありがとうございます。」麻美にお礼を述べたのだ。
木嶋の小皿にあったバースデーケーキを取り、烏龍茶を飲みながら食べていた。
「おいしい。」はるかの顔に笑顔が覗いた。
はるかは、木嶋の左腕にしていた腕時計で時間を確認していた。
「私は、そろそろ、こちらを出ないといけないので…木嶋さんたちは、どうしますか?」はるかは、木嶋と富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「自分は、もう少し居ようと考えているよ。木嶋君は…」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「終電も無くなりそうなので、はるかさんと一緒に帰ろうかと…。」富高さんに答えたのだ。
麻美は、
「木嶋君と、はるかさんは、一緒に帰りながらこれからのことを考えた方がいいね!」木嶋と、はるかに提案していた。
木嶋は、
「そうします。」麻美に答えたのだった。

第１５２話

木嶋は、両手の人差し指で、【バッテンマーク】を作り、麻美に、会計をするように、《シグナル》を出していた。
麻美は、木嶋の《シグナル》に、気づき近くにいた男性店員さんを呼んだ。
男性店員さんは、麻美と耳打ちしながら、その場を離れていく。
富高さんは、
「木嶋君、帰るの？」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「はるかさんと、これからのことを、話し合わないといけないので、一足早く、帰ります。」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「うん。それが、最善だと思うよ。」木嶋と、はるかに話したのだ。
はるかは、
「富高さん、私たちがいなくなれば、麻美さんとらんさんを独占出来て、両手に華。少しばかり、【ハーレムな気分】に、浸りたいのでは…？」富高さんに核心を突いた質問をしていた。
富高さんの左隣りにいる、らんが、
「はるかさんの、言われていることにも、一理あるね。ひょっとして…それが狙いでしょ。」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「それはないよ。そんなことをしたら…木嶋君に遭わせる顔がないよ！」少し、悪戯ぽく答えていた。
先ほどの男性店員さんが、会計伝票を麻美に渡していた。
麻美から木嶋に、手渡しした。
木嶋は、金額を見た。
「この人数で…この金額なら妥当かな。」富高さんに見せたのだ。

納得した表情だった。
「自分が6割、富高さんが、4割にしませんか?」木嶋は、富高さんに提案していた。
富高さんは、
「木嶋君、計算が面倒(めんどう)だから折半(せっぱん)でいいよ。」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「はるかさんを呼んだのは自分です。富高さんへの、負担を重くしたくない。先ほどの提案にしませんか?」再度、富高さんに話したのだ。
富高さんも、
「木嶋君が言うなら…そうしようか!」木嶋の提案を受け入れたのであった。
木嶋は、財布を取り出し、お金を麻美に渡したのだ。
麻美とらん、はるかの3人は、
「ありがとうございます。」声を揃えて、木嶋と富高さんにお礼を述べたのだ。
木嶋と富高さんは、照れくさいのか…苦笑いをしていた。
麻美が、
「木嶋君、はるかさん、もう、ここを出るのかな?」木嶋と、はるかに尋ねていた。
はるかは、
「私は、出たいと思いますが…あとは、木嶋さん次第…。」麻美に伝えたのであった。
麻美は、
「分かりました。」席を立ち、
「はるかさんに、渡したい物があるので、《チョット》待っていて下さい。」はるかに話したのだ。
木嶋は、分かっていたのだろうか?何事もないように穏やかな顔をしていた。
はるかは、

「木嶋さん、麻美さんが、私に、《プレゼント》があるみたいですが…聞いていたのですか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「何も…聞いていないよ!」はるかに話すのであった。
麻美が、席に戻って来た。
「はるかさん、遅くなってしまいましたが、成人式おめでとうございます!」茶色の封筒を、はるかに手渡した。
はるかは、
「麻美さん、封筒を開けても良いですか?」麻美に聞いていた。
麻美は、
「どうぞ…」はるかに答えたのだ。
はるかは、封筒を丁寧に、右手で、切っていた。
「何だろう?」
開けて、右の掌(てのひら)を差し出すと、映画のチケットと一緒に、横浜高島屋の商品券が、５０００円分入っていた。
「麻美さん、ありがとうございます。」はるかは、お礼を述べたのだ。
麻美は、
「木嶋君から、はるかさんの趣味は映画鑑賞と聞いていました。チケットは、半年間、有効なので木嶋君とのデートに使って下さい。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「木嶋さん、麻美さんから頂いた映画チケットで観に行きましょうか!」木嶋を誘った。
はるかからの誘いに、木嶋も、悪い気はしない。
「うん。日にちを決めてくれれば行くよ!」はるかに話したのであった。
「じゃあ、出ようか!」はるかに話し、木嶋は、席を立った。
木嶋は、麻美、らんに、
「富高さんのことをよろしくお願いします。」頭を下げたのだ。

らんは、
「あとは、任せて下さい。」木嶋に伝えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君、飲み過ぎないようにするよ！」木嶋に話し、安心したかのように、笑顔であった。
はるかも立ち上がり、クラブ『U』を、一緒に出て行った。
関内駅に向かう道を、2人で、隣り同士、歩いていた。
はるかは、
「木嶋さん、今日は、クラブ『U』に来て良かった。」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「そうだね。来て良かったね！自分には、はるかさんしかいないので、これからもよろしくお願いします。」はるかに、頭を下げたのだ。
はるかも、
「わがままな私ですが、よろしくお願いします。」木嶋に伝えたのだ。
関内駅の改札口に着いた。
キップを買うのに、財布を取り出し、木嶋は、はるかにお金を渡した。
はるかは、
「いいのですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「うん。いいよ。それくらいあれば帰れるよね！」はるかに話したのだ。
はるかは、
「帰れます。」笑顔で答えていた。
キップを購入して、階段を上り、ホームに着いた。
電車が、
「パーン」と、クラクションを鳴らしながら、入ってきた。

「プルー」発車ベルが鳴り響く、関内を、あとにしたのだ。

第153話

木嶋は、はるかと横浜駅で別れたあと、
「麻美さんの店からの帰り道。あんなことを言ってしまったが、良かったのだろうか？」一人で思いに更けていた。
ふと、気がつくと、自分が降りる駅に近づいていた。
「自分の片腕になる人は、富士松さんがベストなはず…今、全く話しが出来ない現状を考えると、はるかを選ぶのが最善なのかも知れない！」心の奥で叫びが聞こえていた。
最寄り駅に着き、改札口を出て、家まで歩いて行く。
一通のメールが受信していた。
「誰だろう！」
期待と不安が交錯しながら、メールの受信ボックスから呼び込んだ。
メールの送り主は、麻美であった。
「木嶋君、今日は、ありがとうございました。いつも、はるかさんと仲良くて羨ましいです。あまりのめり込まないようにしないとね。また、来て下さい。らんさんも、よろしくね！」木嶋に、笑顔の顔文字入りでのメールであった。
木嶋は、
「麻美さん、今日は、はるかさんや富高さんに気を遣わせて申し訳ないです！」直ぐに、メールを返信したのだ。
家に帰り、寝床についた時間は、午前1時近くであった。
翌朝、目が覚めた木嶋は、携帯を覗いた。
「メールの着信がある！」
「誰かな？」
はるかからであった。
「木嶋さん、昨日は、ありがとうございました。麻美さんからのサプライズには、驚きました。またの機会に、一緒に行きたいです。

映画に関しては、日にちを調べてから、連絡します。」
木嶋は、はるかが、麻美からのサプライズに、嬉しそうな表現で良かったと胸を撫で下ろしていた。
家にある掛時計の時刻を見た。
午前１１時であった。
「もう、こんな時間か…？」
「これからどうしようかな！たまには、本屋でも行こうかな？」
身支度を整え、家から最寄り駅の近くにある、『Ｙ』に入っていく。
はるかが行く…ハワイの情報雑誌をパラパラとめくった。
《ハワイは、芸能人が、年末年始たくさん行くところ》と、《免税店が多く、少し前までは、ジャイアンツのキャンプ地》の認識しかない。
【憧れのハワイ航路】と言う曲があるが、思わず納得してしまう。
そんな中で、「Ｙ」で立ち読みしていると、
再び、
「プルッ、プルー、プルー」携帯が鳴っている。
携帯を取り出し、画面を覗くと…麻美からであった。
「もしもし、木嶋ですが…」
「麻美です。昨日は、ありがとうございました。」麻美が、木嶋にお礼を述べた。
木嶋は、
「こちらこそ。昨日、メールでも返信しましたよ。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「木嶋君にメールを送って…返信メールを先ほど読みました。キチンと言葉で伝えたかったのです。」木嶋に話したのだ。
「気を遣わせて、申し訳ない。」木嶋は、電話で麻美に謝罪したのだ。
「気…なんて…遣っていないですよ。いつも、木嶋君には、お世

話になっているので、私から見たら、当たり前のことをしたのです。」麻美は、木嶋に話していた。

「当たり前か…。そう言えば…富高さんは、どうしたのかな？大分飲んで、楽しんでいたからね。」木嶋は、麻美に問いかけていた。

麻美は、

「朝、5時まで飲んでいましたが、富高君は、意識は《ハッキリ》していました。」木嶋は、その言葉を聞いたことに、安堵していた。

木嶋は、

「富高さんが、楽しんでいたならOKです。朝、はるかさんからメールがきたよ。」麻美に話したのだ。

「何か…メールで書いてあったの？」麻美は、木嶋に問いかけた。

「また、連れて行って下さい…。そう書いてありました。」木嶋は、麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「そうだね。また、機会があれば…いつでも…はるかさんに、そのように伝えて下さい。」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「そのように、伝えます。」麻美に話し、電話を切ったのだ。

「また、意見を聞くのを忘れてしまった。」

木嶋は、電話を切ったあとに、後悔していた。

なぜなら、木嶋自身が、《はるか》、《富士松さん》どちらかの結論が出ないので、客観的な答えを、麻美に求めたかったのだ。

第１５４話

いつまでも、客観的な答えを聞き続けるのも、考えなくてはならない。

実際に、行動をしようにも、

【金縛り】に掛かったような…目に見えない何かが存在するのだ。

その状況を打破しなければ…と、木嶋は理解をしていた。

月日が経ち、はるかが、卒業旅行に行く日にちが目前に迫(せま)っていた。

「自分に、何が出来るのだろうか？」ふと…思案していた。

頭の中で、一瞬、閃いた。

「そうだ。ハワイは、アメリカなのだから、多少でも、小遣いがあればいいのではないかな？両替するには、羽田空港に行くべきか？横浜ダイヤモンド地下街に行くべきか…？選択肢は、２通り。羽田空港に行くには、時間ロスがある！横浜に行こう！」大急ぎで、家を出たのだ。

最寄り駅に着き、腕時計で、時間を確認した。

「午後１２時過ぎ。そんなに、時間は掛からないはず…。１時間もあれば往復出来るはず…。」

定期券で、自動改札を通った。

朝、会社に通勤する時は、京浜東北線だが、予定がある時は、東海道線を利用することが多い。

東海道線のホームに繋がる階段を駆け降りて行く。

「パァーン」

クラクションを鳴らしながら、電車が、ホームに入ってきた。

冬晴れで、気温が、少しばかり暖かく感じていた。

電車を降りた人が、階段を、忙(せわ)しなく…駆(か)け上がって行く。

木嶋は、電車に乗り、空いている座席を見渡した。

どこも、人が座っていて、空いている座席はなく、ドア付近の吊

り革に、右手で、握っていた。
「チョット、暖房が効き過ぎているようだ。」
ホームに降りる時に、駆け降りたので、額(ひたい)に、《ウッスラ》と汗をかいていた。
「ガタン、ゴトン」
ゆっくりと走り出した。
電車に揺られながら、携帯を握りしめていた。
木嶋は、途中で、居眠りをしそうになっていた。
「ここ最近、仕事が忙しいから…疲れが、身体に、溜まっている。」自分に言い聞かせていた。
「間もなく、横浜、横浜に到着です。」
車掌さんの、車内アナウンスが、木嶋の耳に聞こえていた。
「やれやれ、横浜駅に着くのか?」
木嶋は、
「フー…」と、溜息(ためいき)をついた。
「プシュー」エアー音を立てながら、電車のドアが開いた。
電車を降り、近くの階段を駆け降りて行く。
自動改札を左に出た。
「横浜駅は、人が多いな!」木嶋は、一人で、呟(つぶや)きながら歩いていた。
ダイヤモンド地下街へ繋がる階段を、一段ずつ降りて行く。
歩いてすぐに、両替する場所があったのだ。
木嶋は、ダイヤモンド地下街は、はるかと知り合ってから、メインの通りに、どの店があるか…場所を把握(はあく)していた。
木嶋は、
「ここの両替する場所は、人が多いな…。はるかが、ハワイに行く週は、【建国記念日】の辺り。この時期は、学生も、春休みや卒業旅行に行くのか…見た感じ、学生風の人たち。」そう思いながらも、若い人たちの後ろに並ぶのであった。
自分を入れて、7人待ちである。

一人、また一人と、両替を終えて行く。
木嶋の順番である。
女性スタッフが、
「いらっしゃいませ！どちらのご両替でしょうか？」木嶋に声をかけたのだ。
木嶋は、すかさず、
「アメリカドルでお願いします。」女性スタッフに答えたのだ。
女性スタッフは、
「いくら、ご両替致しますか？」
「１００ドルでお願いします。」木嶋は、女性スタッフに話したのだ。
「１００ドルですね！かしこまりました。そうしましたら、日本円で、手数料込みで、１２０００円なります」女性スタッフが、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、ズボンのポケットから財布を取り出し、１２０００円を、女性スタッフに手渡した。
女性スタッフは、金額を確認して、１００ドルを木嶋に差し出した。
木嶋は、１００ドルを財布に入れた。
ダイヤモンド地下街の階段を、
「ズッ、ズッ、ズッ」一段ずつ上（あ）がっていく。
横浜駅の自動改札を定期券で通り、再び、東海道線のホームへ階段を上（のぼ）っていく。
５分ぐらい…待ったのだろうか？
電車が、ホームに入ってきた。木嶋は、
「これで、家に帰ろう！あとは、はるかからの連絡を待てばいい！小遣いを渡したら驚くかな？」大きな気持ちを抱き、電車に乗った。
「プルー…」発車ベルが鳴り響いていた。
「プシュー…」ドアが閉まり、木嶋を乗せた電車が横浜駅をあと

にした。

第１５５話

木嶋は、自宅のある最寄り駅に着いた。
「ズッ、ズッ、ズッ」靴の音を響かせながら歩いていた。
「いつ、アメリカドルを渡せばいいのだろうか…？」胸の中にある不安を抑え切れないでいた。
「はるかに、メールを送って聞いてみよう…。」
木嶋は、携帯を取り出し、アドレス帳から、はるかの携帯番号を探し出した。
はるかのメールアドレスを選択した。
「はるかさん、卒業旅行で出かける前に、会う時間がありますか？」木嶋は、少し疑問形のメール文を送信した。
直ぐに、メールが返って来ないのは判っていた。
家で、月極め契約をしている日刊スポーツを、部屋の中で読んでいた。
芸能面やプロ野球、競馬とあらゆる記事に目を通すが、全く、興味がないところも、日刊スポーツには多々あるのだ。
日刊スポーツを読み終え、朝日新聞を取り、読み出した。
「世間は、毎日、色んな事件や事故が起きるな…！」木嶋は、感心していた。
いずれ新聞が無くなる日が来るかも知れない…
インターネットが、かなりのスピードで、普及して行くのも、時間の問題である。
木嶋の世代は、パソコンなど触ったことなどない。
ハイスピードの時代変化を、肌で感じ取っていた。
はるかと、一緒にいる時間があれば、今のＩＴ時代のことを知ることが出来る。
木嶋には、一番の理解者なのだ。
「チラシ広告で、これだけ、パソコンの値引きがあるなら、１台

は欲しい。値段の比較をしないと判らないが、参考までに、見に行ってみよう。」再び、家を出た。

木嶋の家から、大型電気店は最寄り駅の近くにある。

「ズッ、ズッ、ズッ」私鉄の駅に向かっていた。

大型電気店の前に着いた。

「いらっしゃいませ！」男性、女性スタッフの威勢の良い掛け声に、圧倒されそうになった。

木嶋は、

「へぇ～、パソコンも、種類がたくさんあるんだ。あとは、値段次第か…？」パソコンコーナーを眺めていた。

「いらっしゃいませ！何か…お探しでしょうか？」

若い男性スタッフが、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「自分は、パソコンを、一度も扱ったことがないので、どれが良いのか解りません。どれが、初心者向きなのですか…？教えて下さい！」男性スタッフに問いかけた。

男性スタッフは、困惑しながらも、

「そうですか！初心者向きとなると…難しいですね。こちらの機種なんかは、いかがでしょうか？」右手を差し出した。

東芝製のパソコンであった。

「東芝ですか…？今、パソコンに、力を入れているメーカーはあるのですか？」木嶋は、男性スタッフに聞いていた。

「ソニーや東芝が、今、一番、勢いがありますね！」男性スタッフは、木嶋の質問に、丁寧に答えていた。

「ソニーか…東芝か…？少し、勉強不足だな！もっと、事前リサーチしないとダメだな！」木嶋は、ボヤくしかなかった。

「今日、ご購入されますか？」男性スタッフは、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「今日は、買わずに、一旦帰ります。他店舗をリサーチをして、

また、こちらに来ます。」男性スタッフに、お礼の言葉を返していた。

「かしこまりました。またのご来店をお待ちしています。」男性スタッフは、頭を下げ、木嶋は、大型電気店をあとにした。

木嶋は、悩んでいた。

「比較対象をするのにも、他に店舗がない。どこかにあったような気がする。家に帰り、車で出かけて見よう。」

家に戻り、車のキーを取りに行く。

駐車場まで、歩いて１０分ぐらいである。

車のキーを差し、

「プルッ、ブルー」エンジンが、スタートした。

ギアを、バックに入れ、ハンドルを切り、大きな交差点を、東京方面に曲がった。

２コ目の信号を右折して、木嶋の家の前を通って行く。

港湾(こうわん)近くに、大きな家電量販店があるのを思い出した。

直ぐに、車を向かわせた。

駐車場に車を止め、店の中に入って行く。

「いらっしゃいませ！」女性スタッフの声が、響き渡っている。

木嶋は、

「先ほど、私鉄の駅近くの店といい…ここも、店内は広いな！」

今まで、良く見に行った家電売場は、少し、家電コーナーがあるだけで、全く、比べものにはならなかった。

それが、木嶋には、新鮮に映(うつ)って見えたのだ。

第156話

店内に入り、パソコンコーナーを目指し、
「ズッ、ズッ、ズッ」と歩いていた。
フロアに下がっていた垂れ幕を頼りに目指して行く。
「あっ、ここだ。」パソコンコーナーに立ち止まったのだ。
「色んなタイプの機種があるんだな！自分自身が、オーディオ関係の情報に、疎いのが、あからさまに判ってしまうようなものだ。」
木嶋は、自問自答するしかないのだ。
パソコンを眺めていると、男性スタッフが、
「いらっしゃいませ。お客様。パソコンをお求めでしょうか…？」
木嶋の元に歩み寄ってきた。
木嶋は、
「こんにちは。パソコンを購入したなと思うのですが…お恥ずかしい話しですが…今まで、パソコンを扱ったことがないので、初心者に優しい機種なんて…ありますか？」男性スタッフに聞いていた。
男性スタッフは、
「そうですね～。初心者に優しいパソコンですか…難しい質問ですね！」苦笑いを浮かべながらも…
「この商品で…いかがでしょうか？」
男性スタッフが、最初に商品を見せてくれたのは…ソニーのパソコンであった。
「ソニーですか…！」木嶋は、頷きながら話しを聞いたのだ。
「ソニーは、パソコンに力を入れているのですね？」木嶋は、男性スタッフに問いかけたのだ。
男性スタッフは、
「パソコンなどは、ソニーが強いですね。メーカーに依って、得意分野があります。」木嶋に答えていた。
「言われている通りです。自分にも、得意分野があるように…メ

ーカーによって分かれてしまうのは、仕方ないですよね。」木嶋は、男性スタッフに話したのだ。

「あとは、お客様の予算なども、関係すると思います。男性スタッフは、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「予算を考慮して、また、こちらに伺います！」男性スタッフに話し、

「近いうちに、ご来店されると思っています。」駐車場に戻り、携帯の画面を覗くと、受信メールがあることに気がついた。

「誰かな？」興味深く見た。

はるかからのメールであった。

「木嶋さん、連絡ありがとうございます。私も、卒業旅行で出かける前に、会いたいと思っていますので、日にちを確認してから再度、連絡を致します。」

木嶋は、

「分かり次第、連絡下さい。」はるかに、メールを送信したのだった。

携帯を、ドアポケットに入れ、車のエンジンを掛け、家電量販店から出て行くのであった。

駐車場までの道程を、混雑がなければ、１０分ぐらいで着くはずである。

線路の踏切を渡る直前、

「キン、コン、カン、キン、コン、カン」警報が、けたたましく、鳴らしながら、遮断機が降りていく。

電車が通り過ぎるまで、３分ぐらいであった。

自分が、待つときは、時間の経過が遅く感じるのだ。

仕事をしているときは、時間の経過が早くなるのだ。

「ブーン」

高速で通過する音が、空気が乾いたように、聞こえていた。

警報が鳴り止み、遮断機が上がって行く。

踏切を渡る前に、左右を確認して、駐車場に向かって走って行った。
駐車場に車を止め、家に向かって歩いて行く。
木嶋は、
「はるかには、いつ、会えるのだろう…」不安感が高まって行く。
家に着いた木嶋は、マグカップを取り出し、
『ホッ…と』一息(ひといき)つきながら、
ホットコーヒーを作り、飲んでいた。
「今日は、忙しい一日だ。」ボヤきながら、部屋の中で、身体を横たわったいた。
毎日、仕事で遅くなるに連れ、疲れが、身体に出ていた。
すると、いつの間にか、木嶋は寝てしまったのだ。
気がつけば、もう、夕方であった。
木嶋は、再度、携帯を確認した。
メールの着信があったのだ。
「はるかさんかな?」そう感じていた。
受信メールを見ると、はるかであった。
「会う日にちに関してですが、卒業旅行は、金曜日からなので、木曜日でいかがですか?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「木曜日…この日を、定時にして、はるかに合わせよう。」はるかに、メールで答えていたのであった。

第157話

木嶋は、どんなに仕事が忙しくても、はるかと一緒にいることが《幸せ》だと信じて疑わなかった。

はるかのハワイ卒業旅行へ出かける週になった。

「溝越さんに、今週、木曜日。残業が出来ないことを伝えないといけないな！」木嶋は、昼休み休憩所で、スポニチを読んでいる溝越さんに、

「溝越さん、今、話す時間ありますか？」声をかけたのだ。

「木嶋、どうしたんだ？」溝越さんは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「今週、木曜日。予定があって…残業が出来ないのですがいいですか？」溝越さんに話したのだ。

溝越さんは、

「予定があるなら、仕方ない。木曜日、夕方5時まで頑張ってくれればいいよ！」木嶋に、頷きながら答えていた。

木嶋は、

「ありがとうございます。」溝越さんに、お礼を述べて、その場を離れて行った。

木嶋は、嬉しくて、直ぐに、

「今週、木曜日。仕事は、早く終わるので、待ち合わせ時間と場所を決めて下さい。」はるかにメールをしたのだ。

「キーン、コーン、カーン、コーン」昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

木嶋は、機嫌がいいと、仕事に、『リズム』が良くなる。

時には、声を出さずに、口ずさみながら、歌を歌っている。

～Ｍｒ．ｂｏｙ．忘れかけてた…Ｍｒ．ｂｏｙ．探してごらん…

知らず…知らずに…逸(はぐ)れたのさ…何故か…鮮やかな迷路の中を～

この曲は、２０世紀に解散をしてしまったが、

木嶋が、夜間高校に通っていた時に、シングルCDやアルバムを購入していたグループの歌である。

一時期、木嶋も、詩を作って、作品展に応募したこともある。

入賞出来ない自分に、才能がないのを自覚していた。

詩を書くには、たくさんの【エネルギー、感性と恋愛経験が豊富】でないと書くことが出来ない。

それだけ、プロの人たちは《凄いな》と思うであった。

木嶋自身、夜間高校出身である。

《昼間…働き、夜…学ぶ》

若い時は、誘惑に惑わされやすい。

会社で、夕方5時に仕事を終え、夜間高校までの道程を歩いていく。

高校の正門前の誘惑に、

【立ち止まるか…止まらないか…】

『勝つか、負けるか』

二者選択である。

それが人生の分岐点に繋がって行く。

夜間高校しか出来ない経験もある。

《老若男女》（ろうにゃくだんじょ）

色んな人の人生談を聞く《チャンス》に恵まれた。

木嶋の会社にも、夜間高校出身の先輩もいるので、気持ちの面でも楽になれるのだ。

同じ高校出身の田元さんも、木嶋と同じ会社に勤務しているのだ。

田元さんとは、携帯電話が主流になる前は、近況報告は、一年に一回、年賀状のやり取りしかしてなかった。

会社に入るキッカケは、

《何かあったら電話して…》軽いノリ感覚であった。

実際、木嶋の自宅に、電話がきた時は驚いたのだ。

木嶋も、何度かあるが、田元さんも、若い時は、会社を辞めようと何回かあったのも事実である。

夜間高校を卒業した時は、バブルの絶頂期だった。
今よりは、いい会社に勤務したいと思ったが、条件が合わないと言った方が正解である。
その選択は、木嶋にとって、明確な答えが見つからないでいた。
仕事が終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴ったのだ。
木嶋は、携帯を覗いた。
メールの着信を知らせるサインがあった。
「はるかからかな？」恐る恐る受信メールボックスを見た。
はるかからのメールに木嶋は、笑顔になっていた。
携帯の十字ボタンで操作しながら、はるかのメールにシフトした。
「木嶋さん、木曜日に時間を作って戴き、ありがとうございます。待ち合わせ場所は、いつものカフェレストランでいいですか？返事を下さい。」
木嶋は、思案していた。
「新しい場所を見つけるには、時間がかかる。現状維持がいいかな？」
悩みながらも、結論を出さなければならない不安が過ぎるのだ。
木嶋は、メールを送ろうとしたが、残業開始のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴ってしまったのだ。

第158話

「チャイムが鳴ってしまったら、仕事をしないといけないな！」
木嶋は、携帯を作業台の後ろにある机の引き出しに仕舞ったのだ。
メールを送れなかったことに、焦りが漂っていた。
今日の残業は、午後7時までだ。
「あとで、メールを送ればいいかな？」
木嶋は、そう思いながらも、
仕事が終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン。コーン」鳴っていた。
作業台の後ろにある机の引き出しから、携帯を再び、取り出した。
すると、はるかの着信の多さに驚いていた。
木嶋は、
「マズイな…連絡しなかったから怒っているよ…」木嶋は、気持ちの《テンション》が下がっていた。
「着歴の多さから推測すると、自分から動かずに、はるかから連絡がくるのを待とう！」いつになく、不安なカケに出たのだ。
いつもの木嶋なら、誰であっても、アドレス帳に、登録がある着信なら、電話をしたり…メールをしたりするのが普通である。
アドレス帳に、登録していない番号は、出ないのである。
登録していない番号に、電話に出てしまって、架空請求などが来たら困るからである。
相手が必要ならば、もう一度、着信があるはず…そう高を括るのであった。
着替えを終え、会社の送迎バスの座席に座った途端、
「ピローン、ピローン、ピローン」聞き慣れた着信音が鳴っていた。
木嶋は、
「はるか…だ！」

携帯の画面を覗くと、
「やっぱり…はるかさんだ。電話に出た瞬間、怒られそう！」少しばかり、恐怖心に怯えていた。
木嶋は、恐る恐る電話に出た。
「もしもし…木嶋ですが…」
「私、はるかです。木嶋さんからメールの返事がないので、何度も電話をしたのですよ…」はるかが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「残業時間に突入してしまったので、メールの返信が出来ずに申し訳ないです！」はるかに謝罪をした。
はるかは、木嶋が電話がに出ないことを理解をしたのか…？
「仕事なら仕方ないですよ！」
木嶋と電話で会話をしている口調は、いつもの冷静な…はるかではない。
チョットばかり…苛立っている雰囲気である。
その空気を察知した木嶋は、
「はるかさん、何かあったの？」はるかに尋ねた。
送迎バスが、会社の最寄り駅に着いた。
木嶋は、バスを降り、
「ズッ、ズッ、ズッ」階段を下がって行く。
はるかは、
「別に…何もないよ！」何事もないように、振る舞っていた。
木嶋も、これ以上は、さすがに、
《ヤバイ》と思い、突っ込まずにいた。
すかさず、話題を変え、
「木曜日の待ち合わせ場所は、いつものところでいいよ！」木嶋は、はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「本当ですか？分かりました。木曜日は、早く、横浜に着くように努力しますね！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「自分も、はるかさんに会いたいから、早くに着くように努力しますよ！」はるかに伝え、電話を切ったのだ。

相鉄線の改札口を通り、売店で夕刊紙と、コーヒーを買って…ホームに降りて、電車に乗った。

「ガタン、ゴトン」と揺られながら、先ほどの夕刊紙を両手に広げ、コーヒーを飲みながら読み更けていた。

このスタイルは、木嶋が一人で帰る時の、定番である！

リュックから黄色の手帳とシャーペンを取り出し、スケジュール表に、はるかとのデート日（び）を書き込んでいた。

「今年になって…何回、デートしたのだろう？」木嶋は数え出したのだ。

「1．2．3．…一週間に一回、会えれば、まだ、マシな方である。会えない時は、二週間も、会えないのか…！」

それだけ…はるかの魔法（マジック）に、掛けられていたのであった。

いわゆる…《はるかマジック》である。

知らない間（あいだ）に掛かっていたのであった。

第１５９話

夕刊紙を読みながら、考えていた。
他の人から見ると、
《はるかマジックに掛かっている。》と判るが、自分では、判らないのである。
木嶋の携帯が、
「プルー、プルー、プルー」鳴り出した。
【誰…かな?】
ふと…画面を覗くと、大森さんだった。
「もしもし、木嶋君。今ね…小室さん、富高さんと3人で、会社の最寄り駅近くで飲んでいるのですよ!」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「今日は、木曜日だよ!何で…飲んでいるの?」大森さんに聞いたのだ。
「何だろう…小室さんが、急に、話しがあるって…誘うから、無性に飲みたくて、誘惑に負けたのです。木嶋君、誘われなかったの?」大森さんが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「そんな話しは…聞いて…ないよ～」大森さんに答えたのだ。
「じゃあ…小室さんが、代われと言うので代わります!」大森さんは、木嶋に伝え、携帯を、小室さんに預けたのだ。
その時、木嶋の乗っていた電車は、
《トンネル》の中に入っていて、携帯の電波が、途切れていた。
そのため、通話中でも、
「プー、プー、プー」と鳴っていた。
再び、木嶋の携帯が、
「プルー、プルー、プルー」鳴り出した。
電話の相手は、大森さんであった。

「木嶋君、何てことをするの…！小室さん、怒っているよ！」大森さんは、木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「トンネルの中では、携帯の電波が届かないよ！別に、嫌がらせで電話を切ったりしないよ！」大森さんに反論をしたのだ。

大森さんは、

「チョット…待ってね。今、電話代わるから…」

大森さんの携帯を、小室さんが受け取ったのだ。

「もしもし、小室だが…？」小室さんが、木嶋に挨拶(あいさつ)をした。

「小室さん、何の用事ですか？3人で飲むなんて、随分、酷(ひど)くないですか？」木嶋は、小室さんに怒った口調で話していた。

「今日は、自分が、大森に話しがあって、《飲みに行くぞ！》と誘ったら、行きたいと言うから、会社の送迎バスに乗ったんだ。富高とは、バスの中で、《バッタリ》会って話したら、OKとの返事。明日は、全員休みなんだよ！」小室さんが、木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「いいね。明日、全員休みなんて羨(うら)ましいね。行く、行かないは別にして、話しだけでも、してくれれば良いのに。冷たいよね。」

小室さんに投げ掛けたのだ。

小室さんは、

「今日は、ゴメンな！またの機会に誘うからな！」木嶋に、苦し紛れに答えたのであった。

「分かりました。次の機会を、麒麟(きりん)のように、首を長くして、楽しみに待ってますよ！」木嶋は、小室さんに話したのだ。

小室さんは、

「了解しました。チョット、待て。富高が話しをしたいみたいだ。代わるぞ。」

小室さんは、大森さんの携帯を、富高さんに渡したのだ。

「もしもし、木嶋君。富高だけど…」富高さんが、木嶋に話したのだ。

木嶋は、
「富高さんが、平日に飲みに行くなんて、珍しいね！」富高さんに尋ねたのだ。
富高さんは、
「明日、メモリアル有休なんだ。」
富高さんの誕生日は、
【建国記念日】である。「えっ、そうなの？もう、そんな時期？」木嶋は、驚きを隠せずにいた。
「そうなんだよ！木嶋君、はるかさんの卒業旅行に、何か渡すのかな？」富高さんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「小遣いとして、日本円で、１２０００円分のアメリカドルで、明日、はるかさんと会って、直接、渡すよ！」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「そうなんだ。じゃあ、自分も、何かした方がいいかな？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「富高さんの判断に一任しますよ…。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「それなら木嶋君、お金を立て替えてくれるかな？来週の月曜日に、渡しに現場まで行くから…！」
「いくらぐらいかな？」木嶋は、富高さんに問いかけたのだ。
富高さんは、
「日本円で、１００００円。それでお願いします！」木嶋に依頼をしたのだ。
木嶋も、富高さんの頼みを断る訳にもいかず、
「いいよ。はるかさんには、別の封筒を用意して渡します！」富高さんに話したのである。
富高さんは、

「よろしく！」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。
木嶋が気がついた時は、もうすぐ、乗り換え駅であった。
リュックを右手に持ち、反対側に来た急行に乗り換えたのであった。

第１６０話

木嶋は、閃いたのだ。

「迷いはあるが、麻美さんに相談してみよう！」

Gパンのポケットから、携帯を取り出し、

受信メールボックスから麻美のメールアドレスを読み出した！

木嶋は、

「麻美さん、お久しぶりです。はるかさん、明後日から卒業旅行で、海外に出掛けるのですが、何かした方がいいのでしょうか？」

麻美に、問いかけのメールを出したのだ。

携帯を再び、Gパンのポケットから取り出した。

木嶋も、直ぐに返事が返って来ると思わなかった。

「プルッ、プルー、プルー」

気がつくと携帯のバイブレーターが振動していたと同時に、メールを受信していた。。

「誰かな？」

ふと、画面を覗くと、麻美からのメールであった。

「木嶋君、連絡ありがとうございます。はるかさんに、何かしようとしていますが、する必要性がないと思います！すればするほど、はるかさん自身に利用されてしまうので、止めた方が良いのではないでしょうか？これは、木嶋君に対して注意喚起しています！」木嶋に警告していたのだ！

木嶋は、麻美からのメールの内容を読みながら、思案していた。

「本当なら、そこまですることないのは、事実だな！」

「麻美さんに、どうやって返信しようか？」

少しばかり、考えあぐねていた。

「麻美さんには、何もしないと結論を出した方がいいかな！」木嶋は、麻美の意見を尊重して、メールを返信したのであった。

麻美から、メールが再び、返ってきた。

「木嶋君、私の意見を聞いて頂き、ありがとうございます。」笑顔の顔文字入りであった。

木嶋は、

「麻美は、はるかに、かなりの拒絶反応を示しているだ。それは、月日が経つに連れ、段々と増幅されて行くように、これからも、はるかと麻美が交わる可能性は、皆無かな！」

木嶋は、心の中では、和解をするのが、一番良いと思っていた。

年齢が、一つ違えば、考え方も変わってしまう。

自分の考えを、主張すればするほど、

「押し付け」に思われていまう。

「押し付けと思われないようにするには、どうすればいいのだろう？」

木嶋は、《ジレンマ》に陥っていく。

車内アナウンスが、

「横浜、横浜～。」とアナウンスされている。

「もう…横浜か？新聞を読んでいるときは、電車が遅く感じるが、思案しながらメールをしていると、時間が経つのは早いな！」木嶋は、ボヤきながら横浜駅のホームに降り立った。

改札口を出て、木嶋は、一旦、立ち止まった。

左腕にしている腕時計を見た。

「もう、こんな時間なのか？」

時刻は、午後８時１５分を過ぎていた。

「どこかの店に、立ち寄ろうか」と思いながらも、止めた足を、再び歩き出したのであった。

ＪＲ横浜駅の改札を通り、東海道線のホームの階段を、一段ずつ、

「ズッ、ズッ、ズッ」と上がって行く！

電車が、

「パーン」と、危険防止のクラクションを鳴らしながら、ホームに着いた。

ホームのアナウンスが、

「横浜、横浜です。」と言いながら、「プルー」発車ベルが鳴っていた。

木嶋は、東海道線に乗り、横浜駅をあとにして、家路に急ぐのには理由（りゆう）があった。

横浜駅を出れば、はるかから電話が来ても、戻らずに済むのである。

祈るような思いで、電車に乗って座席に座ったのだ。

第１６１話

「プシュー」ドアが閉まり、
「ガタン、ゴトン」と東海道線が動き出した。
「ピローン、ピローン、ピローン」
聞き慣れた着信音が鳴っていた。
図らずも、木嶋の予感が的中したのだ。
「どうしようかな？一度は、気がつかない《フリ》をしよう！」
鳴り続けている着信音を【スルー】した。
何秒ぐらい鳴っていたのであろうか？
木嶋は、着信履歴を確認した。
「５０秒も、鳴っていたのか？はるかも、我慢強いな！」はるかの意外な一面を覗いた。
「はるかのことだから、もう一度、かけてくるはず…」そう思っていても不思議ではない。
木嶋が、若い頃は、携帯電話が普及していないため、《テレフォンカード》を、『コンビニ』や『公衆電話の自動販売機』などから購入、仲間にかけていた。
何回、公衆電話から、コールしたのだろう。
１９９０年代、木嶋に、会社の中に好きな人がいたと言っても過言ではない。
片思いで終わった恋が数多くある。
会社の都合で、工場集約になり、今の現場にいるのである。
小室さん、溝越さん、三谷さんなどは、木嶋が、会社に入社してからの付き合いである。
ふと、振り返ると、木嶋に、結婚する【チャンス】が無かった訳ではない。
会社の若手社員たちと一緒に、外部の人たちとの交流会があり、そこで、岩崎さんと言う女性に、一目惚れしたのである。

岩崎さんとは、交流会が終わった、その日にデートをしたのだ。
木嶋は、その時、恋愛経験が少なく、どうやって立ち回れば良いのか、判らずにいた。
岩崎さんとは、一度だけ三谷さん、後山さんと一緒に、東京、新宿でカラオケをしたのだ。
岩崎さんは、友人と一緒にいたのだ。
その後、結婚してしまい、木嶋の淡い恋が、終止符(ピリオド)を打ったのだ。
時が経ち、木嶋の自宅に、電話が鳴った。
当時は、ナンバーディスプレイなどなく、電話に出るしかないのである。
「もしもし…木嶋ですが…？」
「私、岩崎です！木嶋さん、お元気ですか？」
木嶋も、思い出したのだ。
「岩崎さん、お久しぶりです！随分、懐かしいですね！電話で、話しをするのは、何年振りかな？」岩崎さんに問いかけていた！
ふと…気がつくと、電車の中で、うたた寝をしていたみたいである。
「何だ…夢か…岩崎さん、元気なのかな？」木嶋が夢の中で、岩崎さんのことが出てくるのは、それだけ思いがあったのだ。
それを、叶えられる日は、いつ来るのだろうか？
「それにしても、今、どこかな？」
車内の窓から見えるのは、見慣れぬ景色(けしき)である。
車内アナウンスが、
「間もなく、終点、東京～、東京です。お忘れ物が無いようにお願いします。終点、東京には、９番線に到着です！」
木嶋は、
「終点の東京か…また、やっちゃったかな！やっぱり…身体が、相当(そうとう)疲れているんだな？」ボヤくしかないのだ。
Ｇパンのポケットから、携帯を取り出した。
着信履歴を見ると、はるかからの着信が、７回あったのだ！

浅い眠りなら、気がつき、最寄り駅で降りている。
大体は、寝ていても、陸橋を越えれば、判るはずである！
深い眠りをしていたから、気がつかなかったのだ。
東京駅の東海道線のホームは、全部で、２面ある。
「そう言えば、アナウンスは、９番線って…言っていた！一回、ホームに降りて、時刻表を確認しよう！」
東京駅に到着。
「終点、東京～、東京です。降車が終了しましたら、一旦、ドアを閉め、車内清掃を実施します。」ホームのアナウンスが伝えていた。
木嶋は、ホームに降り、時刻表を見上げた。
「この時間だと…７．８番線から出るのか？」呟きながら、階段を降りて行く。
コンコースには、色んな東京土産、カフェコーナー、お弁当を売っていた。
日本一、乗降客が多いターミナル駅である。
勿論、コンコースの広さは、他の駅とは、比較対象にならない。
７．８番線のホームに上るエスカレーターに乗った。
平日の夜９時を過ぎたと言うのに、丸の内のオフィス街から帰宅するサラリーマン、ＯＬで溢れ返っていた。

第１６２話

８番線に入線している電車が先発で、７番線の電車が後発である。
行き先表示を見ると、先発が小田原行きで、後発が熱海行きだった。
どちらのホームも、みんなが整列している。
「自分は、普段から、整列乗車をしていないな！」木嶋は、驚きを隠せなかった！
東海道線は、東京駅始発である。
始発から、座席に座って行きたいのは、誰でも同じである。
良くある光景は、《駆け込み乗車》である。
時間に、ゆとりがあれば、駆け込み乗車など、誰もしなくてもいいのだ。
何故？《駆け込み乗車》が減らないのだろう？
木嶋は、思案していた。
【電車の発車時間ギリギリ】まで、仕事をしている人。
彼女や友人、知人などの待ち合わせに、間に合わないから駆け込むのである。
木嶋は、一時期、自分の勤務している会社が、不景気に陥(おちい)った時、平塚の会社に、半年間、派遣社員みたいな形で仕事をしていたのだ。
夜勤明けで、平塚から家に帰宅する時に、雨が降っていた影響もあるが、駅の『点字ブロック』の上で、コケてしまい、右ひじを強打して、右腕が少し湾曲みたいになってしまったことがあった。
その時の対処方法は、座席に座り、手摺(てすり)に強打した右ひじを載せ、左手で圧力を掛けて、治したのだ。
その痛い経験があるから、《駆け込み乗車》は、するものではない。
行動する時は、時間的に、余裕を持つのが、ベストである。
家の最寄り駅には、先頭車両から数えて、３号車か、６号車の方

が、降りやすいのだ。
８号車辺りでもいいが、人の流れが多いのである。
木嶋も、並んでいる人の列に加わり、ドアが開くのを待っていた。
ドアが、
「プシュー」と開いた。
先頭に並んでいる人から我先（われさき）に座席に座ったのだ。
木嶋は、ゆっくりと、６号車内に入った。
周りを見渡すと、空いている座席がなかった。
「仕方ない。立って行くのは辛い！次の新橋と品川で乗車して来る人が多いはず。３号車にしよう！」
発車まで、まだ時間に余裕があった。
「ズッ、ズッ、ズッ」
先頭車両の方に歩いて行く！
３号車は、６号車よりも、人が少なく見えた。
木嶋は、辺りを見渡した。
ボックス席の隣りの２人掛けの座席が空いていた。
「やっと…座れたか…」フーと溜（た）め息をついた。
くしゃくしゃになった夕刊紙を、リュックから出した。
何度も、読んでいたので、読む記事がない。
「仕方ない。手帳でも出すかな？」
取り出した夕刊紙を、再び、リュックに入れた。
黄色の手帳には、残業や臨時出勤をやった時間、日にち、プライベートのことも多々（たた）書いてある。
いずれ、木嶋も、年老（としお）いて行く。
今は、過去を振り返ることよりも、前を向いて行くのだ。
はるかが、木嶋の彼女になれず、友達でも、その瞬間（とき）を楽しめればいい。
いつかは、木嶋が、本当に好きな人が現れる可能性も５０／５０である。
彼女になる人が、木嶋が、思いを寄せている富士松さんなら最高

で素敵なのに…

～桟橋で…君を抱きしめ…見果てぬ夢を…夢中で話してたね～

木嶋は、声を出さずに、心の中で、口ずさんでいた。

理想を追い求めるか？現実を取るか？の選択しかないのだ。

その選択をする時に、迷えば迷うほど、蟻地獄（ありじごく）に陥ってしまう！

木嶋は、

「プルー」発車ベルが鳴り響く…東京駅から発車した。

「ガタン、ゴトン」と座席の窓から、景色を眺めていた。

携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っていた。

はるかからの着信であった。

木嶋も、電車の中で、会話をするのには、周りの目がある。

「ハンズフリーキットを買わないとダメかな？」木嶋は、そう考えていた。

しばらくして、携帯が鳴り止（や）んだのだ！

「はるかにしては、珍しいな！地元の最寄り駅に着いたら、あとで、メールか？電話しよう！」

第１６３話

木嶋の乗った電車が、東京都と神奈川県の鉄橋を、
「ガタン、ゴトン」渡っていた。
もうすぐ最寄り駅に着くのだ。
電車が、ホームに着いた。
「プシュー」ドアが開いた。
階段を、
「ズッ、ズッ、ズッ」と上(のぼ)って行く。
「やっと…戻って来れたかな！」
「ホッ…」と…一息(ひといき)ついたのだ。
木嶋は、携帯の着信履歴から、はるかに電話したのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。
「もしも～し、はるかですが…」はるかが、電話に出た。
「木嶋です。お久しぶりです。何度か…電話を戴いたのに、出れなくて申し訳ないです。」木嶋は、はるかに謝罪した。
はるかは、
「本当ですよ…何度、電話を掛けたか…判らないぐらいですよ！」
木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ゴメンね！着信履歴を見て驚きました。何度も、電話をさせて…申し訳ないです。」はるかに伝えた。
はるかは、
「でも、こうして、木嶋さんが、電話を掛けてくれたことが嬉しいです！」木嶋に伝えたのだ。
「ありがとうございます。そう言って戴けると、自分も嬉しいです。明日になれば会えますよ！どれくらい、時間の融通(ゆうずう)が利(き)きますか？あとは、はるかさん次第ですよ！」木嶋は、はるかに尋ねたのだ。

「そうですね！私も、木嶋さんといる時が、一番、充実しているので、なるべく、多く時間を作りたいと考えています！一緒にいると…心が休まります！」はるかが、木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「ありがとうございます！」はるかに答えたのだ。

「木嶋さん、明日なのですが…この間、待ち合わせ時間を決めましたが、もう少し…早く、横浜に来ることは出来ませんか？」はるかは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「もう少し、早くに、横浜にですか？先日、はるかさんに報告したと思いますが…これが、精一杯ですよ。自分が、早くいけるように、努力はしますが、現実的に、無理かも知れないですよ！」はるかに答えたのだ！

はるかは、

「え～、何とかすることは、出来ないのですか？有休みを取得することは、不可能ですか？」木嶋に尋ねた。

「何とかしてくれと…言われても…会社のルールが決まっている以上、今日の明日では…有休申請するのは難しい状況です。ご理解戴きたい！」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「判りました！明日を楽しみにしていますね！」木嶋に話し、電話を切ったのだ！

木嶋は、改札口を通り、家のある方向に歩いて行く。

「さすがに…仕事を、サボる訳にも行かない！」

《悩めるハムレット》の心境である。

【トンチで解いてみよう。】

木嶋は、家の近くの公園のベンチに座り、リュックを置き、目を閉じて、答えを探し求めていた！

答えが、なかなか見つからずにいたのだ！

木嶋は、ふと、考えたのだ！

「午後、半日有休と言う選択肢もあるが、いきなり、溝越さんに話しても、ＯＫサインは出ないはず。明日、会社で、話してみよう！ダメなら仕方ない！ＯＫなら、はるかに連絡を入れよう！」

木嶋は、

【トンチ】が導き出した答えに、開き直ったのだ！

駅から家に帰るまでの距離が、いつもより、長く感じていた。

木嶋は、

「気のせいかな？家に帰るのに、普段、歩くより長く感じる！」

いつもなら、駅から家まで歩くのに、１０分ぐらいなのに、それ以上…時間が掛かっている。

「どこかで、休みを取らないといけないな？」

ボヤきながらも、ボクシングジムを左手に見ながら、ようやく、家に帰宅したのであった！

第１６４話

木嶋に取っては、長い一日が終わろうとしていた。
「やっと、布団に入ることが出来た！」安心感が漂っていたのだった。
次の日…朝から雪がチラついていた。
「２月なのに、雪が降るとは…大雪にならなければいいが…！」
感慨に浸っていた！
今日は、はるかが、卒業旅行に行く前日である。
木嶋は、心の中では、不安で仕方ないのだ！
なぜなら…
「はるかは、可愛い！本当に女友達で行くのか…？」
不安は尽きない！男性と一緒に行っても、それを女性と偽ることだって出来るのだ。
本音を言えば、木嶋自身が、はるかと、一緒に海外に行きたい気持ちは、常に、心の中で持っている。
しかしながら、会社で、社員として、働いているのだから、そういうことをするのは、難しいのだ！
今の時期、年末年始で、お金の支出が多く、余裕がないのも事実である！
木嶋は、海外旅行に行ったことがないので、いつの時期が高いか？安いか？分からない。
一度は、出かけてみたい。
いつ…叶うか？…分からない。
朝食を食べ、身支度を整え、家を出ていく。
「今日は、身体の調子は、普通かな？」
木嶋は、そう感じながらも、最寄り駅に急いだ！
いつものキオスクで、スポニチを購入して、京浜東北線のホームに降りて行く！

木嶋が、通勤している時間は、まだ、人影が、疎(まば)らである。
遠距離で通勤している富高さんは、もう、地元の駅を出ているはずである！
「プシュー」
ドアが開き、電車に乗った。
「ガタン、ゴトン」
揺られながら、
木嶋は、先ほど…キオスクで購入したスポニチを広げ、読んでいた！
木嶋の好きな野球は、キャンプシーズンである。
今の楽しみは、《マラソン》と《ラグビー》なのだ！
元々、陸上の長距離をやっていたこともあり、一人で横浜国際駅伝を観戦しに行ったり、会社や陸上仲間の出ている大会を応援に行ったりしていたこともあり、違和感なくテレビ観戦することが出来るのだ！
ラグビーは、ルールなどは、判らないが、
【早稲田大学ＶＳ明治大学】の試合を観ていると楽しいと思い、スカパーやＮＨＫで放送をしていれば、いつも観戦をしている。
「間もなく、横浜～、横浜です。相鉄線、横浜市営地下鉄は、乗り換えです。」
車内アナウンスが、聞こえていた。
木嶋は、スポニチをリュックに入れ、ドア付近に立った。
「プシュー」
エアー音を立てて、ドアが開いた！
先頭車両から、歩きながら、階段を降りて行く。
いつもと同じ光景である。
これが、日常なのだ。
ＪＲの改札口を出て、相鉄線の改札口に向かった！
地下の階段を、一段、また、一段と上がって行く。
改札を通り、

「プルー」
発車ベルが鳴っている。
駆け足で、ホームへの階段を上がって行く。
電車に飛び乗り、
「プシュー」
ドアが閉まった。
電車が、動き出した。
木嶋は、再び、リュックからスポニチを出した。
ふと、気がついた。
「アッ…今日は、マンガの発売だった!」
いつもは、時間に余裕を持って、最寄り駅まで、歩いて行くが、
この日は、慌てていたため、ギリギリで、駅に着いたのだ。
そのため、毎週末に購入しているマンガの発売日を忘れてしまっていた。
「会社の最寄り駅で、マンガを買ってから行こう!」
会社の送迎バスの発車まで、若干の時間空きがある。
果たして、マンガまで買えるのかは、分からないのだ!
「一か?…八か?」一種の賭けである。
「もうすぐ、乗り換え駅だ。」ホッと…一安心をするのであった。
乗り換え駅で、普通電車に乗り換えた。
先ほどまで、乗っていた電車は、急行だか、速度が、普通電車と間違えそうになるているのだ。
やっと、会社の最寄り駅に着こうとしていた!
「あと、一日、頑張ろう!」
木嶋のテンションが、やっと、上がってきたのだ!

第１６５話

会社の最寄り駅に着いた木嶋は、階段を、《二段飛びダッシュ》しながら、駆け上がって行く。

改札口を出て、すぐ横にある売店で、毎週、金曜日に購入しているマンガを取り、

売店のおばさんに、お金を渡しながら、マンガとお釣りを受け取り、左腕にしていた腕時計で時間を確認していた。

「アッ、ヤバイ。会社の送迎バスに乗り遅れる。」慌てて、再び、走り出した。

送迎バスに乗り込んだ木嶋は、空いていた座席に座った。

座席に座った途端、目をつぶっていた。

朝の電車の中でも、乗り換え駅から会社の最寄り駅まで、目をつぶり一休(ひとやす)みするのであった。

会社までの道は、【アップダウン】が多数(たすう)あるため、どの辺りを走行しているかは、感覚で分かっていた。

最近は、仕事が終わってから走る機会がなくなってしまったが、

『２０世紀末』までは、良く走っていたのであった。

【アップダウンの地形】は、走るには、効果は抜群(ばつぐん)である。

もっと欲を言えば、《高地トレーニング》を出来れば、言うことなしだが、無いものねだりをしても、始まらない！

木嶋が、《陸上トレーニング》をやっていた時は、毎日のように、走っていたのだ！

一時期、会社の送迎バスと、どちらが、会社の最寄り駅まで早く着くか？競走したのだ。

その光景は、会社の中でも、一つの話題になっていた。

木嶋が、５分早く出て行っても、会社の送迎バスには、適(かな)わないのだ。

会社周辺の地形を利用した、

【アップダウンコース】を2周すると、結構キツイのだ。
送迎バスが会社に着いた。
バスを降りて、ロッカールームに向かった。
木嶋のステップがリズム良く、いつもより軽快に歩いて行く。
ロッカールームで、着替えを終えた木嶋は、自分の現場に向かった。
現場の休憩所で、おにぎり食べ、お茶を飲みながら、スポニチを広げ読んでいた。
8時近くになり、溝越さんが、木嶋のいる休憩所に来たのだ。
「おはようございます。」
木嶋は、溝越さんに挨拶した。
溝越さんは、
「おはよう。今日は、彼女と会うのか?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「はい。彼女に、会いますよ。向こうも、その予定だと思いますよ!」溝越さんに答えたのだ。
「そうか…木嶋も、今を満喫しておかないと…ダメだぞ。いい年齢なのだから…身を固める準備をして…早く、親孝行しないと…」
溝越さんは、木嶋に諭していた。
もちろん、木嶋に、結婚願望はある。
それが強いために、女性と交際をするときは、意識をしてしまう。
今の木嶋には、はるかや玲しかいないのだ。
彼女になる人がいて、前進して行く…。
「溝越さんの言われていることは、理解をしています!彼女は、若いですからね!今、そんな話しをして、自分の前からいなくなってしまうのが怖いです!」木嶋は、溝越さんに伝えた。
「そうだよな!会社と家の往復していたら、どこで、女性と知り合うかと言えば…『クラブ』や『スナック』に飲みに行って、そこで仕事をしている人と出会う確率が高いよな!そこの店の女性にするか?会社の女性するか?と比べた場合、外の女性の方が【シガラ

ミ】がないと思うからいいよ。会社の女性でもいいが、別れたりしたら大変だよ！」溝越さんは、真剣な眼差しで、木嶋に話していた。

朝から、熱く語るのも、珍しい光景でもあった。

木嶋は、いつになく…溝越さんの話しを聞いていたのであった。

仕事始まりのチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴っていた。

木嶋は、

「今日も、一日、頑張ろう」と、自分自身に言い聞かせていたのだった。

第１６６話

～♪両手広げ…全てを受け止めよう…いつもそばで…ＷＯＷ…勇気つけてあげよう♪～

木嶋は、この曲が好きで、機嫌がいいと、歌を歌いながら、テンポ良く仕事をしていた。

「これで、大きなトラブルがなければいいが…？」

木嶋の脳裏に、不安が過ぎるのだ。

今まで、人と待ち合わせの約束があると、会社で、大きなトラブルがあったり、突発的な仕事があることが多い。

はるかと出会う前のＸ－ｍａｓ《２０世紀末》滅多に会えない岩崎さんと待ち合わせの約束をしていたことがあるのだ。

岩崎さんは、結婚してしまったが、会社の仲間と東京の代々木で、一泊の研修があり、意気投合して、

デートをしたり、三谷さんと一緒に、会いに行ったりしたのだ。

お互い、忙しい中で、連絡を取り合いながら、この日を待っていたのだ。

しかし、仕事が間に合わなくて…、

《ドタキャン》をしてしまった苦い思い出があるのだ。

「いくら何でも、残業してくれなんてことは、溝越さんは言わないはず…！」木嶋は、疑心暗鬼になるのも無理はない。

「三谷さんに、今日、自分が、残業を出来ないことを話すべきかな？いや…待て…！万が一のことを考えると、言わない方が得策かな！」木嶋は、そう思ったのだ。

木嶋が、三谷さんを警戒をしているのは、会社で先輩だが、プライベートに関しては、ズル賢いのだ。

木嶋が、

「今日、予定があって帰るから…。」と、話しをすれば、
「俺も、予定があるんだよ！」と、木嶋に反論するのだ。
それを、天秤にかけたとき、仕方ないと結論を出してしまうのだ。
三谷さんは、陸上仲間との飲み会やスキー、バーベキューなどにも、一緒に行動したが、
木嶋が、はるかと知り合ってからは、一緒に行動をすることが、少なくなっていたのも事実であった。
木嶋も、
「いつまでも、三谷さんを頼ってばかりではいけない。ただ、嫌っているのでもない。相談すれば同じ目線で考えてくれる！さすがに、はるかのことは、話しずらいな！」木嶋は、心に決めたのだ。
木嶋の周りに、年配の人が多く、年下を探すと、かなり掛け離れてしまう！
三谷さんは、自分の姉と同じ年齢なので、お兄さん的な存在かも知れない。
同じ目線で考えてくれることには、【感謝】していた。
年齢が一つ違うと…大きくなるものである。
何事もなかったように、ただ、時間だけが、刻々（こくこく）と過ぎて行く。
木嶋は、坦々（たんたん）と仕事をしていた。
仕事終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っている。
「やれやれ、やっと終わったかな？」木嶋は寛ぎモードに入りながら、ロッカールームに向かった。
着替えを終え、会社の送迎バスに乗った。
すかさず、携帯を取りだし、
「今から横浜に向かいます。」はるかにメールを送信したのだ。
あとは、はるかからメールが返信されるのを待つしかない。
「横浜に着くまでに、返信がなかったらどうしようかな？」半ば不安になりがちである。

はるかが、携帯を、家や友達の家、タクシーの中に忘れて来るのだ。

そのことが、いつも、木嶋には、残像として残っていた。

送迎バスが、会社の最寄り駅に着いたのだ。

木嶋は、階段を降り、コンビニに入って行く。

手に取ったのは、毎日の日課になっている、夕刊紙とコーヒーを取り、レジに並んだ。

支払いを終え、コンビニから駅の改札口を通り、階段を降りて、ホームに向かった。

木嶋が、電車に乗り、

「プルー」発車ベルが鳴り

「ガタン、ゴトン」

電車が動き始めた。

すると、聞き慣れた着信音が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いていた。

もちろん、はるかからであったのだ。

木嶋は、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが…」

「私、はるかです。今、横浜に着きました。木嶋さんは、どちらですか？」はるかが、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、答えようとしたとき、トンネルの中で、通話が途切れてしまったのだ。

第167話

トンネルを出たとき、
「ピローン、ピローン、ピローン」再び、はるかの着信音が鳴り響く。
「チョット、木嶋さん、電話を切るなんて…酷(ひど)くないですか？」
はるかが、木嶋に強い口調で問いかけていた。
木嶋は、
「いたずらに、電話を切ったのでは、ありません！携帯の電波が届かないエリアがあるのです！」はるかに答えていた。
はるかは、
「本当ですか？」木嶋の疑問に、聞き返そうとしたとき、携帯の電波が悪いところに差し掛かってしまった。
木嶋は、そのエリアを抜け出したとき、はるかに電話をしたのだ。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っていた。
はるかが、電話に出た。
「もしも～し、はるかで～す。」
「木嶋です。通話が何度も、途切れてしまい申し訳ない！今は、携帯の電波が悪いところは、通り過ぎたので安心して話しが出来ますよ！」木嶋は、はるかに話したのだ。
はるかは、
「今どき、そんなエリアがあるなんて信じられな～い！」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「どんなに、携帯電話が進歩しても、電波の悪いエリアは存在するのです！《基地局を、たくさん林立(りんりつ)すればいいか？》と言うとそう簡単なことではないからね！」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「へぇ～、そうなんですか？いっぱい建てれば、解決するのに…

そう思いませんか?」少し不安な言葉を口にしていた。
木嶋は、
「たくさんアンテナを建てれば、解決するかも知れない!あとは、各携帯事業者が考えればいいと思います。今、我々（われわれ）には、どうすることも出来ない問題ですよ!」はるかに伝えたのだ。
「分かりました。話しは、変わりますが、木嶋さん、今、どの辺りですか?」はるかが、木嶋に問いかけている。
「今は…乗り換え駅の近くですね!おおよそ、２０分ぐらいではないですか?」木嶋は、はるかに話したのだ。
「まだ、それくらい掛かるのですか?」
「おおよそですから、早く着くとは思います。」木嶋も、逸（はら）る気持ちを抑えながら、はるかに伝えていた。
人は、好きな人がいることで、内面を磨くことが出来るのだ。
木嶋は、はるかと出会ってから、少しぐらいは積極的になったのだろうか?
自分では、分からないことが多い。
「木嶋君が、はるかさんの掌（てのひら）で、踊らされているような気がしてならない!早く、別れた方がいいよ!」麻美は、いつも辛辣（しんらつ）な言葉を、木嶋に浴びていた。
木嶋が、気がついているが、別れるつもりは、今のところはない。
今の自分に、何が必要なのだろう?
「はるかが、側（そば）にいるだけで、満足。」そう思うしかないのであった。
だだ、自己満足している。
はるかより、富士松さんを好きになるかも知れない。
もっと…素敵な人が現れる可能性を求めるのも悪くない。
現在進行形（げんざいしんこうけい）より、進歩しないと意味がない。
未来を、夢を見るのは、誰でもある。
はるかは、
「木嶋さん、横浜に着いたら電話下さい。」木嶋に伝えた。

木嶋は、

「了解しました。横浜に着いたら連絡します。待っていて下さい！」はるかに話し、電話を切ったのだ。

電話を切ってから、木嶋は、これからのことを、考えると胸が締め付けられそうである。

「どちらにしても、白黒（しろくろ）をつけないと…あとは、タイミングを見計らって…はるかに、気持ちを伝えないと…！」木嶋は、いつにしようか？頭の中で、張り巡らせていた。

「そうだ。はるかが、クラブ『H』を辞める時にしよう！」

木嶋の一代決心（いちだいけっしん）をしたのであった。

この決心が、はるかに伝わるか？どうかは、全ては、はるかが、タイニングポイントを握っているのであった。

第168話

車内アナウンスが、
「間もなく…横浜〜。横浜に到着です。降りる際、お忘れ物がないようにお願いします！ご乗車ありがとうございます。間もなく…横浜です。」
木嶋は、リュックを両肩に掛け、背中に背負った。
電車が、ゆっくりと、横浜駅のホームに入っていく。
「ガタン」ブレーキを切り、
「プシュー」と、エアー音をたて、左側のドアが開いた。
木嶋は、左側にある階段を降り、改札口へ向かって行く。
改札を出た木嶋は、約束の場所に向かいながら、携帯を取り出した。
「はるかさん、今、横浜駅に着きました！これから、約束の場所へ向かいます。」はるかにメールを送信したのだ。
木嶋と、はるかが、良く待ち合わせする場所は、2カ所あり、カフェレストラン『F』、コーヒーショップ『Y』を、ほぼ交互に行ったり来たりしていた。
木嶋は、人目を気にしないが、
はるかは、人目に敏感である。
《何度か？》
はるかが、突然、黙ったり、帰ったりしたことがあったのだ。
男性と一緒にいる姿を、周囲の人に見られるのが恥ずかしいのである。
ふと冷静に考えれば、どちらも横浜駅に近いので、必然的に、そこへ行くのは、当たり前なのである。
今日の待ち合わせ場所、カフェレストラン『Y』なのである。
木嶋から見たら、
『また、同じ場所か？』半ば、ヤケッパチに、なりがちである。

逆のことを言えば、同じ待ち合わせ場所の方が、行きやすいのも事実である。

日本は、色んな国籍を持つ人たちがいる。生活習慣が違うが、今は、寒い時期である。

気温が低いのに、アイスクリームを食べたいと思う人もいる。

反対に、食べたくない人もいるのだ。

～♪チョット…Ｇｉｖｅ　ｍｅ　ａ　ｂｌａｃｋ　俺にとっては…いい女…Ｉ　Ｌｏｖｅ　ｙｏｕ♪～

好きな曲を、口ずさみながら、コーヒーショップ『Ｙ』に向かった。

いつものように、２Ｆに繋がる階段を、

「ズッ、ズッ、ズッ」と音をたてながら、上って行く。

周りを見渡すと、すぐ左に席が空いていた。

木嶋は、椅子にリュックを置き、壁側に座り、店員さんが来るのを待っていた。

「いらっしゃいませ！」水とメニューを、木嶋に渡した。

木嶋は、

「あとから、１名来ますので、２名でお願いします！」店員さんに答えたのだ。

店員さんは、

「畏(かしこ)まりました。お連れ様は、すぐにお越しですか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「１０分ぐらいで、来ると思います！」答えていた。

続けて、

「オーダーお願いします。ケーキセットで、洋梨のタルトケーキとホットコーヒーで…。」店員さんに伝えたのだ。

店員さんは、

「畏まりました。洋梨のケーキセットで、飲み物は、ホットコーヒーで宜しいでしょうか？」木嶋に確認をしていた。

木嶋は、小さい声で、
「はい」と、首をたてに振り、
「メニューは、こちらに置いといて良いですか?」店員さんに、問いかけていた。
「どうぞ。お連れ様が来ましたら、メニューを、こちらに戻して下さいませ!」木嶋に伝え、その場を離れて行く。
木嶋は、
「受信メールが、来ないと、不安だな!」はるかが、来ないことに、不満を抑えるのに、時間がかかるのだ。
はるかが、待ち合わせ時間に、【まとも】に来たことがない。
左腕にしている腕時計で、時間を気にしながら、はるかの到着を、
「今か?今か」と、待ち詫びていた。
「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が鳴っていた。
木嶋は、電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「私、はるかです。あと5分ぐらいで行きます!」はるかが、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「お待ちしています。」はるかに伝えたのであった。
はるかが、コーヒーショップ『Y』に来るまで、木嶋には、長く感じていた。

第169話

「ブィーン」自動ドアが開いた。
「カッ、カッ、カッ」
靴の音を響かせ、
はるかが、階段を上がってきた。
木嶋は、背もたれ付きのシートに座っていたので、
はるかは、すぐに見つけることが出来たのだ。
「木嶋さん、遅くなりました！」はるかが、木嶋に頭を下げていた！
木嶋は、
「待ちくたびれました！」と言いながら立ち上がり、反対側の椅子に座ったのだ。
はるかは、先ほどまで、木嶋が座っていた背もたれ付きのシートに座ったのだ。
「はるかさん、何か…飲み物をオーダーしますか？」
テーブルの上に置いてあったメニューを、はるかに、手渡したのだ。
「ありがとうございます。木嶋さんは、オーダーしなくていいのですか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。
「自分は、はるかさんが来る前に、オーダーしたので、好きなのをどうぞ。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、メニューを、パラパラめくりながら、
「ホットロイヤルミルクティーをお願いします！」はるかは、木嶋に話したのだ。
「了解しました！」木嶋は、はるかに伝え、
近くにいた店員さんを呼び、
「ホットロイヤルミルクティーを一つ。お願いします。」オーダーをしたのだ。

「ホットロイヤルミルクティーですね！少々、お待ち下さいませ！」

店員さんが、メニューを下げながら、木嶋の元を離れて行く。

「はるかさん、明日から卒業旅行に出かけるんだよね？」木嶋は、はるかに尋ねていた。

はるかは、

「そうですよ。日本時間の明日、ハワイに出発します。今からワクワクしています！」木嶋に、笑顔で応えていた。

「自分は、海外へ出かけたことがないから、はるかさんみたいに、何度も、行ける人が羨ましいよ！」木嶋は話しを続け、

「エコノミー症候群や時差ボケにならないの？」はるかに聞いていた。

はるかは、

「エコノミー症候群や時差ボケに、なったことないですね！飛行機の中では、フライト時間が長いので寝ていますよ！」木嶋に話していた。

「自分は、国内しか行ったことがないからね。フライト時間が長いと、《イテ》も、《タッテ》もいられないよ！」

「木嶋さんは、どれくらいなら我慢出来るのですか？」はるかが、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「飛行機に長時間、乗らないと分からないね！北海道にスキーで出かけた時も、９０分が長く感じたからね！」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「そうですか…？海外に、一度、出かけて見ると見聞も広がりますよ！」木嶋に指南していた。

木嶋は、頷きながら、

「それは言えるよね！日本国内だけで、満足していては《ダメ》だよね！」はるかに答えていた。

『お待たせしました…ホットロイヤルミルクティーです。』

店員さんが、先ほどオーダーした、
《ホットロイヤルミルクティー》を、はるかの目の前に置いた。
「そうだ…。はるかさんに、渡したい物があるんだ！」木嶋は、
はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「渡したい物って…何？」木嶋に聞いていた。
「さて、何でしょう？チョット…待ってね！」
木嶋は、リュックの中から茶色の封筒を取り出した。
「はるかさんに、プレゼントです！」
封筒を、はるかに手渡した。
はるかは、
「何だろう…？開けても良いですか？」木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「どうぞ…」
はるかは、封筒の先端を、右手で切っていた。
封筒の中を覗いた。
「わ～い。アメリカドルだ…ありがとうございます！」はるかが、
木嶋にお礼を述べていた。
木嶋は、
「少額で申し訳ないが、富高さんの分も入っていますよ！ハワイ
で小遣いに、ならないかも…！」苦笑いをしながら話していた。
はるかは、
「全然、いいですよ。手持ちがあった方がいいですからね！大切
に使わせて頂きます。何か…お土産を買って来ますよ！」木嶋に伝
えていた。
【そんなに…気を使わないでいいよ！】
木嶋は、照れていた。
《あとは、ＣＮＮニュースに、ならないようにね！》
はるかが、どこに行くにしても、優しい言葉を掛けるのであった。

第１７０話

木嶋は、左腕(ひだりうで)にしている腕時計で時間を確認していた。
「もう…こんな時間か…？」
時刻は、午後８時近くになろうとしていた。
いつもなら、はるかが、クラブ『Ｈ』でバイトをしている時刻である。
ふと…疑問を抱(いだ)いた木嶋は…
「はるかさん。今日は、クラブ『Ｈ』へ行かなくて大丈夫なのですか？」はるかに尋ねた。
はるかは、
「明日、ハワイに出発するので、クラブ『Ｈ』へ行きません！元々、今日は、出勤予定ではないですよ。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そうだよね！出発前日に、クラブ『Ｈ』に出勤していたら大変だよね！もし、寝坊(ねぼう)したら一大事(いちだいじ)だね！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「そうですよ！私は、良く携帯を友達の家やタクシーに忘れてしまうので、クラブ『Ｈ』に行くよりも、こうして木嶋さんと一緒にいるのが幸せですよ！」
その言葉を聞いた木嶋は、
「マジで…そう言って頂けると嬉しいね！何て…言葉を返せば良いのだろう！考えつかないよ！」嬉しい気持ちを抑え切れないでいた。
その表情を見ていた…
はるかは、笑顔で微笑んでいた。
「木嶋さん、私、これから明日の最終確認で、友達と会わないと行けないので、これで失礼してしてもいいですか？」はるかは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、
「いいよ。明日、旅立つ準備も終わっているの？」
「準備は、万全です。」木嶋の問いかけに、はるかは、自信満々に答えていた。
「分かりました！」はるかに、優しく声をかけたのだ。
はるかは、
「ありがとうございます。一週間、連絡が出来なくなってしまいますが、私以外の人に、惹かれないようにして下さいね！木嶋さん、浮気性なので、そこが心配ですね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、その言葉を聞いた瞬間、
胸に、
【グサッ】と突き刺さるような思いがしていた。
冷静に考えると…
はるかが、言うのも無理はない。
木嶋は、時間があれば、麻美や玲の店に行って、若い女性のメールアドレスを交換して、メールをしていた。
はるかは、知っていたのだ。
はるかが、たまに、木嶋の【携帯チェック】をするのだ。
疚しいことをしていないので、疑われても否定が出来る。
最も、木嶋が、はるかと別れてしまえば、そんな心配をしなくてもいいが、今は、そんな気持ちはない。
いずれ、そんな時が来ると思いたくない。
「はるかさんと、連絡が取れなくなることは、淋しいね！ハワイから国際電話をするにも、日本と時差があるからね！帰国したら電話をしてね！声を聞かないと、安心が出来ないよ！」木嶋は、はるかに話したのだ。
はるかは、
「分かりました。帰国したら、木嶋さんの携帯に電話します。留守電になっていたら、留守電にいれます！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、

「よろしくね！」はるかに話し、
はるかは、
「それでは、私は、これで行きますね！」
シートから立ち上がり、木嶋に手を振りながら、階段を、
「カッ、カッ、カッ」
音を立てながら降りていく。
木嶋は、
「フー」と息を吐いた。
「何か…自分の行動パターンを読まれているかな?」一人で呟いた。
「じゃあ。自分も帰るか！」
リュックと会計伝票を持ち、階段を降りていく。
会計を終えた木嶋は、
「ホッ…と」した表情を浮かべながら、
～♪君だけに…ただ…君だけ…ああ…巡り会うために…僕は…♪～
口ずさみながら、横浜駅の改札に向かって行く。
改札を通り、木嶋の地元に帰るため東海道線のホームに入っていた。
大急ぎで、飛び乗り
「プルー」
発車ベルが鳴り響く、横浜駅をあとをしたのだった。

第１７１話

木嶋を乗せた東海道線は、最寄り駅に着いた。
「短い時間だったが、充実していたかな？」
自画自賛をしながら、家までの距離を歩いていた。
家に帰宅してすぐに寝てしまった。
朝、布団から起きた木嶋は、眠い目を擦りながらカレンダーを見た。
やるせない気持ちになっていた。
「とうとう…はるかが、海外に出かける日になってしまった。今の自分に、何が出来るのだろう？」
ふと…考えて見た。
「そうだ…神社に行って祈願(きがん)しよう！」
寝間(ねまき)着から私服に着替えて…、
家から歩いて１０分ぐらいの距離にある神社に向かった。
この神社は、木嶋が、家族で二年参りするところである。
朝、早い時間だが、神社にお参りが出来るようになっていた。
≪チラチラ≫と駅に向かう人が歩いていた。
「お参りが出来るなんて、タイミングがいいな！」
我(われ)ながら…感心していた。
Ｇパンのポケットから、財布を取り出した。
「神社に来た時は、おさい銭を【ケチって】も意味がない！思い切って投げ入れよう！」
≪小銭よりも、お札がいいかな？≫
木嶋は、財布から１０００円札を賽銭箱(さいせんばこ)に入れた。
『ガラガラ』と鳴らし、柏手(かしわで)を打ち、一礼(いちれい)した。
「はるかが、無事に帰って来ますように…！」
木嶋は、心の奥からそう願っていた。
「今、はるかが、自分の目の前からいなくなったら…どうしよう

？ショックを受けて立ち直れないかも…いや、大丈夫だ！はるかなら、無事に帰って来てくれる！そう…信じるしかない！」

神社の境内から出ていく！

空を見上げると、雲が少しあるが、晴れ渡っていた。

「一週間、どうやって過ごそうかな？はるかといるのが当たり前になっていたから、一人で時間の潰し方を忘れてしまった！」木嶋は呟いていた。

～♪何もないこの部屋で　夜が明けるまで　仲間たちと話したねあの日♪～

この歌の歌詞にあるように、一瞬、走馬灯のように、思い出が湧き出ていく。「ヤバイ…思い出を探し出すようじゃダメだ！」

少し、心のバランスが崩れている証拠であった。

「こりゃー…重症だ！」どこかに、木嶋が休める寄りどころを探し求めていた。

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。

携帯画面を覗くと、はるかからである。

木嶋が、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが…」

「私、はるかです。木嶋さん、昨日は、ありがとうございました。お小遣いを貰えて嬉しかったです。今、どちらですか？」はるかが、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「今、地元にいて、神社に願掛けをしていました！」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「何を、願掛けをしていたのですか？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「何をしていたのかは…秘密です！」はるかに伝えたのだ。

「教えてくれても、いいじゃないですか？」はるかは、木嶋に甘

える声で、再度、尋ねていた。
「自分のことですよ！いい人に、巡り会えますように…」木嶋は、はるかへ想いが伝われば…と、祈るように話していた。
「そうですよね！木嶋さんもいい年齢ですから、そろそろ考えないといけませんよね！」はるかは思わせながら、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「そうだね。そろそろ考えないと…。自分と釣り合う人がいれば良いのにね。こればかりは、縁(えん)だよね。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「縁…か！私と木嶋さんとの出会いも、確かに言われて見ればそうですね。」木嶋の話しに同意をしたのだった。
はるかは、話しを続けた…
「木嶋さん、これから自宅を出ます。成田空港に着いたら、電話が出来なくなります。帰国するまで連絡先を変えないようにね。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。気をつけて…行ってらっしゃい！」はるかに話したのだ。
「ありがとうございます。行って来ます。」木嶋に話し、はるかは電話を切ったのだ。
木嶋は、はるかとの会話を終えて、心に落ち着きを取り戻していたのである。

第１７２話

最寄り駅の自由通路を通り過ぎ、駅ビルの中にある『有隣堂』に行く。

普段から【マンガ本】を読み慣れているが、元プロ野球選手が出版した本や政治家が書いた本などを読みたいと思う機会があるのだ。

エスカレーターで、６Ｆフロアに上がって行く。

このフロア全体が、本売場であり、広いので、探すだけでも、一苦労である。

各コーナーには、どのジャンルになっているか、分かるように表示をされている。

木嶋は、スポーツコーナーに向かった。

現役を引退したばかりのプロ野球選手や、大リーグで活躍している、【イチロー選手】の書いた本はたくさんあったのだ。

木嶋は、何を読もうか？迷っていた。

小学生の頃の夢は、プロ野球中継が毎日のようにやっていて、《プロ野球選手》になりたいと思った時期もあり、家の近くにある『バッティングセンター』へ、

【木製バット】を持ちながら通った時もあった。

それが、いつしか《バスの運転手》や《マラソン選手》になりたいと思っていた。

【何故？《バスの運転手》になりたかったのだろう？】と考えてみた。

いつも、同じ時間で、同じルートを走行すれば良いと安直な考えがあったのだ。

《マラソン選手》になりたいと感じたのは、日本の男子マラソン選手たちが、オリンピックなどでメダルを獲得出来ないときだったので、《マラソン選手》なら可能性があるのだと考えていたのだ。

それが、いつの間にか、自動車関係の会社に勤務しているのだか

ら、人生は判らない。
その書籍を気に入れば購入して、家で寝る前に、枕元で読むのだ。
木嶋が、有隣堂に来てから、もう、1時間が経過していた。
「今、何時かな?」
左腕にしている腕時計で時間を見た。
「午後5時か…!もうすぐ、はるかが旅立つ時間!成田空港の方を見つめよう。」
6Fフロアからエスカレーターを使って、1Fに降りて行く。
バスターミナル近くで、空を見上げていた。
「この空の向こうに、はるかさんが、ハワイへ行くのか?切ないな!」木嶋の弱気な虫が、一瞬、出てきてしまった。
「仕方ない。麻美さんに電話でもするかな?」
木嶋は、携帯を取り出し、メモリーダイヤルから麻美の携帯履歴を探し、発信した。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。
「もしもし、麻美です。お久しぶり~。」
麻美が電話に出た。
「木嶋です。お久しぶり。最近、連絡していなかったから声を聞きたくて…電話しました。」木嶋は、麻美に伝えたのだ。
麻美は、嬉しそうな声で、
「ありがとうございます。木嶋君、何かあったんじゃないの?」
木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「別に…何もないよ!」少し、『ドキッ』としていた。
麻美は、木嶋の行動パターンを先読みしていた。
やはり、同じ年代は、相通じるものである。
麻美は、
「はるかさんと、喧嘩でもしたの?」木嶋に聞いていた。
木嶋は
「はるかさんと、喧嘩したのではありません。先ほど、ハワイへ

卒業旅行に出かけたよ！」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「そうなの？はるかさんが旅行に出かけたから、淋しくて私に、電話したの？」木嶋を思いやるように話しをしていた。
木嶋は、
「そうじゃあないよ。麻美さんや子供のことで…最近、どうなのかな？と思ってね！」麻美に話したのだ。
「心配してくれてありがとう…。子供は元気ですよ！」麻美は、木嶋に話しつつ、
「木嶋君、明日！予定が空いていますか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「明日は、何も…予定は入っていないよ。何か…あったの？」麻美に尋ねた。
麻美は、
「バレンタインデーも近いので、チョコレートを渡したいので、時間を決めたいのですが…何時ぐらいが良いですか？」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。明日なら…午前中がいいかな？午後は、家でゆっくりしたいので…。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「分かりました。後（あと）で、時間と場所の連絡を、メールで送信します。それで、いいですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「それで、お願いします。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「それでは、後ほど…。」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。
木嶋は、
「明日か…！」
小声（こごえ）で呟いたのだ。

第１７３話

木嶋が、麻美と会話を終えてから、２時間が経過していた。
すると…1通のメールが、木嶋の携帯に届いていた。
「誰だろう…？」
携帯のメール受信ボックスから、新しいメールをスクロールした。
「麻美さんからだ…。」
メールを読み始めた。
「木嶋君、先ほどは、電話を頂き、ありがとうございました。明日のことですが、東神奈川にあります…【Ｄｅｎｎｙ’ｓ】に午前１１時に待ち合わせしませんか？麻美より」
木嶋は、
「東神奈川の【Ｄｅｎｎｙ’ｓ】に午前１１時か…はるかは、海外でいないし、大丈夫だ。」呟きながら…
「麻美さん、了解しました。」すかさず、麻美にメールを返信したのだった。
麻美から、
「木嶋君。私の提案に賛同して頂き、ありがとうございます。明日を楽しみにしています！」木嶋にメールを返信した。
木嶋は、いつもと違う…期待感が胸の中に去来（きょらい）していた。
「明日は、車で、東神奈川の【Ｄｅｎｎｙ’ｓ】に行こう！はるかが、海外に出かけている時に、《麻美さんに会いました。》なんて話しをしたら…怒るだろうな！このことは、【シークレット】にした方がいいかな！」木嶋の胸の奥にしまうことを決意したのだ。
～不安な夢を見ていても仕方ない～
開き直るしかないのだ。
自宅に戻った木嶋は、
「いくら…麻美さんと親しくしていると言っても…手ぶらで行くのも悪い気がする。何か…良い策はないのだろうか？」思案をして

いた。
「麻美さん＝映画…それしか思い浮かばない！映画のチケットを探しに行こう！」
木嶋は、思い立ちすぐに行動に写した。
最寄り駅の自由通路を通り抜け、私鉄の近くにあるチケットショップ『W』の前で立ち止まった。
「映画のチケット…チケット…映画の単独のチケットはあるが、ワーナーマイカルのチケットは、いざ、探す時は見つからない！ないのかも知れない！」
木嶋は、探しても見つからず…少しばかり、焦りの色が見えてきた。
「チケットショップ『W』にない。
他を当たろう！」
地下街にあるチケットショップ『I』に歩みを始めた。
階段を、
「ズッ、ズッ、ズッ」と一段ずつ降りていく。
エスカレーターが設置されていないので、不便さを感じながらも、これが日常だと思うのだ。
階段を降りた右手には、ファーストフード『M』があった。
《以前は、この店は混んでいたのに、空(す)いているな！以前と比べたら、人通りが少ないかな？》
客観的な見方をすれば、そうなるのであった。
木嶋の友人に、小湊(こみなと)さんがいるのだ。
小湊さんとは、夜間高校の同級生、三石さんの紹介であった。
一年に一回、東京競馬場に行くのが日課になっていた。
木嶋も、それが楽しみでもある。
Gパンのポケットから携帯を取り出し、久しぶりに、小湊さんに電話をかけた。
「プルー、プルー、プルー」呼び出している。
小湊さんが電話に出た。

「もしもし、小湊ですが…。」

「小湊さん、久しぶり。チョット…教えてほしいことがあるんだ！」木嶋は、小湊さんに問いかけたのだ。

「何でしょう？自分で判ることは…答えますけど…」小湊さんは、木嶋に聞いたのだ。

木嶋は、

「以前…ファーストフード『M』で働いていたよね？」小湊さんに話したのだ。

「働いていましたが…それが…何か…？」小湊さんは、木嶋に答えたのだ。

「今、ファーストフード『M』の横を通ったのですが…夕方だと言うのに、店内がガラガラ空いていたよ！」木嶋は、小湊さんに感じたことを伝えていた。

小湊さんは、

「そうでしょうね。自分も、最近、ファーストフード『M』の横を通りましたが、そう感じていましたよ。売れていない可能性がありますね！」木嶋へ踵（きびす）を返したのであった。

「木嶋さんは、今、どちらにいますか？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「今は、地下街にあるチケットショップ『I』に向かっています！」小湊さんに話したのだ。

小湊さんは、

「チケットショップ『I』ですか…？たまには、いいですね？最近、自分は、チケットショップに行っていないので、この機会に、行こうかなと、考えていますよ。」木嶋に、そう答えていたのだった。

第１７４話

木嶋は、
「それがいいよ！」小湊さんに話し、続けて
「今度、いつ会おうか？」と尋ねた。
「そうですね…。現時点で、５月末以外で探すとなると難しいかも知れません！他の予定もあり、確認をしないといけないので、一週間、時間を下さい。」小湊さんは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。電話やメール、どちらでも良いので、回答をお待ちしています！」小湊さんに話し、電話を切ったのだ。
木嶋は、ふとしたことから、考え込む時がある。
日常生活の中で、若い女性社員の人たちとの交流がなく、時には、息が詰まりそうになる。
いつも、年配の人に頼なければならない…
【自分が不甲斐ないと…。】
小湊さんとは、話しが合うので、お互い様なのかも知れないのだ！
歩いている内に、地下街にあるチケットショップ『Ｉ』の前に着いた。
ここは、角にあるため、場所が解りやすい。
人も多くいる。
ショップから隣りのビルに繋がっていて、
日本で一番、短いエスカレーター【プチカレーター】が稼働している。
その奥の地下２Ｆフロアには、スーパーマーケット、八百屋、ラーメン屋など数多く、点在していて、
木嶋も、良く利用している。
チケットショップで、ワーナーの映画チケットを探していた。
「ワーナーのチケット…チケット…あった。」

少し興奮気味であった。
木嶋には、珍しく声が上ずっていた。
金額を見ると、手頃な価格である。
「ワーナーのチケットを、2枚購入しよう！」
「今、並んでいる人たちは…1．2．…3人なら時間は、掛からないはず…」
木嶋は、並んでいる人たちの人数を数えながら、最後尾に並んでいた。
順番が来るまで、時間に余裕があるので、携帯を右手に持ち、携帯サイトにあるゲームに没頭しようとしていた。
《短時間で出来るゲームがあるの…だろうか?》疑心暗鬼になりながらも、探しつつ…
気長に待っていた。
「待ってからどれくらいなのだろう?」
腕時計を見ると…5分の経過である。
「まだ、それくらいしか経っていないのか?」
待つ時間が長く感じるためボヤきたくなるものだ。
ようやく、木嶋の順番になったので、右手に持っていた携帯を…Gパンのポケットに入れたのだ。
女性店員さんが、
「いらっしゃいませ…どれをお買い求めでしょうか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「ワーナーの映画チケットを…2枚…購入したいのですが…。」
女性店員さんに伝えた。
女性店員さんは、
「ワーナーの映画チケットを、2枚ですね！畏まりました。少し、お待ち下さい。」木嶋に答えていた。
手慣れた手つきで、チケットを取り扱っている。
その様子を、目で追っていた木嶋は、感心しながらも、財布を取

り出した。
「いくらになりますか?」木嶋が、女性店員さんに問いかけていた。
「合計で…２０００円になります。」女性店員さんが、木嶋に答えていた。
財布から、１０００円札を、２枚取り出した。
「いや…待てよ!２枚より４枚にした方がいいかも知れない!」
一瞬…迷いが出ている。
木嶋は、たまに…優柔不断な面が出ていた。
スパッ…と、決断する時はするが、
迷い始めると、どうして良いか分からないのだ。
今は、最善な判断を下さないといけない。
木嶋は、
「あっ…すいません。ワーナーの映画チケット…４枚にして下さい!」女性店員さんに伝えたのだ。
女性店員さんは、
「４枚ですね!畏まりました。金額は変わりまして、４０００円になります。」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、財布から１０００円札を2枚取り出し、女性店員さんに、お金を支払いをしていた。
女性店員さんから、
【ワーナーの映画チケット】を受け取り、
チケットショップ『I』をあとにした。
軽快なステップで、木嶋は歩いていた。

第175話

木嶋が、地下街からエスカレーターに乗り、最寄り駅の自由通路に出た。

家に戻る道の途中で、携帯を取り出すと、電話の着信を知らせるランプが点滅(てんめつ)していた。

「誰かな…？」

恐る恐る携帯の着信画面を覗くと、はるかからであった。

時刻は、夕方5時30分頃であった。

「この時間は、搭乗手続きしているときかな？」木嶋は、疑問心(ぎもん)を抱(いだ)いていた。

「はるかは、成田空港で、自分に電話をしている余裕はないと言っていたはずなのに…？帰国したら聞いてみよう。明日は、同年代の麻美と久しぶりにデート気分を味わえる…」心(こころ)は、曇り空のち晴れやかな気持ちになっていた。

家に、戻ってきても、高ぶる興奮を抑え切れずにいた。

木嶋が、こんな状況になるのは珍しい。

「チョット…ヤバイ！はるかとデートの時は、心臓が《バクバク》するだけなのに…何故だろう？」やはり不安になる。

【明日になれば、緊張も解(ほぐ)れるのだろうか？】

木嶋は、そう思っていた。

「今…午後7時か…！土曜日でも、時間を持て余しているから、ゲームをやろうかな？」

部屋に戻り、ゲーム機を持ち出した。

「ゲームソフトは、《競馬の育成シュミレーションにしようか？》、それとも《野球のゲームにしようか？》悩むな…どれにしようか？」

頭のコンピューターは、《野球のゲーム》を選択した。

木嶋は、野球のゲームを取り出し、ゲーム機に差し込んだ。

《競馬の育成シュミレーション》も捨て難いが、終わりが見えずらい。
野球のゲームなら、そんなに時間が掛からずに終わるのだ。
木嶋が、ゲームに没頭すると、1．2時間は、経過していく。
今から飲みに行っても、お金を使うだけである。
木嶋は、いつも横浜や関内で、富高さん、三谷さんたちと飲む機会が多い。
地元で飲むには、何処にすればいいのか？考え悩んでしまう。
夜間高校の同級生や後輩に、携帯に連絡をして、
「今から飲もうよ！」と気軽に話しをすれば、
すぐに、行動出来る仲間はいるが、時間的なロスを考慮すると躊躇してしまう。
行きつけのクラブ『H』は、はるかが、いないので意味がない。
抜け殻になっている自分がいると思うと、怖くて行くのを、戸惑ってしまう。
クラブ『O』に、玲が…
クラブ『U』に、麻美たちがいるが…
仲が良くても、一人では行きにくいものである。
富高さん、三谷さん、小室さんたちも、いずれは、定年を迎える日が来る。
その人たちに、頼るばかりでは、人は進歩しないのだ。
麻美が、木嶋に、警告しているが、はるかへの依存度が高すぎるのも、考えなくてはならない。
野球のゲームを終えた木嶋は、夕ご飯を食べながら、明日（日曜日）の話題を探していた。
東京新聞を広げ、読み更けていた。
「新聞も、この時期は、大きなニュースはないのかな？」
2月は、プロ野球も、キャンプ中である。日本の国技である大相撲も、初場所が終わったばかりである。
木嶋の地元には、相撲部屋がある。

相撲部屋と言うと…

『チャンコ鍋』、『鉄砲』、『シコ』が有名である。

寒い冬の時期に行っている、【忘年会】や【新年会】は、温かい鍋を食べるのと身体が温まる。

一度で良いから、相撲部屋で作っている…『チャンコ鍋』を、目で追いながら、レシピをメモすれば、自宅でも作れるのでは…そう感じている。

最近は、相撲部屋にも、他のスポーツ選手たちが、トレーニングに訪れているのが、ニュースになっている。

あとは、相撲部屋の親方が頑張って、角界を盛り上げている。

若い親方さんたちが、レベルアップしないと、外国人力士の天下（てんかしないように、毅然とした態度を持たないといけないことなのである。

第176話

木嶋は、時間も、夜11時を回ったので、布団の中に入り、眠りについた。

翌朝になり、布団から出るのも辛いくらいに…寒さが身に染みる。

炬燵の電気のスイッチを入れ、家の中にある掛時計を見た。

「朝の7時か…それにしても、寒いな…何度あるのかな？」

バルコニーにある…温度計を見ると、

「18℃か…寒いはずだ。」

部屋に戻り、《ストーブ》に火を点けた…。

木嶋は、部屋が暖まるまで、炬燵の中に入った。

時間が経つにつれ、部屋全体が温まり出した。

木嶋は、前日、スーパーで購入した惣菜を冷蔵庫から缶コーヒーと一緒を出したのだ。

いつもなら、母や姉が食事の支度をしてくれるが…、

この日は、前日から田舎で予定があり、父を含めて、3人で出掛けてしまい、

木嶋だけが留守番である。

普段、家族…4人で生活するスタイルに慣れてしまっているので、

一人で、【ポツン】と家にいると、時間の経過して行くスピードが、凄く長く感じるのだ。

木嶋と父、母は、毎朝、白いご飯を食べないと、パワーが出ない。

木嶋は、仕事をする前に、

《おにぎり》を食べないと、昼食まで、お腹が持たないのである。

食パンも嫌いではないが、長期の休みの時ぐらいである。

木嶋の姉は、パンが好きである。

どちらかと言うと…白いご飯が苦手で、明太子や納豆と一緒に食べるのだ。

「まだ時間に、余裕がある。テレビでも見よう！」

木嶋は、炬燵の上に置いてあった『リモコン』を右手に持ち、電源を入れた。
日曜日と言うのに…朝は、情報番組が多い。
民放各局が凌ぎを削りながら、視聴率争いをしている。
木嶋は、日本テレビの情報番組を好んで見ている。
ここ最近は、フジテレビの後塵を　拝している。
眠い目を擦り、冷蔵庫から出した、缶コーヒーのプルタブを開け、マグカップに移し、電子レンジで温めていた。
すると、木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」鳴り出した。
携帯を手に取ろうとしたとき、呼び出し音が鳴り止んでしまった。
「誰かな？こんな時間に…」
木嶋が、携帯を覗くと、《国際電話の着信であった。》
「国際電話か…はるかかな？」そう感じ取ったのだ。
ハワイとの時差は、どれくらいあるのかは、木嶋には判らない。
「日本時間を計算して、電話をして来たかも知れないな！」
木嶋は、喜びを表現したいが、
「麻美と会うから、喜びより罪悪感の方が先だな！」はるかに、申し訳ない気持ちになっていた。
「また、必要なら…はるかから電話が来るかな？」
【フー】と、ため息をつきながら、気持ちを落ち着かせていた。
～♪胸が張り裂けそうだよ…ペースが乱されて…一秒刻みで…♪～
今の木嶋の胸中である。
着替えを終え、車の駐車場に向かった。
家から徒歩１０分ぐらいのところに、駐車場があるので、運行前点検をして、異常があれば、近くにトヨタの営業所があるので、連絡がしやすいのである。
車のキーを、スタートスイッチに差し込んだ。
エンジンが掛かり、《コラムギア》をバックに入れ、ミラーで通行人を避けながらバックして行く。

最初は、コラムギアに慣れず、ギアとワイパーを間違えてしまうことが多かった。

冬の寒さで、エンジンの回転数が低いままでは走行することは難しい。

足元が寒いので、ヒーターを入れたいが、一定の回転数に上がるまで、我慢をするしかないのだ。

エンジンの回転数が上がり始めたので、木嶋は、車を走らせた。

待ち合わせ場所は、

「Ｄｅｎｎｙ’ｓか？」

少し、自嘲気味（じちょうぎみ）になっている自分に気が付いていた。

第177話

木嶋は、車を走らせ、目の前の道路から大きな交差点を左折、国道1号線に出た。
赤信号だったので停車した。
「今日は、誰の曲を聴こうかな?」
思案しながら、車専用カバンからCDを探していた。
気がつくと…信号が変わった。
後ろの車が、
《プー》と、軽くクラクションを鳴らし、
木嶋は、慌(あわ)てて車を走らせた。
500メートル走ったところで再び、赤信号で止まった。
カバンから、CDを取り出し、
「このアーティストにしよう?」
カーオーディオに挿入した。
選曲したアーティストは、《宇多田ヒカル》であった。
木嶋は、好んで聴いていて、
今を【ときめく】注目のアーティストだ。
「今、世の中は、不景気に喘(あえ)いでいる。歌は、世相(せそう)を反映(はんえい)するから、《アップテンポ》の明るい曲がいい。」
《一発屋アーティスト》と、《コンスタントに売れているアーティスト》と二分(にぶ)されている。
コンスタントに売れているアーティストでも、入れ代わりが激しい音楽界の中で、長く活躍するのも、大変な重労働(じゅうろうどう)だと思う。
若い頃は、勢いで流れに乗ることが出来る。
年齢を重ねるに連れて、円熟期(えんじゅくき)を迎える。
野球、サッカー、ラグビー、相撲、マラソンなど…スポーツの世界、政治家…どの業界にいる人でも、経験することだ。
会社に勤務している木嶋は、

『自分がいつ？』
『その時が来るのか？』判らずにいた。
若い頃は、人気があった時もある。
それは、一過性（いっかせい）のものと気がつけば良かった。
一過性と思わずに…
【自分は、モテるんだ…。】
勘違いと言うより、思い上がりに過ぎなかったのだ。
【それが、バブルの絶頂期…】
重ね合わすと同じである。
信号が青に変わり、車を走らせ、宇多田ヒカルの曲にリズムを合わせ、手を叩きながら聴いていた。
木嶋は、
『Ｄｅｎｎｙ、ｓ』に急ぐのであった。
「今、鶴見近辺か…大体（だいたい）、１５分もあれば着くかな？」
木嶋は、車の時計を見ながら、到着時間の予想をしていた。
「今日は、道路も空いているし…自分の計算より早いかも知れない！」そう感じていた。
新子安を通り過ぎ、もうすぐ、東神奈川を通るところであった。
待ち合わせ場所の
『Ｄｅｎｎｙ、ｓ』に着いた。
木嶋が、予想した時間より５分ぐらい早く到着したのだ。
「車の中で待っているのも疲れるから…先に入っていよう。」
エンジンを止め、キーを抜き取り、ドアを開けて降り、ロックをして車から離れたのだ。
「カッ、カッ、カッ」
階段を上がって行く。
店のドアを開けた。
【ガラン】鈴（すず）が店内に響く。
女性店員さんが、
「いらっしゃいませ！お一人様でしょうか？」木嶋に声を掛けた。

木嶋は、
「後から、2名来るので、3名でお願いします！」女性店員さんに伝えた。
「畏(かしこ)まりました。ご案内を致します！」
女性店員さんのあとを、木嶋は、ついて行く。
「こちらで、よろしいでしょうか？」
女性店員さんは、店の中央のテーブルに木嶋を案内した。
木嶋は、
「ＯＫです。」女性店員さんに答えたのだ。
「こちらは、メニューです！」女性店員さんは、木嶋に渡し、続けて
「決まりましたら、ボタンを押して下さい！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、メニューを、
《パラパラ》とめくりながら、麻美にメールしようとした瞬間…
右手に持っていた携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」と鳴り出した。
この着信音は、麻美であった。
木嶋が、電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「麻美です。今、『Ｄｅｎｙ、ｓ』に着きました。木嶋君は、どちらにいますか？」麻美は、木嶋に聞いたのだ。
木嶋は、
「先ほど、ここに着いて、メニューを見ながら、座席に座っていますよ。麻美さんが、店内に入れば、すぐに分かりますよ。」麻美に伝えたのだ。
「分かりました。今からそちらに行きます。」木嶋に話し、電話を切ったのだ。
木嶋は、麻美が来るのを、首を長くして待っていた。
【ガラン】ドアが開いた。
木嶋は、振り返ると、麻美が子供を連れていた。　麻美が、右

手を上げている、木嶋に気がついたのであった。

第178話

麻美は、メニューで、姿(すがた)を隠していた木嶋のテーブルに、子供を連れて向かって行く。

「コッ、コッ、コッ」

乾いた靴の音が店内に響く。

木嶋は、子煩悩(こぼんのう)な方ではない。

結婚すれば、子供と接する時間が増えるが、子育てが苦手な人でも、協力して行く。

「どうすれば子供と接することが出来るのか?」木嶋は、分からずにいた。

「はるかは、小さい子供が好きだ」

木嶋は、麻美の子供を見ながら、ハワイにいる…はるかとの結婚生活を空想(くうそう)していた。

麻美が、

「木嶋君、おはよう。待ちくたびれかな?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「自分は、先ほど、来たばかりだよ!」麻美に伝えたのだ。

「良かった。車を運転していて…木嶋君のことが、気になって仕方なかったんだから…!」麻美は、木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「自分のことを、気にしていたら、事故を起こすよ!」笑いながら、麻美に答えたのだ。

麻美は、

「そうだね!」と、言いながら笑い返していた。　女性店員さんが、

「いらっしゃいませ!」麻美に、声を掛けながらメニューを渡したのだ。

「木嶋君、私たちが来る前に、メニューを見ていたけど何にする

か…決まったの？」麻美が、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「メニューを見ながら、悩んでいるよ！」麻美に答えていた。
「私は、昼時だから、子供と一緒に食べようかなと思っていますよ！」麻美は、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そうだよね！軽く…食べようかと思っていたから、麻美さんの言葉で、吹っ切れたよ！《ミートソースのドリンクセット》にしようかな？」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「木嶋君が、ミートソースなら…私は、《蟹雑炊のドリンクセット》にしようかな？デザートは…バニラアイスを２ツにしましょう…」
続けて
「木嶋君は、デザートをオーダーしないの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「じゃあ…自分も、バニラアイスをオーダーしよう！それと、フライドポテトも一緒に…！３人で食べれるでしょ…」
麻美に話したのだ。
これが…木嶋流の気遣いである。
普段から、はるかと一緒にいる時間が長いこともあり、周りに気遣うことの大切さを、いつの間にか教わっていた。
それだけ、木嶋には、はるかがいないと、ダメになってしまうのだ。
テーブルの角にあったボタンを押した！
「ピンポン」
音が、店内に鳴り響いていた。
女性店員さんが、木嶋の元に、駆け付けたのだ！
「ご注文をお伺いいたします！」
木嶋は、すかさず麻美からオーダーするように、右手を促した。

麻美は、サインを見逃さずに…

「蟹雑炊のドリンクセットで、飲み物は、ホットの烏龍茶(うーろんちゃ)を2ツ、単品で、バニラアイスを2ツでお願いします！」女性店員さんに伝え、続けて、

「ミートソースのドリンクセットで、飲み物は、ホットコーヒー。それと、単品で、フライドポテトとバニラアイスでお願いします。」

木嶋は、女性店員さんに話したのだ。

女性店員さんは、

「フライドポテトに、ケチャップは、お付けしますか？」木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「麻美さん、ポテトに、ケチャップを使いますか？」麻美に聞いていた。

麻美は、

「私は…いらない。もし、木嶋君が、使うなら貰った方がいいと思います。」木嶋に決断を促した。

木嶋は、

「ケチャップを下さい。」女性店員さんに、伝えたのだ。

「分かりました。ポテトに、ケチャップをお持ちします。」丁寧な口調で、木嶋に答えたのだ。

「ご注文を繰り返します。ミートソースのドリンクセット、蟹雑炊のドリンクセット、飲み物は、ホットの烏龍茶を2ツ、ホットコーヒーを1ツ、単品で、バニラアイスを3ツ。以上で宜しいでしょうか？」女性店員さんは、木嶋と麻美に確認した。

木嶋が、

「ＯＫです。」と伝えると、

女性店員さんは、

「畏まりました。少々、お待ち下さいませ！」と、木嶋に話し、メニューを下げて離れて行ったのだ…。

第179話

木嶋が、
「麻美さん、以前、子供の名前って、聞いたことがあるかな?」
麻美に聞いたのだ。
麻美は、
「木嶋君に、一度、話したことがあったと思いますが…もう一度、教えます。玲奈(れいな)って言います。」木嶋に話したのだ。
「玲奈です。」木嶋に、会釈(えしゃく)した。
「玲奈ちゃんね。よろしく!」木嶋は、玲奈に頭を下げ挨拶(あいさつ)したのだ。
玲奈は、
「お兄ちゃんの名前は…?」木嶋に聞いていた。
「賢(けん)って…呼んで!」玲奈に伝えたのだ。
「賢お兄ちゃん!」玲奈が、木嶋を呼んでいた。
木嶋は、照れていた。
小さい子供に、親しみを込めて、
「お兄ちゃん」と呼ばれたことなど数少ない。
両親の実家が、長野県にあり、帰省して親戚の家に出かけても、小さい子供がいない。
麻美は、
「木嶋君、そんなに照れなくてもいいじゃん!」木嶋にツッコミを入れた。
木嶋は、
「照れていないよ。ただ、どう対応したらいいか?分からないよ!」両手を、お手上げポーズをしていた。
「玲奈は、人見知りはするけど、普段と同じようにしていれば、慣れてくるから心配しないで…。」麻美が、木嶋に伝えた。
木嶋は、

「玲奈ちゃんも、人見知りするんだ?分かりました。普段通りにしているよ!」麻美に答えたのだ。

女性店員さんが、先ほどオーダーした商品を、テーブルに運んできた。

「お待たせしました。蟹雑炊のお客様。」女性店員さんが、木嶋に尋ねた。

木嶋は、右手を麻美の方に向けた。

女性店員さんは、蟹雑炊のお客様。」女性店員さんが、木嶋に尋ねた。

木嶋は、右手を麻美の方に向けた。

女性店員さんは、女性店員さんは、木嶋たちに伝え、伝票をテーブルの上にある円形筒(えんけいとう)に入れて離れようとしたとき、

麻美が、

「あっ…すいません!小さい器(うつわ)と、スプーンを下さい!」女性店員さんに頼んだのだ。

女性店員さんは、

「少々、お待ち下さい!」麻美の元から、離れて行った。

木嶋は、

「オーダーするときに、気がつけば良かった…配慮が足りず申し訳ない!」麻美に、頭を下げていた。

麻美は、

「私が、気がつかないといけないから…」

木嶋は、麻美の言葉に、

『ホッ…と』胸(むね)を撫(な)で下(お)ろしていた。

先ほどの女性店員さんが、麻美が依頼した、小さい器とスプーンを持ち、

「先ほどの小さい器とスプーンです。」麻美に手渡した。

麻美は、

「ありがとうございます。」

女性店員さんに伝えたのだ。

女性店員さんは、
「ごゆっくり…お召し上がり下さいませ！」麻美に伝えて、テーブルから離れて行った。
木嶋は、
「麻美さん、食べようか？」麻美に声を掛けた。
「そうしましょう。いただきます！」木嶋に話し、
玲奈も、
「いただきます！」言葉を返したのだ。
木嶋は、その姿を見ると、
「早く、家庭を持ちたい。」と、はるかとの【結婚願望】が強くなっていく…。
麻美が、蟹雑炊を掻き混ぜながら、小さな器で、玲奈が食べられる量を、少しずつ入れていた。
木嶋は、粉チーズをかけてたのだ。
「木嶋君。タバスコは…かけないの？」麻美が、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「自分は、タバスコは…かけないよ…。」麻美に伝えたのだ。
「そうなんだ。」麻美は、木嶋に答えたのだ。
木嶋は、麺を掻き混ぜながら、食べ始めた。
麻美は、
《フー、フー》
息をかけながら、玲奈にスプーンで食べさせていた。
木嶋は、
「自分にも、玲奈ちゃんぐらいの子供がいても、可笑(おか)しくないよね？」麻美に問いかけていた。
麻美は、
「そうだね！木嶋君と私と同じ年代だよね。」頷きながら、木嶋の問いかけに答えたのだった。

第１８０話

木嶋は、ミートソースを麺に絡め…
「フー」と息をかけ、フォークで巻きながら、食べはじめた。
会社や家でも、パスタは嫌いではない。
最近は、食べる機会がないと言った方がいいのかも知れない。
朝、仕事に行くときに、パスタを食べることは有り得ないのだ。
食べるとすれば、休日ぐらいである。
今は、コンビニで手軽に買える商品になっている。
麻美は、蟹雑炊を小分けした器入れ、玲奈に一口、食べさせていた。
「玲奈…口を開けて。」
玲奈は、小さい口を広げ食べていた。
その表情を見ると、満足そうな顔であった。
この仕草を見ると、
２人は…
『親子だな！』と感じるのであった。　木嶋は、
「麻美さん、ポテトが冷めてしまいますよ！」麻美に声を掛けたのだ。
麻美は、
「あっ…そうだね。ありがとう。」
目の前にある…フライドポテトを食べていた。
「麻美さん、ケチャップを使わないの？」木嶋が、麻美に尋ねていた。
麻美は、
「せっかく…あるのだから使わないと…ね！」右目で、ウィンクしながら、ケチャップ用にもらった…小さな容器に入れたのだ。
フライドポテトを、【ポーションケチャップ】に、つけて食べることは、今までなかったのだ！

これも、はるかと付き合い始めてからである。
ポテトには、軽く…塩が振ってあるため、
木嶋は、いつもと同じように、使わずに食べていた。
麻美も、最初は、塩味のまま…食べていたが、ポーションケチャップをつけ始めた。
玲奈に、ポーションケチャップをつけたポテトを、2本、口に入れていた。
「ママ…美味しい。」玲奈が、麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「賢お兄ちゃんに、感謝しないといけないよ!」玲奈に話していた。
玲奈は、頷きながら、
「賢お兄ちゃん、ありがとう!」木嶋に、感謝の言葉を述べていた。
木嶋は、
「玲奈も、ありがとう!」玲奈に、言葉を返したのだ。
麻美も、蟹雑炊を食べながら、玲奈に食べさせていた。
木嶋は、
「麻美さん、店で見ている姿とは違うね!玲奈ちゃんの前だと、完全に母親に成り切っているよ!」麻美に話したのだ。
麻美は、
「自分の子供だからね。木嶋君が、はるかさんに甘えているように…店にいるときは、男性に甘えたいのが本音!」木嶋に答えていた。
「やっぱり…そうなるのかな?」木嶋は、納得した表情を見せていた。
玲奈が、
「賢お兄ちゃん。アイスが食べた〜い!」木嶋に伝えていた。
木嶋は、
「OK。オーダーしようか?麻美さんも、いいのかな?」麻美に

問いかけていた。
麻美は、
「ＯＫです。」木嶋に伝え、
木嶋は、テーブルの横にある、ボタンを押そうとしたとき、
「玲奈が、押したい。」木嶋に、意思表示をしていた。
「意欲的だな！」
木嶋は、玲奈の思いを感じ取り、ボタンを玲奈の手が届くように、
「木嶋君いいの？」麻美が、木嶋に確認した。
木嶋は、
「いいよ！」とＯＫサインを出した。
玲奈が、ボタンを押した。
「ピンポン」
店内に、テーブルナンバーが表示された。
女性店員さんが、木嶋のテーブルに来た。
「ご注文をお伺いします！」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「デザートのバニラアイスをお願いします。」女性店員さんに、
頼んだのだ。
女性店員さんは、
「畏まりました。バニラアイスをお持ちします！」木嶋の元を離
れて行った。
麻美が、
「木嶋君。バレンタインプレゼント」
東急ハンズの袋を、木嶋に手渡した。
木嶋は、
「ありがとうございます。」麻美にお礼を述べた。
麻美は、
「これは、富高さんに渡して下さい！」
木嶋に渡した同じラッピングであった。
「麻美さんから、貰えるなんて…考えていなかったから嬉しいよ

！」木嶋は、笑顔で麻美に話したのであった。

麻美は、

「いつも、木嶋君や富高さんに、お世話になっているからね！」

木嶋に伝えた。

木嶋は、

「それを言うなら、自分ですよ！」謙遜（けんそん）しながら、麻美に答えていた。

第１８１話

「本当なら、来週、店で、バレンタインのイベントがあり、その時に渡せばいいかなと考えていたのですが…木嶋君に、予定があるから…今日が一番良い日かなと思っていましたよ！」麻美は、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「そうだね。自分としては、こうして、《プライベート》で会えるのが一番いいよ。はるか、玲、麻美さんの何処（どこ）の店に行っても、コストが高いからね！」麻美に話したのだ。

麻美は、

「そうだね！木嶋君の言われて通りです。頻繁（ひんぱん）に、飲み歩くことは出来ないよね。私も、営業活動しないと、立場（たちば）が弱いから、店長に、イヤミを言われるからね！近いうちに、自分のお店を出す予定？」木嶋に答えたのだ。

「麻美さんの、店を出す話しは、以前から聞いているよ！いつになれば実現するのだろう…と思っている！出来ることなら…はるかや玲が同じ店にいれば、麻美さんが、全員のお目付け役になるのにね…！」木嶋の本音を、麻美に話していた。

木嶋の思いを聞いた麻美は、

「そうなった時は、よろしくね！」木嶋に、自信満々（じしんまんまん）に答えていた。

女性店員さんが、先ほどオーダーしたバニラアイスを運んで来た。

「お待たせしました。バニラアイスです！」木嶋、麻美、玲奈の順番で置いて行く。

「こちらで以上です！」木嶋に声をかけ、

木嶋は、

「ありがとうございます！」女性店員さんに伝えたのだ。

女性店員さんは、木嶋のテーブルを離れて行く。

玲奈が、
「ママ。玲奈にバニラアイスを食べさせて…」
麻美に、
【オネダリ】をしていた。
「じゃあ！玲奈、お口を開けてね！はい。アーンして…」
麻美は、スプーンで、すくったバニラアイスを、玲奈の口を入れた。
玲奈は、
「おいしい！」小さな頬っぺたを、大きく広げたのだ。
木嶋は、自分の手元にあるバニラアイスを食べていた。
すると…玲奈が、
「賢お兄ちゃん。玲奈に食べさせて…」
木嶋に、
【オネダリ】をしていた。
木嶋は、
「ママに…聞いてみて。ママが、ＯＫしてくれないと…どうすることも出来ないよ！」玲奈に話していた。
玲奈は、
「ママ。賢お兄ちゃんに、お願いしてもいいかな？」麻美に尋ねていた。
麻美は、
「賢お兄ちゃんが、ＯＫならいいならいいよ！」玲奈に伝えたのだ。
木嶋は、
「自分ならＯＫですよ。あとは、麻美さん次第。」麻美に一任したのだ。
麻美は、
「木嶋君。玲奈は、一度、ワガママ言い出したらキリがなくて…ここは、ヘルプして…？」木嶋に、そう話すしかなかった。
木嶋は、

「麻美さんの頼みを、断る理由もない！いいよ！」麻美伝えたのだ。
木嶋は、麻美の目の前にあるバニラアイスを、
玲奈に、一口食べさせていた。
玲奈は、満足げに微笑んでいた。
「玲奈に、甘えさせることが出来るなんて、思いもしなかったのだ」
木嶋は、嬉しく思っていた。
「木嶋君、良かったね！」麻美が、木嶋を褒めていた。
「玲奈に、好かれたのかな！」麻美に尋ねた！
麻美は、
「そうかもね！先ほど、富高君のバレンタインを、木嶋君に預けたので、渡して下さい！」木嶋に頼んでいた！
木嶋は、
「明日、富高さんに、会社で渡しますよ。渡したら連絡をします！」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「お願いします。」
ふと、木嶋は、時間を確認した。
午後1時を過ぎていた。
時間が経つのは、早い！
木嶋は、
「麻美さん、時間は、大丈夫なの？」麻美に聞いていた。
麻美は、
「そろそろ帰ろうかな！と思っています！」木嶋に伝え、
木嶋は、
「帰りましょうか！また、麻美さん、玲奈と会える日が来るようにね！玲奈ちゃん、今日は、ありがとうね！」麻美と玲奈に、お礼を述べていた。
麻美も、

「そうだね！玲奈も、木嶋君が好きみたい！」木嶋に話し、
玲奈も、
「賢お兄ちゃん、今日は、ありがとうございました。」気持ちを、木嶋に伝えた。
木嶋は、思わず目頭（めがしら）が熱くなっていた。
麻美は、
「木嶋君、行きましょうか？」
座席を立ち、玲奈を連れて行く。
木嶋も、会計伝票を持ち、会計に向かい、支払いを終えた。
お互いの車に乗り、
玲奈が、
「賢お兄ちゃん。またね！」
麻美の車の窓から、小さい手を振っていた。
木嶋も、手を振り返し、車のキーを入れ、エンジン始動し、
『Ｄｅｎｙ’ｓ』をあとにした。

第１８２話

国道一号線を右折して、県道を通り、駐車場に入れた、
エンジンを止め、車から降りた木嶋は、
家に向かう帰り道で、
『Ｄｅｎｎｙ’ｓ』で、過ごした有意義な時間を振り返っていた。
「麻美と玲奈の姿を見ていたら、自分も、いつになるのだろう？
はるかか？富士松さんか？と周りから選択してと言われたとき、迷ってしまう。決め手があればいいのだが…出来そうにない！どうすればいいのだろう？」
木嶋が、《ハムレット》の心境は、はるかと付き合いだしてから、ここ２年間の悩みの種でもある。
有効な解決策が見当たらないのも事実である。
麻美に、相談しようにも、言えることでもない。
話しをすれば、
「はるかと別れた方がいい！」
素敵な富士松さんを見つめるたびに、
【金縛り状態】になってしまう自分を変えないと行けない！
「会社の中を見渡しても、自分が、気軽に話しを出来る…女性社員がいないのも欠点だ！」木嶋は、自分を責めていた。
「玲さんに、話すべきか？」
自分が、堂々巡りしていることに気がついた。
『まっ…いいか！いつかは、解決するだろう！』
楽観的に考えるしかない。
歩いていたら家の敷地に入っていた。
【また、何か…心の中で、《モヤモヤ》していて霞がかかっている。バットを片手に、バッティングセンターに行こう！】
木嶋は、玄関横の下駄箱脇に置いてある…
『木製バット』を右手に持ち、家の近くにあるスーパーのビルに

入って行く。
　このビルは、《バッティングセンター》、《ボウリング場》、《ゲームセンター》、《インドアテニス》などがある。
　木嶋は、良くバッティングセンターで、汗を流すこともあれば、ゲームセンターにいたり、家族で、ボウリングをしたり多種多彩である。
　テニスは、たった一度…夜間高校に在学していたとき、同級生からラケットを借りてやったことがあるが、自分のセンスのなさに愕然としたのだ。
　その時以来テニスをやらなくなってしまった。
　木嶋は、小さいの頃から、野球をやっていたが、あくまでも、草野球のレベルであり、木製バットや『金属バット』の両方使い、近所の仲間と遊んでいたのだ。
　会社の中の野球チームへ入らずに、仲間が、昼休みに《キャッチボール》や《ノック》をしているときに、一緒に混ぜてもらうことが多かったのだ。
　木嶋の頭の中では、野球チームを作りたいと、随分前から考えはあるが、実現が難しいと思っていた。
　はるかと出会う前。
　正確に言うと、１９９０年代。
　会社の仲間、陸上のメンバーを中心に、他の人たちと交流しようと、雑誌に載せ、メンバーを慕ったこともある。
　まだ、若いときなので、失敗を恐れずに、
【チャレンジャー精神】を出していた。
　年齢を重ねると、勢いが止まって行く。
　会社の中で、若い社員を見ると、
【自分も、そんな時代があったかな！】と振り返ってしまう。
　歳を重ねることは、良くも悪くもないが、
　いつまでも、気持ちが若くないと自分自身が老けてしまう。
　それは、負けを認めているのと同じである。

野球と平行して、陸上をやっていたことが、１９９０年代は良かった。
はるかと出会うなんて、木嶋が、予想をしたことがない。
ボウリングは、一年に一回、会社の『イベント』で出ている。
イベントが近くなると、練習とは言えないが、ボールの感触を確かめている。
ゲームセンターは、小さい時から親しんでいるので、違和感なく…すんなり入って行く！
いつものように、バッティングセンターのゲージに入り、持ってきた木製バットで、軽く素振りをして、お金を入れて、マシンを相手に打っている。
一心不乱（いっしんふらん）に、打ち込むのであった。
その時、木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響くのであった…。

第１８３話

木嶋は、携帯を取り出し、
「誰だろう?」画面を覗いた。
大森さんからであった。
「もしもし、木嶋さん、大森ですけど…」
「珍しいことがあるね。電話をしてくるなんて…何か…あったの?」電話に出た木嶋は、半分、疑問心を抱きながら、大森さんに問いかけていた。
大森さんは、
「いや～!木嶋さんを、冷(ひ)やかさないといけないと思ってね!電話をしたのですよ!」木嶋に話していた。
木嶋は、
「随分(ずいぶん)、見下(みくだ)してくれるじゃないの?」大森さんに伝えた。
大森さんは、
「木嶋さん、今日?どこかに出かけていました?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「出かけていたよ!何で…?そんなことを聞くの?」大森さんに答えていた。
「昼近くに、国道1号線を通ったときに、木嶋さんの車が、東神奈川の『Ｄｅｎｎｙ's』に止まっていたのでね!チョット…気になって電話したのです!」大森さんは、木嶋に話していた。
「良くナンバーを覚えていたね!それも、昼近くに『Ｄｅｎｎｙ's』を通るなんて…偶然じゃないの?」木嶋は、感心した様子で大森さんに伝えた。
「仲間と、釣りに出かけていて、たまたま…その時間に、東神奈川を通り過ぎたのです。木嶋さん、彼女がいるって…話していたことがありましたよね?僕と違って…真面目(まじめ)な人だから…彼女に騙(だま)さ

れているんじゃないかと心配をしているのですよ！」大森さんは、木嶋に話したのだ。

「彼女はいるよ。騙されているなんて…失礼極まりないよ。自分が、その人を好きになったのだからいいでしょう！それに、大森さんの彼女も、少し前まで、夜の仕事をしていた人ではないですか？」木嶋は、大森さんの質問に反論したのだ。

木嶋と大森さんは、同年代で、お互い、話しがしやすく、昼休みも一緒に過ごしている。

大森さんが、途中入社なので、会社に同期がいない。

それを、木嶋が、理解をしていた。

機会があれば、小室さんや溝越さんたちと、大森さんを、飲み会のたびに誘っているのだ。

大森さんも、飲むことが好きで、誘われることは嬉しいのだ…。

木嶋は、誘えば確実に、出席してくれるから、信頼を於いている。

また、大森さんは、小室さん、富高さんと釣りの話しで盛り上がる。

釣りと言っても、多種多彩で、

『キャスティング』もあれば、『磯釣り』、『川釣り』などがある。

小室さんと富高さんは、

『川釣り』が主である。

大森さんは、

『キャスティング』である。

木嶋が、人目をおくのは、釣りの知識が豊富なことである。

両親の田舎で、極まれに釣りをやるが、《のんびり》気長に…釣り糸を垂らしながら、釣れるのを待つのが苦手なのだ。

木嶋も、一人で

「ボー…としたいときはある。」

時間を有効活用するには、もっと…他の方法を見つけようと考え始めていた。

大森さんは、
「今度、魚を釣ったら、会社に持ってきますよ！」木嶋や溝越さん、小室さんにそう話していた。
「待てど…暮らせど…【クール宅急便】で、魚は、一度も届かない！いつになれば届くのだろう？」不安になっていた。
木嶋は、大森さんを責めたい気持ちもあるが、追い込むことは、本人に《プレッシャー》と言うストレスになってしまうと思っていたのだ！
「大森さん、彼女と出かけて、何かもらったの？」木嶋は、大森さんに聞いていた！
「彼女とは、出かけていないよ。バレンタインデーなんて、形式張るのも、堅苦しいからね！しなくてもいいよ！と伝えたよ…！」
木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「淋しいね。考え方は、十人十色だし、色んな人がいるからいいんじゃないの？」大森さんに話した。
大森さんは、
「木嶋さんなら理解をしてくれると思っていたよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「また、大森さん、小室さんを誘って、飲みに行こうよ！」誘っていた。
大森さんは、
「うん。いいよ！これから予定を確認して、明日の月曜日に答えますよ！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「よろしくね！」大森さんに伝え、電話を切ったのだ。
【自分も、スケジュールを確認しよう！】
木嶋は、リュックから黄色い手帳を取り出したのだった！

第１８４話

「いつにしようかな？」

手帳に書き込んである予定表を、パラパラ見ながら、大森さんと飲む日にちを決めかねていた。

木嶋は、

「大森さんの予定を、来週末に設定してもいいが、はるかの、クラブ『H』ラストインの日にちが決まらないと厳しいかな…？帰国するまでホールドにするしかない！」ボヤいていた。

仕事の先読みをしても、どうなるか分からない。

世の中は、まだ、不況から抜け出せない！

昨年の《ボーナス》は、溝越さんが話していたように、ボーナスではない。

給料と同じ感覚なのであった！

いかに、無駄遣いをしないようにするには、どうすれば良いのだろう。

はるかが、クラブ『H』を辞めるのは時間の問題である。

木嶋が、はるかと交際しているが、ラストインを先送りしてとは言えないでいた。

あとは、はるか自身が決断をしないといけないなのだ。

木嶋に、不安がないと言えば嘘になる。

クラブ『H』を辞めたら、自分との交際も無くなってしまいそうで、会えないような気がしていた。

「大森さんには、もう少し時間の猶予（ゆうよ）をもらおう。まずは、話しをしないと…」

木嶋は、携帯を持ち、

【メールにしようか？】

【電話にしようか？】悩んでいた。

メールだと、話しの進捗（しんちょく）が見えづらい。

「ここは、思い切って電話をしよう。」
木嶋は、大森さんの携帯番号を、
《メモリーダイヤル》から呼び出した！
画面が、大森さんの連絡先の画面になっていた。
携帯の発信をしたのだ。
「プルー、プルー、プルー」
呼び出し音が聞こえている。
呼び出しているとき、アーティストの曲が流れていた。
「この曲は、誰のだろう？」木嶋は考えてみた。
《サザンオールスターズ》、《矢沢永吉》、《チューブ》
思い当たるのは、まだあるが…
現状は、それしか思い浮かばない。
大森さんの性格を考慮（こうりょ）すると《チューブ》はない。
《矢沢永吉》か？、《サザンオールスターズ》か？
消去法で考えると、《矢沢永吉》しかいないと…
一度、電話を切り、時間を空けて、大森さんにかけ直すことにした。

「何度も、着信履歴を残すのも、大森さんに、【プレッシャー】を掛け過ぎてしまう。これは、《ナンセンス》である！はるかと交際してから、木嶋が教わったことである。」
はるかが、木嶋に優しくするのは、
【なぜだろう？】
一人で、その答えを探している。
「自分は、結婚していないから、多少、お金の融通（ゆうずう）が利（き）くからなのかも知れないな！」木嶋の頭のコンピューターが、そう答えを弾（はじ）き出した。
木嶋は、不特定多数の女性と交際するほど、器用ではない。
１０代、２０代の時も、一人の女性を好きになり、その人としか交際はしていない！
会社の中では、富士松さんの存在が、木嶋の心を、

【ユラユラ】と揺さぶっている。
これが、木嶋の決心を鈍らせているのである。
～♪Ｌｅｔ’ｓ　ｍｅ　ｂａｃｋ　幸せって…難し過ぎるね♪～
この歌の歌詞(かし)のように、人が、幸せになるのが大変な努力だと思う…
木嶋が、幸せだと感じているのは、はるかと一緒に過ごしているときである。
少しして、大森さんに再び、電話をかけた。
「プルー、プルー、プルー」呼び出している。
今度は、曲が流れていなかった。
「もしもし、大森ですが…」
「木嶋です。大森さん、電話に出れないときは、音楽を流しているの？」木嶋は、大森さんに尋ねていた。
大森さんは、
「そうですよ。車を運転中に電話をしながら、走っていると、白バイに掴まってしまいます！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「そっちは、そんなに厳しいのかな？」大森さんに問いかけていた。
大森さんは、
「検問のことを、木嶋さん、知っていますか？」木嶋に問いかけていたのだ。。
「検問？そう言えば…スピード違反は、国道で、毎日、やっているよ！」木嶋は、大森さんに答えていた。

第185話

大森さんは、
「木嶋さん、飲む日にちは、決まったのかな?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「今月は、彼女のことがあるから…いつにするとは…言えないね!曖昧(あいまい)な返答で申し訳ないが、3月か?4月なら大丈夫だと思います!」大森さんに答えたのだ。
大森さんは、
「彼女って…木嶋さんが良く話しをしている人だよね!自分も同じ立場だが、例(たと)え、夜の仕事をしている女性でも、今いる人を大切にしないと…なかなか…チャンス来ないよ!3月か?4月…《キャスティングの大会》と重(かさ)ならなければいいけどね!明日、会社の昼休みに報告します。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「そうだよね。大森さんが言われている通りです。お互い、年齢的にも、チャンスが、たくさんあると限らない。《キャスティングの大会》があるんだよね!忘れていました。ゴメンなさい。明日の昼休みに、自分の作業エリアで待っていますよ!」大森さんに話したのだ。
大森さんは、
「了解しました!キャスティングの大会は、土曜日や日曜日の朝だから気にしないでいいよ。明日の昼休みね!」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。
木嶋は、両手を組み、考えごとをしていた。
「そうだよな!キャスティングの大会は、春~秋にかけて、全国、津々浦々(つつうらうら)で、予選や決勝が行われるから、大森さんも忙しくなる可能性もあるかな?自分も、陸上をやっていた3.

４年前や、夜間高校にいた頃を思い出す。」一人で、呟いている。
木嶋は、夜間高校在学中に、市内弁論大会に、傍聴や弁士として、出席をしたことがあるが、
その中で、一番、印象に残っているのが、
【目標を持て…】
当たり前だと言えば、当たり前の言葉である。
人は、目標に向かって、努力をする。
それが、普通だと…。
目標を持てずに、さ迷う人も多数いる。
それが、悪い方向に行ってしまうことがあるかも知れない。
生まれてから小、中学校、高校、大学など経て、それなりの知識と教養を身に付け…社会に就職や自力で開業をした人も、その延長線上にいる。
その中で、
【今、自分が何をするべきなのか！】
その【目標】を達成して、更なる向上心が出てくるのが、常である。
陸上競技の１００メートル世界記録を更新するにしても、
『人の2倍、3倍…』
見えないところで、努力をしている。
空を見上げていると、夕暮れに包まれていた。
～ほら…遠ざかる…星が…また一つ…目を閉じ…煌めいて…光輝いている～
地球まで、何千、何万、何百光年の彼方から、舞い降りている。
その輝きは、永遠でない。
生まれたばかりの星もあれば、消えていく星もある。
ハレー彗星や獅子座流星群に代表されるように…
壮大な宇宙には、自分たちと同じくらいの文明を拓いているところもあれば、
高度な文明を拓いている星があると、木嶋は、思っていた。

「はるかのラストインの日は、富高さんを誘って行こう！」木嶋は、そう考えていた。

会社の同僚で、はるかが、唯一（ゆいいつ）、木嶋以外の人と話しが出来る人である。

もちろん、麻美や玲とも、交流があるのは、はるかの了解事項である。

木嶋も、富高さんも、高い給料をもらっているとは思ってはいない。

会社の中で、仕事をしていると、ストレスが溜まり、発散する場所を見つけないと、身体を壊してしまう。

ギャンブルや女性に、嵌（は）まってしまう人もいる。

木嶋は、夜間高校時代に、学年が上がって行くたびに、仲間が減って行く虚（むな）しさを痛感（つうかん）していた。

いつの時代にも、あることだと思っている。

家の中にある…日めくりカレンダーを見ると、

はるかが、帰国する日が近づいていた。

「あと…2日か…。」

はるかがいれば、携帯の着信履歴がたくさんあるのに、

いないと…鳴らない携帯を見つめながら…ため息をついていたのだった。

第186話

はるかが、帰国する日まで、木嶋の精神状態が不安定になっている。

「一声(ひとこえ)、留守電でもいい…声を聞くだけでもいいから電話が欲しい…。それで、安心出来るのに…。」これが、今の木嶋の心境(しんきょう)を表していた。

ハワイに、国際電話をしようにも、滞在先(たいざいさき)のホテルの名前、住所、電話番号も知らないのだ。

【滞在先のホテルを聞いておくべきだった…】反省の言葉ばかりが出てくる。

『カチッ、カチッ』と掛け時計の秒針が、一秒ずつ…時間が過ぎて行く。

木嶋は、仕事が手に付かず…帰国するときが待ち遠しい。

はるかが、帰国する火曜日になった。

成田空港に到着予定時刻は、夕方5時過ぎの予定である。

帰国の日にちと到着予定時刻は、はるかが、日本を発つ前に聞いていたのだ。

木嶋は、飛行機に乗ったのは、一度だけしかなく、到着が遅れるのも、理解はしているが、大幅な遅れは、想定外(そうていがい)である。

昼休みや休憩時間になるたび、携帯の着信履歴を見ながら、

「ハー」

ため息をつきながら、鳴るのを待っていた。

気を取り直し、

「メールで来るのかな?電話かな?考えるだけで、ワクワクして、嬉しくなる!」

心が浮ついているのを、木嶋自身、自覚しながらも、淡々(たんたん)と仕事をこなしていた。

それを、溝越さんが見逃さずにいた。

「木嶋、何か…あったのか?落ち着きがなく、ソワソワしている感じだぞ!」木嶋に尋ねていた。
さすが…溝越さんである。
いち早く…木嶋の変化を見抜かれていたのだ。
木嶋は、
「そんなことは、ないですよ!」溝越さんに謙遜(けんそん)して答えていた。
溝越さんは、
「そうか?いつもの木嶋と違うんだよ!」木嶋に問いかけていた。
「そうですか?いつもと同じと認識していますよ!三谷さんに、聞いて下さい。」木嶋は、溝越さんに伝えたのだ。
「判った!木嶋が、そう言うなら…いいんだ。別に悪いことで話しているのではないから…ケガは、気をつけて…!」溝越さんは、木嶋に伝え、その場所から離れて行った。
木嶋は、内心(ないしん)驚いていた。
「そんなに、表情が違うのかな?」自問自答しながら、首を傾(かし)げていた。
仕事終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。
大急ぎで走りながら、ロッカールームに走り、着替えている。
会社の送迎バスに乗り、ラジオを聴きながら…最寄り駅に着いたので、送迎バスから降り、階段を下(さ)がりながら、コンビニで夕刊紙と缶コーヒーを購入して電車に乗った。
「ガタン、ゴトン」
揺られながら、携帯の画面を見つめていた。
まだ、メールも着信もない。
「フー」
一息(ひといき)入れていた。
先ほど、コンビニで購入した、夕刊紙を取り出し、読み更けていた。
今だに…着信がない。

「成田空港に着くのが、遅れているのかな？一か八か…電話をしてみよう！」

木嶋は、電車の座席から携帯を発信した。

『お客様のおかけになった番号は、電波の届かない場所におられるか？電源が、入っていないためかかりません！』

電話口から、そのようにテロップが流れていた。

木嶋は、

「電話が、繋がらないんじゃ意味がない！」ボヤいていた。

「まあ…はるかのことだから…一度は、電話をしてくるはず…！」確信めいた自信があった。

何故？木嶋が強気なのだろうか？

今まで、はるかと付き合っていて、プレゼントや食事をするたびに、あとから…電話か！メールのどちらかが来るのだ。

電車が、乗り換え駅に着いた。

携帯を、Gパンのポケットから取り出した。

画面を覗くと、メールの着信を知らせている…チャイムを確認していた。

木嶋は、メール受信ボックスを開き、新着メールの宛て先は、

《ディズニーリゾート》からであった。

「あらっ…」前に、コケそうになっていた。

「はるかじゃなかった！まあ、いいか？」木嶋は、楽観的な気分に浸っていた。

第187話

木嶋の乗っている電車が、乗り換え駅に着いた。
座席を立ち、リュックを両肩に掛け、夕刊紙を右手に、コーヒーの空き缶を持ちながら…横浜に向かう急行に乗り込んだ。
「プルー」
先ほどまで、鳴り響いていた…発車ベルが鳴り止み、
ドアが、
「プシュー」と、エアー音を立て閉まった。
「ガタン、ゴトン」走り出す電車の音。
木嶋は、空いていた…長い7人掛けのシートの端に座り、
右手に持っていた夕刊紙を広げた。
少しずつ…景気が上向きになっているのだろうか？
新聞を読んでいると…暗い話題ばかりではなく、
明るい話題が記事として書かれていた。
不景気だと…物が売れずに、【デフレーション】になって行く！
【デフレーション】が長引けば、輸出産業は、大打撃を受ける。
木嶋が、勤務している会社は、自動車産業なので、【デフレーション】に陥ってしまうと収益率が悪くなってしまう！
今は、語り草になっているが、
２０世紀の終わり頃、バブル景気に湧いた時期があった。
《何でも作れば…物が高く売れる。》
有りとあらゆる企業も、《絶好調》だった。
それが弾けてから…
政治家は、構造改革だとか…党をぶち壊すだとか！
威勢の良い言葉が並んでいた。
その時の首相も、最初の熱意とは…裏腹に、尻込みを余儀なくされていく。
【いつかは、政権を変えないと…。】

木嶋は、そう願っていた。
携帯の『バイブレーター』の振動があった。
座席に座ると、着信音が聞こえずらい。
いつも、電車に乗るたびに、【マナーモード】にしている。
車内アナウンスで…
【電車内では、マナーモードにして、通話は、ご遠慮下さい！】
盛んに、呼びかけをしている。
木嶋は、携帯が、驚異的なスピードで、普及していく中で、ルールが決まることはいいが、マナーを守れない人たちもいる。
マナーは、守らないと…そう考えるのだ。メールの着信音量は、最低レベルにしている。
木嶋が、使用している携帯の側面には、メールと電話の着信があると、フラッシュしているので、
着信は、上下に…メールは、真ん中に、点滅している。
メールの受信ボックスから新着メールをスクロールをしていく。
送信者は、はるかであった。
木嶋は、嬉しくなった。
待ち人…来たる。
そんな…心境であった。
「木嶋さん、ケガもなく、両手両足をつけて、日本に帰ってきました。家に着いたら、メールをします！」
メールを読んで…安心したのだ。
木嶋は、
「今すぐに、声を聞きたい…友達と一緒だし、家に着いたら…メールが来るのだから、その時に、声を聞けばいいか？」開き直っていた。
人は、好きな人ほど、束縛をしたがる。
十人十色と言う言葉があるが、
みんな…性格も、育った家庭環境も違う。
【これだ！】

一つの型に当て嵌めてしまうのは、簡単だと思っている。
常々（つねづね）…木嶋は、
「その人の考え方を、押し付けは良くないよ！相手の意見、尊重して、それから判断をしないと…」はるかに言われていた。
今さらながら…この年齢になって、ヒシヒシと痛感していた。
木嶋は、右手を、胸に手を当て振り返って見ると…
思い当たるのが、たくさんある。
「何でもない…言葉だったり…行動だったり、実は、相手に、キズを付けていた！」と思う。
『はるかの連絡を待つこと』
今の木嶋に、出来るとしたら、これしかない！
電車が…
「間もなく…終点、横浜に到着です。どなた様も…お忘れ物ないように…お願いします！」
女性の車内アナウンスが聞こえてきた。
男女均等法が、改正、施行されて、ＪＲ、私鉄も、女性が色んな分野に進出したのは…目覚ましい！
実力者は、上に出世して行くことは良いことだと…
木嶋も…《いつかは…。》
そう思いつつ、横浜駅の改札を通り抜けて行く。
ここ一週間は、横浜で立ち寄ることがなく、通り過ぎて行くしかない。
《通過駅》しかないのであった。
階段を下りて、ＪＲの改札を通り、地元に帰って行く！
木嶋の携帯に、『バイブレーター』が振動していた。
それは、メールの着信であったのだ。

第１８８話

メールの着信に、木嶋は、気がついていたが、歩きながら、携帯を操作するのは苦手である。

盲目の人、介助犬を連れている人、車椅子の人、杖で歩いている人、走って電車に乗り換える人など…色んな人たちがいて、危険だと感じていた。

「ズッ、ズッ、ズッ」靴の音が響く。

階段を、一段ずつ上がり、東海道線のホームで、電車を待っていた。

電車が、ホームに到着するまで、あと3分ぐらい余裕がある

木嶋は、Gパンのポケットから携帯を取り出し、受信メールボックスから新着メッセージをスクロールした。

メールの送信者は、はるかからである。

「木嶋さん、今、成田空港駅の成田エクスプレスに乗りました！地元に着くのが、夜１１時ぐらいになりそうです。また、メールします。」

木嶋は、

「夜１１時か…正直、悩む…」

『どうしようか…？』呟いていた。

なかなか…答えを出せずに、いらだちを隠せない。

自分自身がもどかしく思うのだ。

「普段から、起きている時間だから大丈夫かな？」

はるかに、メールを返信しよう！

先ほど届いたメールから、アドレスを呼び出した。

「はるかさん、いつも、夜１１時３０分頃まで起きているので、携帯は、留守電にしてありますから、留守電に、メッセージを入れて頂ければ、折り返し電話をします。それを過ぎてしまうと、明日、会社なので、起きるのが辛くなってしまいます。ご理解下さい！」

はるかに、メールを送信した。
直ぐに、メールが返信されてくる可能性は、ないだろうと思っていた。
ホームに入る直前、
「パーン」乾いたクラクションを鳴らしながら、電車が入って来た。
電車通勤を始めた頃は、いきなり…クラクションを鳴らされて、焦り…驚きの両方があった。
「自分は、何も悪くないのに…」そう思ったことがあった。
最近は、慣れてきたのか…鳴らされても、平気な顔をしていた。
「プシュー」エアー音を立てながら、ドアが開く。
横浜駅で乗り換える人が大勢いた。
木嶋は、東海道線に乗った。
「ピロー」発車ベルが鳴り、
「駆け込み乗車は、ご遠慮願います！」ホームのアナウンスが響く。
「ドアが閉まります。ご注意下さい。」車内にいる女性車掌の声で、アナウンスしていた。
家路に駆け足で急ぐ人。
木嶋もそうだが、帰宅するときは、1分1秒が重要である。
一本でも、電車を遅らせてしまうと、自分の自由な時間が少なくなってしまう。
休日は…別だが、自分の自由な時間は、多くても、3，4時間ぐらいしかないのが現状である。
毎日の日課になっているのが、夜のニュース番組などが主になっていた。
毎朝、日本テレビの『ズームイン』を家族揃って見ている。
朝早く、父母が、先に起きて新聞に目を通している。
木嶋は、寝ぼけ眼で、目を擦りながら見ているので、
情報が頭の中に入っているかは、微妙である。

家から出る頃には、天気コーナーを見ているので、頭が、少しずつ回転を始めている。
電車の中から景色を見ていると、バレンタインデーを過ぎたことに気がついた。
「そうか…バレンタインデー！今年は、はるかから、貰い損ねた…卒業旅行だから仕方ないか！」木嶋はボヤいていた。
最寄り駅に着いた。
「プシュー」エアー音を立てながら、ドアが開いた。
駅から家までの道を、一歩…一歩…はるかの笑顔を見れる日にちが、
いつになるのか…思案しながら歩いていた。
家のドアを開け、夕飯を食べながら、
朝、時間がなく、読めなかった《日刊スポーツ》を読んでいた。
一通り、記事を読み終え、テレビの電源を入れた。
この時期は、ドラマも多いが、
木嶋は、【スカイパーフェクトテレビ】の電源を入れた。
懐かしいアニメや刑事ドラマなどのチャンネルがあるので、番組表をスクロールしていた。
掛け時計を見ると、夜９時３０分を過ぎていた。
「もう…こんな時間なのか？」
木嶋は、スカイパーフェクトテレビの番組表をスクロールするのを止め、
携帯を留守電にしたのだった。

第189話

風呂に入りながら、
「何から話しをすればいいのだろう?」悩んでいた。
無理もない。
一週間以上も、はるかと会話をしていないから、話題を探すのに苦労しそうである。
風呂から上がり、着替えながら、携帯を覗いた。
メールも、着信も、まだない。
「ハー」と、ため息が漏れる。
はるかが、家に着くまで、1時間以上もある。
携帯の着信が来るのを待ちわびながら、時間が経つのが、遅く感じていた。
木嶋に、今、必要なのは、はるかの愛情なのだ。
富士松さんの愛情も、受けたい気持ちはあるが、両方を、天秤(てんびん)に、かけることはしたくない。
男性は、誰でも、浮気願望があるのも事実だと思っている。
≪一人の女性を愛するよりも、たくさんの女性を自分は、愛していたい。≫木嶋も、そう考えている時もある。
木嶋の心の中では、
『いつも富士松さんと交際したい』願望は、常に持ち続けている。
木嶋が、携帯を操作していると、
【携帯チェック】をするのが、はるかの日課である。
「プライバシーの侵害だ!」と、反論しても、
「貴方に、プライバシーなんてないでしょ…」と、言い返されてしまう。
以前、はるかが、木嶋に、
「貴方には、私しかいない!」
その言葉を、聞いたとき…

『グサッ』

胸に突き刺さっていた。

手を当て考えると、はるかの言っていることが、そのまま《ズバリ》当たっている。

木嶋は、携帯を覗かれても、疚しいことをしたなんて思ってもいない。

「麻美と会ったのは、事実だし、隠して疑われるよりも、正直に伝えよう！はるかの《ラストイン》も聞かないと…」木嶋は考えていた。

掛け時計を見ると、夜１０時を過ぎたばかりというのに、木嶋以外の家族は寝てしまっていた。

「うちの家族は、朝、早いからね。みんなが寝ている状況で、いつが、《ラストだ》…なんて、とても言える雰囲気ではないかな？普通の会話に終始しよう！」

先ほど、風呂に入って考えていた時と、思考回路が停止状態で、四苦八苦していた。

「毎日、会社で、張り詰めた緊張感と気苦労が絶え間無い。この状況は、不自然ではなく、当たり前なのかもしれない！ストレスが溜まっている証拠かな？」木嶋はボヤきつつ、

炬燵に入り、ウトウト…と。

「スー、スー」寝息を立てて、居眠りをしまった。

「あっ」と、気がつき…

サイドボード上の置き時計を見ると、

午後１０時３０分を過ぎていた。

３０分ぐらい寝ていたみたいである。

この時期になると、家の中では、ストーブや暖房が効いて、うたた寝をしてしまうことがある。

一番、危険なのは、飲んだ帰りの電車である。

木嶋は、土日休みで、家にいると、夕方になると、炬燵の中で寝てしまうことが多い。

父や母に、良く怒られている。
テレビの電源を入れ、半纏を羽織り、ニュース番組を観ていた。
一年に一度は、大きなニュースが出てくる。
今年は、まだ大きなニュースがない。
日本は、治安が安定している。
外国人の人たちが、日本で労働したい気持ちは理解が出来る。
一年間、頑張って働けば、母国に帰国したとき、裕福な暮らしが待っている。
観光に来る人たちも、たくさんいる。
木嶋も、いつかは、はるかと新婚旅行で、海外に行かれる日が来るのだろうか？
【夢か？現実か？…】
『神様が答えを知っているのなら、教えてもらいたい…。』
携帯の着信が…
《ピローン、ピローン、ピローン》と鳴っている。
「はるかからだ。」
木嶋は、躊躇いもなく、電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「はるかです。無事に帰って来ましたよ～」はるかが、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「お帰りなさい。はるかさんの声が聞きたくて、今か？今か？と…待ち遠しかった。」はるかに話していた。
はるかは、
「ありがとうございます。私も、木嶋さんの声を聞いて、安心しました！」と答えつつ…
「私がいないからと言って…浮気をしていなかったでしょうね？」
木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「浮気なんてしませんよ。はるかさんが、海外に出かけていると

きに、麻美さんと、プライベートで、一度、会いました。」と、はるかに伝えたのだった。

第１９０話

はるかは、
「何で…麻美さんと会ったんですか？別に、会う必要がないように、私は、思いますけど…日本にいなかったからですか？」穏やかな口調で、木嶋を問い詰めていた。
はるかが、穏やかな口調ほど怖いのだ。
木嶋は、警戒しながら…
「麻美さんと…《会う必要がない…》なんて、批判的な意見を言ってほしくない！バレンタインデーが近いから、チョコレートを手渡したいと…そう連絡が来たんだ！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「そうなんですか？…木嶋さん、麻美さんの誘惑に負けたんですね？」木嶋に問いかけたのだ。
はるかの言う通りなのかも知れない。
甘いチョコレートと誘惑に、
【ノコノコ】と、
車で、『Ｄｅｎｙ、ｓ』に行ったのは、紛れも無い事実である。
木嶋は、
「そんなことないよ！」はるかには、否定をしていた。
はるかは、
「女の直感は、鋭いですよ！特に、私は、木嶋さんの考えていることぐらい、お見通しですよ！」
木嶋も、ここまで言われると、返す言葉が見つからない。
ついに…観念した。
「はるかさん、さすがです。先ほどは、否定をしましたが、言われた通りですよ！」はるかに伝えた。
はるかは、
「やっぱりね。そうだと思いました。でも、今回は、許してあげ

ます。」

「何か…怖いな！」木嶋は、はるかに問いかけてのだ。

「隠し事をされて、あとからバレるよりも、報告してくれたのだからです。ただ、バレンタインのチョコレートは考えます。」はるかは、木嶋に答えていた。

木嶋は、

「ありがとうございます！何かありそうな雰囲気が漂っていますよ！」はるかに、電話で頭を下げた。

「木嶋さん、《ホワイトデー》のプレゼントを期待していいですか？」はるかは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、【やっぱり…】と言う気持ちだった。

「ある程度、頭の中で…考えていますよ。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「ヤッター。ありがとうございます。嬉しいです。ハワイで、お土産を買って来たのですが、いつ渡せばいいですか？日にちを決めませんか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「ハワイのお土産ね。何だろう？楽しみだね。チョット…待ってね！手帳を持ってくるから…」

携帯を、炬燵のテーブルに伏せ、

リュックに、【黄色の手帳】を取りに行く。

手帳をパラパラめくりながら、携帯を持ち、

「はるかさん、お待たせしました。そうだね…自分としては、週末の金曜日か？土曜日がいいね！ただ金曜日に、待ち合わせの約束をして、残業になったとき、迷惑を懸けてしまいます。土曜日して戴いたほうがいいですね！」はるかに話したのだった。

はるかは、

「そうですか…土曜日ですね？私も、クラブ『H』に、ラストインの日にちまで、もう数えるぐらいしか出勤しません。」木嶋に話しつつも、悩んでいた。

「分かりました。土曜日にしましょう？」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。土曜日ですね。待ち合わせ時間なのですが、夕方６時過ぎに待ち合わせしませんか？」はるかに伝えた。
はるかは、
「夜６時過ぎですね。私も、友達と待ち合わせが午後７時３０分なので、タイミングもいいですね！」木嶋に話したのだった。
木嶋は、
「時間は、決まりだね。待ち合わせ場所の選択は、はるかさんに任せます。決まったら連絡を下さい。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「分かりました。」木嶋に答え、電話を切ったのだ。
木嶋は、頭の中で、今年のホワイトデーのプレゼントに悩んでいた。
「いくらまで、金額を出そうかな？去年と同じにするべきなのか…誕生日に頑張り過ぎた…」ボヤきしか出てこない。
胸に手を当てると…不安感が、広がるばかり…。
お金の心配はない。
ただ、世の中が、不景気でも、仕事があり、収入が得られている。
はるかの金銭感覚を直すには、
【今しかない】
木嶋も、破滅の道に歩んでしまうと思っているのだ。

第１９１話

そう…考え事をしているうちに、眠気(ねむけ)に襲われ、
急いで炬燵から出て、布団の中に入り、眠りについた。
一夜明(いちや)け…。
外は、冬晴れであった。
ただ、木嶋の心(こころ)は、霞(かすみ)が、かかったように、モヤモヤしていた。
家を出てからも、最寄り駅に向かう…足どりが、いつになく重たく感じている。
駅に着き、普段と同じように…
《キオスク》で、スポニチを購入して、京浜東北線の座席に座り、広げながら読み更けていた。
今の若い人たちの考え方が、はるかと一緒に過ごすことで、判るようになった来た。、
その半面(はんめん)、
はるかのことが、会えば会うほど…理解が出来なくなっている。
「何か…会社の若い女性社員との交流が出来ないものか…？」
気がつくと、電車が、横浜駅のホームに入るところであった。
座席に置いてある、リュックを取り、スポニチを入れた。
電車のドアが開き、ホームに降り立ち、階段を下がって行く。
改札を出た木嶋は、相鉄線の改札口を通った。
今も、有人改札である。近いうちに、自動改札になるみたいであった。
木嶋の両親の田舎は、長野県だが、電車の本数も、１時間に、１．２本であるため無人改札が多い。
田舎に暮らそうと、思ったことは何度もあるが、
都会で、生まれ育った木嶋には、今の便利な生活を捨てることは出来なかった。
木嶋が、はるかと別れたら…田舎暮らしを考えない可能性がない

わけでもない。
車通勤に、憧(あこが)れはあるが、時間の正確さを望(のぞ)むと、電車が無難だと思っている。
毎年、世界のニュースの中で、
『飛行機の墜落』
『列車の脱線や正面衝突』
『巨大地震』など、あらゆる場所で起きている。
日本も例外ではない。
一般的に考えれば、
『飛行機の墜落』や
『列車の脱線や正面衝突』は、有り得ないものだと…。
どんなに、技術が発達して、人の体調管理が優れていても、起きてしまうことは、防ぐことは難しい！
ドラえもんではないが…
《タイムマシーン》や《タイムテレビ》があれば防げるのかも知れない。
良くテレビ局の特集で、予知能力を持っている人が、予言などしているが、本当に当たっているのかは疑問だと…思っている。
２０世紀末は、色んな人の予言本がたくさん出て、氾濫(はんらん)していた。
ノストラダムス大予言が有名であるが、その予言さえも当たらない。
【未来は、自分で切り開くもの】
木嶋は、夜間高校に通学していた時から、自分で選んだ道と解釈していた。
果たして…それがいいのか…
永遠(えいえん)に…答えが見つからないと言った方が正解だと思う。
相鉄線に乗り、
「プルー」発車ベルが鳴っている。
「ガタン、ゴトン」揺られている。
電車の中で、木嶋は、あることを思案していた。

【そうだ…以前、積み立てをやろうとしていたことを、再度、チャレンジしよう！それを、はるかに提案してみよう！ただ、途中で、コケるかも…】

一抹（いちまつ）の不安を感じながらも…

会社の最寄り駅に着き、

変わらぬ…毎日…。

当たり前のように、同じ行動パターンである。

会社に着いて、携帯の側面を見ると、

メールの受信を知らせる…フラッシュがあった。

【誰かな…？】

受信メールボックスの履歴を見ると…

「玲」からであった。

木嶋は、はるかからのメールを期待していたので、

一瞬（いっしゅん）

「ズルッ」と…ズッコケた。

「木嶋君、おひさ～です。麻美さんが、バレンタインチョコレートを渡したと聞いて…私も、渡したいので、店に、今週末の仕事帰りでも寄って下さい。お願いします。」

木嶋は、

「今週末の金曜日か…土曜日…関内まで行くのも嫌だ…なんて…言ったら、玲に、失礼に当たる。手ぶらで行くのも…富高さんに、今週末の予定を聞きながら、玲には、昼休みに、メールを送信しよう！」

答えが出たとき、仕事の始まりのチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響くのであった。

第１９２話

頭の中では、仕事に集中しないといけないと理解はしているが、心の中に、雑念があると仕事に身が入らない。
普段と変わらないはずである。
それでも、他の人から見れば、
《木嶋が、いつもと違う気配(けはい)》を感じとっていた。
１０時の休憩時間開始のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響く。
前掛けを外し、作業服の右上着ポケットから財布を取り出し、目の前にある自動販売機で、缶コーヒーを買い、飲みながら…メールを入力していた。
「玲さん、今週末は…まだ…」
その途中で、
「キーン、コーン、カーン、コーン」休憩時間終了のチャイムが鳴った。
「回答に悩んでいたら、鳴ってしまった！」思わず頭を抱え、叫びたくなる心境(しんきょう)である。
「仕方ない。昼休みまで、玲さんのことは、頭の片隅(かたすみ)に置いて…仕事に集中しよう！」
木嶋は、外していた前掛けを、再び掛けて、作業を開始した。
はるか、玲、麻美の【トライアングル】は、いつまで続くのだろうと、ため息が出てしまう。
はるかが、近いうちに…クラブ『H』を辞める。
そうなれば…麻美や玲の店に行く回数が増える！か？
《まだ、判らない》と言っも過言(かごん)ではない。
木嶋は、麻美や玲、はるかは、プライベートで、会える時間は、いくらでもある。
《本当に友達なのか？》

不安要素を抱えながらも、精神面で、安定していると、自負(じふ)している自分がいた。

麻美や玲は、昼間の仕事と掛け持ちしていないので、今の仕事が本業で、家族を養(やしな)っていかないといけない言っているが、果たして…【アラフォー】になってまで、続けられるのだろうか？

【いつかは、辞めなければならないときが来る。】

全員が、夜の仕事を辞めたとき、

【プツン】と…

連絡が途絶えてしまう可能性は、かなりのパーセントが高い。

その確率は、７０％～９０％あると思う。

玲は、木嶋と同じ夜間高校時代の同級生だが、

常日頃から、

「私は、木嶋君といつまでも仲良くしたいと思っているよ！同じ夜間高校の同級生と出会うなんて、中々（なかなか）ないチャンスだし、みんなに会いたいからね！」木嶋を信頼、安心させる台詞(セリフ)を言っているが、

それを、額面(がくめん)通りに受け止めることは出来ない。

悪戯(いたずら)に営業にしか聞こえないのだ。

２０世紀末の木嶋は、小室さん、大森さんと、毎月のように、会社の最寄り駅近くで飲みに行っていた。

最寄り駅で、良く通っていたスナック『Ｎ』で、

お気に入りの女性がいたが、玲と同じ台詞を、木嶋に伝えていた。

それ以来、木嶋は、夜の仕事をしている女性の台詞は信用がない。

苦い過去の物語である。

はるかだけは、裏切ることはないだろうと、思っている。

【信頼に応えてくれる】と自信満々である。

麻美は…再三のように、強調するのは、

「友達だから苦言を言うのよ！」

奥の階段を上がって行く。

木嶋の勤務している社員食堂も、最近は、色んな種類のおかずが

多くなっていた。
選べる種類が多ければ、多いほどいい。
「そろそろ…身体を気をつけないといけないな?」
生活習慣病予防を、今からしておかないと…自らを戒めていた!
会社の定食は、高カロリーがないのが一番いい!
魚と一品小鉢、ご飯とみそ汁を、トレーに載せ、いつも座る指定席に座った。
周りを見渡すと、みんな同じ席に座っている。
座り慣れた席がいいのだ。
木嶋の座る席の近くは、富士松さんがいる。
心臓の鼓動(こどう)が、
《ドキドキ》している。
毎日、通勤している電車でも、同じことなのであった。
座る席が決まっている。
そこに、座れないと…違和感を感じてしまう。
浮かない顔で食事をしていると、いつも、木嶋と一緒にいる井野口さんが、定食を載せた…トレーを持ちながら、
「木嶋君、元気がない顔をしてどうしたんだ?」声を掛けながら、木嶋の左隣りに座ったのであった。

第193話

木嶋は、

「夜間高校の同級生が、夜の仕事をしていて、《今週末…店に、飲みに来ないか?》と誘いを受けていて、行くべきなのか?正直、悩んでいます。」井野口さんに答えていた。

井野口さんは、

「木嶋君が、その同級生の店に行ってくれれば…いいんじゃないか?悩むことでもないと思うが…」木嶋に話していた。

「それが、一番、簡単な答えですが、金曜日、別件の待ち合わせがあるのです…。」木嶋は、井野口さんに伝えたのだ。

「時間を、ズラす方法もあるが…どうだろう?」井野口さんが、木嶋に問いかけていた。

「時間を、ズラす方法もありますが、若い…ガールフレンドに、《いくら同級生でも、私以外の女性と…飲みに行かないように…言われています!」

「若い…ガールフレンドに、釘(くぎ)を刺される気持ちも、分からなくないが、その若い人も、夜の仕事かな?そのような場所に行かないと、出会いもないな!あとは、木嶋君自身の問題だよ!」井野口さんは、木嶋に決断を促(うなが)していた。

木嶋は、

「若いガールフレンドも、夜の仕事をしていますが、本人は、【アルバイト】だと強調しています!同級生の顔も、立てないといけませんかね?」井野口さんに問いかけていた。

「木嶋君は、優しいから騙されないように…それが、今、アドバイス出来ることかな?」井野口さんは、木嶋に話し、

木嶋は、

「ご意見ありがとうございます。」井野口さんに頭を下げたのだった。

井野口さんとの付き合いは、もう１０年以上になっていた。
木嶋に、井野口さんは、【会社のお父さん】的な存在である。
人は、誰でも、迷うときが、一度や二度ある。
自分が、正面を向いた時に、人生経験が豊富な人の意見を、真摯に聞けるかが大切である。
若い人たちと、交流も大事だが、
年配の方との交流も大切だと考えていた。
木嶋と井野口さんは、食事を終えて、トレーを下げながら、会計をしていた。
会計が終わり、トレーの上にあった…器を水の張ってあるところに入れ、階段を降りて行く。
職場が違うので、左右に別れて戻って行く。
木嶋が、自分の作業エリアに戻ると、
ストーブにあたり、腕組みをしながら、大森さんが待っていた。
これが、木嶋と大森さんの昼休みの日常である。
お互い、年齢が近いので、話しはしやすい。
大森さんの趣味は、投げ釣りが専門で、
色んな大会に出ていると自負している。
木嶋は、
「お土産をヨロシクね！」ジョークを大森さんに伝えていた。
実際、大会での成績は、良かったり、悪かったり、調子の波が激しい。
「仕方ないね！」と、
大森さんは、
《ニャッ》と笑いながら…木嶋に答えていた。
大森さんの仕事は、木嶋の職場の仕事に係わっていて、
給料を貰いながら、身体も鍛えられるので、一石二鳥であった。
木嶋が、大森さんと腕相撲をしたら、どんなに、ハンデをもらっても適わないのであった。
「木嶋君、戻ってくるの遅かったよ！」

大森さんが、木嶋に言っていた。
木嶋は、左手にしている腕時計を見た。
時刻は、午後12時25分を過ぎていた。
「あっ…戻ってくるの…遅くて申し訳ない！」木嶋は、大森さんに謝罪していた。
どうやら、大森さんも、悩みがあるみたいであった。
「いつもなら、もう少し早くに来るのに…」大森さんの、ボヤき節を、全開モードに達していた。
木嶋は、
「大森さんは、野村さんか…」大森さんに答えていた。
大森さんは、
「木嶋君は、若い彼女と…うまくいっているのかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「何で…そんなことを尋ねるの？」大森さんに話したのだ。
「昨日、彼女と、ケンカしちゃったんだ！」大森さんは、木嶋に打ち明けた。
木嶋は、
「ケンカは、毎回だよ！」大森さんに伝えたのだ。
「毎回なんだ！」大森さんは、納得した表情をしていた。
「些細なことで、ケンカするからね。ケンカするほど…仲がいい。そう解釈しないと、身体が持たないよ！」木嶋は、大森さんに答えていた。

第１９４話

「彼女と、ケンカして、今、会うのが《ツライ》です！」大森さんは、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「彼女と、会いたくない…大森さんの気持ちは、凄い分かります。特に、ケンカした当日と次の日は、自分から連絡を取らないようにしているよ！」大森さんに話したのだ。

大森さんは、

「どうやって、仲直りをするの？」

「彼女が、悪いと感じたら、謝罪をしてくるはずだよ！」木嶋は、大森さんに伝え、

続けてざまに、

「何が、原因でケンカになったの？」大森さんに尋ねた。

大森さんは、

「実はね。携帯電話を、彼女の家に忘れてしまい、仕事帰りに取りに行ったら、受信メールとアドレス帳を全部見られてしまったんだ！」

「それで…怒られたの？」木嶋は、大森さんに問い掛けたのだ。

大森さんは、

「そうなんだ。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「携帯を、彼女の家に忘れてきたの？それは、大森さん、自業自得（じごうじとく）だね！誰でも触（さわ）れないように、携帯をロックしないとダメだよ。」大森さんに答えたのだ。

「その受信メールの中に彼女以外の女性と、遊んだ記録があり、メールの内容が、絵文字入りのハートマークがあり、浮気だと決めつけられてしまった。否定も、肯定も出来ないが、女は、怒らすと怖いよね。」大森さんは、真剣な眼差しで木嶋に話していた。

大森さんは、いつになく深刻な表情をしている。
「いいアドバイスが出来ないか？」
木嶋は、頭を捻り思案をしている。
「まずは、どうしたらいいかな？」大森さんの顔が、更に曇って行く。
「そうだね。現状を打開するには、昨日まで、遊んでいた女性に、状況を説明して別れることが最優先だね！」木嶋は、大森さんに話したのだ。
「やっぱり…それしか方法がないのかな？」
「そうだね！彼女の気持ちを考えると、自分が、ナンバー1と思っているはず。大森さんが、彼女と別れ、その遊んでいた女性と交際していくなら、話しは違ってくるよ！あとは、気持ちの問題。」木嶋は、大森さんに伝えたのだ。
大森さんは、
「今の彼女と別れることは出来ないよ！遊びで付き合っている女性と別れようかな？」木嶋に打ち明けていた。
木嶋は、
「それは、大森さんの本心から言っている言葉と受け止めていいよね？」大森さんの答えに疑問を持っていた。
大森さんとの付き合いも長い。
木嶋は、その言葉を信用を出来ずにいた。
「男は、一人の女性を愛したいと気持ちはあるが、長く一緒にいると、《マンネリ》になってくるよね！自分は、他の女性と付き合うほどの器量はない。彼女の店以外で、飲むときは、事前に伝えているよ！」木嶋は、大森さんに話したのだ。
大森さんは、
「言い方を変えると、バカ正直だと思うけど…。」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「彼女に、【浮気だ！】と、頭ごなしに決めつけられるよりもい

いよ!自分たちは、他の女性も、お互い知っているからね。大森さんが、彼女と別れないなら、一日でも早く、謝罪をしないと…取り返しが付かなくなるよ。」大森さんに決断を促していた。

「分かりました。今日、彼女の家に出かけて、誠心誠意(せいしんせいい)、謝罪をして来ますよ。」　大森さんは、木嶋に話していたのだった。

木嶋と大森さんの横を、小室さんが通り過ぎた。

「二人して、何を深刻な顔をしていたんだ!」小室さんが、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「何か?いい話しはないかな?二人で、ボヤいていたんだ!」小室さんに話していた。

小室さんは、

「景気も、今は、悪いが、いずれは、上向きになる。それまでの辛抱だぞ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「小室さん、今度、3人で飲みに行きましょう!」小室さんと大森さんに伝え、

大森さんも、

「そうだね!ストレス発散しないとやっていられないよ!」

先ほどまで、深刻な表情をしていた大森さんは、いつしか笑顔に変わっていた。

木嶋は、

『ヤレヤレ』と、左手で握りこぶしをしながら右肩を叩いていた。

そのとき、昼休み終了のチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴り響いていた。

第１９５話

木嶋は、
「あっ…いけない。大森さんとの相談に乗っていて、玲さんにメールをするのを忘れていた。」
仕事が始まる直前に気が付くも、
「まっいいか…！また、あとで、玲にメールすればいいか！」そう思うのであった。
木嶋も、毎日のように、奇妙な４角関係のことを、頭の中で考えていた。
「いつまで続く…」
～♪振り返るといつも君が笑ってくれた　風のようにもっと…♪～
ふと映画のように、最初き巻き戻してみたい。
仕事が終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。
現場に飾ってある掛け時計で、時間を確認した。夕方5時になっている。
「今日も、残業だ…。」自問自答を繰り返していた。
携帯を、小物入れから取り出し、受信メールボックスから玲のアドレスを呼び出した。
「玲さん、今週末は、人と会う予定があるため、店に行くのは、難しいです。月末でいいのであれば、行かせて頂きます！」木嶋は、メールの入力をして、玲のアドレスへ送信した。
あとは、玲からの回答待ちであった。
残業を終えて、再び、携帯を取り出した。
木嶋は、仕事をしている間は、携帯を小物入れに入れている。
仕事柄、携帯を持ちながらの仕事でない。
着信に気がつくのは、休憩時間の時なのだ。
携帯の側面が、光っている。

どうやら、電話の着信らしい。
木嶋は、携帯を持ちながら、ロッカールームに向かった。
着替えが終わり、会社の送迎バスに乗った。
「玲さん、先ほどは電話をありがとうございます。後ほど、連絡をします！」玲にメールをしたのだ。
バスが会社から出て、最寄り駅に向かって行く。
片道１０分ぐらいの距離を毎日、走行している。
１９９０年代の木嶋は、仕事が終わってから良く走るのが日課になっていた。
それは、一時期、会社の名物になっていた。
《何事も、継続することは大切なこと》である。
【途中で投げ出すことも、誰にでも出来る。】
その一瞬に、輝き続けていれるのだろうか？
一流選手でも、全盛期はある。
それは、年齢と共に、下降線を描いている。
木嶋も、陸上選手で大会に出場していて、ベストタイムを出したことはあった。
２１世紀になって、周りの環境が変わり、仕事が終わってから走るタイミングを逃してしまった。
それ以来、陸上仲間と飲んだ機会は、はるかと出会った日が最後になっていた。
『郷田さんたちは、元気にしているのかな？』いつも心で思っていた。
送迎バスが、会社の最寄り駅に着いた。
木嶋は、携帯をリュックから取り出し、玲の携帯番号を確認してから発信した。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出していた。
なかなか…電話に出ないので、木嶋も、少しイラ着いていた。
何度も呼び出しても、電話に出てくる気配がない。
冷静に考えてみた。

「そうか…玲さん、車を運転中だから電話に出れない！」そう考え、続けて、

「こちらからの着信履歴が残っている。車から降りた時に、電話が掛かってくるかな？」木嶋の答えが出たのだ。

最寄り駅から通勤で使っている相鉄線に乗った。

その時、携帯が、

「プルッ、プルー、プルー」と鳴っていた。

「誰かな…」と携帯の画面を覗くと、玲からであった。

木嶋は、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが…？」

「玲です。先ほどは、車を運転していて、電話に出られなかったんだ。ゴメンね！」玲が、木嶋に答えていた。

木嶋は、

「そんな予感がしていましたよ。」苦笑いを浮かべて、玲に話したのであった。

玲は、クラブ『O』には、車で通勤している。もちろん、飲酒運転などするはずもない。

飲酒運転をすれば、警察に捕まってしまうのだ。

木嶋は、

「玲さん、メールで書いたように、今週末よりも、月末がいいのですが…」玲に伝えたのだ。

玲は、

「店に入らなくてもいいので、今週末に取りに来て欲しいな！チョコレートは、日にちがそんなに持たないので…」木嶋に話していた。

木嶋は、

「分かりました。時間は、後ほど決めて連絡をします。」玲に伝えて、電話を切ったのだった。

第１９６話

「玲のクラブ『Ｏ』に、出向くようになってしまった。はるかと会う前に、事情を説明した方がいいかな？」木嶋は、はるかの顔を立てないといけないとの思いがあった。

「ガタン、ゴトン」

揺れ動いている電車の中で、携帯を取り出し、はるかのメールアドレスを、受信メールボックスから呼び出していた。

「はるかさん、今週末、会う約束をしていますが、だいたい、何時ぐらいに待ち合わせでしょうか？」木嶋は、はるかに問いかけのメールを送信した。

朝、売店で購入したスポニチを、リュックから取り出した。

普段は、夕刊紙を読むのが日課になっているが、スポニチを会社から持ち帰ってくることもあるのだ。

特に、今日は、競馬面を熟読（じゅくどく）している。

木嶋は、プロ野球のシーズンになると、小室さんや富高さんを誘い…良く観戦に行くので、野球雑誌を購入することもある。

その目安（めやす）は、見出し記事であった。

木嶋が、自分で商品を購入するとき、短絡的（たんらくてき）に選ぶことが多い。

商品を熟慮（じゅくりょ）するときは、はるかが、ブランド物を選んだときが多い。

はるかが、持っている姿を、自分のなりに、【シュミレーション】している。

それが、イメージと合致（がっち）すれば、購入する決断を下している。

木嶋自身は、商品に、こだわりがない。

敢（あ）えてあげるなら、腕時計をこだわるくらいである。

本当に、【欲しい】と思える商品に、なかなか巡り合わない。

安物買いの銭失（ぜにうしな）いはないように、心がけをしている。

ただ、自分が使いたい、買いたいと思った時は、
【ヨドバシカメラ】、【ビックカメラ】など、他店で、自分なりの《プライス調査》をするのであった。
今、木嶋に必要なのは、はるかだけなのであった。
スポニチを閉じ、携帯の側面を覗くと、メールの着信のサインが出ていた。
携帯の受信メールボックスを、スクロールした。
はるかからであった。
「木嶋さん、お久しぶりです。今週末の待ち合わせは、いつもの時間にしようかと思います！何か？都合が悪くなったいのですか？」
木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「以前、はるかさんに、夜間高校の同級生が、関内のクラブに勤務している話しをしたと思いますが、金曜日、顔を出さないといけないので、報告をしたのです。」はるかに、メールを送信した。
すぐに、はるかからメールが返信されてきた。
「同級生のお店に、行かないといけないのですか？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「バレンタインチョコレートを渡したいと言うので、午後8時以降で、調整しようかと考えていますが…。」再び、はるかにメールしたのであった。
「ピローン、ピローン、ピローン」着信音が鳴っている。
木嶋は、携帯を開くと、はるかであった。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。チョット、意味が分からないので、電話しました。
何故、同級生のお店に行かないといけないのですか？」はるかが、
木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「今も、メールしたように、チョコレートを取りに来て欲しいと

…。」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「それは、木嶋さん、あなたを誘うための口実にしか…私には、聞こえません！そんなに、私より、同級生がいいのですか？」木嶋に、強い口調で話していた。

その口調から、はるかが、怒っていることを、木嶋は、察していた。

「じゃあ、どうすればいいのかな？」はるかに問いかけた。

はるかは、

「私も、一緒に行きます。」木嶋に伝えた。

木嶋は、

「えっ…一緒に、クラブに行くの？」驚いた様子で、はるかに聞いたのだ。

「木嶋さんと、一緒に行きますよ！ただ、クラブの中には、あなた…一人で行って下さい！私は、お店のビル近くに、カフェがあるので、そこで、待っていれば、同級生も、あなたを引き留めることはしないでしょう？」はるかは、木嶋に提案していた。

さすがに、木嶋も、返す言葉が見当たらない。

「同級生に、何て言えばいいのだろう！」はるかに尋ねていた。

はるかは、

「木嶋さんが、考えて下さい。そこへ行く時間は、午後8時でお願いします。」木嶋に話していた。

木嶋は、

「分かりました。そのように、同級生に伝えます。」はるかに話し、電話を切ったのだった。

第197話

頭を悩ましながら、

「玲に、どう言えば誠意が伝わるのだろう！」言葉を考えていた。

慌てるときは、なかなか思いつかない。

「そうだ。急用が出来たと言えば、玲も、納得するはず…。」木嶋は思いついたのだった。

「我ながら、名案だ…と。」自画自賛していた。

一時期、はるかのことが、疎ましくて…メールや電話が鳴っても、出るのが嫌なときもあった。

冷静に見れば、はるかにしたことも、玲に、これからしようとするも同じである。

はるかには、そんなことをしないと、心に決めていた。

いつかは、みんなと別れる日が、刻一刻と近づいているのも、否定は出来ない。。。

それまでの時間ぐらいは、一生懸命、はるかを大切にしよう。

自分を振り返ったとき、若い頃から見たら、勢いが無くなっている。

悲観的に、なってしまいそうである。

先ほどまで、電車の中で通話をしていていたので、他の乗客に睨まれていた。

まだ、木嶋の乗っている電車は、支線であり、乗り換え駅まで、乗降客が少ないのだ。

《チラッ、チラッ、》

雪が降ってきた。

【この時期に、珍しいな！】

雪が降るのだから、気温が低いはずである。

どの電車に乗っていても、暖房が効いていて、外気温との差が判らない。

乗り換え駅に着いたが、今、乗っている電車で、そのまま横浜駅に向かった。
時間帯にもよるが、各駅停車しかなく、
木嶋が、私用(しよう)で、会社を、午後半日有給を取得すると、家まで帰る時間が、いつもより、倍になってしまう。
電車に乗っているだけで、疲れてしまうこともある。
ゆったり帰るときは、はるかと待ち合わせの約束をしていて、心が、嬉しくて、
『スキップ』している。
木嶋の性格を考えると、ゆっくりと、各駅停車で帰る選択肢はない。
一秒でも、家に着いて寛ぎたいと思っていた。
もう一つの悩みは、
「富士松さんを誘うには…どうするべきか…！」
木嶋のテーマは、これに決まったのだが、いつまでも、解決しないような気がしていた。
永遠のテーマなのかも知れない。
理想の人を、目の前にすると…立ちすくんでしまう。
木嶋の目に見えない…オーラが出ていた。
それを、改善しない限りは、進展がない。
雪の降り方が、降り始めよりも、強くなっていた。
これからの時期は、水分を多く、足元が滑りやすくなっている。
雪を見るたびに、仲間たちとスキーに出かけた記憶が蘇っていた。
つかの間の青春時代だったと言っても、不思議ではない。
一度、スキーに行かなくなってしまうと、身体が、
【スキーに行こうと気持ちが失(う)せてしまう。】
偽(いつわ)りたくなるようだった。
そんな気心知れた仲間たちと、スキーや陸上を始め、交流が出来たことは、木嶋の財産になっていると…一筋の光りが、輝(かがや)いていたんだと思う。

元々、女性が数少ないので、一人、また一人と結婚をするたびに、ため息と虚(むな)しさが、胸の奥底から込み上げていた。
木嶋の心の傷(きず)を癒すように、
玲、麻美、はるかが現れていたんだと…。
横浜駅からＪＲに乗り換えようと、
階段を、一歩、また一歩、慎重に降りている。
改札を通り、東海道線のホームに着いた。
横浜駅で、東海道線に乗り慣れているせいか、
【ホッ…と】安心感が出ていた。
まだ、雪が降り続いている。
都会の人は、雪に弱い。
テレビの中継で、雪に不慣れな様子が移し出されると、豪雪地方で生活している人たちから見れば、笑いたくなる光景であった。
「ガタン、ゴトン」
電車のスピードが、いつもより遅い。
木嶋は、携帯を取り出し、携帯のニュースを見ていた。
今夜は、降り続くみたいであった。
「明日(あす)の朝、通勤に注意して下さい。」盛んに、天気予報などで呼びかけていたのであった。
「朝、少し早く、家を出ないといけないな！」木嶋は感じつつ、最寄り駅に着いたのであった。

第１９８話

気持ちが定まらない状態の中で、
雪は、降り続いている…。
木嶋は、最寄り駅から家までの道を歩いていた。
「金曜日は、一層のこと、逃げ出したいくらいだ！」そう思わずにいられなかった。
はるかと、玲。
２人が、会ったことは…今まで、一度もないはずである。
麻美と、はるかは、クラブ『Ｈ』の中で、会話はある。
【親しい仲にも礼儀あり】なのか…元々（もともと）、好意的ではない。
木嶋は、
「若い…はるかと、同級生の玲。滅多にない組み合わせだが、どちらを選択してと言われたら…どうしよう？常識的に考えれば、はるかを選択すると思うが…？その時にならないと分からない。」不安な気持ちを抑え切れずにいた。
家に帰り道。
上り坂を上りきったとき、
コンビニ『Ｓ』が、目の前にあったので立ち寄った。
家から最寄り駅まで行く道にあるのは、
このコンビニ『Ｓ』だけであった。
まず先に、木嶋が、手にしたのは、マンガ雑誌『Ｊ』である。
夜間高校に通学していた頃、毎週、月曜日発売であったので、買うのが当たり前で、授業が始まる前や休み時間に、読み更けていた。
情報化が進んでいる時代で、色んなマンガ雑誌が乱立しているので、どれを読めばいいのか分からず、
「パラパラ…」と、ページをめくっていた。
最近は、立ち読みぐらいしか読まなくなってしまった。

マンガ雑誌を、読まなくなると、今まで、読んでいたのが、バカらしくなってしまうときもある。

現在も、マンガ雑誌『J』で、、連載をしている作者は、一人ぐらいしか見当(みあ)たらなかった。

あとの作者は、入れ替わってしまった可能性が高く、短時間で、ストーリーを、頭の中で思案しながら覚えるのに、一苦労(ひとくろう)であった。

マンガ雑誌に、飽きてしまったので、競馬雑誌を手に取った。

木嶋は、家にいて、何も予定がないと、一人で、電車に乗り、馬券を買いに行くこともある。

この時期、有力馬は、まだ、放牧から帰ってきて、調教を始めたばかりであった。

目標のレースに仕上げるには、まだ、時間がかかる。

木嶋が、はるかから、言われていることは、

「ギャンブルに、熱くならないように…！」警告を受けていた。

ギャンブルは、一度、大金を握ってしまうと、嵌(は)まる。

世の中、景気が悪いと、収入が減り、誰でも、楽をして、今まで維持していた生活が出来なくなってしまい、楽してお金を儲けたいと考えるのであった。

それを補うために、ギャンブルに走り、蟻地獄から抜け出せないようなの毎日が続いて行く…。

そう考えると、【恐ろしいな…と】思ってしまう。

木嶋は、

「自制心を、持たないといけないと…」戒(いまし)めていた。

誰でも、趣味を持ったり、女性を、好きになることも大切だと思う。

交際した女性に、ツキがあるなら最高だと思うが、はるかの場合は、何かを持っているのかも知れない。

何を持っているのかは、木嶋には分からない。

コンビニで、デザートと、煎餅(せんべい)を購入して、レジに向かった。

会計を終えて、外に出た。

雪が、先ほどから比べると、強さを増して降っていた。
「シャリ、シャリ」
雪を、踏み締めるたびに、足元から寒さが見に染みて行く。
両手を口元に当て、
「ハー」と、息を吐いた。
手袋をすればいいのだが、朝、家を出るときに忘れてしまい、置いてきてしまっていた。
もうすぐ家に着く距離だが、雪の重みで、足が、前に出なくなっていた。
「あと、少しなのに…。」
普段なら、コンビニ『S』から歩いて5分ぐらいで、家に着くのである。
歩いていても、距離が、なかなか縮まらずにいた。
やっとの思いで家に着いた。
靴を脱ぐと、足が、ビッショリと濡れていた。

第１９９話

木嶋は、部屋の窓から外を眺めていた。
「これだけ…雪が降り続けば、明日の朝、交通機関に影響はあるかな？」
テレビの電源を入れ、いつも見ているニュース番組にチャンネルを合わせようとしたが、
掛け時計を見ると、
時刻は、午後９時３０分を過ぎたばかり…。
まだ、時間まで余裕があったので、日本テレビにチャンネルを入れ直したのだ。
毎朝、日本テレビの「ズームインＳＵＰＥＲ」を見ているので、違和感はない。
今は、冬のドラマの真っ盛り…。
ドラマの次週予告を見ていた…木嶋は、
「そろそろ時間になるかな…」
リモコンで、チャンネルを、テレビ朝日に入れ直したのだ。
いつものように、ニュース番組が始まった。
遅くまで残業したり、
はるかと、遊んだりしていると、最新情報を、掴むのは難しい。
木嶋は、ニュース番組が貴重な情報源であった。
最初のトップニュースで、大雪情報を伝えていた。
木嶋は、テレビ画面へ、食いつくように見ていた。
案の定、明日の朝は、スリップに注意と報道していた。
朝は、路面凍結（ろめんとうけつ）の可能性が高い。
最寄り駅までの通勤ルート　に、１カ所、下り坂がある。
　そこで、コケたら…シャレにならない。
バスで行くルートもあるが、雪が降ったあとでは、最寄り駅まで行くにも時間が掛かってしまう。

どちらが最善策か?考えた場合、歩いて行くのがベストな判断である。

ニュース番組も中盤に差し掛かり、そろそろ…風呂に入りに行こう。

手元にあったリモコンで、テレビの電源を切った。

湯舟(ゆぶね)に浸(つ)かりながら、富士松さんのことを考えていた。

長く入っていると…逆上(のぼ)せてしまう。慌てて湯舟から出たのであった。

脱衣所で着替えを終えて、ストーブに当たりながら、新聞を広げ読んでいた。

朝、寝起きでは、新聞をパラパラとめくりながら、流して読んでいたので、内容が理解出来ずにいた。

目覚ましを、いつもより10分ぐらい早目(はやめ)にセットした。

木嶋には、この10分と言う時間が貴重である。

普段から、遅くまで起きているが、シンデレラではないが、夜11時30分頃までに寝ないと、体力的に辛くなってしまう。

人にも寄るが、7．8時間、寝ていても大丈夫な人も居れば、2．3時間でも大丈夫な人もいる。

木嶋のベストな睡眠時間は、5時間30分なのであった。

朝、起きたら、前日の不安が的中していた。

路面が凍結していた。

「ヤバイな!早く、ご飯を食べて、身支度を整えたら行こう!」

木嶋は、慌てながら支度を終えたのだった。

家を出て、最寄り駅まで、いつもと同じ道を歩いて行く。

両手にしている手袋は、はるかから、誕生日プレゼントで貰ったものであった。

木嶋と、はるかは、趣味が違うが、何故か?お互いに安心感がある。

「はるかと一緒にいると、居心地(いごこち)がいい。」

それは、はるかも同じだと話していたことを思い出していた。

一歩ずつ…両足に力を入れながら歩いている。
雪国で暮らしている人から見たら、笑ってしまうのだろうか？
そんなことを考え、最寄り駅に着いた。
木嶋の身体が、やっと目覚め始めた感じになっていた。
『ＫＩＯＳＫ』で、スポニチを買うのも、毎日の日課になっている。
駅に着くと、まだ、朝６時を過ぎたばかり…
サラリーマンやＯＬの人たちが、ホームが人で溢れ返っていた。
「事故でも…あったのかな？」
木嶋は、Ｇパンのポケットから携帯を取り出し、
ダイヤ運行情報を確認をしていた。
「雪の影響で、間引き運転をしています。」携帯に着信メールが届いていたのであった。
「そうか…間引き運転していたのか？時間に、【ゆとり】があるから、まだ平気なはず…」そう思っていた。

第２００話

「間もなく、電車が参ります。危ないですから黄色の線に下がってお待ち下さい！」ホームのアナウンスが聞こえていた。
電光ボードを見ると、
木嶋が、いつも乗る時間の電車と同じであった。
【パーン】
クラクションを鳴らしながら、京浜東北線がホームに入って来た。
朝早い時間なのに、乗車している人が多くいた。
「普段、京浜東北線に乗車している人が少ない。昨日の大雪で、影響が残ることを、ニュースで流していたので、車通勤の人が、電車に変えた影響もあるのかな？」そう感じていた。
木嶋が、電車に乗り、長い座席の空いていたところに座った。
すると…会社の先輩である石崎さんに会ったのだ。
木嶋が、
「石崎さん、おはようございます。」石崎さんに、挨拶（あいさつ）をしたのだ。
「オッ…木嶋か？おはよう。いつも…この電車なのか？」石崎さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「そうですよ。毎日、この電車で、通勤をしています。石崎さんが、電車で会社に行くなんて…珍しいですよね？昨日、自分の携帯に連絡をくれれば良かったのに…。」石崎さんに答えたのだ。
石崎さんは、
「朝、車で行こうか？どうしようか？迷ったんだ。家の前の道路に出たら、雪が積もり、路面が凍結していたから、電車で行くことにしたんだ。木嶋の携帯に、電話をしようか考えたんだが、朝早くにするのは失礼だからな！」木嶋に思いやりながら、笑顔で話しをしていた。

木嶋は、
「石崎さん、横浜駅で乗り換えるのですか?」石崎さんに聞いていた。
「木嶋は、どうするんだ。」石崎さんは、木嶋に問いかけていた。
「自分の通勤ルートは、横浜駅で乗り換えなので、そちらで行きますよ。」木嶋は、石崎さんに伝えた。
石崎さんは、
「自分も、朝、娘に調べてもらったんだ。横浜駅で、乗り換えた方が料金が安いと言われたからそうしようかと思っていたんだ。」
木嶋に答えていた。
「それなら石崎さん、自分と一緒に行きましょう!」石崎さんに話したのだ。
木嶋も、毎日、一人で通勤しているので、
石崎さんと一緒に、通勤出来るのが嬉しかった。
話しをしていたら、
「間もなく、横浜、横浜です。」車内アナウンスが聞こえてきた。
先ほどまで、寒さに震えていたので、電車の中で、心地好い暖かさに感激していた
横浜駅で、相鉄線に乗り換えるので、
ドアの前に立っていた。
「プシュー」
ドアが開いた。
足元を注意しながら、階段で一歩、一歩降りて行く。
改札を出て、相鉄線に乗った。
ここでも、間引き運転を実施していた。
いかにして…首都圏が、大雪に慣れていないのか…分かってしまった。
電車が、電光ボードよりも、早く入線していた。
木嶋は、
「石崎さん、相鉄線も、間引き運転ですから、いつ発車になるか

？判りませんよ！」石崎さんに話したのだ。
一縷の望みを託しながら、
「プルー」と、発車ベルが鳴り響くのが聞こえていた。
「ピンポン」
ドアが閉まり、横浜駅のホームから発車した。
走り出しも、普段より遅い。
朝、線路が凍結していたのか…。
これは、普段、見られない光景と言った方がいいかも知れない。
「木嶋、すぐに発車したぞ。」石崎さんは、木嶋に問いかけるように話してきた。
木嶋は、
「間引き運転ですから、仕方ないですよ。」石崎さんに答え、
リュックの中からスポニチを取り出し、手渡したのだ。
「最近、スポーツ新聞を読んでいないからな…」石崎さんは、ボヤきながら新聞を広げて読み始めたのだ。
木嶋は、リュックから黄色の手帳を取り出し、昨日までの残業時間と臨時出勤の時間を、パラパラめくりながら確認していた。
携帯が、
「プルッ」バイブレーターの振動していた。
それは、一通のメールの着信があったのだ…。

第２０１話

携帯を覗くと…
はるかからの着信であった。
「木嶋さん、おはようございます！昨日の大雪の影響で、通勤するのに、大変かと思いますが、足元に注意をして下さい！」
木嶋は、
「そんなに、気を遣うことないのに…。」メールの内容を読み…
はるかの好意に感謝していた。
例え…メールでも、はるかと気持ちが繋がっていると思うと嬉しく思っていた！
本当なら、はるかも、電話で話しをしたいはずなのに、
「朝の身支度の合間（あいま）の中で、メールを送った。」と思っていた。
それが、はるかの【思いやり】だと理解をしないといけない…と感じていた。
木嶋は、すかさず…
「はるかさん、おはようございます。今日は、朝からメールを頂き、ありがとうございます。雪で、テンションが低くかったので、元気が出ました。はるかさんも、足元が悪くなっていますので、ケガをしないように注意して下さい。」メールを送信した。
右横で、スポーツ新聞をを読んでいた石崎さんが、
「木嶋、まだ、会社の最寄り駅に着かないのか？」木嶋に声を掛けたのだ。
木嶋は、
「アッ…ごめんなさい。先ほどまで、メールを読んでいたりしていたので、今、どの辺りが気にしていなかった！時間的に、もうそろそろだと思いますよ！どこを走行しているのかな？」石崎さんに答えたのだ。
「もう…着く頃ではないのか？」石崎さんは、木嶋に問いかけて

いた。
木嶋は、電車の窓から通り過ぎた景色を見た。
晴れて雲がないときには、富士山が右手に見える。
「石崎さん、富士山が右手に見えませんか？会社の最寄り駅まで、あと少しじゃないですか？」石崎さんに話したのだった。
石崎さんは、
「どれ…本当か？」身を乗り出して窓から眺めていた。
「日本人は、富士山を見ると安心するな！」石崎さんは、木嶋に声を掛け、
木嶋は、
「そうだよね。富士山をみると安心するね！」石崎さんに答えたのだ。
「間もなく、終点です。どなたも、お忘れ物がないようにお願いします！また、本日は、足元が滑り易くなっております。注意して下さい！」車内アナウンスが聞こえていた。
「石崎さん、もうすぐ着きますよ！」木嶋は、石崎さんに声を掛けた。
石崎さんは、右手に持っていたスポーツ新聞を、
木嶋に返したのであった。
石崎さんから渡された、スポーツ新聞をリュックの中にいれていた。
一人の通勤に慣れてしまうと、一緒にいる石崎さんに何を会話をすればいいのか判らない。
乗り換え駅から終点までの時間は、目をツブリ寝ているのだった。
それが、最近の日課になっていた。
トンネルに入った。
「何だ…会社の最寄り駅は、地下にあるのか？」石崎さんは、木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「えぇ…そうですよ。地下ホームの３Ｆです。」石崎さんに話し

ていた。
電車が地下ホームに着いた。
「プシュー」エアー音が響き、ドアが開いた。
木嶋は、石崎さんを誘導するように、
エスカレーターで上がっていった。
改札を左に出て、階段を上がって行く。
路面が、ビチョビチョで、
「シャリ、シャリ」と音を立てながら歩いていた。
木嶋は、
「石崎さん、足元は大丈夫ですか?」石崎さんに声を掛けたのだ。
石崎さんは、
「俺は、大丈夫だ。それにしても重い雪で歩きにくいな!」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「もうすぐ、バスに乗れますよ!」
バスが停車していた乗り場に向かっていた。
乗車すると、立っている人が多かった。
「みんな…車を置いて来たんだな!」木嶋も、石崎さんも同じことを考えていた。
バスが発車した。
「ガラン、ガラン」
後ろの後輪に、チェーンを巻いている音が聞こえる。
チェーンを巻いて走行しているので、速度が遅く感じていた。
バスが左折すると、車の渋滞であった。
渋滞しない道路なので、「マジか…こんなに混んでいるの?」
木嶋は驚き、バスの運転手さんに話していた。
バスの運転手さんも、
「今日は、いつも以上に混んでいますね!」言葉を返した。
木嶋は、困惑した表情を見せていた。

第２０２話

やっとの思いで、バスが会社に着いた。
会社の通路にも、雪が積もっていた。
人が歩けるくらい…雪が除雪されていて、みんなで雪を掻き分け…ロッカールームに向かって歩いて行く。
足元が、滑りやすくなっていた。
「ツルッ」
「前へ倒れそう…。」
地面スレスレで倒れそうになり、とっさに両手を出した。
両手に手袋をしていたので、大きなケガに繋がらずに済んだのであった。
ロッカールームで着替えを終え、寒さに震えながらも、職場に着いた。
一休みをして、職場前の通路の除雪を開始した。
木嶋は、
「トンボ」を手に除雪していた。
思うように作業が、捗(はかど)らなくて、
「イライラ」していた。
除雪作業が終わり、
木嶋は、はるかと待ち合わせに心を落ち着かせながら仕事に入った。
昼休みに入るチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。
食堂で食事を終えた木嶋は、石崎さんがいる職場に向かった。
石崎さんは、小室さんと同じ職場であった。
木嶋は、
「石崎さん、朝は、ご苦労さまでした。」石崎さんに伝えた。
石崎さんは、

「おっ…木嶋か?朝は、お疲れさん。ケガは大丈夫か?」木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「大丈夫です。心配かけて申し訳ないです。」石崎さんに答えたのだった。

職場に戻り、木嶋は、仕事を終え、会社の送迎バスに乗り、最寄り駅近くのコンビニで夕刊紙を購入してから横浜駅に向かった。

横浜駅に到着して、待ち合わせ場所のコーヒーショップ『Y』には、木嶋が先に着いた。

周りを見渡し、座席を探していた。

コーナーが空いていたので、そこにリュックを置き、夕刊紙を取り出し読んでいた。

店員さんが、木嶋の座っている座席に来て、

「こちらは、メニューです!決まりましたら、お呼び下さい。」声を掛けたのだった。

普段と変わらない表情で、パラパラとメニューをめくっていた。

はるかとの待ち合わせは、毎回、コーヒーショップ『Y』に来ているので、メニューを見なくても、大体、把握している。

「定番のセットメニューにしようか?単品でオーダーしようか?」木嶋は悩んでいた。

「家で、ご飯を食べるから…ここで、満腹にすることもない!ケーキセットにしようかな?」木嶋は結論を出した。

男性店員を呼んだ…

店員さんが、木嶋の座席に来て

「ミルフィーユのケーキセットで、飲み物は、ホットのアメリカンコーヒー!」木嶋は、男性店員さんに伝えた。

男性店員さんは、

「かしこまりました。ミルフィーユのケーキセットとホットのアメリカンコーヒーですね!少々、お待ち下さい!」木嶋に伝え、その場を離れた。

木嶋は、
「今、コーヒーショップ『Y』にいます。」はるかにメールした。
はるかから、
「判りました。これから向かいます！」木嶋に、返信メールが届いた。
木嶋が、コーヒーショップ『Y』に来てから、２０分が経過していた。
はるかの靴音が、
「カッ、カッ、カッ」と聞こえてきた。
木嶋のいる座席を探し、コーナー席に来た。
「お待たせしました。」はるかが、木嶋に伝えた。
木嶋は、
「待ってました。」先ほどまで、強張った表情とは裏腹に、笑顔で、はるかを迎えた。
はるかは、早速、バレンタインチョコレートを木嶋に渡した。
木嶋は、
「ありがとうございます。今年も手作りかな?」はるかに尋ねた。
はるかは、
「もちろん、手作りですよ。一年に一回は、手作りしないとね！」
木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「そうだよね！」はるかの話しを頷いていた。

第２０３話

はるかは、
「木嶋さん、もう一つ…プレゼントがあります！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「本当に…何だろう？楽しみだね！」
ワクワクしていた…
はるかは、【ＨＥＲＭＥＳ】のトートバッグから、何かを取り出した。
木嶋は、
「そのトートバッグ…随分、使い込んでいるね！」はるかに話したのだ。
「木嶋さんから、私の誕生日プレゼントして頂いた物なので、大切に使っています。これは、ハワイのお土産です。」木嶋に、小さな瓶を手渡した。
木嶋は、
「マカデミアナッツだ…ありがとうございます。マカデミアナッツは、良く…地元のスーパーなどで買ってます。」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「良かった。喜んでくれて…ハワイで、買い物で夢中になり過ぎてしまい、木嶋さんへ、小さなお土産で申し訳ないです。」木嶋に頭を下げていた。
木嶋は、
「そんなことを、気にしていません！」はるかに話し、続けざまに…
「はるかさん、クラブ『Ｈ』のラストインは、いつになったのですか？」はるかに問いかけていた。

「クラブ『H』のラストインは、来週の水曜日です…。木嶋さん、富高さんと一緒に来て頂くことは、出来ませんか?」はるかは、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「随分、急な話しだね!ラストインを変えることは不可能なの?」はるかに話していた。

はるかは、

「私は、4月から社会人として、会社勤務の生活が始まります。いつまでも、クラブ『H』に縛(しば)られたくありません。残り少ない…学生生活を、友達と一緒に楽しみたい。遊びたいのです。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「残り少ない…学生生活か…自分も、経験があるから、はるかさんの気持ちは、理解が出来ます。時間は過ぎてしまいますが、リバースは利(き)かないよ!」はるかに話したのだ。

「木嶋さんに、私の気持ちを話して良かった。一番、理解してくれている。ありがとうございます!」はるかは、木嶋に伝えた。

木嶋は、

「照れるじゃないの?」はるかに、苦笑いしていた。

はるかは、

「木嶋さん、関内に向かわなくていいのですか?」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「そろそろ…ここを出て、関内に行こうかなと思っていたのですよ。」はるかに答えていた。

はるかは、

「木嶋さん、関内に行きましょう。」木嶋に声を掛け、座っていた席を立ち、階段を降りていく。

木嶋も、はるかのあとを追いかけるように、会計伝票を右手に持ち、階段を降りて行く…。

はるかは、木嶋が来るのを、店の外で待っている。
木嶋は、会計を終えて、はるかの元に小走りしていた。
はるかと木嶋が、並んで歩くのは珍しい光景であった。
木嶋が、先に歩き、はるかが、遅れて歩いて行くのが当たり前であった。
関内にある…
玲のクラブ『O』
はるかから見たら、
「木嶋さんは、誘惑に弱い。私が、一緒に行けば…誘いを断るはず…。」木嶋の心を透かしていた。
木嶋は、はるかの思いを知らずに、
「玲の誘いを受けたら、断るのも…どうなのかな?はるかの気持ちを、考えると悩ましい選択だ!」
心が、《グラグラ》
音を立てて、揺れ動いている。
「カッ、カッ、カッ」
ヒールの靴の音が地下に響く。
木嶋は、
「先に、改札を入って待っているよ。」はるかに声をかけた。
はるかは、右手を上げ、ＪＲの運賃表を見つめ…
トートバッグの中から、財布を取り出した。
【ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ】の財布であった。
木嶋は、はるかと付き合うようになってから、
ブランドメーカーの名前が、少しずつ…判るようになっていた。
【ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ】か…!
木嶋は、
「財布を購入したことがあったかな?」思案していた。
はるかの誕生日やホワイトデーの贈り物で、
【ＬＯＵＩＳ　ＶＵＩＴＴＯＮ】、【ＨＥＲＭＥＳ】は贈った記憶がある。

トートバッグとポーチぐらいしか思いつかない。
はるかが、改札の中にいた木嶋の元に来た。
「木嶋さん、行きましょう。」木嶋に声をかけ、
京浜東北線のホームに向かったのだった。

第２０４話

木嶋は、
「はるかさん、歩くのが早いよ！」はるかに声をかけた。
はるかは、
「あっ…早過ぎました。ゴメンなさい。」木嶋に話したのだ。
木嶋と、はるかは、京浜東北線のホームに着いた。
「木嶋さん、関内駅は、どちらの改札が、クラブ『Ｏ』に行きやすいのですか？」はるかは、木嶋に問いかけていた。
「クラブ『Ｏ』へ行くには、最後尾に乗って下さい。」木嶋が、はるかに答えたのだ。
はるかは、颯爽（さっそう）と、最後尾に向かって歩き出していた。
闊歩（かっぽ）して歩く…はるかから、少し遅れて、木嶋は歩いていた。
電車が、
「パーン」と、クラクションを鳴らし、ホームに入ってきた。
京浜東北線の側面行き先表示を見ると、
【桜木町駅】止まりであった。
次が終点なので、乗降する人は、数えるぐらいしかいなかった。
関内駅は、もう一つ先の駅だ。
木嶋と、はるかは、次の電車で行くことを決めた。
「えっと…桜木町行きの次は、磯子行きか…」木嶋は呟きながら、ホームの行き先表示を見上げていた。
「プシュー」桜木町行きのドアが閉まったのだ。
「ガタン、ゴトン」電車が動き出した。
前の電車が行ってから待つこと…3分が経過していた。
今年の冬は、寒さが厳しい。
いくら…暖かいダウンを着ていても、身体が寒く感じていた。
「パーン」再び、クラクションを鳴らしながら、電車が入ってきた。

先ほどの電車と、打って代わり、降りる人が大勢いた。
横浜駅から乗る人も、同様であった。
「プルー」発車ベルが鳴っている。
ホームのアナウンスが、
「ドアが閉まります、ご注意下さい！」注意喚起(ちゅういかんき)していた。
「ピンポン」ドアが閉まった。
木嶋は、空いている座席があるか、周りを見渡した。
最後尾なので、乗っている人も、前の車両から見ると、少なく感じていた。
車両の真ん中辺りに、空いている座席を見つけ、木嶋は、座ったのだ。
はるかも、木嶋の隣りに座った。
桜木町、関内…たった2つの駅だが、立つよりも、座った方が楽であった。
車内アナウンスが、
「間もなく、桜木町～、桜木町です。」聞こえていた。
桜木町駅のホームには、大勢…乗客が待っていた。
「バレンタインデーが、経過してから日にちが浅く、土曜日で、まだ、時間が早いから、みんな…他の場所へ飲みに行くのかな？」
木嶋は、反対側の窓から見つめていた。
「プシュー」ドアが開いた。
車内が、先ほどまで、静寂(せいじゃく)さから、賑(にぎ)やかな雰囲気に一変(いっぺん)していた。
木嶋の乗っている車両には、若いカップルが多く乗ってきた。
隣りに座っている…はるかと、すぐに比較をしてしまう。　これは、木嶋の悪いクセなのだ。
「はるかの方が、当然(とうぜん)いいはずだ。」
見た目、年齢差がありそうなカップルも、中には見受けられた。
実際に、若いカップルたちから見たら、
「自分たちをどのように思っているのだろうか？甚(はなは)だ…疑問であ

る。」木嶋は、そう捕らえていた。
桜木町駅を発車した。
「ガタン、ゴトン」揺られている。
「間もなく、関内～、関内です。」車内アナウンスが聞こえていた。
木嶋は、
「はるかさん、関内ですよ！」はるかに声を掛けたのだ。
はるかは、
「は～い。」木嶋に答えていた。
電車が、関内のホームに着いた。
「ピンポン」音を立て、ドアが開いた。
関内駅は、先頭か…最後尾に乗らないと、改札口まで遠いのだ。
木嶋は、はるかと一緒に階段を、一段ずつ降りて行く。
改札を左に出て、木嶋は、
「はるかさん、こちらです。」はるかを、エスコートした。
はるかは、
「やっぱり、関内は、私には、寂(さび)れた街にしか見えない！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「はるかさん、そんな言い方をしたらダメだよ！関内で、働いている人もいるのだからね。」はるかを諭すように、話したのだった。

第２０５話

はるかは、
「私は、どこで待っていようかな？この辺りに、コーヒーショップは…あるの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「関内は、プロ野球を観戦に来ますが、反対側の出口。こっちは、あまり歩かないから、コーヒーショップが、あるか？ないか？解りません！はるかさんが、探した方がいいかもしれません！」はるかに答えたのだ。
「そうですか…。歩きながらですが、ファーストフードショップ『Ｍ』は、大通り沿いで見つけたのですが…。今、木嶋さんが行こうとしているクラブ『Ｏ』は、この近くに、ないのですか？」はるかは、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「まだ、歩きます！関内駅から遠いんですよ。」はるかに伝えた。
はるかは、
「マジですか？なんか…歩く元気がなくなって来ちゃいました！木嶋さん、横断歩道を渡らずに止まって下さい。」木嶋に話し、【ＨＥＲＭＥＳ】のバッグから携帯を取り出した。
「今の現在地は…どこかな？」携帯の画面を覗きながら、関内駅からのマップを出していた。
はるかは、
「木嶋さん、この近くに、コーヒーショップ『Ｓ』があるので、そこに行きませんか？」
木嶋は、
「いいよ。歩いて…どれくらいの距離かな？」はるかに聞いていた。
はるかは、

「およそ…5分ぐらいですね！」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「分かりました。コーヒーショップ『S』に行きましょう！」はるかに同意を求めた。
はるかは、
「ヤッター」と、声を上げ…喜びを表現していた。
大通りの横断歩道を直進して、最初の路地を左に曲がった。
少しすると…
コーヒーショップ『S』があったのだ。
木嶋は、玲や麻美のいるクラブ『O』や『P』などに、何度も来てはいるが、大通りから歩いて行くので、一本裏（いっぽんうら）までは、気がつかなかった。
関内駅周辺に、ファーストフード『M』があるのを認識していたぐらいであった。
木嶋は、
「はるかさんを、関内に連れて来て…正解なのかな？」頭の中では、クエスチョンマークが付いていた。
コーヒーショップ『S』に入り、木嶋は、奥のテーブルに座った。
はるかは、
「何にしようかな？」
メニューを見上げながら思案していた。
オーダーするのが決まったみたいである。
木嶋を、手招（てまね）きしていた。
リュックを座席に置いて、はるかの元に向かった。
「はるかさん、決まったの？」はるかに問いかけたのだ。
はるかは、
「木嶋さん…あとで、食事をしますよね？」木嶋に聞いていた。
「横浜に戻って、食事をしようかと考えていますが、はるかさん、予定があると話していましたよ。」木嶋は、はるかに答えたのだ。
「そう言えば、予定があったんだ。」はるかが、残念そうに、木

嶋に伝えた。
木嶋は、
「仕方ないね！何を、オーダーするのかな？」はるかに尋ねた。
はるかは、
「ホットでイングリッシュブレックファースト。ショートサイズでお願いします。」
「ホットのイングリッシュブレックファーストね。」木嶋は、復唱した。
はるかは、木嶋のリュックが置いてある座席に向かった。
女性店員さんが、
「ご注文が、お決まりでしたら…承り致します。」木嶋に声を掛けた。
木嶋は、
「ホットのショートサイズで…イングリッシュブレックファースト。」女性店員さんに伝えた。
「ホットのイングリッシュブレックファーストのショートサイズですね！畏まりました。３４０円です。」女性店員さんが、木嶋に答えていた。
木嶋は、Ｇパンのポケットから財布を取り出し、３４０円を女性店員さんに渡した。
「レシートは要りますか？」女性店員さんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「要りません！」と答え、
後方では、男性店員さんが、手際良く、
《イングリッシュブレックファースト》を作っていた。
《こちらが、ホットのイングリッシュブレックファーストです。》女性店員さんが、木嶋に手渡した。
木嶋は、
《イングリッシュブレックファースト》を持ち、はるかが、座っている座席に歩いて行くのであった。

第２０６話

木嶋は、
「はるかさん、お待たせしました。イングリッシュブレックファーストです。」はるかに手渡した。
はるかは、
「ありがとうございます。私は、ここで、本を読んで、木嶋さんが来るのをて待っていますので、同級生のお店に、行って来て下さい。」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「ありがとうございます。はるかさんの言葉に甘えて、少しの間、一人にしてしまいますが、なるべく早く戻って来ます！」はるかに話し、リュックを背負い、
コーヒーショップ『S』を出て、クラブ『O』に向かった。
関内は、官庁街なので、たくさんビルが立っていて、風がない日でも、
【ビュー、ビュー】吹きおろしていた。
ダウンコートを着ていても、寒く感じる。
いつもは、携帯カイロを使うが、朝、家を出る時に、寒さを感じなかったので、持たずに出たのだ。
先ほどの大通り近くの信号に出た。
ここから先は、記憶を辿りながらに行くしかない。
クラブ『O』は、一年に一回か、二回しかなく、玲が、その日にいるのを確認してから行動を起こしているのだ。
「ズッ、ズッ、ズッ」歩く音だけが、こだまする。
「確か…この辺りに、コンビニがあったような気がする…どこだったかな?タクシー会社も、その通り沿い。」木嶋は、独り言を言いながら、周りを見渡した。
「あっ…ここかな?」

タクシー会社の背中越しにあるのは、コンビニ『F』であった。
コンビニ『F』を背にすると、目の前に大きなビルが、そびえ立っていた。
そのビルの看板を見上げると…
クラブ『O』の看板があった。
《やっと…ここまで来たって感じかな?マラソンで言えば、折り返し地点に到達。後半を走らないとゴールに辿(たど)り着かないってことだな!無事に、帰れますように!》両手を合わせていた。
「ガチャ」
クラブ『O』のドアをが開けた。
木嶋は、緊張が走った。「いらっしゃいませ」
若い女性たちの声が聞こえ、年配の男性の声も入り混じっていた。
「お一人様ですか?」若い女性スタッフが、木嶋の元に歩いて来た。
木嶋は、
「玲さんに、用事があって来ました。呼んで頂けますか?」若い女性スタッフに話したのだ。
若い女性スタッフは、
「玲さんですね!今、呼んで来ますので、お待ち下さい。」木嶋を、店の入り口付近で待たせて、奥に歩いて行った。
待つこと…10分。
コーヒーショップ『S』で、はるかが待っていることが、気になっていた。
玲が、木嶋の元に来た。
「木嶋君、お待たせ…。」
「玲さん、待ちくたびれましたよ!」玲に答えたのだ。
「木嶋君、お店でゆっくり話そうよ!」玲は、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「はるかさんを、コーヒーショップ『S』で待たせているので、

店で飲みたいが申し訳ない。」玲に伝えたのだ。
玲は、
「はるかさんを、待たせているなら仕方ないね！ラブラブな２人の邪魔をしないようにしないとね。バレンタインデーで渡せなかったから、今、取りに行って来るね！」木嶋に話し、その場を離れた。
木嶋は、携帯を取り出し、
「はるかさん、あと１０分ぐらいで戻りますので、もう少し、待っていて下さい。」はるかにメールをしたのだ。
すぐに、メールを受信した。
木嶋は、メールを開いた。
「は～い。待ってます。」はるかからであった。
いくら…暖房が効いていても、待っている人から見たら、早く、用事を済ませてほしいと思うのは、当然の成り行きだと思っていた。
玲が、再び木嶋の元にやって来た。
「木嶋君、これが、バレンタインデーのプレゼント。」
木嶋は、手渡された物を見て驚いた。
「バレンタインチョコレートの他に、プレゼントもあるよ？」玲に尋ねた。
玲は、
「木嶋君、先月、誕生日だったんだよね！それも合わせて一緒にと思ってね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。」玲にお礼を述べ、続けて、
「今度、ここに来た時、玲さんの誕生日をお祝いするからね！」玲に伝えた。
玲は、
「ありがとう。来週でもいいよ！ってね！木嶋君を、これ以上、引き止めるのも悪いので、また、来て下さい。」木嶋に話した。
木嶋も、
「ありがとうございます。」

玲に頭を下げ、クラブ『O』をあとにした。

第２０７話

木嶋は、足早に、はるかの元へ向かっていた。
肌寒いビルの冷(つめ)たい風よりも、
一人、コーヒーショップ『S』で、待たせていることに、罪悪感を感じずにいられなかった。
木嶋は、それだけ、はるかのことが好きで、温(ぬく)もりが欲しいのだ。
【シグナル】を送り続けていても、はるかが、気がついて振り向いてくれない限りは、一方通行である。
それは、富士松さんのことを片思いをしている現状と、【オーバーラップ】さえする。
「ワッセ、ワッセ」息を切らせながら、大通りの道まで、走って戻っている。
「最近、走る機会がなくなってしまったから、少しの距離でも、キツく感じるのは、気のせいだろうか？」ボヤいていた。
大通りを出て、歩行者信号が青になるのを待っていた。
《伏せた写真立て》
夜間高校を卒業する時に、
【卒業記念品】として、先生方からプレゼントされた物だった…。
人数の少ない気の通(かよ)う…同級生たちの華やかな集合写真を思い出していた。
《もう一つ、伏せた写真立てがあった…それを、はるか？富士松さんか？どちらかな《ツーショット》の写真を入れたい！今の時代は、写真立てよりも、携帯カメラで、撮って待ち受けにするこが可能だし、考え方が古くなっているかな？》
歩行者の信号が青に変わり、木嶋は、歩き出した。
額(ひたい)から、
《ウッスラ》と、汗をかいていた。
一番下(いちばんした)に、着ていたTシャツも、少し汗ばんでいた。

再び、コーヒーショップ『S』のドアが開いた。
木嶋は、先ほどと同じ席にいる…はるかを見つけ、
「今、戻ってきました。」声を掛けた。
はるかは、
「お帰りなさい！随分、早かったね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
【ズルッ】と…コケた。
「そんなに、早かったかな？」携帯を取り出し、内蔵されていた時計で、時間を確認した。
「コーヒーショップ『S』を往復して、３０分か…早いと言えば、早かったかもね！」はるかに伝えた。
はるかは、
「私は、退屈していなかったから良かったですよ！木嶋さんに、買って戴いた手帳に、予定を書き込んで整理したり、本を読んだりしていましたからね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「自分も、必死でしたよ！はるかさんを、待たせ過ぎるのは良くないと思い、必死に走って来ました。」はるかに伝え、座席に座った。
はるかは、
「木嶋さん、何年か前まで、陸上をやっていたと話しをされていましたよね？」木嶋に尋ねた。
木嶋は、まだ、息が上がっている。
「はるかさん、チョット…水を持って来るね！」はるかに伝え、後ろにあった…紙コップに水を入れ、
「ゴクッ」と…飲み干した。
木嶋は、
「お待たせして…すいません。一時期、陸上をやっていましたよ！それは、２０世紀ですけど…。」はるかに答えたのだ。
「私も、チャレンジしようかな？」はるかは、木嶋に聞いていた。

木嶋は、
「中途半端は、ダメだよ！やるなら全部…揃えないと…」はるかに話し、続けて…
「待ち合わせがあるんじゃないの？」聞いていた。
はるかは、
「そうですか…。友達と、待ち合わせする約束をしていたのですが…ドタキャンされてしまいました！」木嶋に話していた。
木嶋は、
「タイミングが良いのか？悪いのか？何と言えばいいのだろう！」答えるのに困り果てていた。
そんな木嶋の表情を、はるかは、気がついていた。
「木嶋さん、そんなに…迷惑ですか？」木嶋に問いかけていた。
「いや！そんなことはありません。はるかさんと長い時間を共有出来ることが嬉しいです！」木嶋は、照れ隠ししながら答えていた。
「木嶋さん、ここを出て横浜に戻ってから、食事でもしませんか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「そうだね！関内駅周辺より、横浜駅周辺で食事をしよう！いつもと同じ環境になれば安心だよ！」はるかに話した。
はるかは、
「じゃあ…歩きましょう！」木嶋を誘い、座席から立ち上がり、コーヒーショップ『S』から出て行く。
木嶋も、はるかを見失わないように、後を追い掛けるのであった。

第２０８話

木嶋と、はるかは、関内の大通りに出た。
コーヒーショップ『F』に来るときと同じように、歩行者信号が、赤だったので、青に変わるのを待っていた。
木嶋は、
「はるかさん、今日、何を食べたい！」はるかに聞いていた。
はるかは、
「何にしようかな？木嶋さんは、何がいいですか？」木嶋に問いかけていた。
「いつも、カフェレストランを利用している機会が多いので寿司にしようかと思っていたのですが…！」木嶋は、はるかに答えていた。
はるかは、
「寿司ですか…？今は、回転寿司が主流ですからね。それにしますか？最近、私は、高カロリーの食事をしているので、魚介類を食べたいなと考えていたのです。」
木嶋に話したのだ。
歩行者信号が青に変わり歩き始めた。
「木嶋さん、ここから乗り場が近いので、市営地下鉄で行きませんか？」はるかは、木嶋に聞いていた。
「そうですね。市営地下鉄の乗り場が近いのなら、そちらで行きたいですね！」木嶋は、はるかに答え、
コンビニ近くの市営地下鉄の入口の階段を、はるかが、先に下りて行く。
木嶋も、はるかを見失わないように、急いでいた。
「カッ、カッ、カッ」靴の音。
改札前に着いた…はるかは、
「ここから、横浜まで…２００円か？」運賃表を見上げていた。

少し遅れて、木嶋が、はるかの元に着いた。
「木嶋さん、横浜まで、２００円ですよ！」はるかが、木嶋に伝えた。
木嶋は、
「ＯＫです。」
財布を取り出し、１０００円札を、はるかに預けた。
はるかは、木嶋からのお金を、切符の自動券売機に入れた。
２枚のボタンを押し、切符を取り出し、お釣りを券売機から受けとった。
お釣りと切符を木嶋に手渡した。
木嶋は、
「お釣りは、はるかさんに差し上げます。」はるかに伝えた。
はるかは、
「いいのですか？」木嶋に問いかけ、
木嶋は、
「いいよ。」と…はるかに答えた。
はるかは、お釣りをコートの中に入れた。
階段を一段ずつ下がり、ホームに下りた木嶋と、はるかは、電車が来るのを待っていた。
《パーン》乾いた…クラクションの音が聞こえている。
《プシュー》ドアが開いた。
市営地下鉄でも、関内駅で降りる人は少ない。
木嶋と、はるかは、市営地下鉄に乗った。
横浜駅まで、およそ…５分ぐらいである。
《ドアが閉まります。》と、
ホームのアナウンスが、【こだま】する。
《ピンポン》と、音を立て閉まった。
《ブーン》と、電気の流れる音。
少しずつ加速をしていく。
《ガタン、ゴトン》車輪の摩擦で、レールが削れる音が聞こえて

いる。
木嶋は、空いている座席を見渡し座った。
はるかも、木嶋の右隣りに座ったのだ。
そっと…木嶋の右手が、はるかの左手を掴む。
はるかも、木嶋の右手を握った。
コーヒーショップ『S』から、市営地下鉄の乗り場まで、歩いていたので、手の体温が、寒さで冷たくなっていた。
はるかの左手を握ったのは、初めてデートした時…以来だった。
今は、友達付き合いだが、
木嶋には、
《彼女みたいに大切な人。》
「間もなく…横浜〜。横浜です。」車内アナウンスが聞こえていた。
木嶋と、はるかは、座席を立ち、
「木嶋さん、洋服などを見たいので、少し、時間を頂けますか？」
はるかは、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「はるかさんの好きにして下さい。」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「ありがとうございます。」木嶋に声を掛け、
「後(のち)ほど、電話しますね！」
そう言葉を残し、
《ピンポン》ドアが開いたと同時に、改札口へ走って行く。
木嶋は、はるかと、一時(いちじ)別れ、
「どこにいようかな？時間に余裕があるので、ブラブラしようか？それとも、どこかのコーヒーショップに入ろうか？」
一人で、ブツブツと、ボヤきながら、歩いていた。

第２０９話

市営地下鉄の改札口を出た木嶋は、目の前にある地上出口の階段を、一段、また一段と上がって行く。

出口の途中で、市営地下鉄の売店があったので、夕刊紙を購入した。習慣と言うのは、怖いものである。

自然と…いつものコーヒーショップ『Ｙ』に、足が向いてしまう。

コーヒーショップ『Ｙ』のドアが開けた。

２Ｆへ上る階段を、一歩ずつ、上がって行く。

はるかが、木嶋と、一旦別れて、買い物に出かけてから、３０分以上経過していた。

関内に向かう前に、座った奥の席ではなく、上がって…すぐのイス席が空いていたので、夕刊紙を円形テーブルの上に置き、リュックを手前の座席に置いた。

木嶋は、反対側のイス席に座り、夕刊紙を広げ、近くにいた男性店員さんに、声を掛け、

「ホットのアメリカンコーヒーをお願いします。」オーダーをしたのだ。

男性店員さんは、

「ホットのアメリカンコーヒーですね。畏まりました。少々、お待ち下さい！」木嶋に伝え、離れて行った。

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。

はるかからである。

木嶋が、電話に出た。

「もしもし、木嶋です。」

「はるかです。木嶋さん、今、いつもの場所にいるのですか？」

はるかが、木嶋に尋ねている。

木嶋は、

「当然、いつもの場所にいますよ！買い物は、終わったの？」はるかに優しく問いかけていた。

はるかは、

「まだ、買い物途中ですが…木嶋さんが、どこにいるのか？把握したくて…」木嶋に答えていた。

木嶋は、

「自分のことは、気にしないで下さい。新聞を読みながら、ホットコーヒーを飲んで、寛いでいます！」はるかに伝えた。

はるかは、

「ありがとうございます。待たせてしまい…申し訳ありません。もう少し、時間を下さい。また、電話します。」木嶋に話し、電話を切ったのだ。

木嶋は、夕刊紙を読みながら、頭の中では、

【どこの回転寿司にしようか？】迷っていた。

回転寿司も、色んなタイプの店があり、選ぶ方も、どこにするかは、その人たちの嗜好次第である。

今、コーヒーショップ『Y』を起点で考えると、歩いて5分以内の場所にある回転寿司が有力である。

ポルタ地下街にも、回転寿司の店があるが、そこまで歩くのに、時間ロスが発生してしまう。

横浜駅から離れた場所にも回転寿司がある。帰る時の交通利便性などを考慮すると、駅に近いところを選びたいと考えていた。

木嶋は、寿司ネタで、一番の好物は、《マグロ》である。

小さいときから、《マグロ》の刺身を良く食べているので、まず先に、オーダーをするのであった。

寿司ネタの中でも、食べたことのないネタもある。

【所謂食わず嫌い】である。

家で、魚を焼くが、《ブリ》や《秋刀魚》が、食卓を飾ることが多い。

はるかの、寿司ネタの好みは、分からない。

はるかと、友達付き合いがあるとは言っても、食事をした機会が、両手で足りるぐらいなのだ。

木嶋は、はるかと食事をすることで、少しずつだが、【食わず嫌い】がなくなっていた。

夕刊紙を読み尽くし、退屈気味になっていた。

「早く…ここから出たいな！」ボヤいていたとき、テーブルの上に置いてあった携帯が…、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いていた。

「もしも～し、木嶋ですが…。」

「はるかです。今、買い物が終わりました。どこのお店にするか？決まりましたか？」はるかが、木嶋に聞いている。

木嶋は、

「この近くに、回転寿司の店があるので、そちらに行きましょう。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「あそこのお店ですか？」木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「あそこと言われても…目印は、パチンコ店の並んでいる近くにありますよ！」はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「分かりました。すぐに、そこのお店に向かいますので、木嶋さんも、来て下さいね。」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。

木嶋も、会計伝票とリュックを持ち、階段を下り、会計して、ドアを出て行く。

はるかの元へ、駆け足で向かって行った。

第２１０話

さっきまでいた、コーヒーショップ『Ｙ』から一番近いのが、ここ回転寿司『Ｉ』であった。

だが、はるかは、待ち合わせ場所の回転寿司『Ｉ』に来ていない。

不安になりながらも、木嶋は、はるかが、来るのを、

《今か…？、今か…？》と待っていた。

【店先で、待つよりも、中に入って待とうか？】ボヤきながら…

迷いが出ていた。

木嶋は、携帯を取り出し、

「はるかさん、先に、回転寿司『Ｉ』の中で、待っていますよ。」

はるかに、メールを送信した。

自動ドアのボタンを押し、ドアが開(あ)いた。

「いらっしゃいませ」

女性店員さんの声が、聞こえて来た。

木嶋は、

「あとから…1名…来ますので、２名でお願いします！」女性店員さんに伝えた。

「ただ今、満席ですので、こちらの、イスに座ってお待ち下さい。」女性店員さんが、木嶋に声をかけた。

木嶋は、ゆっくりと…腰(こし)をイスに下ろした。

先に…カウンター席に座っていたお客さんが、会計伝票を持ち席を立ち上がった。

木嶋は、座っていたイス席から立ち上がり、先ほど空いたばかりのカウンター席に座り、リュックを足元に置いた。

携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っていた。

木嶋は、携帯を取り出し、

「もしもし、木嶋です。」

「はるかです。今、回転寿司『I』の中にいますか?」はるかが、木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「そうです。回転寿司『I』の中で、今、カウンター席に座ったばかりですよ。早く、来て下さい。」はるかに伝えた。
はるかは、
「は~い。分かりました。今から行きま~す。」木嶋に話し、電話を切ったのだ。
木嶋は、日常のことだと割り切ってはいるが、毎回、同じことをされていると、
《やるせない気持ち》になっていた。
自動ドアが開いた。
はるかが、
回転寿司『I』に来た。
「カッ、カッ、カッ」と靴の音。
空いていた木嶋の隣りに座った。
「待たせて…ゴメンね。」はるかが、木嶋に話した。
木嶋は、笑顔を見てしまうと、
「たまには、良いのではないですか…?早く来てくれないと困りますけど…。」はるかに怒りのを止めた。
「木嶋さん、何か…オーダーしたのですか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「これから、オーダーしようと考えていました。何を、オーダーしますか?」はるかに伝えた。
「何にしようかな…?アジとブリをお願いします。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました。アジとブリですね。自分は、大トロと赤貝にしようかな?」はるかに答えた。
目の前にいた…板前(いたまえ)さんに、

「大トロと赤貝、アジ、ブリをお願いします。」オーダーしたのだ。

「大トロと赤貝、アジ、ブリですね！ありがとうございます。」言葉を返した。

湯呑(ゆの)みに、お茶のティーパックを入れ、小皿(こざら)に醤油(しょうゆ)をたらし、割り箸を取った。

オーダーしたのが来るのを、気長に待っていた。

「お待たせしました。最初は、大トロとアジです。」板前さんから、寿司皿を受け取った。

「はるかさん、アジです。」

寿司皿を、はるかに渡した。

はるかは、

「ありがとうございます。木嶋さん、大トロを一貫(いっかん)交換しませんか？」木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「交換しましょう。」

大トロを一貫と、アジ一貫、交換したのであった。

はるかは、

「ありがとうございます。」木嶋に声を掛けた。

続けて、

「ブリと、赤貝です。」板前さんから、受け取った。

「はるかさんのブリです。」はるかに話していた。

はるかは、

「私は、赤貝がダメなんですよ。」木嶋に伝え、

木嶋は、

「赤貝は、全部食べちゃいますよ！」はるかに話した。

「は～い。」はるかの元気な声で、言葉を返したのであった。

第２１１話

木嶋は、次に何を…オーダーしようか？悩んでいた。
「中トロにしようかな？さっき…大トロを頼んだばかりだが、まっ…いいか！あとは、イカ、サーモンにしよう。」自分に納得するように話していた。
はるかは、
「木嶋さん、何をオーダーするのか？決めたのですか？」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「中トロ、イカ、サーモンを、オーダーしようかと思います。はるかさんは…」はるかに聞いていた。
はるかは、
「木嶋さん、大トロを頼んだばかりじゃないですか？いいのですか？中トロを頼んで…」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「いいよ。」はるかに伝えた。
はるかは、
「分かりました。私は、甘エビを、オーダーして下さい。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「了解しました。すいません…中トロ、イカ、サーモン、甘エビをお願いします。」板前さんに声を掛けた。
板前さんは、
「中トロ、イカ、サーモン、甘エビですね。ありがとうございます。」威勢の良い掛け声が、店内に響き渡っていた。
木嶋は、再び、メニューに見とれていた。
「木嶋さん、メニューを見て、どうしたのですか？」はるかが、木嶋に問いかけていた。

「いや～。結構、色んな種類が、たくさんあるな…と。感心していたんだ。」木嶋は、はるかに答えたのだ。
板前さんが、
「お待たせしました。中トロ、イカ、サーモン、甘エビです。」
木嶋に手渡した。
木嶋は、
「ありがとうございます。」板前さんに、言葉を返し、中トロ、イカ、サーモンを自分の目の前に置き、
甘エビを、はるかに手渡した。
はるかは、
「甘エビを食べますか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「エビは、ダメなんだ。北海道で、エビと蟹を食べたんだが、どうも…好きになれずダメなんだ。」はるかに言葉を返した。
はるかは、
「そうですか…！」残念そうな表情を見せていた。
木嶋は、中トロを、美味しそう、口に運んでいた。
はるかは、
「木嶋さん、サーモンと、中トロを貰っていいですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「どうぞ。」はるかに伝え、続けて、
「はるかさん、お吸い物でも…オーダーしましょうか？」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「そうですね…何が…ありますか？」
「蛤のお吸い物と、あら汁。かな？選択は、はるかさんに委ねます。」木嶋は、はるかに問いかけていた。
はるかは、
「どちらにしようかな？蛤にしようかな…！木嶋さん、蛤でお願

いします。」木嶋に答えたのだ。
木嶋も、
「自分も、それにしようかと…考えていたところですよ。」はるかに話し、珍しく意見が一致(いっち)した。
近くにいた、女性店員さんに手を挙げ、
「蛤のお吸い物を、２つお願いします。」オーダーしたのだ。
女性店員さんは、
「蛤のお吸い物を、２つですね。少々、お待ち下さいませ。」木嶋に伝え、その場を離れて行った。
はるかが、オーダーした皿の数を数えていた。
「1．2．3…今、8枚ですね！木嶋さん、まだ、オーダーしますよね？」確認するような声で、木嶋に聞いてきた。
木嶋は、
「うん、まだ、頼みますよ。何故…そんなことを聞くのですか？」
はるかに尋ねていた。
はるかは、
「木嶋さんの時間が、気になっていたので…！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「今日、一日、予定を空けているから心配しないで…下さい！」
はるかに答えていた。
「それなら…安心ですね！」はるかは、安堵した顔をしている。
その…安堵していた顔に、木嶋は、喜びを隠せずにいた。
先ほど、オーダーした…蛤のお吸い物を、女性店員さんが、木嶋の元に、運んできた。
「蛤のお吸い物です。」木嶋が受け取り、はるかに手渡した。
まだ、器が熱くなっている。
《フー》と息を吐いた。
【熱いから、舌をヤケドしないように…】はるかな、配慮をしていた。

「このお吸い物…美味しいね！」はるかが、木嶋に問いかけていた。
「本当だね。お吸い物を飲んだら、お腹がいっぱいになっちゃった。」はるかに話したのだった。
はるかは、
「そろそろ…木嶋さん、帰りませんか？」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「はるかさん次第でいいよ。」はるかに声をかけた。。
はるかは、
「じゃあ…帰りましょう。」蛤のお吸い物を飲み干し、先に席を立った。
木嶋は、近くにいた女性店員さんを呼んだ。
「会計をお願いします。」
女性店員さんは、手慣れた動きで、お皿の枚数を数え、伝票を木嶋に渡した。
木嶋は、伝票を右手に持ち、
「合計で、３５５０円です。」
財布を取り出し、３５５０円ピッタリ支払った。
会計を終えた木嶋は、はるかと共に、横浜駅に向かって行ったのだ。

第２１２話

翌日、朝、布団から出た木嶋は、日刊スポーツを右手に持ち、炬燵に入りながら、

はるかの《ラストイン》の日にちを聞いて…【行くか？行かないか？】悩んでいた。

【はるかのラストインのことで、麻美や玲、富士松さんに相談することでもないし、どうしようかな…正直…熟慮（じゅくりょ）のしどころだ！富高さんに、今、電話をしてみよう！】

右手に持っていた…日刊スポーツを、炬燵の上に置き、

手元にあった携帯を、左手に取り、

電話帳は、

【あかさたな順】で、登録しているので、た行の列の電話帳から富高さんの番号を検索（けんさく）した。

富高さんの列は、最後からスクロールをした方が早いのだ。

サイドボードの上にある置時計で時間を見ると、

時刻は、日曜日の午前１０時２０分を過ぎたぐらいである。

「今、電話しても、釣りか？テニスで、家を留守にしているかも知れない。」木嶋はそう感じながらも…

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音をが鳴らしていた。

「もしもし、富高ですが…」どうやら、富高さんの母親が電話に出た。

「木嶋と言いますが、いつも、富高さんには、会社で、お世話になっています。今、家にいますか？」富高さんが、いるか？いないか？確認していた。

富高さんの母親は、

「今日は、朝、早くから出かけていて、帰って来るのが、夕方になるようなことを、話していましたが…帰って来たら、木嶋さんに電話を入れるように伝えましょうか？」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、
「夕方ですか…？分かりました。明日、会社の昼休みに、自分が、現場に行って話しをします。」富高さんの母親に話し、電話を切ったのだ。
木嶋の心に、モヤモヤした物があった。
「何か…スカッとしないな。一個人としては、はるかのラストインを、クラブ『H』に行って見届けたい。だが、自分たちが座っている席に来てくれだろうか？不安をあげたらキリがない。」
このときの予感が、図らずもとも…当たるとは思ってもいなかった。
日も暮れて、夕方になり、木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」着信音が鳴っていた。
「誰だろう？」
不安になりながらも、携帯画面を覗くと…富高さんからであった。
木嶋が、電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…」
「富高です。昼間、電話が合ったみたいで…木嶋君、何かあったの？」富高さんは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「はるかさんのことで、話しをしたいのですが、今、時間は取れるかな？」富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「いいよ。」木嶋に伝えたのだ。
「はるかさんが、クラブ『H』を辞める話しは、前にもしたと思いますが、今週の水曜日、ラストインなんだ。一個人としては行きたい気持ちはあるが、一人では行きにくい。富高さん、残業が終わってからでもいいので、一緒に行きませんか？」木嶋は、富高さんを誘っていた。
富高さんは、
「はるかさん、水曜日で、クラブ『H』を辞めるんだ。本当に辞

めるの？」疑心暗鬼になりながらも、木嶋に問いかけていた。
木嶋も、はるかが、クラブ『H』を辞めるとは、額面通りに受け止めていない。
はるかは、２０歳前後まで、普通に、アルバイトしている高校生や大学生などから比べたら、かなりのお金を稼いでいたのは、紛れも無い事実である。
金銭感覚が、ズレてしまっていることは、疑いようがない。
クラブ『H』から、完全に名前を抹消しない限り、辞めたと思わない。
【いつかは、戻る可能性がある。】
木嶋も、富高さんも、
いつかは、クラブ『H』に、《復帰》するだろうと感じていることは、確かである。
「辞めると言っているから、辞めるんじゃないの？」木嶋は、富高さんに言葉を返したのだ。
富高さんは、
「はるかさんが、クラブ『H』を辞めれば、自分たちも、横浜駅で途中下車することもないよね。」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「そうだね。横浜駅での途中下車はないが、関内には、麻美さんや玲さんが待っているよ！」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「関内も、行かないようにしようか？」木嶋に尋ねながらも、言葉には、笑いと本音が隠れていた。
木嶋は、
「それもそうだね。」富高さんに答えていた。
「木嶋君、水曜日、残業が終わってから、クラブ『H』に行こうよ。」富高さんは、木嶋に答え、
木嶋は、
「ありがとうございます。詳細は、明日、会社に行ってから話し

ます…と。」」富高さんに話し、電話を切ったのであった。

第２１３話

翌朝、布団から起き、朝食を取りながら、日刊スポーツを読んでいた。

「いつも、富高さんに、はるかのことで、迷惑かけてばかりで悪いよな！何処かで、何とかしないといけないかな？」木嶋は、ふと心の中で思い、

「これで、やっと…横浜駅で、途中下車することもなくなり、真っすぐに家に帰宅出来るのかな？」そう感じていた。

はるかと出会ってから、横浜駅は、単なる通過駅ではない。

当たり前のように、はるかと一緒に時間を共有しているのが、怖いぐらいなのだ。

「本当に会えなくなるのだろうか？」

不安を抱きつつ…

日刊スポーツを読み終え、会社に出かける用意をしていた。

「作業服、靴下、タオル、Ｔシャツ。」

毎日、この４点をリュックの中に入れ、家を出る前に、

木嶋の母親が作っていれている…

「オニギリ」を毎日、持って行くのであった。

季節は…まだ、２月。

注意をしないといけないことは、

《インフルエンザ》である。

毎年、《インフルエンザ》が流行する。

特に、年配の方がいる家族がいる、家庭に移さないようにしないといけないのだ。

Ａソ連型、香港型など、数多くの《インフルエンザ》に対処しないといけない。

今の最善策は、

《インフルエンザ》の予防接種（よぼうせっしゅ）をするのが、効果的である。

木嶋自身、《インフルエンザ》にかかったことは、記憶の中では一度もない。
風邪をひくのは、一年を通して何回かある。
また、木嶋の家では、東京新聞も、一緒に宅配で購入している。
新聞を読むなら、スポーツ新聞だけよりも、一般紙も購入した方がいいのだ。
会社に行く準備が出来たので、玄関に行き、ドアを開け…最寄り駅まで、徒歩で歩いていく。
家から最寄り駅までの所要時間は、１５分ぐらい。
時間に余裕を持って、最寄り駅まで行くのだが、
いつも、《ギリギリ》で家を出ることが多く、途中で、左腕にしている腕時計の時間を気にしながら、間に合わない時は、走って最寄り駅まで行くのだ。
最寄り駅に着き、《ＫＩＯＳＫ》で、スポニチと、日本経済新聞を購入した。
日本経済新聞は、最初の見出しで購入をしている。
今は、どこの企業も、春闘（春季生活闘争）を行っていて、それに興味があるのだ。
もちろん、木嶋の勤務している自動車産業が、春闘相場の流れをリードして行かないと…。
一般紙でもいいが、日本経済新聞を読んでいないと判らないこともあるのだ。
良く、会社に小室さんが、日本経済新聞を持って来ていて、
たまに、木嶋が、小室さんの新聞を持って帰っていた。
改札を通り、京浜東北線のホームに降りて行く。
だが、電車が来ない。
「何で…電車が来ないのだろう。」
木嶋は、Ｇパンのポケットから携帯を取り出した。
気がつくと、メールの着信があった。
受信メールボックスから新着メールを開く。

「京浜東北線が、人身事故！東海道線も、止まっているのか？最悪だ。」木嶋は、頭を抱えてしまった。

電車通勤していて、人身事故と、背中合わせだと思っている。悩んでいても仕方がない。電車が動き出すまで、駅にいないといけない。

【いつ動き出すか？】分からないのだ。

もう一つの選択肢は、私鉄で行くことも可能だが、ここから、私鉄の駅まで、歩くと5分ぐらいある。

その間に、復旧するはずである。人身事故が起きた時間は、早朝だし、もうすぐ動き出すと、メールを読んで納得していた。

「パーン」

クラクションを鳴らし、遅れていた電車が入ってきた。

「ピンポン」と、音を鳴らしながら、ドアが開いた。

遅れているので、人が大勢いた。

さながら、プチ通勤ラッシュである。

「ガタン、ゴトン」

揺られながら、手摺(てすり)に掴(つか)まり横浜駅に向かって行った。

第２１４話

京浜東北線が、横浜駅に着いた。
木嶋は、
「慌てて行っても、この時間では、いつもの電車に乗れない。ゆっくり行こう！」
階段を降り、改札口に向かった。
毎日の光景だが、ＪＲの改札口から、相鉄線の改札まで、走って行く人、エスカレーターを駆け降りる人が数人いる。
「何故？みんな慌てて走ったり、駆け降りて行くのだろう…？」
木嶋は、以前から不思議に思っていた。
木嶋が、一時期、会社で、夜勤をやっていたが、
「みんなが、走ってまで、電車に乗る気持ちが分かったのだ。」
通勤ラッシュは、木嶋が、横浜駅に着いた瞬間から、もう、すでに始まりのゴングが鳴っている。
朝は、上りも、下りも電車の本数が少ない。
体力を使いたくない人は、座席に座って上り方面に通勤して行く。
それが走ってでも、ホームに行き、整列乗車したいのであった。
木嶋の場合は、横浜駅から自分の家の最寄り駅まで、そんなに時間は掛からない。
ただ、夜勤明けの朝は、早く家に着いてゆっくりしていたいのだ。
富高さんは、千葉の船橋から通勤しているが、毎日、座席に座ってこれるので、身体の疲労を考えると、まだ、楽な方ではないかなと思う。
相鉄線の改札口を通り、階段を、一段飛びで上がって行く。
ホームに着いた木嶋は、電光掲示板を見た。
「えっと…次の電車は…６時４５分か…会社の送迎バスの発車まで、間に合うだろうか？」少し…心配な表情を見せつつも、
「成るようにしか成らない…と」腹を括っていた。

普段は、この一本前の電車で通勤している。
「間もなく…電車が参ります。黄色の線の内側に下がってお待ち下さい。」
ホームのアナウンスが聞こえていた。
「パーン」
クラクションを鳴らしながら、電車が、入線している。
「プシュー」
乾いたエアーの音が、構内に響く。
奥のドアが開き、乗っていた人たちが降りていく。
「プシュー」と、手前のドアが開いた。
ここでも、ドアが開いた途端、階段を降り、ＪＲの改札口に向かって行く人たちがいる。
木嶋は、整列していた場所から、ゆっくりと長い座席から座る場所を探し腰を下ろした。
【いつもと、微妙に雰囲気が違う。】
それは、電車が一本後（いっぽんあと）である。
同じ車両でも、時間が違えば違和感が生まれるのは当然である。
車内アナウンスが、
「進行方向…右側、ドアが閉まります。」ドアが閉まった。
日本経済新聞を広げ、
発車ベルが、
「プルー」と、こだましながら、進行方向の左側のドアが閉まり、
「ブーン」
電気が流れている音が聞こえ、電車が走り出した。
新聞を読んでいても、なかなか落ち着かない。
電車に依って、乗り換え駅までの時間が、微妙に違う。
平均すると、１３分ぐらいかも知れない。
乗り換え駅に着いた木嶋は、反対側のホームで待機していた普通電車に乗った。
同じ位置の車両の座席に座り、新聞をリュックに入れ、手摺りに

頭を預けて…目をつぶった。
朝は、一人で通勤しているので、少し…寝不足もあり、座席下からの暖房が効いているせいか、会社の最寄り駅に着くまでの間、休めることが出来るのであった。
最寄り駅近くになると、トンネルに入るので、自然と目を開く習慣がついていた。
駅に着き、
「プシュー」ドアが開いた。
ホームに降り、階段を上がって行く。
陸上を辞めてから、トレーニングする機会がなくなり、体力の低下に歯止めをかけるには、階段を毎日、上がって行くことを日課としていた。
また、木嶋が、夏バテしないのも、これがあるのだ。
陸上をやっていた時は、仕事終わりに、３０分から1時間ぐらい会社の周回を走っていたことが懐かしいと思うのであった。
改札を出て、会社の送迎バスの停留所に行くまで、もう一度、階段を上がらなくては行けない。
最初は、
「何で…キツイ思いをしないといけないのか？」
毎日、紛糾していた。
慣れというのは、恐ろしいものである。
《キツイ！》と思っていたのが、当たり前になって行ったのであった。

第２１５話

最寄り駅の階段を上り切り、少し早足（あやはし）で、会社の送迎バスの発車時刻に、ギリギリ間に合った…。

木嶋は、やっとの思いで乗り込んだ。

「フー」と…安心感からか…ため息が漏れ出てしまった。

もちろん、発車ギリギリで乗ったので、空いている座席などなかった。

【会社までの距離は、アップダウンを入れて3？ぐらいだろうか？…】

【直線距離に換算すると2．5？ぐらいだと…】感じている。

木嶋が、２０世紀まで、神奈川県及び会社の代表として、毎年、5月に長野県富士見町て行われていた大会に出ていた時が懐かしい。

仕事が終わってから、会社の周回を走るのが、楽しみになっていた。

２１世紀になって…木嶋が、走ったのは…指で数えても両手で足りるぐらいなのだ。

再び、走ろうと思いつつも…一度、目標を見失ってしまうと、再び、闘争心（とうそうしん）を奮（ふる）いが立たせるのは難しい。

今まで、

「練習も、真面目に取り組まない人には、負けたくない。」その一心（いっしん）でいた。」

～硝子の向こうの…鳥は風に舞う…白い窓を開け…～

この歌の歌詞にあるように、鳥でいたら、歩くことが大変さがなくていいと思っていた。

羽（はね）を羽（は）ばたかせ、大空を飛べればどんなにいいことなのだろうと…頭に浮かべていた。

会社のバスが発車した。

「ガチャン、ガチャン」

チェーンを巻いて、走っている音が聞こえている。
いつもは、１０分も掛からず、会社に到着する。
しかし、まだ、中間点に差し掛かっていなかった。
「会社のチャイムがなるまでには、無事に着くのだろうか？」不安な気持ちになっていた。
それは、木嶋だけではなく、送迎バスに乗車している会社な人たち、運転手さんもそうである。
中間点を通り越し、坂の頂上には、白いエアータンクを見かけた。
会社の目印になるものであった。
信号が青に変わり、左折をした。
交差点の手前を右折して、正門を無事に通った。
「ご乗車ありがとうございます。本日は、足元が悪いので気をつけて…降りて下さい！」
バスの運転手さんが、マイクを手に取り、アナウンスしていた。
木嶋は、
「ナイス、タイムーヒット。」心の中で感謝していた。
バスを降り、足元を気にしながら、ロッカールームに向かった。
恐らく…外の気温は、０。cぐらいである。
先ほどまで、木嶋の両耳が寒さで、冷たく赤くなっていたが、ロッカールームは、エアコンがフル稼動している。
エアコンからの暖房で、着替えるのにも楽である。
着替えを終え、足早に、自分の現場に向かって行く。
現場に着いた木嶋は、ライターで、《ガスストーブ》に火を点けた。
仕事が始まるまで、あと１０分ぐらい…。
日本経済新聞を広げ、読み始めていた…
渋い顔をしながら読んでいると…
「木嶋、おはよう。何を渋い顔をしているんだ。」　三谷さんが、木嶋に声を掛けてきた。
木嶋は、

「おはようございます。何を渋い顔って…言いますが…今日は、スポニチではなく日本経済新聞を読んでいるのです。」三谷さんに答えていた。

三谷さんは、

「珍しいな！木嶋が、日本経済新聞を読むなんて…どう言う風の吹き回しだ！」

「今、春季生活闘争をやっているから、色んな企業の状況を確認しているよ！」木嶋は、三谷さんに話したのだ。

三谷さんは、

「そうか…今、生活闘争か…もう…そんな時期か？」納得した表情をしていた。

三谷さんとの会話を終え、溝越さんが、現場に来た。

「木嶋、おはよう！電車は動いていたのか？」木嶋に声を掛け聞いていた。

木嶋は、

「おはようございます。電車は、間引き運転していました。送迎バスも、会社に着くのに、普段の倍くらい掛かりました。」溝越さんに伝えた。

溝越さんは、電車、バスなどの公共機関の交通機関の乱れを気にしていた。

「やっぱりな！」溝越さんも、納得顔をしていた。

仕事始まりのチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いたのであった。

第２１６話

木嶋は、昼休みになるのを待ち通しくて仕方なかった。
なぜなら…。
【久しぶりに、富高さんと会話が出来るのだ。】
同じ会社にいても、会う機会が少ない。
定時間は、夕方５時だが…職場が違えば、帰る時間が違う。
木嶋の職場は、比較的に残業はあるが、富高さんの職場は、有るときと無いときの差が激しい。
夕方５時で帰ることが多い。
富高さんは、一人で飲みに行くような行動はしない。
木嶋も、一人で飲みに行くほど…財政にゆとりがない。
もちろん、はるか、玲、麻美の店以外に行くほどの博打（ばくち）を打つ勇気はないのであった。
昼休みを告げるチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」工場全体に鳴り響いていた。
木嶋は、自分の職場から食堂に向かった。
《腹が減っては…戦（いくさ）は出来ぬ！》戦国時代の武将が説いた言葉である。
富高さんは、普段から食堂に来ない。
自分の現場で食事をしているので、昼休みに入ったと言っても、木嶋も行きづらいのだ。
昼食を何にするかは、メニューを見て決めていた。
定食を食べれば、栄養のバランスは良いと思うが、短い昼休みを有効活用しないといけない。
今日の定食のメニューは、
【肉じゃが】、【回鍋肉】、【おでん】であった。
木嶋は、面（めん）を喰らったように、
【おでん】が…出るの？

【回鍋肉】？、【肉じゃが】？、【おでん】？、
《選択は、３つ…か！》
《悩むな…。》
最近、【肉じゃが】を食べる機会がなくなっているので、
【肉じゃが】にしよう。
定食側の階段に向かった。
並んでいる人は、多くない。
多いときは、階段下（かいだんした）まで並んでいる。
おぼんを取り、
小鉢は、野菜サラダ。
【肉じゃが】
普通盛りのご飯に、味噌汁を取った。
会計を終え、給湯器コーナーでお茶を取り、いつもの指定席に座った。
富士松さんは、木嶋の右後方に座っている。
本音を言えば、富士松さんと一緒に食事をしたいし、会話もしたい。
現実は、難しい。
食事を終えた木嶋は、おぼんを両手で持ち、空の器（うつわ）を、シンクコーナーに投げ入れたのであった。
階段を下り、富高さんがいる現場に向かっていく。
「富高さん、お久しぶりです。」木嶋は、富高さんに声を掛けた。
富高さんは、
「あっ…木嶋君。昨日は、電話をくれてありがとう。」木嶋にお礼を述べていた。
木嶋は、
「昨日の話しですが、はるかさん、明後日（あさって）が、クラブ『H』のラストインですが…富高さん、どうしますか？」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、

「どうしようか?木嶋君は、どうするつもりなの?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「ウィークデーだしね。正直、悩んでいるよ!」富高さんに伝えたのだ。
《ウィークデー》とは…。
平日のことを話しているのだ。
木嶋も、富高さんも、平日に飲みに行くのは、体調管理の面から考えて見ても避けるのが妥当だと思う。
飲むのが好きな人は、毎日のように飲み歩いている人もいる。
木嶋の場合は、毎日、飲みに行くよりも、はるかや玲、麻美の店で、週末の金曜日に時間を掛けて行った方が嬉しいのだ。
「木嶋君。はるかさん、水曜日で、クラブ『H』を卒業だよね?間違いないね?」富高さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「はるかさん、クラブ『H』を辞めるのは決定だと話していたよ!」富高さんにそう伝えたのだ。
富高さんは、
「もう…横浜のあの店に行くことは…ないんだね!分かりました。木嶋君、今週は、生産が多いから、水曜日、一緒に行こうよ!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「富高さん、何か…無理を言って申し訳ない。」富高さんに頭を下げたのだった。
富高さんは、
「木嶋君、気にしなくていいよ!たまには、気分転換も大切だからね。」
木嶋は、
「ありがとうございます。詳細は、水曜日の昼休みに、決めたいので宜しくね。」

富高さんに伝え、その場を離れ、自分の職場に戻って行った。

第２１７話

午後の仕事を始めて、一息を告げる…3時の休憩時間のチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」と工場全体に鳴り響いている。

木嶋は、休み時間になると…

作業台の後ろにある机のレターケースから、携帯を取り出し、メールや着信のチェックしている。

ふと…あることに気がついた。

「明後日(あさって)…はるかのラストインに、手ぶらで行くのはどうだろうか?何か…持っていくべきか?メールで聞いてみよう。」

受信メールボックスから、はるかのメールを呼び出した。

メールの入力画面を出しながら、

自動販売機前で、一旦(いったん)立ち止まった。

お金を入れ、

『サントリーのボスカフェオレ』を購入した。

毎日、休憩時間になると、缶コーヒーを飲むのが日課になっている。

これが当たり前だと思っている。

缶コーヒーのプルタブを開け、携帯を持ち歩きながら、現場の休憩所で、メールを入力していた。

そこへ、溝越さんと、三谷さんが来たのだ。

「木嶋。何を渋い顔をしながら、携帯を操作しているんだ。」溝越さんが、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「あっ…溝越さんに三谷さん。実は、自分が良く遊ぶ女性がいるのですが…その女性が、今度の水曜日に、夜の仕事を卒業するのですが…何をしたら良いか?思案していたのです!」溝越さんと三谷

さんに話していた。
三谷さんは、
「木嶋は、まだ、その女性と遊んでいたのか?」木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「まだ、その女性と遊んでいますよ。自分は、色んな女性と交際が出来るほど…財力に余裕がないですから…。」三谷さんに話したのだ。
「そうだな!本当なら、多数の女性と交際すればいいが、木嶋は、一人の女性と交際したほうがいいかも知れない。万が一、振られた時は、ショックが大きいけど…。」溝越さんは、木嶋に告げた。
木嶋も、客観的に自分を分析していた。
「やっぱり…溝越さんが言うように、どう考えても、自分は、器用ではない!」木嶋が、そう思うのは当然であった。
「木嶋は、どうしようとしていたんだ。」溝越さんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「本人に、《何がいいか?》メールで聞いてみようかな!と思っていたんですよ。」溝越さんに答えたのだ。
三谷さんは、
「高価な物をプレゼントしたらどうだ。」木嶋に話していた。
「高価な物って…ブランド品でしょう?」木嶋は、三谷さんに尋ねていた。
三谷さんは、
「うん。そうだよ。木嶋の遊んでいる女性は、確か…今年、成人式を迎えたんだろう?若い女性には、ブランド品が効果的ではないのか?」木嶋に伝えたのだ。
「そう…言いますけどね。【ブランド品は、ピン~キリまであって…どれが良いか?】。本人に聞かないと分からない。自分が選んだブランド品を受け取ってくれればいいですが、受け取ってくれな

いと荷物になって困りますよ。」木嶋は、三谷さんに答えたのだ。
溝越さんは、
「そうだよな！木嶋の言う通りだよ。ブランド品は、たくさんあるからな。何が良いか…聞いたほうが正解かも知れない。メールの回答内容によっては、水曜日、定時間でもいいぞ。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。」溝越さんに伝え、続けて、
「水曜日、富高さんと一緒に、クラブ『H』に行きます！【当日、何を持っていけばいいのか?】教えて下さい。」木嶋は、はるかのメールアドレスに送信した。
あとは、はるかからの回答を待つしかない。
3時の休憩時間が終わる予鈴が、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。
木嶋、溝越さん、三谷さんが、休憩所を立ち上がり、それぞれのポジションに戻って行った。

第２１８話

週明けの月曜日は、身体が思うようにならない。
夕方５時のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。
【何とか…夕方５時まで持ちこたえた。】
自分の職場から、自動販売機まで歩きながら、少し…ボヤき気味に、
【まだ、残業がある。】
トイレに入り、鏡(かがみ)に向かって、一人で呟いていた。
缶コーヒーを右手に持ち、作業台の後ろにある机に携帯を取りに行った。
携帯の側面を見ると、着信の合図があった。
《果たして…電話なのか?メールなのかは分からない。》
携帯の画面を覗いた。
「着信が先で、メールがあとか…?」
木嶋は、着信履歴を見ると、はるかであった。
以前から、はるかには、
「仕事中は、どんな些細(ささい)なことでも、電話に出れない。」と話していた。
しかしながら…、
はるかは、《忘れていた》のである。
携帯に出ないから、メールを送信してきたのだ。
受信メールボックスから、新着メールを読み出した。
「木嶋さん、メールを頂きありがとうございます。水曜日のことですが、《何がいいのだろう?》と考えていたのですが、ブランド品は、もう…たくさん木嶋さんから買って頂いたので、《お花が欲しいですね。それも、花束よりも鉢植え》でお願い出来ますか?」
木嶋に伝えていた。

木嶋は、
「分かりました。用意します。」と、はるかにメールを送信して、
「花か…花束ならクラブ『H』に行く時に、会社の最寄り駅や横浜駅構内とかでも買えるが、鉢植えとなると…思いつかない。今日か?明日に、地元で見つけないと…!ただ、家には持って帰ることが出来ないし…困ったな!」考えが纏(まと)まらずにいた。
そこへ、溝越さんが、木嶋の元に歩いて来た。
「木嶋、浮かない顔をしてどうしたんだ?」溝越さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「実は、先ほど…良く遊んでいる女性からメールが送信されてきたのですが、花が欲しいと伝えてきたのですが…花束より鉢植えが欲しいと言われまして…どうするべきか?悩んでいたのです。」溝越さんに答えたのだ。
溝越さんは、
「花か…?それも、《花束より鉢植えか…。》花束なら、木嶋が話している通りだが、鉢植えとなると、木嶋が、帰り道に買って行くことないよ。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「いい案でもあるのですか?水曜日まで、時間の猶予(ゆうよ)はないですよ。」溝越さんに答えていた。
「木嶋、自分の知っている仲間に、花の卸しをやっている人がいるので、その人に依頼して見ようか?」溝越さんは、木嶋に提案したのだ。
木嶋は、【渡りに船】であった。
「溝越さん、花の卸しをやっている人に聞いてくれますか?」溝越さんに伝えた。
溝越さんは、
「いいよ!どんな種類がいいんだ?木嶋は、今まで、女性に花をプレゼントしたことがあるのか?」木嶋に問いかけた。

木嶋は、
「何度か！女性の誕生日に、プレゼントしたことがありますよ。いつも、胡蝶蘭(こちょうらん)を渡しているので、それでいいかな？と思いますが…」溝越さんに答えたのだ。
溝越さんは、
「胡蝶蘭か…あるか？ないか？聞いてみないと分からないが、確認してみるよ！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「宜しくお願いします。」溝越さんに頭を下げていた。
溝越さんは、
「じゃあ、夜に、花の卸しをやっている人に聞いたら、木嶋の携帯に連絡するからな！予算は、どれくらいていいのかな？」木嶋に聞いていた。
「予算は、一万円でお願いします。」溝越さんにお願いをしたのだ。
溝越さんは、
「予算は、一万円ね！」木嶋に話しながら、その場を離れて行った。
木嶋は、一安心(ひとあんしん)した。
「花は、溝越さんに頼んだから、吉報を待とう！」
【果報は寝て待て…か？】諺(ことわざ)の通りなることを祈るしかなかった。
残業を終えた木嶋は、ロッカールームに着替えに行った。
木嶋は、
「富高さん、お疲れさまです。」ロッカールームで、富高さんと会い、声をかけたのだった。

第２１９話

富高さんは、
「あっ…木嶋君、お疲れさま。今日は、残業、７時で終わったの？」木嶋に応えていた。
木嶋は、
「うん、７時で終わって良かったよ。先週は、８時までやっていたから、身体的に、ちょうど良かったよ。富高さん、水曜日の夜のことですが…横浜の店に行くのに…手ぶらじゃ…《マズイ》よね？」
富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「木嶋君、チョット…待ってて…」木嶋の声を遮るように、着替えを急いでいた。
木嶋も、富高さんと話しながらも、着替えを終えていた。
先に着替えを終えた…富高さんが、ロッカールームから出て行く。
後を、追いかけるように、
木嶋も、送迎バスに小走りしている。
気がつくと、会社の送迎バスが発車間際であった。
バスに乗り、空いていた座席を探し座った。
富高さんは、
「木嶋君、先ほどは、申し訳なかったね。横浜の店のことですが…手ぶらじゃ…《マズイ》と思うんだよ！」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「そうだよね…。」言葉を返し、続けて、
「富高さんは、何を渡せばいいと思いますか？」富高さんに尋ねていた。
「そうだね…自分が渡すとしたら、はるかさんの好きなブランド品をプレゼントするけど…！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、

「富高さんは、ブランド品を渡した方がいいと思いますか？自分も、《そうしようかな？》と考えていたのですが…はるかさんに、休み時間に、メールをして問いかけてみたのです。」富高さんに伝えた。

「はるかさんは、何て…言っていたのかな？」富高さんは、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「花がいい…と、メールで回答が来たんだ。」富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「花と言っても、たくさん種類があると思うよ…自分は、何がいいのか…判らないよ。」不安顔（ふあんがお）で、木嶋にお手上げのポーズをしていた。

木嶋は、

「そうだよね。ただ、麻美さんや玲さんの誕生日に、胡蝶蘭（こちょうらん）の花を、毎回、贈っているのですが、それでもいいかなと考えていましたが…どうでしょうか？」富高さんに問いかけていた。

富高さんは、

「胡蝶蘭ね。麻美さんや玲さんの誕生日に、木嶋君が、贈っているなら、それでいいと思うよ。帰り道で買うのはいいが、花を会社に持って来て、職場の人たちに聞かれるんじゃないの？」木嶋に話していた。

木嶋は、

「最大のネックは、そこだよね。会社の帰り道に、花を買って家に帰ろうと思っていたが、家族に、何て話せばいいか…そこが悩みだったんだ。」富高さんに伝えた。

富高さんは、

「何か…いい方法が見つかったの？」

木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「そこで、上司である…溝越さんに相談したら、知り合いに…花の卸しをやっている人がいるので、胡蝶蘭があるか?ないか?聞いてもらうことにしたんだ。」

「溝越さん、花の卸しをやっている人が、知り合いにいるなんて驚きだね。いい回答を期待したいよね。」富高さんが、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「今日中(きょうじゅう)に、回答をくれると言っていたから、それを待つしかないんだ。現状は…」

「回答をもらったら、明日の昼休みに、教えてくれるかな?」富高さんは、木嶋に同意を求めたのだ。

木嶋も、

「いいよ。富高さんが、携帯を持っていれば、そんな苦労がないけどね。」苦笑いを浮かべながら、富高さんに話すのであった。

富高さんも、笑っていた。

会社の送迎バスが、最寄り駅に着いた。

木嶋と、富高さんも、送迎バスから降りて、相鉄線と横浜市営地下鉄の方面に別れて行く…。

木嶋は、相鉄線に乗り、横浜駅に向かって行く。

富高さんは、横浜市営地下鉄で、戸塚駅で乗り換えるルートで、船橋駅に向かって行った…。

第２２０話

木嶋は、富高さんと別れ、階段を下り、ホームで待機していた…
右側の車両の座席に座った。
発車する電車によって、長椅子シートの車両と対面式シートの車両とある。
一年間を通じて、会社から帰宅して帰ると、長椅子シートの車両に座る機会が多く感じていた。
会社に向かうときは、断然、長椅子シートの車両が多い。
会社の最寄り駅が、始発着の起点となっていて、時間によって、快速運転しているので、対面式シートが多い。
「ガタン、ゴトン」動き出した。
揺られながら、心地好い気持ちになっていた。
トンネルを出て…
木嶋の携帯が…
「プルー、プルー、プルー」と鳴っていた。
携帯の画面を見た。
溝越さんからのメールの着信であった。
木嶋は、すかさず…メールを開いた。
「木嶋、今日は、お疲れさま。先ほどの話しだが…胡蝶蘭…水曜日に会社へ届けて頂くので、何時ぐらいなら、受け取るのがベストだ。」
「溝越さん、ありがとうございます。」心の中で感謝しつつ、
「そうですね…会社の昼休みが一番いいですね！大体…１２時２０分過ぎなら、警備室で待つことは出来ます。」溝越さんにメールを送信した。
木嶋が、メールを送信した直後に、
再び、トンネルの中に入った。
「ガタン、ゴトン」

トンネル内で、
「ゴー」と音を響かせていた。
電車が、トンネル内で、風を切っている音であった。
トンネルを抜け、次の駅に着いた。
そのとき、一通のメールを受信した。
受信ボックスからメールをスクロールした。
はるかからであった。
「木嶋さん、先ほどは、電話とメールしてすいませんでした。メールは、読んで戴けましたか？もし、良かったら返事を下さい。お願いします。」木嶋は嬉しくなっていた。
木嶋は、頭の中で整理しながら、メールをする内容を思案していた。
「はるかさん、メールを送って頂きありがとうございます。花の話しは、自分の上司に頼みました。先ほど、連絡がありまして…当日、クラブ『H』に持って行けそうです。楽しみに待っていて下さい。」はるかにメールを送信した。
あとは、はるかからの回答待ちであった。
気がつくと…乗り換え駅の一つ前の駅であった。
「もう…こんな時間になっていたのか…？」木嶋は、メールをする仲間が数少なく、
はるか、玲、麻美とメールをしているが、休み時間や移動中しか送れないのが、悩みの種（たね）である。
普段から、指を動かさないので、慣れるまでに時間が掛かりそうである。
乗り換え駅に着いた木嶋は、
先に停車していた急行…横浜行きの電車に乗った。
「プルー」発車ベルが鳴った。
ドアが閉まる前に、慌てて…飛び乗った。
ＪＲと相鉄線の違いは、
ＪＲは、発車ベルが鳴り、ドアが閉まるまでの時間は短い。

その為、駆け込み乗車が多く、足を引っ掛けて、ホームから線路に店頭する人が多数いる。

相鉄線は、会社の最寄り駅で、ドアが閉まる直前に、一度、ドアが開くことがある。

木嶋も、何度か?乗り遅れそうなことも、多々（たた）あった。

電車が完全にホームから離れてしまったら、諦めて…次の電車で行くことは、稀にある。

山手線などは、

【ホーム柵】を設置しているところもある。

これは、一種のホーム転落防止柵でである。

木嶋は、横浜駅に着いたら、京浜東北線や東海道線のどちらのルートにしようと悩むのであった。

到着時間で計算すると、東海道線で帰ったほうがいいのだ。

富高さんは、木嶋よりも早くに横浜駅を通過していた。

木嶋も、何度か…横浜市営地下鉄で帰宅したことはある。

相鉄線で帰るよりも、一本前の電車に乗れるため、急いで帰るときは、こちらを利用するのであった。

第２２１話

木嶋は、東海道線で帰ることにしたのだ。
性格上…早く帰りたいと思うのが当たり前である。
はるかからの待ち合わせの電話はない。
待つ人がいないのに、
横浜駅で、《フラフラ》歩いていても、ただ、虚しさが残ってしまう。
東海道線を待つ時間を考えた場合、京浜東北線で帰宅した方がいい場合もある。
稀に、京浜急行で帰るときもあるのだ。
木嶋の最寄り駅に、最短時間で、到着するのは、京浜急行の『快速特急』がベストの選択である。
しかし、会社から支給されている交通費は、
横浜駅からの乗り換える相鉄線ルートであった。
東海道線のホームに上がる階段を、一段ずつ上って行く。
どうやら…電車が行ってしまってから、５分ぐらい経過していた。
人も、そんなに多くはない。
東海道線の終点は、東京駅だが、品川駅止まりの電車は、人が乗らないことが多い。
品川駅止まりを乗車するよりも、
横須賀線で、東京駅に向かうルートを選択する人。
品川駅まで行くのに、大きく迂回していく。
もちろん、富高さんも、横須賀線で帰宅している。
東京駅で、乗り換えてもいいが、東海道線のホームを下りて、乗り換えるまでに、時間が掛かってしまう。
会社の最寄り駅から、横浜市営地下鉄で、戸塚駅まで行き、横須賀線に乗車して、
「ＫＩＯＳＫ」で、ビールとつまみを買い…小室さんと人生談議

を交わして帰るのが日課になっている。
木嶋も、その中へ入ることもあるが、小室さんは、酔いが廻ると、人の頭を叩く癖がある。
「間もなく…『快速アクティー…東京行きが参ります。』危ないですから…黄色い線の内側に下がってお待ち下さい！」ホームのアナウンスが聞こえていた。
木嶋は、黄色い線の内側に下がり、電車が、到着するのを待っていた。
「パーン」クラクションを鳴らしながら、電車が到着した。
「プシュー」エアーを響かせ、ドアが開いた。
「いつも、自分が通勤している方面は、空いていて座れるから、身体も楽だ！」木嶋は、そう感じながらも電車に乗った。
急いでいるときは、最寄り駅の階段付近に乗るが、考えごとをしたり、新聞を読んだりするときは、後ろの車両に座る。
乗車したのは、3号車であった。
空いていたボックス席に座り、夕刊紙を広げ、先ほど…自動販売機で購入した…BOSSのカフェオレを、窓の内枠に置いた。
難しい顔をしながら、夕刊紙を読みはじめていた。
「プシュー」ドアが閉まり、
「ガタン、ゴトン」走り出した。
木嶋の携帯が、
「プルッ、プルー、プルー」と鳴り響く。
「誰かな?」
疑問心を抱きながら、電話に出た。
「もしもし、木嶋です。」
「木嶋君、元気ですか?郷田です。」
懐かしい声であった。
郷田さんと会話をするのは、一年振りであった。
「郷田さん、お久しぶりです。」木嶋は、郷田さんに感謝の言葉を伝えた。

「木嶋君、久しぶり。どう?最近、変わったことがあったかな?」
郷田さんが、木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「最近、変わったことはないですよ。郷田さんに、連絡が出来ずに申し訳ないです。」郷田さんに頭を下げた。
「気にしなくてもいいよ。まだ、あの店に行っているのかな?」
郷田さんは、木嶋に聞いていた。
「まだ、行っていますよ。」木嶋は、郷田さんに答えたのだ。
「じゃあ…一人ぐらいは、いい女性と知り合えたかな?」
木嶋は、
「なかなか、巡り合えないですね!華やかな世界ですから、そこで、探すのが難しいかも知れません。」郷田さんに話したのだ。
「そうかもな!諦めずに…頑張れば…いいことがあるぞ。話しは変わるが、陸上の練習はしているのかな?」郷田さんは、木嶋に問いかけ、
木嶋は、
「長野の大会を最後に、出場していないので、練習すらしていません!仕事に追われていて…。」郷田さんに伝えたのであった。

第２２２話

郷田さんは、
「そんなことを言っていたら、ダメになってしまうぞ。どこか近場の大会にでも、申し込んだらどうだろう？」木嶋に話していた。
木嶋は、
「そうですね！郷田さんが、今、言われた通りですね。近場の大会を、陸上情報誌を購入して、検討をしてみます。練習すらしていないので、最初から身体を作らないと…最低でも、半年ぐらい…時間の猶予（ゆうよ）が欲しいですね。」郷田さんに答えていた。
郷田さんは、
「了解しました。大会にエントリーしたら、携帯に電話下さい。近いうちに、飲みに行こうよ！日程が決まったら、連絡してくれるかな？」木嶋に伝え、
木嶋は、
「分かりました。飲みに行くメンバーは、大田さんと三谷さん、小坂さんでいいですか？郷田さんの意見を聞きたいのですが…。もし、ＯＫであれば自分から連絡します。全員が同じ日に集まれるか？微妙ですが、なるべく努力しますよ。」郷田さんに話した。
郷田さんは、
「うんいいよ。木嶋が話していたメンバーで…日にちが決まったら連絡下さい。お願いします。」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。
木嶋は、すかさず…携帯の電話帳から小坂さんに電話をかけた。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。
電話のコールが、１０回鳴らすが、電話に出ない。
木嶋は、電話のコールをする回数を、１０回と決めている。
小坂さんも、富高さんと同じで携帯を持っていないのであった。
もしかしたら、携帯を持っている可能性を否定も、肯定も出来ない。

「こういうときは、携帯があれば便利なのに…。」携帯の利便性を強調してしながら、

「また、かけ直すかな?」木嶋は、電話を切った。

腕時計の時間は、まだ、午後8時を廻ったばかりで、今は、東海道線の車内であった。

小坂さんに、電話をかけたのは、久しぶりである。

最近は、はるかと一緒にいる時間が多く、仕事も忙しいため、小坂さん、郷田さんと疎遠(そえん)に、なりかけていたので、いい機会だと感じていた。

気を取り直し、携帯を右手に持ち、再び、電話帳から三谷さんの携帯に電話をした。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出している。

電車が、木嶋の最寄り駅に着いた。

「プシュー」乾いたエアーの音を響かせ、

「ピンポン」ドアが開いた。

「もしもし、三谷ですが…。」三谷さんが電話に出た。

「もしもし、木嶋です。」

「何だ…木嶋か?どうしたんだ?」三谷さんが、木嶋に問いかけた。

木嶋は、

「先ほど、郷田さんから電話があって…近いうちに飲みに行こう…と。自分としては、日にちを決めたい…三谷さんの都合を教えて下さい。」三谷さんに伝えた。

三谷さんは、

「そんなことなら、現場で話せばいいのに…?」木嶋に答えていた。

木嶋は、

「三谷さんの意見を参考にして、小坂さんと大田さんに提示したいと考えているのです…。」三谷さんに問いかけた。

三谷さんは、

「今、2月だよね?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「そうですよ!何か…あるのですか?」
「嫌…何もないよ。あんまり早くしても意味がないよね?」三谷さんは、木嶋に聞いていた。
「そうですね!自分の意見は、4月の中旬ぐらいにしようかな?と考えていますが…その方が、郷田さんや小坂さんにもいいのではないか…と思うのですが…三谷さんは、予定は入っていますか?」木嶋は、三谷さんに尋ねたのであった。
三谷さんは、
「4月の中旬か…それでいいよ!小坂さんは、良いとしても、大田さんは、メンバーに入っているのかな?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「郷田さんの他は、大田さんと小坂さんですよ。」三谷さんに話し、
三谷さんは、
「了解です。あとのことは、木嶋に一任(いちにん)するよ。」木嶋に伝え、電話を切ったのであった。
三谷さんと大田さんは、会社に入ったのは、三谷さんが先だが、大田さんとは、同じ年齢なので話題が共通するのであった。

第223話

木嶋は、

「三谷さん、先ほど…4月の中旬と言いましたが、GW連休前に、みんなが集まれるか？聞いてみましょうか？」三谷さんに答えたのだ。

三谷さんは、

「GW連休前ね…それでもいいよ。小坂さんや郷田さんも、今の時期に帰省はしないと思うよ！」木嶋に話していた。

小坂さんも、郷田さんも地方出身なので、長期連休のときは、帰省をするのが普通である。

GW連休は、こちらにいた方が、融通が利く。

木嶋も、両親の実家に帰省するという…選択もあるが、毎年、お盆に行くのが日課になっていた。

「郷田さんや小坂さん以外のメンバーにも、声を掛けてみようかな？」木嶋は、三谷さんに提案していた。

三谷さんは、

「小崎さんも、声を掛けたら…どうだろう？」木嶋に問いかけていた。

木嶋も、

「小崎さんか…結婚してから随分、会っていないよね！声をかけられなかったが…一度だけ、横浜のマラソン大会で見かけたことがあるよ。久しぶりに電話をして聞いてみようかな？」三谷さんに答えたのだ。

【来るか？来ないか？】可能性を比較したとき、来ない可能性が高くなりそうな気がする。

今は、小崎さんも、ニ児の母親である。

一年に一回、近況報告みたいな感じで、年賀状の交換をしているだけの生活になっていた。

２０世紀の頃は、小坂さん、郷田さん、大田さんも含めて、横浜で、和気藹々（わきあいあい）として飲んでいた頃が懐かしく思えていた。

仲間たちが、生涯の伴侶を見つけ、一人、また一人と木嶋の元を離れて行く。

結婚するのは、悪いことではない。

嬉しい半面、淋しさもある。

大田さん、三谷さん、小坂さんも、郷田さんの後を追うように…結婚する時期が来る。

木嶋も、はるかと明日にでも、電撃結婚しているかも知れない。

はるか以上の人を見渡したとき、富士松さんしかいないと、木嶋は思っている。

それは、思い上がりだと言われても、返す言葉がない。

定年を迎えたときに、

《ボケッ》と…一人で過ごすか?家族と一緒に過ごしているのか?

タイムマシンやタイムテレビが、今の時代にあれば、覗いてみたいと思う。

過去を変えることは、人間には出来ない。

未来を変えることは、その人の努力次第である。

～♪誰にだって出来るから　今日より素晴らしい明日を…♪～

一人で、淋しさが込み上げてくると、前向きな歌を口ずさむのである。

木嶋は、

「三谷さん、この後、小崎さんに電話しますから、明日、会社で報告します。」三谷さんに伝え、

三谷さんは、

「よろしく。」電話を切った。

気がつくと、最寄り駅の改札を出ていた。

寒さに震えながら、携帯の電話帳から小崎さんを呼び出した。

木嶋は、高まる心臓の鼓動が、

【ドキドキ】していた。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
「もしもし、小崎です。」小崎さんが電話に出た。
「小崎さん、お久しぶりです。木嶋です。元気ですか?」木嶋が、小崎さんに伝えた。
小崎さんは、
「あっ、木嶋君。お久しぶり。電話で話しをするのは、何年振りかな?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「どれくらいかな?考えたこともないよ!」少しオドケて、小崎さんに伝えた。
「そうだね!私が、結婚してから初めてかもね!」小崎さんは、木嶋に話し、
木嶋も、
「そうかも知れないね!今日、郷田さんから電話があり、みんなで飲まないか?と言われて…先ほどまで、三谷さんと話しをしていました。」小崎さんに答えていた。
「郷田さんに、三谷さんか…みんな元気そうだね。飲み会なんて…随分、参加していないね!」小崎さんは、木嶋に問いかけるように話したのであった。
木嶋は、
「もちろん、小崎さんのご主人の意見を尊重しますよ。日にちは、4月のGW連休前で開催しようと考えています。」小崎さんに伝え、
小崎さんは、
「日にちが決まったら、連絡を下さい!」木嶋に話し、電話を切ったのだった。

第２２４話

木嶋は、駅から家への帰り道。

【ＧＷ連休前と話したが、いつにしようか？】熟慮（じゅくりょ）していた。

「やはり、ＧＷ前の週末にするべきかな？」

携帯を取り出し、機能からカレンダーを呼び出した。

「確か…会社は、２６日からＧＷ連休に入るから、みんなには、２５日で打診してみよう。ダブルブッキングもないはず…」

木嶋は、背負っていたリュックから黄色の手帳を取り出し、月間カレンダーの予定表を見たのだ。

「４／２５は…何もない。先に、店を予約しよう！」

携帯の電話帳から、飲む場所を探していた。

「いつも、横浜で飲んでいるが、飲み場所も、固定していて、マンネリ化をしているのは、歪（ゆが）めない。新しい場所を開拓しないと…。」

ボヤきながらも、行き慣れた店を選んでしまいそうである。

「いろはにほへと…にしようか？天狗（てんぐ）にしようか？」

木嶋は、携帯の「あ行」から、

『いろはにほへと…横浜西口店』に決めた。

何故？『いろはにほへと』にしたのか？横浜駅の改札から近い。

それが、一番の決め手になった。

『いろはにほへと…横浜西口店』に電話をした。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。

『いろはにほへと…横浜西口店です。』女性スタッフの声が聞こえてきた。

木嶋は、

「予約を取りたいのですが、宜しいでしょうか？」女性スタッフに尋ねていた。

女性スタッフは、

「少々、お待ち下さい。いつが、宜しいでしょうか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「まだ、先なのですが、４／２５の予約を取りたいのですが…」女性スタッフに答えていた。
「少々、お待ち下さい。」女性スタッフが、受話器を置き、予約表を探していた。
「お待たせしました。４／２５ですね。何時（なんじ）からでしょうか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「時間は、午後６時３０分からでお願いします。」女性スタッフに伝えた。
「午後６時３０分ですね！人数は、何名でしょうか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「人数は、１０名で…お願いします。」
「１０名ですね。畏まりました。幹事さんの名前と連絡先を教えて下さいませ。」
「名前は、木嶋と申します。連絡先は、携帯の番号でいいですか？」木嶋は、女性スタッフに答え、
女性スタッフは、
「携帯でいいですよ。」と話し、
木嶋は、携帯の番号を、女性スタッフに伝えた。
女性スタッフは、
「確認致します。４／２５で、人数は、１０名。時間は、午後６時３０分。幹事様のお名前が、木嶋様。連絡先は、携帯の番号で宜しいでしょうか？」木嶋に伝え、
木嶋は、
「間違いはありません。また、人数は、何日前までなら可能ですか？」女性スタッフに聞いていた。

「４／２５ですから、３日前までに、こちらに連絡を下さい。」
女性スタッフは、木嶋に話し、
「４／２２までに、人数を報告致します。」木嶋は、女性スタッフに伝え、電話を切ったのだ。
家の近くにあるボクシングジムを通り過ぎていた。
家に帰り、パソコンの電源を入れ、飲み会の通知を作り始めていた。
会社の中では、パソコンを使わないので、入力作業をするにも、時間がかかっている。
姉に頼るよりも、自分でやらないといけない使命感が漂っていた。
やっとの思いで、飲み会の資料を作り終えた。
時間を見ると、夜１０時を回っていた。
いつもより遅い夕飯を食べながら、ニュース番組を見入っていたのであった。

第225話

ニュースは、重大事故がなく、普段と変わらない日々が続いている。

木嶋は、テレビのニュースを聞きながら、風呂に入った。

いつもなら、テレビの電源を消すが、このときばかりは点けたままであった。

そのとき、携帯が、

「プルッ、プルー、プルー」と、呼び出し音が鳴り響いている。

湯舟に浸かっていたので、慌てて…バスタオルを巻いて出てきた。

携帯を取ろうとしたとき、呼び出し音が鳴り止んだ。

「誰かな…？」

画面を覗くと、玲からであった。

「玲さんか…あとで連絡しよう！」木嶋は、再び、風呂に入った。

身体と頭を急いで洗い、バスタオルで拭いた。

寝間着に着替え、着信履歴から玲に電話した。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出していた。

「もしもし、玲で～す。」玲が電話に出た。

「木嶋です。先ほどは、電話に出れずに申し訳ないです。」木嶋が、玲に謝罪していた。

玲は、

「木嶋君、何をしていたの？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「家で、風呂に入っていました。」玲に答えたのだ。

玲は、

「家のお風呂ではなくて、彼女と、ホテルでエッチしていたのんじゃないの？」木嶋にツッコんでいた。

「ホテルではありません。自宅ですよ。」玲に伝えた。

「そっか～。今、木嶋君、何をしているのかな？と、随分、会っ

ていないから…たまには、声を聞きたいと思ったんだ！」木嶋に話していた。

木嶋は、

「本当ですか！嬉しいことを言ってくれるね！玲さん、今日は、クラブ『O』に出勤しなくていいの？」玲に問いかけた。

玲は、

「今日は、子供のことがあり…休みにして戴いたんだ。」木嶋に話していた。

「そうなんだ。なかなか、玲さんのクラブ『O』に行けずに申し訳ないね！」木嶋は、玲に話し、

玲は、

「たまには、顔を出してね。そうそう、彼女は、もうすぐ卒業だよね？まだ、夜の仕事を続ける話しは出ているのかな？」木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「彼女は、今週の水曜日、クラブ『H』のラストインです。本来（ほんらい）なら、一人で行けばいいのですが、富高さんに打診（だしん）したら、OKの返事を戴いたので、一緒に行こうと考えていますよ！」玲に伝えた。

玲は、

「彼女、水曜日で、夜の仕事を辞めるんだ！本当に、辞めるのかな？」木嶋の心を揺さぶるような発言をした。

木嶋の心が、グラグラ揺れている。

「はるかは、クラブ『H』を辞めるはず…。夜の復帰はない。」そう思いたい。

「彼女が、辞めると話しているから、辞めると思うよ！」玲に、そう答える以外に答えが見つからない。

「何か…プレゼントするの？」玲が、木嶋に問いかけ、

木嶋は、

「いつも、玲さんや麻美さんに、胡蝶蘭（こちょうらん）をプレゼントしているように、胡蝶蘭を持って行こうと思います。」玲に話したのだ。

玲は、

「胡蝶蘭でいいのかな?彼女、ブランド品が好きなら、ブランド品を買ってあげればいいのに…。」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「自分も、玲さんと同じで、ブランド品かなと思いましたが、色んな人からプレゼントを貰うみたいで、自分も、本人に確認したら…【花がいい】とリクエストでした。」玲に話したのだ。

「そうなんだ。彼女のラストインのイベントが終わったら、ホワイトデーで良いから、クラブ『O』に顔を出してね!富高君と一緒によろしくです。」玲は、木嶋に話し…電話を切ったのだった。

木嶋は、頭を抱えてしまった。

「ここ最近、飲みに行く回数が多く、コストが掛かっているので下げたいのに、来月も、飲みに出かけると財政を圧迫しかねないな!」ボヤくしかなかったのであった。

第２２６話

はるかのラストイン。

布団から出た木嶋は、カーテンを開け、外の天気を見た。

「ザーッ」と雨音がしていた。

「涙雨か…。今日は、ラストイン…そう言えば、夜中から音が聞こえていたのは、雨だったのかな?はるかにしては、珍しく天気が悪い！」木嶋が呟いていた。

いつも…はるかと遊びに行くと言うよりも…一緒にいるときは、比較的、天気が安定していて、崩れた記憶はない。

「空も、泣いているんだな。胡蝶蘭の花を持って行くのに、傘が、余計な荷物だ。帰るまでに止むだろうか…?」不安な気持ちになる。

『ハー』と、ため息ばかりが漏れてしまう。

木嶋は、気を取り直し、朝ごはんを食べていた。

今日のおかずは、焼き魚と、目玉焼き。そして、ご飯に味噌汁である。

食事を終え、テーブルの上にある…日刊スポーツを手に取り読んでいた。

朝、着替えるまでのひと時である。

新聞を読み終え、身体が、まだ、起きていないので、着替えが終わるまで、少し時間が掛かっていた。

家のドアを開け、外に置いてある傘を持ち、開きながら、最寄り駅に歩いて行く。

～♪駅まで続く道を…二人のペースを合わせ…思いは…砂時計さ…♪～

この曲のように、一つ、また一つの思い出が、脳裏を掠めて行く。

木嶋の思いは…

「これで、やっと…はるかが、自分のものになる…」達成感が満ち溢れていた。

はるかが、木嶋の告白を受け入れなかったとき、現実を見つめるまで、かなりの時間が掛かる。　そのショックは、計り知れない。

「ズッ、ズッ、ズッ」階段を一段ずつ…上がって行く。

【ＫＩＯＳＫ】で、いつものように、スポニチを購入して、京浜東北線に乗った。

木嶋を乗せた電車が、

「ガタン、ゴトン」走り出した。

横浜駅までは、およそ２０分ぐらいである。

右手に持っていたスポニチを両手に広げ、読み出した。

なかなか…新聞を読む時間がない木嶋に、貴重な時間であった。

～♪花屋の店さきに並んだ…色んな花を見ていた…色取りどりあるけど…♪～

ＳＭＡＰの【世界に一つだけの花】を口ずさんでいた。

電車が、横浜駅に着いた。

相鉄線に乗り換えだ。

足取りが、やや重い。

家を出るときは、軽(かろ)やかだったのに…。

ＪＲの改札口に向かう階段を一段ずつ、降りて行く。

コンコースに出て、相鉄線の改札口を通って行く。

会社の最寄り駅に向かう…電車に乗った。

「プルー」電子音の発車ベルが鳴っている。

「プシュー」ドアが閉まった。

「ガタン、ゴトン」走り出した。

発車したと同時に、寝てしまった。

いつもは、乗り換え駅で寝るのだが、木嶋も疲れているみたいである。

「まもなく、乗り換え駅です。」女性出身の車掌がアナウンスしていた。

ふと、我(われ)に返ると、乗り換え駅のすぐにそこであった。

左手に持っていたスポニチを持ち、リュックを背負い、乗り換えて行った。

車内は、

《暖房が効いているせいか？》

木嶋は、【ウトウト】しながら、再び、座席の角に、頭を預けて寝ていた。

会社の最寄り駅は、地下にあるため、トンネルに入る。

その時、木嶋は、目を覚ました。

「もう、終点か…。」

目を擦(こす)りながら、リュックを背中に背負い、エスカレーターで改札口に向かった。

改札を出て、会社の送迎バスに乗った。

「今日一日、頑張ろう！」気持ちを新たに、ロッカールームで着替え、職場に向かった。

まだ、仕事を始めるまで時間がある。

職場の近くに、出入り口があったので、ドアを開けた。

先ほどまで、雨が降っていたのに、太陽が顔を出したのであった。

第227話

仕事始まりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いていた。
気持ちを、仕事モードに切り替え、
「夕方5時まで頑張ろう。」自分自身を鼓舞していた。
そうでもしないと、息が詰まりそうである。
淡々（たんたん）と、決められた予定表に沿って仕事をしている。
【何故だろう？いつもと違う。気持ちに張りがない！ヤバイかな？】
木嶋は、そんな雰囲気になっていた。
それを、いち早く察知したのが、三谷さんであった。
「木嶋、どうしたんだ！顔色が悪いぞ！」木嶋に声をかけた。
「普通だよ！」苦笑いをしながら答えていた。
普段から、三谷さんと一緒に仕事をしているので、木嶋の変化に敏感なのであった。　そこへ、溝越さんが通り過ぎて行く。
木嶋は、心臓が、《ドキドキ》していて、
「良かった…通り過ぎてくれて…と」安心していたら、
急に向きを変え…木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋、チョット…いいか？」溝越さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「何でしょう…？」不安げな気持ちを抑えられずにいた。
思い当たるとすれば、
《今日、はるかに渡す…胡蝶蘭ことか？残業のこと？》しか頭に浮かばなかった。
仕事の話しをするには、まだ、午前中であり、残業のことを決めるには、タイムラグがある。
「今日のことだが…夕方5時で、帰りたいか？」溝越さんは、木嶋に話してきた。

木嶋は、心の中では、

「やはり、残業のことか?」一呼吸(ひとこきゅう)於(お)いて、

「正直に言えば…夕方5時で帰りたいですが、現時点では、何とも言えません。昼休みに、富高さんの職場に歩いて行く予定なので、回答次第(かいとうしだい)としか言えませんね!」溝越さんに答えていた。

溝越さんは、

「富高も一緒か…そうか…木嶋の個人的な意見は…?」

「今週、職場の生産が多いので、残業をしなければいけないと…思います。最終的な判断は、溝越さんに委(ゆだ)ねます!」木嶋は、溝越さんに話したのだ。

溝越さんは、

「そうか…彼女が、店に出勤する時間は、決まっているのか?」

木嶋に聞いていた。

「決まっています。彼女の出勤時間は、午後7時~10時までで、まれに、夜11時まで店にいますよ。」木嶋は、溝越さんに答えていた。

「それなら、残業をやれば…最適だな?あとは、木嶋に下駄(げた)を預けた。」木嶋に言い残し、その場を離れていく。

溝越さんの姿を見えなくなるのを確認してから、三谷さんが、木嶋の元に歩いてきた。

「木嶋…あの店に行くのか?」三谷さんが、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「本人は、今日、ラストインだと言っていますけどね。」三谷さんに伝えた。

三谷さんは、

「夜の仕事をしている人を、最初から信用しないほうがいいよ。」

木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「すぐに、自分は、信用してしまうんだよね。」三谷さんに答えたのだ。

「信用するのもいいが、騙されるなよ。」三谷さんは、木嶋に宥めるように話し、その場を離れ、作業を始めたのだ。

溝越さんにしても、三谷さんにしても、木嶋に対して、警告を発していた。

その警告を受け止められるか？

木嶋への試金石になっていた。

昼休みのチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。

木嶋は、すかさず…富高さんの職場に歩いていく。

キョロキョロと…周りを見渡し、富高さんを探すが見当たらない。

肩を落とし、食堂に向かう。

「もしかしたら、すれ違いだったのかな？」

そう思いつつも、食堂で食事を終えてから、再び、富高さんの職場に行くことを決めたのだ。

食事を終え、再び、富高さんの職場に駆け付けたのであった。

第228話

木嶋は、富高さんを見つけ、
「富高さん、今日は、残業ですか?」声を掛けた。
富高さんは、
「あっ…木嶋君、少し前に来たって、自分の職場の人に聞いていたよ。≪すれ違いで…ゴメンね!これから、木嶋君の職場に行こうと思っていたんだ。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「すれ違いだったのは、仕方ないよ。」富高さんに答え、続けて…
「今日、富高さんは、残業かな?」木嶋は、富高さんに聞いていた。
「残業だよ。木嶋君は、溝越さんに、今日のことは話してあるのかな?」富高さんは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「溝越さんに、今日、富高さんと一緒に行くと話しをしています。」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、
「あっちの方は、大丈夫なのかな?」木嶋に問いかけていた。
あっちとは…はるかに渡す…胡蝶蘭(こちょうらん)の花のことである。
木嶋は、
「夕方5時に、会社に届くみたいだよ!溝越さんと一緒に、自分が受け取りに行く予定です!」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「じゃあ…大丈夫だね。木嶋君、はるかさんのラストインで緊張しているのかな?」
「何だろう…緊張と言うのか?張り詰めた…糸が、『ピーン』と切れる…みたいな感じだよ。」木嶋は、富高さんに話していた。
「木嶋君で、そう感じるんだ!自分も分かるよ。今まで、はるか

さんで、散々（さんざん）苦労しているのを間近で見てきたからね。」木嶋に問いかけるように話していた。

木嶋も、

「そうだね。やっと、苦労が報われるかと思うと、肩の荷が下りて嬉しいね！まだ、何か…裏が有りそうな気がするよ。」富高さんに、答えたのだ。

その言葉を聞いて、富高さんは、頷いていた。

【もしかしたら…一波乱あると思っている。】木嶋は、そう思っていた。

木嶋も、はるかに、

【さよなら】を告げられるのかも知れないと…

考えれば…考えるだけ悩んでしまいそうである。

時には、楽観的になるが、悲観的になるのだ。

人は、喜怒哀楽あるのは、当たり前である。

富高さんは、

「もし、自分の仕事が早く終わったら、木嶋君の職場に行くよ。」

木嶋に問いかけ、

木嶋は、

「そうだね。自分も仕事が早く終われば、富高さんの元に伺います。それでいいよね？」富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「それでいいよ。また、後で…。」木嶋に手を挙げ、

木嶋は、

「よろしく…」富高さんに伝え、職場を離れて行った。

腕時計の時間を確認すると、

「もう…こんな時間か…？」

チャイムが鳴る…3分前である。

木嶋は、溝越さんのいる休憩所に、小走りで向かって行く。

溝越さんがいる場所に着いた。

「富高が、残業か？どうかは聞いてきたのか？」溝越さんは、木

嶋に聞いていた。
木嶋は、
「回答．ありました。残業をしてから、クラブ『H』に行くと連絡を受けました。」溝越さんに答えたのだ。
溝越さんは、
「木嶋が、残業が出来る？出来ない？の判断は、本人の自主性(じしゅせい)を尊重するから、いつもの時間に連絡を下さい。」木嶋に伝え、
今いた場所から、自分の机(つくえ)に歩いていく。
木嶋は、自分の作業する場所まで、俯(うなず)きながら…歩いていた。
「富高さんも、残業だし、職場の生産は多いから、三谷さんや他の人たに迷惑をかけられない。残業をしないといけないな！」気持ちを引き締め、決断をした。
あとは、午後の仕事が始まってから、溝越さんに伝えることを決めたのであった。
「あと…半日(はんにち)か…」木嶋は呟くのであった。
チャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」工場内に鳴り響いていた。

第２２９話

午後の仕事を再開した。
大森さんと、昼休みに、話す時間がなかったので、身体が思うように動かない。
【今日は、はるかのことがあるので、ある程度は仕方ないと思う。】
常々（つねづね）、木嶋は、
「気持ちを若くもたないと…老(ふ)けてしまう。いつまでも、気持ちや話題を、たくさん持たないと…若い人たちとの会話も出来ない。それは、はるかとの交際でも同じだ。」
これが、【ポリシー】である。
中には、【トラウマ】な人もいる。
携帯を持たない富高さんは、
「携帯が、【トラウマ】なのだ。」
溝越さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋、今日は、仕事はどうするんだ?」
木嶋は、
「そうですね…今週、生産も多いので、三谷さんと一緒に残って仕事をしていきます。」溝越さんに伝えた。
「富高は、残業か?」溝越さんは、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「昼休み、富高さんの職場に訪ねたところ、残業だと話していました。」溝越さんに答えた。
「分かった。頼んだぞ。あとは、夕方、忘れずに取りに行くぞ!」
木嶋に話し、溝越さんは、その場を立ち去って行った。
その一部始終(いちぶしじゅう)を聞いていた…
三谷さんは、
「木嶋、溝越さんに、残業をすると話していたが、時間などは…

大丈夫なのか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「生産が多いのに、三谷さんを、一人にしてまで帰ることは出来ません。よ」三谷さんに伝えたのだ。
三谷さんは、
「気を遣わせて…悪いね。」
木嶋は、
「気にしなくていいよ。割り切っているので…」三谷さんに話していた。
もうすぐ…夕方5時になる。
「キーン、コーン、カーン、コーン」チャイムが鳴っている。
木嶋は、周りを見渡し、溝越さんを探していた。
「何処へ…行ったのだろう?」不安が頭を掠めている。
「もしや…」
慌てて…警備室前に走って行く。
溝越さんが、胡蝶蘭を受けとっていた。
木嶋は、
「溝越さん…」声を掛けた。
溝越さんは、
「木嶋か…これを自分の職場に持って行ってくれないか…」木嶋に言葉を返した。
胡蝶蘭を、両手で受け取り抱えながら歩いていた。
「何故?花束ではないんだ?」
ふと…気がついた。
「何で…鉢植えなのだろう?」
心の中で…葛藤(かっとう)していた。木嶋に言葉を返した。
木嶋は、
「溝越さんに聞かなくては…」
焦る気持ちと裏腹に…足が前に進まない。
やっとの思いで、自分の職場に…たどり着いた。

胡蝶蘭を休憩所のテーブルの上に置いた。
溝越さんが、職場に戻ってきた。
「溝越さん、いくらですか？」木嶋は、お金を渡すのに金額が解らずにいた。
溝越さんは、
「５０００円でいいよ。花束に出来なくてゴメンな！花束はなかったんだ。鉢植えでも、胡蝶蘭は、金額が元々、高い値段なので、彼女に喜ばれるよ。」木嶋に話したのであった。
木嶋は、
「そうでしたか？花は…花ですからね。変わりはないですね。」
溝越さんに答え、
「ありがとうございます。」お礼を述べた。
溝越さんは、
「あとは、渡すタイミングを見誤(みあやま)るな！」木嶋を後押ししていた。
その言葉が、木嶋の励みになっていた。
木嶋は、
「タイミングか…何か…【プレッシャー】に押し潰されそうだ。」
そんな気になっていた。
残業の時間になり、仕事を始めていた。
「あと少しだ…」自問自答を繰り返していたのであった。

第２３０話

木嶋は、作業服の上着の右ポケットから財布を取り出し…溝越さんに渡していた。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。」頭を下げたのであった。

「そんなこと…気にしなくていいよ。今日が勝負だ。精一杯頑張れよ！」と、木嶋に励ましの声を掛け、溝越さんはその場を離れて行ったのだ。

三谷さんが、木嶋の元に歩いて来た。

「木嶋、この胡蝶蘭。随分…奮発したな？金額が高かったのじゃあないかか？」木嶋の好意に驚いた様子で話してきた。

木嶋は、

「三谷さん、胡蝶蘭を知っているのですか？」三谷さんに問いかけてみた。

三谷さんは、

「胡蝶蘭は、知っているよ！何度か…飲み屋のお姉さんに、プレゼントで渡したことがあるよ。」木嶋に答えていた。

木嶋は、

「そうなんですか？…三谷さんが、飲み屋のお姉さんに、花をプレゼントした話しは、今、初めて聞きましたよ！」三谷さんに伝え、続けざまに

「いくらだと思いますか？」尋ねていた。

三谷さんは、

「花を渡したのは、５年前。今とは、相場の金額が違うと思う。そうだね～…１００００円ぐらいじゃないかな？」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「鋭いですね。金額としては、いい線だと思います…。金額は、

５０００円です。」三谷さんに伝えた。
「随分…安く手に入れたんじゃあないか？例え…確かに、花束がいいが、鉢植えでも、彼女に喜ばれるよ！木嶋にしては、タイムリーヒットだよ。自信を持てば大丈夫だよ。」三谷さんは、木嶋に伝えた。
木嶋は、照れ臭そうに、
「そうだよね！好きな人に、何かしたいと思考をしていました。自分では、何がいいか解らず…彼女に聞いてみたんだ。」三谷さんに話したのだ。
「そうしたら…何て…彼女は言ったのかな？」三谷さんは、木嶋に尋ねてみた。
木嶋は、
「花をリクエストして来たよ。」三谷さんに答えたのだ。
「それで、木嶋が、溝越さんに花を頼んだのも、頷（うなず）けるよ。」三谷さんは、木嶋に話し、
木嶋の想いが、応えられるか…不安を隠せない。
三谷さんは、
「ふ～ん！」
鼻で、嘲笑（あざわら）うように…
何故か？納得した表情を見せていた。
「でも、意外と言えば…意外だよ。溝越さんは、花屋さんに知り合いがいたとは…驚きだよ。」三谷さんは、木嶋との会話を終え、仕事を始めたのであった。
木嶋も、目の前の仕事に取り掛かっていた。
～もうすぐデート出来るね…地球時間だと…3年振りだよ…～
曲の歌詞を、口ずさみながら…
残業が終わる時間がくるのを待ち侘（わ）びていた。
富高さんは、仕事が早く終われば…木嶋の職場に来ると話していたが、時間が、ギリギリだったのかも…
そう…《プラス思考》に思わないと、精神的に参ってしまう。

残業終わりのチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り、
足早(あしばや)に、ロッカールームに向かって行こうとしたとき、
三谷さんが、
「木嶋、忘れ物だぞ。」木嶋に声を掛けた。
木嶋は、慌てて…
「あっ…いけない…忘れていたよ。」苦笑いを浮かべて、職場の休憩所に戻り、
煙草(たばこ)に、火を付けて…
【フー】と息を吐いた。
木嶋は、鉢植えを両手に抱え、
再び、、ロッカールームに向かって行く。
ロッカールームに入り、着替えを始めた。
「少し…時間に余裕がない！」
焦(あせ)りの色が濃い。
ふと…目を、富高さんのロッカーに向けると、着替えを始めていた。
木嶋は、着替えを終え、リュックを背負い、
「富高さん、少し、慌てないと…バスに乗れないよ。」富高さんに声を掛けながら、ロッカールームを出ようとしていた。
富高さんは、
「あっ…木嶋君。もう少しで着替え終わるから、安心してね。」
木嶋に答えていた。
木嶋は、
【ホッ…と。】胸を撫で下ろし、
【バスの発車時刻までには、間に合いそうだね！】と、言葉を言い残し、ロッカールームを出て、
会社の送迎バスに向かったのだ。

第２３１話

胡蝶蘭の鉢植えを持ちながら、送迎バスのステップを上がった木嶋は、富高さんが来るのを待っていた。
バスに乗っていた人たちの視線が、一斉に木嶋の方に振り向いた。
木嶋は、一躍時の人になった。
「花を持っていれば、みんなが注目するのは、当たり前。《どこに…持って帰るのか？》気になっている人がいても、不思議ではない。」心の中で葛藤をしていた。
バスの車内には、富士松さんが乗車していた。
木嶋のターニングポイントになるときは、
富士松さんが、バスに乗っている。
【よりによって…はるかのラストインの日に…これこそ…間が悪いのだ。】
木嶋は、頭を抱えてしまっていた。
富高さんも、バスに乗るのは、《ギリギリ》である。
発車まで、あと…２分。
富高さんが、バスに乗り込んだ。
木嶋は、奥の座席に座っていた。
富高さんから見れば、解りに場所であった。
前方に空いていた座席があり、木嶋のいる後方を確認せずに座ったのだ。
バスが定刻通りに発車した。
会社から最寄り駅まで…およそ１０分ぐらいである。
いつもより、道路が空いているみたいである。
木嶋の逸る気持ちを察していたみたいに、最寄り駅に…７分ぐらいで到着した。
前方に座っていた富高さんが、先に降りて、木嶋を探し待っていた。

木嶋は、最後から2人目であった。
バスの運転手さんに、
「ありがとうございました。」
ステップを降りる直前に声を掛けてたのだ。
「富高さん、お待たせしました。」木嶋は、富高さんに声を掛けた。
富高さんは、
「木嶋君が、バスに乗っていないんじゃないかと不安に駆(か)られていたよ。」木嶋に、ジョークを言っていた。
その言葉を聞いたとき…《ズルッ…》と、
前のめりに、コケかけていた。
真面目な表情をして、ときには、富高さんも、ジョークを飛ばしていた。
木嶋は、
「富高さん、今日は、時間も遅いので、横浜市営地下鉄経由で乗り換えて横浜に向かいましょう。」富高さんに提案していた。
富高さんは、
「そうだね。平日だし…明日、会社もある。横浜に早く着けば…はるかさんが、木嶋君のとなりに来て、金銭面の負担も軽減(けいげん)される可能性が高いよね!」木嶋に答えていた。
最寄り駅の階段を、一段ずつ下がって行く。
歩きながら…木嶋は、右手を顎(あご)におき、
「確かに…そうなれば一番、最高のステータスだよ!クラブ『H』に、はるかさんのファンが何人かいるはず…。そのファンの人たちも、今夜でお別れ…。自分も、今夜が最後なんて考えていないから…」富高さんに伝えたのだ。
富高さんも、首を縦に振り、
コンコース内にある…売店へ向かう。
そうならないように、願掛けではないが、そんな心境に違いないのだ。

木嶋は、
「ビールを飲みながら、クラブ『H』に向かいたい気分だよ。」
富高さんに話していた。
富高さんは、
「木嶋君も、ビールを飲む?」木嶋に聞き、
「じゃあ…言葉に甘えて…飲みましょう。」富高さんに答えたのだ。
「アサヒのスーパードライでいいかな?」富高さんは、木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「スーパードライでいいよ。」富高さんに伝えた。
木嶋は、家で、ビールを飲む機会がない。
富高さんは、小室さんと毎日飲んでいる。
雰囲気で、かなりの量を富高さんも、飲むときがある。
はるかのクラブ『H』は、周りが若い女性たちで、話しの話題を探そうにも、難しい一面がある。
富高さんは、一足早く、改札を通り、木嶋を待っていた。
木嶋は、キップを購入するため、駅の自動販売機の前に立ち、金額を確認した。
「ここから、乗り換え駅まで、２６０円か?」財布からお金を出し、キップを購入して、改札内で待つ富高さんと合流して、ホームの階段を、一段ずつ降りて行ったのであった。

第２３２話

木嶋は、
「お待たせしました。」富高さんに声を掛けた。
「木嶋君、早く行こうよ！」富高さんは、木嶋に伝えた。
木嶋は、
「そうだね。早く電車に乗りましょう！」
階段を、一段ずつ降りて行く。
「間もなく…あざみ野行きが発車致します。ドアが閉まります。ご注意下さい。」ホームのアナウンスが聞こえた。
「プルー」発車ベルが鳴り響く。
「ピコン、ピコン」と、音を立てながら、ドアと転落防止柵が閉まった。
転落防止柵を、設置している路線は、数少ない。
これからの時期は、花見や歓送迎会シーズンなので、酔っ払って…ホームに転倒する人があとを絶たない。
それが契機となり、設置されていたのだ。
木嶋の通う…会社の最寄り駅は、最初から転落防止柵があったのだ。
良く…【駆け込み乗車】する人も、これでは…一(ひと)たまりもない。
「ブーン」電気の流れる音。
電車が少しずつ、走り出して行く。
「ガタン、ゴトン」吊り革が…揺られている。
先ほど、売店で買った…スーパードライビールを、富高さんから渡された。
木嶋は、
「ありがとうございます。」富高さんにお礼を述べたのだ。
富高さんは、
「そんなに…畏(かしこ)まらなくてもいいよ！」木嶋に伝えたのだ。

人は、礼儀を重んじるものである。
今の時代…その礼儀が出来ない人もたくさんいる。　挨拶も、出来ない人もいるのだ。
毎日、色んな人たちとすれ違っている。
家の中で、《引きこもる》人。
行動的な人。
色んなタイプを上げたらキリがない。
《プシュ》
プルタブを開けた。
【つまみ】の柿の種を、左手に少し分けてもらう。
飲む人の【つまみ】は、木嶋には、解り兼ねる。
木嶋は、
「富高さん、普段、小室さんと一緒に帰るとき、酒の【つまみ】は、どんなのを買っているの？」富高さんに、問いかけた。
富高さんは、
「どんなのを買っているのかと…言われても…答えようがないよ。その時々（ときどき）で違うからね。酒は、すきっ腹で飲むと、酔いが廻るから…腹に溜まればいいよ。」木嶋に話していた。
木嶋は、富高さんの言葉を理解していた。
富高さんは、先ほど…購入したスーパードライビールを飲み干した。
「いつも…小室さんと一緒に《ノミニケーション》しているから、飲むペースが早いね！」木嶋は、富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「ビールは、一本で物足りないときは、『ＫＩＯＳＫ』で、もう一本買うんだ。家に着くまで、距離が長いからね！」木嶋に答えていた。
千葉の船橋から、毎日、通勤で2時間掛かっている。
何もしないと、退屈してしまう。
携帯を所持していれば、《Ｅメール》で、色んな人たちと話しが

出来るのに…ふと、木嶋は、そう感じてしまうことがある。
新聞も、長時間、読んでいると、
【目が…ショボショボ】してしまう。
木嶋は、両手で、胡蝶蘭の鉢植えを持ち、
電車が、乗り換え駅に着いた。
「ピンポン」電子音が鳴り、ドアが開いた。
富高さんの右手には、木嶋の飲みかけのビール缶を持っていた。
エスカレーターに乗り、改札口に向かう。
木嶋は、キップを定期入れから取り出し、改札から出た。
富高さんも、木嶋のあとから出てきた。
ＪＲの改札に行くには、もう一度、エスカレーターに乗らなければならない。
手前のエスカレーターより、奥のエスカレーターが空いていた。
富高さんは、
「木嶋君、奥のエスカレーターに行こうよ！」声を掛け…続けて、
「胡蝶蘭の鉢植え、重たかったら…替わるよ！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「大丈夫だよ！電車に乗れば…一安心するよ！それまで、頑張るよ！」富高さんに話したのであった。

第２３３話

「ズッ、ズッ、ズッ」
靴の音が、地下の通路に響いている。
少し…《キツイ表情》を見せながら、エスカレーターに乗っていた。
富高さんは、
「木嶋君。大丈夫？」と声を掛けていた。
「まだ、大丈夫！」富高さんに答えたのだ。
ＪＲの改札を通る直前、木嶋は、
「富高さん、定期券を出さないといけないので、リュックを預かってもらっていいかな？」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「いいよ。」と、気軽に応じ、木嶋は、背負っていたリュックを預けたのだ。
Ｇパンの右後ろのポケットから定期券を取り出した。
ＪＲは、自動改札化を推進（すいしん）していて、ここの駅でも、いつの間にか…自動改札になっていた。
有人のボックス改札が、ある駅を見つけるのが、至難（しなん）の業（わざ）になっていた。
木嶋の家の最寄り駅も、自動改札になっていて、富高さんの家の最寄り駅である【船橋駅】も、自動改札になっているらしい。
通勤で利用している…会社の最寄り駅は、まだ、有人のボックス改札である。
どうやら…近いうちに、自動改札を導入するらしい…。
自動改札もいいが、有人のボックス改札がなくなると、人の温もりがなくなるような気がして淋しくなってしまう。
駅員さんが、一瞬（いっしゅん）で、キセル（不正乗車）を、発見した瞬間（とき）凄いと感じている。

木嶋は、小学生や中学生の夢は、どこでもいいから…
鉄道会社の駅員さんに就職して、
地元の改札口に座り、
「カチャン、カチャン」と、鋏(はさみ)を上下(じょうげ)に音を鳴らすのが、
《格好(かっこう)よく》憧れを持っていた。
小さいときは、色んなに夢を見ていたのだ。
夢は、あくまで…夢であって、現実になるのは、極(ごく)僅(わず)か…一握りである。
成長するにつれて、数多く職業に憧れを抱いていくのであった。
Gパンのポケットから、定期券を取り出した。
「ピッ」僅か…一秒くらいであった…
木嶋は、
「富高さん、リュックを預かってくれて、ありがとうございます。」と話し…続けて、
「胡蝶蘭を、自分が、リュックを背負うまで預かって下さい。」
富高さんに伝えた。
富高さんは、
「いいよ。木嶋君の預かっていたビールも戻すよ。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「そうだったね。ビールを預けたままだったんだ。」富高さんに伝え、苦笑いを浮かべながら…
富高さんから、木嶋の右手にリュックを手渡された。
木嶋は、リュックを右肩に掛け…。
更に、右手にビールを持っていた…。
左手に持っていた…胡蝶蘭を富高さんに預けた。
富高さんは、両手に持ち、木嶋が、リュックを背負うのを待っていた。
ビールを飲み干し、リュックを背負い、富高さんに預けていた…
胡蝶蘭を再び、木嶋が、両手に持ち…

ホームに上がるエスカレーターに乗った。
横浜市営地下鉄より、ＪＲのエスカレーターの方が距離が長い。
それだけ…地下深くに掘っていたことが分かる。
「間もなく…3番線に東京行きが到着致します。危ないですから…黄色の線に下がってお待ち下さい。」ホームのアナウンスが聞こえていた。
木嶋は、
「富高さん、この電車に乗って行きましょう！」富高さんに声を掛けたのだ。
富高さんは、
「了解しました。」木嶋に伝えた。
「パーン」クラクションを鳴らし、東海道線が、ホームに入ってきた。
時計は、夜7時４５分である。
降りる人は、多くいた。横浜駅と比較したら、半分くらいである。
階段を使い、横浜市営地下鉄へ乗り換える人、改札を出る人。
４番線の横須賀線に乗り換える人たち…
横須賀線が、ホームに入ってきた。
横須賀線から東海道線に乗り換える人も多かった。
木嶋と、富高さんは、東海道線に乗車した。
車内で空いている座席を探していた。
タイミング良く…2人のシートが空いていたので、そこに座ったのだであった。

第２３４話

「やれやれ…そんな感じだよ！」木嶋は、富高さんに伝えた。
富高さんは、
「本当だよね！」木嶋に答えたのだ。
「ガタン、ゴトン」
東海道線が、スピードを上げ走行している。
木嶋の通勤ルートが変わったのは、今から、５年ぐらい前である。
当時は…東海道線で、藤沢駅乗り換え、小田急線で会社の最寄り駅まで通勤していたのである。
毎日、会社の最寄り駅から帰るとき、藤沢駅で、電車の待ち時間があると、同僚の人たちと…
《ファーストフード》や《立ち食いそば》を食べて、家に帰宅したこともあった。
今は、そんなことが出来なくなっている。
その頃が懐かしくなるときがある。
～♪懐かしい　Ｙｅｓｔｅｒｄａｙ♪～
「木嶋君、思い切って…今日、はるかさんに、想いを打ち明けた方がいいのでは…」富高さんが、木嶋に問いかけていた。
富高さんの言っていることは間違いではない。
木嶋は、
「今日は、そんな話しは出来ないよ…さすがに…」言葉を濁(にご)しつつ…
「近いうちに、打開するよ。」富高さんに答えたのだ。
「間もなく…横浜。横浜に到着です。どなた様も、お忘れ物がないようにお願いします。」車内アナウンスが聞こえていた。
木嶋は、
「やっと…横浜駅に着くのか？」富高さんに話したのであった。
膝の上に乗せていた胡蝶蘭を見て、

「木嶋君、胡蝶蘭…大丈夫?」富高さんが、木嶋に声を掛けた。
「大丈夫だよ!」木嶋は、富高さんに答えていた。
東海道線が、横浜駅構内に入った。
スピードを緩め…
木嶋は、座席を立ち、預けていたリュックを、富高さんから受け取った…。
一時(いちじ)、胡蝶蘭を座席に置き、再び、両手で抱えていた。
「プシュー」ドアが開いた。
木嶋と富高さんは、中央の出口階段を降りて行く。
横浜駅は、自動改札になっている…
一旦(いったん)立ち止まり、木嶋は、後ろのポケットから定期券を出そうとしていた。
富高さんが、
「木嶋君、預かるよ!」木嶋に声を掛け、胡蝶蘭を両手に抱えた。
定期券を、ポケットから出した木嶋は、富高さんから、受けとった。
「ピッ」自動改札のタッチパネルを、一秒弱(いちびょうよわ)して、改札を出た。
木嶋の右隣りの改札から富高さんが出たのだ。
「富高さん、こちらです!」木嶋が、富高さんに声を掛けた。
「最短ルートで行けば問題ないのかも知れないが、少し大回(おお)りで行かないと…」富高さんが、木嶋に答えていた。
木嶋は、
「少しでも、早く帰りたいのに、逆なことをして申し訳ないね。」
富高さんに謝罪した。
コンコースを歩き、エスカレーターに乗った。
大勢の人が行き交う中で、鉢植えを抱えて歩いているのは、木嶋だけである。
小さな花を持って歩く人…
大きな花束を持って歩く人…
木嶋は、咄嗟(とっさ)に判断した。

「小さな花を持っている人は、職場異動なのかも…大きな花束を抱えている人は、自分と同じように…好きな人にプレゼントか？会社を退職した人」と…思わずにいられなかった。

富高さんは、

「木嶋君、花束を持っている人が多く見かけるよね？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「春は、出会いと別れの季節だよ！」富高さんに答えていた。

相鉄ジョイナスの中を通って行く。

メインストリートを歩き、橋の袂（たもと）で一息（ひといき）をついた。

「木嶋君、もうすぐ…クラブ『H』に着くね。」富高さんが、木嶋の右横で囁いた。

木嶋は、

「そうだね。今になって…段々と、握力がなくなってきたよ。」

富高さんにボヤいていた。

橋を越え、家電量販店の脇を通り、

見慣れた鉄の階段を…

「カッ、カッ、カッ」一段ずつ…慎重に上がって行く。

富高さんが、クラブ『H』のドアを開けた。

【いらっしゃいませ】

男性店員さんの掛け声が聞こえたのであった。

第235話

「お客様。2名でよろしいでしょうか?」男性店員さんが、木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「はい。お願いします。」男性店員さんに答えたのだ。

「こちらにどうぞ…」エスコートされ、空いていた一番奥(いちばんおく)の角(かど)の席に座った。

胡蝶蘭の鉢植えを両手で抱えていた木嶋は、席に座り、財布から…クラブ『H』なメンバーズカードを、男性店員さんに差し出した。

「お預かり致します。ご指名は…誰に致しましょうか?」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「はるかさんをお願いします!」男性店員さんに伝えた。

男性店員さんは、

「お客様。はるかさん、本日…ラストインで、ご指名の本数が、かなり重複(ちょうふく)しておりまして…なかなか…こちらに来ることが出来ないかも知れません!ご理解を戴けますか?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「分かりました。」男性店員さんへ答えるしかなかった。

「そちらの方は…誰がよろしいでしょうか?」男性店員さんが、木嶋の右横にいた…富高さんに問いかけていた。

富高さんは、

「自分は…指名する人がいないので、そちらに、お任せ致します!」男性店員さんに答えたのだ。

「それでは、こちらで、フリーの女性をご案内させて戴きます!」男性店員さんが、富高さんに伝え、

「女性が来るまで、しばらくお待ち下さい!」木嶋の座席から離

れて行く。
上を見上げると…輝かしいミラーボールが回っている。
「もう、この店に来ることもなくなる！」
感傷に浸っていた。
クラブ『H』に通うこと…1年4カ月…。
【我ながら…頑張ったかな？】
《自分で、自分を褒めたい。》
その言葉を思い出していた。
木嶋は、若いとき…色んな店を点々（てんてん）して、とにかく女性にモテたい。
【自分自身を迷っていた！】
そんな心理状態だった。
手探りだったのかも知れなかったのだ。
「これで、関内で腰を落ち着けられる！麻美さんや玲の店にも、顔を出すことが出来るようになる！」
木嶋の考えていることと、富高さんの考えていることも同じであった。
男性店員さんが、ボトルを持ち、女性を木嶋のいる席に連れてきた。
「左が、《あんなさん》、右が、《いずみさん》です。」
木嶋は、
「よろしくです。」頭を下げたのだ。
富高さんの左手に、《いずみさん》
木嶋の左手に、《あんなさん》が座った。
2人とも、
「よろしくお願いします！」木嶋と富高さんに話したのであった。
男性店員さんは、
「どうぞ…ごゆっくり。」木嶋に伝え、席を離れて行った。
あんなさんが、
「お仕事の帰りですか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、
「そうです。仕事帰りです。今日は、はるかさんのラストインで来ました。」あんなさんに伝えた。
あんなさんは、
「そうなんですか?それで、今日は、はるかさんの指名が重複していたんですね!」木嶋に話し、続けて…
「何か…プレゼントされるのですか?」問いかけていた。
木嶋は、
「花をプレゼントしようと思いまして…今、ソファーに置いてあるのがそうです。」あんなさんに答えていた。
花を見て…
【胡蝶蘭ですか…いいですね!私も欲しいです。プレゼントして下さい。】あんなさんが、木嶋にお願いしていた。
木嶋は、
「今度、クラブ『H』に来たら約束しますよ。」あんなさんに伝えたのであった。
「このお店に、良く来られるのですか?」あんなさんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「平均的に、2カ月に1回ぐらいかな?はるかさんがいる時しか来ないね!」あんなさんに答えていた。
あんなさんは、
「はるかさんより、私の方が魅力的ですよ!」木嶋に伝えた。
木嶋は、一瞬…戸惑いを隠せずにいた。
「あんなさんとは、初対面で強烈な《インパクト》が　ないんだ。」あんなさんに伝えた。
あんなさんは…
《インパクト》ですか…?
不満げ表情を…木嶋に見せたのであった。

第２３６話

木嶋は、
「自分に、あんなさんの残像が残るくらいに強烈にしないと…」
あんなさんに話したのだ。
「強烈にですか？」木嶋の答えを聞き…
あんなさんが、
「フー」と、ため息をつき、肩を落としていた。
富高さんは、いずみさんと、会話が弾んでいて、時折笑顔が見受けられていた。
木嶋は、
「富高さん、楽しんでいる？」富高さんに声を掛けた。
富高さんは、
「楽しんでいるよ！」木嶋に答えていた。
「いずみさんでしたよね！初めてまして、木嶋と言います！」木嶋の右横にいた、いずみさんに挨拶した。
「初めまして、いずみです。富高さんから、話しを伺いました。今日、はるかさんのラストインって聞いて驚きました。」いずみさんが、木嶋に伝えた。
木嶋は、
「そうなんですよ！はるかさんと、いずみさんは、接点は、ありますか？」いずみさんに尋ねていた。
「このクラブ『H』で、仲良くしている人は、いません！ロッカーで、着替えているときに話しをするぐらいですかね！みんなが、ライバルですから…」いずみさんが、木嶋に話したのであった。
木嶋は、
「ライバルね！」妙に、納得した顔になっていた。
「あんなさん、チョット…トイレに行きたい。」木嶋が、あんなさんに伝えた。

あんなさんは、
「木嶋さん、トイレの場所は…分かりますか?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「判ります。ありがとうございます。」あんなさんに答え、席を立ち…歩き出した。
店内を少し…見渡した。
「はるかは、どの辺りにいるのだろうか?」
不安になるのも無理はない。
はるかを指名したときに、男性店員さんが、
「かなり…重複しています!」
頭の中では、理解していても、その言葉を、どのように捉えていいか…考えれば考えるほど、深みに嵌(は)まりそうであった。
木嶋の席から、離れたところにいた。
その表情を見たとき、安堵感(あんどかん)が漂(ただよ)っていた。
「あと…どれくらいしたら、自分の席に来るかな?早く、会話がしたいな!」
心の中で浮ついていた。
トイレから、自分の席に戻る足どりが、軽快なステップに代わっていた。
木嶋は、自分のいた席に戻った。
あんなさんが、
「木嶋さん、お疲れ様です。」そっと…おしぼりを、木嶋に手渡した。
木嶋は、
「ありがとうございます!」あんなさんに、言葉を返したのであった。
「木嶋さん、先ほどから表情が変わりましたね!」あんなさんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、

「そうかな?そんなことは…ないと思うよ。」冷静を装い、あんなさんに伝えた。
あんなさんは、
「やはり…はるかさんが、気になっていたんだ。まだ、私では、まだ役不足ですかね?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「う～ん。」唸り声を上げていた。
富高さんの右横にいた、いずみさんが、
「木嶋さん、どうしたのですか?」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「何でもないですよ!」いずみさんに、返す言葉を見つからずにいたのであった。
富高さんは、
「木嶋君は、はるかさんのことで頭が一杯みたいだよ。」いずみさんに答えたのだ。
木嶋は、
「富高さん、ありがとうございます。」富高さんに声を掛けたのであった。
右横の腕時計を見ると、時刻は、午後１０時を過ぎていた。
「明日のこと、金銭面を考えると、これ以上、ここにいる厳しいな!」悩み出してしまった。
木嶋は、右手を上げ、近くにいた…男性店員さんを呼んだ。
「はるかさん、まだ、こちらの席に来ることは出来ないのですか?」木嶋は、男性店員さんに聞いていた。
男性店員さんは、
「はるかさん、今日が、ラストインですから、色んな席のお客さんに挨拶に行っているので、こちらに来るのが遅れて申し訳ありません!」木嶋に頭を下げたのだ。
木嶋は、
「自分も、明日、会社があるので、クラブ『H』を出ないと行け

ないので、何とか…融通をして戴けませんか！」男性店員さんに話したのであった。

第２３７話

男性店員さんは、困惑な表情を浮かべながら、
「お客様、私の上司と相談させて頂きますので、少し…お時間を下さいますか？」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「分かりました。なるべく…前向きな回答を望みます。」男性店員さんに伝えた。
あんなさんが、
「待ち人来ず…。そんな状況ですものね！普段なら、指名が重複していても、待ちは少ないはずですよね？」木嶋に問いかけていた。
「そうだね。指名が重複していても、およそ…３０分ぐらいで来るね。店に入ってからこんなに待たされたのは、初めてで…自分が、不安になるんだ。明日もあるから…」木嶋は、あんなさんに話したのだ。
「明日？ですか…」あんなさんの頭の中で、クエスチョンマークが付いていた。
「明日は、仕事ですよ。」木嶋は、あんなさんに伝えた。
「あっ…そう言う明日ですね。私も、学生ですから授業がありますよ！」あんなさんは、木嶋に話していた。
「いいね。大学生活を謳歌（おうか）しているんだね！大学は、４年制かな？」木嶋は、あんなさんに尋ねたのだ。
「大学は、４年制で、はるかさんと同じ年齢ですよ！」あんなさんは、木嶋にアピールしていた。
「はるかさんと、同じ年齢ね…若いね。キャンパス楽しい？」木嶋は、あんなさんに尋ねた。
あんなさんは、
「楽しいと言えば、楽しいのですが…つまらないですよ！」木嶋に答えていた。

木嶋は、
「つまらない…って、どうして。あんなさん、彼氏がいるでしょ？」あんなさんに聞いていた。
「彼氏なんて…いません！」
「また、彼氏がいないなんて…冗談でしょ？スタイル抜群なのに…。」木嶋は、あんなさんに伝えた。
「スタイル抜群なんて…誉め過ぎです。彼氏がいないのは、嘘ではありません。木嶋さんが、羨ましいですよ！」
「羨ましいなんて言わないで…あんなさんに、胸を張れるようなことをしていません！」あんなさんに、木嶋は答えたのだ。
あんなさんは、
「木嶋さん、はるかさんが…彼女じゃないですか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「はるかさんは、彼女じゃないですよ！プライベートで会うのは、この世界にいる限り禁止ですよ！」
「プライベートで会うのは、禁止と言っても…今まで、こっそり…会っていたりしているんじゃないですか？顔に書いてありますよ！答えが…」あんなさんは、木嶋にツッコんでいた。
木嶋は、あんなさんの言葉が当たっているだけに、どう…切り返そうか…考えていた。
「仕方ないね！本当のことを言うと…プライベートで会っていますよ！店に出勤前ですが…」木嶋は、あんなさんに答えていた。
あんなさんは、
「やっぱり…そうだと思いました。はるかさん、今日で、クラブ『H』を辞めるのですから…規則に縛られることもないですよ！」
木嶋は、あんなさんの話しに頷いていた。
男性店員さんが、
「お客様。先ほど、上司と相談を致しまして、今回は、特別にこちらを優先させて頂きます。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、
「ありがとうございます。ちなみに…あと、どれくらいで、こちらに来ますか?」男性店員さんに尋ねていた。
男性店員さんは、
「あと…5分ぐらいです。」木嶋に答えたのだ。
「このことは、はるかさんに内密(ないみつ)にしてくれますか?」木嶋は、男性店員さんに頭を下げた。
男性店員さんは、
「畏(かしこ)まりました。」木嶋に答え…その場を離れて行った。
あんなさんは、
「木嶋さんと話しをしていると、とても楽しいです。もう少しで、この席を立たないといけないなんて…酷(ひど)いですよ!指名してくれれば、ずっといることが出来るのに…」木嶋に強い意思表示をしていた。
木嶋は、
「次回、クラブ『H』に来たら指名するね!」あんなさんに伝えたのであった。
あんなさんは、
「ありがとうございます!」木嶋に、にこやかな表情を見せたのであった。
あんなさんと話すのは、この日が最後になる…木嶋は、最初から答えが出ていたのであった。

第２３８話

男性店員さんが、木嶋の元に、はるかを連れて来た。
あんなさんが、席を立ち上がり、
「木嶋さんの待っていた人が来ましたね。短い時間でしたが…とても楽しく過ごせて頂き、ありがとうございました。また、クラブ『H』に来て下さいね！約束ですよ！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「分かりました。次回、クラブ『H』に来たら、あんなさんを指名しますよ！」あんなさんに話していた。
あんなさんは、木嶋の言葉を聞いて…安心した表情で去って行った。
「お待たせしました。はるかさんです。」男性店員さんが、木嶋に声を掛けたのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。」男性店員さんに、頭を下げたのだ。
はるかが、木嶋の右横に座った。
「随分…待ったのかな？」はるかが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「かれこれ…1時間以上…待ったのかな？その間、先ほどまで座っていた…あんなさんと話していたら…盛り上がったよ。」はるかに答えていた。
はるかは、
「ゴメンね！私のお客さんが、たくさん来店していて…今日が、《ラストイン》のことをメールや電話で話していたら、指名が数え切れないくらい重なってしまって…木嶋さんに申し訳ないです。」木嶋に、頭を下げていた。
木嶋は、
「仕方ないよね！みんなが、はるかさんに会いたいのだから…も

っと、待つなら帰ろうかと思っていたんだ。」はるかに話していた。
はるかは、
「かなり…無理をさせてゴメンね！私が、頼んだ物は持って来てくれたかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「依頼された物は、持って来たよ。時間の制約があったので、花束ではないが…鉢植えだけどね！」はるかに伝え、
「長い間…お疲れ様でした。」席の横に置いてあった胡蝶蘭を渡した。
「木嶋さん、ありがとうございます。」はるかは、にこやかな表情を浮かべながら、
「他のお客さんから貰うよりも、木嶋さんから頂くプレゼントが、最高に嬉しいですよ。いい値段をしたのではないですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「ありがとうございます。値段は、チョット…高かったね。確か…1万円ぐらいかな？」はるかに答えていた。
はるかは、
「横浜駅で、買って来たのですか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「はるかさんの右横にいる…富高さんに聞いて下さい…。」はるかは、まだ、富高さんの存在に、気が付かないので振ってみた。
すると、はるかは、右横に…顔を向けた。
「富高さん、お久しぶりです。この胡蝶蘭は、どこで買われたのですか？」富高さんに聞いていた。
いずみさんと話しをしていた、富高さんは、
「あっ…はるかさん、お久しぶりです。その花は、木嶋君が、上司に頼んだみたいだよ。」はるかに伝え、続けて…
「何(なん)だか…今日が、はるかさんの《ラストイン》だと…木嶋君から聞いたのですが、本当ですか？」確認をしていた。

はるかは、
「今日が、《ラストイン》と言うのは、本当ですよ。そちらの方のお名前を教えて頂いてもいいですか?」富高さんの右横にいた…いずみさんに声を掛けた。
いずみさんは、
「初めましてかな?『いずみ』と言います。よろしくお願いします。」はるかに、軽く会釈(えしゃく)した。
はるかも、
「初めまして…『はるか』と言います。よろしくお願いします。」いずみさんに頭を下げたのだ。
いずみさんは、
「話しは、富高さんから伺っています。今日が、《ラストイン》なのですね?せっかく…知り合えたのに、何故?辞めてしまうのですか?」はるかに聞いていた。
はるかは、
「4月から、社会人として就職するので、この世界を卒業しようと…今、おいくつですか?」いずみさんに、年齢を尋ねていた。
いずみさんは、
「18です。はるかさんは、おいくつですか?」はるかに、逆質問をしていた。
はるかは、
「私は、20です。先月…成人式を終えたばかりですよ!」いずみさんに答えたのだった。
「そうなんですか?成人式とご卒業…おめでとうございます。」いずみさんは、はるかにお祝いの言葉を述べたのであった。

第２３９話

はるかは、
「ありがとうございます。」表情を崩し、嬉しそうな声で、いずみさんに言葉を返したのだ。
いずみさんは、
「私も、再来年（さらいねん）、成人式を迎えるんですよね。お店に来るお客さんの中で、彼氏を見つけたいな?と、考えています。一緒にお祝いをして頂く人は、家族よりも、彼氏の方が良いですね?」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「いずみさん…その通りですよ。私は、木嶋さん、富高さんと出会って良かったと思います。家族も大切ですが、彼氏に、お祝いをして貰うのが、最高の《シチュエーション》ですよ!」いずみさんに話していた。
いずみさんは、
「そうですよね。はるかさんを、見習（みなら）い頑張りますよ。どうすれば、木嶋さんみたいに、良い人を探せますかね?どのようにして、知り合ったのですか?」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「木嶋さんとは、ここで知り合いました。お互い、好きな人が、いなかったのが良かったのです!」いずみさんに答えていた。
「木嶋さん、そうなのですか?」いずみさんは、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「そうだね。はるかさんが、答えた通りです。たまたま…《タイミング》が合ったのです。クラブ『H』に来たとき…会社の仲間たちと一緒でした。最初は、自分と同じ年代の女性が座っていたのですが、女性が、入れ替わって…はるかさんは、その後（あと）に、来たので

す。そのとき、強烈な《光》（ひかり）と言うか…《インパクト》と言った方が良いかな？相当（そうとう）アピールをしていました！」いずみさんに話したのだ。

いずみさんは、

「強烈な《光》…《インパクト》って…何ですか？」木嶋に質問をした。

「何ですか？と、言われても、返す言葉が見当たらない。それだけ、何かを持っていたのだと思います。」木嶋は、いずみさんに伝えたのだ。

いずみさんは、

「目に見えない…【オーラ】…ですかね？」富高さんに、話しを振ったのだ。

富高さんは、

「そうかも知れないね！波長（はちょう）が合ったと言うのが正解だと思うよ！」いずみさんに言葉を返したのであった。

はるかは、

「今、富高さんが、話したことが、私は、全ての答えだと思います。」いずみさんに伝えたのだ。

いずみさんは、

「そうですか…木嶋さん、先ほど、あんなさんと、次回、クラブ『H』に来る約束をしていましたが、信じていいのですかね？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「次回、来店しますよ！信じて下さい！」いずみさんに、表向き…安心を与えるように答えることしか出来なかったのだ。

はるかは、

「本当に来るの？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「来るよ！」はるかに伝えた。

「私以外に、連絡先を教えたりしていないでしょうね！浮気はダ

メですよ?」はるかは、木嶋に確認していた。
木嶋は、
「あんなさんに、連絡先を教えていません!浮気はしません!クラブ『H』へ来るなら、はるかさんに話してから、飲みに行きますよ!」はるかに伝えたのであった。
「分かりました。私よりも、あんなさんが魅力的ですか?」はるかは、木嶋に問い詰めていた。
木嶋は、
「あんなさんが、魅力的か…って…。クラブ『H』にいると、みんなが綺麗に見えてしまう!はるかさんが、一番ですよ。」はるかに、おダテ気味に、話していたのだ。
はるかの右横にいた、富高さんは、
「木嶋君の言う通りだよ。自分も、そう感じるよ。でも、他の女性の誘惑に負けたらダメだよ!」木嶋に伝えたのだ。
いずみさんも、
「そうですよ。」はるかを援護射撃(えんごしゃげき)をした。
さすがの木嶋も、タジタジになって聞いていた。
「誘惑に負けたなんて思わない。今日は、はるかさんのお客さんの数に、圧倒(あっとう)されていたよ。」木嶋は、苦笑いをしていた。

第２４０話

はるかは、

「そうでしょう。自分なりに、頑張ったかな?だと思いますが…木嶋さんの目には、どのように感じました?率直な意見を聞かせて下さい。」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「率直な…意見ね。富高さんと、クラブ『H』に来るまで、色々(いろいろ)と話していたんだ。自分たちは、どう頑張ったのかなって!」はるかに答えたのだ。

「何故?そう思ったのですか?」

「何故?…かと言えば、今まで、同じ店に、長く通ったことがなかったからね!一番多いのは、その日限りだったよ!」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「富高さんも、そうなのですか?」富高さんに尋ねていた。

富高さんは、

「自分も、同じ心境だよはるかさんや、麻美さんと出会えたことが良かったよ!」少し笑みを浮かべながら話していた。

「ありがとうございます。私や麻美さんが、木嶋さんや、富高さんにしたことはないですよ!」はるかは、やや不満げな表情を見せながら話していた。

木嶋は、

「はるかさんや、麻美さんに出会ったことが、貴重な財産ですよ!」はるかに伝えたのだ。

その話しを聞いていた…いずみさんが、

「一度、このメンバーで遊びに行きませんか?」富高さん、はるか、木嶋に提案をしてきた。

富高さんは、

「このメンバーで、遊びに行くのは、いいと思うが…約束をしても、ムダのような気がするよ…」いずみさんに答えていた。

いずみさんは、

「何故？ムダだと…言い切れるのですか？」富高さんに聞いていた。

富高さんは、

「自分は、携帯を持っていないので、木嶋君から情報を得ないと、飲みに行ったり、遊ぶ約束をすることが出来ません。また、はるかさんや、木嶋君も忙しいんじゃないかな？」いずみさんに問いかけていた。

いずみさんは、

「木嶋さん、そうなのですか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「富高さんが、答えた通りかも知れませんね！自分も、予定が空いていればいいですが…はるかさんも、会社勤務をしないと分からない部分があるのではないかな？」いずみさんに話したのだ。

いずみさんは、

「はるかさんは、どうでしょうか？」はるかに聞いていた。

はるかは、

「2．3月と予定が立て込んでいるので、厳しいですね。4月以降なら、時間が取れると思います！」いずみさんに伝えたのだ。

いずみさんは、

「分かりました。4月以降で、スケジュールを調整しましょう！はるかさんと、話しをしてから、木嶋さんたちに伝えますね！それで、ご理解願えますか？」木嶋と、富高さんに同意を求めた。

木嶋と、富高さんは、

「ＯＫです。」と、いずみさんに答えたのだった。

木嶋が、左腕にしている腕時計を見た。

「もう…夜１０時３０分か…そろそろ帰らないと、マズイな！」

ボヤいていた。

富高さんは、
「木嶋君、そろそろ帰ろうよ。明日、お互い、仕事だしね。」
木嶋は、
「ナイスタイミング。自分も、そう思っていたんだ。帰りましょうか?」富高さんに話したのだ。
はるかは、
「そうだよね。木嶋さん、富高さん、明日、仕事ですよね!会計にしますか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「そうしようか?」はるかに話したのだ。
はるかは、近くにいた男性店員さんを呼び、両手でシグナルを出した。
はるかは、
「そうでしょう。自分なりに、頑張ったかな?だと思いますが…木嶋さんの目には、どのように感じました?率直(そっちょく)な意見を聞かせて下さい。」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「率直な…意見ね。富高さんと、クラブ『H』に来るまで、色々(いろいろ)と話していたんだ。自分たちは、どう頑張ったのかなって!」はるかに答えたのだ。
「何故?そう思ったのですか?」
「何故?…かと言えば、今まで、同じ店に、長く通ったことがなかったからね!一番多いのは、その日限(ひ)りだったよ!」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

第２４１話

はるかは、
「あっ…と、言う間に、時間が来てしまいました。もっと…一緒に話しをしたかったのに残念です。今日は、会えて嬉しかったです。」にこやかな笑顔で、木嶋と、富高さんに挨拶をした。
木嶋は、
「今まで、楽しませて頂き、ありがとうございました。また、機会があれば、会いたいですね！」はるかに伝え、
富高さんも、
「今日は、ありがとうございました。また、機会があれば会いましょう！」頭を下げたのだ。
はるかは、木嶋と、富高さんから預かったお金を、男性店員さんに渡した。
「今まで、お世話になりました。素敵な夜と、たくさんの思い出をありがとうございました。」はるかの目から、一筋（ひとすつ）の涙が零（こぼ）れていた。
男性店員さんが、お釣りを、はるかに渡し、
それを、木嶋に手渡したのだ。
お釣りがあるのを、木嶋は、理解をしていた。
いつもなら、金額を確認せずに、封筒を受け取るが、今回は、無言のまま…はるかに渡したのだ。
はるかは、驚きながら…
「ありがとうございます。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、リュックを右肩に掛けた。
それが合図のように、富高さんが、席を立ち、同時に、木嶋も席を立ったのだ。
クラブ『H』のドアを開け、
「カツン、カツン、カツン」と靴の音（ね）を鳴らしながら、

鉄の階段を下りて行く。
はるかは、
「ありがとうございました。」声を出し…木嶋と、富高さんに右手を振っていた。
木嶋は、立ち止まり、はるかに、
「ありがとうございました。」手を振り、答えていたのであった。
富高さんは、
「木嶋君、歩き出そううよ！」木嶋を促し、歩み出した。
木嶋は、
「富高さん、はるかさんと、クラブ『H』で会うことはなくなったね。自分は、まだ、プライベートで会うよ！」富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「木嶋君、そうだね…プライベートで、会えるチャンスがあるんだよね！機会があれば、はるかさんと、食事でも行こうよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。いつ、はるかさんから連絡が来るか？判らないが、来たら…富高さんに話しに行きますよ。」富高さんに話したのだ。
横浜駅の改札を通り、木嶋と、富高さんは、東海道線に乗り、横浜駅をあとにしたのだ。
木嶋は、
「ガタン、ゴトン」揺られながら、長い一日が終わったと思っていた。
最寄り駅に着いた。
すると…携帯の新着受信メールが届いていた。
木嶋は、
「誰だろう…？」
受信メールを見た。

はるかからであった。

「今日は、ありがとうございました。今は、時間がないので、短文で申し訳ありません！明日、電話します！」

木嶋は、

「忙しいのに…気を使わせてしまったかな？」はるかを思いやりながら…

「ありがとうございました。」メールを返信した。

「今日は、気持ち良く寝れるかな！」心が晴れやかになっていた。

家に着き、風呂に入り、布団に入った。

翌朝、木嶋の携帯に、一件の留守電が入っていた。

木嶋は、留守電センターに電話を繋いだ。

「もしも～し。はるかです。お店も辞めたし、自分も忙しいし…もう、木嶋さんと会うのを辞めようと思いました。じやあね！」

まさか…別れの電話だと思わず、絶句したのであった。

そのとき木嶋は、心にポッカリと穴が空いてしまった。

「さよなら…」を心の中で告げたのであった。

第２４２話

木嶋は、
「さよなら」を告げても、何が…何だか訳が分からずにいた。
朝の食事をしながら、はるかと過ごした日々を回想していた。
「後腐れなく…綺麗に別れよう…。」そう考えていても、
「自分には、はるかが、いないとダメな人間になってしまう。」
木嶋の会社の先輩たちが危惧していたように…
はるか依存症に陥っていた。
会社に行く身支度を、簡単に済ませ…
家から最寄り駅までの間に、
「直接…はるか本人に…確認の電話をしよう！」木嶋は、思い立ったのだ。
電撃攻撃するには、
「朝、電話をしてみようかな？」
携帯の着信履歴から、はるかの番号をスクロールした。
一度、躊躇しながらも、
「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。
木嶋は、３回コールしたが、電話を切ったのだ。
「こんな朝早くから、電話しても意味がない！」心の中で、《ジギル》と《ハイド》が出て来て、バトルを始めてしまった。
《ジギル》は、
「相手のことを考えるな！今、電話をするのだ。」ハイドに攻撃していた。
《ハイド》も、
「はるかの気持ちを尊重して…温かく見守るべきだ。」ジギルに負けじと反撃していた。
勝負が付かない状況の中で、最寄り駅に着いてしまった。
木嶋は、

「ジギルの言っていることもそうだが、今回は、ハイドの言っていることを尊重するぞ！」心の中で絶叫していた。

さすがの《ジギル》も、

「ハイドの意見を聞くなら仕方ない。」そう言って、木嶋の心の中から消えて行ったのであった。

「何かあれば、はるかから連絡があるはず…」木嶋は、開き直ったのだ。

今まで、張り詰めていた緊張感から解放された。

いつものように…

『ＫＩＯＳＫ』でスポニチを購入して、改札を通り京浜東北線に乗車した。

「ガタン、ゴトン」

電車の揺れ具合が丁度良かった。

普段、何気なく通っているルートも、

ふと周囲を見渡すと、意外と新しい発見があるのだ。

一人でいるときは、スポーツ新聞が愛読するのが日課になっている。

電車の中で、小説を読んでいる人。

ウォークマンを聞いたり、ＰＳＰ、ＤＳのゲームをしている人もいる。

定番と言えるのは、電車の中で寝ている人もいる。

電車が、横浜駅に着いた。

「横浜駅で降りることもなくなるかな？」虚しさが込み上げてくる。

「昼休みに、富高さんの職場に行こう！」木嶋はそう考えた。

乗り換えるために、ＪＲの改札を出て、相鉄線の改札に向かった。

階段を、一段ずつ…上がって行く。

足取りが、軽快なステップになっていた。

木嶋が、まだ若い頃…。

彼女にフラれたときは、ショックが大きく、仕事が、手に付かな

いこともあった。
今回は、意外と言えば意外で、サバサバとしていた。
麻美が、木嶋に良く言う言葉は、
「はるかさんが、全てではなく…他の女性を見る目を養(やしな)わないと…社会勉強をしたと思わないとね！」それを思い出していた。
麻美は、色んなタイプの女性を見ていただけに、アドバイスが的確であった。
木嶋の理想のタイプは、芸能人ではいる。
あくまでも、理想と現実のギャップがあるのは、理解をしている。
どこかで、妥協しないといけないのであった。

第２４３話

「何かあれば…はるかから電話をしてくるはず…それまで、待ちの姿勢を貫くようにしよう！本当に別れるなら仕方ない。」木嶋は、そう覚悟を決めたのであった。

相鉄線の乗り換え駅に着いた。

「会社では、《ポーカーフェース》していないと、みんなに勘ぐられて余計な心配をかけてしまう。顔に出やすいから気をつけないといけないかな？」心の中で、注意を促していた。

乗り換えてから、会社の最寄り駅まで、およそ…２０分ぐらいである。

木嶋が、電車の中で寝るタイミングを計るには、【ジャスト】の時間であった。

「会社の最寄り駅は終点。電車は、各駅停車だし、寝過ごすこともない。いざとなれば…車掌さんが起こしてくれると思う…。」木嶋は、そう考えながら…

リュックを両手で支え、座席の壁に、もたれ掛かるように…目をつぶっていた。

電車の中で、鼾をかいている人もいる。

木嶋も、目をつぶっているときも、鼾をかいている可能性があるのだ。

会社の最寄り駅に、電車が着いた。

「プシュー」と、エアーが止まる音が聞こえていた。

毎日のことながら、エスカレーターを、極力使わないで、階段を一段置きに上っていく。

「木嶋、何で…《エスカレーター》を使わないんだ？」良く会社の先輩たちに聞かれることがある。

その度に、

【健康維持】と先輩たちに話していたが、

本来の目的は、
【体力の低減防止！】が、希求（ききゅう）の課題であった。
もちろん、階段を一段置きに上がるよりは、会社の周囲を走った方がマシと言う意見が多数を占めている。
木嶋も、
「走るのを辞めた訳でもない。」
目標を見失ってしまうと…見つけるのが難しい。
走らなくなってから…もう、どれくらい経っているのか判らない。
少なく見積もっても、3年は経過している。
陸上仲間との交流も、2年以上飲み会や各種大会の応援に行かなくなってしまった。
会社の先輩たちの中で、【体力維持】を目的に走っている人もいる。
木嶋は、会社の先輩たちの話しに入っていくのがやっとと言う状況なのであった。
大会に出場すれば、タイムを上げることが最大の目標なのである。
毎年、同じ大会に出場していたので、タイムが落ちたことは一度もなかった。
いつかは、タイムが落ちることもある。
引き際も大切なときもあるのだ。
階段を上がり、改札を出て会社の送迎バスに乗車した。
まだ、誰も、木嶋の表情に変化を見た人はいなかった。
ドアが閉まり、送迎バスが会社に向かった。
空いている座席を見渡したがなく、手摺りに掴まっている。
通勤で、ずっと立っているのではないので、会社に着くまでは我慢が出来るのだ。
会社に着き、送迎バスから降りた木嶋は、ロッカールームに向かう途中で携帯を覗いたが、
「はるかからの電話も、メールもないのか？」落胆（らくたん）しながらも、
「当たり前か！」納得していた。

ロッカールームで着替えを終えて職場に向かった。
職場の休憩所でスポニチを読んでいた。
溝越さんが、
「木嶋、昨日は、胡蝶蘭…彼女に渡せたのか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「溝越さん、おはようございます。彼女に、胡蝶蘭を渡すことが出来ました。お手数おかけしました。」溝越さんに頭を下げた。
溝越さんは、
「無事に渡せたならいいんだ。富高と何時まで…居たんだ?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「夜１０時３０分ぐらいには帰りましたよ。富高さんは、日付が変わったかも知れません!」溝越さんに答えたのであった。

第２４４話

溝越さんは、

「そうか…木嶋も、富高も、あまり寝ていないんだな！こう言うときは、慎重にやらないと仕事中にケガをするぞ！気をつけないと…」木嶋に注意を促していた。

「そうですね。ご心配をおかけてして申し訳ございません！」木嶋は、溝越さんに頭を下げたのであった。

返事を聞いた…溝越さんは、休憩所からを離れて行ったのだ。

ここから木嶋の長い一日が始まろうとしていた。

作業服のポケットから、携帯を取り出し、着信履歴とメールの受信ＢＯＸを確認するも…

はるかからの連絡はなかった…当然のことである。

「昨日の今日で、結論が変わることはない！はるかの考え方がブレることはない！」木嶋は、自分自身を納得させるように問い掛けていた。

そんな木嶋を見ていた…三谷さんが、

「木嶋、どうしたんだ…浮かない顔をして…」木嶋に話しかけていた。

木嶋は、

「三谷さんに、話した方がいいのだろうか？」戸惑い（とまどい）…躊躇（ちゅうちょ）していた。

それは、なぜか…？

「三谷さんは、口が軽い！」そのイメージがあるのだ。

「普段なら話しはするが、今回のことは、自分自身のことだから、話しをしない方がいいかも知れない！」木嶋は、そう考えたのである。

「何でもないよ！」精一杯の強がりを言うのであった。

三谷さんは、

「本当に何もないのか?」ニヤニヤしながら…再度、木嶋に問い掛けていた。
木嶋は、
「本当に何もないですよ!」三谷さんに話したのであった。
三谷さんと、一緒に仕事をしているので、
《ポーカーフェース》を演じていないと…悟られてしまうため、無愛想な表情をするときもあるのだ。
仕事が始まるまで、まだ時間に余裕がある。
木嶋は、携帯を持ち…麻美のメールアドレスを呼び出していた。
「麻美さん、おはようございます!朝早くからメールを送信して申し訳ない!今日の朝、はるかさんから、お別れのメッセージが、自分の携帯の留守電に入っていました。結論から言うと、麻美が、前から自分に話しているような内容でした!友達と言っても、《はるかさんから見たら、木嶋君は、クラブ『H』の単なるお客さんの一人》そんな感じです!」メールを送信したのであった。
麻美からメールが直ぐに返信されてくるとは思わない。
木嶋は、
「ほら…私が言った通りでしょう!」麻美からの答えを予想していた。
それが当たった瞬間、虚しさが込み上げていた。
麻美へメールを送信したあとに、
玲へ同じ内容のメールを送信した。
「フー」と息を吐いた。
外に出て、日差しを浴びていた。
雲の一つない快晴である。
木嶋の心は、
「ザアー、ザアー」土砂降りの雨が降っている。
絶え間無く…止み間がない。
〜♪絶え間無く降り注ぐ　この雪のように　二人の愛は終わった♪〜

まさに、この歌詞が、今の木嶋の思いに似ているのであった。
「キーン、コーン、カーン、コーン」
仕事への準備をする予鈴(よれい)のチャイムが鳴った。
「サアー、仕事をしようか?」
作業エリア内にある…前掛けと保護具を身につけたのだ。
仕事をしていて、少し…眠気(ねむけ)が襲っていた。
すかさず三谷さんが、
「木嶋、大丈夫か?」木嶋に声を掛けていた。
木嶋は、
「ゴメンね!危うくケガをするところでした。」三谷さんに答えたのであった。

第２４５話

木嶋は、昨日の疲れが…顔に出ていた。
「ヤバイな！溝越さんが話した通りの展開になってきたぞ。」溝越さんの不安が的中（てきちゅう）、三谷さんも同じ思いで木嶋を見ていた。
「何とか…昼休みまで持たさないと…。」
木嶋は、顔を《パシパシ》叩きながら、気力を振り絞り、仕事をしていた。
「キーン、コーン、カーン、コーン」
昼休みを告げるチャイムが鳴っていた。
「今日は、チャイムに救われたかな？」木嶋はそう感じていたのだ。
「昼食を食べてから、富高さんの現場に向かわなければ…」駆け足で食堂へ小走りして行く。
最近、会社の食堂は、
メニューも豊富になり選ぶ楽しみも増えていた。
ラーメン、そばなどは日替わりになっている。
木嶋は、
「本音を言えば、定食を食べたいが、並んでいる人がたくさんいる。今日は、めん類にしよう！」
めん類のコーナーに並んだ。
朝は、肌寒く感じたが…時間の経過と共に暖かく感じていた。
木嶋は、作業服のポケットに入れていた携帯を取り出した。
携帯の受信メールボックスを覗くと、新着メールが届いていた。
「誰だろう！」受信メールボックスをスクロールした。
「麻美さんからか…」
恐る恐（おそ）るメールを開いた。
「木嶋君、おはようございます。メールを読みました。《結論から言うと…やっぱりね！》って感じだね…私が言っていた通りなっ

てしまった。今、ショックを受けているのではないでしょうか？はるかさんが全てではないですよ。世の中には、素敵な人がたくさんいます。いつかは見つかるよ。いい勉強になったんじゃないかな？」

木嶋は、

「予想通りだった…と、言うべきかな？」そんな思いで麻美のメールを読んでいた。

「返信はどうしようかな？」考えあぐねながら、

「富高さんの現場に言ったあとに、メールを送信しよう！」結論を出したのであった。

ラーメンとライスを取り、いつもの指定席に座った。

人は、面白いことに決まった席に座らないと調子が悪くなるのである。

木嶋も、電車でも同じことが言えるのだ。

指定席に座り、携帯の受信メールボックスを覗くが、麻美以外からのメールはなかった。

ラーメンを食べながら、ライスを口に入れた。

左腕にしていた腕時計で時間を確認した。

「もうこんな時間か…？」

午後１２時２０分を過ぎていた。

「急ごう…」

木嶋は、オボンを持ち、片付けながら精算をした。

階段を下り、富高さんの現場に向かった。

「富高さん…」木嶋が、富高さんに声を掛けた。

「木嶋君…」富高さんが、木嶋に言葉を返した。

「昨日は、遅くまで申し訳ないです！」木嶋は、富高さんに頭を下げた。

「気にしなくていいよ！あのあと、はるかさんから、連絡が入ったかな？」富高さんは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「連絡はあったよ。《今日は、ありがとうって》それ以外は、特

にないよ！」富高さんに答えていた。
富高さんは、
「それならいいんだ。あとは、木嶋君が思いを伝えれば…はるかさんに思いを打ち明けられるように…。」木嶋に話していた。
木嶋は、
「そうなればいいね！」富高さんに伝え、
「はるかに、フラれたなんて…今の時点では話すことが出来そうにない！帰り道に話そう！」そう決めたのであった。
「木嶋君は、寝れたかな？」富高さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「普通に寝れたよ！富高さんは…？」富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「家に帰ってから、直ぐに寝たよ！」木嶋に答えたのであった。

第２４６話

「そうだよね…睡眠を取らないと、今日の仕事に差し障りが出るよね。」木嶋は、富高さんに答えたのだ。

富高さんも、

「自分が、若いときなら、多少無理しても大丈夫だが、寝ないで仕事をしたら大ケガをするよ。」

「それもそうだね。」木嶋は、富高さんの意見に納得した表情をしていた。

現場にある掛時計を見ると…午後１２時３０分を回っていた。

「もう…こんな時間か?富高さん、大森さんが待っているので、現場に戻ります。」木嶋は、富高さんに伝え、その場を離れて行った。

木嶋が、職場に戻ると、大森さんが、缶のブラックコーヒーを右手に持ち、椅子に座って待っていた。

木嶋の作業エリアには、折りたたみの椅子が置いてある。

もちろん、１００円ショップで購入した物である。

「木嶋君、どこに行っていたの?随分、待ったよ。」真剣な表情で、木嶋に問いかけていた。

「大森さん、待たせてすいません。先ほどまで、富高さんの現場に行って話しをしていました。」大森さんに、木嶋は答えていた。

大森さんは、

「木嶋君、富高さんと、何かあったの?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「昨日、富高さんと、自分の彼女がバイトしている…横浜のクラブ『H』に飲みに行ったんだ。」大森さんに伝えたのだ。

大森さんは、

「昨日って…平日の水曜日だよね?何で…その日なの?飲みに行くのは、いつも週末…金曜日ではないですか?」木嶋に問い詰めて

いた。

「自分も、富高さんも、週末の金曜日が、飲みに行くのにはベストだよ！ただ、昨日で、彼女が…バイト先を辞める話しが来て…どうしても、ラストインには顔を出してしいと言われてね！」大森さんに答えていた。

大森さんも、

「それで、富高さんと一緒に行ったの？木嶋君、彼女から見れば、一人で来て欲しかったんじゃないのかな？大きなマイナス要因（よういん）だと思うよ？」木嶋に話していた。

木嶋は、

「大森さんが言われている通りかもね。一人で行こうと考えていたが、彼女自身、《一人で来るとコストが高いから…富高さんと一緒なら来るのにも楽でしょう…》そう嘆願（たんがん）されてね…そのことを、富高さんに話したら、《ＯＫ》と回答が来たので、連れて行ったのです。」大森さんに伝えたのだ。

「木嶋君の彼女を一度、横浜の店で拝見（はいけん）したかったね…」大森さんが、木嶋に脅しをかけていた。

木嶋には、苦い思い出がある。

２０世紀末…会社の最寄り駅近くの店で…

木嶋と大森さんは、決まってに…月に、１回飲みに出掛けていた。いつもスナック『Ｎ』に通いつめていた。

そこで、木嶋も、大森さんも、お気に入りの女性がいたのである。

木嶋は、電車の時間があるため、早くに帰らないと行けなかった。

大森さんは、家が近いので、遅くまで飲んでいても平気であった。

その後、大森さんは、その女性と同棲しているみたいである。

木嶋の脳裏（のうり）に、そのことが鮮明（せんめい）に思い出していた。

歴史を繰り返すわけにもいかない。

大森さんを、あえて…誘わないでいたのである。

「はるかと、大森君を引き合わせるのを辞めよう。」

それが根底（こんてい）にあったのだ。

「いつまでも、引き立て役だけはイヤだしね。」大森さんに心の中を透かされないようにしていた。

大森さんは、

「木嶋君、まだ、その彼女と付き合うつもりなの？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「まだ、付き合うよ！何で…そんなことを言うの？」疑問心を抱きながら、大森さんに問いかけた。

大森さんは、

「このまま…連絡がなく、《さよなら》をされるんじゃないかな？」

ズバリ当たっているので、躊躇（ためら）いながらも、

「これからも、付き合うと、彼女と確認したから大丈夫だよ！」

木嶋は、大森さんに話したのであった。

第２４７話

「自分の思考回路の答えは、木嶋君が、彼女に利用されていると、弾き出されたよ！」大森さんは、木嶋に話していた。

大森さんの答えを聞いた木嶋は、

「はるかさんの、頭の片隅には、木嶋君のことは、これっぽっちも…考えていないすよ。あるとすれば、どうやって利用しようかなと思っているのでは…！」麻美の店…クラブ『U』で、毎回、言われていたことを思い出していた。

ここで、木嶋が、大森さんに、どんなに否定をしても、

【ヤッパリね】

そう言われるのが怖いのであった。

《そうなのかな？》納得したように、見せかけるしかないのだ。

昼休みの終わりを告げる予鈴のチャイムが、

「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴り響いていた。

木嶋は、

「ホッ…」とした、安心感が漂っていた。

これ以上…

大森さんにツッコまれて、【ボロ】が出るよりも良かった。

午後の仕事に、

「もうひと踏ん張りだ。」前掛けをして、トイレの鏡に自問自答をしていた。

自問自答していた木嶋の元に、三谷さんが、何やらニヤニヤして歩いて来た。

木嶋は、ふと不安げに…嫌な予感が過ぎっていた。

「三谷さん、何…ニヤニヤしているの？」聞いていた。

三谷さんは、

「木嶋が、大森と会話をしていたのを聞いていたんだよ！」木嶋に問いかけたいた。

木嶋は、
「全部、聞いていたの?」三谷さんに尋ねてみると…
三谷さんは、
「最初から聞いていないよ…途中からだよ!大森の話しを総合すると、言っていることに、一理(いちり)があるかなと…木嶋のことを思っているかな?と感じたよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「三谷さんは、自分が、フラれたと認識しているの?」三谷さんに問いかけていた。
三谷さんは、
「そんなことを、自分が、木嶋に言っているんじゃないんだ。利用されていると判ったら…自分自身が惨(みじ)めになり、プライドが傷(きず)付くじゃないか?」あまりにも、強い口調で木嶋に答えていた。
「はるかに…利用されているのだろう?何て…言える勇気があるはずがない。」
木嶋も、薄々(うすうす)感じているのかも知れない。
はるかは、
「そんなことを、考えていないよ?ある訳ないんじゃん。友達だと…ずーと言っているのに…」木嶋にそんな答えが返って来そうである。
はるかが、本当に別れるのだろうか?
今朝(けさ)の留守電だけでは、判断がしずらい。
【考えれば、考えるほどに悩み、蟻地獄(ありじごく)にはまり込んでしまいそうである。】
それが、間違いであって欲しいと、ただ願うだけなのである。
ただ、留守電の内容が、今一(いまいち)、的(まと)を得ていないと感じていたのも事実である。
いつまでも、三谷さんと話していても、解決にならない。
「三谷さん、時間があるときに話しをしますよ!」三谷さんを納得させる口調で話したのであった。

木嶋は、内心「ホッ…と」したのであったと同時に…
「時間が経てば、忘れるはず…」そう思い込んでいた。
本鈴（ほんれい）のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っていた。
木嶋と、三谷さんは仕事を始めた。
普段と変わらない表情で仕事をしていた。
「何かが…違う。」
いつものテンションの高さが、木嶋に無くなっていたのであった。
小室さんが、
「木嶋、元気か?」言葉を掛け、木嶋と三谷さんの横を通り過ぎて行く。

第２４８話

木嶋は、
「元気ですよ。何故？そんなことを聞くのですか？」小室さんの問いかけにクエスチョンマークが、頭の中に付いていた。
小室さんは、
「木嶋の後ろ姿を見ていると、哀愁（あいしゅう）が漂（ただよ）っているぞ…」木嶋に問いかけていた。
木嶋の横で、小室さんとの会話を聞いていた三谷さんは、
「小室さんの言う通りで、自分も、木嶋のことが気になっているんですよ！」小室さんに同調（どうちょう）していた。
木嶋は、
「別に…変わったこともありません。三谷さんも、小室さんも、決めつけで物事を言わないで下さい！普段通りだと思っていますから…」小室さんと、三谷さんに伝えたのだ。
小室さんは、
「木嶋が、普段通りなら良いんだ。明日（あした）金曜日…予定空いているか…？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、麻美の店…クラブ『Ｕ』に行く予定がある。
「ここで、小室さんの誘いを断るわけにもいかないな！」そう考えつつも　「明日ですか…？当初、予定があったのですが、日にちが変わったので大丈夫ですよ！」小室さんに答えたのだ。
三谷さんは、
「小室さん、自分も、大森さんと一緒に行っても良いですか？」小室さんに質問していた。
小室さんは、一瞬躊躇（いっしゅんためら）いながらも…
「大森も、三谷も、大丈夫なのか？」三谷さんに答えるしか出来なかった。
三谷さんは、

「大丈夫です。大森には、自分が、話しをしておきますか?」小室さんに問いかけたのだ。

木嶋が、

「小室さん、大森さんに、自分が話しますよ。」小室さんに伝えたのだ。

小室さんは、

「そうだな。木嶋から大森に話した方が、スムーズかも知れないな!そうしてくれるか?」木嶋に依頼をしたのだ。

木嶋は、

「分かりました。午後3時か、5時の休み時間に話しをしてみます。良い回答が得られるかは解りませんが…!」小室さんと、三谷さんは頷いた。

小室さんは、

「木嶋、あとを頼んだぞ!」木嶋に言い残し、自分の職場に戻って行ったのだ…。

やっとの思いで解放された気分になっていた。

「あとで、麻美にメールをしよう。」木嶋は、そう思いながら仕事に励んでいた。

「キーン、コーン、カーン、コーン」

午後3時の休み時間のチャイムが鳴っている。

木嶋は、現場の近くにある自動販売機で、缶コーヒーを買い、大森さんのところに向かった。

「大森さん、明日、予定あるかな?」大森さんの姿を見つけ、木嶋が声を掛けていた。

大森さんは、

「木嶋君、明日?何かあるの?」怪訝そうな顔つきで、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「あまり…変な顔をしないでよ。滅多に、間の休み時間に来ないのだから…。」大森さんに話しつつ、

「先ほど、小室さんが来て、《飲みに行かないか》と、誘いが来たが、断るのもどうかと思うが…」木嶋は伝えていた。

大森さんも、

「小室さんと、飲みに行く機会は、なかなかないからね。たまには…行こうかな！他に…誰か…来るの？」木嶋に問いかけたいた。

木嶋は、

「三谷さんも来るみたいだよ！」大森さんに伝えたのだ。

大森さんは、

「エッ…三谷さんも来るの？」驚きながら…木嶋に答えていた。

木嶋は、

「本人が、来る気満々（まんまん）なのに、《来なくていいなんて》…水を差す発言なんか出来ないよ。」大森さんに話していた。

大森さんは、

「そうだね。明日、行くよ。小室さんに伝えてくれるかな？」木嶋にお願いをしていた。

「分かりました。小室さんに回答します。」大森さんに話し、その場を離れて行くのであった。

木嶋は、腕時計で時間を確認すると、もうすぐ休み時間が終わろうとしていた。

「５時の休憩時間に小室さんの職場に行こう！」自分に言い聞かせていたのであった。

第２４９話

自分の職場に戻りながら、休み時間が終わる…チャイムが鳴るのを待っていた。

「キーン、コーン、カーン、コーン」

チャイムが鳴り、仕事を始めた。

午前中よりも、今の時間帯が、仕事の能率も捗(はかど)っていた。

「今日は、はるかのことがありながら、調子が良いのかな?頑張れば…5時で帰れるかな?」

【テンション】が一段階(いちだんかい)上げていた。

木嶋の元に、溝越さんが歩いて来た。

「木嶋、今日…残業出来るか?」木嶋に聞いていた。

「えっ…と」声を上げた。

その言葉に驚いたのか?「何だよ…冷たい言い方じゃないか?」

溝越さんは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「今日は、残業は…ないと考えていました。」

溝越さんに告げたのだ。

「今日、もう少し…頑張ろうよ!三谷も、大丈夫か?」三谷さんにも問いかけていた。

三谷さんは、

「自分は、残って行きます。」溝越さんに伝えたのだ。

木嶋も、

「昨日、溝越さんに、ご迷惑を掛けていますので、自分も残ります。」溝越さんに話したのだ。

溝越さんは、

「あとは、三谷と、木嶋に任せたよ。」三谷さんと木嶋に話し、その場を離れて行った。

「キーン、コーン、カーン、コーン」

夕方5時の仕事終わりのチャイムが、
工場全体に鳴り響いていた。
木嶋は、前掛けを外し、小室さんがいる職場に向かった。
小室さんとの接点は…何だろう…？木嶋は、ふと…考えていた。
木嶋が、会社に入りたての頃…
コンビニの店舗数が、今よりも少なく、
木嶋が、学校の春休みで残業をしていた。
工場内は、肌寒く、残業が始まるまでに、
【肉まんを、近くの店へ買いに行く】と言って出掛けた…が、
仕事が始まるまでに、戻って来なかったらしい…。
【木嶋が、戻って来たのは、残業が始まったあと…。】
そう…小室さんの、記憶の中に、
《インプット》されているみたいであるが、
木嶋の記憶の中に、そんなことがあったことなど、頭の中を整理しても、覚えていないのであった。
時間に正確なのだが、こんな間違いを起こすことは、ないはずである。
何回も、小室さんに、この話しを聞かされても、依然として思い出せない。
飲みに行くたびに、話しのネタにされている。
【何だ…かんだ…と、】言われながらも、木嶋と小室さんは、切っても切れない縁なのかも知れない。
小室さんのいる休憩所に、木嶋は着いたのだ。
「小室さん、先ほど…大森さんのところに行ってきました。」木嶋は、小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「大森は、何か…？言っていたか？」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「明日、小室さんのお供をします…。」と、回答がありましたが…
小室さんは、

「ありましたが…随分、微妙な言い回しじゃないか？何か…まだあるのか？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「他に、誰か…来るの？と聞かれて、三谷さんも来るよ…と話したら、怪訝そうな顔付きをしたんだ。」小室さんに答えていた。

小室さんは、

「大森は、三谷を嫌っているのか？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「どうなんだろうね…そこまで、掘り下げた話しまで、時間の都合上出来なかったんだ。」小室さんに話していた。

「よし、自分が、あとで大森に聞いてみよう。」小室さんは、木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「そうだね。小室さんが、大森さんに聞けば…本心が聞けると思うよ。じゃあ…職場に戻ります。」小室さんに伝え、その場を離れて行ったのだ。

第２５０話

職場に戻った木嶋は、
「三谷さん、大森さん、明日行くと回答が来たよ！」三谷さんに声を掛けたのだ。
三谷さんは、
「良かった。久しぶりに大森と飲めるんだ。」嬉しそうな顔をしていた。
それも…そうである。
三谷さんと、木嶋は、同じ職場で遊び行くことはあるが、大森さんを誘っても、断ることが多いのであった。
「やっぱり…会社の最寄り駅で飲むのかな？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「そうなるでしょう。」三谷さんに言葉を返したのだった。
ふと…作業服のポケットから携帯を取り出した。
「あっ…メールの着信だ。」
携帯の受信メールボックスから新着メールをスクロールした。
「麻美さんからだ。」
木嶋は、頭の中で、
《クエスチョン》が付いていた。
今朝（けさ）、木嶋が、麻美へメールを送信して、はるかのことで、お叱りの言葉を午前中の休憩時間に目を通したのであった。
「木嶋君、明日、クラブ『U』で飲みながら話しをしませんか？」麻美からの誘いである。
木嶋は、
「そうだな…。一度、麻美さんの店に、出向かないといけないかな？小室さんたちと飲むから、時間は遅くなる。今週は…土曜日、

仕事がないからゆっくり話しが出来る。」
そう考えながら、メールを打ちはじめようとしたとき、
「キーン、コーン、カーン、コーン」チャイムが、工場内に鳴り響いていた。
前掛けをして、作業を始めた。
「まっ…いいか！麻美に、あとでメールしよう。」
頭を切り替えた。
やっと…仕事が終わるメドが立ち、
「三谷さん、いつもの時間で帰りましょう！」木嶋は、三谷さんに声を掛けたのだ。
三谷さんも、
「了解しました！」木嶋に答えたのであった。
午後7時のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いていた。
木嶋は、
「やれやれ…」そんな雰囲気で、前掛けを外した。
職場を離れて、ロッカールームに歩いて行く。
「木嶋君、お疲れさま。」富高さんが、木嶋に声を掛けた。
木嶋は、
「富高さん、昼間はどうも…ね」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「あれっ…木嶋君、昼間と表情が違うよ！何か…あったの？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「実は…はるかと別れたんだ。」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「えっ…」声を上げ、驚きを隠せずにいた。
木嶋は、
「詳しい話しは、後日（ごじつ）話しますよ！」富高さんに伝えたのだ。
富高さんは、

「了解しました。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「富高さん、すいません。今、話してもいいが、時間がないと言えません。明日、小室さんと飲みに行きますが、一緒にどうでしょうか?」富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「明日…大丈夫だよ。何人で飲むのかな?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「小室さん、三谷さん、大森さん、自分で、４人だよ。」
「大森君や、三谷さんも来るんだ…いいね。自分も行くよ。」富高さんは、木嶋に答えていた。
木嶋は、
「あとで、小室さんへ伝えます。場所は、明日の昼休みに、小室さんに聞いて下さい。」富高さんに話したのであった。
ロッカールームを出て、会社の送迎バスに向かう。
発車まで、あと…2分。
ギリギリで乗車した。
送迎バスの車内には、小室さんが座っていた。
小室さんは、
「富高も、一緒だったのか?明日、飲みに行くか…?」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「先ほど、木嶋君から話しを聞きました。一緒に行きますよ。」
小室さんに話していた。
小室さんは、頷きながら…
「時間と場所は、明日、木嶋に伝えておくよ。」富高さんに話したのであった。

第２５１話

木嶋は、
「了解しました。」小室さんに伝えた。
小室さんは、
「富高は、他に行きたい場所があるのか？」富高さんに聞いていた。
「そうだね…どこにしようかな？」富高さんが答えようとしたとき…
会社の送迎バスが最寄り駅に着いた。
小室さん、富高さん、木嶋の順でバスから降りていく。
小室さんは、元々、右膝(ひざ)が悪いので、《ビッコ》で歩いていた。
傍(はた)から見ていても、確かに、階段を降りるのも辛(つら)そうである。
木嶋は、何度も…
【また、手術した方がいいんじゃないの？】と、勧めたこともある。
小室さんは、一度、入院して手術を受けているので、《嫌だ》と言う気持ちを理解をしていた。
それでも、エスカレーターを使わずに階段で降りている。
飲んだ席で、木嶋は、小室さんの《マネ》をすることが多い。
そのとき、富高さんが一緒にいるのであった。
痛いのを我慢をするのは良くないと、木嶋は、常日頃(つねひごろ)から思っていた。
最寄り駅の階段を降り、コンコースに出た。
木嶋は、いつものように…相鉄線のホームがある改札口に向かって行く。
小室さんと、富高さんは横浜市営地下鉄のある改札口に歩いて行く。
コンビニに入った木嶋は、

夕方紙と、缶コーヒーを購入した。
これが、日常の生活である。
その生活に慣れてしまうと、環境が変わったときに戸惑いを感じることがある。
小室さんと、富高さんは、
《コミュニケーション》ならぬ《飲みニケーション》を毎日している。
木嶋も、週末ではなく、平日の帰り道に一緒に、《飲みニケーション》に参加をすることもある。
木嶋は、
「あっ…麻美にメールしないと…」気がついた。
左手で、ズボンのポケットから携帯を取り出し、右手に持ち変えながら、改札口に入って行く。
階段を一段ずつ…慎重に降りていく。
足を踏み外しそうになり、転倒しそうになったこともある。
階段を降り…2番線のホームに停車していた電車に乗った。
発車まで、時間がある。
対面座席に座り、先ほどコンビニで購入した…
缶コーヒーのプルタブを、
「プシュ」と開け、夕刊紙を広げていた。
発車ベルが、
「プルー」鳴り響いている。
「プシュー」ドアが閉まった。
「ガタン、ゴトン」電車が走り出して行く。
会社の最寄り駅から乗り換え駅まで行く途中…
電波の悪い場所があるので、電話が途切れてしまう。
電波の安定している区間が差し掛かったので、
持っていた夕刊紙を一旦(いったん)座席の上に置き、右手に持っていた携帯のメール画面を出した。
「麻美さん、明日のことですが、会社の先輩と飲みに行きますの

で、クラブ『U』に向かう時間は、大体夜9時～10時ぐらいだと思います。」麻美にメールを送信した。

あとは、麻美の回答待ちである。

木嶋も、今月は、飲みに行く回数が多く、金銭面で、若干厳しさを増してきていることもあるが、飲みに行けば…多少、コストもかかる。

そこで、悩んでしまう。

誘惑に負けてしまう自分にも悪いと思いつつも、ストレス解消だと思えばいいのであった。

若いときに飲み歩いていたなら、この年代になっても、飲みに行くことはないはずである。

飲みに行きだしたのは、20代後半になってからであった。

木嶋の携帯に、

「プルッ、プルー」

メールの着信を告げる音がした。

「誰だろう?」携帯の受信メールボックスからスクロールした。

麻美からであったのだ。

第２５２話

「木嶋君、メールを読みました。最寄り駅で飲むんだよね…そのあとで、会社の先輩も、クラブ『Ｕ』へ、一緒に連れて来てくれると嬉しいな！富高君も、誘っているのかな？」

木嶋は、

「富高さんも、誘っていて飲みに行きますよ！」すかさず麻美にメールを返したのであった。

電車が、電波の届きにくいエリアを、

「ガタン、ゴトン」走行していた。

走ること…３区間。

電波が届くエリアに入り、新しいメールが携帯に届いた。

木嶋は、再び、受信メールボックスからスクロールして、メールを開いた。

「麻美です。明日、木嶋君の話しも聞きたいし、富高君にも会いたいからね。」

木嶋は、

「そう来たか…ここまでは、自分が、想定していた通り…麻美さんの答えであった。さて…どうしようかな？」頭の中で考えを張り巡らせていた。

「どちらにしても…明日の昼休みに、富高さんに相談しよう。話しはそれからだ。」

木嶋は、

「麻美さん、明日の昼休みに、富高さんに聞いて回答します。」

麻美に、メールを送信した。

麻美から、

「分かりました。返事を待ってます。」笑顔の顔文字入りのメールで返信して来たのであった。

電車が、乗り換え駅に着いた。

木嶋の乗っていた電車は、普通電車。
反対側のホームに、急行が入って来た。
電車のドアが開いたと同時に、
「プルー」発車ベルが鳴り響いていた。
リュックと夕刊紙を持ち、急行に乗った。
横浜駅までは、一駅…１５分。
「プシュー」ドアが閉まった。
昨日まで、横浜駅は、単なる…乗り換え駅ではなく、途中下車駅であった。
頭の中では、はるかと過ごした日々が通り過ぎていた。
吹っ切るには、時間が掛かるかも知れない。
木嶋は、まだ１０代の頃…夜間高校の後輩と交際していたことがあった。
順調なときがあったが、小さな綻び…
次第に大きくなり、別れてしまった。
失恋した次の日は、仕事をしていても手に付かず…ため息ばかりついていた。
今朝も、ため息が漏れてしまう。
そんな気配であったが、木嶋の脳裏に、浮かんでは消え、その繰り返していた。
「間もなく…横浜、横浜。」車内アナウンスが聞こえてきた。
「もう…横浜駅か…。」ボヤきながら、相鉄線の改札口を出ていく。
「昨日まで、はるかと交際していたことは、家族に話していなかった。これで、堂々（どうどう）と帰れる。」木嶋は、何故か?安堵な表情を浮かべ、
ＪＲ横浜駅の地下改札口を通っていく。
改札を抜け、電光掲示板の時刻を確認していた。
「東海道線て帰ろうか?のんびり京浜東北線で帰ろうか?どうしようかな?」木嶋は思案していた。

いつもなら、迷わず…東海道線で帰るのだが、気持ち的に京浜東北線で帰りたいと思うのであった。

「たまには…京浜東北線で帰ろう。」そう…頭の中で結論が出た。

木嶋が、京浜東北線を選択するのも珍しい。

京浜東北線のホームが、東海道線のホームに歩いて行く距離は短い。

最寄り駅までの所要時間は、１５分ぐらい。

東海道線より、５分前後遅い。

木嶋は、その…５分が貴重に思っていた。

「プルー」発車ベルが鳴っていた。

慌てて走るも、無情にもドアが閉まってしまった。

「今日は、ツイていないな！後続の電車を待とう。」

ホームの黄色い線の手前に下がり、並んでいた。

「パァーン」

クラクションの音を響かせ、電車が入ってきた。

「プシュー」

ドアが開いた。

今の時間は、上りよりも…下りが降りる人が多い。

木嶋は、空いていた座席を見つけ座り、夕刊紙を広げ読み始めていた。

第２５３話

夕刊紙を、何度も目を通していると読むところがなくなってくる。
木嶋が、興味があるところは、《政治、経済》である。
取り立てて、政治家や経済評論家になろうと言う気持ちはない。
年齢的に、他の会社の人たちと会うときに、少しでも知識を入れていないと、人付き合いが出来にくくなるのである。
一年に一度、両親の実家に帰ることがあるが、話題を持ち出すのに、苦労するのである。
今やインターネットが主流であるが、週刊誌や野球雑誌を購入、読むことで、活字に触れることも出来るのである。
「ガタン、ゴトン」揺られている。
タイミングが悪いときは、電車のドアが閉まってから…携帯の着信音が良く鳴っていた。
それも、はるかが、いたからである。
携帯も鳴らないと…
エゥ〝ンゲリヲンのストーリーにあるように…
《鳴らない電話》である。
木嶋は、淋しさを紛らわすために、携帯の中に登録されているメモリーダイヤルを眺めながら…
「気軽に遊べる女性は…今の自分にいない。モテる男と、モテない男の差かな？」
「フー」と、ため息まじりに呟いた。
「結局、はるかと会うことを優先し、遊んでいた時間が多かったから、失った友人たちもいたのかも知れない！」
そう考えると、自分が、如何に愚かな人間であったのだろう。
まだ…
【取り戻せるもの】
【取り戻せないもの】があるはずである。

「そう言えば、夜間高校の仲間と連絡を取っていないな！」

【思い立ったら吉日】と言う言葉があるが、近況報告を聞きながら、話しをしてみるのもいい機会だと思ったのである。

「地元に着いたら、電話しよう！」

携帯を一度、発信して切ったのだ。

《いわゆるワン切り》である。

ふと、京浜東北線の窓を覗くと、木嶋の降りる駅の一つ前である。

木嶋が、夜間高校を卒業して、高校の卒業の思い出アルバムを制作していたとき、

当時、付き合っていた彼女が降りていた駅である。

楽しい思い出と、苦い思い出が、交錯して、たくさん出てきてしまう。

今、やり直すことが出来るなら、一言でいいから謝りたい心境である。

彼女は、木嶋の一つ年下であった。

手先が器用で、編み物や料理が得意。

そんな彼女に惚れて交際をしたが、ボタンの掛け違いから、些細なことで、喧嘩してしまった。

その喧嘩が元で別れてしまった。

彼女は、この地球の中で、結婚して…子供や旦那さんと一緒に暮らしているはずである。

もうすぐ、木嶋の降りる駅に近づいていた。

「ガタン、ゴトン」

鉄橋を渡る音が聞こえる。

見慣れた景色。

最寄り駅に着いた。

「プシュー」ドアが開いた。

木嶋は、携帯を持ち、先ほどの発信した番号に、リダイヤルした。

「プッ、プッ、プッ、プルー」呼び出し音が鳴り響いていた。

電話に出た。
「もしもし、林崎だけど…。」
久しぶりに聞く…林崎さんの声であった。
「もしもし、木嶋です。林崎さん、お久しぶり。」林崎さんに話したのだ。
林崎さんは、
「おう…木嶋か?随分、連絡がなかったが元気か?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「元気ですよ。林崎さん、仕事の方は順調かな?」林崎さんに問いかけていた。
林崎さんは、
「仕事は、順調だ。それより…木嶋は、彼女は出来たのか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「彼女と今日、別れたんだ。」林崎さんに話したのであった。

第２５４話

林崎さんは、
「木嶋、彼女がいたのか?その話しは、初耳(はつみみ)だぞ…どこで知り合ったんだ?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「彼女とは、飲み屋で知り合ったんだ。」林崎さんに答えたのだ。
「飲み屋と言っても、たくさんあるぞ…どこの飲み屋だ…?」
木嶋は、林崎さんの鋭い(するど)ツッコみに、【たじろき】ながら…
「横浜西口にある…クラブだよ。」答えていた。
「横浜西口のクラブか…木嶋でも、そんな場所に飲みに行くようになったんだな!通勤は、横浜西口か?」
林崎さんは、木嶋が、クラブに通うとは思っていなかったみたいである。
木嶋は、
「通勤は、藤沢で自分の陸上の仲間が、結婚したから、久しぶりに気の合う人たちを誘って飲みに行くことになり、横浜駅周辺で飲んでいて、いつもなら二次会は、《カラオケ》その日は、なぜか?クラブに行くことになり、隣り座って話しをしたのが《キッカケ》だね!」林崎さんに話したのだ。
「プァーン」電車のクラクションが鳴り響いていた。
林崎さんは、
「ところで…木嶋は、今、どこに居るんだ?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「今は、自宅のある最寄り駅ですよ。」林崎さんに伝えたのだ。
「それでか…先ほどから、電車のクラクションや人の話し声が漏れていたのが気になっていたんだ…まっ…電車の中で、携帯を使用することが出来ないからな!」林崎さんは、木嶋に確かめていた。
木嶋は、

「林崎さんが、言われている通りです。電車の中で、《ビジネスマン》の人や、《年配の方》など、大声を出して携帯で会話をしている人を見掛けるよ！そのうちに、運転しながら携帯で話している人が多くなり、法律化され、警察に捕まる人が出てくるかもね！」林崎さんに反論していた。

林崎さんは、木嶋の言葉を噛み締めながら…

「これだけ…携帯が普及している中で、色んな変化に対応しないといけなくなるも当然かな！今より、携帯が進化して、【より高性能の多機能型携帯】が出てきても不思議じゃない。自分たちが経験したことがないようなスピードで世の中が変わっている。」木嶋に問いかけるように話していた。

木嶋は、頷きながら…

「自分も、そう感じている。《インターネット》が当たり前になっているよね！」少しばかり…

「フー」と、ため息が零れてしまう。

地球の自転は、止まることなく動いている…。

人も、社会も活動いている。

～流れる川のように…立ち止まることなく、エネルギッシュに進むしかない。～

この言葉は、自分が、中学3年生を迎え、新学期で新人の女性教師が赴任して来た。

卒業するときに…卒業文集に全員へ贈って頂いた言葉である。

木嶋は、この女性教師に恋心を抱いていたのも事実であった。

当時は、《シャイ》で…あった。

どのように打ち明ければいいか判らず、誰にも相談出来ず、片思いで終わってしまった。

気がついたときは、結婚していて、ショックを受けたのである。

林崎さんは、

「木嶋、今月か?来月に時間を作れるか?」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「今月か?来月…今の予定では、明日以外の週末は大丈夫だよ!」林崎さんに答えていた。

林崎さんは、

「それなら、今月末辺りの週末に飲みに行こうよ!電話だと…コストが掛かるから…木嶋とは、卒業してから夜間高校の文化祭以来会っていないよな?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「そうでもないよ。夜間高校の文化祭のあと、成人式に一緒に行って以来会っていないね!今月末の週末、予定を空けておきます。来週、日にちを確認しましょう!」林崎さんに依頼した。

林崎さんは、

「了解。来週、自分から、木嶋の携帯に連絡するよ。」木嶋に伝え、電話を切ったのだ。

木嶋は、林崎さんと、１０年以上会っていない。

毎年、年賀状の交換していても、電話連絡をしていなかったので、気掛かりになっていたのであったのだ。

第２５５話

最寄り駅の改札を出た。
木嶋の携帯が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴っている。
この聞き慣れた音は、はるか専用の着信音であった。
「まさか…はるかから、電話があるはずがない。」
半信半疑(はんしんはんぎ)を抱きながらも電話に出た。
「もしもし…木嶋ですが…。」
「私、はるかです。」はるかが、木嶋に答えたのだ。
昨日まで、聞き慣れた声である。
木嶋は、
「今朝(けさ)、留守電を聞いたよ!今まで、楽しい日々を過ごさせて頂き、ありがとうございました。」はるかにお礼を述べたのだ。
はるかは、
「今朝の留守電は、間違えて…木嶋さんの携帯に入れてしまいました。ごめんなさい。」木嶋に謝罪をしていた。
木嶋は、
「はい。間違えたとは…どういうことなのですか?」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「木嶋さんと、木次谷(きじたに)さんと、電話をするときに、《スクロールバー》を、一つ下げ過ぎてしまったのです。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「あっ…そうなの?木嶋と木次谷か…間違える可能性はあるね。その木次谷さんは、クラブ『H』のお客さんかな?自分は、どうすればいいのかな?、これまで通りなの?」はるかに聞いていた。
はるかは、
「木嶋さんの指摘をしている通りで、木次谷さんは、クラブ『H』

のお客さんです。間違えて…留守電に入れてしまい、申し訳ありません。私は、木嶋さんと、これまで通りのお付き合いをしたいと思っていますが…どうでしょうか？」電話の中で、木嶋に頭を下げていた。

木嶋は、戸惑いながらも、

「即答ですか！分かりました。正直に言えば…これまで通りのお付き合いをさせて頂きたいと思います。ただ、明日は、予定が入っているので、会うにしても、来週以降にして下さい。」はるかに話したのだ。

はるかは、

「分かりました。何故？明日は、《ダメ》なんですか？教えて下さい！」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「明日は…富高さんや、会社の先輩と一緒に、会社の最寄り駅で飲む約束があります！そのあとで、富高さんを誘い…麻美さんのクラブ『U』に行く予定です。」はるかに答えたのであった。

はるかは、

「もしかして…今朝の電話で、麻美さんに、私が、木嶋さんをフッたと思い、慰めてもらうために…連絡をしたのではないですか？」木嶋に話したのだ。

木嶋は、はるかが、話している言葉が、全てを物語っていた。

当たっているだけに、反論をしようにも、上手く言葉が出てこない。

「いや…そうじゃないよ！麻美さんのいる…クラブ『U』に顔を出さないとね！富高さんの顔を見たいと盛んに《アピール》していて、会いたがっていたよ！」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「へぇ～。麻美さんでも、会いたいなんて言葉を言うんだ。不思議だね！何年も、夜の仕事をしているから、その気にさせる術があるんだ。」木嶋は苦笑いを浮かべるしかなかったのだ。

木嶋は、
「麻美さんは、何年もやっているだけあるね。そういう…はるかさんも、人を乗せるのが上手(じょうず)だよ。」はるかを褒めていた。
はるかも、
「ありがとうございます。」木嶋にお礼を述べていた。
木嶋は、
「はるかさん、来週…いつなら…時間が取れるのかな?」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「チョット…待って下さい。」木嶋を電話口に待たせ…
パラパラと、手帳をめくっていた。
「来週は、金曜日でいいですか?」答えていた。
木嶋は、
「来週の金曜日ね。了解しました。もし、都合が悪くなったら連絡下さい。」はるかに話した。
はるかは、
「分かりました。」電話を切った。
木嶋は、複雑な心境であった。
「これでいいのか?」自問自答をしていた。

第256話

それも…そのはずである。

【今朝、別れのメッセージ】があったばかりである…

冷静になって考えれば、また、付き合うのは尋常ではない。

もし、この話しを…

富士松さんに、相談したらどんな答えが返ってくるのだろう?

「本音は、富士松さんの意見を聞いてみたいが、答えを出たときのショックは計り知れない!相談するのが怖い!」

木嶋は、そう思いながらも、話しをする機会がないことに、憤りを感じていた。

「明日、麻美さんのクラブ『U』に行くから、参考として意見を聞くのもいい機会だ。」

木嶋は、最寄り駅から帰る道を、軽快なステップで歩く。

「いや…待て。今、何時だろう。」

左腕にしていた腕時計で時間を確認していた。

「今は、午後8時20分…か!今日は、木曜日。店は混んでいるのだろうか?麻美さんに、電話するべきか?メールをするべきか?どちらが良いかな?メールにしよう。」

木嶋は、受信メールボックスから、麻美さんのメールをスクロールした。

麻美のメールを探すが、なかなか見つからない。

色んなメール会員になっているので、受信メールボックスの容量が超過していたみたいだ…。

携帯も、2年に1回のサイクルで、機種変更していて…

【そろそろ…交換どき】である。

「仕方ないね…メモリーから呼び込もう。」

メモリーダイヤルから、麻美のメールアドレスを呼び出した。

「麻美さん、先ほど…はるかさんから電話がありました。今朝の

留守電の内容は、本人は、《間違いだと…》話していましたが、額面通りに、受け止めていいのか？正直、分かりません。また、自分と、今まで通りの付き合いをしたいと…言って来ました。富高さんに、クラブ『U』へ、行くことは…まだ、知りません！《サプライズ》にしようと思いますので、ご協力及びご相談をお願いします。」麻美にメールを送信した。

あとは、麻美が、どのような回答が来るのか？興味が尽きない。

その半面…

【怖い】と…。

歩きながら、メール本文を作成するのはいいが、車が、勢い良く…木嶋の横を通り過ぎて行く。

「危なかった。」

安堵の表情を浮かべずにいられなかった。

木嶋の家の前は、国道が通っている。

最寄り駅に、バスや歩いて行っても、そんなに遠い距離だ。

毎年、夏になると…。

【花火大会】があり、木嶋の家から見えるので、有名な花火大会を観戦に行くよりも、《特等席》で見れるのであった。

その花火大会が終わってしまうと、

【また、明日から会社が始まる…】気持ちが沈み込んでしまう。

「いつかは…この花火大会に、はるかを誘ってまたい誘いたい。」呪文みたいに、毎年、呟いていた。

「あと少しで…家に着く！」そう思ったとき…

木嶋の携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いていた。

「麻美さんかな？」

携帯の画面を見ると…麻美であった。

「怒られるな！」木嶋は感じていたのである。

「もしもし…木嶋です」「麻美です。木嶋君、メールありがとうございます。読ませて頂きました。はるかさんの言葉を信じちゃ

ダメだよ。」

「やはり…ね。」

木嶋が危惧していた通りの展開である。

「今は、込み入った話しが出来ないので、明日、お店で、ゆっくり話し合いしましょう！」電話を切り、続けざまに

「明日は、はるかさんの話題で…持ち切りだね！」麻美は、木嶋に伝えた。

木嶋は、

「分かりました。」と話し、電話を切ったのである。

第257話

「明日が来なければいいのに…」木嶋は、そんな心境に駆られていた。

家の敷地に入った。

雨が…

【ポツリ、ポツリ】と降り始めていた。

《今日は、雨が降る予報は出ていたかな?》

毎朝、日本テレビ

【ズームインSUPER】の天気コーナーを見てから家を出て来るのだが、この雨は、木嶋の心を暗示していた。

本来なら…心は、快晴なはずである。

何故…【雨模様】なのだろう?

家のドアを開けた。

「やれやれ…」ため息が漏れてしまう。

朝、ご飯を食べながら、新聞を読んでいるが、時間がないため、パラパラとめくる程度である。

家に帰ると…

朝刊、夕刊を交互に、目を通すのである。

会社へ通勤するときは、

駅の『KIOSK』で…

《スポニチ》を…毎日、購入している…

家では、《日刊スポーツ》である。

どのスポーツ紙も、似たような記事がたくさんある。

普段は、何気なく、飛ばして読んでいる記事も、良く目を通すと、意外な発見がある。

一般紙は、東京新聞を読んでいる。

一時期、朝日新聞を読んでいたが、東京新聞の活字が目に優しく読みやすいため、いつしか…愛読紙に替わっていた。

木嶋の家族は、両親の田舎や、それ以外の地域に旅行に行くことがある。
飛行機は使わずに、車で移動する。
車だから…自由気(じゆうき)ままに、色んな…サービスエリアに止まり、衝動買いも多い。
旅行に出かけると、その土地の《グルメな食べ物》、《飲み物》に目を奪われてしまう。
観光名所(かんこうめいしょ)に回るのは、人から見れば下手(へた)なのかも知れない。
毎日、スポーツ紙を読んでいるので…一日でも欠(か)かすと、アレルギーみたいなものが出て来てしまう。
いわゆる【スポーツ紙中毒】である。
両親の田舎に帰省すると、近くにコンビニがないため、車で移動しなければならない。
最寄りの駅も、歩くと…２０分掛かる。
往復で、４０分。
良い運動になる。
坂も、上りが、《キツイ》ため、木嶋が、陸上の練習不足や日頃の運動不足解消には…うってつけの場所であった。
食事を終えて、携帯を充電していた。
すると、メールの着信を知らせる…サインが出ていた。
「何か…メールを見るのが怖い。」
木嶋は、恐る恐る…ディスプレーを覗く。
玲からであった。
「何だ…脅(おど)かさないで欲しいよ！」安堵な表情であった。
メールを開いた。
「木嶋君、お久しぶり。彼女と別れたが…また、付き合うようになったと、麻美さんから聞いて…ビックリしているんだ。本心(ほんしん)が解らないと思うので、一人で…私のいるクラブ『Ｏ』に来て、話しをしましょう！アドバイスぐらいは出来るからね！近いうちに、日にちを決めて連絡を下さい！」

木嶋は、

「麻美さん、余計なことを…玲さんに話して…ややこしくなるな！」ボヤきながらも、本音は、嬉しいのであった。

麻美と付き合いは長いが、玲は、同じ夜間高校の同級生で話しをするのも、ベストな環境である。

「明日は、麻美のクラブ『U』、来週末は、はるか。再来週に玲のクラブ『O』。身体が、いくつあっても足りないな！もう一度…手帳で予定と金銭面を確認しよう！飲み歩いて…身体を壊しても、元も、子もない！」

木嶋は、寝床に入り、リュックを手に取り、手帳を取り出したのであった。

第２５８話

手帳をパラパラとめくり…悩んでいた。
「いつにしようかな…？今月は…２８日までしかない。来月にしたほうがいいかな！」
結論が出た。
先ほどの受信メールボックスから、玲のメールアドレスを呼び出した。
「玲さん、予定を手帳で確認して検討したのですが、現時点で、３月にしようと思っています。それでいいでしょうか？」メールを送信した。
右手に持っていた手帳を、リュックの中に入れ、電気を消し、布団をかけ眠りについた。
一夜明(いちや)け…
木嶋は、携帯の側面を覗いた。
メールの着信を知らせる…サインが点灯(てんとう)していた。
「電車の中で、メールを読もう。」
布団から出て、テーブルに座り、日刊スポーツを広げ…朝ごはんを食べていた。
朝は、白いご飯を食べないと…《パワー》が出ない。
木嶋は、
【完全に、ご飯党】である。
食事を終え、着替えをしながら…鼻歌(はなうた)を歌っていた。
木嶋が、鼻歌を歌っているときは、機嫌(きげん)が良い証拠である。
リュックに、作業服とタオル、Ｔシャツを入れ、
会社に着いてから食べる…オニギリを入れ…最寄り駅に向かって歩き出していた。
木嶋は、
「小室さん、どこに飲みに連れて行くのだろうか？」少し…不安

になっていた。
小室さんが、会社の最寄り駅で通っている店は、何軒もある。
その店に行く度に、新しい発見もある。
木嶋や、大森さんには、新鮮なのである。
歩いているうちに、最寄り駅に着いたのだ。
《スポニチを買わないと…》
毎日の日課になっている。
スポーツ新聞は、読み終えてしまえば、ただのゴミである。
駅やコンビニの【分別ダストボックス】に捨ててしまうが一番いいのだ。
それをしないのは、会社で、溝越さんたちが読むので、捨てずに持って行くので、何か…配達をしている気分である。
京浜東北線に乗り、横浜駅に向かった。
「ガタン、ゴトン」揺られている。
揺れ具合は、いつもと変わらない。
朝は、通勤で慌てることはない。
時間に余裕を持って…家を出ているので、相鉄線が人身事故などで、不通にならない限りは、会社の送迎バスに、ギリギリで乗車出来るのであった。
万が一、相鉄線が、人身事故で不通になったりした場合は、横浜駅から戸塚駅経由のルートで行くのである。
一瞬の判断が大事なのである。
会社の送迎バスに乗るのを、一本あとでもいいが、
現場に着いてから余裕がなく、仕事をするのは、木嶋自身がイヤなのである。
時間にゆとりを持ちたい。
はるかと待ち合わせするときは、木嶋が待つことが多い。
退屈なときは、リュックからレポート用紙とシャーペンを出し、思いついた言葉を書き留めることをしている。
電車が、横浜駅に到着。

木嶋は、階段を一段、また一段降りて行く。
ＪＲの改札を出て、相鉄線の横浜駅に入って行く。
何やら…いつもと、様子が違う。
「こんなときに、トラブルか…？」
階段を上り、ホームを見渡すと…人が溢れていた。
「マジ…か？困ったね！」木嶋は悩んでいた。
タイムリミットは、刻一刻と迫っていた。
「東海道線で行こう！」
一度、通った相鉄線横浜駅改札口を通り抜け…
再び、ＪＲの改札に入って行く。
東海道線のホームに並んでいた。
「相鉄線が動いていないから、若干混んでいるかな？」そんな気持ちになっていたのである。

第259話

東海道線が、
「パーン」クラクションを鳴らしホームに入って来た。
通勤で、相鉄線を使うようになり、東海道線を朝、横浜駅から乗るのは、一年のうちに、両手で数えるくらいしかない。
「プシュー」ドアが開いた。
この時間は、そんなに混んでいる印象はない。
《時間がズレたら…どうなっているのだろう?》
ただ…不安なのは、戸塚駅で乗り換えをするとき、階段を降りる位置が解らない。
そこが、心配である。
東海道線の先頭車両から7両目に乗車した。
「まっ…この辺りにいれば問題ないかな?」
妙に…安心感があった。
「プルー」発車ベルが鳴り響いていた。
「ピコン、ピコン」ドアが閉まり、電車が走り出した。
木嶋は、長いシートから、空いている座席があるか…周りを見渡している。
目敏く…空いていた座席を見つけ…そこに、小走りで走って行く。
電車の中で寝ている【ビジネスマン】、【OL】の姿もあった、。
リュックしまってあった…《スポニチ》を取り出した。
横浜駅から戸塚駅までの所要時間は、およそ10分ぐらいである。
相鉄線が、会社の最寄り駅に延伸されるまで、藤沢駅で乗り換えていたことを思い出しながら、電車の窓から外の景色を眺めていた。
「何年か前までは、毎日、東海道線に乗っていたんだな~」感慨に浸っていた。
左腕にしている腕時計を見た。
「もうすぐ…戸塚に着くか…!」

《スポニチ》を、リュックから取り出しながら、一(いち)ページも読めなかった。
再び、リュックに、《スポニチ》しまった。
戸塚駅に着いた。
「プシュー」ドアが開いた。
電車から降りた。
乗り換え階段まで、少し手前であった。
「次の機会は、一両前でもいいかな！」
次の機会と言っていても、それが、何日、何ヶ月先になるか？判らないのである。
階段を降り、乗り越し精算機に向かって行く。
「一区間なら…高くならない！最低運賃を払えばいいのだろう？」
そう感じていた。
精算機に定期券を入れた。
画面に表示された金額見て…
「２５０円、こんなにするのか！」驚いていた。
Ｇパンのポケットから、財布を取り出していた。
あいにく…財布の中に、小銭を捜したが、見当たらない。
「仕方ない。１０００円札を出そう。」
財布から、１０００円札を出し、精算機で精算した。
定期券、精算額を記載された切符が出てきた。
一番最後にお釣りが出て、財布に戻したのだ。
自動改札に精算額を表示されたキップを投入した。
改札を出て、横浜市営地下鉄のホームに向かって行く。
仕事が遅くまでやったときや、休みの日で、はるかと待ち合わせするとき、東海道線を使うが、横浜駅から戸塚駅に向かう場合は、戸惑いを感じずに居られなかった。
「降り慣れていないため、どこの階段を使えば判らない。人の流れに付いて行こう！」
改札を出た…人の流れが、右側(みぎがわ)に流れて行く。

木嶋も、その流れを見失わない必死で追いかけている。
階段を降り、横浜市営地下鉄の改札が見えてきた。
券売機は、直ぐ近くにあった。
木嶋は、会社の最寄り駅から帰るとき、戸塚駅までの金額が分かっていた。
「戸塚駅から会社の最寄り駅まで、２６０円！」
Ｇパンのポケットから財布を取り出し、小銭を出した。
木嶋は、自動券売機からキップを取り、改札口を通ったのであった。

第２６０話

階段を、一段ずつ降りて行く。
生暖(なまあたた)かい風が吹いているみたいである。
「なんか…モァー」としているかな？
「間もなく、電車が参ります。危ないですから…黄色い線の中でお待ち下さい。」ホームのアナウンスが聞こえている。
横浜市営地下鉄は、
【ワンマン運転】である。
【ワンマン運転】とは…
「一人で、電車の運行及び、ドアの開閉(かいへい)をすることである。」
横浜市営地下鉄以外の路線は、
運転士と車掌さんが、一人ずつ…各列車の先頭と、最後尾に配置されている。
いずれは…どの鉄道も、【ワンマン運転】になる日が来るのが来ると思うのである！
そんな…気がしていた。
黄色い線の内側に待っていると、
「木嶋、おはよう。珍しいな！市営地下鉄に乗るなんて…」高森さんは、木嶋に尋ねていた。
高森さんは、木嶋が、会社に入社したときの上司であった。
木嶋は、
「高森さん、おはようございます！相鉄線が遅れているらしくて、待っていても…来る気配がないので、こちらにしました。」高森さんに答えていた。
高森さんは、
「そうか…木嶋、早く…嫁さんをもらって、両親を安心させないと…ダメだぞ！」木嶋に話していた。
高森さんが、木嶋の両親を見たことが、一度あったのだ。

それは、姉が、会社まで車で迎えに来たことがあり、警備室から見ていたのだ。

元上司の高森さんに、反論は出来ない。

木嶋は、

「そうですね。早く、いい人を見つけて…両親を安心させたいですね。さすがに…これればかりは、縁(えん)ですから…。」高森さんに伝えたのだ。

電車が、ホームに入ってきた。

「プシュー」エアー音を立てながら…ドアが開いた。

転落防止の策があるため、駆け込み乗車は、不可能である。

木嶋は、高森さんと一緒に座席へ座った。

高森さんは、右足の股関節が悪く、杖(つえ)を使わないと歩くことが難しい。

「誰か…いい人を見つけたか?」高森さんは、木嶋に問いかけてみた。

木嶋は、

「いい人かは…別問題ですが、飲み屋のお姉さんたちと遊んだりしていますけど…ダメですかね?」高森さんに、疑問をぶつけていた。

高森さんは、

「飲み屋のお姉さんって…いくつぐらいの人だ?」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「全部で、3人いますが、一人は、先日…成人式を迎えたばかりで、あとの二人は、自分と同じ年代です。」高森さんに話していた。

「随分と年齢の幅があるな!その中間(ちゅうかん)は、いないのか?」高森さんは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「それが、いないんですよね!」困った表情をしながら…

「ハー」と、ため息をついたのであった。

高森さんは、
「中間が、いないのなら仕方ない。飲み屋のお姉さんは、クラブやスナックの人じゃないのか？」
「そうです。高森さんが言われている通りです。知り合ったのは、横浜のクラブ『H』です！」木嶋は、高森さんに伝えたのだ。
「木嶋は、優しいから、騙されないようにしないと…」高森さんは、木嶋に忠告をしたのだ。
木嶋は、
「そうですね。同じことを、会社の先輩方にも言われましたよ！」
高森さんに話したのであった。
電車が、会社の最寄り駅に着いた。
木嶋は、
「高森さん、足は大丈夫ですか？」高森さんに問いかけていた。
高森さんは、
「大丈夫だ。木嶋は、バスに乗れなくなるから、先に行っていいぞ。自分は、あとのバスで行くから…。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ありがとうございます。先に行かせて戴きます。」高森さんに頭を下げ、その場を離れ、会社の送迎バスが停車している場所に、駆け足で向かって行った。

第２６１話

木嶋は、送迎バスに乗り込んだ。
「バタン」
バスのドアが閉まった。
どうやら…バスの発車間際みたいである。
一歩間違えば、乗り遅れる寸前であった。
乗り遅れたら、
《３０分のロスタイム》が発生してしまう。
このバスに乗ることが出来れば、現場に着いてから、気持ちに余裕が出来るのである。
会社への道のりは、普段と変わらずに空いている。
早ければ…５分で着くこともあれば、雨が降れば…１０分掛かることもある。
【不思議である。】
木嶋が、思っていた通り、バスが、所要時間も掛からずに、会社に着き、所定の停留所に止まった。
少しばかり…急ぎ足で、ロッカールームに向かって行く。
《何故？急いだのか…？》
小室さんが、この時間に、ロッカールームで着替えている可能性が高いのである。
ドアを開けた。
すると…小室さんが着替えていた。
木嶋の予感は、的中していた。
「小室さん、おはようございます！今日、どちらに飲みに連れて行って頂けるのでしょうか？」木嶋は、小室さんに即答を求めた。
小室さんは、
「木嶋、今、この場では、答えることは出来ないよ！これから、食堂に行って…朝食を食べるから、そうだな～８時頃…自分のいる

現場に来てくれるか?どこで飲むか?そのときに話しをした方がいいだろう?」木嶋に問いかけたのだ。

木嶋は、

「了解しました。後(のち)ほど…大森さんと一緒に伺います。」小室さんに伝えたのだ。

小室さんは、右手を挙げ、ロッカールームを出て、食堂の階段を上って行く…

木嶋も、私服から作業服に着替え、スポニチ、おにぎりを右手に持ち、現場に向かって歩いて行く。

毎朝、木嶋は、点火作業を行っていた。

設備に、トラブルが付き物で、祈るような思いである。

「今日も、何事もなく着いたかな!穏やかに、一日が終わればいい!」木嶋の今の心境(しんきょう)である。

木嶋が、プロ野球を観に行こうとしたり、はるかとデートしたり、陸上仲間と飲みに行ったりするときに限って…

【トラブル】が付いて回るのだ。

「損(そん)な星の下に生まれたものだ!」たまに、ボヤきたくなるのである。

木嶋は、財布を取り出し、現場の近くにある…自動販売機で、缶コーヒーを購入した。

「サントリーか…まっ…いいかな?」

木嶋は、コーヒーに、こだわりがあるのだ。

毎日、飲み慣れているメーカーならいいが、全(まった)く…知らないメーカーのコーヒーは飲まないようにしている。

缶コーヒーなら、【ポッカ】、【ダイドー】、【UCC】,【キリン】、【アサヒ】、【サントリー】、【ネッスル】である。

それ以外のメーカーは、値段が安くても、飲まないように努力していた。

缶コーヒーを右手に持ち、現場の休憩所に歩いて行く。

スポニチを読みながら…先ほど購入した、

缶コーヒーのプルタブを

「プシュ」と開け、母親が作ってくれた…おにぎりを食べていた。
会社で、朝、おにぎりを食べないと、昼休みまでのパワーが出ない。
現場の中には、パン党の三谷さんもいる。
《人…それぞれである。》
おにぎりを食べ終え、腕時計で時間を見た。
「今は、7時55分。大森さんを迎えに行こう！」
木嶋は、休憩所から立ち上がり、大森さんがいる場所に向かって行く…。
「あっ…大森さん。おはようございます。これから、今日のことで…小室さんのいる現場に向かいますが、一緒に行きませんか？」
木嶋は、大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「うん、いいよ。自分も…今日、飲みに行く場所について聞いてみたかったんだ！」言葉を返し、
木嶋と一緒に、小室さんの職場に歩き出したのであった。

第２６２話

小室さんのいる職場の休憩所に着いた。
「小室さん、大森さんを連れて来ました！」木嶋は、小室さんに伝えた。
小室さんは、
「木嶋、大森を連れて来てくれて、ありがとう。もう…自分の職場に戻っていいよ！」木嶋に、冗談を言いながら、顔が笑っていた。
木嶋は、
「小室さん、随分なことを言うよね！」小室さんに反論をした。
小室さんは、
「冗談だよ！冗談。」苦笑いを浮かべていた。
大森さんは、
「小室さん、今日、どこにしますか？三谷さんも、来る予定ですよね？」小室さんに尋ねていた。
小室さんは、
「来ると思うよ。木嶋、今日…三谷に会ったか？」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「まだ、自分が、現場に入ったときは、三谷さんは、来ていなかったよ！」小室さんに答えていた。
小室さんは、
「そうだな…前に焼き鳥屋で飲んだから…居酒屋にしようか？大森…それで…どうだ？」大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「自分は、飲めればいいですよ！木嶋君は、居酒屋でいいのかな？」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「居酒屋でいいよ。三谷さんも、納得するだろうから…！忘れて

いましたが、富高さんも来る予定ですよ！」大森さんと、小室さんに伝えたのだ。

小室さんは、

「えっ…富高も来るのか？それを早く言ってほしいな！本人は、話しを理解しているのか？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「昼休みに、富高さんの現場に行き、話しをする予定です。昨日、会社の送迎バスの車内で、さらっと…伝えたら、大丈夫なことを言っていましたが…確認します…！」小室さんに答えたのだ。

小室さんは、

「全員で…5人か…居酒屋で決定。定時で終わるように努力しましょう！」木嶋に、大森さんに話したのであった。

木嶋は、

「自分は、定時で終わると思うが、大森さんは、どうなの？」大森さんに問いかけていた。

大森さんは、

「うん。大丈夫だと思うよ！突発的なことが起きない限りは…」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「そうだね！肝心なときに…詰めが甘いからね！慎重に物事を運びましょう！」大森さんと、小室さんに話したのであった。

小室さんは、

「また、午後3時の休み時間に、職場に来てくれるか！」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「了解しました。」小室さんに話し、その場を、大森さんと一緒に離れて行った。

大森さんは、

「木嶋君、三谷さん…本当に来ると思う？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「どうだろうね?案外…ドタキャンしたりしてね!」大森さんに答えていた。

この答えが、本当になるなんて…木嶋も、大森さんも思わなかったのだ。

大森さんは、

「一旦、自分の作業エリアに戻るよ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「自分も、職場に戻り、三谷さんに確認するね!」大森さんに伝えて、お互いに歩き出したのだった。

三谷さんが、

「木嶋、待っていたんだよ…今日の飲み会…悪いけど行かれなくなってしまいました。申し訳ないが、小室さんに伝えてくれるかな?」木嶋に話したのだ。

木嶋は、ドタキャンの予感がしていたのが、図らずも的中していた。

「分かりました。小室さんには、自分から話しをします。次回、飲み会があれば誘いますよ!」木嶋は、三谷さんに伝えた。

三谷さんは、

「申し訳ないね!また、機会があれば…大森と飲みたいから、そのときは、よろしく。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「大森さんに、伝えておきます。」三谷さんに話したのであった。

第２６３話

「キーン、コーン、カーン、コーン」
仕事の始まりを告げるチャイムが、工場内に鳴り響いている。
「今日も、一日…頑張るか…！」
「フー」と、ため息が漏れ出ていた。
いつもより、《テンション》が低い。
こう言うときは、【ケガ】をしやすいので、気に掛けていた。
前日までは、《行く》と張り切っていた…三谷さんが、コケしまったのだ。
「三谷さん、ドタキャンが多いよ！」ブルーな気持ちになってしまっていた。
「キーン、コーン、カーン、コーン」
午前１０時の休憩時間になった。
木嶋は、職場の近くにある自動販売機で缶コーヒーを購入して、小室さんのいる職場に歩いていく。
「木嶋…三谷は来るのか？」小室さんが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「急用が出来て…来れないと言われました。」小室さんに伝えた。
小室さんは、
「何だよ…三谷が来ると言うから、居酒屋にしたのに…それで、急用の内容は何だ？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「内容に関しては、把握（はあく）していません！聞く必要がないと思ったのです。」小室さんに答えたのだ。
「三谷は、どうしようもないな！大森は、来れないことは、知っているのか？」小室さんは、木嶋に尋ねていた。
「まだ、話しをしていないので、昼休みに、大森さんが自分のところに来るので、その時に、話しをしようと思います。」木嶋は、

小室さんに伝え、自分の職場に戻って行った。
「気を取り直して、昼まで頑張ろう。」
自分自身に気合いを入れていた。
三谷さんが、
「木嶋、小室さんの職場に行っていたのか?」木嶋の元に歩いてきた。
木嶋は、
「先ほど…話しに行きましたよ。小室さん、怒っていましたよ!」
三谷さんに答えていた。
三谷さんは、
「木嶋に行かせて悪いね。」木嶋に頭を下げていた。
「三谷さんが、出向いて行かないと…。」それ以上は、言葉が出なかったのだ。
「あとで、大森さんには、自分から話しをします。」三谷さんに伝えたのだ。
仕事を始め、溝越さんが、深刻そうな顔で職場に戻ってきたのだ。
三谷さんは、
「溝越さん、どうしたのですか?」
溝越さんは、
「今日、突発的な仕事が入って来てしまったんだ!それで、どうしたらいいか?考えあぐねていたんだ。」三谷さんに答えていた。
木嶋は、
「三谷さん、間(ま)が悪いよ!」心の中で叫びつつ、
「こう言うときは、どちらかが残るようになるな!」今までの経験則(けんそく)から分析をしていた。
その分析が当たるのであった。
「木嶋か?三谷か?どちらか…残れるか?」溝越さんは、木嶋と、三谷さんに問いかけたのだ。
三谷さんは、
「自分は、用事があるので、帰ります。」溝越さんに、猛烈(もうれつ)にア

ピールしていた。
木嶋は、
「分かりました。自分が残ります…。」溝越さんに伝えたのだ。
溝越さんは、
「木嶋、悪いな！」申し訳なさそうに、木嶋に頭を下げ、自分の机に座った。
「木嶋、この間(あいだ)…譲(ゆず)ったのだから、今回は、勘弁(かんべん)してね！」三谷さんは、木嶋に声を掛けた。
「お互い様だから仕方ないよね。」木嶋は、諦(あきら)めモードになっていた。
昼休みになり、食堂に行く前に、大森さんを探していた。
「大森さん、チョット…いいかな？」
大森さんは、
「木嶋君、どうしたの？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「三谷さん、今日、来れないと言って来たんだ。」大森さんに伝え、後(のち)ほど…また、話しに来ますよ。
大森さんの職場を、一時(いちじ)離れたのであった。

第２６４話

昼食を終えた木嶋は…
富高さんがいる職場に歩き出していた。
木嶋は、
「富高さん、今、大丈夫ですか？」シートに座っている…富高さんに声を掛けた。
富高さんは、
「木嶋君、今日だよね…小室さんの？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「小室さんを囲む会は、今日ですが、大丈夫ですか？」富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「うん。参加するよ。木嶋君も、当然、来るよね？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「行きますが…残業で、出遅れそうです。そのことを含めて…これから、小室さんや、大森さんにも話しをしないと…」言葉に歯切れが悪かった。
続けざまに…
「自分と一緒に、小室さんの職場に行きませんか？」
富高さんは、
「うん。いいよ。待ち合わせのことなども、小室さんに聞かないといけないからね。」木嶋に話し、
座っていたシートから立ち上がり…
木嶋と一緒に、小室さんの職場に歩いて行く。
「大森さんにも、小室さんの職場に向かうように、電話をするから…チョット待ってて…」木嶋は、富高さんに伝えたのだ。
作業服の左ポケットから、携帯を取り出した。

着信履歴から、大森さんの携帯番号を探していた。
木嶋は良く…大森さんの携帯に、悪戯メールを送っていた。
大森さんは、
《ハッキリ》したことは言わないが…
自分に、都合が悪いと…口篭ってしまう。
木嶋の予感は、《同棲》をしている可能性があるのだ。
また、木嶋と、大森さんは、同じ携帯電話会社のため、通話料が安くなるのであった。
「メールの着信履歴がないな！電話帳から探そう。」
大森さんだから…
【あ行】の列を探せばいいのである。
「大森…大森…あった。呼び出そう。」
携帯番号を発信した。
「プルッ、プルー、プルー」呼び出ししている。
「もしもし、大森ですが…」大森さんが、電話に出た。
「木嶋です。富高さんと一緒に、小室さんの職場に向かっているので、大森さんも来ませんか?」木嶋は、大森さんに問いかけていた。
大森さんは、
「了解しました。」すんなりＯＫを出したのだ。
「大森さんが、すんなりＯＫを出したときは、不安が募って怖い。」木嶋は、疑心暗鬼になるのも不思議ではない。
富高さんは、
「大森君も、残業の可能性が高いんじゃないの?」木嶋に話していた。
木嶋も、
「案外、富高さんが、言う通り《ビンゴ》だったりしてね！」富高さんに答えたのだ。
富高さんの答えが、現実になるとは…
このときは、分からずにいた。

今、【タイムマシーン】があれば…
1日先、2日先、1年先、2年先、5年先を観てみたいものである。
木嶋のお嫁さんになる人は、
『はるか…』なのか？
『富士松さん…』なのか？
『その他の人』なのか？
この両方の目で、焼き付けたいのだ。
神しか知らない世界である。
大森さん、富高さん、木嶋と…男同士で会社の通路を歩く姿は、異様な光景である。
小室さんのいる職場の休憩所に辿り着いた。
「小室さん、2人を連れて来ました。」木嶋は、小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「おっ…富高に、大森か…悪いね！足を運ばせて…今日は、2人は残業か？」大森さんと、富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「自分は、5時で終わります！木嶋君と大森君はどうなのかな？」
木嶋と、大森さんに問いかけていた。
木嶋は、
「残業です！」ため息まじりに、富高さんに答えていた。
大森さんも、
「残業ですよ！」小室さんに話したのであった。

第２６５話

「何だ…木嶋も、大森も、残業か！マイッタね…富高は…残業なのか？」小室さんは、富高さんに尋ねていた。

富高さんは、

「自分は、毎週、金曜日は、５時で上がっているので、大丈夫ですよ！」小室さんに伝えたのだ。

「分かりました。富高、先に行って飲んでようか？」小室さんは、富高さんに話し、

「そうですね～。そうした方がいいかも知れませんね！」富高さんは、小室さんに同意を得るような答え方をしていた。

小室さんの決断待ちである。

「よし、決めたぞ。午後５時１５分のバスで乗って帰りましょう。飲みに行く場所は、いつもの焼き鳥屋ではなく…おでん屋にしよう。木嶋、おでん屋？判るか？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「判りますよ。会社の最寄り駅から、歩いて５分も掛かりませんよ。」小室さんに答えていた。

木嶋の左横で話しを聞いていた大森さんがは、

「木嶋君、おでん屋さんって…『Ｓ』だよね？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「そう…『Ｓ』ですよ。小室さんの話している…おでん屋は…」

大森さんに話したのだ。

大森さんは、

「今の時期なら、おでんでもいいよね！味も、店に依って違いがあるが…みんなで食べるのに最高だね！」木嶋に答えたのだ。

小室さんは、

「大森が言っている通りだよ。『Ｓ』のおでんは、味が、染みて

いて、地酒も豊富にあるから、よく…この時期、会社の帰りに寄って行くんだ。木嶋も、場所を知っているから安心だ。仕事が、早く終わったら合流する形でいいか?」大森さんと、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「もちろんです。自分が、早く終わる確率は少ないと思われるのですが…」苦笑いを浮かべながら…小室さんに答えていた。

大森さんも、

「自分も、そのつもりで、仕事を早く切り上げるように努力しますよ!」小室さんに話していた。

富高さんは、

「木嶋君、大森君、おでん屋『S』で、小室さんと、『ノミニケーション』をしながらお待ちしてます。」木嶋と、大森さんに伝え、

「小室さん、それでは…後ほど…」小室さんに話し、職場に戻って行った。

木嶋と、大森さんも、

「小室さん、自分たちも、職場に戻ります。」小室さんのいる休憩所から離れて行く。

大森さんは、

「木嶋君、三谷さんのことを…小室さんに話さなくて良かったの?」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「三谷さんのことは、午前の休み時間に伝えたよ。」大森さんに伝えたのだ。

大森さんは、

「それならいいんだ!小室さんも、敢えて話しをしなかったのかな?」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「恐らく…そうだと思うよ。大森さん、また、後で…。」大森さんに話し、職場に戻って行った。

昼休み終了のチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴っている。
「あと半日、少し…時間が長いが、頑張ろう。」木嶋は、自分自身に鼓舞した。
大体、仕事が終わるメドが付くのは、午後の休憩時間前後に分かるのだ。
溝越さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋…今日は、何時まで残って行くんだ。」木嶋に問いかけていた。
今日は、三谷さんが、5時で帰るので、
「一人ですからね。午後7時までの申請をして戴きたい。」溝越さんに、木嶋は答えていた。
溝越さんは、
「三谷は、出来ないのか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「三谷さんは、予定があると話していたので、残業は出来ないと思います。」溝越さんに話したのであった。
溝越さんは、
「木嶋、一人で大丈夫か?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、不安げな表情を見せながらも…
「大丈夫です。」と、答えるしかなかったのだ。

第２６６話

一日の仕事終わりを告げるチャイムが、
「キーン、コーン、カーン、コーン」鳴り響いている。
三谷さんは、
「木嶋、お先に失礼するよ！」嬉しそうな表情で職場をあとにした。
木嶋は、
「さぁ～、これから…もう一踏ん張りしないと…いけないな！」
自問自答を繰り返していた。
職場近くにある自動販売機で、コーヒーを買い、小室さんのいる休憩所に歩き出した。
小室さんは、煙草に火を点し、
「フー」と…白い煙を出していた。
木嶋は、煙草を吸ったことがないので、吸う人の気持ちは、理解しがたい。
煙草は、健康に良くないし、肺ガンになるリスクも高くなるのであった。
「小室さん、富高さんのことをよろしくお願いします。」木嶋は、小室さんに頭を下げていた。
小室さんは、
「木嶋、早く仕事を終わらせて…合流してくれよ！」木嶋を急かすように話していた。
木嶋は、
「分かりました。早く合流出来るように努力します。」小室さんに伝えたのだ。
小室さんは、
「富高が、ロッカールームで待っているから、先に行くぞ！」
先ほどまで吸っていた…煙草の火を、水の入った容器に入れ消火

したのを確認してから…座っていたシートから立ち上がり、ロッカールームに歩いて行く…。

木嶋は、小室さんと別れ、大森さんのいる場所に歩いて行く。

「大森さん、何時ぐらいになりそうかな?」

木嶋も、大森さんのことか気掛かりになっていた。

大森さんは、

「7時までだよ。木嶋君は…」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「自分も、7時までだよ!今日…バイクで会社に来ていないよね?」大森さんに聞いていた。

大森さんは、

「バイクは家に置いてきたよ。何で…?」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「前に、バイクで飲み会の場所まで来たことがあったでしょう?飲酒運転で捕まったら大変だからね。そのことがあったので聞いてみました。」大森さんに答えたのだ。

大森さんは、

「木嶋君、会社のバスに乗るんだよね?一緒に行こうよ!」木嶋に声を掛けた。

木嶋も、

「自分も、最初からそのつもりでしたよ!」大森さんに伝えたのだ。

大森さんは、

「もし、仕事が早く終わったら、木嶋君の職場に顔を出すよ!」

木嶋に話し、

木嶋も、

「そうしようか!自分も、早く終わったら、大森さんに声を掛けるよ!」大森さんに答え、職場に戻って行った。

職場に戻ると、溝越さんが待っていた。

「木嶋、今日…飲み会だったのか?」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、
「大森さん、富高さん、小室さんの４人で、会社の最寄り駅で飲む予定です！」溝越さんに答えていた。
溝越さんは、
「何か…悪いことをしたな！申し訳ない。」木嶋に頭を下げていた。
木嶋は、
「仕事ですから仕方ないですよ！大森さんも、状況は一緒ですよ！」溝越さんに伝えた。
溝越さんは、
「そうだよな！自分たちが仕事をしていたら、大森も同じ。三谷も冷たいな！今日のことは、知っていたのか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「三谷さんも、声を掛けたのですが、急用が出来たと言ってドタキャンされました！」
「それでか…ニコニコしながら帰ったのは…ケガだけはするな！何かあったら…自分も残っているから、声を掛けてくれるか？」溝越さんは、木嶋に問いかけたのだ。
木嶋は、
「分かりました。もしものときは、声を掛けます。」溝越さんに話したのだ。
溝越さんは、その言葉に安心したのか…納得した表情で、木嶋の元から離れて行ったのだ。

第267話

やっとの思いで、仕事が終わった木嶋は…
大森さんの元に向かって行こうとしたとき…
大森さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋君、お疲れさま。今、職場に行こうと思っていたんだ！」
大森さんは、木嶋に話していた。
木嶋も、
「自分も、今、仕事が終わったばかりなので…《ナイスタイミング》でした。」大森さんに伝えたのだ。
「木嶋君、これからロッカールームで着替えるんだよね？着替え終わったら…外で待っていてくれるかな？」大森さんは、木嶋に問いかけたのだ。
木嶋は、
「うん、いいよ！」大森さんに、快く返事をしたのであった。
木嶋も、大森さんも、同じロッカールームである。
お互いの様子は、すぐに見られる距離である。
会社の送迎バスの発車時刻まで…
まだ、余裕がある。
木嶋が、いつも、送迎バスに乗るのは、発車間際が多い。
そのため…バスの運転手さんに不快な思いをさせることが、屡々（しばしば）ある。
これは、木嶋自身が直さないといけないことなのだ。
先に着替えを終えた木嶋は、ロッカールームの外に出て、大森さんが来るのを待っていた。
木嶋から遅れること…3分。
大森さんが出てきた。
左腕にしている腕時計を木嶋は確認した。
「発車まで…あと3分か…今日は、余裕があるな！」安心感を漂

わせていたのであった。
「木嶋君、バスの発車時間は大丈夫？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「時間に、余裕があるから大丈夫です。」大森さんに伝えた。
大森さんは、
「この時間は、乗っている人が多いね！」驚いた様子で木嶋に声を掛けていた。
木嶋は、
「そうだね！いつも…このバスに乗るが、週末だと言うのに、会社で仕事をしている人が多いね！」大森さんに答えたのだ。
バスのドアが閉まり、会社を出たのだ。
「木嶋君、小室さんに電話しなくていいの？」大森さんが、木嶋に問い掛ける。
木嶋は、
「最寄り駅に着いたら、電話すればいいでしょう！」大森さんに話したのだ。
木嶋が先に乗り…
大森さんが、あとからバスに乗り込んだ。
一番後ろの座席が空いていたので…
そこに、大森さんと一緒に座った。
バスの坐り心地が悪いのか？
【ソワソラ】していた。
木嶋は、バスに乗り慣れているのか？
《そんな不安はない。》
大森さんは、普段からマイペースなので、人が運転するよりも、自分で、運転した方が楽なのである。
送迎バスが、最寄り駅に着いた。
「大森さん、降りるよ！」木嶋は、大森さんに声を掛けた。
大森さんも、あとからバスを降りたのだ。
Gパンのポケットから、木嶋は、携帯を取り出した。

「大森さん、今、小室さんに電話するからね！」大森さんに伝え、小室さんの携帯番号をメモリーダイヤルからスクロールした。
「プッ、プッ、プッ、プルー」呼び出している。
なかなか電話に出ない。
不安な表情が、木嶋の顔を曇らせていく。
「木嶋君、どうしたの？」大森さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「呼び出しているが、電話に出ないんだ！」大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「気づかないのかも知れないよ！」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「おでん屋『S』に向かいましょう！」大森さんに話したのだ。
大森さんは、
「その方がいいかもね！もし、そこに、いなかったら…別なところで、2人で飲もうよ！」木嶋に提案した。
木嶋は、頷(うなず)いたのであった。

第２６８話

木嶋は、おでん屋『S』の前に立ち止まり…。
携帯を、Gパンのポケットから取り出した…。
再び…小室さんの携帯に電話をした。
「プッ、プッ、プッ、プルー」呼び出し音が鳴っている。
呼び出しをしても、なかなか電話が繋(つな)がらない。
「何をしているんだろう?」
木嶋も、大森さんも、不安になりながらも、苛立(いらだ)ちを隠せずにいた。
何度…かけ直しているか分からない!
「参ったね。大森さん、どうしよう?電話に出ないよ!」木嶋は、大森さんに零(こぼ)していた。
大森さんは、
「小室さん、酒の酔いが回るのが早いからね!木嶋君、2人で、他の店に行こうか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「もう一度…【チャンス】をもらって掛けてみましょう!この電話に出なかったら、大森さん、他の店で飲みましょうか?」大森さんに答えていた。
大森さんは、
「そうだね!」木嶋の提案に頷(うなず)いていた。
「プッ、プッ、プッ、プルー」何回目か?判らないくらい呼び出しをしていた。
「もしもし…小室ですが…!」
やっと…小室さんが電話に出た。
「木嶋です。小室さん、何回も電話したんですよ」木嶋は、怒った口調(くちょう)で小室さんに話していた。
小室さんは、

「あっ…そうか？何回も、電話してもらって…悪かった！木嶋、今、どこにいるんだ？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「今、おでん屋『S』の前に、大森さんと一緒にいます。小室さんは、どちらにいますか？怒っていますよ！いつまで、待たせるんだって…」木嶋は、小室さんに問い詰めていた。

小室さんは、

「それは、《マズイ》な！大森を宥めてくれるか？今、おでん屋『S』の中にいるよ！富高と話しをしていたら盛り上がってしまい、電話に出ることが出来なかった！早く、来てくれ…。」木嶋に答えていた。

木嶋は、

「分かりました。おでん屋『S』のどこに座っているのですか？」

「入って…右だよ！直ぐに判るはずだ…」小室さんは、《ぶっきらぼうな》言い方で木嶋に伝えた。

「分かりました！」と、木嶋は答え、電話を切ったのだ。

木嶋は、

「大森さん、おでん屋『S』の中にいるみたいなので入りましょうか？」大森さんに声を掛けたのだ。

大森さんは、

「そうだね！寒さが、段々と身に染みて来たよ！」木嶋に話したのだ。

昼間は、冬にしては、暖かったこともあり、夜になって…急激に、気温が低下していた。

この時期は、寒暖の差が激しい。

暖冬だと言っても…

冬将軍が到来すると、さすがに寒くて震え上がってしまう。

大森さんの仕事は、表の作業をしているが、防寒着を着ているが…

冬の寒さは苦手で、休み時間になるたびに…

木嶋の作業エリアに来て…ストーブに手を当てて…暖をとってい

る。

木嶋、富高さん、小室さんは、ラインの中で仕事をしているが、朝は寒くても、動けば身体（からだ）が、ポカポカして暖かくなるのであった。

懐（ふところ）は、給料を貰えば暖かくなるが、使えば使うほど…無くなって行く。

人は、自分の趣味を…

一つは持っているはずである。

スポーツ観戦、映画、音楽鑑賞、ドライブ、ボウリング、ゴルフ、テニス、釣りなど、色んなジャンルがある。

何もないのは、考えられないと思っている。

趣味を持つことに依って自分自身のスキルアップに繋がっていくのである。

木嶋の場合は、スポーツ観戦、映画、音楽鑑賞が…はるかとの共通点が、いくつも見つけ出すことが出来たのだった。

第269話

木嶋は、おでん屋『S』のドアを手前に引き、中に入っていく。
女性店員さんが、
「いらっしゃいませ。2名様でございましょうか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「こちらで、待ち合わせをしている人がいますので…申し訳ない。」女性店員さんに伝えた。
女性店員さんは、
「畏(かしこ)まりました。」木嶋の元を離れて行った。
大森さんが、
「木嶋君、店員さんに失礼ではなかったかな?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「仕方ないよ!小室さんたちを待たせているし、別々に飲むことは出来ないでしょう!」大森さんを宥(なだ)めるように話していた。
大森さんも、
「そうだよね!」納得得した表情であった。
小室さんの座っているテーブルを探し当てた。
「小室さん、お待たせしました。」木嶋は、小室さんに挨拶した。
小室さんは、
「木嶋、やっと来たのか?待ちくたびれたぞ!」木嶋にボヤいていた。
富高さんも、
「2人とも、顔が赤く…出来上がっているよ!」木嶋に話していた。
木嶋は、
「すいませんね!お待たせして…。」富高さんに伝えたのだ。

富高さんは、
「木嶋君も、大森君も、早く…飲み物をオーダーした方がいいよ！」木嶋と大森さんに話したのだ。
大森さんは、
「それでは、お言葉に甘えて…」座席に座る前に、メニューを見ていた。
木嶋は、一足先に、富高さんの隣りに座った。
大森さんは、どうやら…決まったみたいである。
メニューを、木嶋に渡し、大森さんは、小室さんの横に座ったのだ。
木嶋も、メニューを見ていた。
「悩んでいても…仕方ない」
どうやら…決まったのだ。
木嶋が、テーブルの横にあるボタンを押した。
「ピンポン」音が店内に響いている。
先ほどの女性店員さんが、木嶋のいるテーブルに来た。
「お待たせしました。ご注文を伺います。」
「生ビールの中ジョッキ、大森さんは…」木嶋が、大森さんに尋ねていた。
大森さんは、
「自分も、木嶋君と同じでいいよ！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「生の中ジョッキを、もう一つ。合計…2つでお願いします。」
女性店員さんに話したのだ。
女性店員さんは、
「生の中ジョッキを2つ…以上で、よろしいでしょうか？」木嶋に同意を求めた。
木嶋は、
「それで、ＯＫです。」女性店員さんにシグナルを出したのだ。
小室さんが、

「今日のおでんはいいぞ。」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「小室さん、おでんのネタは…何を頼んだの?」小室さんに聞いていた。
「大根、つみれ、さつま揚げ、こんぶ、ちくわ、玉子…そんなぐらいかな?」小室さんは、木嶋に答えていた。
木嶋は、
「ビールが来たら…はんぺん、がんもなどを頼みましょう。大森さんの好きな、おでんのネタは…あるのかな?」大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「大根、つみれ、さつま揚げを頼もうかな?それと、サラダも一緒に…。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「了解しました。」と、右手を上げて答えていた。
女性店員さんが、生ビールを…木嶋のテーブルに運んできた。
「お待たせしました。生の中ジョッキです。」木嶋に渡し、
「ありがとうございます。」女性店員さんに話し、
「あと…オーダーの追加で…大根、つみれ、さつま揚げ、はんぺん、がんもをお願いします。」木嶋が伝えたのだ。
女性店員さんは、
「オーダーの確認をします。大根、つみれ、さつま揚げ、はんぺん、がんも…以上でよろしいでしょうか?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「ＯＫです。」と、女性店員さんに話し、
女性店員さんは、その場を離れて行ったのであった。

第２７０話

木嶋は、ジョッキを大森さんに渡した。
「皆さん、お待たせしました。全員揃いましたので、乾杯をしたいと思います！小室さん、よろしくお願いします。」小室さんに乾杯の音頭をお願いをしたのである。
小室さんは、
「仕方ないな！」苦笑いを浮かべながら…
「え～、今日は、私を囲む会を開催して頂き、ありがとうございます。幹事長の木嶋君からのご指名なので…皆さん、グラスを持って…」
富高さん、大森さん、木嶋が生ビールの入ったジョッキを手に取り、
小室さんの発声で、
「乾杯。」
一同ジョッキを合わせ、
「カチャン、カチャン」鳴らしていた。
木嶋も、大森さんも、喉が渇いていたので、
「ゴクッ、ゴクッ」
生ビールが旨そうに飲み…
大森さんは、ジョッキの半分を飲んでいた。
木嶋も、
「大森さんに負けないように…と」ジョッキの半分近くまで飲んだのだ。
小室さんが、
「木嶋、大丈夫か?」心配そうな表情で、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「大丈夫ですよ!」小室さんに言葉を返したのであった。
明らかに…木嶋の飲むペースは、いつもより早い。

それだけ…小室さんが、心配するのも無理はないのである。
先ほど…オーダーした…
おでんのネタが、いい匂いを醸し出していた…。
女性店員さんが、重そうな顔つきで運んできた。
「お待たせしました。大根、つみれ、さつま揚げ、はんぺん、がんもです。」木嶋の前に置いた。
女性店員さんは、両手に持ち切れないほどの料理を持っていた。
木嶋が、
「重そうだね！大丈夫？」赤い顔をして、女性店員さんに声を掛けた。
「大丈夫です。ありがとうございます。」女性店員さんは、弾(はじ)けるような笑顔で話し、木嶋のテーブルから離れて行った。
大森さんが、大人(おとな)しく…小さな声で
「大根、つみれをもらうよ！」木嶋に伝え、小皿に取った。
木嶋は、
「じゃあ…残りのネタは、自分がもらいます！」大森さんに伝えた。
小室さんは、
「大森、ここのおでんは…美味(おい)しいか？」大森さんに尋ねていた。
大森さんは、
「美味しいですよ！ダシも、東日本と、西日本では違うのですかね？」小室さんに聞いていた。
小室さんは、
「東日本と西日本では、ダシの色が違う！東日本は、どちらかと言えば《濃い》。西日本は、《薄い》よ。それは、うどんのつゆにも共通しているぞ。また、地域に依って…おでんのネタに変化がある。」大森さんに答えていた。
大森さんは、
「同じ…日本で、《濃い》、《薄い》どころか…？ネタにまで、変化がなんてあるなんて…」驚きの表情を見せつつも、納得してい

た。

小室さんは、色んな場所に旅をしている。
独身貴族なので、食べる物や酒、名所などを良く知っている。
現在は、独身貴族と言う言葉は…使われないのかも知れない。
木嶋は、家族で旅行に出かけると…。
小室さんの意見を参考にしながら…
お土産を購入する【ヒント】を得ている。
大森さんは、釣りが趣味で、富高さんと話しが合う。
ただ、違うのは、富高さんは、川釣り。
大森さんは、海に向かって…投げるのが得意で、地元で、有名なクラブチームに入っているらしい。
大森さんが、主張しているから間違いないのである。
木嶋は、陸上をやっていたことがあった。
一度、辞めてしまうと、再開するまでに、
凄い【エネルギー】と【パワー】が必要であった。
小室さん、富高さん、溝越さんなども、
木嶋に、突いていたのであった。

第271話

小室さんは、
「今まで、築いていたものが、崩れ去ってしまうのは簡単だが…元に戻すのは、倍以上に掛かるぞ！」木嶋に話していた。
そのことは…木嶋も、充分に理解をしていた。
最近の口癖は…
「目標が出来たら…陸上の練習を再開しますよ！」そう…話しの結論を持っていくのである。
富高さんは、
「木嶋君、小室さんの話している通りだよ。、一度、釣りをやってみませんか？」小室さんに聞いていた。
小室さんは、
「釣りか…？いいな！自分も、これと言った趣味もないから…定年後のことを考えると…一度、やってみようかな？釣りと言っても、奥が深いと思うが…どうなのだろう？」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「小室さんが言うように、釣りは、奥が深いかも知れませんが…。自分は、主に、川釣りをやっています！大森さんは、投げるのが専門でしたよね？」問い掛けるように…大森さんに話しかけた。
大森さんは、
「投げるのが専門ですが、海釣りもしますよ！」富高さんに答えていた。
富高さんは、
「海釣りで何が釣れますか？」大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「シロギスだね！」
「シロギスですか…？機会があったら、一緒に行きませんか？」
富高さんは、大森さんに尋ねていた。

大森さんは、
「自分も、キャスティングの大会に出ているので、大会がなければいいですよ！小室さんは…どちらをやりますか？」小室さんに話しかけたのだ。
小室さんは、
「シロギスを釣って…天ぷらで揚げて食べるもいいな！海釣りも、川釣りも…両方やりたい気分になって来た。！一度に、両方は欲張り過ぎかな？」大森さんに答えていた。
大森さんは、苦笑いを浮かべながら…
「小室さん、欲張り過ぎですよ！最初は、川釣りから始めた方がいいかも知れません！いきなり…海釣りに行って、水難事故に巻き込まれないとも言えないですから…」小室さんに伝えたのだ。
小室さんは、
「大森が話しているように…海は怖い。自分は、酒も飲みから、余計に身の危険を感じる。」大森さんに伝えたのだ。
大森さんは、
「そうだね。」小室さんに答えていた。
富高さんが、
「木嶋君は、釣りをやったことがあるのかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「前に、母親の実家近くの池で、やったことがありますが、気が長い方ではないので、釣れないとイライラしてしまい…自分には向いていないと思いますが…！」富高さんに話していた。
富高さんは、
「また、挑戦をしてみるのもいいと思うよ！小室さんと一緒に、川釣りに行こうよ！」木嶋に誘いを懸けていた。
「そうだね！もう一度、チャレンジするのもいいね！機会があったらお願いします。」木嶋は、富高さんに頭を下げていた。
木嶋の携帯が…

《プルッ、プルー、プルー》と着信音が鳴っている。
【誰かな?】
携帯の画面を覗くと、麻美からであった。
「もしもし、木嶋ですが…」
「麻美です。木嶋君、今…どちらですか?」麻美が、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「会社の最寄り駅のおでん屋『S』の中で、富高さんと一緒に、会社の先輩や同僚と飲んでいます。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「まだ、そこのお店を出ないのかな?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「今、釣りの話しで盛り上がっていて…水を差すことは出来ません。もう少し…時間を下さい。」麻美に、理解を求めていた。
麻美は、
「分かりました。早く、切り上げて、こちらに来て下さい。お願いします。」木嶋に伝え、電話を切ったのであった。

第272話

富高さんが、
「木嶋君、今の電話は…誰からなの？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「麻美さんからです！待っているから…早く切り上げて来て欲しい…とね。」富高さんに答えていた。
富高さんは、
「木嶋君、麻美さんの店にも、顔を出さないとダメなんだよね…」腕組みをして考えていた。
木嶋は、
「ここから移動しても、1時間掛かるからね…ドタキャンをしてもいいが、麻美さんに失礼だし、思案をしているよ。」富高さんに問いかけていた。
小室さんが、
「2人で飲みに行く約束があるのか？」木嶋と富高さんの会話を聞いていたのだ。
「2人で飲みに行きますが…ただ、小室さんには、似合わない場所かも知れませんね！」木嶋は、軽いジョークを飛ばしていた。
「木嶋、自分に、似合わない場所があると思うか？」小室さんは、木嶋に質問した。
「あると思います。行こうとしている場所は、関内駅から歩いて…10分ぐらいかな？クラブ『U』と言う店なんですよ！」木嶋は、丁寧な口調で小室さんに話していた。
小室さんは、
「横浜スタジアムのある関内か…その店の女性に、木嶋は、《イレ込んで》いるのか？」木嶋に問い詰めていた。
木嶋は、
「小室さん、随分失礼な言い方をしますね！《イレ込んで》なん

かいません！自分と同じ年代なので、話しをしていても、気を使わなくていいし、話しやすいのです。富高さんにも、同じことを言っていましたが…。」小室さんに話したのだ。

小室さんは、

「富高も、そうなのか？」富高さんに聞いていた。

富高さんは、

「木嶋君から誘われない限り…自分一人で行く場所ではないですから…行った店で、知り合った女性を紹介され、意気投合したのです。」続けて…

「木嶋君には、若い…はるかさんがいるので、同年代は気休めかも…」小室さんと、木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「富高さん、少し…誤解があるね…確かに、はるかさんと交際していますが、あくまで…友達の関係から脱皮していない。麻美さんは、同じ年代だから…自分に迷いが生じたときに、《アドバイス》を求めているのです。その貴重な《アドバイス》を聞き入れない時が多々（たた）ありますが…。」苦笑いを浮かべ、富高さんに答えたのだ。

小室さんは、

「それが、飲み屋の女性でも、一人の女性として見てやらないとダメだぞ！割り切りが大切だ。」富高さんに伝えたのだ。

小室さんの右横に座っている…大森さんが、首を縦に頷いていた。

それを見た木嶋は、

「大森さん、何か…思い当たることでもあるの？」悪戯っぽく…聞いていた。

大森さんは、

「何も…ないよ！」右手を顔の前に出し、振っていた。

木嶋は、

【もっと】ツッコミを入れようかと考えていたが、大森さんの立場を危うくしても仕方がないと諦めたのであった。

小室さんが、
「今日は、木嶋や、富高と飲んでいて楽しいよ！大森も、仕事での【憂(う)さ晴らし】をしないとな！自分も、関内に行こうかな？」
木嶋は、
「本当ですか…？」驚きながら…小室さんに聞き返していた。
小室さんは、
「行くよ！大森はどうするんだ？」大森さんに問いかけていた。
大森さんは、
「自分は、別な店で…」小室さんに伝えた。
木嶋は、
「いつものところかな？」大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「別に、答えなくてもいいでしょう？」ツレナイ返事を返していた。
木嶋は、
「大森さん、冷たいね！」大森さんへ、クールに話したのだ。
富高さんは、
「誰でも、話したくないこともあるよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「そうだよね！」納得するしかなかった。
小室さんは、
「そろそろ…お開(ひら)きにしますか？」木嶋、富高さん、大森さんに問いかけていた。
木嶋は、
「そうしましょう！」小室さんに答えたのであった。

第２７３話

木嶋は、右手を上げ…女性店員さんを呼んだ。
「お待たせしました。」女性店員さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「すいません！おあいそ…お願いします！」女性店員さん話したのだ。
「畏(かしこま)りました。今、伝票をお持ちしますので、少々、お待ち下さいませ。」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「小室さん、大分(だいぶ)顔が赤くなっていますが…大丈夫ですか？」小室さんに聞いていた。
小室さんは、
「うん。大丈夫だよ！木嶋の方こそ…大丈夫なのか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「まだ、大丈夫です。」小室さんに伝えたのだ。
先ほどの女性店員さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「お待たせしました。こちらが伝票です。」木嶋に手渡した。
木嶋は、
「ありがとう！」優しく言葉を掛けた。
照(て)れ臭(くさ)そうに、女性店員さんは、木嶋の元から離れて行った。
「えっと…会計は…合計８０００円か…一人、２０００円でいいかな？」木嶋は、独(ひと)り言を呟(つぶや)いていた。
富高さんが、
「木嶋君、全部で、いくらになったのかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「合計金額は、８０００円です。」富高さんに答えていた。
富高さんは、
「一人…２０００円でいいのかな？」小室さんに問いかけていた。

小室さんは、
「いいだろう！大森は、今の意見に異存はないのか？」大森さんに聞いていた。
大森さんは、
「自分は、異論ないです。」小室さんに答えていた。
「それでは、本日は、全員一律…２０００円と言うことでご理解を願います。」小室さんが、木嶋、富高さん、大森さんに伝えたのだ。
木嶋も、富高さんも、大森さんも、一斉に、財布からお金を取り出した。
木嶋が、お金を集めていた。
「これで、全員分集まりました。これから移動しましょう！」
木嶋は、小室さん、富高さん、大森さんに声を掛けた。
大森さん以外は、リュックやカバンを持ち、席から立ち上がった。
靴を履き、おでん屋『S』の外に出ていく。
木嶋は、お金と会計伝票を持ち、レジに向かった。
「会計は、８０００円です！」女性店員さんが、木嶋に伝えた。
木嶋は、
「ちょうど…８０００円です。ご確認をお願いします。」女性店員さんに渡したのだ。
女性店員さんは、１枚ずつ丁寧に、お札を数えていた。
お金を扱うところは、大変な苦労である。
【１円でも合わないと…。】
《何故？合わなかったのだろう？》
自分自身を否定しなくては、ならなくなってしまう。
最終的には、自分で補填しなくてはならなくなってしまうのだ。
会計を終えた木嶋は、外で待っていた…
小室さん、富高さん、大森さんと合流した。
「これから、どうしますか？」木嶋は、最終確認をしていた。
大森さんは、

「小室さん、自分は、これから他に寄る場所があるので、木嶋君たちと飲みに行っていいよ！」小室さんに伝えたのだ。

小室さんは、

「大森が、他に寄る場所があるなら、自分たちは、木嶋の知り合いがいる店に行こう！」木嶋に話していた。

木嶋は、

「大森さんと、小室さんが、そう言うなら…動きますか！」大森さんと、小室さんに同意を求めた。

大森さんは、

「木嶋君、悪いね！また、飲みに行こうよ！」木嶋に問いかけた。

木嶋は、

「いいよ！また、行きましょう！今日は、お疲れさま！」大森さんに答えたのだ。

大森さんは、木嶋たちと離れ、会社の方角（ほうがく）に歩き出した。

富高さん、小室さん、木嶋の３人は、最寄り駅に向かって歩いて行くのであった。

第２７４話

最寄り駅のエスカレーターに乗り、地下のコンコースへ降りて行く。

木嶋は、

「小室さん、富高さんと一緒にビールを買いにいきますので、コンビニの前で待っていて下さい！」小室さんに話したのだ。

小室さんは、

「判りました。」煙草に火を点け、美味しそうに煙りを出し、木嶋に答えたのだ。

木嶋は、富高さんと一緒にコンビニへ入りながら、麻美に電話をしていた。

「プルッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いているが…中々（なかなか）、電話に出ない。

「どうしたのだろう？」

【缶ビールを３本】

両手に持ちながら、頭の中に不安が過ぎっていた。

富高さんが、

「木嶋君、どうしたの？」心配そうな表情で、木嶋に問いかけている。

木嶋は、

「麻美さんに電話しているが、出れないみたい…。」富高さんに答えていた。

富高さんは、

「木嶋君、麻美さんは、自分たちが、クラブ『Ｈ』に行くのを知っているんだよね？」木嶋に問いかけた。

「先ほどの電話で話しはしてあります！人数は伝えられなかった！」木嶋は、富高さんに答えていた。

富高さんは、

「忙しいから電話に出られないんじゃないかな？クラブ『U』の場所は、木嶋君、解るのかな？」木嶋に尋ねていた。

「クラブ『U』は、一度も行ったことがないので、不安があるんだ。関内は、ビルばかりで、今一解りにくい…駅に着いたら、もう一度…電話してみればいいかな？」木嶋は、富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「それがいいね。小室さんが待ちくたびれているみたいだよ！ビールの会計は、自分がするからいいよ！」

「あっ…いけない…会計をお願いします。小室さんを、コンビニの前で待たせたままだったんだ！」木嶋は、富高さんに話し、慌てて…小室さんの元に走っている。

小室さんは、

「木嶋、待たせ過ぎだぞ！」痺れを切らしていた。

「すいません！」頭を下げていた。

「何をしていたんだ！」小室さんは、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「関内の店に電話をしていたのです！」小室さんに伝えたのだ。

小室さんは、

「相手は、電話に出たのか？」

「忙しいみたいで、電話に出てくれなかった！」木嶋は答えたのだ。

「出れないのは仕方ないぞ！お客さんがいれば付かないと…」小室さんは、麻美の状況を理解をしていた。

コンビニの会計を終えた富高さんが、木嶋と小室さんの元に来たのだ。

「木嶋君、麻美さんから連絡あったかな？」富高さんが、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「依然、連絡はないよ！あとで、メールを送ります。」富高さんに話し、

続けて、
「どちらのルートにしようかな?」小室さんに尋ねていた。
小室さんは、
「どっちでもいいぞ!その店に近いルートを選択すればいいぞ!」
木嶋に話していた。
木嶋は、
「それなら、横浜市営地下鉄がいいね!」小室さんに答えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君、横浜市営地下鉄で大丈夫なの?」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「大丈夫だと思います。横浜駅で京浜東北線に乗り換えるよりは、横浜市営地下鉄で地下の階段を上れば、地上に出るまで楽だと思います。小室さんは、ツラいかも知れませんが…」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「じゃあ…横浜市営地下鉄の乗り場に行きましょう!」木嶋と、小室さんを案内していた。
小室さんも、飲み過ぎで、脚(あし)が、千鳥足(ちどりあし)になっていた。

第２７５話

横浜市営地下鉄の改札を通り、すぐ右にあるエレベーターに乗り、ホームに降りた。

木嶋、富高さん、小室さんの３人は、エレベーターから降りて…最後尾の車両に乗った。

先に出発するの電車は、１番線の電車であった。

最後尾の車両には、ボックス席があるが、時間帯に依(よ)っては、ない車両もある。

乗った電車は、ボックス席があったので、木嶋たちは、そこに座った。

すかさず…右手にしていた腕時計で時間を確認した。

【発車まで、あと５分。】

この時間帯は、電車の本数が少なくなっていて、発車までの《インターバル》が長くなっていた。

すると、木嶋の携帯が、

「プルッ、プルー、プルー」

着信音が鳴り響いていた。

「誰かな？」

携帯の画面を覗くと…

麻美からであった。

「もしもし、木嶋ですが…」木嶋が電話に出た。

「麻美です。先ほどは、電話に出れなくてごめんなさい。」麻美が、木嶋に謝罪をしていた。

木嶋は、

「仕事していたのだから、仕方ないよ！」麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「電話をくれたときは、お客さんと《カラオケ》で盛り上がり…音(おと)が掻(か)き消されてしまって聞こえませんでした。」木嶋に答えてい

た。
木嶋は、
「カラオケで盛り上がっていたなら…尚さらだね！話しは…ここまでにして本題に入ります。これから、麻美さんのクラブ『U』に向かいます！」麻美に話したのだ。
麻美は、
「何人で来るのかな？富高さんも来るのかな？」木嶋に問いただしていた。
「3人で行きます！もちろん、富高さんも一緒です。」木嶋は、麻美に答えていた。
麻美は、
「あとの1人は誰なのかしら？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「同じ職場の先輩です。年齢は、自分や富高さん、麻美さんよりも上ですが…！」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「解りました。私は、その先輩とは会うのは初めてかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「多分…初めてだと思います。！これから、会社の最寄り駅を出ますので、移動するのに、1時間くらい掛かります。《今回、場所も把握出来ていないので、関内に着いたら…》連絡します。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「連絡が来るのを、楽しみにお待ちしています。」嬉しそうな声で木嶋に話し、電話を切ったのだ。
木嶋は、
【フー】と息を吐いた。
富高さんが、
「木嶋君、随分、話しが長く感じたが…今の電話は、麻美さんか

な?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「そうです。麻美さんです。これから、【関内に伺(うかが)います。】と話しました。」富高さんに答えていた。
富高さんは、
「そうだね。これで、関内に着いたとき、電話をすることがなくて良かったんじゃないの?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「ここからの移動する時間は伝えました。およそ…1時間くらいだとね。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「麻美さんは、納得したの?」木嶋に問いただした。
木嶋は、
「関内に着いたら、連絡下さいと…言われたので、【場所も、自分が理解出来ていないので、連絡します。】と答えたよ。」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「何だか…ワクワクして来たよ!関内に着いたら、麻美さんと話しがしたいので、電話を代わって頂いてもいいかな?」木嶋に話していた。
木嶋は、
「富高さんが、【自(みずか)ら…電話で話したい。】なんて…言うのも珍しいな!」呟(つぶや)きながら…
「いいよ!」と、答えたのだ。
電車の発車ベルが、
「プルー」鳴り響き…
ドアが…
「ピコン、ピコン」と音を立てながら閉まり、
最寄り駅をあとにしたのであった。

第２７６話

電車が、
《ブーン》と音を鳴らしながら動き始めた。
最寄り駅のトンネルを出て、
一瞬（いっしゅん）だけ…地上に出た。
【ガタン、ゴトン】揺られている。
そして、また…トンネルの中に入って行く。
関内駅へ着くまで…
麻美には、【１時間】と伝えてあるが、実際は、【４５分】ぐらいである。
横浜市営地下鉄は、全部の駅が、《地下ホーム》ではなく、《地上ホーム》もあるのだ。
ボックス席に座っている木嶋は、先ほど、コンビニで購入したビールを、富高さん、小室さんに手渡しした。
木嶋が、音頭を取り…
「２次会と言うことで乾杯。」声を出した。
富高さん、小室さんも
ビールの《プルタブ》を空け、
「乾杯」と缶を鳴らした。
富高さんと、小室さんは、毎日、帰りの電車の中で、ビールを飲み慣れている…。
いつもと同じように…ペース配分をしながら、《ピーナッツ》を食べながら飲んでいた。
最寄り駅から戸塚駅までは、１０分で到着する。
その間に、ビールを飲み切ってしまうのだ。
木嶋は、家で、ビールを飲まないので、電車の中で飲むことに慣れていないので、まだ、残っていた。
戸塚駅から関内駅まで、《あと…３５分》

長い時間である。
横浜市営地下鉄は、各駅停車しかないので、
【急行】や【快速】がある相鉄線、ＪＲを利用している乗客から見ると不便に感じてしまうこともある。
途中で、駅を確認していた。
見慣れぬ光景に驚いていた。
ドアの上にある…
【駅名ボード】を見上げていた。
《関内駅まで…あと３つか！》
時間にして、およそ１０分掛かる。
木嶋は、
「小室さん、富高さん、もう少しで関内に着きますよ！」声を掛けた。
小室さんは、酒が入ると饒舌になる。
仕事をしているときは、口数が少ない。
《これが、当たり前である。》
ふと、振り返ると、小室さんが、
「コクリ、コクリ」首を前後に振り、眠っている。
富高さんは、
「もう着くよ！」話しながら…
「何か…あっという間に着いたかな？」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「そうだね。普段、横浜市営地下鉄に乗らないから、見慣れない景色だし、どの辺りを走行していたか分からないよ。」富高さんに話していた。
小室さんは、座席で夢を見ているのだろう。
木嶋は、その姿を見ていると、
【起こすのを、止めようか！】富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「麻美さんに、３人って話しているから…起こした方がいいよ！」

木嶋に伝えたのだ。
「了解。起こしましょう！」
木嶋は、席を立ち、
「小室さん、もうすぐ…関内駅に着きますよ！起きて下さい！」
小室さんの身体を揺すっていた。
「ウーン」と、唸り声を上げ、眠い目を擦り、起きたのだ。
小室さんは、
「もう…関内に着くのか？戸塚までは、起きていたと思うが…何分ぐらい寝ていたんだ！」富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「戸塚を過ぎて…すぐですね。３０分ぐらいかな！」小室さんに答えていた。
小室さんは、
「最近、飲み過ぎると寝てしまうんだよ！年齢か？それとも、酒に弱くなったのかな？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「短絡的に言うと、両方だと思いますが、一番の理由は、酒に弱くなったんじゃないかな？」小室さんに伝えたのだ。
富高さんも、隣りで、木嶋の話しを頷きながら聞いていた。
「まもなく…関内。関内です。」車内アナウンスが流れていた。
木嶋、富高さん、小室さんは、荷物をまとめて…ドアの前に立っていたのであった。

第２７７話

「ようやく関内に着いたか？」ホッ…と一安心していた。
ホームから改札口に向かう階段を、木嶋を先頭に…上がって行く。
小室さんは、右足庇う仕草を見せていた。
「小室さん、右足は大丈夫ですか？」木嶋は声を掛けた。
「大丈夫だ！」小室さんは、気丈に木嶋へ答えていた。
富高さんは、
「小室さん、無理は禁物ですよ！手術をした方がいいのでは…？」
小室さんに伝えたのだ。
小室さんは、
「今、手術しても、１００％良くなるとは限らない。人工関節を入れて、１０年経過したら…再度、手術しなくてはいけなくなる《リスク》はあると同時に不安だ。」富高さんに話していた。
木嶋は、
「小室さんの話していることに…一理ある。自分の身体に《メス》を入れたくないよ！あとは、【ダイエット】をしないとダメだね！」小室さんの身体を見て呟いていた。
小室さんは、体型的に肥満である。
体重を落とせば…膝に掛かる負担も無くなる。
膝は、身体を支えているので、支えきれないと…悲鳴を上げる。
木嶋も、疲れが溜まってくると、足が…《フラつき》始める。
足が、《フラつき》始めたら、【屈伸運動】（くっしんうんどう）をする。
それをすることに依って足が…《シャキッ》と…するのである。
小、中、高校と毎日、グラウンドを走っていたので、足にスタミナがあり、毎年、真夏の暑さに耐えられている。
木嶋が、会社に入社したときは、まだ、地元に工場があった。
卒業するときに、工場が移転して…今の場所に通勤している。

当初は、通勤するのに時間が掛かっていて、通勤に嫌気がさしたりして、会社を辞めようとしたこともあった。それを乗り越え、相鉄線と横浜市営地下鉄が開業してから…通勤するルートの選択肢が増えたのだ。

偶然にも、横浜駅で乗り換える相鉄線ルートを選択したため…はるか、麻美と出会ったのだ。

この選択が違っていたら…どうなっていたのだろう？

未だに、会社の女性社員、陸上仲間の人たちと交流がなかったかも知れない。

階段を上りきり、改札を出た。

再び、地上へ上がる階段を、一段ずつ上がって行く。

木嶋は、Gパンのポケットから携帯を取り出し、　リダイアルから麻美の番号をスクロールした。

「プッ、プッ、プッ…プルー、プルー、プルー」呼び出し音が鳴っている。

麻美が電話に出た。

「もしもし…麻美です。」

「木嶋です。関内に着きました。今いる場所は、大きな交差点にあるコンビニの前にいます。」木嶋は、麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「お疲れさま。駅を背中にして、大きな交差点を神奈川県庁方面に歩いて下さい。以前、木嶋君が来たお店から近いですよ！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「以前…来たかも知れないですが、色んな店に顔を出しているので解りませんよ！」苦笑いをして答えていた。

麻美は、

「そうだよね！玲さんのいるクラブ『O』は分かるよね？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「玲さんのクラブ『O』は判りますよ！」麻美に答えていた。
麻美は、
「そこから近いので、目印は、クラブ『O』ね！着いたら連絡下さい！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「分かりました。」言葉を残し、電話を切ったのであった。

第２７８話

大きな交差点の歩行者信号を渡り、神奈川県庁方面に向かって歩いていた。

【見慣れた景色…】

木嶋は、

「待てよ！この道は、いつも…麻美や玲の店に歩いて行く通りだ！ここからの道のりは…大体判る。」自分自身に自信を持ち始めていた。

後ろを振り返り…

富高さんと、小室さんが付いて来ていることを確認していた。

《歩くこと…１０分。》

玲がいるクラブ『Ｏ』の前に、辿り着いた。

再び、携帯を取り出し…麻美に電話をしたのだ。

「プッ、プッ、プッ、プルー、プルー」呼び出し音が鳴り響いている。

「もしもし、麻美です。」麻美が電話に出た。

「木嶋です。今、クラブ『Ｏ』の前に着きました。これからどうすればいいのか？教えて下さい！」木嶋は、麻美に問いかけていた。

麻美は、

「木嶋君、そこから、右に…２５？歩いて下さい。私も、これから、エレベーターで下まで降り、迎えに行きます。」木嶋に話し…

木嶋は、

「ありがとうございます。」麻美に伝え、電話を切ったのだ。

富高さんは、

「木嶋君、どちらに行けばいいのかな？」木嶋に聞いていた。

「右に、２５？歩いて下さい…と、麻美さんが言っていたよ！歩きましょう！」木嶋は、富高さんに同意を求めた。

富高さんは、

「了解しました。」と答えたのだ。
小室さんの表情を見ると、何事もなかったように顔色も良く、元気に復活した。
「木嶋、まだ着かないのか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「もうすぐですよ！」小室さんに話したのだ。
ビルから吹きおろす冬の風が寒く感じる。
両手を口に近づけ…
《フー》と息をかけた。
朝、会社に出かけるときは、手袋をしている。
ロッカールームで着替えるときに、リュックの中にしまう。
木嶋の誕生日に、はるかが、【誕生日プレゼント】で手袋をくれた。
はるかは、木嶋の誕生日を祝ってくれた唯一の女性である。
今まで、女性と交際しても、長続きはしなかった。
《それだけ…思い入れがある。》
実際、はるかのラストインの日…
「私は、これからも、木嶋さんと付き合いたいと思っています！」
はるかは、木嶋に伝えていた。
木嶋は、
「自分も、同じ考えだ…と」はるかに話したのだ。
それが、翌日には、
「お店も辞めたし…忙しいし…会うのを止めようと思いました。じゃあね！」掌を返すように留守電が入っていた。
それが、一週間後には…
「木嶋さん、間違えて…留守電に入れてしまいました。私は、木嶋さんと一緒にいたい！」はるかの熱意に押され…再び、友達付き合いをしている。
麻美は、まだ、このことを知らない。
知っているのは…

木嶋が、はるかにフラれた話しは、メールて伝えていた。
本来なら…
【木嶋を、激励する…】はずであった。
「麻美は、怒るかな?」木嶋は、気にしながら歩いていた。
ふと、前に顔を上げると、麻美が立っていた。
「木嶋君、富高さん、お待ちしていました!」黒いドレス姿で、
木嶋と富高さんに挨拶していた。
「木嶋君、そちらの方は…?」木嶋に尋ねていた。
富高さんが、
「自分が答えます。小室さんと言います!」麻美に小室さんを紹介した。
小室さんは、
「どうも…初めまして。小室と言います!」麻美に頭を下げていた。
麻美も、
「麻美と言います。木嶋君と富高さんに、いつも…お世話になっています!」小室さんに伝え、
「ここは、寒いので…店で話しをしましょう!」木嶋たちを、エレベーターに案内した。
木嶋たちも、麻美と一緒に、エレベーターに乗り込み、店に上がって行ったのだ!

第２７９話

エレベーターが、７Ｆで止まった。
何処(どこ)の《クラブ》、《スナック》の多くは、雑居(ざっきょ)ビルの中に入っている。
【別名…クラブ通り】と言うフロアが存在するが、麻美の店も例外ではなく、クラブが、３軒あった。
クラブ『Ｕ』のドアを開けた。
玲のクラブ『Ｏ』より、一回(ひとまわ)り店のスペースが小さく感じる。
「いらっしゃいませ！」女性スタッフの声が聞こえてきた。
麻美と飲むのは、今年の１月以来である。
木嶋にして見れば、同じ店に続けて来るのも珍しい。
以前は、はるかから、
「たまには、私のクラブ『Ｈ』に来てよ！」と、アフターで会うたびに言われていた…
横浜駅で、途中下車をしなくて良いと思うと、気分的に楽である。
これからは…
《関内で、ゆっくり飲めるのかな？》
僅(わず)かな期待感が込み上げていた。
麻美が、
「右端(みぎはし)の席に、リザーブシートのカードを置いてあるので、そちらに座っていて下さい！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「分かりました！」と答え、
富高さんと、小室さんを案内していた。
テーブルの上には、氷(こおり)と、ミネラルウォーターが置いてあった。
木嶋は、
「富高さん、小室さん、どのように座りますか？」問いかけていた。

富高さんは、
「木嶋君が、奥に座れば良いんじゃないかな?自分は、飲みすぎると…トイレが近くなるので、反対側がいいね!小室さんは、どうしますか?」小室さんに尋ねていた。
小室さんは、
「自分も、富高と同じ意見だ。木嶋、そういうことでヨロシク!」
木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「了解しました!」富高さんと、小室さんに答えたのだ。
右端に…木嶋が座り、
富高さんと、小室さんが反対側に座った。
麻美が、
「いらっしゃいませ!」木嶋たちに声を掛けながら、オシボリを手渡していた。
麻美の他に、2人の女性スタッフを連れてきた。
「私の左手に、『さゆり』さん、右手に、『みゆき』さんです!」
麻美が、木嶋、富高さん、小室さんに紹介した。
木嶋が、
「よろしくお願いします!」と、さゆりさん、みゆきさんに頭を下げた。
麻美は、
「木嶋君は誰がいい…?」木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「若い人がいい…なんてね!麻美さんでいいよ!」麻美に伝えた。
麻美は、
「木嶋君、無理に私を指名しなくてもいいよ!本当は、若い…『さゆり』さん、『みゆき』さんがいいんじゃないの?」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「やっぱり…バレました!スタートは、麻美さんでお願いします

！」麻美に話したのだ。
麻美は、木嶋の答えに理解を示し…
「さゆりさんは、富高さん。みゆきさんは、小室さんで良いのかな？」富高さん、小室さんに確認をした。
富高さんは、
「いいよ！」威勢の良い答えが返ってきた。
麻美は、木嶋の右隣り…
さゆりさんは、富高さんの左隣り…
みゆきさんは、小室さんの右隣りに座った。
麻美は、
「今から、スタートするね！飲み物のボトルは、焼酎（しょうちゅう）の【ＪＩＮＲＯ】でいいかな？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「小室さん、芋焼酎（いもしょうちゅう）ではないですが…いいよね？」小室さんに問いかけていた。
小室さんは、家で毎日のように…芋焼酎を飲んでいる。
『クラブ』や『スナック』で芋焼酎がある店は少ない。
殆（ほとん）どの店で…
【ＪＩＮＲＯ】を置いているので安心して飲めるのであった。
木嶋は、
「焼酎の【ＪＩＮＲＯ】でいいよ。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「了解しました。」と答え、
右手を上げ、女性スタッフに…
「焼酎の【ＪＩＮＲＯ】をお願いします。」伝えたのであった。

第２８０話

女性スタッフが、
木嶋のテーブルに、焼酎【ＪＩＮＲＯ】を持ってきた。
麻美が受け取り…キャップを捻った。
「木嶋君、どれくらい入れる？」氷をグラスに入れながら、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「少し…薄めでいいよ！普段から飲み慣れていないから、飲み過ぎで帰れなくなると《ヤバイ》からね！」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「もし、潰れてしまったら…私の家まで連れていき、介抱するよ！」
「万が一…そうなった場合は頼みます！」木嶋は、半ば開き直った。
はるか、玲、麻美であっても…
口では【世話になりたい】と思うが、正直な気持ちは、どんなに飲み過ぎても、その日のうちに家へ帰り、《グッスリ》寝たい。
２０代の頃、会社の飲み会で…飲み過ぎてしまい…。
救急車で最寄りの駅近くの病院に運ばれ…姉に、病院まで迎えに来てもらった苦い思い出がある。
そのとき以来、飲みに出かけるときは、細心の注意を払っている。
「富高さんと、小室さんは、普通でいいですか？」麻美が、富高さんと、小室さんに問いかけていた。
富高さんと、小室さんは、声を揃えて…
「いいよ！」と答えたのだ。
木嶋は、
「麻美さんたちも、【ＪＩＮＲＯ】で良ければ…どうぞ！」麻美、

さゆりさん、みゆきさんに声を掛けた。
木嶋が、自分のボトルを、女性スタッフに勧めるのも珍しい。
最も…はるかの店に、何度も足を運んでいるので、そのたびに耳打ちされている。
はるかと知り合ったときは、まだ《未成年》であった。
木嶋は、アルコールを勧めるのは良くないと言う良心が出ていた。
あとは、はるかの考え方だと…。
一時期…
はるかと、麻美が、同じクラブ『H』にいた。
お互いの年齢が離れているので、話しが噛み合わないのは当然だった。
どちらの味方へなるにしても…木嶋は、中立を　保たないといけなかった！
麻美が、クラブ『H』を辞めてからは、放浪の旅に出たと思わずに居られなかった。
いつまでも…。
迷い続ける…。
出口の見えない迷路みたいに、中々（なかなか）抜け出せない。
ようやく…安住の地が、関内だったのだ。
木嶋が、
「麻美さん…。さゆりさんと…みゆきさん…自分が会うのは初めてだよね？」麻美に聞いていた。
麻美は、
「そうだね！木嶋君が会うのは、初めてだね！２人とも…入店したばかり…はるかさんより素敵な女性ですよ！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「いきなり…本題ですか…」苦笑いを浮かべ…切り返して…
「麻美さん、さゆりさんと、みゆきさんにも…焼酎の水割りを造って下さい！」麻美に伝えたのだ。
「ＯＫ！」

麻美も、夜の仕事が長いせいか…手際(てぎわ)がよい。
あまりの手際の良さに感心していた。
麻美が、
「さゆりさん、みゆきさん、これをどうぞ…！」
グラスに入った焼酎を手渡した。
富高さんが、
「みなさんに渡ったみたいなので…乾杯しましょう！」
続けて…全員が、
「お疲れさま！」と、声を掛けた…。
グラスを上げ、鳴らしている。
「いや～おいしいね！」木嶋が言葉を漏らしていた。
麻美が、
「そうでしょう～。みんな…待ち焦がれていた。飲み物よりも、《おつまみ》を頼もうか？」木嶋に問いかけた。
木嶋も、
「何か…食べる物がないと、酔いが回るのが早いからね！メニューを下さい！」麻美に伝えたのだ。
麻美は、近くにいた女性スタッフを呼び…
【メニューを持ってきて！】と話したのであった。

第２８１話

女性スタッフが、麻美にメニューを渡した。
それを、麻美から木嶋が受け取り…メニューを広げていた。
富高さんは、さゆりさんと…小室さんは、みゆきさんとの話しに夢中になっていた。
「麻美さん、食べたい物がないね！」麻美にボヤいていた。
麻美は、
「木嶋君…ゴメンね！いいのがなくて…フライドポテトなんかどうかな？」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「フライドポテトね！はるかさんと一緒にいるとよく食べるよ。どの店に行っても、フライドポテトを頼んでいる確率が高いよ！」
麻美に話していた。
麻美は、
「そうなの？はるかさん…フライドポテトが好きなの？」木嶋に問いかけていた。
「好きとか嫌いの問題じゃないと思うね！短時間に調理が出来るからではないのかな？」木嶋は、麻美に答えていた。
「そうかもね！じゃあ…フライドポテトでいいかな？あとは…いいの？」
木嶋は、
「あとは…漬け物があるといいね？」麻美に問いかけていた。
麻美は、
「漬け物は盛り合わせでいいかな？あとは…どうする？」木嶋に聞いていた。
「あとは、腹に溜まる物がいいね！焼きそばとかあるの」木嶋は、麻美に話したのだ。
麻美は、

「焼きそばね！小皿もあった方がいいね！」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「そうね！小皿があれば…みんなで、焼きそばを小分けが出来るよね！自分が、今、オーダーしたいのは…3品でいいよ！富高さん、小室さんが他に…オーダーがあったら声を掛けます！」木嶋は、麻美に話したのだ。

麻美は、右手を上げ、近くにいた女性スタッフを呼んだ！

「フライドポテトと漬け物の盛り合わせ、焼きそばね！フライドポテトには、《ケチャップ》も忘れないように…」

女性スタッフは、

「畏まりました。」麻美に答えたのだ。

麻美は、

「木嶋君、はるかさんと別れたんだよね！」木嶋に、本題を切り込んできた。

木嶋は、

「別れ…たよ！」歯切れが悪い。

それに気づいた麻美は…

「まさか…また、交際しているんじゃないの？」木嶋に問い詰めていた。

木嶋は、

「そう…その…まさかなんだ！」麻美に答えた。

その言葉を聞いた…麻美は、

「えっ」驚いた表情で木嶋の方に振り向いた。

木嶋は、麻美のクラブ『U』に来る前に、富高さんに…はるかと交際を再び始めたことは話していた。

麻美に取っては、はるかは、【目の上のタンコブ】同然。

【はるかから、木嶋を奪い取れば…】麻美にそんな気持ちがあるのは判っていた。

木嶋も、

【それに応えたい。】

だが…はるかがいると…木嶋は、そちらに流れてしまう。

木嶋は、はるかも、麻美も大切にしたい。

【一挙両得】（いっきょりょうとく）したい。

いつかは、選択しないといけないが、今、一緒に過ごしたい時間は、はるかなのだ。

富士松さんのことも、気になっている。

本音を言えば、富士松さんを彼女にしたい。

クラブ『U』で飲んでいるので、会社の女性社員の名前を出すのは、麻美の立場では、回答を引き出すのは難しい！

木嶋は、

「麻美さん、一度、はるかさんから別れの留守電が入っていたのですが、数日後に、電話があり…留守電は間違いであると…再び、交際して欲しいと…！」麻美に答えたのだ。

麻美は、

「それで、また、交際しているの？木嶋君、少し…非情にならないと…。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「麻美さんは、非情になれても、自分は、なれないよ！」麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「木嶋君らしいね！はるかさんが、好きになったのは、その《優しさ！》羨ましい！」木嶋に賛辞を贈ったのであった。

第２８２話

木嶋は、熱々（あつあつ）の《フライドポテト》、《焼きそば》を目の前にしていた。

「麻美さん、早く食べようよ！」麻美を急かしていた。

「そうだね！冷めると…美味しくないから、食べながら話しをしようか？」麻美は、木嶋の意見に同意をした。

テキパキと…焼きそばを、６等分、小皿に分け始めた。

木嶋は、素っ気なく…見つめていた。

「いつまでも…この関係が持つのだろうか？」不安を抱えていた。

そう感じるたびに、

【胸が張り裂けそう】になっていた。

麻美は、

「木嶋君、どうぞ。」木嶋に渡した。

木嶋は、

「ありがとう！」麻美に伝えたのだ。

麻美は、富高さん、小室さん、さゆりさん、みゆきさんにも、小皿を渡したのだ。

小皿を受け取った…富高さんは、

「木嶋君、気を使わせて悪いね！」木嶋に話していた。

木嶋は、

「そんなことないよ！ここに来たら…急に…お腹が空いたので、《焼きそば》と《フライドポテト》をオーダーしたのです。」富高さんに答えたのだ。

富高さんは、

「自分も、何か…オーダーしようと思っていたところに、《焼きそば》が来たから【グッドタイミング】でした。」

「そう…言って戴けると嬉しいな！」木嶋は、富高さんに話したのだ。

富高さんの隣りにいた…さゆりさんが、
「木嶋さん、麻美さんと付き合いが長いんですか?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「麻美さんとは、もう…どれくらいになるのだろう?およそ…1年半ぐらいかな?」さゆりさんに答えたのだ。
「いいですね~。良い理解者がいて…私に、まだ、そんな人に巡り会ったことがないですよ!」さゆりさんは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「まだ…巡り会ったことがないのは、当然だと思います。麻美さんは、初対面のときに、《インパクト》が非常(ひじょう)に強かった。何て言えばいいのだろう?《オーラ》ってでも言うべきかな?」さゆりさんに答えたのだ。
「そうですか…どこのお店で知り合ったのですか?」さゆりさんは、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「横浜の…クラブ『H』です。知っていますか?」さゆりさんに尋ねていた。
さゆりさんは、
「横浜には、買い物するのに出掛けますが、クラブ『H』の場所は解らないです!」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「さゆりさん、夜の仕事は初めてなの?」さゆりさんに聞いていた。
さゆりさんは、
「ここが、初めてなんです!」木嶋に伝え、
木嶋は、疑心暗鬼(ぎしんあんき)になりながらも…
「本当なの?」尋ねていた。
さゆりさんは、
「本当ですよ!」笑いながら答えていた。

木嶋は、その表情を見たとき…
「一本(いっぽん)…取られたな！」頭を掻き立てていた。
富高さんは、
「木嶋君、さゆりさんの話しを信じてあげて…」木嶋を慰(なぐさ)めていた。
木嶋は、何でも、信じてしまう性格なので、人に騙されやすい。
はるかが、
【彼氏がいない】と言うのも、真(ま)に受けてしまう。
好きになる女性ほど…信じられなくなっている。
麻美は、同じ年代だし、付き合いも長いから…それはないはずである。
良く…【魔性(ましょう)の女性】がいる。
木嶋には、はるかも、玲も、麻美も…
【魔性(ましょう)の女性】に見えてしまう。
さゆりも、みゆきも、夜の仕事をしている人たちは、みんな…そうなのかも知れない。
富高さんも、そう感じている。
小室さんは、みゆきさんに話しに夢中になっていた。
ふと…席を立つと…
「木嶋、飲んでいるか？」小室さんが、木嶋に声を掛けた。
木嶋は、
「ボチボチですよ！」小室さんに答えたのであった。

第２８３話

みゆきさんは、
「木嶋さん、良い人たちに巡り会えていいですね！」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「ありがとうございます。でも、本当に良い人たちなのか…甚だ疑問ですよ！」みゆきさんに答えたのだ。
みゆきさんは、
「そんなことはないですよ。素敵な人たちです。」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「素敵な人ね。みゆきさんに、彼氏はいるの？」みゆきさんに聞いていた。
みゆきさんは、
「彼氏はいませんよ！」
富高さんが、
「先ほど…さゆりさんに、木嶋君、同じことを聞いていたよ！人それぞれ…考え方は違うからね！」みゆきさんに伝えたのだ。
みゆきさんは、
「そうですか？」やや不満な表情を浮かべていた。
さゆりさんは、手を叩き…
「みなさん、固い話しは抜きにして…早く、【焼きそば】を食べないと冷めてしまいますよ！」みゆきさん、富高さん、小室さんに話したのだ。
富高さんは、目の前にあった小皿を取り、
「麻美さん、この【焼きそば】は…おいしいね！厨房で作ったのかな？」口に頬張りながら、麻美に尋ねていた。
麻美は、

「厨房で作ってはいません！外にある…お店にオーダーしたのです。」富高さんに話したのだ。

さゆりさんは、

「えっ…そうなんですか？麻美さん、おつまみを作っているところは、お店から近いのですか？」麻美に聞いていた。

麻美は、

「うん。近いと言えば近いかな？お店から歩いて…１０分前後かな？」さゆりさんに答えていた。

さゆりさんは、

「お店から１０分前後…結構、歩く距離はありますね！」頷（うなず）きながら答えていた。

「日頃の運動不足解消には、いい運動になるかもね！」麻美は、さゆりさんに説明したのだ。

さゆりさんは、

「最近…運動不足気味（うんどうぶそくぎみ）なので…何か？始めないと…」麻美に伝えたのだ。

麻美は、

「陸上でもやったらどうかな？」

「陸上ね！たくさん、競技種目があるが、どれがいいかな？」さゆりさんは、麻美に話したのだ。

木嶋は、

「麻美さんも、陸上を始めたのですよ。」

「えっ…そうなんですか？」驚いた表情を見せた。

「軽く…《ジョギング》を始めたみたいですよ！ね…麻美さん…」木嶋は、麻美に聞いていた。

麻美は、

「木嶋君からアドバイスを受けて、《ジョギング》を始めたのですが…走れば痩せると思いましたが、私には、どうやら…逆効果（ぎゃくこうか）だったみたい！」さゆりさんに答えたのだ。

さゆりさんは、

「逆効果って…太ったのですか?」麻美さんに尋ねていた。
麻美は、
「そうなんです。」さゆりさんに伝えたのだ。
木嶋は、
「仕方ない部分はありますよ!さゆりさん…始めてみたらどうでしょうか?」さゆりさんに、《ジョギング》をするように勧めていた。
さゆりさんは、一瞬戸惑いながらも、
「やってみようかな?木嶋さん、教えて戴けるのですか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「始めるときに、日にちと時間を教えて戴ければ、コーチに伺います。」さゆりさんに答えたのだ。
さゆりさんが、
「ありがとうございます!連絡先を帰るときに教えて下さい!」
木嶋に話し、
木嶋も、
「いいよ!…と」気軽に応じていた。
小室さんが、
「木嶋、カラオケが歌いたいが、この店は、歌えるのか?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「カラオケは…画面がついていますよ!」小室さんに答えたのだ。
小室さんは、
「じゃあ…歌う曲を選択しよう!」歌のガイドを手に取り、探し始めたのであった。

第２８４話

小室さんは、飲めば…
人前で、カラオケを披露することもあるが、その場の雰囲気に依って…自らが、マイクを片手に取ることもある。
十八番は…石原裕次郎である。
小室さんは、会社の仲間と、良く旅行に出かける。
【北海道に出掛けたときは、《小樽の石原裕次郎記念館》に立ち寄った…】と、飲んだ席で、話しを聞いたことがある。
木嶋自身、一度しか北海道に行ったことがない。
今まで、小室さんと飲みに出かけた回数は、数えるくらいであった。

【小室さん、今日は、気分が乗っている】証拠である。
「よし…この曲を入れよう！」小室さんが呟いた。
すかさず…麻美が反応した。
「小室さん、曲名を言って下さい！」麻美が、小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「えっと…【夜霧よ…今夜も有難う】でお願いします。」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「石原裕次郎さんの曲ですね！随分渋いです！ここに来るお客さんの中で、裕次郎さんを歌う人はいません！小室さん、好きなのですか？」小室さんに問いかけた。
小室さんは、
「石原裕次郎は、自分の青春時代を《オーバーラップ》しているんだ。映画も観たこともあるぞ！」麻美に答えていた。
麻美は、
「一番有名な…【太陽の季節】ですか？」小室さんに尋ねていた。

小室さんは、
「うん。【太陽の季節】が一番好きかな！晩年は、テレビドラマに《シフト》しても観ていたよ。」麻美に伝えた。
麻美は、
「好きな人なら、どこまでも追い掛けたいですよね！ヨットもやるのですか？」小室さんに期待感を持ちながら尋ねていた。
小室さんは、
「この身体で、ヨットは向かないよ！」煙草に火をつけ、麻美に話したのだ。
麻美は、
「ヨットも、やっていれば格好良かったな！」小室さんに伝えた。
木嶋は、苦笑いを浮かべながら…
「自分が、石原裕次郎のテレビドラマを観たのは…【太陽にほえろ】と【西部警察シリーズ】ですね。」小室さんに話したのだ。
富高さんが、
「自分も、【西部警察シリーズ】は、良く観ていたよ！確か…日曜日の夜８時から放映した記憶があるよ！」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「自分も、日曜日の夜８時は、テレビの前に座り観ていたよ！大森さんも、同じ年代だから、一緒に飲みに行ったときに聞いたら…《観ていた。》って…話していたことがあったよ！」富高さんに伝え、
「あとで、大森さんに聞いてみようか？」小室さんに話していた。
さゆりさんは、
「その【西部警察シリーズ】は、どんなテレビドラマなのでしょうか？」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「売りは…派手な…《カーアクション》と《銃撃戦》（じゅうげきせん）だね！他の刑事ドラマと《スケール》が全然違いますよ。」
さゆりさんに答えていた。

さゆりさんは、
「再放送などは、やっていないのですか?」富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「自分は、携帯を持っていないので、木嶋君に話しを振った方がいいよ!調べてくれじゃあないかな?と思うよ。」さゆりさんに話したのだ。
さゆりさんは、
「木嶋さん、【西部警察シリーズ】の再放送を調べて戴けませんか?」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「何を調べるの?」悪戯ぽく…惚け、さゆりさんに聞いていた。
さゆりさんは、
「知っているくせに…」少し…怒った表情を見せたのだ。
木嶋は、
「これから調べます!」後ろのポケットから携帯を取り出した。
すると…携帯の着信を知らせる…サインが出ていたのであった。

第285話

【夜霧よ…今夜も有難う】のタイトルが流れて、前奏が聴こえてきた。

このメロディーは、正しく…石原裕次郎である。

木嶋は、

「小室さん、石原裕次郎のメロディーが流れていますよ！」小室さんに、マイクを持つように促していた。

小室さんは、慌ててマイクを持ち…

「それでは、歌わせて戴きます。石原裕次郎で、【夜霧よ…今夜も有難う】です。」

木嶋、富高さん、さゆりさん、みゆきさん、麻美が拍手で盛り上げていた。

周りにいた…他のお客さんも、木嶋たちに釣られるように、拍手をしていた。

クラブ『U』にいるお客さんの年齢層は、見た感じ…小室さんと同じぐらい…だと思う。

石原裕次郎の曲のあとに、他のアーティストの曲を歌うのは、気が引けてしまう。

麻美は、

「木嶋君も、歌えばいいのに…」木嶋へ歌うように催促していた。

木嶋は、

「さすがに、同じテーブルから続けて歌っていいのか…疑問を抱くよ！他のテーブルのお客さんに勧めて下さい！」麻美に話したのだ。

麻美は、

「一度、他のお客さんに誘いをかけてみますが、もし…いないようなら歌ってくれるかな？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「いいよ！富高さんでもいいよね？」麻美に聞いていた。
麻美は、
「今まで…富高さん…一度も歌ったことないよね？」木嶋に問いかけ…
木嶋は、
「ないはず…！」麻美に答えたのだ。
麻美は、
「他のお客さんに声を掛けてくるね？みゆきさん、その間（あいだ）、木嶋君をヨロシクね！」麻美は、カラオケのリモコンを持ちながら、みゆきさんにシグナルを出しながら、他のテーブルに誘いをかけた。
みゆきさんが、
「木嶋さん、最近の曲は、良く聞かれるのですか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「最近の曲は…宇多田ヒカルと倉木麻衣（くらきまい）を良く聞いています。」
みゆきさんに伝えたのだ。
みゆきさんは、
「宇多田ヒカルも、倉木麻衣も良い曲歌いますよね？木嶋さん、歌えますか？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「聴くのはいいですが、歌えないですよ！」苦笑いしながら答えていた。
みゆきさんは、
「それなら…歌える曲があるならお願いします！」木嶋に、再度依頼をした。
木嶋は、
「麻美さんが、こちらに戻って来たら選曲します！それでいいかな？」みゆきさんに同意を求めた。
みゆきさんは、
「いいですよ。宇多田ヒカルを歌いますね！曲は、【Ａｕｔｏｍ

ａｔｉｃ】です。聴いたことがありますか？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「聴いたことがあります。《デビューアルバム》に収録されているよね！自分のお気に入りの曲です！」みゆきさんに話したのだ。
みゆきさんは、
「ありがとうございます。後(のち)ほど…歌わせて戴きますね！」嬉しそうに話したのだ。
麻美が、木嶋のテーブルに戻ってきた。
「木嶋君、一曲(いっきょく)…お願い出来るかな？」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「いいよ！《チェッカーズ》にしようかな？」麻美に尋ねていた。
麻美は、
「いいね～。私たちの青春時代を過ごした…アーティストだね！」
木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「富高さんには、《サザンオールスターズ》を歌って戴きましょう！」麻美に相談した。
麻美は、
「そうだね！富高さんが演歌(えんか)を歌えば渋(しぶ)いよね？」木嶋に答えたのだ。
木嶋は…
小室さんの石原裕次郎…【夜霧よ…今夜も有難う】を聴き入っていたのであった。

第２８６話

小室さんが歌い終わった…。
達成感なのか…？
両腕を天に突き上げた。
クラブ『Ｕ』の各テーブルのソファーに座っていた人たちも…
《良かったよ！》声を掛けられ…照れ臭そうに、ソファーに座った。
小室さんの世代の多くは、石原裕次郎に憧れ…共感していた。
【夜霧よ…今夜も有難う】のフレーズが、多くの人たちに感動を与えたのかと思うと…
後に、歌う準備をしている…
木嶋と富高さんに、目に見えない《プレッシャー》になってしまう。
それでも、めげずに…
《チャレンジャー精神》を持つことが、この場を、和ますことが出来るなら、それが、最善策である。
木嶋は、
「では、みゆきさん。小室さんが、歌って…周りの人たちが感動したばかりで、自分たち…若手が、間髪入れないで、曲のオーダーをしてもいいのかな？」みゆきさんに問いかけていた。
みゆきさんは、
「みなさんに感動を与えた…石原裕次郎さんの曲の後に歌う…木嶋さんも、相当な《プレッシャー》じゃあないですか？大丈夫ですか？誰の曲でしょうか？」木嶋を心配していた。
言う曲名を興味津々（きょうみしんしん）に聴き入っていた。
木嶋は、
「曲名は、チェッカーズで【涙のリクエスト】でお願いします。」
みゆきさんに話したのだ。

みゆきさんは、
「チェッカーズですか?…【涙のリクエスト】ですね!」木嶋が伝えた…曲名を興味津々（きょうみしんしん）に聴き入っていた。
カラオケのリモコンを右手に取り、曲名から入力した。
先に入っている曲がなく…すぐに…
【涙のリクエスト】のイントロが流れてきた。
「いきなり…ですか?準備が出来ていないよ~!」木嶋は、ボヤきながら…慌てて…小室さんの前に置いてあったマイクを右手に持ち、歌い始めた。
麻美は、
「懐かしいな…」ポツリと…言葉を呟いていた。
みゆきさんが、
「麻美さん、懐かしいなんて…どうしたのですか?」麻美に尋ねていた。
麻美は、
「私の青春時代そのものだね…この【涙のリクエスト】は…!」
みゆきさんに話したのだ。
みゆきさんは、
「木嶋さんと一緒に、青春時代の思い出があるのですか?」麻美に聞いてみた。
麻美は、
「みゆきさん、木嶋君と一緒に青春時代を過ごしていたら…お互いが違う人生を生きていたかも知れないと考えてしまう!同じ年代だからこそ…共感出来ることがあると思っているの!」みゆきさんに答えたのだ。
みゆきさんは、
「麻美さん。本当は…木嶋さんのことが好きなのではないですか?」麻美に伝えたのだ。
麻美は、
「みゆきさん、木嶋君には、【素敵な恋人…はるかさん】がいる

からね！」みゆきさんに話したのだ。
木嶋は、間奏の間に、携帯の着信履歴を見た。
一瞬…血の気が引いた。
はるかからの着信が、５回もあったのだ。
「はるかは、今日、富高さん、小室さんと一緒に、麻美さんのクラブ『Ｕ』に来ることは知っているのに何だろう？」困惑していた。
「あとで、電話をすればいい！」半ば開き直っていた。
サビの部分を歌い終え…
右腕を上に上げ、《グルグル》振り回している。
これが…
【涙のリクエスト】の《パフォーマンス》である。
最後まで歌い切り…一汗掻いた。
目の前のグラスには、焼酎の水割りが作ってあった。

第２８７話

木嶋は、驚いた表情を見せながら…
グラスを右手に持ち、焼酎の水割りを一口(ひとくち)飲んだ。
「汗を掻いたあとに飲むのはいいね！みゆきさん、ありがとう。」
木嶋は、みゆきさんにお礼を述べていた。
みゆきさんは、
「お客さんに喜んで戴くのが、私たちの仕事ですからね！」木嶋に話したのだ。
富高さんが、
「さゆりさん、自分も…歌いますよ。どちらで言えばいいのかな？」さゆりさんに問いかけていた。
さゆりさんは、
「曲名でお願いします。」
「了解しました。曲名は、サザンオールスターズの【みんなのうた】でお願いします。」富高さんは、さゆりさんに伝えたのだ。
みゆきさんは、
「サザンオールスターズの【みんなのうた】ですか…有名な曲ですよね！」富高さんに復唱して、右手にリモコンを持ち、入力した。
富高さんは、
「小室さんから流れで、自分も歌うことになってしまいましたが…3曲続けて歌っていいのかな？」さゆりさんに尋ねていた。
さゆりさんは、
「他のお客さんが歌わないのですから…気にすることないですよ！」富高さんに答えていた。
サザンオールスターズの…
【みんなのうた】のイントロが流れてきた。
富高さんは、慌てるそぶりもなく…落ち着いていた。
マイクを右手に握り締め…歌い始めた。

麻美が、
「木嶋君たちに、無理して歌わせているみたいで申し訳ない！」
木嶋に謝罪をしていた。
木嶋は、
「麻美さんが、謝ることないですよ！3人とも…人前に出るのは苦手…。下手でも、歌うのが好きだから…。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「そう言ってくれると嬉しいです。カラオケが嫌いな人がいるからね！そういう人に、お願いは出来ませんからね！」木嶋に話していた。
木嶋は、
「マイクを独占するのは良くないので…後は、他のお客さんに頑張ってもらいましょう！」安堵の表情を浮かべた。
麻美は、
「そうだね！木嶋君、一瞬…顔色が変わったよね？何か…あったの？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「麻美さん、何で…分かったの？」麻美に問いかけていた。
麻美は、
「それくらい分かります。木嶋君と、長い付き合いだし、分からなくてどうするの？」木嶋に問い詰めた。
木嶋は、
「仕方ない…麻美さんに話しますか？はるかさんから…何度も着信履歴があったのです！」
「私に気を使わず…すぐに、かけ直せば良かったのに…」麻美は、木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「さすがに無理ですよ。みんなで盛り上がっているのに…水を差すことは出来ません！今日、麻美さんのクラブ『U』へ飲みに行く話しはしてあります！たまには、はるかさんから解放されたいとき

もありますよ！」麻美に本音を伝えた。
「本当は…《毎日、はるかさんと一緒に居たい。》と話しをしているくせに…」麻美は、木嶋の心の中を透視（とうし）して話しているみたいであった。
麻美が、木嶋に言っていることは…正論（せいろん）である。
木嶋は、照れていた。
富高さんが歌い終えた。
さゆりさん、みゆきさん、麻美さん、小室さん、木嶋が拍手をした。
富高さんは、
「ありがとうございます！」麻美さんに話したのだ。
麻美は、
「富高君、カラオケ上手（じょうず）だね！密（ひそ）かに練習をしていたのでは…。」
富高さんに、ツッコんでいた。
富高さんは、
「練習なんかしていません！《歌番組》や《ＣＤショップ》などで聴いていれば…必然（ひつぜん）と覚えてしまいます！」謙遜（けんそん）しながらも、麻美に話したのであった。

第２８８話

小室さんが、
「木嶋…今、何時ぐらいになるんだ?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、左腕にしていた腕時計を見た。
「今…夜１１時を回ったところです!」小室さんに答えていた。
年齢的に老眼(ろうがん)がある。
暗闇(くらやみ)と言うより…クラブ『U』のライトが暗い。
【アナログの時計】を使用している…小室さんには、見えにくいのである。
木嶋は…
【デジタルの腕時計】を使っている。
使い方を熟知(じゅくち)しているので、暗くても、腕時計の機能に設置されている…
ライトを使えば、《ディスプレイ》を表示するのである。
「終電までは、時間は大丈夫か?」小室さんは、時間を仕切りに気にかけていた。
「終電までは…《ゆとり》があります。富高さんの《帰宅ルート》を考えないと…帰らないといけませんね～。」小室さんに答えながら…
「富高さん、どうしますか?」木嶋は、富高さんに訴(うった)えていた。
富高さんは、
「木嶋君、ここを…何分後(なんぷんご)ぐらいに出ればいいのかな?」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「およそ…１０分～１５分ぐらいかな?」富高に話したのだ。
富高さんも、どうするかを決めかねていた。
今、最高に楽しいひとときを過ごしている…。
麻美やさゆりさん、みゆきさんに、後(うし)ろめいた形(かたち)で帰宅したくな

いのは、誰の目から見ていても明白であった。
《ビジネスホテル》や《カプセルホテル》に泊まるのも、選択肢はあるが、木嶋も、富高さんも慣れていない…。
木嶋は、どんなに…夜遅くても、家に帰り、布団の中で《グッスリ》寝たい心境である。
富高さんも、思案をしていた。
「自分は、クラブ『U』に残って飲んで行ってもいいし…どこかの《カプセルホテル》か？《ビジネスホテル》に泊まっても良いかなと考えてもいるよ！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「富高さんを、クラブ『U』に残して行ってもいいが…それは不安が付き纏ってしまう。麻美さん、この周辺で《ビジネスホテル》などはあるのかな？」麻美に聞いていた。
麻美は、
「クラブ『U』の近くにはないですが…《横浜スタジアム周辺》ならありますよ！」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「富高さん、どうしますか？」富高さんに問いかけた。
富高さんは、
「どこかに泊まりますよ！」木嶋に話したのであった。
小室さんは、
「富高…明日、会社休みか？休みなら…自分の家に泊まればいいよ！」富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「自分は、明日、仕事は休みですが…小室さんの自宅に泊まったら迷惑ではないですか？」小室さんに答えた。
小室さんは、
「迷惑なんかないぞ！終電を気にするよりも、気楽だぞ！」富高さんに話したのであった。
富高さんは、

「小室さんの言葉に甘えて、そうしようかな？お願い出来ますか？」小室さんに答えたのだ。

小室さんは、

「翌日に、精算してもらいます！１泊（はく）２食で１５００円で…なんてね！」富高さんに伝えたのであった。

富高さんは、苦笑いを浮かべて…顔から安心感が漂っていた。

木嶋は、

「これで、話しが纏（まと）まりました。最終的に、クラブ『Ｕ』を午後１１時３０分にチェックを入れて下さい！」麻美にお願いをした。

「ＯＫです。チェックを午後１１時３０分に入れますね！」麻美は、木嶋の意見に快（こころよ）く賛成したのだ。

第２８９話

木嶋は、
「麻美さん、チョット…外に出てきていいですか？」麻美にお伺いを立てていた。
麻美は、
「誰に電話をするの？」木嶋を突いていた。
木嶋は、
「はるかさんにですよ…！」麻美に伝えた。
麻美は、
「何だかんだと言っても…木嶋君は、はるかさんが中心なのね？」
嫉妬（ジェラシー）になりながらも、木嶋を奥の席から立たせたのであった。
女性の嫉妬ほど怖いものはない。
麻美にしても、はるかにしても、木嶋を独占しようと…強烈さがないのが救いであった。
木嶋は、クラブ『Ｕ』のドアを開けて…
エレベーターホールに出て行った。
「はるかは、怒っているのかな？」内心（ないしん）…恐怖を感じていたのも否定は出来ない。
「麻美さんに、怯えているのかも…？」頭の中で不安が過（よ）ぎり、精神的（せいしんてき）に参（まい）っていた。
木嶋は、携帯の着信履歴から…はるかの番号を検索して発信。
「プッ、プッ、プッ、プルー」と鳴っている。
はるかが電話に出た。
「もしも～し。はるかです。」
「木嶋です。すいません…何度も着信があったのに…気が付きませんでした。申し訳ない。」木嶋は、電話口（でんわぐち）で謝罪していた。
はるかは、
「木嶋さんが、電話に出れないのは仕方ないと思います。それだ

け…麻美さんの店で楽しく過ごしているんだなぁ～と…ね。」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「今日は、珍しく…富高さんがノッテいるんだ。《カラオケ》を気分良く歌っていたよ！」はるかに話したのだ。

はるかは、

「へぇ～…富高さん、《カラオケ》を歌うんですか？私がいた店は、《カラオケ》を歌えませんでしたからね！」不思議そうに、問いかけていた。

木嶋は、

「今回は、その場の流れで歌わないといけなかった…と、言った方が正解かも…。」はるかに答えていた。

はるかは、

「雰囲気に呑まれてしまったと…解釈した方がいいのかな？」木嶋に尋ねた。

木嶋は、

「そうだね！」はるかに話したのだ。

はるかは、

「木嶋さんも、歌ったのですか？」木嶋に聞いていた。

「えぇ～歌いましたよ！今のところは、一曲だけですが…富高さんも、同じですよ！」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「木嶋さん、機会があれば《カラオケ》に一度行きましょうよ！」木嶋に聞いてみた。

木嶋は、

「うん。いいよ！お互いが時間を取れるときに、《カラオケ》に行きましょう。」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「わ～い。近いうちに実現出来るようにしますね？もうすぐ…麻美さんの店から帰るのですか？」

「もうすぐ…帰りますよ！富高さんは、終電で帰ろうと話していたのですが…同じ会社の先輩が、自分の家に泊まれ≫って…話していて、それなら…言葉に甘えて…と。」木嶋は、はるかに話したのだ。

はるかは、

「富高さん、自宅は千葉の船橋ですよね…？会社の先輩の家に泊まることになったなら安心です！木嶋さん、今度、会うときに、麻美のクラブの雰囲気などを…教えて下さい！」木嶋にお願いをした。

木嶋は、はるかの頼みを断り切れず…

「了解しました。」と、苦笑いをしていた。

はるかは、

「木嶋さん、おやすみなさい。」木嶋に伝え、

木嶋は、

「はるかさん、おやすみなさい！」と返事を返し、電話を切ったのだ。

携帯の画面の時刻を見た…

「もうすぐ…帰らないと…。」ボヤきながら…

クラブ『U』のドアを開けたのであった。

第２９０話

木嶋は、
「麻美さん、そろそろお願いしますね！」麻美に伝えて、席に戻った。
麻美は、
「もう…そんな時間なの？帰ってしまうの？」淋しそうな眼差しで、木嶋を見つめていた。
その表情を見た富高さんは、
「木嶋君、まだ…最終の電車までは、時間に余裕はあるのかな？」
麻美を擁護するように、木嶋へ問いかけていた。
木嶋は、
「最終電車までは…あと４０分くらい平気かな？ただ、このビルに、電波が入れば携帯で確認をします。どうするかは、富高さんと小室さんの判断に委ねます！」会社の先輩である…小室さんと、富高さんに結論を出すように促していた。
いつもなら、木嶋の一存で決めるが…下駄を預けられた形になった小室さんは、
「富高は、どうする？」富高さんの意見を聞いていた。
富高さんは、
「自分としては、あと４０分…時間があるなら、まだ飲んでいたいですね！」小室さんに答えた。
小室さんは、左腕にしていた腕時計を目を細めて…時間を確認していた。
「富高がいいなら…そうしよう！え～と…今、１１時３０分になろうとしている。１２時に帰ろう！そうしよう！」木嶋に話していた。
木嶋は、
「小室さんの意見に従います。」小室さんに伝え、

「麻美さん、度々（たびたび）申し訳ない…。１２時で、チェックして下さい。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「木嶋君、富高さん、小室さん、ありがとうございます。」木嶋、富高さん、小室さんにお礼を述べていた。
さゆりさん、みゆきさんも、
「ありがとうございます。」口を揃えて、頭を下げていた。
木嶋が気になっていたのは…クラブ『Ｕ』の閉店時間である。
ほとんどの店は、午前０時に閉まる店が多い。
午前１時に閉まると、電車で店に勤務している人がいると思っていた。
「麻美さん、クラブ『Ｕ』の閉店時間は、何時なのかな?」麻美に尋ねていた。
麻美は、
「閉店時間は、午前０時ですよ!」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「ここにいる…さゆりさん、みゆきさんたちは、電車で来ているのかな?」みゆきさんに問いかけていた。
みゆきさんは、
「私たちは、ここのスタッフの人が近くまで、送迎してくれるので、大丈夫ですよ!」木嶋に話していた。
木嶋は、
「それならいいんだ。電車なら着替えたりしないといけないと思っていたので…」みゆきさんに伝えたのだ。
みゆきさんは、
「木嶋さんは、優しいのですね!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「いや～。そんなことないですよ。当たり前のことをしただけです!」みゆきさんに答えていた。
麻美は、

「それが、木嶋君の愛情だね！」木嶋に話し、
「そろそろ…チェックを入れましょう。」近くにいた女性スタッフを声をかけた。
女性スタッフが、麻美の元に歩いてきた。
麻美は、耳打ちしながら、女性スタッフが頷いていた。
5分後…伝票を麻美に預けた。
麻美は、
「木嶋君、お待たせしました。」木嶋に伝票を渡した。
木嶋は、ポーカーフェイスを装いながらも、内心は、金額を見るのが怖い。
恐る恐る伝票を見た。
「予想の範囲内です。」麻美に話していた。
麻美は、
「少し…金額が出たね！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「まあね！」苦笑いをしていた。
「木嶋君、いくら出せば良いのかな？」富高さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「一人…1万円でいいよ！」富高さんに話し、
「小室さん、1万円ね！」小室さんに、念押しした。
小室さんも、富高さんも、財布からお金を取り出し、木嶋に渡した。
木嶋は、
「麻美さん、これ…お願い。」お金を麻美に預けたのだ。
麻美は、
「ありがとうございます！」木嶋にお礼を述べた。
木嶋は、
「富高さん、小室さん、行きますよ！」席を立つように促していた。

富高さんが、先に席を立ち、小室さんも、立ち上がった。
麻美が、クラブ『U』のドアを開け、エレベーターにエスコートした。
木嶋、富高さん、小室さん、一歩遅れて…さゆりさん、みゆきさんもエレベーター乗った。
エレベーターが1Fに着いた。
麻美は、
「木嶋君、富高さん、小室さん、今日は、ありがとうございました!」感謝の言葉を伝え、
富高さんは、
「麻美さん、今日は、楽しかったですよ!また、来ます。」麻美に話したのだ。
木嶋は、
「麻美さん、辞めないようにね!」麻美に問いかけ…
麻美は、
「頑張ります。」木嶋に答えた。
木嶋は、その言葉に安心して、関内駅に向かって歩き出したのであった。

第２９１話

歩き始めて…すぐに大通りへ出た。
木嶋、小室さん、富高さんは、関内駅方面に歩いていた。
クラブ『Ｕ』に来るときも、ビル風で寒さに震えていたが、帰るときは、一段と冷え込んでいた。
《寒いな～》
木嶋は、ボヤきながらも、背負っていたリュックから黒の皮の手袋を取り出した。
手袋を両手にはめ…。
駅に着き、切符売り場で、料金表で金額を確認していた。
「えっ…と、最寄り駅までは、２１０円か…」
木嶋は、Ｇパンのポケットから小銭を出し、自動販売機に投入した。
もちろん、切符は、１枚ではなく…３枚購入した。
購入した切符を、小室さん、富高さんに渡した。
「木嶋、悪いな！」小室さんが話し、
富高さんも、
「木嶋君、悪いね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「これくらい当たり前ですよ！」小室さん、富高さんに答えたのだ。
「そうだな！今日は、木嶋の顔を立てたからな…」小室さんが、ほろ酔い状態で、木嶋に話していた。
改札を通り、階段を上り、京浜東北線のホームに着いた。
「木嶋君、今日のクラブ『Ｕ』は楽しかったよ！」富高さんは、嬉しそうに木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「ゆっくり出来なくてゴメンね！有意義な時間を過ごせたと思い

ますよ。小室さんは如何だったのでしょうか？」小室さんに問いかけていた。

小室さんは、

「そうだな！なかなか…雰囲気の良い店だったぞ。木嶋や富高の2人…憩いの場にするのは、もったいない。会社で、若い女性と話す機会もないから、気分転換になって良かった！今度、1人で来ようかな？」木嶋を悩ます発言をしたのだ。

木嶋は、

「それは困りますね！自分と富高さんの隠れ家なんで…あまり荒らさないで下さい。普段、小室さんから褒められることがないから許しましょう。」苦笑いを浮かべ、小室さんに答えていた。

小室さんは、

「たまには…木嶋を褒めないと…な！その後は、《ズドッ》と、褒め育てるのも教育だ！」木嶋は、その会話を聞いたとき…

『ズルッ』…と、こけてしまった。

電車が、ホームに入ってきた。

【週末の金曜日、最終電車に乗車する人は、少ないのではないか？】

そう…甘く考えていた…木嶋は、乗車している人数を見て、

「こんなにいるのか…？」驚きを感じずにいられなかった。

「結構、終電を利用している人が多いね！」富高さんが、木嶋に話していた。

木嶋も、

「関内は、麻美さんのクラブ『U』、玲さんのクラブ『O』に行くが、終電前に、毎回、帰宅しているから、こんなに混むなんて思っていなかったよ！」富高さんに答えていた。

木嶋、小室さん、富高さんは、電車に乗った。

まだ、季節は、冬である。

みんな…ほろ酔い気味で、電車の中で暖房が効いていて、眠りそうな気配である。

小室さんは、
「自分が、若いときは、終電じゃないが…終バスに乗り遅れたことが数多かったぞ！木嶋に、そんなことは、一度もないだろう？」
木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「一度だけ…危(あや)うく乗り遅れる寸前(すんぜん)はありますよ！」小室さんに伝えた。
富高さんは、
「木嶋君でもあるの？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「前に、半年間…他の会社へ生産応援で行ったが、電車の暖房が効いていて途中で寝てしまい、終点の品川駅で車掌(しゃしょう)さんに起こされ、《ヤバイ》と、すぐに京浜東北線に乗り、自分の降りる駅の１つ前で止まってしまい、３０分並んでタクシーで家まで帰宅したのがありますよ！」富高さんに話したのであった。

第２９２話

小室さんは、
「木嶋に、そんなことはないと思っていたから…意外な一面を覗(いちめんをのぞ)いたよ。」木嶋に答えていた。
富高さんは、
「そうだよね。木嶋君らしからぬ行動だね…逆に言えば木嶋君らしく感じるよ！」
「富高さんや小室さんが言うとおり…自分でも…自分らしいと思っていたよ！」木嶋は、富高さんに話したのだ。
電車のドアが開き…
木嶋、富高さん、小室さんは、短い３人掛けシートに、座ろうとしたが、さすがにキツく感じたため、木嶋が１人で反対側のシートに座った。
長い７人シートでも良かったが、最終電車と言うこともあり、遠慮(えんりょ)していた。
関内駅から木嶋、小室さんの最寄り駅までは、２０分ぐらい掛かる。
「次は、桜木町…桜木町…です。」車内アナウンスが聞こえていた。
「桜木町から人が多く乗ってくるかな？」富高さんが、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「どうだろうね？週末だし、みなとみらいで遊んでいる人たちが、大勢(おおぜい)いるんじゃないかなと思うよ！」富高さんに答えていた。
小室さんは、
「木嶋、みなとみらいに遊びに行ったことはあるのか？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、

「最近、みなとみらいに遊びに行ったことはないね！遊ぶ場所なら…《ランドマークタワー》、《ワールドポーターズ》、《コスモワールド》なんかありますよ！小室さん、何故？そんなことを聞くのですか？」小室さんに問いかけていた。

小室さんは、

「自分だって…みなとみらいに興味があるぞ…それが、たまたま…行ってみたいとなったんだ！」木嶋に答えていた。

木嶋は、

「本当に…そうなの？なんか…怪しい？誰かと行くために…聞いたんじゃないの？」小室さんに疑っていた。

小室さんは、

「何でもないよ！」木嶋に答えつつも、顔が強張っていた。

その表情を見たとき、木嶋は、確信めいたものがあった。

それは、小室さんが、働いている職場で、同じくらいの女性がいる。

どうやら…小室さんは、その人と交際をしているみたいであった。

人を好きになることは悪いことではない。

事実、木嶋も、はるかと、交際していることは、麻美や玲、富高さんも知っていることである。

本音を言えば、若い人たちが遊ぶ場所…

年配の人たちが遊ぶべるのかな？と疑問を抱いていた。

何処かに遊びへ行くのに年齢は関係ないと思っている。

年齢を重ねると、遊びに行くより、飲んでいた方がスッキリする。

だからこそ…話しが合うのだ。

桜木町駅に止まり、人が乗車してきた。

乗る人数は、マバらであるが、それなりに…各車両に座っている。

「この分だと、横浜駅でもいるね！」木嶋は、反対側に座っている富高さんに話しかけた。

富高さんも、小室さんも、いつの間にか…寝ていた。

「電車の中は、暖房が効いているから仕方ない！」1人で呟いて

いた。

「間もなく…横浜。横浜です！」

電車が、横浜駅に到着。

「桜木町より、人がいるな！」木嶋は、驚いていた。

どの人も、赤い顔をしている。

中には、千鳥足（ちどりあし）の人もいる。

「あそこまで、酔っ払ってみたいな！」そう思っていた。

「最寄り駅まで、あと…４駅。早めに席を立って、小室さんと、富高さんを起こさないといけないな！」木嶋は、自分に言い聞かせていた。

最寄り駅より、２つ前で席を立ち、小室さんたちが座っているシートに歩いて行く。

「富高さん、もうすぐ着きますよ！」耳元（みみもと）で囁（ささや）いた。

第２９３話

富高さんは、
「あっ…木嶋君。今、どの辺りなんだろう?起こしてくれてありがとう。」木嶋に話していた。
木嶋は、
「今、最寄り駅から一つ前ですよ。グッスリ寝ていたから起こさないで、そのままにしようかな?と…一瞬、考えていたよ!」富高さんに答え…
「小室さんも、起こさないと…!」
「小室さん、もうすぐ着きますよ。」小室さんの右肩を揺すり起こしたのだ。
小室さんは、
「あ～良く寝ていたな!今、何処(どこ)だ。」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「一つ前です。あと5分で最寄り駅に着きますよ。」小室さんに話したのだ。
「富高は…どうした?」小室さんが、木嶋に問いかけていた。
「もう…既(すで)に起きて、新聞を読んでいますよ!」
電車が、
「ガタン、ゴトン」鉄橋(てっきょう)を渡る音が聞こえる。
鉄橋を渡ったら、降りる準備をしないといけないのだ。
小室さんも、富高さんも、飲み過ぎているからなのか…立つのがやっとであった。
「電車の中は、暖房が効き過ぎているぞ!」小室さんが、木嶋に話しかけたのだ。
木嶋は、
「少し、暖房が効き過ぎているね!」小室さんの意見に同意をしていた。

「間もなく…最寄り駅に着きます。どなた様も、お忘れ物のないようにお願い致します。」車内アナウンスが聞こえていた。
見慣れた景色が見えている。
酔っ払っていると、降りる駅を間違えてしまうときがある。
木嶋が、通勤する時間帯の中で、横浜駅を危うく…降り過ごしてしまいそうな乗客が、稀にいる。
誰でも、下車する駅の手前で、反射的に身体が反応してしまう。
木嶋も、降り過ごしてしまいそうになったことは、何度もある。
電車の中で、寝るのが日課になっている人も少なからずいる。
そんな木嶋も、毎日、電車の中で寝ていた。
平均睡眠時間は、５時間３０分ぐらいだが、最近は、寝足りないのか…？
相鉄線の乗り換え駅から会社の最寄り駅まで寝ていたが、今では、相鉄線に乗ったときから寝てしまうのだ。
最寄り駅に到着した。
木嶋と、富高さんは、目の前の階段を一段ずつ上がって行く。
小室さんは、右膝が悪いので、手摺りに掴まり、階段を上がっていた。
最寄り駅は、エレベーターが設置されていないので、身体が不自由な人には、つらい。
これからは、【バリアフリー化】、【エレベーター】、【エスカレーター】の設置が増えていくのを期待するしかないのであった。
富高さんは、
「木嶋君、乗り越し精算はしなくて良いのかな？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「乗り越し精算しなくても大丈夫ですよ！」富高さんに答えたのだ。
改札の手前で、小室さんが、何やら探し物をしていた。
富高さんが、

「小室さん、何をしているのですか?」小室さんに聞いていた。
小室さんは、
「キップを探しているんだ。」富高さんに話したのだ。
富高さんは、
「木嶋君、小室さん、キップがないみたいだよ!」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「関内駅を出るときに、財布にしまっていたよ!」小室さんに話したのだ。
小室さんは、
「財布の中か…?」ボヤきながら…
カバンの中から財布を取り出した。
「キップ…。キップ…。あった。」小室さん、声を出した。
富高さんは、
「木嶋君、キップが見つかったみたい。」木嶋に報告した。
木嶋は、
「キップがなかったら…どうしようかと…思ったよ!」富高さんと、小室さんに伝えたのだ。
改札口を出た、木嶋は左へ…。
小室さん、富高さんは、右へ…別れ、それぞれの家に帰宅したのであった。

第２９４話

富高さんたちと、麻美のクラブ『Ｕ』で、一緒に飲み騒いでから一週間が過ぎようとしていた。

木嶋は、相変わらず…はるかと会うのを、心待ちにしている。

【こんな生活が、いつまで続くのだろうか？】気持ちとは裏腹に、分かり予ていた。

麻美は、時間を見つけ…電話をするたびに…

「木嶋君、いい加減に…はるかさんから離れた方がいいよ！それが、ベストな選択だと思うよ！」盛んに、忠告をしている。

【馬の耳に念仏】と言う諺があるが、今の木嶋は、正しく…その状況に陥っていると言っても過言ではなかった。

毎朝、スポニチを【ＫＩＯＳＫ】で購入して、電車の中で読み、会社で、一日の仕事を終え、ロッカールームで、私服に着替えている…。

何の変化もない…

いつもと変わらない毎日…。

携帯を見つめ…

《フー》と、ため息が漏れてしまう。

携帯が、

「ピローン、ピローン、ピローン」けたたましく鳴り響いていた。

この着信音は、はるかである。

着信を待ち焦がれていた木嶋は、着替えていた手を止め、電話に出た。

「もしもし、木嶋ですが…」

「私、はるかです！木嶋さん、今…どちらですが？」はるかが、木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「今、会社のロッカールームで着替えをしているところです。」

はるかに伝えた。
はるかは、
「私、今…横浜にいるのですが…木嶋さん、今日…時間を取ることが出来ますか？久しぶりに会いたいです。」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、戸惑いながらも、
「うん。いいよ。最近、はるかさんの顔を見ていないからね！会社からだと…1時間ぐらいかかります。待つことが出来ますか？」
はるかに聞いていた。
はるかは、
「うん。いいですよ！高島屋とかで…≪ウィンドウショッピング≫をしていますね！横浜に着いたら連絡をくれますか？」電話をして戴けるように…木嶋に話していた。
木嶋は、
「分かりました。横浜に着いたら連絡をします。そのときに、待ち合わせ場所を決めましょう？」はるかに話し、電話を切ったのだ。
着替えを素早く終えた。
その動作は、いつになく軽快である。
周りにいる人たちが、不思議そうな表情で、木嶋を見つめていた。
会社の送迎バスに乗った。
会社から最寄り駅までは、およそ…10分ぐらいである。
木嶋には、最寄り駅まで着く時間が、はるかと待ち合わせ場所を決めるのに、有効活用出来るのだ。
相鉄線の中では、夕刊紙を読むのを日課にしていた。
なぜなら…世界は、一分一秒…刻一刻と、時間を刻み続けている。
情報も、絶え間無く…発信している。
掴んだ情報を、取捨選択をするのも、自分自身であるのだ。
携帯からも情報を得ることが出来る！
送迎バスが、最寄り駅に着いた。
階段を下り、コンビニに向かった。

いつも読む…夕刊紙を手に取り、レジで会計を終え、相鉄線の改札口に歩いて行く。
改札を通り、階段を下りていたときに…
「ピローン、ピローン、ピローン」と、携帯が鳴っている。
木嶋は、電話に出た。
「もしも～し。木嶋ですが…。」
「はるかです。木嶋さん、横浜に着くまで、まだ…時間掛かりますよね?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「まだ、時間が掛かりますね!どうしてですか?」はるかに尋ねたのだ。
はるかは、
「見たい店がたくさんあり過ぎて…私が、間に合うか心配です?」
木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「どれかに絞らないと…あと…３０分は掛かります!」はるかに答えたのであった。

第２９５話

はるかは、
「あぁ～。木嶋さん、待ちくたびれちゃったなぁ～。早く来て下さい！お願いします！」木嶋に嘆願していた。
木嶋は、
「そう言われましても…自分も、はるかさんに早く会いたいのは…山々（やまやま）ですが、魔法使いではないので、どうすることも出来ませんよ！」少し、畏まった話し方で、はるかに答えていた。
はるかは、
「木嶋さんが、魔法使いなら、私のいる場所に来ていますよね？分かりました。いつものコーヒーショップ『Y』でお待ちしていますね！横浜駅に着いたら、《速攻ダッシュ》で来て下さい！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「分かりました！横浜駅に着いたら、《速攻ダッシュ》します。」と答え、電話を切ったのだ。
ふと…感じたことは、
アニメの《ドラえもん》の世界ではないが…
こんなときに…
【どこでもドア】が欲しいくらいである。
【どこでもドア】とは…
《ドラえもん》の四次元ポケットかは出す、ひみつ道具。
自分が行きたい場所を言えば目的地に着く…。
会社に遅刻しそうになったときや、デートの約束に遅れそうなとき…
《わずか…一秒》
その場所まで行かれるので、便利な道具だと思うのであった。
誰か？【有能な科学者】、【技術に優れている…日本の企業】、

【世界中の科学者】たちが開発して、市販化(しはんか)…
発売出来ないものだろうか？と考えてしまうときがある。！
【タイムマシーン】、【タイムテレビ】も同じことだと思っていた。
未来を、誰でも…夢見ることは、素晴らしいこと。
結論を変えられる可能性さえも秘めている。
過ぎ去ってしまった歴史を、変えることは不可能である。
今の段階で、それが出来るなら、はるか、麻美、玲、富士松さんとの未来を、木嶋は見てみたいと…。
全員とも別れていることもあるし、今と同じ…変わらない状況が続くかも知れないのだ！
相鉄線に乗り、いつもと同じ車両に座り、夕刊紙を広げていた。
疲れが溜まると、帰りの電車の中で寝てしまうこともある。
今は、はるかと久しぶりに会えると思うと、疲れも吹っ飛んでしまった。
缶コーヒーを飲みながら、夕刊紙の記事を読んでいた。
大きな事件、事故もなく…平穏な毎日。
携帯を取り出し、はるかの写メを見つめていた。
木嶋の携帯に、唯一(ゆいいつ)…保存してある一枚。
携帯を機種変更をしたときに、テストをしたいと…はるかに話し、はるかが、気軽に応じてくれた。
携帯の待受画面(まちうけがめん)に設定をしよう…と考えたこともある。
飲み会に出かけたときに、同期や会社の同僚たちに見せびらかすつもりもない。
見たいときに、保存データーを呼び起こして見るのもいいかな？と思い、そのままになっている！
受信メールボックスから、はるかのメールアドレスを探していた。
「はるかに、横浜に着くだいたいの時間を伝えよう。」
木嶋の優しさでもあった。
「はるかさん、今、会社の最寄り駅を出ました。横浜に到着する

のは、３０分後です。」メールを、はるかに送信した。
「はるかは、ウィンドウショッピングをしているのかな?」木嶋は、予想していた。
はるかの趣味は、買い物である。
買い物をすることで、ストレス発散(はっさん)している。
デートをしていると、お互いが時間に追われていて、ゆっくりする時間が必要だったのである。

第２９６話

木嶋を乗せた電車が、乗り換え駅に着いた。
小走りしながら、急行に乗り換えた。
「ここまで来れば、あと１０分ぐらいで着くかな？」期待感を持っていた。
はるかとは、随分、会っていない日があるなと感じていた。
木嶋は、空いていた座席に座り、背負っていたリュックを降ろし、リュックから黄色い手帳を取り出した。
「はるかと会ったのは…いつ以来だろう？」
《パラパラ》と、一週間分の予定表を、一枚ずつ戻しながら、確認していた。
「ラストインから2週間振りか…？」
木嶋には、2週間と言う時間の長さが、凄く気になっていた。
一日、２４時間なのだから、その１０倍プラス２４時間を４日を足さないと数字が出ないのであった。
その間（あいだ）、ポッカリと心の穴を埋めたのは、どんなことをしていたのだろう？
本屋で立ち読みをした回数が多かったかも知れない。
麻美は、
「木嶋君、別れなさいよ！」何度となく、警告を知らせるメールが来ていた。
木嶋も、我慢比べだと思う。
黄色い手帳をリュックに入れた。
電車が、横浜駅に着いた。
「やっと…横浜に来たか？」
毎日、横浜駅で乗り換えているが、さすがに、はるかと会うとなると…一段とテンションが上がる。
富高さんは、横浜や関内で飲むのが苦手である。

横浜、関内＝コストが高い。
木嶋も、同じだ。　携帯を取り、はるかの電話番号をスクロールした。
「プッ、プッ、プッ、プルー」呼び出し音が鳴っている。
なかなか…はるかが電話に出ない。
買い物に出かけていると、電話に出ないことがある。
それが、洋服を試着していると、尚更(なおさら)だ。
２０秒鳴らし続けても、電話に出ない。
「はるかとの待ち合わせ場所に行こう！」
木嶋は、コーヒーショップ『Ｙ』に向かった。
いつものように、ドアが開き、階段で２Ｆに上がる。
週末の金曜日なので、人が多くいる。
木嶋は、周りを見渡し、空いている座席を探していた。
今日に限って、柱の近くの席しかなかった。
「たまには、気分転換で、そこの席にしよう！」
リュックを置いた。
「いらっしゃいませ！」男性店員さんが、木嶋に声を掛けた。
木嶋は、
「あとから…1名来ますので2名でお願いします！」男性店員さんに答えていた。
男性店員さんは、
「畏(かしこ)まりました。」メニューを木嶋に渡し、席を離れて行った。
いつもと変わらず…メニューをめくっていた。
「ホットのアメリカンコーヒーとケーキセットにしよう！」これが、木嶋の定番である。
すかさず…右手を上げ、男性店員さんを呼んだ。
「ケーキセットでお願いします。」木嶋は、男性店員さんに伝えた。
男性店員さんは、
「飲み物は？」木嶋に尋ね…
木嶋は、

「ホットのアメリカンコーヒーでお願いします！」男性店員さんに伝えた。
男性店員さんは、
「少々…お待ち下さい。」木嶋に話し、離れて行く！
木嶋は、リュックから夕刊紙を取り出した。
「新聞を読むのが、日課になりすぎていて怖いな！何を変えないと…」自嘲気味にボヤいていた。
「そう言えば…何か…資格を取得しないと…」
どうしようかと…考えあぐねていた。
「今、何が必要なのか？先行きが不透明で読みづらい！色んな人の話しを聞いてみよう！」
木嶋は、携帯を右手に持ち、メモリーダイヤルから、誰に電話をしようかと悩んでいた。
聞き慣れた着信音が、
「ピローン、ピローン、ピローン」鳴り響いていた。
木嶋は、電話に出た。
「もしもし…木嶋ですが…」
「はるかです。木嶋さんが、今、横浜にいますか？」はるかが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「今、待ち合わせ場所にいますよ！」はるかに答えていた。
はるかは、
「分かりました。これから、向かいますね！」木嶋に伝え、電話を切った。

第297話

木嶋は、

「毎回、ケーキセットで、色んなケーキを食べているから…多少飽きも来ている…。今度、メニューを変えよう！」ある意味では妥協をしないといけないのかな？と思っていた。

はるかが、

コーヒーショップ『Y』に来るまで時間が掛かる！

木嶋は、待ちくたびれてしまうと、無性に帰りたくなってしまう。

横浜駅周辺に、コーヒーショップと言えば、『Y』と『ドトールコーヒー』しか見当たらない。

最も、木嶋自身が、歩き回らないいのも、一理ある。

今の流行りは、シアトル系の『スターバックスコーヒー』に代表されるように、色んなコーヒーショップが攻勢をかけてくるはずである。

その中で、生き残れず淘汰されて行く店も出てくる。

ファーストフード店は、価格競争が、より一層に、激しさを増して行くのかな？と…。

木嶋は、一面の見出しに依って、経済新聞を買うことがある。

小室さんが、読み終えた経済新聞をもらうこともある。

ヤフーのホームページにアクセスをして、今、何が起こっているか？リアルタイムで検索していた。

男性店員さんが、

「お待たせしました。」アメリカンコーヒーとケーキでございます。」木嶋のテーブル置いた。

木嶋は、

「ありがとうございます。」男性店員さんに声を掛けた。

シュガーを一杯、ミルクを入れながら、掻き混ぜていた。

ブラックで飲むのも悪くはないが、胃腸が良くないので、避けて

いる。
リュックから、小室さんからもらった経済新聞を広げ始めた。
すると、階段を…
「カッ、カッ、カッ」ヒールの音が聞こえてきた。
木嶋が振り向くと、はるかであった。
はるかは、手前にいる木嶋に気がついていない。
木嶋は、はるかに声を掛けずに、黙って意地悪チェックをしていた。
はるかが、携帯を取り出し電話を掛けた。
「ピローン、ピローン、ピローン」はるか専用の着信音が木嶋の携帯に鳴り響いていた。
「木嶋さん、どこにいるのですか?」はるかが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「すぐ、目の前だよ!」はるかに話し、電話を切ったのだ。
はるかは、
「木嶋さん、声をかけてくれればいいのに…」木嶋に、少し拗(す)ねたいた。
木嶋は、
「はるかさんが、《気がつくか?》意地悪チェックをしたのです。」悪戯(いたずら)ぽく…はるかに話していた。
「もう〜。意地悪チェックなんかして…」はるかが、木嶋に伝えた。
木嶋は、
「周りを見渡せば良かったのに…」はるかに答えていた。
「今回は、許(ゆる)します。次…同じことをしたら、怒りますよ!」はるかは、木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「分かりました…と」謝(やま)るしかなかったのだ。
はるかは、

「私も、木嶋さんを待たせ過ぎていたことは、反省をしています。」木嶋に頭を下げたのだ。

木嶋は、

「いつも、待たせ過ぎですよ!」思わず…本音が出てしまう。

「木嶋さん、先日…麻美さんのクラブ『U』に出かけたんですよね?何か?私のことで聞かれたのではないですか?」はるかは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「麻美さんに聞かれたよ!その前に、飲み物をオーダーしようよ!」はるかに声を掛け、近くにいた…男性店員さんに、右手を上げた。

男性店員さんは、木嶋の仕草(しぐさ)に気がついたみたいである。

第２９８話

男性店員さんが、木嶋のテーブルに歩いてきた。
「大変お待たせしました。ご注文をどうぞ…」
「スコーンとドリンクセットでお願いします。」木嶋は、男性店員さんに伝えた。
「飲み物は、何に致しますか？」
木嶋は、
「ホットロイヤルミルクティーでお願いします。」男性店員さんに話したのだ。
男性店員さんは、
「ご注文を承りました。少々、お待ち下さいませ！」木嶋の元を離れて行った。
はるかは、
「木嶋さんと会うのは、久しぶりですよね？どれくらい会っていなかったのかな？」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「そうだね！はるかさんの《ラストイン》以来だね！」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「あの《ラストイン》以来になるのですか？クラブ『H』のお客さんからは、《また…復帰して…》メールや電話が、毎日、頻繁来ます。私は、４月から社会人になるので、いい機会なので、新しく携帯を買い替えしようと考えています！」木嶋に相談を持ち掛けた！
木嶋は、
「何故？買い替えるの？」答えが見つからないまま…はるかに聞いていた。
はるかは、
「いつまでも、クラブ『H』を引きずりたくないのです。」強い

口調で、木嶋に思いをぶつけていた。
木嶋は、
「引きずりたくないのは、理解をするが、そうなると…自分との関係も終わりになるんじゃないの?」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「出会いは、クラブ『H』ですが…木嶋さんと別れることは考えていません!新しい携帯を購入したら、番号を教えます。そのときに、旧番号から切り替えて下さいね!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「分かりました。いつ…新しい携帯を買う予定なのかな?」はるかに尋ねていた。
はるかは、
「明日か…明後日には…買う予定です。」
「随分、行動が早いね!」木嶋は、苦笑いを浮かべ、はるかに答えていた。
「木嶋さん、携帯会社は…どちらですか?」はるかは、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「自分は、《ｖｏｄａｆｏｎｅ》を使っています。はるかさんは…どこを使っているのかな?」はるかに問いかけていた。
はるかは、
「今、使っているのは…《ａｕ》です。今度は、《ｄｏｃｏｍｏ》にしようかなと思っています!」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「携帯を新しくすると…メールアドレスも変わりますね!新しい番号が判れば問題ない。あとは、はるかさんが、機能など…比較して、決めればいいと思います。《ｄｏｃｏｍｏ》は、携帯では、トップ企業。通信エリアも幅広いからね!」はるかの意見に賛同していた。
はるかは、

「木嶋さんは、私のことを一番理解をしてくれていますね！うれしいです！ありがとうございます！」木嶋に伝えた。

木嶋は、

「携帯の《ｄｏｃｏｍｏ》のことは、客観的に見ても、当たり前のことだと…」はるかに話したのだ。

はるかは、

「木嶋さん、麻美さんに、新しい携帯になっても、番号を教えないで下さい！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「麻美さんに教えちゃあダメなの？」頭にクエスチョンマークが出ていた。

はるかは、

「だって…麻美さんが、私の新しい番号を知ったら、クラブ『Ｈ』のお客さんと縁が切れないじゃあないですか…」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「そうだよね！はるかさんに電話をしても繋がらないから、麻美さんの番号を知っている人が掛けるよね！最終的には、自分に電話が来るね！トボけましょう！」はるかに答えたのであった。

第２９９話

はるかは、
「麻美さんに、何だかんだと言い寄られても…教えないで下さいね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「分かりました。約束します！」はるかに答えたのだ。
男性店員さんが、先ほどオーダーした物を持ってきた。
「お待たせしました。スコーンとホットのロイヤルミルクティーです。」木嶋のテーブルに置いた。
その横に、小さな入れ物が置いてあった。
木嶋は、
「何だろう？」男性店員さんに尋ねた。
男性店員さんは、
「マーガリンとブルーベリージャムです！こちらを、スコーンにつけて食べるとおいしいですよ！」木嶋に答えた。
はるかは、
「ありがとうございます。」男性店員さんに伝えた。
男性店員さんは、
「ごゆっくり…寛ぎ下さい！」木嶋とはるかに伝え、その場を離れて行った。
木嶋は、
「はるかさん、ロイヤルミルクティーが好きだよね！以前から紅茶を飲んでいたの？」はるかに問いかけた。
はるかは、
「木嶋さんがコーヒーを好むように、私は、紅茶を飲むと精神的に落ち着きます！」
「そうなんだ。自分も、夏になると、ペットボトルの《レモンティー》や《ミルクティー》を飲みますよ！休み時間の間に飲み干し

てしまいますが…」木嶋は、苦笑いをしながら、はるかに答えたのだ。

「へぇ～。そうなんですか？意外と言えば意外ですね？」はるかは、木嶋の発言に驚いた様子で聞いていた。

その表情を見た木嶋は…

「夏に、《レモンティー》や《ミルクティー》を飲み出したのは、はるかさんと交際してからです！家族は、驚いていましたが…！」はるかに伝えた。

はるかは、

「私は、木嶋さんは、夏でも、コーヒーか？スポーツドリンクしか飲まないと思っていました。」

「自分が、仕事をしているエリアは、夏暑くて…冬は寒い。どうしても、夏は、【サッパリした飲み物】を飲みたくなりますよ！」木嶋は、はるかに伝えたのだ。

はるかは、

「先日、麻美さん、私のことで何か？言っていませんでしたか？」木嶋に尋ねていた。

木嶋は、

「麻美さんね…いつものように、はるかさんと別れた方がいいと言われたよ！」

「木嶋さんは、何て話したのですか？」はるかは、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「はるかさんと、何で…別れなきゃいけないの？と、麻美さんに話したんだ！」はるかに答えたのだ。

はるかは、

「そうしたら…」木嶋に聞いていた。

「木嶋君なら、はるかさんよりも、素晴らしい人とたくさん出会えるよ…とね！」木嶋は、はるかに伝えた。

「木嶋さんは、その言葉に、どう？感じたの！」はるかは、木嶋

に問い詰めていた。
木嶋は、タジタジになりながら…
「色んな人たちに、同じことを言われたが、今は、はるかさんでいい…その一言(ひとこと)です。」右手を差し延べ、はるかに答えたのだ。
はるかは、
「ありがとうございます！」木嶋に頭を下げ、
スコーンに、ブルーベリージャムをつけ…
ロイヤルミルクティーを一口(ひとくち)飲んだ。
木嶋は、
「麻美さんは、そこまで…木嶋君の意志が固いなら仕方ないね！と、諦(あきら)め顔(がお)になっていたよ！」はるかに伝えたのだ。
はるかは、
「いずれは来るからね！それまでは、いつまでも仲良くしていたいです！私のワガママを受け止めてくれるのは、木嶋さんだけですよ！」木嶋に話していた。
木嶋は、
「はるかさんと過ごしている時間が《最高なひととき》です。」
はるかに話したのであった。
はるかは、左手にしていた腕時計で時間を確認していた。
「木嶋さん、私、これから友達と会うので、失礼しますね！また、連絡します！」はるかは、席を立ち階段を降りて行く。
木嶋は、はるかの後ろ姿を目で追いながら、席を立ち上がり、会計を済ませ、横浜駅の改札を通り抜け、電車に乗ったのであった。

第３００話

木嶋は、短くても…
はるかと一緒に話しが出来て過ごせた時間が嬉しく思えた。
はるかからの放たれた…パワーを吸収、身体の疲れを飛ばしてくれる。
まさに、癒し系。
「はるかは、麻美さんに、嫉妬しているのかも知れない！そうだよな！元から、お互いが良いイメージを持っていない。」木嶋は、自分に自問自答を繰り返し、納得をさせていた。
考えてみても…
麻美は、【プロ】であり、はるかは、【アマチュア】である。
年齢を積み重ねている分…
麻美が一枚上手である。
はるかが、警戒をしているのは、その…年齢からくる経験の差である。
電車が、木嶋の降りる最寄り駅に着いた。
『プシュー』と、エアー音が響く。
ドアが開いた。
すると…携帯が…
「ピローン、ピローン、ピローン」と鳴り響いている。
はるかからの電話である。
木嶋が電話に出た。
「もしもし、木嶋ですが…。」
「はるかです。木嶋さん、先ほどはありがとうございました。」
はるかが、木嶋にお礼を述べていた。
木嶋は、
「どう致しまして…はるかさんと会えて、話しが出来たのが嬉しかったです。」はるかに伝えた。

はるかは、
「ありがとうございます。私も、木嶋さんと会えたのが良かったです。もう少し、時間があって話しが出来れば良かったのですが…！」木嶋に話していた。
木嶋は、目の前の階段を、
「ズッ、ズッ、ズッ」と一段ずつ上がって行く。
「仕方ないですよ！友達と会って…遊ぶのもね！大切なことですよ。」はるかの行動に理解を示していた。
はるかは、
「そうですよね！社会人になると、会議や接待で、友達や木嶋さんと会う機会が少なくなるのが、淋しいです。」木嶋に思いをぶつけた。
木嶋は、
「自分も、はるかさんと同じ気持ちです。その中で、お互いが時間を作れる環境（かんきょう）になればいいね！」はるかに答えたのだ。
階段を上り、改札を出た。
「木嶋さん、今、最寄り駅に着いたのですか？」はるかは、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「最寄り駅に着いて、改札を出たところです。」はるかに話したのだ。
はるかは、
「良かった！電車の中だった…どうしよう？と、一瞬不安（いっしゅん）でしたよ！」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「本当かな？」はるかに答えたのだ。
はるかは、
「本当ですよ！また、連絡しますね！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「は～い。それまでは、淋しいけど、前に撮った写メを見ますよ

！」はるかに答え、電話を切ったのだ。
「丁寧に、電話をして来なくてもいいのに…」木嶋は、そう思いながら、家までの道のりを歩いていた。
空を見上げると、綺麗な満月である。
星空も輝いて見えた。
いつになく、星の数も多い。
「自分の未来の奥さんに、誰がなるのだろう！」不安が胸を過ぎる。
木嶋は、寄り好みをしているわけではない。
女性の目線から見ると、スタイル抜群の人がいい。
ただ、バブル全盛の頃とは、女性の考え方が進歩している。
「何処かで何とかしないと…」焦りもある。
そう考えていたら…
家の近くになっていた。
「今は、はるかさんと交際して、何かを得られるものがあるはず…それをどこかで活かすように努力しよう！」木嶋は、そう…考えたのであった。

第３０１話

木嶋は、悶々（もんもん）とした毎日を送っていた。
それは、自分自身の決断力（けつだんりょく）のなさに…現（あらわ）れていた。
「はるかを取るか？富士松さんを取るか？」
永久（えいきゅう）に結論が出ない。
《はるかには、はるかなりの良いところがあり…》
《富士松さんには、富士松さんなりの良いところがある。》
一番、警戒をしているのは、どちらにも、本命がいたら…
木嶋の『ショック』は計（はか）り知れないと思う。
現実で言えば、富士松さんが…
【スタイル抜群（ばつぐん）何故、結婚しないのだろう？】
木嶋に分かるはずもない。
夏になり、大貫さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋、組合の文体リーダーをやって頂けないか？」
木嶋は、驚きながらも…
「えっ…文体リーダーですか？」大貫さんに問いかけながらも…
「引き受ける人がいなかったら…いいですよ！」大貫さんに伝えた。
大貫さんは、
「そのときは、頼むよ！」木嶋に話し、その場を離れていく。
木嶋は、この2週間前に、夢の中で、
「組合の文体リーダーの話しを引き受けてくれ…」
「まさか…自分に、そんな話しがあるわけない。」と、高（たか）を括（くく）っていた。
本来なら、引き受けるべきではないのかも知れない。
心の中で…葛藤（かっとう）が始まっていた。
今、引き受けても…
【貧乏クジ】を引いた気分になりそうである。

木嶋のポリシーに…

《引き受けるのが…人の道》そう…考えていた。

過去に、職場の代議員を何回か…引き受けたことはあるが、文体行事に、ここ数年…1年に1回ぐらいしか参加をしていないのが…不安な気持ちにさせてしまう。

職場の先輩や同僚の人たちと、飲む機会は多い。

逆に言えば、富士松さんと、会話も出来ない木嶋が、富士松さんと会話をするチャンスである。

また、会社の若い女性社員たちと交流もなければ、会話すらしたことがないのも、欠点である。

数日して、大貫さんが、再び、木嶋の元に歩いてきた。

「木嶋、9月から文体をまとめてほしい。」

木嶋は、

「分かりました。メンバーは何人までいいのですか?」大貫さんに問いかけていた。

大貫さんは、

「木嶋を入れて…6人。」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「自分は、若い女性社員を知りません。駄目元(だめもと)で良いので、富士松さんに、オファーを出して戴けないでしょうか?」大貫さんに頼んだのであった。

大貫さんは、

「分かった。もし、ダメだったら、自分たちに、人選(じんせん)は、一任(いちにん)してくれるか?」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「分かりました。」と、大貫さんに答えたのだ。

大貫さんは、

「今、現在で1人…決まっている!」木嶋に伝えたのだ。

木嶋は、

「誰ですか…?」大貫さんに問いかけていた。

「事務所で、糸魚川だ。」大貫さんが、木嶋に答えていた。
「糸魚川さんって…そんな名前の人は…いましたか?」木嶋が、大貫さんに聞いていた。
大貫さんは、
「木嶋の目の前にいるよ!」木嶋は、自分の目を疑った。
「木嶋さん、自分が糸魚川です!」元気な声で、木嶋に挨拶をしていた。
木嶋は、
「木嶋と言います。宜しくお願いします!」糸魚川さんに挨拶をした。
続けて…
「大貫さん、1人…自分の夜間高校の後輩をスカウトしていいですか?」大貫さんに問いかけていた。
大貫さんは、
「早急(そうきゅう)に…結論を出して…。」木嶋に話し、その場から離れたのだ。
その日の夕方…仕事を終えて、会社のバスに乗車した。
すると…メールの着信音が聞こえていた。
「誰だろう…?」
不安な表情で、メールを読んだ。
はるかからであった。

第３０２話

木嶋は、はるかからのメールを開いた。
「木嶋さん、お久しぶりです。今、どちらにいますか？」
この内容のメールは、はるかが横浜にいることを意味していた。
たまには、《スルー》して帰りたい気分でもあるが…
さすがに、そんな…冷たい仕打ちをすることは出来そうにない。
「今は、まだ会社です！これから残業をしてから帰宅する予定です！」はるかに、メールを送信した。
残業の始まりを告げる予鈴のチャイムが…
「キーン、コーン、カーン、コーン」と鳴っていた。
慌てて…作業エリアに戻り、携帯を、いつもの場所に入れた。
仕事をしているときは、携帯を持ち歩いていない。
現場作業をしていると、薬品などで故障をしてしまう。
自分の職場内で携帯を所持している人は、数えるくらいである。
年配の人も、持ち歩いているが、使い方が解らずに、四苦八苦（しくはっく）している。
残業を終えた…木嶋は、携帯を覗いた。
メールの着信を知らせる…サインがあった。
「何か…読むのが怖（こわ）い！」木嶋が、珍しく弱気になっている。
木嶋は、ロッカーに向かいながら、返信メールの内容を思案していた。
その状況の中で、
「はるかに、文体のリーダーの話しをするべきなのかな？」疑問心を抱きながら…
「来月から、組合の文体リーダーをやることになりました。」はるかに送信した。
左腕にしている腕時計で時間を確認している。
「まだ、午後7時を回ったばかりか…後輩の職場に行こう！」木

嶋は、勇んで歩き出した。
それだけ…気合いが入っている証拠である。
仕事場の階段を一段ずつ…上がって行く。
「田港、元気でやっているか？」木嶋が、田港に声を掛けた。
「先輩…珍しいね！自分の職場に来るなんて…何かあったの？」
田港さんが、木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「一度くらい…田港の現場に来ないと…！実は、話しがあるんだ。」田港さんに答えたのだ。
田港さんは、
「やっぱり…そんな気がしたんだ！話しは、何かな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「今度、自分は、組合の文体リーダーを引き受けることになったが…こちらの工場では、田港しか知らないんだ。引き受けてくれないか？」田港に伝えたのだ。
田港さんは、木嶋と、一年間…夜間高校で生徒会活動を一緒にやってきた。
また、自分の会社に入れたのも、木嶋であった。
田港さんは、
「先輩、マジで言っているの？」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「マジで話している…」田港に伝えた。
田港さんは、
「考える時間を下さい！」木嶋に話し…
木嶋は、
「分かった。急いでいるから…明日、回答を下さい。」田港に伝えた。
田港さんは、
「分かりました。明日、回答します。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、田港さんがいた現場をあとにした。
ロッカーに着き、着替えを終え、リュックを右肩に担ぎながら、送迎バスに向かって行く。
はるかから…メールが返ってこない。
「内容に関心がないのかな?まっ…いいか?」木嶋は、落胆(らくたん)の表情になっていた。
翌日…。
大貫さんが、木嶋の元に歩いてきた。
「木嶋、富士松さんから、《文体は無理》と回答があった。残念だが仕方ない。若い女性社員に、こちらからアプローチをしてみるよ。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「昨日も、話しましたが…富士松さんがダメな以上は、大貫さんに一任致します。」大貫さんに答えたのであった。

第３０３話

大貫さんは、
「木嶋は、仕事以外で、若い女性社員たちと交流することがないから、これを機会に接してみたらどうだ…？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「そうだね！大貫さんが言われる通りですね！飲み屋のお姉さんたちとは、話しをすることが出来ますが…会社の人たちと…どう？話しを展開していけばいいのか分かりません！」大貫さんに答えたのだ。
「木嶋は、背伸びしようとしないで、普通にすればいいよ！変に…格好つけようとするから…《おかしく》なるんだ！」大貫さんは、木嶋に問いかけるように話したのだ。
木嶋は、
「分かりました。貴重な《ご意見…》ありがとうございます。自分が、スカウトしたい人が、１人…いますので、明日、大貫さんに回答出来るかと思います。」大貫さんに答えたのであった。
大貫さんは、頷きながら…理解を示し…木嶋の元から立ち去って行った。
木嶋は、
「本当に…自分で大丈夫なのかな？」今だに、一抹の不安を抱えていた。
その日の夜…
木嶋の携帯が…
「プルッ、プルー、プルー」と鳴っている。
はるかの着信音は決まっているが…
その他の人たちは、同じ設定になっているので、携帯のディスプレイを確認してから出ないと、
【誰からの電話か？】判らないのである。

「誰かな?」
ふと…ディスプレイを見た。
田港さんからであった。
「先輩…今、話しをしても大丈夫かな?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「大丈夫だよ!」田港さんに答えた。
「今日のことなんだけど…」
「やっぱり…な!」木嶋も、薄々（うすうす）感づいていた。
何かあると…田港さんは、木嶋に相談をしていた。
携帯電話がない時代…
【どのように過ごしていたのだろう?】
そう…考えると…
携帯電話が発明…普及したのは、技術の進歩である。。
前は、木嶋の自宅に電話で、悩みなどを聞いたこともある。
それ以外は…と言うと…
1年に1回の年賀状の交換しかいていなかったために、近況が分からなかった。
田港さんが、若いときは、
良く…【辞める。】と発言をして揉めたこともある。
そのたびに…
当時の課長が、
「木嶋、田港が辞めたいと言っているが、何か心当たりはないか?」心配をして、木嶋の元に来たこともある。
木嶋は、
「田港さんなら、一過性の出来事と捉えています。慰留すれば大丈夫ですよ!それでも、ダメなら仕方ありません!」課長に答えていた。
課長は、
「分かった。慰留してみよう!」木嶋に話していたこともあった。
誰でも、追い詰められると…弱音を吐きたくなる。

木嶋も、何度…会社を辞めようと思ったことか…判らない。
「良く…考えたんだが…自分が、文体をやったら、周りの人たちに迷惑が掛かるんじゃないのかな?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「田港さん、迷惑なんてことはない。周りの人が何を言おうが関係ない。物事(ものごと)を《マイナス》思考で考え過ぎるのもどうかと思う…夜間高校のときは出来て、今は出来ないことはないはず…責任は、自分が取る。」田港さんに伝えた。
田港さんは、
「分かりました。頑張って見ます。」木嶋に答え、電話を切ったのだ。
ふと…我(われ)に返った。
「田港には、先輩としての立場(たちば)で言ったが…言っていることは間違っていない。自分が、大貫さんに話していたことと同じだ!」
【ハー】と、ため息が出てしまうのであった。

第３０４話

不安になり過ぎても…自分自身に自信が持てなくなってしまいそうである。

翌日…天気は、快晴。

気持ち良い朝である。

通勤電車の中で、スポニチを読みながら…

「田港さんは、急転直下で、ダメ出しをしないだろうか？」木嶋は、田港さんの心変わりが心配であった。

会社の最寄り駅に着き、通勤バスの中でも、そのことばかりを考えてしまう。

仕事を始まる前に…大貫さんが、溝越さんと一緒に木嶋のいる休憩場所まで歩いて来た。

「木嶋、今度…文体リーダーを引き受けたと、大貫さんから聞いたが…大丈夫か？」溝越さんが、真剣な眼差しで木嶋に尋ねていた。

溝越さんが、心配になる気持ちも理解が出来る。

同じ組合活動とはいえ…《職場の代議員》と《文体リーダー》では、責任の重さが違うのだ。

木嶋は、

「溝越さん、誰だって不安になりますよ！結果が全てですから…いい機会だと思い、頑張って見ます。」溝越さんに伝えた。

溝越さんは、

「そうだよな！何事も、チャレンジしないと…分からない。木嶋が、そこまで決意が固いなら言うことない。安心しているよ。肩肘張らず…普段と同じように頑張ればいいよ！」木嶋を激励した。

木嶋は、

「ありがとうございます。」溝越さんに答えたのだ。

大貫さんは、

「スタッフは、事務所の若い女性社員…2人と糸魚川。もう1人

は、自分の職場から選出する。あとは、木嶋の回答待ちだ。」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「昼休みに、後輩の現場に行き、回答をもらう予定です。分かりましたら、大貫さんの職場に伺います。」大貫さんに伝えたのだ。

仕事を始める前に、携帯を取り出した。

新着メールが、1通届いていた。

「はるかからだ！」

心持ち…嬉しくなっていた。

メールを開いた。

「木嶋さん、お久しぶりです。昨日のメールを読ませて頂きました。組合の《文体リーダー》なんて…どんなことをやるのだろうと…興味津々（きょうみしんしん）です。誰にでも出来ることではないと思います。スタッフの年齢層（ねんれいそう）が判らないので回答が出来ませんが…私と話しが出来るので大丈夫ですよ！」

木嶋は、

「はるかが賛成なら…これで、心配の種（たね）がなくなった！若い女性社員が、いくつぐらいか判れば、話しが出来るのに…」そう思いつつ…作業エリアに入った。

昼休みになり、食堂で食事を終え、田港さんのいる職場に向かった。

富高さんが、田港さんと同じ職場にいるのを、木嶋は知っていた。

木嶋は、

「富高さん、田港さんは…ここにいないの？」富高さんに尋ねていた。

富高さんは、

「田港君は、昼休み…ここには…いないよ！ロッカールームだと思うけど…」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「ロッカールームか…先ほど…見れば良かったな！富高さん、あ

りがとうございます！」富高さんに話したのだ。
ロッカールームの中に入り、田港さんを探した。
「あれっ…田港さんがいないな？どこに行ったのだろう？」
木嶋は、左の作業服のポケットから携帯を取り出した。
携帯が…
「プルッ、プルー、プルー」と鳴り出した。
「あっ…田港さんからだ！」
慌てて…電話に出た。
「もしもし…木嶋です。田港さんは、今…どこにいるの？」木嶋が、田港に問いかけていた。
田港さんは、
「今、先輩の職場に向かっているよ！」木嶋に答えたのだ。
木嶋は、
「分かった。これから、自分の職場に戻るから待ってて…」田港さんに伝え、走って職場に戻って行ったのだ。

第３０５話

田港さんが、木嶋の職場で待っていた。
木嶋は、
「田港さん、待たせたかな？」田港さんに声をかけた。
田港さんは、
「今、着いたばかりだよ！」木嶋に答えていた。
木嶋は、【ホッ…】と胸を撫(な)で下ろし…
「昨日の話しの答えに、変化はないな？」田港さんに問いかけていた。
「うん。大丈夫。先輩の頼みだから…断れないよ！」田港さんが、木嶋に伝えたのだ。
木嶋が、
「ありがとう。田港さん、これから一緒に行く場所があるからついて来てほしい！」田港さんを説得(せっとく)した。
田港さんは、不安になりながらも、
「どこに行くのだろう？」木嶋のあとを歩いていた。
木嶋が向かった先は、大貫さんの職場であった。
「大貫さん、自分の夜間高校の後輩…田港さんです。」木嶋が、大貫さんに田港さんを紹介していた。
大貫さんも、田港さんと会うのが、これが初めてである。
「木嶋、学校の後輩を連れて来て…どうしたんだ？」大貫さんが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「田港さんは、来期、自分と文体をやります。」大貫さんに伝えたのだ。
大貫さんは、
「田港って…紹介されたが、職場はどこなんだ？」田港さんに聞いていた。

田港さんは、
「燃料タンク班です。」大貫さんに答えた。
大貫さんは、
「燃料タンク班か…？文体行事に参加したことがあるか？」田港さんに聞いていた。
田港さんは、
「今まで、一度もないですよ！」
「大丈夫か？」大貫さんが、真剣な眼差(まなざ)しで、田港さんに伝えた。
木嶋は、
「大丈夫だと思います！」大貫さんに太鼓判(たいこばん)を押した。
大貫さんは、
「木嶋が、そう話すなら信じるよ！田港、よろしくな！あとは、任せたぞ。」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「ありがとうございます。」大貫さんに、感謝の言葉をかけ…田港さんと一緒に職場をあとにした。
木嶋は、田港さんの職場へ一緒に歩いて行く。
「先輩。大貫さんは、組合の役員なの？」田港さんは、木嶋に問いかけた。
木嶋は、
「組合の文体担当役員だよ！何で…？」田港さんに聞いていた。
田港さんは、
「何か…怖い印象だよ！」
「田港さんが、そう感じるのも無理はないか…！大貫さんは、仕事には厳しいよ。」木嶋は、田港さんを諭(さと)すように話していた。
「文体メンバーは、全員で何人なの？」
「事務所の人が3人、現場の人が3人の合計6人だよ！」木嶋が、田港さんに話したのだ。
田港さんは、驚いた口調(くちょう)で…
「えっ…6人もいるの？」木嶋に尋ねたのだ。

木嶋は、
「組合の規模で、この人数が適正か？どうかは分からない。多すぎても、自分では、まとめきれないよ！」偽ざる本音が出ていた。
「そうだよね！自分たちがいた夜間高校は、人数が、一学年上がるたびに、減って行くから…先輩の気持ちも理解が出来るよ！」田港さんは、木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「結果は、あとから着いてくるからね！悪かったら…リーダーの自分が責任を負えばいい！」田港さんに伝えたのだ。
田港さんは、
「先輩…頑張ろうね！」木嶋を勇気づけた。
背中を押された木嶋は、
「お互い、頑張ろう！初会合の日にちが分かり次第…田港さんに連絡をします。」田港さんに報告した。
田港さんは、
「連絡を待っているね！」木嶋と別れ、職場に戻って行った。

第３０６話

「フー」と、ため息が出た。
「やれやれ…」ボヤきながらも…その日の仕事を終えた木嶋は、大貫さんのいる職場に歩いて行く。
大貫さんは、椅子に座り、パソコンで入力作業をしている…。
「大貫さん、事務所の女性メンバーは決まったの？」大貫さんに問いかけていた。
大貫さんは、
木嶋は、
「決まったみたいだぞ！」木嶋に答えたのだ。
「良かった…。」
『ホッ…と』一安心して、胸を撫で下ろしていた。
【若い女性スタッフを、説得するのに大変だったぞ！】大貫さんが、ボソッと呟いた。
木嶋は、
「そうだよな！誰でも、引き受けたくないからね！」大貫さんの意見に賛同していた。
冷静に考えれば…木嶋から見たら、妹の感覚しかないのが現実である。
「ヤバイな！最近の流行りの曲を聞いていないから、レンタルショップで、ＣＤをレンタルしないといけないな！同時に、はるかに教えて戴かないと、女性心理が、分からない！」
木嶋の心の中では…
はるかに、頼り過ぎていると思うが、今、気さくに話しを出来る人がいないのが、致命的である。
何か…ねだられると…ウンザリしてしまう！
「たまには、麻美に電話を掛けようかな？」
木嶋は、作業服の左ポケットから携帯を取り出した。

着信履歴から、麻美の番号をスクロールをした。
掛けようとしたとき…一瞬、躊躇していた。
「いや…待てよ！麻美に聞いても、自分と年齢が同じだし…意見が変わることはない。玲でも同じことが言える。どうすればいいのだろう？」木嶋は、両腕を組みながら、ロッカールームに向かい歩いていた。
『ピーン』と、閃いた！
「そうだ。大貫さんの職場に、去年…社内結婚した若い社員がいるから、その人に聞いてみよう！」
歩みを止め、若い社員のいる職場に向かったが…
帰宅したあとで、もぬけの殻…であった。
「良く考えると…自分が、生徒会の役員を引き受けたときも…今回の文体リーダーも、人材不足と言うか…誰も、決め手になる人がいない！これが、運命なのかな？」
「そう考えると、田港さんに悪いことをしたかも…今、文体リーダーをやっている…大熊さんに聞いてみようかな？」木嶋は、大熊さんを尋ねることにした。
大熊さんは、自分の女性文体メンバーと仲良く話しをしている光景を、食堂で見ていた。
果たして…それが良いのかは…分からない。
少なくとも、
《みんなと仲良く…一年間の任務を全うすればいいのである。》
過去に、色んな人のタイプを見ているから、それが通じればいい。
木嶋は、大熊さんのいる職場に向かった。
夢遊病者のように、工場内を、《フラフラ》していた。
大熊さんを見つけた。
「大熊さん、来期…自分が、文体リーダーを引き受けることになりました。」木嶋は、大熊さんに話したのだ。
大熊さんは、
「木嶋、大丈夫か？」木嶋に問いかけた。

木嶋は、

「職場の代議員とは、意味合いが違うので…《プレッシャー》が掛かっているよ！」大熊さんに話したのだ。

大熊さんは、

「木嶋の言っていることは、理解が出来るよ！一度も、文体をやったことがなかったかな？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「文体は、一度も、やったことがないんだ！だから不安！」大熊さんに答えたのであった。

第３０７話

大熊さんは、
「木嶋、心配するな！自分たちが、ノートに履歴を残してあるから…それを参考にして…企画、立案を進めていけばいいよ！」
木嶋の右肩を…
【ポン】と、叩(たた)きながら話したのだ。
木嶋は、
「大熊さん、ありがとうございます。それを参考にさせて頂きます。」大熊さんに答えたのだ。
大熊さんは、
「何か、行き詰まりを感じたら、迷わず相談して…協力するから…」木嶋に伝え、
木嶋は、
「そのときは、よろしく！」大熊さんに頭を下げ、その場を離れて行く。
木嶋は、歩きながら呟いた。
「ノートに、履歴があると言っても、本当に、参考になるのかな？」不安ばかりが募(つの)ってしまう。
その不安が、引き継いで…ノートを開いた瞬間に、愕然(がくぜん)とするなんて思わなかった。
文体メンバーの選考(せんこう)が終わり、あとは、来月の顔合わせを待つだけである。
木嶋は、大貫さんの職場に出向いていた。
「大貫さん、あと1名って…誰ですか？」大貫さんに問いかけていた。
大貫さんは、
「自分の職場で、最終工程にいる…上田原だ。まだ、仕事をしているから、どんな人間か…挨拶(あいさつ)をして来たらどうだ！」木嶋に伝え

た。
木嶋は、
「ありがとうございます。自分も、若い社員の人たちは知らないので、話しかけてみます！大貫さん、良いですか？」大貫さんに尋ねていた。
大貫さんは、
「いいよ！」木嶋に答えた。
木嶋は、ラインの流れに沿い、上田原さんがいる…最終工程に歩いていた。
「木嶋さん…どうしたのですか？」藤川さんが、キャリーを押し…木嶋に声を掛けた。
藤川さんは、部品を、外へ取りに出かけて戻ってきた。
木嶋は、
「あっ…藤川さん、上田原さんは、まだ…仕事をしているの？」
藤川さんに問いかけていた。
藤川さんは、
「うん。まだ、仕事をしていますよ。自分も、まだ…仕事が終わってませんよ！」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「藤川さんが、キャリーに部品を乗せているのだからそうだよね！」藤川さんに答えたのだ。
藤川さんと、木嶋は、5年前に、東京、立川にある津田塾の学園祭に出かけたことがあった。
一度くらいは、学園祭に行ってみたいと言う…藤川さんの希望を、木嶋が叶えたのである。
津田塾は、女子大学なので、華やかな雰囲気が出ていた。
大学の学園祭と、夜間高校の文化祭とは、規模が違う。
夜間高校の文化祭は、食べる物が主体である。
食べる物も、各学年で同じ物を出品しているため、一局集中をしてしまう。

大学の学園祭は、各学部などで趣向を凝らしたものが、たくさん出店しているので、選択肢（せんたくし）がありすぎて、どこから見ればいいか…選ぶのも迷ってしまう。

若かかりしの出来事である。

大貫さんの職場には、藤川さんや、上田原さんなど若い年齢層が多い。

木嶋は、それが羨ましかった…

「溝越さん、自分たちの職場にも、若い社員を配属して戴けるように、相談をしてみてはどうでしょうか?」溝越さんに、木嶋は意見をした。

溝越さんは、

「木嶋、若い社員を入れたい気持ちは分かるが、今の生産量では無理がある。増加すれば…事務所も考えると思うが、今は難しい…理解をしてほしい。」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「分かりました。」と、溝越さんに伝えていた。

我に返り…上田原さんの作業しているエリアに着いた。

「木嶋さん、こちらが上田原です。」

木嶋は、

「今どきの若手だね!」これが、上田原さんとの初対面であった。

第３０８話

今どきの若手とは…
黒髪を金髪に染め…作業ズボンを腰の近くまで下げて仕事をしていた。
木嶋には、その光景が決して良いこと物ではない。
日本人は、黒髪が普通である。
髪を染めるのは、抵抗を感じている。
今は、染料の技術革新により…
良い商品が開発され、市場に出回っている。
木嶋が、１０代の頃に付き合っていた彼女は、身長が若干高く、手先も器用で、《イヤリング》や《ピアス》をしていた。
はるかも、手先が器用かも知れないが、料理をしている姿を想像出来ないのであった。
藤川さんが、木嶋を、上田原さんのいる作業エリアに案内した。
「上田原さん、初めまして…木嶋と言います。」木嶋は、上田原さんに挨拶をした。
上田原さんは、
「木嶋さん…ですか？初めまして…」作業していた手を止め、木嶋に会釈で返した。
木嶋は、
「上田原さん、大貫さんから話しを聞いているかな？」上田原さんに尋ねていた。
上田原さんは、
「大貫さんから話しを伺いました。」木嶋に答えたのだ。
大貫さんと、上田原さんは、上司と部下の関係である。
企業風土にも依るが…
上司の指示…
【トップダウン】

相手の意見を聞く…

【ボトムアップ】

木嶋たちの会社は、どちらかと言うと…

【ボトムアップ】だと思っている。

【トップダウン】は、社長が、【カリスマ】でないと厳しいと感じていた。

「引き受けて戴けるんだよね？」木嶋は、上田原さんに問いかけた。

上田原さんは、

「はい。やらせて下さいと…大貫さんに伝えました。自分も、文体行事の企画、立案をした経験がないので、チャレンジしたいと思います。分からないことは、木嶋さんに、教えて戴かないと…！」

木嶋に話していた。

木嶋は、

「自分も、文体行事の企画、立案をした経験がないから…最初は、手探りの《スタート》になってしまうが…いいかな？」上田原さんに告げた。

上田原さんは、

「最初から、完璧に…出来る人はいません！手探りでも仕方ないですよ！」木嶋に伝えた。

その一言で、胸の奥に、張り詰めていた緊張感が解れ…安堵の表情を浮かべた。

木嶋は、

「来月になったら…顔合わせをやるので、そのときは…よろしく！」上田原さんに話したのだ。

上田原さんは、

「分かりました。木嶋さん、また、連絡を下さい。」木嶋に伝え、作業エリアに戻って行った。

木嶋は、先入観で、人を判断はしていけないと、このときに、気づいたのだ。

今度の文体メンバーは、初対面の人が多い。
知っている人と言えば…田港さんしかいないのだ。
田港さんばかりに…頼ってしまうと、他のメンバーが《シラケてしまう。
みんなに、気を遣わないといけないのである。
木嶋は、
「藤川さん、ありがとうございました。」藤川さんに、頭を下げ…その場を離れて行く。
最終工程から、大貫さんの元に向かった。
大貫さんは、まだ、パソコンの前で、入力業務をしていた。
「大貫さん、今、上田原さんに挨拶をして来ました。」木嶋は、大貫さんに伝えた。
大貫さんは、
「木嶋は、第一印象どう…感じた?」木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「今の時代の若者って…ボヤきたくなるね!雰囲気としては良かったよ!」大貫さんに答えたのであった。

第３０９話

大貫さんは、
「今の若者だから仕方ないよ！木嶋も、頭の中の考え方を、今の時代に《リニューアル》しないと…」木嶋に話したのだ。
大貫さんの話しに、木嶋は、首を縦に振り、頷いたのだ。
「これからは、こんな時代が来るんだな！」そう思わずにいられなかった。
「それでは、大貫さん、先に帰ります。」木嶋は、大貫さんに声を掛け、職場を離れて行く。
ロッカールームに向かう足取りが重い。
背中に…
『ズシリ…』と、目に見えない…何かを背負ったみたいである。
このままでは、自分が、《プレッシャー》に押し潰されてしまいそうである。
その《プレッシャー》から《解放》されるには…どうすれば良いのだろう？
なかなか…良い《アイデア》が浮かばない。
「今年の夏は暑いし…やはり…飲みに行くべきかな？」木嶋は、独り言のように呟いた。
「飲みに行くにしても…一人では行きづらいな！富高さんを誘うべきかな？そうだ…麻美さんに相談しよう！」
急いでロッカールームに向かい、着替えを終えて…会社の送迎バスに乗車した。
携帯を取り出し、麻美の《メモリーダイヤル》をスクロールした。
「電話にしようか…？メールにしようか…？思案のしどころだ。
どうしよう？」少し…悩んでいた。
会社のバスが、最寄り駅に着いた。
バスを降り、駅の階段を一段ずつ降りながら…

「メールするよりも、電話で話しをしてみよう！」
木嶋は、麻美に電話をした。
「プッ、プッ、プッ、プルー」呼び出し音が鳴り響いている。
コールの回数が…１０回鳴っていた。
木嶋が諦めようとしたとき…
「もしもし…麻美です。」麻美が電話に出た。
「木嶋です。お久しぶりです。」木嶋が、麻美に挨拶をした。
麻美が、
「木嶋君、連絡をくれたのは、随分久しぶりですね…！」木嶋に話したのだ。
麻美が言う通りである…。
木嶋は、近況報告は…メールで、事あるごとに…麻美に伝えていた。
電話で、話しをするのは、４カ月ぐらい経過していたのだ。
木嶋は、照れ臭そうに…
「そうですね！なかなか連絡をしなくて…申し訳ないです。」電話口で、麻美に頭を下げていた。
麻美は、
「何か…あったの？はるかさんと…ケンカでもしたのかな？」木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「残念ながら…はるかさんとは、《つかず離れず》みたいな感じで交際していますよ。」麻美に答えたのだ。
麻美は、
「仲が良いのは…いいと思います。」木嶋に伝えたのだ。
木嶋は、
「まっ…雑談は、ここまでにして…今日は、麻美さんに報告があります。」麻美に話したのだ。
麻美は、
「どんな話しなの？」木嶋に問いかけていた。

木嶋は、駅のコンコースに立ち…自動販売機で、コーヒーを購入した。

今はまだ、冷たい飲み物が売れている。

売れているからと言って…商品改札を怠(おこた)ると…そこの企業は、成長をなくして…淘汰(とうた)されて行く。

木嶋は、

「9月から、組合の文体リーダーになることが決まりました。」

麻美に伝えた。

麻美は、

「それは、おめでとうございます！」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「今の若い人たちの考え方が分からないので、麻美さんのいるクラブ『U』に、はるかさんぐらいの若い女性がいたら紹介して下さい！」麻美にお願いをした。

麻美は、

「木嶋君の頼みなら仕方ない。若い女性はいますので、これから…クラブ『U』に来てくれれば紹介しますよ！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、麻美の配慮(はいりょ)に感謝しつつ…

「これから…向かいます。」電話を切ったのであった。

第３１０話

「やっぱり…麻美さんのお世話にならなければいけないのか…【ハー】自分が情けない！若い女性って…どんなタイプの人だろう！」木嶋の心は、【ウキウキ気分】であった。

最寄り駅のコンコースに立ち…

「麻美のいる関内まで…どちらのルートにしようか？」一人で悩んでいた。

「木嶋君、どうしたの？」富高さんが、木嶋に声を掛けた。

木嶋は、

「あっ…富高さん！送迎バスに乗っていたのですか？」富高さんに尋ねた。

富高さんは、

「うん！最後尾の座席に座っていたから、木嶋が気づいている様子もなかったよ！」木嶋に答えたのだ。

木嶋は、

「そうだね。自分も、慌てて…送迎バスに乗ったからね！」富高さんに伝えた。

富高さんは、

「何か…あったの？」木嶋に問いかけた。

木嶋は、

「これから、麻美さんのクラブ『U』に、飲みに行こうと思うのですが、どちらのルートで行こうか…？考えていたのです！」富高さんに話したのだ。

富高さんは、

「木嶋君、一人で行くの？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「今のところは、一人で行く予定です。富高さん、明日は仕事ですか？もし、仕事でないなら…一緒に行きませんか？」富高さんを

誘っていた。
無理矢理に誘うのも、流石に気が引けてしまう。
行くも…行かないのも…本人の選択次第である。
「どうしようかな…？」富高さんが、即答が出来ないのも珍しい。
「夏は、暑くて当たり前だが…最近、飲む機会が多いからね！」
木嶋に話していた。
木嶋は、
「無理にとは…言えません！麻美さんと、春先に会ったきりだし、飲める場所も関内限定になってしまったからね！」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「はるかさんが、横浜のクラブ『H』を辞めてから、関内しか飲む場所がないのも事実だね！木嶋君、自分も行くよ！麻美さんに、サプライズしようよ…？」木嶋に提案した。
木嶋も、どちらかと言えば、《悪ノリ》が好きである。
「それもいいね！偶然を装いながら…」木嶋は、富高さんに問いかけた。
富高さんも、
「そうだね。そうしようよ！」答えてたのだ。
木嶋が、
「関内駅に着いたら、ラーメンか…牛丼を食べて行きませんか？」
富高さんに聞いていた。
富高さんは、
「うん。いいよ！いきなり…麻美さんのクラブ『U』に行って…すきっ腹で飲むのは、身体に良くないよ！」木嶋の意見に賛同した。
木嶋は、
「関内駅に着いたら、そのときの雰囲気で、どちらにするか？決めましょう！」富高さんに話したのだ。
富高さんも、
「そうしましょう！」木嶋に伝えた。

木嶋は、
「関内に行くルートは、相鉄線でいいですか?」
「相鉄線なら、一回の乗り換えで、横浜が終点。乗り過ごす可能性は低いよね!」富高さんが答えた。
木嶋は頷き、富高さんと一緒に相鉄線の改札口に向かって行く。
きっぷ売り場に着き、料金表を見上げた。
「横浜駅まで…３４０円!」富高さんが、鞄(かばん)から財布を取り出そうとしていた。
すかさず…木嶋が、財布を取り出し、
「富高さん、自分が関内駅までのキップを買います!」富高さんに伝えた。
富高さんは、
「木嶋君、気を遣わなくていいよ!」木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「自分が誘ったので、それくらいのことしか出来ません!」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「木嶋君の言葉に甘えようかな!」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「ありがとうございます!」富高さんに感謝の言葉を述べたのであった。

第３１１話

もうすぐ横浜駅に着く。

「木嶋君、麻美さんの術中に嵌まっているような感じがしないかな？」富高さんが、木嶋に、《ポツリ》と呟いた。

木嶋は、

「何となく…そんな気がしますけど…」富高さんに苦笑いをして答えた。

麻美は、木嶋と友達だと…盛んに、強調しているが…

一度も、麻美と【プライベート】で出掛けたことがない。

それは、はるかにも、同じことが言えるのである。

「今日は、早く帰ろう！」

毎回…飲みに行くたびに、木嶋と富高さんは、そう話しているが、飲んだ瞬間に、気持ちが大きくなり、最終電車間際になることが多い。

富高さんも、雰囲気に呑まれ過ぎることもある。

楽しくなると…

【どこかのカプセルホテルやビジネスホテルに泊まる】のが日常であった。

木嶋は、飲みに行っても、外泊をしたことがない。

関内から地元の最寄り駅までは、３０分も掛からない。

外泊をするのは、家族で旅行に行ったり、田舎に出掛けない限りないのである。

１９９０年代は、陸上仲間と毎年、冬にスキーに出掛けたり、飲みに行くのが、当たり前の生活であったが…

２１世紀になり、はるか、麻美と交際するようになってからは、出無精になってしまったかも知れない。

自分では、そんな感覚が、少なからずも感じていた。

横浜駅に着いた。
相鉄線の１Ｆ改札口を通り、階段を降りて、ＪＲの改札に向かって行く。
「木嶋君、ここから…あと、どれくらいで着くのだろう?」富高さんが、木嶋に問いかけていた。
木嶋は、
「おおよそ…３０分ぐらいだと思います。なぜ?そんなことを聞くのですか?」富高さんに尋ねていた。
富高さんは、
「麻美さんのクラブ『Ｕ』に出掛けるときは、多少出来上がった状態で向かうので、普段、店まで行くまでの距離感が分からないんだ。」木嶋に答えていた。
木嶋は、
「そうだね!自分も、富高さんが話していることに同感です。」富高さんに伝えたのだ。
改札口を通り、京浜東北線のホームに向かう。
「いつ来ても、横浜駅は混雑しているよね!」富高さんが、ため息交じりに…木嶋に告げた。
木嶋は、
「日本の主要駅の乗降客…ベスト5に入る駅ですよ。」富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「もちろん…東京駅や新宿駅も入っているよね?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「当然…ですよ。それだけ…こちらに人口が集中している証拠です。」富高さんに話し、続けて…
「はるかさんが、関内は寂れた街と印象しかない…と言うんだよね!」伝えた。
富高さんは、

「木嶋君、はるかさんの言っていることは、正論かも知れないよ！」

「富高さんも…そう思うの？」木嶋が問いかけた。

「はるかさんは、いつも…横浜駅周辺で遊んでいるだよね？…何でも揃っている…！」富高さんが、木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「そうだね。横浜駅周辺で遊んでいるね。ここは…一大商業地であり、《ブランドメーカー》も…【横浜高島屋】、【横浜そごう】にたくさんある。一日いても飽きることない。はるかさんが、横浜駅から出て買い物に行く姿を想像したことないよ！」富高さんに伝えた。

富高さんは、

「木嶋君でも…そう感じるだね！自分も同じ意見だよ。」木嶋に話したのだ。

京浜東北線のホームに上がり、電車が来るのを待っていたのであった。

第３１２話

木嶋と富高さんは、京浜東北線の先頭車両に乗り、反対側のドア付近に立っていた。

関内は、横浜から2（ふた）駅であり、降りるホームは、反対である。

所要時間は、およそ5分である。

「木嶋君、ようやく…横浜駅を出たね！」富高さんが、木嶋に話していた。

木嶋は、

「そうだね！やっと…中間地点（ちゅうかんちてん）って感じだね！」富高さんに伝えた。

それもそのはずである。

会社から麻美のいるクラブ『U』までは、1時間を目安にしていた。

ここまで、読み通りの展開である。

まだ、先があるかと考えると…

「フー」と、ため息が出てしまう。

「木嶋君、クラブ『U』への道のりは…大丈夫だよね？」富高さんが、木嶋に問いかけていた。

木嶋は、

「微（かす）かに…記憶がある大丈夫…じゃないかな？」いつも…言葉に力強さが感じられるが、弱気（よわき）な発言が気になっていた。

富高さんが、珍しく…

「木嶋君、大丈夫？」と尋ねていた。

木嶋は、

「なんとかなるさ…」

「間もなく…関内、関内です。」車内アナウンスが聞こえてきた。

「いや～参ったね。慌てて電車に乗ったから、横浜スタジアムに

行く感覚だよ！関内では、先頭から最後尾まで歩かないと…」木嶋は、富高さんに苦笑いをして答えていた。

富高さんは、

「まっ…こういうこともあるでしょう！仕方ないよ！飲みに行くのに、多少運動をしないと、お腹も空かないよ！」木嶋に話していた。

電車が関内駅に着いた。

「プシュー」ドアが開いた。

ホームのアナウンスが…

「関内…関内です！」聞こえていた。

木嶋と富高さんは、ホームに立ち、最後尾に向かって歩き始めた。

「富高さん、歩かせて申し訳ない！」

自虐気味に、頭を下げ…歩きながら話していた。

階段を下り、木嶋は、自動精算機に定期券を入れた。

《２（ふた）区間だから…１３０円。》

Ｇパンのポケットから財布を取り出した。

富高さんのキップは、木嶋が、会社の最寄り駅のキップ売り場で購入したので、精算をする必要がない。

木嶋は、趣味で、馬券を購入するので、桜木町駅までは、一人で来ることがある。

会社の同僚に頼まれてくることも、一年間で数回であった。

富高さんは、プロ野球観戦も、木嶋と一緒に来るのだ。

精算を終え…

「富高さん、お待たせしました。」木嶋が、富高さんに声を掛けた。

富高さんは、

「改札を出よう！」

改札口を出た。

「富高さん、こちらですよ！」

木嶋が、エスコートした。

目の前に大きな交差点。
「富高さん、何を食べますか?」木嶋は、富高さんに問いかけていた。
富高さんは、
「木嶋君は、何がいいの?」木嶋に聞いていた。
居酒屋もいいが、入れば短時間で出てくることが出来ない。
木嶋は、周りを見渡し…時間的なことを考慮すると…
「ラーメンか…牛丼(ぎゅうどん)か…ファーストフードか…正直…悩むね!」
選択肢(せんたくし)は、3つだ。
「富高さん…どうします?」木嶋は、富高さんに尋ねた。
富高さんは、
「自分は、ファーストフード以外なら…どちらでもいいよ!」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「ラーメンにしますか?ビールを飲みながら食べましょう…。」
富高さんに答えたのだ。
富高さんは、
「そうしようよ!ラーメンとくれば、餃子(ぎょうざ)もオーダーしないと…」
木嶋に話したのだ。
木嶋は、
「炒飯(ちゃーはん)もオーダーすれば、中華(ちゅうか)の王道(おうどう)だ!」富高さんに伝え、ラーメン店の暖簾(のれん)を潜(くぐ)ったのであった。

第３１３話

「いらっしゃいませ…」威勢の良い掛け声が、店内に響き渡っている。

女性店員さんが、

「２名様でしょうか？」木嶋に尋ねた。

木嶋は、首を縦にして頷いた。

「お席にご案内を致します！」女性店員さんが、木嶋と富高さんをエスコートした。

案内されたのは、テーブル席である。

座席に座り、メニューを２人して眺めていた。

「富高さん、何にしますか？」木嶋は、富高さんに問いかけていた。

富高さんは、

「ラーメン種類、トッピングは多いね。悩んでいても、時間がロスしていくので、《味噌ラーメン》と《餃子》にしようかな…と思いますが、木嶋君は…？」木嶋に聞いていた。

木嶋は、

「自分は、《炒飯》と《餃子》をオーダーしようと思います！」

富高さんに伝えた。

富高さんは、

「あと…ビールを忘れているよ！」木嶋に話したのだ。

木嶋は、

「あっ…いけない。忘れるところでした。今日は、蒸し暑かったので、ビールを飲むのには、最高な日ですよ！」富高さんに答えたのだ。

すかさず…テーブルの上にあるボタンを、木嶋が押した。

「ピンポン」店内に響いていた。

女性店員さんが、木嶋たちのテーブルに来た。

「お待たせしました。ご注文をどうぞ…」木嶋に伝えた。
木嶋は、
「味噌ラーメン、炒飯、餃子を2つ。それと、瓶ビールを1本、お願いします。」女性店員さんに答えた。
女性店員さんは、電子キーでオーダー入力しながら
「他に、ご注文は…よろしいでしょうか?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「以上でいいです。」女性店員さんに伝えた。
女性店員さんは、
「畏まりました。ご注文の確認をさせて頂きます。味噌ラーメン、炒飯、餃子を2つ。瓶ビールを1本でよろしいでしょうか?」木嶋たちに問いかけた。
木嶋は、
「はい!」と答えた。
女性店員さんは、
「少々、お待ち下さい…」と、電子キーを閉じ、木嶋のいるテーブルから離れて行った。
「木嶋君。一人で…ラーメン屋に入ることはあるの?」富高さんが、木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「飲みに出かけて、地元に帰って来たときに、お腹の空き具合に依って…入ることもありますよ!そこのラーメン屋は、味噌味が売りなので、味噌バターとかをオーダーします。」富高さんに話したのだ。
携帯のバイブレーターが、
「ブー、ブー、ブー」と鳴っている。
先ほどまで…電車に乗っていたため、マナーモードを解除していなかった。
木嶋は、簡易留守電になるタイミングが、5秒に設定してある。
仕事時間中は、簡易留守電などにはしていない。

携帯が鳴っても、工場勤務をしているので、音に掻き消されて行く。
画面を見ると…麻美からであった。
木嶋が、なかなかクラブ『U』に来ないので、痺れを切らしたのだ。
木嶋が、右手の人差し指を口にサインを出した。
富高さんに、声を出さないように…
電話に出た。
「もしもし…木嶋ですが…。」
「麻美です。木嶋君、今…どちらにいますか?」麻美が、木嶋に尋ねていた。
木嶋は、
「今は、関内駅の近くにあります…ラーメン屋に一人で食べています。」麻美に答えていた。
麻美は、
「木嶋君、本当に一人なの?」木嶋に聞いていた。
木嶋は、
「店の中は、大勢の人たちが食事をしているので、賑やかですよ!」麻美に答えていた。
麻美は、
「富高さんもいればいいのにね!」
まるで、富高さんが、木嶋と一緒にいるのを見越した発言をしていた。
木嶋は、
「ドキッ」としながらも…
「そうだね!富高さんがいれば良かったね!」麻美に話したのであった。

第３１４話

木嶋は、

「今、腹ごしらえしてから…向かいますので、もうチョットだけ…お待ち下さい！」麻美に伝えた。

麻美は、

「麒麟（きりん）のように、首が長くなって待ち焦がれています！」木嶋に告げ、電話を切ったのだ。

富高さんは、

「木嶋君、役者（やくしゃ）だね！」木嶋に告げた。

木嶋は、

「役者じゃありませんよ！トボケたのです。最初から、答えを話したら…面白くない！そう…富高さん、思いませんか？」富高さんに尋ねたのであった。

富高さんも、首を縦に降っていた。

女性店員さんが、

「お待たせしました。瓶ビールです。」木嶋のテーブルに置いた。

木嶋は、栓抜きで…瓶ビールの栓（せん）を

「スポッ…と」抜いた。

「夏は、キンキンに冷えている…瓶ビールがいいよね！」富高さんが、木嶋に話しながら、グラスにビールを注（そそ）ぐ。

木嶋は、

「そうだね。富高さんは、普段から缶ビールを飲んでいるから…こういう場所では、瓶ビールを飲みたくなるよね！」富高さんに答えたのだ。

富高さんは、ビール党である。

木嶋も、最初の乾杯は、ビールである。

日本には、ビール会社は、４社あり…

【キリン】、【アサヒ】、【サントリー】、【サッポロ】である。

居酒屋で扱っている…ビール会社は、
【アサヒ】、【サッポロ】が多い。
富高さんが、帰り道に飲むビールは、
【アサヒ】である。
ここのラーメン店は、
【キリン】の一番搾りである。
最近のビール業界のシェア争いは、【キリン】と【アサヒ】で、
熾烈を極めている。
消費者の観点から見ると、好ましいと思う。
家では、ビールを飲まない木嶋も、雰囲気で飲みたくなってくる。
瓶ビールの本数が増えていくと、麻美のクラブ『U』に行くのが、
嫌になってしまう。
一度、気持ちが萎えてしまうと…
奮い立たせるのが大変である。
女性店員さんが、
「味噌ラーメン、餃子…お待たせしました。」木嶋のテーブルに
持ってきた。
木嶋は、目の前にいる富高さんへ右手を出した。
女性店員さんが、気づいて置いたのだ。
続いて…
「炒飯、餃子…お待たせしました。」木嶋の元に置き、
「ご注文は、以上でお揃いでしょうか?」富高さんに尋ね…
富高さんが、
「あっ…OKです!」女性店員さんに話し…
女性店員さんが、
「ごゆっくりどうぞ。」伝票をテーブルに置き、その場を離れて
いく。
木嶋は、
「地元に、同じラーメン店があるんだ!」富高さんに話したのだ。
富高さんは、

「このラーメン店は、チェーン店なんだね！」木嶋に尋ねた。
木嶋は、
「そうみたい。今は、チェーン店が優勢だよ。個人の店が生き残るのは、並大抵な苦労だよ。」富高さんに答えた。
「競争が、どこも激しいね！」富高さんが、ポツリと呟いた。
木嶋は、頷くしかなかった。
富高さんは、
味噌ラーメンを啜り…ビールを美味そうに飲んでいた。
木嶋は、
炒飯を食べながら、スープを飲み、餃子を食べたのだ。
「この時期のビールは、美味いね！」木嶋が話したのだ。
富高さんも、食べ終わり、木嶋も、同じくらいに食べ終わった。
木嶋が、
「富高さん、そろそろ…麻美さんの店に向かいますか？」富高さんに聞いたのだ。
富高さんは、
「そうだね！行こうか！」木嶋に話し、伝票を持ち席を立った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7344g/

さよならをもう一度

2011年12月13日10時51分発行